福島県文化財調査報告書第47集

東北自動車道遺跡調査報告

本　文　編

昭和50年3月

福島県教育委員会
日本道路公団

遺跡調査課

福島県文化財調査報告書第47集

東北自動車道遺跡調査報告

本　文　編

昭和５０年３月

福島県教育委員会
日本道路公団

序　　文

豊かな風土に恵まれた本県には、はるか数万年前からの人間の営みの痕跡が刻み込まれている埋蔵文化財包蔵地が、4000か所以上にわたって残されております。これらの文化遺産により、わたくしたちは各時代にわたる郷土のすぐれた文化が、現代の生活の中に脈々と受け継がれているのを知ることができます。県民の皆様とともに、県教育委員会では、このかけがえのない郷土の文化遺産を守り、これを後世に伝えるために努力してまいりました。

東北縦貫自動車道建設事業にともなう埋蔵文化財の発掘調査も、上述の趣旨に沿って行われたものであります。生活を豊かにする開発事業の陰に、失われようとする文化財については、慎重な配慮のもとに可能な限りこれを守るための調整が行われました。最終的には55か所の遺跡について、発掘調査を要することとなり、文化庁と日本道路公団との覚え書にもとづいて、日本道路公団からの委託事業として県教育委員会が主体となり、昭和44年度から5年間にわたって発掘調査を実施してきました。

この調査によって、本県の中通り地方における原始・古代の歴史をより鮮明にする資料の数々が加えられることになりました。この報告書は、調査した遺跡のうち31遺跡を選んで、その成果を報告するものであります。編集に意の満たない点もございますが、関係者が総力を傾けて、刊行をみたものでありますので、広く関心を持つ皆様に、ご利用いただければ幸いと存じます。

最後に、この調査については、当初開発計画時の分布調査から、報告書の刊行までの長い期間に、日本道路公団・地元市町村教育委員会並びに県内の研究者をはじめとして、多くの皆様方のご指導とご協力をいただきました。ここに深く感謝申しあげます。

昭和50年3月

福島県教育委員会

教育長　三本杉　國　雄

凡　　例

1、本書は、東北縦貫自動車道建設にかかる遺跡を事前に発掘調査した報告書である。
調査は、日本道路公団の委託事業として、福島県教育委員会があたった。

2、県教育委員会においては、文化課（昭和47年５月以前は社会教育課）を主管課とし、昭和44年度から調査員１班相当をおき、発掘調査にあたるとともに、県内の研究者を中心に調査体制を編成し、発掘を実施した。とくに昭和44～46年度においては、民間の研究者の協力を多くえた。

〔年度別調査概況〕

昭和41～43年度	分布調査	
〃　44年度	15遺跡発掘	『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査概報』を刊行
〃　45　〃	20　〃	『　〃　2』を刊行
〃　46　〃	17　〃（再調査２件）	『　〃　3』を刊行
〃　47　〃	7　〃（再調査３件）	
〃　48　〃	3　〃（〃　2件）	
〃　49　〃	本報告書刊行	

〔外部依頼の発掘担当者〕

梅宮　茂・加藤　孝・小滝利意・田中正能・永山倉造・西　徹雄・馬目順一・目黒吉明・渡辺一雄

〔教育委員会内発掘担当者〕

昭和44～46年度　　成田克俊・鈴木　啓

昭和47～48年度　　渡辺一雄・目黒吉明・横山英介・（兼務）鈴木　啓

3、本報告書刊行にあたっては、主要遺跡31件を選び31編として構成した。

各編の配列は、時代順を重視したが、各時代にわたり重複する遺跡については、主体的な資料の時期により配した。ただし、調査地点により時期を異にするものについては、分割して収録したものもある。

4、発掘資料の整理は、外部の各発掘担当者と県教育委員会で行うこととしたが、数遺跡を除く膨大な資料の整理を、文化課において昭和48年度から昭和49年度にかけて実施した。

これらの資料は、昭和50年5月に福島県文化センターに寄託し、活用を計る予定である。

5、本報告書の執筆は、各発掘担当者に依頼した。担当者において調査員等に執筆を分担して構成したものもあるが、原則として担当者の校訂を経て収録した。各章もしくは分担執筆の末尾に分担執筆者名を付したが、引用等にあたっては、発掘担当者名を重視願いたい。

ただし、第12・17・19・24～26編については、木本元治・藤田定興・村川友彦が主体となり、文化課職員で分担執筆した。

6、各編の執筆については、本書への収録遺跡数を多くするため、遺構と遺物出土状況の説明に重点をおいて依頼した。原則として研究的論考は極力制限し、発掘成果の概要と問題提起にとどめた。

なお、図版編の構成にあたっても遺構を重視し、遺構関係を多く収録することに努めた。

7、本報告書の編集は、文化課遺跡班全員で行ったが、目黒吉明・木村浩二・芦名守道が担当し、全編統一のため字句の訂正、図稿の修正、補足資料の作成などの作業にあたった。

8、発掘・整理ならびに報告書作成にあたり、前述の発掘担当者をはじめ、下記大学関係者、さらには県内の多くの研究者と、関係市町村教育委員会から多大の協力をえた。

〔協力大学〕

東北大学　　東北学院大学　　福島大学

9、文中、敬称を略させていただいた。

目　　次

序　　文

凡　　例

第1編　平　林　遺　跡 …… 1

第2編　壇ノ腰遺跡 …… 21

第3編　八景腰巻遺跡（第1・2・4次） …… 33

第4編　八景腰巻遺跡（第3次、南地区） …… 61

第5編　上原A遺跡 …… 79

第6編　上原B遺跡 …… 117

第7編　田地ヶ岡遺跡 …… 133

第8編　川　原　遺　跡 …… 169

第9編　大　窪　遺　跡 …… 191

第10編　一斗内古墳群 …… 211

第11編　観音山横穴群 …… 223

第12編　観音山北横穴群 …… 237

第13編　梅田横穴群 …… 247

第14編　七斗蒔遺跡 …… 261

第15編　天神堂・筋向・高野遺跡 …… 281

第16編　下　原　遺　跡 …… 293
第17編　三峰森・堰ノ上遺跡 …… 309
第18編　出　磐　山　遺　跡 …… 321
第19編　勝利ヶ岡遺跡 …… 331
第20編　中　柵　遺　跡 …… 347
第21編　林　合　遺　跡 …… 365
第22編　二タ通り遺跡 …… 375
第23編　仏　具　壇　遺　跡 …… 389
第24編　狐　石　遺　跡 …… 405
第25編　金重谷地遺跡 …… 415
第26編　高　林　遺　跡 …… 431
第27編　厚　樫　山　遺　跡 …… 443
第28編　古　矢　館　遺　跡 …… 453
第29編　上岡・堰下遺跡 …… 465
第30編　八景腰巻遺跡（第５次） …… 479
第31編　八景腰巻遺跡（第３次、北地区） …… 487

第1編　平　林　遺　跡

遺跡番号	2—35
所在地	伊達郡桑折町南半田字平林
時代・種類	旧石器時代、包含地
調査期間	（第1次）昭和47年9月25日～10月17日 （第2次）昭和48年4月16日～5月17日
担当者	（第1次）横山英介 （第2次）渡辺一雄
調査員	（第1次）長尾 修　赤井畑まき子　岡村道雄　千葉英一 佐久間豊　辻 秀人 （第2次）木本元治　千葉英一　長尾 修　赤井畑まき子 高倉敏明　佐藤満夫　志賀豊徳
指導	芹沢長介（東北大学教授）　鈴木敬治（福島大学教授）
協力機関	桑折町教育委員会

目　次

第1章　遺跡と環境……3
　第1節　位置と地形……3
　第2節　層　　序……3

第2章　調査経過……4
　第1節　第1次調査……4
　第2節　第2次調査……6

第3章　遺　　物……6
　第1節　石器群のあり方……6
　第2節　石器組成……8
　第3節　剥片法産技術……11
　　1　石核の分類……11
　　2　剥片の諸特徴……12
　第4節　結　　語……14
　第5節　下層出土品について……16

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

平林遺跡は、桑折町南半田字平林にあり、東北本線桑折駅より北北西800m に位置している。地形的には、福島盆地のほぼ北端に位置している。奥羽山脈の山麓が東へ突出して低い丘陵を形成しており、遺跡はその末端付近の北東斜面（傾斜約15°）にのっている。

遺跡の標高は約145m で、約4.5km東を流れる阿武隈川との比高は約95m 、遺跡と丘陵下、北側の水田面との比高が約25m 、東側水田面との比高が約30m である。

遺跡のある丘陵の上方は標高165m 前後の平坦面となり、東側は急斜面、北側は遺跡のある斜面となり、その一部は古矢館の丘陵へと続いている。これらの丘陵の裾は、前述の水田面で切られているが、この水田面は標高90m 付近より120m 付近まで西側に行くにしたがい高度を増しながら一帯に広く分布する扇状地面で、藤田面と考えられる。遺跡上方の面は、高度や発達順序から見て田中面に相当すると考えられる。これに相当する面は、桑折町では平沢付近でも標高160m 付近の面として見られる。遺跡のある斜面は、田中面相当面のまわりに小規模に形成された梅津及び桜田面よりなると考えられる。

東北縦貫自動車道の用地買収当時は、遺跡は畑地と果樹園であった。また所々に土留めの石積みがあり、後述のG・H－6グリッドが未発掘なのはこのためである。林道をへだてて東へ約60m 離れた台地上には、前年度調査された古矢館遺跡があり、旧石器時代の所産と考えられる石器を出土している（第28編参照）。（図版1・2）

第2節　層　　序

発掘区域の層序関係を、D－1～D－6グリッドの東南壁断面（図版6の X_1—X_2）とA～D－3グリッドの西南壁断面（図版6の Y_1—Y_2）とで観察すると次のようになっている（図版3～6）。

〔Ⅰ層（表土）〕　全体的に黒色もしくは黒褐色を呈するが、ところにより灰褐色を呈する腐植土層である。

〔Ⅱ層〕　灰白色を呈する粘土質の土層で、比較的固くしまっている。遺跡全域に分布するが、北側にやや厚く堆積している。最も多量の遺物が出土している。

〔Ⅲ層〕　黄色粘土層で、粘土粒子は細かく粘性が強い。一部細かいクラック帯（亀裂帯）がみられる。

Ⅱ層同様全域に分布し、北側に厚く堆積している。遺物はⅢ層上面から約20cm下までの範囲から出土する。

〔Ⅳ層〕 灰褐色粘土層であり、クラック帯が顕著に発達しており、軽度の不整合面であると思われる。出土遺物はない。

Ⅰ層からⅢ層上半部まで遺物の出土がみられる。しかし、傾斜が比較的に急な点やりんごの根などによる攪乱を考えるならば、遺物の出土レベルから推して、Ⅱ層下半部からⅢ層上半部にかけてが本来の遺物包含層と考えられる。

Ⅳ層の直下には不整合面があり、Ⅳ区南壁での観察からすると約2mの厚さの砂・粘土を混じえた分級の進んでいない巨礫層がある。鈴木敬治の教示によれば、この層は崖錐性の堆積物で、その供給源は丘陵上部にあり、飯坂付近に見られる桜田層に対比されるものと考えられる。この桜田層はヴュルム氷期初頭の堆積物と考えられている。したがって関東の武蔵野ローム中位に対比される。この層の下部が、第1次調査時に第2文化層として指摘された層に当っている。

その下にも不整合面があり、不整合面下には青色の粘土の堆積が見られる。Ⅳ区北壁及び遺跡東側の露頭での観察によれば、さらに粘土の下に分級の進んだ小礫層・砂層・粘土層と続き、このサイクルが2度くり返したのち基盤の第三紀の凝灰岩に至る。鈴木敬治の教示によれば、これは段丘性の堆積物であり、梅津段丘堆積物に対比されるもので、リス氷期の堆積物と考えられる。

桑折付近では田中段丘面（ミンデル氷期）に対比される面の周辺に、このような桜田面・梅津面に対比される小規模な地形面が断片的に存在することが知られている。（吉田・伊藤・鈴木　1968）

遺物の包含層はこれらをおおっていることから見て、藤田層の一部に対比されるものと考えられる。

（千葉英一　木本元治）

参 考 文 献

吉田義・伊藤七郎・鈴木敬治　「福島～郡山間の第四系」『第4紀　№13』1968

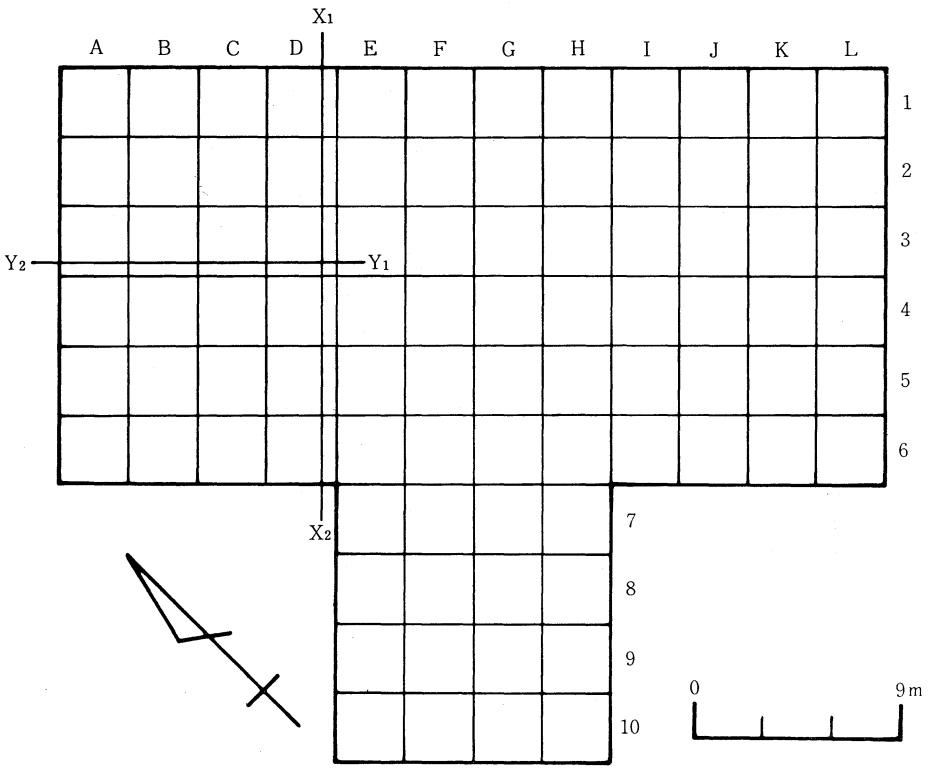
第2章　調　査　経　過

第1節　第1次調査

昭和46年に実施された古矢館遺跡の発掘調査の際に、隣接する平林地区においても、石核・剝片・チョッパーなど旧石器時代の所産ではないかと考えられる遺物10数点が採集された。このことから福

島県教育委員会と日本道路公団との協議により、平林地区は昭和47年度の東北縦貫自動車道に関する埋蔵文化財発掘調査計画のなかにあげられた。

第1次調査では、まず前年石器が採集された地点を中心に、3×3mのグリッドを北西一南東方向に12グリッド（A～L）、北東一南西方向に10グリッド（1～10）を配し、A～Hの各グリッドに調査の主眼をおいた（第1図）。



第1図　グリッド配置図

（X_1-X_2、Y_1-Y_2は断面図作成地点）

Ⅰ層（表土）からも遺物の出土がみられ、なかには縄文時代の石器と考えられるものもあった。Ⅱ層下半部からかなりの量の遺物が出土し、A--6、F—4～5、G—7～8グリッドに遺物の集中がみられた。とりわけA—6グリッドはかなりの出土数をみたが、発掘区域（道路敷）の端でもあり、またA—7～10グリッドには土留めの石積みがあったり、雑木が繁茂しており拡張を断念せざるをえなかった。いっぽうG—3・4、H—3・4の4グリッドを、地層観察のため、またより下位に他の文

化層がないかどうかを確認するため、地表下約3mまで掘り下げた。こうした段階で調査期日も終りに近づき、1～Lの未発掘グリッド、南側への拡張区（第1図のI～L－7～10に相当する区域）深掘した部分などの成果を第2次調査に期待することにして、第1次調査を終了した。　（千葉英一）

第2節　第2次調査

第2次調査は、第1次調査でⅡ～Ⅳ層を掘り残した部分、及び第1次調査で指摘された第2文化層の確認を目的として行われた。第2次調査では、調査区の深掘りが予想されるので以下のごとくグリッドと大地区割りを併用することとした。1～4のA～D－Ⅰ区、E～H－Ⅱ区、I～L－Ⅲ区、5～8のA～D－Ⅳ区、E～H－Ⅴ区、I～L－Ⅵ区とする。

発掘はI～L－3～8すなわちⅢ区及びⅣ区と昨年の深掘りの部分G・H－3・4を行った。Ⅱ・Ⅲ層ではJ－3、J－5グリッドより比較的遺物が集中して出土したが、その他のグリッドでは見るべき成果は無かった。

G・H－3・4グリッドで第1次調査で指摘された第2文化層が、巨礫層下部に当ることを確認。工事現場の鹿島建設の好意により、ブルドーザー・バックホーンを借用し、Ⅲ区のJ～L－1～3、Ⅵ区のJ～L－5～8の礫層の上部の剝離を行い、そのうえで礫層下部の発掘を行った。Ⅵ区では、L－5グリッドを下層の段丘面下まで掘り下げ、層位の観察を行った。5月17日、Ⅲ区・Ⅵ区、G・H－3・4グリッドの礫層下部の発掘が完了し、平林遺跡の発掘の第1次、第2次にわたる全日程を終了した。

なおこの調査期間中、発掘現場において遺物については芹沢長介(東北大学教授)、地質については鈴木敬治（福島大学教授）の指導と助言をいただいた。　（木本元治）

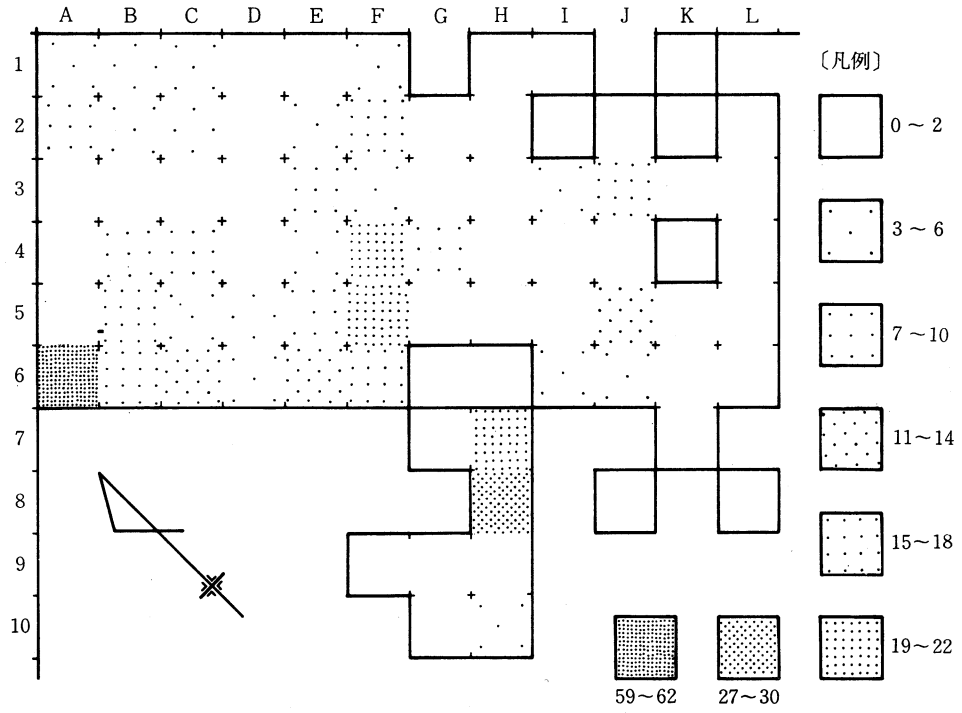
第3章　遺　　物

第1節　石器群のあり方

平林遺跡出土の石器群は、すくなくとも2時期に区別されるものが含まれている。一方は、①ほとんど風化しておらず、旧石器と考えられる石器群とはあきらかにパティナの様相が異なる。②縄文時

代の石器と考えられる石鏃破片、加工精緻な両面加工尖頭器などが含まれる（図版7、14—1～3）。これら新鮮な剝離面をもつ石器群の石材は、鉄石英・ジャスパー・流紋岩など種々の石材が認められる。とくに鉄石英は旧石器の石材としては全国的にまれで、縄文時代後半に多用されるものである。③不定形の小剝片が多く、石核が少ない。一定の剝離技法が認められず、あきらかに流紋岩製の旧石器群とは異なった技術が適用されている。

以上よりこの一群は縄文時代に属すると考えられる。約60m離れた古矢館遺跡から縄文土器片が出土しており、それとなんらかの関連があると思われる。通常異なった時期の遺物群を区別するには、絶対的方法として層位的区分と補助的に出土地点の相違による区分の手段が用いられる。しかし平林においては、新しい石器群と旧石器群とを峻別するだけの層位的上下関係は認められない。Ⅰ層とⅢ層出土石器の接合例があり、鉄石英製石器の約半数はⅡ層に包含されていた。したがってここでは旧石器と認められる淡黄色または灰白色に風化した流紋岩製石器を中心としてその概要を報告し、最後に第5節として、下層出土資料の検討結果を付記する。流紋岩製石器は、今のところ前期旧石器時代においては、大分県早水台遺跡が知られている。福島県下では縄文時代に多用されているが、そのパ



第2図　グリッド別遺物出土頻度

ティナ（膠着物）には明瞭な差異が認められる。

石器群の出土状況が明らかでないので、ここでは各グリッドごとの石器の出土頻度より遺物分布を示した(第２図)。しかしA－６区に顕著な集中性をみせるほかは、特筆すべき偏在はないようである。また利器・石核・剝片別の分布をそれぞれ検討してみたが同様であった。層位的にみても縄文時代遺物と思われるものと混在し、より低い方がⅠ層出土遺物が多い事実からみて、これら遺物群の多くは原位置をとどめていないのではなかろうか。

第２節　石　器　組　成

石器組成は第１表の通りである。この組成が当時の生活・文化を代表するものかを判断する材料はほとんどない。ただ利器（二次加工または使用痕の認められる石器）の総数が46点で他遺跡に比較し

第１表　出土遺物の組成

器種	実数	素材の内訳 剝片	石核	粗割礫	不明	素材別比率	遺物組成	石器組成
チョピング・トゥール	3			3			0.0070	0.0652
ピック	(1)		1				0.0023	0.0217
プティ・トランシェ	4			4			0.0093	0.0870
ピエス・エスキーユ	6	1			5		0.0140	0.1304
切出形ナイフ様石器	4	2(2?)					0.0093	0.0870
スクレイパー	3	2(1?)					0.0070	0.0652
ビュアリン	1	1					0.0023	0.0217
二次加工ある剝片	5	5					0.0117	0.1087
使用痕ある剝片	15	15				利器合計46	0.0350	0.3261
不定形石器	4	(1?)		3		0.1072	0.0093	0.0870
石核	48					0.1121	0.1121	
剝片	257					0.6005	0.6005	
チップ	10					0.0236	0.0236	
砕片	68					0.1589	0.1589	
合計	428	26(4?)	1	10	5	1.0023	1.0023	1.0000

※　石核とピックの１点は重複する

て、その割合はひくい。以下図示した石器を中心として形態別に説明してみよう。

チョッピング・トゥール（両刃礫器）

粗割(あらわり)礫の一縁辺を交互に剝離した石器である。したがって刃部上面観は波状を呈する（図版7、14—4）。石核Ⅳ類のチョッピング・トゥール類似の石核との区別が明確ではない。しかし打面が形成されていないこと、剝離面が小さいことよりここでは利器として取扱った。また不定形石器として図示した石器は剝片を素材とした石器であるが、交互剝離が施されておりこの形態に含めてよいかもしれない（図版9—20、16—20）。

ピック（鶴嘴状石器）

断面が三角形または四角形を呈する一端の尖った長手の両面加工石器をいう。№5の石器はⅡ類に含めた石核の一部に尖頭部を作り出したピックである（図版10、14）。ここでは石核を転用したものと考えたが、ほぼ両面に剝離が加えられており最初から周辺と基部の調整のために加えられた剝離であったかもしれない。

プティ・トランシェ（小形直刃斧）

日本国内ではこの形態の石器はほとんど注目されていない。ヨーロッパでいう典型的なトランシェは横方向の加撃によってまっすぐで横幅のひろい刃部を作り出し、基部調整の加えられた石器である。平林のものは小形であるが、技術的・形態的にこの範疇に含めてよいと考えられる。№6の石器は粗割礫を素材とし、両面または片面に調整剝離を施し、その後折断または剝離によって両側面を形成している。さらに最終的に上方より加撃し、大きく一面が剝離され刃部を形成する。刃部には若干の使用痕が認められる。№6（図版7、14）のものは典型的であるが、そのほかの3点は№7、8（図版7、14、15）のようなものである。栃木県向山、山形県明神山両遺跡でもこの形態の石器が出土している。両遺跡出土のものには細かく基部調整の施される例が知られる。また明神山遺跡出土のものは、刃部に二次加工が施されている（加藤・安彦　1973，第10図50）

ピエス・エスキーユ（楔形石器）

ほぼ四角形を呈する両面加工の石器である。素材の両面に上下両端より剝離が加わり、上下両端縁辺にはつぶれた小剝離痕が連続することが多い（図版8—9・10、15—9・10・11）。楔形石器などとも呼ばれる。岩手県大船渡市碁石遺跡（村上他　1973）、京都府二上山周辺の遺跡群に多量に知られているが、遺跡の性格によるものなのか、特定の時期に盛行する石器なのかは不明である。今後の資料の増加を待って検討されなければならない。なお福島県では、海岸地帯の縄文時代遺跡にしばしば同様な石器が検出されるとのことである。

切出形ナイフ様石器

台形剝片を素材とし相対する2辺に急角度の連続する二次加工が施されている石器である。これら

の二次加工は刃部作り出しを意図したものか、調整のためかは判断しにくい。調整剥離とするならばNo.13・15（図版8、15）の上部縁辺の一次剥離面はやや急角度すぎるが刃部になると思われる。ここでは石器組成、剥片剥離技術よりみて横山の意見のように切出形ナイフとするのが妥当であろう（横山　1973)。しかし、上記の問題のほか後期旧石器時代の典型的な切出形ナイフとの関連がつかめない、類例が少ないなどの不確定要素を含むので、切出形ナイフ様石器と仮称しておく。なおNo.14（図版8、15）は、台形剥片の底辺を折断したもので、上部縁辺に若干の二次加工と使用痕とが認められる。向山遺跡で注目された広義の切出形ナイフと考えられる。上記2例と形態的・機能的に類似していると思われる。越中山K地点出土石器と酷似している。

スクレィパー（削り具）

典型的なスクレィパーは出土していない。二次加工ある剥片との区別は必ずしも明確ではないが、二次加工の施し方、連続性によって一応分類した。No.16（図版8、15）は台形剥片を素材とした抉入りのスクレィパーである。No.17（図版8、16）は、剥片と考えられる素材の縁辺に、比較的連続に剥離の施されたものである。No.18（図版8、16）の石器は、二次加工ある剥片とするのがよいかもしれない。

ビュアリン（彫刻刀）

縦長の剥片の打面方向より1回の打撃が加えられ、彫刻刀面が形成されたものと思われる。しかし彫刻刀面の末端の稜線は不明瞭であり、打撃方向が上からであると断定はできない。ビュアリンとするには粗雑な印象をうけるが、図示して判断をお願いする。（図版9、15—19）

二次加工・使用痕のある剥片

二次加工ある剥片は、No.21（図版9、16）がその例であるが、これは石器の未成品と考えた方がよいかもしれない。平林の石器群は風化した流紋岩を素材とし、縁辺の微細な剥離は判別困難な場合が多い。したがって使用痕ある剥片の実数は認定できたものをかなりうわまわるのであろう。また使用痕が剥片の主要剥離面側に残された例が約3分の1ある。（図版9、21—22）

不定形石器

No.20（図版9、16）は、剥片を素材にしていると思われる石器で、一縁辺に交互剥離が施されている。この加工は典型的な交互剥離とはいえず、側辺調整と考えられる。a面右側を刃部としたプティ・トランシェとも考えうる。

第3節　剝片生産技術

1　石核の分類

石核全体としては種々の変異があり、かならずしも適切な類型化はできない。剝片生産技術が多様化している結果であろうか。しかし素材に対する主要剝離の方向性、剝片の生産性（剝離の連続性、原材使用の有効性）によって次の5種に大別される。さらにⅡ・Ⅳ・Ⅴ類は細分するのが適切かもしれない。石核類型別の剝離角を第2表に示しておく。

Ⅰ類　礫もしくは粗割礫の一部に打撃を加え、自然面を除去して平坦な打面を作り出す（上面観は多辺形を呈する）。打面の周辺にそって打面から垂直に連続的に台形もしくは縦長剝片を剝離していく石核である。台形剝片を剝離するものと縦長剝片を剝離するものを細分し、縦長剝片が生産されるものをもってより石刃石核に近いと考えられる。前者は打面を中心として剝離がほぼ全周にわたっている。この形態はNo.24・25・26などの5点である（図版9、10、16、17）。また後者は剝離が一縁辺にかぎられ、剝離面も2～3面である場合が多い（図版9、16—23）。

第2表　石核の類型別の剝離角

剝離角＼類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	合計
119°～110°	1				1	2
109°～100°	2		1	1		4
99°～90°	7	4		2	5	18
89°～80°	6	6	1	3	4	20
79°～70°	5	5	1	4	4	19
69°～60°	1	2		5	1	9
59°～50°	1		2	2	3	8
49°～40°					2	2
39°～30°					1	1
合　計	23	17	5	17	21	83

Ⅱ類　平面観が楕円形を呈する。周辺から放射状の剝離がなされ、その後一縁辺から数回の連続的な剝離が施される。周辺からの剝離はこの場合調整と考えるより、むしろ主要剝離を意図した可能性が強い。したがって剝片の生産性と剝離された剝片の形状より円盤形石核（discoidal core）に近似すると思われる（図版10、17、18—5・27・28・29）。Ⅰ・Ⅲ類と共に平林遺跡を代表する石核である。この類型は合計7点である。

Ⅲ類　放射状に周辺調整が数回施されたのち主要剝離が1回なされる。平面観は、楕円形または円形に近い（図版11、17、18—30～33）。ボルドのルヴァロワ技法の定義「定型剝片をとるため石核に一定の調整をくわえる技法」に符合するものである。日本でのルヴァロワ技法の定義はかならずしも統一されていない。Ⅱ類石核などもルヴァロワ石核に含められることもあるようである。ここではボル

ドの定義に従って狭義にとらえた。この類型は合計6点である。ただし、№32（図版11、17）のものはⅡ類に含めた方がよいかもしれない。

Ⅳ類　形態的にチョッパー、チョッピング・トゥールに類似する石核である。礫または粗割礫の一縁辺に添って連続的に数回剝離している。打面調整の施されたものが、形態的にチョッピング・トゥール類似となる。細部の二次加工がないこと、剝離面が大きいこと、打面が形成されていることよりチョッパー、チョッピング・トゥールと区別される。№41（図版12、19）はチョッピング・トゥール類似のものである。№34・35（図版11、19）はチョッパー類似の石核として取扱ったが、とくに前者は小さいので利器と考えた方がよいかもしれない。

Ⅴ類　主要剝離面が石核のほぼ全面をおおい、貝殻状の剝離痕をもつ。すなわち1個の石核から1点の剝片が剝離されるものである（図版12、19—40・42・43）。一般的には打面調整はなされないが、調整が施されたものもある。調整の有無によって細分することもできる。

〔その他〕　ほかに原石を数個に粗割りしたものがある。これらの剝離痕をみるとすべて平坦な剝離面をもちバルブ・リングは、はなはだ不明瞭である。したがって石核・剝片の区別は困難である。ほかの石器とは異なった剝離技術が適用されたのであろう。これが石核や石器の素材となるらしい。しかし平林の場合風化がはなはだしく、その実数を把握しにくいので、一応石器組成から除外する。

2　剝片の諸特徴

剝片は合計257点出土している。長さ・幅ともに2*cm*以下の剝片と打面を残さない破損剝片は、前者をチップ、後者を砕片として剝片とは区別した。さらに剝片を表面の剝離面構成によって、①すべて縦方向よりの剝離による剝片（図版12、20—46など）、②放射状に調整された剝片（図版13、21—60など）③これら2者の複合剝片（図版13、21—58など）、④横方向よりの剝離による剝片（図版13、21—55）、⑤調整方向不明または不規則な剝片、⑥表面自然面のもの、に分類した。これらは石核の調整・剝離方法に対応させて分類したものである。すなわち①は石核Ⅰ類と、②は石核Ⅲ類と、③は石核Ⅱ類とおもに対応すると考えられる。これら類型別の剝片の形状・剝離角を第3表に示した。

全体の剝片の大きさは第3図に示してある。長さ幅とも約4*cm*前後に集中する。長幅指数は100前後が最も多く、150を越える縦長剝片が30点であり、計測可能な剝片255点の約11.8%である。ただし長幅指数150を越える縦長剝片の多くは、不規則な調整面、バルブの形態をもつもので目的的剝片とは考えられない。なお剝片・石核の諸特徴の観察・計測方法は、星野遺跡第3次報告書の第4文化層の整理に用いられた方法によっている（林　1969）。打面の形状は観察可能剝片211点中、非調整打面が176例で、そのうち自然面のものが28例、節理面のもの5例である。すなわち平坦打面のものが176

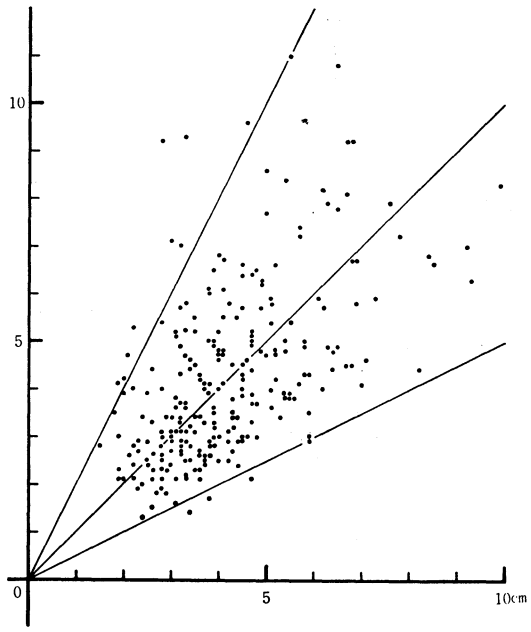
点（全体の83.4%）で圧倒的に多い。調整打面のものは35例で、2面で構成されているもの14例、3面が11例、4面以上が10例である。

剝片にはヒンジフラクチャーを起したものがかなり認められ(図版13、20、21—50・58)、石核上の剝離面中にステップ・フレィキングになっているものがあることと対応する。また縦走するみみずばれ状のバルブをもった剝片（6点)、ツイン・バルブをもつ剝片（2点）が存在する。前者はバイ・ポーラー・テクニック（両極打法）によるものかもしれない。早水台遺跡でもこれらの特徴が注意されているが、両遺跡とも流紋岩が主体であり石材に関係する現象かもしれない。このほかの大部分の剝片は大きく散漫なバルブをもち、リングは大きく波うつ。したがってこれらは敲石によって剝離されたものと考えられる。しかし敲石は出土していない、搬出されたのであろう。

第3表　類型別剝片の剝離角と形態

形態と剝離角＼表面の形状	平行	縦と横方向	放射状	横方向	不明	自然面	合計
51°～60°			1	2			3
61°～70°						1	1
71°～80°	3	1		3	1		8
81°～90°	4	4	4	1	3	4	20
91°～100°	6	4	4	1	5	7	27
101°～110°	18	20	4	7	6	8	63
111°～120°	11	11	7	7	2	3	41
121°～130°	9	3	4	4	2	3	25
131°～140°		2			3	1	6
141°～150°		2					2
合　計	51	47	24	25	22	27	196
長方形	14	8	5	5	5	9	46
台　形	23	24	7	9	11	11	85
楕円形	14	12	6	1	2	5	40
円　形	2	6	1	0	0	1	10
逆三角形	5	8	3	3	5	3	27
不整形	2	3	1	5	4	2	17
合　計	60	61	23	23	27	31	225

※　総計が等しくないのは，剝離角は計測できるが，1部破損して形状不明のもの，逆に形態は判別できるが打面を残していないものがあるためである。



第3図　剝片の長・幅化

第4節　結　　語

平林遺跡の地層断面には明確な鍵層は存在せず、地質学者による詳細な研究もなされていない。したがって石器産出層位の細かい地質学的位置づけは難しく、他遺跡との地質学的対比・編年は概略を知る程度である。一方、純粋な考古学的方法によって平林遺跡の概要を述べるならば次のようになる。平林遺跡の旧石器群は、そのほとんどが石核・剥片によって組成されている。したがって遺跡の残された年代とその性格を知るには同時代遺跡群の研究が緒についたばかりであり、かなりの困難をともなう。しかし剥片生産技術の全ぼうは、ほぼ明白にすることができた。当該期の一般的傾向として剥片の大量生産が開始され、全石器に占める石核と剥片の量が急増する。すなわち早水台遺跡によって代表される前期旧石器時代においては、石核1個に対して剥片1枚が生産されるにとどまっていた(芹沢　1965)。ところが中部ローム上半になると石核1個より剥離される剥片は5枚前後となる。さらに北関東における黒色帯並行期（芹沢の時期区分による後期旧石器第Ⅰ段階）においては、10枚近くにまで増加する。さらにそれ以後も増加する傾向があとづけられ、石刃技法・細石刃技法の定着化によりその最盛期となる。すなわち打面から縦方向に連続的に剥離する技術が徐々に定着化する過程を追跡することができる。また縦方向の連続生産の結果、稜線の平行した縦長剥片が量産されるようになるらしい。

貧弱な資料が断片的にあるだけで詳細は今後の調査に委ねられているが、このような剥片の生産性の3段階を、石核の形態、調整方法から述べてみよう。早水台遺跡で多用されたいわゆるプロト・ルヴァロワ技法が日本最古の剥片生産技術として知られる。つぎに中部ローム期の中葉を中心として円盤形石核が盛行すると思われる。群馬県桐原・山形県上屋地・愛知県加生沢遺跡などで断片的な資料が認められる。さらに中部ローム期の末葉には石刃石核に近い縦方向の連続剥離石核（プロト・ブレイド技法と仮称する）による剥片生産が開始され、剥片生産技術の飛躍的進歩が始まる。石子原・向山遺跡鹿沼直上層などの遺物群がこれを代表する。

このような視点より平林遺跡の剥片生産技術を検討すると、石核1個に対する剥片の生産量は約6.0である。石核と剥片の調整方法は縦方向のものが約4分の1を占める。また長幅指数150以上の縦長剥片は、剥片全体の約11.8%（30点）を占める。また石核を類型別にみるならば、ルヴァロワ型石核（Ⅲ類）やⅤ類石核のような生産性の低い石核、円盤型石核の亜型と考えられるⅡ類石核を残しながらも、Ⅰ類（プロト・ブレイド・コア）のような生産性の高い石核が注目される。現在のところこのような剥片剥離技術の類例は長野県石子原遺跡にみられる（芹沢・岡村　1973)。ただし石子原にはルヴァロワ型石核は存在せず、かわりに粗割礫の周縁に不規則な剥離を2～3回施したものがある。

また平林Ⅰ類の縦長剝片を生産する石核は、より石刃石核に近い様相を呈している。石子原で獲得したプロト・ブレイド技法がより一層進歩した段階のものとみなせよう。また石核の分類のさいにも述べたように、石核全体がかなり多様化している印象をうける。これは前述した剝片の生産性の増大と考えあわせて、石子原で展開された剝片生産技術が発展したものと理解したい。ただし石核の多様性は後期旧石器第1段階には認められず、プロト・ブレイド技法がその主体をなす。

つぎに石器組成の面から考察してみよう。平林遺跡を代表する小形トランシェは、栃木県向山、山形県明神山遺跡にその類例がある。向山遺跡では鹿沼パミス直上層（中部ローム上位）から出土し、黒色帯（中部と上部ロームの境界）からは膨大な石器が出土したにもかかわらず類似石器は確認されていない。したがってすくなくともこの種の石器は、中部ローム層の上位より古い時期に使用されたものであろう。また切出形ナイフ様石器としたものは、向山遺跡各層出土の広義の切出形ナイフに近似する。今のところこの種の石器は、黒色帯期前後に盛行したとしてよさそうである。このほか石器組成の特徴としては、チョッパーがなく、チョッピング・トゥールも少ないことがあげられる。すなわち礫核石器の利器中に占める割合（23.9％）が、早水台遺跡（約50％弱が礫核石器）に代表される初期の前期旧石器群とは大きく様相を異にする。ただし芹沢分類による後期旧石器第1段階のそれとは異なり、まだ礫核石器の伝統を継承していると思われる。さらに注目すべきは前期旧石器時代の主要な石器である尖頭石器が出土していないことである。現在のところ日本最古の早水台遺跡では尖頭石器が石器組成の約20％（合計24点）を占め、そのうち斜軸尖頭器が4点認められる。つぎに中部ローム期を代表する群馬県不二山、同権現山、同桐原、栃木県星野、山形県上屋地、同明神山の各遺跡では、権現山型尖頭器がルヴァロワ型石核・円盤形石核などの調整石核から剝離された剝片を素材にしてさかんに作られている。

中国大陸においては丁村・周口店第15地点などにこの権現山型尖頭器が認められ、すくなくとも東アジアの中期旧石器時代に盛行し、広範に分布した可能性がある。この権現山型尖頭器も長野県石子原遺跡においては大きく変質し、もはやこの範疇に入らない斜軸尖頭器として理解される。さらに、後期旧石器第1段階の時期になるとその痕跡すらみいだせない。したがって尖頭器をもたない平林はすくなくとも石子原よりは新しいと思われる。プティ・トランシェ、切出形ナイフ様石器の存在、礫核石器のあり方、石器組成上より後期旧石器第1段階の盛期よりやや古いといえる。

前述の剝片生産技術と石器組成より平林遺跡は、前期旧石器時代の最終末か後期旧石器第1段階の初頭に位置づけられよう。どちらに編入させるかは、時期区分という大問題を含み今後の十分な検討をまたなければならない。この遺跡の残された実年代は今から約25,000年前と考えられよう。編年的問題は以上のべたとおりであるが、具体的な平林での生活はまったく復元することができなかった。ただし剝片・石核の量が当該期の他遺跡と比較してすら多く、多分に石器製作址的性格が強かったと

いえる。ただし台石・敲石などの石器製作用具は未発見である。また遺物の量とその広がりよりみてかなりの長期間にわたって居住していたものであろう。

〔あとがき〕短期間にまとめたため十分な分析と考察ができなかった。鉄石英・ジャスパーなどの新しいと推定した石器群に関しては、ほとんど言及することができなかった。なお接合資料が数点存在する。たとえばNo.27の石核a面右下にNo.45（図版12、20）の剥片が接合する。しかし時間の都合上十分な接合作業が行えなかった。なお、報告をまとめるにあたり、東北大学芹沢長介教授をはじめ東北大学文学部考古学研究室の方々から御援助をうけた。記して感謝の意を表したい。　（岡村道雄）

（1973年10月脱稿）

参 考 文 献

永山倉造・木本元治　「伊達郡桑折町古矢館遺跡」『福島県考古学年報　1』1972

加藤　稔・安彦正信　「山形県明神山遺跡」『石器時代　10』1973

村上道治郎・及川洵・遠藤勝博　『碁石遺跡』大船渡市立博物館　1973

横山英介　「平林遺跡（第1次）」『福島県考古学年報　2』1973

林　謙作　「第3地点第4文化層の出土遺物」『星野遺跡第3次発掘調査報告』1969

芹沢長介　「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究所研究報告』1965

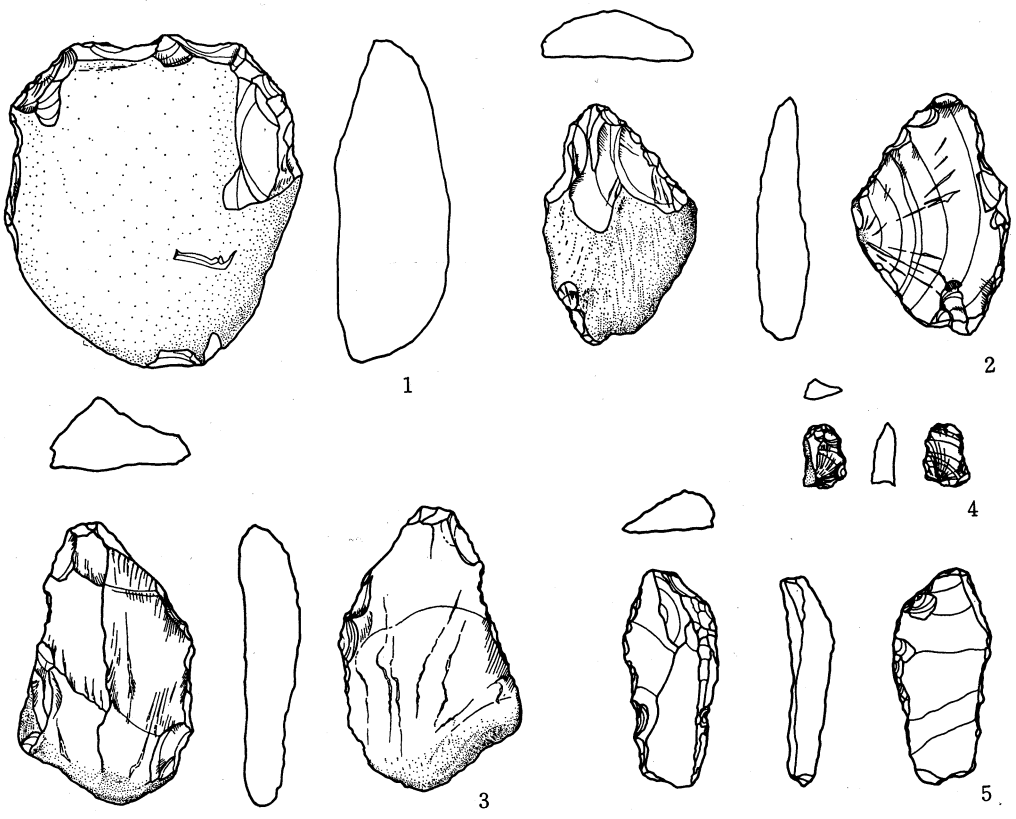
芹沢長介・岡村道雄ほか　「石子原遺跡の旧石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（飯田市地内その3）』1973

第5節　下層出土品について

第1次調査時に、第8～10層（桜田層下部に相当）より流紋岩製石器の出土が指摘され、第2文化層として報告されていた。遺物としては、剥片尖頭器・スクレーパー・石核・剥片等があり、前期旧石器としての位置づけがなされていた（横山　1972）。ところが、遺物整理の段階で第1次、第2次調査の下層出土遺物を検討した結果次のようなことが判明した。

①出土品の形態はチョッパー・尖頭器・スクレーパー状をなしているが、詳細に観察すると縁辺剥離が非連続的で、意図性が見られない。②剥片・石核のほとんどがバルブが散漫かあるいは無い。③剥片生産技法に一定の規格が見られない。④前期旧石器である早水台（芹沢　1965）・石子原（岡村1972）・星野（芹沢　1969）・権現山・明神山（加藤　1973）・上屋地（加藤　1969）遺跡等に見られる調整石核・調整剥片を用いた石器が見られない。またこれらのどれとも組成上の類似性が見られない等である。

ともあれ第2文化層遺物といわれていたものは、現在まで国内で発掘された確実な前期旧石器のどれとも異なっており、むしろ石器群としての性格があやふやでさえある。そこで、これらを人工品かどうか認定するため、縁辺剥離角の測定を行い比較する方法をとることにした（Barnes 1939）。



第4図　第 9 ・ 10 層 出 土 品　　（1…チョッパー様　2・3…尖頭器様　4・5…スクレーパー様）

サンプルは第1次調査時の第8～10層出土品中、縁辺剝離の明確な各種石器類似形態を示すもの22点、第2次調査出土品も同様なもの58点、計80点を用いた。測定方法はバーンズの用いた方法に基づき、約1*cm*以上ある剝離面の角度を1点につき3か所の測定を行った。その結果は第4表のとおりであった。

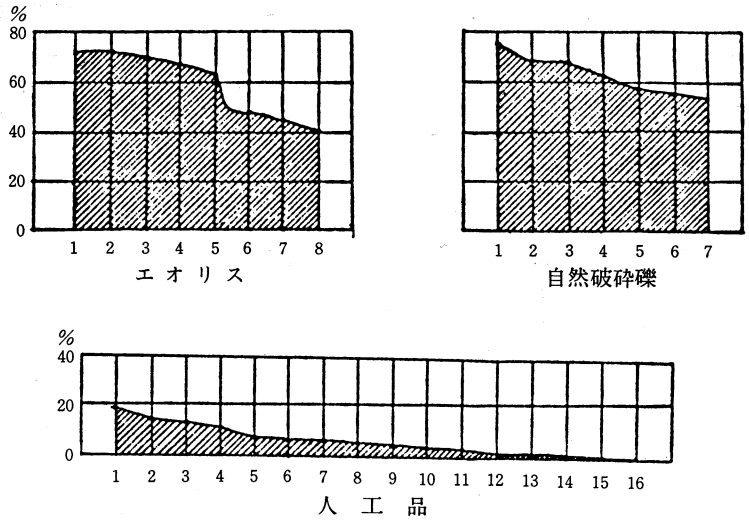
第1次・第2次の両方の調査の出土品の測定結果を見た場合（第1次調査の資料は数が少なく、比較するには問題があるかも知れない）、後に述べるごとく、両資料とも類似した傾向を示し、どちらか一方がかたよった資料を選び出しているとは考えられない。剝離角の全体平均は83.5°であり、バーンズが人工品の平均値として示した69.8°を14.7°上まわっている。なお第1次の平均では17.5°、第2次の平均では12°上回っている。

鈍角剝離の占める割合は全体で41.25％であり、人工品よりエオリスや自然破砕礫と類似した傾向を示す（第4表）。第1次の資料では56.1％、第2次の資料では36.2％となりやや異なるが、明確な

第4表　下層出土資料の剝離角度測定数値

	第　1　次	第　2　次	計
資　料　数	22個	58個	80個
測　定　箇　所	66か所	174か所	240　所
測定角度(計)	5824°	14230°50′	20054°50′
平　均　角　度	88.3°	81.8°	83.5°
鈍　角　数	36か所	63か所	99か所
鈍　角　率	56.1%	36.2%	41.25%
	（最小角61°　最大角120°30′）		

第5表　鈍角剝離の占める割合　(バーンズ 1939) による



石器と比較した場合、両方ともやはり同じ傾向を示している。国内では今のところ対比できる資料は少ないが、日本最古と考えられている早水台の資料では21.08%であり、人工品としての特色を示している（芹沢　1973）。なお上層の石器群では測定剝離面数69か所で鈍角数11か所、鈍角率15.9%、平均角は74.4°だった。

以上のような結果からして、これら平林第2文化層の遺物と考えられていた一連のものは、人工品というよりはむしろ自然破砕礫と考えられる。

そしてその成因は、これらが包含されていた崖錐性堆積物(桜田層)の形成時にあると考えてよかろう

最後に平林第2文化層出土品は、今まで一部の地質学者が指摘していた崖錐や泥流中に見られる「石器様破砕礫」(新井・小林　1971) と同じものと考えられるが、前にも述べたごとく、いま日本で問題となっている早水台等の前期旧石器とは本質的に異なった性格を有するものであることを記しておく。

（木本元治）

引　用　文　献

横山英介　「平林遺跡」『福島県考古学年報　2』1972
芹沢長介　「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究所報告第1集』日本文化研究報告1965
岡村道雄・芹沢長介・神村透ほか　「石子原の旧石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地調査報告書一飯田市地内その3—』1972
加藤　稔・安彦政信　「山形県明神山遺跡一第1次発掘調査の概要」『石器時代　第10号』1972
加藤　稔　「旧石器時代」『山形県史　資料編11』1969
芹沢長介（編）　『栃木市星野遺跡一第3次発掘調査報告書一』1969
A. S. Barnes　「The differences between natural and human flaking on prehistoric flint implement」『American anthropologist N, S, 41』1939
芹沢長介　「石器と自然石」『社会科学の方法　第6巻3号』1972
小林国雄・新井房夫　「芹沢論文に対する論評」「北関東ローム と石器包含層一とくに前期旧石器文化層の諸問題—」『第四紀研究　第10巻第4号』1971

参　考　文　献

芹沢長介（編）　「最古の狩人たち」『古代史発掘1』1974
K. P. Oakley　「Tools makyth man」『Antiquity XXXI』1957

第2編　壇ノ腰遺跡

遺跡番号	22—180
所在地	郡山市大槻町字壇ノ腰、字堂山西・字松井東
時代・種類	縄文時代（中期）、集落址
調査期間	昭和45年11月1日～10日
調査担当	永山倉造
調査指導	岡田茂弘（多賀城跡調査研究所長）
調査員	岩田敏之　武田奥一　吉田幸一　有我幸一
調査協力	郡山市教育委員会
協力者	阿武隈考古学研究会　郡山地方史研究会　立正大学考古学専攻生有志（寺島文隆　工藤竹久　向田裕始　真田広行　松本良博　永松　実　中嶋　勲　大越道正　加々良政教　田淵　厚　和田憲隆　松永　清　本間幸一　荒木正人　菊地喜平　吉田庄吉　高槻博元　山下佳子　原田良子　川嶋敏子　木林光代　藤原ゆり子　野村博子　土居美恵　小林恵子）郡山市立多田野中学校教諭　窪小谷二良

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

壇ノ腰・松井東・堂山西遺跡は、郡山市西郊、旧大槻村地内の大槻原と呼ばれる台地上に所在する。郡山盆地は、西は山田原白石層（海抜438m）、北は岩根山流紋岩（海抜348m）、東は阿武隈山地に囲まれた盆地で、高度は海抜220m内外、幾つかの河川で切断されて、対面原・日和田原・広谷原・庚坦原・大槻原などの開析台地を形成している。地層は郡山層と名づけられる湖沼性層で、黄緑色の一部砂礫層を含む細砂層（第四紀層）である。この大槻原は笹原川の小支流が開析し、黒色土が堆積被覆している。

〔壇ノ腰遺跡〕　調査地域は、遺跡中を流れる胡桃沢の小川の南北両岸の河岸段丘上にある水田及び畑（最近まで桑畑として利用）である。（図版1・2）

〔松井東遺跡〕　大槻町堂山西方にある水田地帯の小丘で、畑として利用されている。予備調査の際に土師片が発見されていることから、大槻古墳群中の円墳の残存ではなかろうかという可能性をもとに調査することになったものである。

〔堂山西遺跡〕　松井東遺跡とは市道で分断されているが地続きで、堂山古墳群の西方水田及び畑の中に所在するものである。

第2節　周辺の遺跡

本遺跡の周辺に所在する縄文遺跡は、西は奥羽山麓の熱海・河内・多田野一帯、東は阿武隈山麓の守山・赤沼・舞木・根木屋にかけ、郡山周辺では阿武隈川・逢瀬川・笹原川等の流域などに多く分布している。最近の発掘調査により確認された縄文早期の古亀田遺跡は、大槻扇状地の中央の丘陵上にあり、南関東の鵜ヶ島台・茅山下層両式類似の土器を出土している。縄文中期では安積町淵ノ上遺跡があり、大木8b・加曽利BIII式期の遺物を出土している。縄文晩期では熱海町熱海遺跡があり大洞B—C・大洞C_1・安行IIIa・安行I等の資料を出土し著名である。また本遺跡の所在する大槻地区では、縄文中期の隠居面（鎌倉池）遺跡が確認されている。　（永山倉造　吉田幸一）

第2章　調　査　経　過

今回の調査を松井東・壇ノ腰・堂山西遺跡の順に行うことを決め、調査を開始する。まず遺構確認のために松井東遺跡に第1・第2トレンチを設定し、排土作業に着手した。出土する遺物もなく、また遺構の検出も見ないため、第3・第4トレンチを設定して排土作業を進めたが、やはり同様に遺構・遺物の検出を見ないために松井東遺跡の作業をすべて終了して、壇ノ腰遺跡の発掘調査に着手した。壇ノ腰において、東北縦貫自動車道がかかる地域が、胡桃沢の小川の両岸にある水田及び畑であることを確認した後、北岸の畑にある縦貫道中心杭に直角に東西24m、南北2mの第2トレンチを設け、これに平行して2m間隔の第3トレンチ（2×12m）を設定して2mグリッドごとに排土作業に着手した（図版3）。その結果、第2トレンチの4・6グリッドの表土下25cmの第2層において、遺物が集中して検出され、また同層位において55×60cmのほぼ円形を呈する焼土が検出されたが、この地域が昔、桑畑であったために、遺物包含層と思われる第2層が各所において攪乱されており、それらに伴う遺構の確認は困難であった。焼土を残しさらに掘り下げて精査したところローム上層において、住居に伴ったと見られる柱穴及び周溝の残存を検出することができた。また南岸の水田をB地区として同様に2m間隔で4本トレンチを設定して、調査を進めたが、水田にする際にすでに破壊されており、蛇のモチーフを持つ土器口縁部片、チャート質の石核、その他摩滅した土器片が検出されたが、遺構の検出は見られなかった（図版11～14）。これらの調査と併行して、堂山西遺跡の調査にも着手し、第1トレンチ（2×30m）を設定して排土作業を進めた結果、脚部に孔のある古式土師と思われる小片や刷毛目の仕上げの施された土器片などが数点検出された。このため第1トレンチに直交して第2トレンチを調査した。トレンチ中央部に溝状と思われる落ち込みが見られたが、切り込み面が第1層中であることなどから縦貫道路敷地内には明確な遺構の検出が見られないと判断して堂山西遺跡の調査を打ち切った。

（永山倉造　吉田幸一）

第3章　遺　　構

今回の調査により発見された住居址の数は1軒だけであったが、遺構の位置するレベルが比較的浅いために、胡桃沢の小川北岸の桑畑・畑、南岸の水田等を開田する際に破壊されてしまったと思われ、遺物の層位関係については正確に観察することが不可能であった。おそらく他にも住居が何軒か存在し集落を形成していたと思われる。遺跡北西方向300mにある日本女子工業高等学校（尚志学園）敷

地の造成の際には縄文土器片・石器等が幾片か発見されたとのことであり、現在でも石鏃等が発見されることがあるとのことから、かなり広い範囲にわたる遺跡であった可能性が強い。

第1節　住　　居　　址

直径4mの円形プランを呈する住居址であったと思われる。周溝は幅30～50cmで床部近くが残存しているものと思われる。立ち上がりは垂直方向で、硬質でしっかりしている。柱穴は、周溝内外にそって、直接住居に伴うと思われるものが12か所に検出された。径は36～40cm程度で深いものが7か所、浅いものが3か所である。柱穴もやはり上部が破壊されてしまったと思われる。炉は住居の周溝北側から1.8m、東側から2.3mで、ほぼ中央に位置し、東西55cm、南北60cmを計り、ほぼ楕円形を呈している。炉は石組や土器等を埋設したような様子は見られなかった。断面からすれば、おそらく床面より若干くぼんだ状態であったと思われる。

本住居址は第2層の黒色土、あるいは第3層の黄褐色土に掘り込まれていたと思われるが、桑畑の桑の植付けや、畑の耕作のために、同下部、柱穴と思われるピットの下部、炉の下部と思われる遺構の残存を除いて上部の床面等がすべて破壊されてしまっているために、住居の正確な観察は不可能であった（図版4～6）。

（吉田幸一）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

先に述べたごとく、本遺跡においてはほとんど住居址内まで攪乱されているため、遺物の層序関係を把握することは不可能であったが、位置及び型式によって二つの群に大別することができる。各群は文様によってさらに細分される。しかし、群中には非常に細片なものや、摩滅の激しいものもあり、また出土量も少ないが、一応の分類を行ってみる。

第1群土器（図版21・23・24）

A地区出土土器の大部分をしめる。攪乱のために層位は明確ではないが、第2層から第3層にかけて含まれていたものと推定できる。

＜第1類＞（図版19、24—16・17・19～22）

三角形の切り込み文や沈線による平行直線文・円文・三角形の意匠文を特徴とする土器類である。口縁部が外反し胴部が円筒形になる土器、口縁部が外反し胴部が若干の球形を呈する鉢形土器等が見られる。口縁部はほぼ4個と思われる突起をもった波状口縁や、平縁が見られ、口縁に刻みがあるのが特徴である。また口縁部の内面に一段あるものも見られる。底部は若干外に張り出す例がある。

縄文はだいたい右傾の斜縄文であるが、左傾斜のものも若干含まれる。斜縄文が施文されている部分は、全面に施したものと口縁部から胴部上半部までのものとがある。縄文をつけずに沈線文のみで加飾したものがある。本類の最も特徴的な文様として半截竹管の弧を土器に上下及び左右に刺突して鋸歯状文を描いている（図版23—25・26・29～32)。この1類土器群はいわゆる関東の五領ヶ台式土器にあたるものである。なおこのグループに入れた土器の中で、四つの突起を持ち深鉢形と思われる口縁部片で、口縁部直下に沈線の中を爪形状に細かく刺突したようにみえる有節線文がある（図版19の上段)。これらの例は、1類の中でも新しい類に入り阿玉台式土器への過渡的なものと思われる。

＜第2類＞（図版21—3、24—1・2・3・5）

この類に属する土器片は少量であった。無文がほとんどで、口縁部を折り返す手法が特徴的である。図版24—2のように約2cmほど外に折り返して口縁部をつけて、その直下に等間隔に小孔をあけている例や、図版21—3のように突帯を有し、いわゆる有孔鍔付土器の形を呈するものがある。小孔は外側からの片側穿孔である。これらは胴部の張った深鉢形土器で胎土に金雲母片を含み丁寧に篦で整形してある。図版24—5の場合はやはり折り返し口縁であるが、口縁から胴部にかけて左傾斜の縄文が施されている。図版24—1のように外反する無文の深鉢様の例もある。胴部は輪積による成形のあとが若干見える程度に整形され、口縁部内面に段を有する。この手法は阿玉台式土器の手法にも若干見ることができるようである。この例も同類の中に含まれる可能性はあるが、全体としてこれらは関東の下小野式土器に類似する点が多い。

＜第3類＞（図版24—6～12）

無文のものが多いが、第2類とは異なり、深鉢形土器・浅鉢等が多く見られる。図版24—7・9は口縁部付近で平行沈線、あるいは隆帯の中に連続して沈線の三角文を施していて鋸歯文を表している。また図版24—6・8・10～12のように口縁部が垂直に近い立ち上がりを持つ無文の深鉢形土器や、縄文を地文とした深鉢形の土器も見られる。

第2群土器（図版25）

＜第1類＞（図版25—1～7）

無文の胴部に縦位にほどこした沈線を有する深鉢形や、篦状工具で縦位・横位に沈線を施すもの、

隆帯を縦位・横位に施し、その両脇に円形刺突文を施した壺形土器、隆帯をはり付けた貼り付け三角文を有する土器等をこの類に一括した。少量の出土しか見られないために全体の器形は明確ではないが、四つの突起を持つと思われるものや、底部が若干張り出す深鉢形土器（図版25—6）が主である。図版25—1のごときは胎土中に多くの金雲母片を含んでおり、それ自体が装飾的な効果を上げているように思われる。無文のものと左傾斜の縄文を施したものとに分けられる。

＜第2類＞（図版25—11～14）

第1類と異なり隆帯を施した上に爪形様の細かい刺突文を施したものと口縁部に粘土をひも状にして連続三角形の形を呈する土器とに分ける。前者は黄白色で他の土器が薄手なものに比べて厚手となっている。胴部に縄文を施した様子は見られない。また連続三角形の波状の口縁には蛇状のモチーフが見られるものもある（図版25—11）。

＜第3類＞（図版25—15）

口縁に四つの突起を持つと思われる深鉢形の土器である。口縁部は外反し胴部が球形を呈している土器で、胴部に縦位に綾繰文を施している。また突起外面には横位に3.5cmの突帯を有している。縄文は右傾斜の細かい斜縄文である。

第3群土器（図版26）

平縁の鉢形土器で、しまりが悪かったと思われる縄文原体によって粗い縄文が施されている（図版26—1・3・8・10）。他の2点も同じ平縁の鉢形土器と思われ粗い縄文が施されている。

（吉田幸一）

第2節　石　　器

1　石　　鏃

2点検出されており、2点ともに硅岩を材料としており無柄である（図版15）。

2　ナイフ型石器（図版20—9）

流紋岩のやや縦長の剝片を用いており、長さ4.4cm、幅2.8cm、厚さ7mmである。主要剝離面は裏面にあり、上端には小さな打撃面とポジティブ・バルブがある。表面左縁片にはインバースリタッチによるブランティングが施されている。

3　サイドスクレーパー

〔I〕（図版20—10）　流紋岩の表面の一部に自然面を残した縦長剝片を用いており、長さ11.5cm、幅4.5cm、厚さ1.9cmである。主要剝離面は裏面にあり、上端に小さな平坦打面とポジティブ・バルブ、バルブスカーが見られる。表面右縁片、左縁片下部に刃部が形成されている。

〔Ⅱ〕（図版20—11）　流紋岩の縦長剝片を用いており長さ6.6㎝、幅3.5㎝、厚さ8.5㎜である。表、裏面とも打撃点は上方にあり、上端部の平坦打面を共有しており、表面にはネガティブ・バルブ裏面にはポジティブ・バルブが見られる。表面右縁片に刃部の形成が見られる。

〔Ⅲ〕（図版20—12）　流紋岩の台形のヒンジ・スポールを用いており、最大幅4.3㎝、長さ5.35㎝、厚さ1.1㎝ある。主要剝離面は表面にあり、打点は上端中央部にあり、右横方向からの打撃により形成された平坦面を打面として打撃が加えられ、その際ヒンジ・フラクチャーをおこし、この剝片が形成されたと考えられる。左右両側面はそれ以前の打撃によりすでに形成されている。刃部は左縁片にあり内湾し、いわゆるコンケーブ・サイドスクレーパーである。

〔Ⅳ〕（図版20—13）　流紋岩の自然面を大きく残した第1次剝片を用いたスクレーパーで、基部は丸く、先端は尖っている。刃部は左側の剝離面の縁片に形成されている。主要剝離面は裏面にあり、打撃は表面より見て左側下端部より右上方に向かって加えられており、いわゆる斜軸のスクレーパーとなっている。　（木本元治）

第5章　考　　察

第1節　住　　居　　址

壇ノ腰遺跡において検出された住居址は結局1軒のみであった。また残念なことに桑畑等の深根の攪乱を各所に受けており、かろうじて周溝・ピット・炉等によってその住居の面影を残すのみであった。

縄文人が生活を営むための選地については、他の時代と同様に、人間の生活活動の基本的拠居地としての利便を中心にしたと思われる。したがって衣・食・住の必要条件が満されることを基本的条件としたであろう。特に縄文時代人の場合、水の便が良いこと、食料の獲得が容易であること、他に保安、衛生が保たれることを考えたであろう。

壇ノ腰遺跡住居址の立地は、郡山市西郊、旧大槻村の大槻原といわれている台地上で、胡桃沢小川の北岸河岸段丘にあり水利の便は良好である。住居自体はローム上面付近に床面を持つ住居であったと思われ、周溝の状態からほぼ円形のプランを呈していたはずである。柱穴と思われるピットは、36～40㎝の深いものが7個、浅いものが4個検出されているが、どのピットを柱穴と推定するかについては住居内生活空間の問題もあり、判断は困難である。時期については、床面出土の明確な資料がな

いために、結論付けることはできないが、下小野・五領ヶ台・勝坂・阿玉台式系の土器群の出土を見ていることから、ほぼ住居址もこの時期にあたると思われる。特に勝坂・阿玉台式系の土器群は、同式の中でも初期的なものであることからして、これらの土器群は接近した時期か、同時期に共存して使用されていた可能性も考えられる。したがって当地方で見られる大木 7a式から7b式にかけての時期と思われる。同時期の県内における資料は、いわき市下大越松林貝塚、福島市八景腰巻遺跡、梁川町南林正寺遺跡があり、宮城県においては遠田郡涌谷町の長根貝塚などにおいて良好な資料が発見されているが、いずれも住居址の検出は見られていない。東北南部における中期中葉の住居址は本例のみであり、当調査により初めてこの時期の竪穴住居址に円形プランが存在することを明らかにしえた。次に想像される家族構成であるが、関野克氏は千葉県姥山貝塚の調査から想像される家族構成を算出されている。それによれば火災住居址内から発見された死体を基準として、住居面積12.3㎡を死体数の5人で割った2.44㎡を1人あたりの必要住居面積としている。また柳田俊司氏によって調査された埼玉県上福岡遺跡においては、住居拡張面積を家族増員に起因する1人あたりの必要住居面積として、3㎡の数値を算出している。かかる算出方式を本遺跡発見の住居址にあてはめて見れば、住居址の径が約4mあり、面積は12.56㎡であるからして、4～5人の家族構成であったと考えられる。集落については検出された住居址が1軒のみであり、本県においても同式の時期の住居址の発見例が無いために、結論を導くことは不可能であるが、遺物の散布が胡桃沢小川の両岸にわたっている（A地区・B地区）こと、近くに所在する尚志学園（日本女子工業高等学校）の建設の際に、縄文土器片や石鏃が発見されたとの話もあり、広範囲にわたる集落であった可能性を持っている。しかし、異なった時期の集落と複合していた（筆者は尚志学園敷地内発見の土器資料を見ていない）可能性も考えられる。

第2節　炉　　址

本住居址発見の直接のきっかけとなったのは、炉址の焼土であった。炉址は住居のほぼ中央に位置し、東西55cm、南北60cmのやや楕円形のプランを呈し、22cmの深さを持った炉である。先に述べたように、本県において同時期の住居址の発見がないために炉についても、その詳細が判明していない。しかし越田和夫氏は、(『研究紀要』第2冊　福島大学考古学研究会　昭和47年)の中で本遺跡(『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査概報2』　昭和46年)の例、また炉だけの発見であるが梁川町南林正寺遺跡(『しのぶ考古3』日下部善己・松浦孝雄　昭和46年)の例を引用されて、同時期の炉の形態が本住居址内に発見されている炉、つまり地床炉、南林正寺遺跡で発見されている「コ」の字形石囲

炉の二通り存在すると発表されているが、筆者の知る範囲でも現段階では、この２例しか見られず、氏のいわれる通り、東北南部における炉の形態で判明しているのは、地床炉、「コ」の字形石囲炉であり、地床炉は本遺跡の発見例である。しかし関東においては、同時期の炉で発見されている形態に石囲炉（「ロ」の字形）・埋甕側石炉・埋甕炉等の例が見られる。そして中期中葉からは、石囲炉が主流を占め、大きさも増しているが、東北南部でその流れが判明できるのは大木式土器９・10式、中部地方においては曽利Ⅰ式というように時期的にずれている。しかし関東に見られるような、先述の形態を持つ炉が、今後本遺跡出土土器に伴って発見されたり、また大木７ａ・７ｂ式に伴って発見される可能性は大いに考えられる。

第３節　遺　　物

本遺跡出土の遺物は、土器が破片と合わせて木箱に１箱、石器が９点である。自然遺物の出土はない。土器は下小野・五領ヶ台式系の土器群と勝坂・阿玉台式系の土器群、それに大木７ａ・７ｂ式土器が若干見られる。本型式特に下小野・五領ヶ台式土器系の資料は宮城県遠田郡涌谷町長根貝塚において良好な資料が得られているが、他においては明確にこの土器系と思われるものは見当らない。勝坂・阿玉台系については以前から幾つかの資料が得られていたが、特に福島市八景腰巻遺跡、いわき市下大越貝塚においてその良好な資料が得られている。特に本遺跡出土の蛇のモチーフをした口縁部の例は、本例の他にやはり八景腰巻遺跡に見られ、これは蛇のモチーフの出土例としては北限にあたるものである。先述したように東北南部で五領ヶ台式土器、及び下小野式土器、またその近似の土器を出土する遺跡は少なく、現段階で知り得る遺跡では宮城県遠田郡涌谷町長根貝塚において若干の近似の例が見られるだけである。また関東においてもこの型式の土器を多量に出土する遺跡は概して少なく五領ヶ台貝塚、鎌倉市葛原ヶ岡神社遺跡、東京都丈目遺跡であり、本遺跡のように阿玉台系の土器と混在して出土している例には、千葉県天津町砂田遺跡が古くから知られており、同県安房郡加茂遺跡の場合は同じ層位から多量に両系の土器が、ほぼ同じ割合で出土したと報告されている。また勝坂系の土器に伴っている例としては、やはり千葉県市川市須和田の根郷留見貝塚、東京都西多摩郡多西草花竪穴住居群（『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第14集　昭和13年）、東京都八王子市椚原遺跡等に見られ、草花遺跡の場合は、きわめて五領ヶ台式に近似した例であると報告されている（「相模五領ヶ台貝塚調査報告」『考古学集刊』第３冊　昭和24年）。本例の場合には地理的な問題や他の文化圏、つまり大木式土器文化も合せて考えなければならないので、安易にこれらの例を引用することはできないが、関連して考えられるべきであろう。又これらの資料の中に混在して下小野式土器系の例も見

られる。折り返し口縁であろうと思われる口縁部に段状を持つもの、また有孔鍔付土器等はこれらの特徴を示すものであると思われる。しかしこれらの資料は大木 7a・b式に近似する点も多く、他に分類した大木 7a・b式の縄文土器と明確に区別をつけることは困難な点も多い。また新潟県長者ヶ原遺跡、長峯遺跡においても本例に近似した資料の出土を見ており、東北南部においてもこれらの資料の発見が望まれる。本例の中でも五領ヶ台・下小野式土器系の資料とくに大木 7a式比定期の資料は明確な資料が無く、この時期についてはほとんど判明していないが、五領ヶ台・下小野式系の土器に混在している阿玉台・勝坂系の土器が、一部に五領ヶ台的な要素を持っている感もあるので、本例の場合五領ヶ台式文化より漸進した文化で、大木式文化の影響も受けた、きわめて地方的な五領ヶ台式文化と考えられるものであろう。　（吉田幸一）

第3編　八景腰巻遺跡

―第1・2・4次―

遺跡番号	7―35
所在地	福島市飯坂町東湯野字腰巻・道尻・崖畑
時代・種類	縄文時代（中期）、集落址
調査期間	昭和47年6月19～11月28日
担当者	渡辺一雄（1次・2次）・横山英介（4次）
調査員	長尾 修　柴田俊彰　藤田定興　鈴木 啓　相馬胤道 冨田晴夫　赤井畑まき子　千葉英一　八重樫良信
協力機関	福島市教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境……35
　第1節　位置と地形……35
　第2節　周辺の遺跡……35

第2章　調査経過……36

第3章　遺　　構……37
　第1節　住居址……38
　第2節　埋　　甕……40
　第3節　土　　壙……41

第4章　遺　　物……43
　第1節　土　　器……43
　　1　口縁部資料……43
　　2　底部資料……53
　第2節　石　　器……54
　第3節　その他の遺物……57

第5章　考　　察……60

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

本遺跡は福島市飯坂町から伊達町にかけて東流する摺上川の北岸に位置し、調査時は、リンゴ園と水田であった。摺上川の氾濫をかつて受けたために、遺跡内にも河原石がかなり多い。氾濫後の2次段丘上に遺跡はあるが、摺上川との比高は約7mである。この付近は八景（段丘の上の意）と俗称されているのも現地形からうなずける。遺跡の周辺はかなり平坦であるために、果樹さえなければ見通しがよいと思われ、飯坂町北側の山々が望見される。

地形・地質については、鈴木敬治らの研究がある。それによれば、地形面は高位沖積段丘面で、約6,300年前に谷を埋める形で堆積した福島Ⅰ層でおおわれている。当時は気候はすでに温暖であったらしい。新期火山活動期で、吾妻小富士なども活動していたと思われる。八景腰巻遺跡の実年代は約4,500年前後と思われ、川の氾濫はその後もしばしばくりかえされた。遺構の上をおおう形で、河原石の乱積がみられることでわかる。また土器等もそのために摩滅がはげしく、原位置でなく動いているものも少なくない。

したがって、遺物の層序的観察はかなり慎重にしなければならず、層位的分類による土器編年も困難であった。（図版1）

第2節　周辺の遺跡

東日本における縄文時代中期は、石棒や石皿が出現し、土偶が盛んにつくられ、土器は厚手で大型となり、キャリパー形と呼ばれる深鉢が多くなるなど、文化的に大きく飛躍した時期といえる。

福島市周辺の縄文中期の代表的な遺跡としては、音坊遺跡・月崎遺跡・矢細工遺跡などがあげられる。

音坊遺跡は、福島盆地の南端、標高200mの山地に位置しており、近くに湧水の出る所がある。土器は、大木7a・7bを主とし、8aも少量混在している。石器には、無茎石鏃・石匙・石錐・石槍・掻器・石皿片などがあり、大型磨製の三脚石器なども出土している。また、耳飾や土偶などが発見されている。

月崎遺跡は、飯坂町の南を流れる小川の北岸に位置し、標高97mの浸食をうけた段丘上にある。この遺跡では、埋甕のある石囲炉が4個検出されたが、住居址のプランは確認されなかった。土器は、大木7bから大木9式が主体である。石器は、三脚石器・石鏃・打製石斧等が出土している。また土偶の多いのもこの遺跡の特色で、破片共8個体出土している。

矢細工遺跡は、松川の上流、奥羽本線の芳ヶ沢第1トンネルに近い所に位置し、松川の側方浸食で急崖が後退した河岸段丘上にある。土器は、大木8a・8b式で、月崎とほぼ同時期であり、松川の氾濫をうけたためとみられる河原石が散乱しているなど、八景腰巻遺跡と様相を同じくする遺跡である。他に月崎遺跡と同形式の土偶も検出されている。

八景腰巻遺跡周辺の縄文中期の遺跡は、以上述べた通りであるが、近くには、他に飯坂町東湯野の上岡遺跡があり、有名な「腕をくみ坐した土偶」を出土しており、大鳥城址・西原廃寺跡なども近い。

また、福島市周辺の縄文中期の遺跡は、およそ標高120m以上の地点に存在しているが、八景腰巻遺跡は100m以下であり、これは月崎遺跡と共に摺上川の浸食崖上に位置する特例であろうと考えられる。

（長尾　修）

第1表　周辺遺跡一覧表（縄文中期）

遺跡番号	遺跡名	出土土器形式	石器および他の遺物	遺構
7—89	音坊遺跡	大木7a・7b・8a(少量)式	無茎石鏃・縦形石匙・石錐・石槍・掻器 石皿片・土偶・臼状耳飾 大形磨製三脚石器	
7—5	月崎A遺跡	大木7b～大木9式	石棒・栓状耳飾・縦形石匙・石錐・土偶 打製石斧・凹石・ポイント・スクレイパー	埋甕のある石囲炉4基
7—52	矢細工遺跡	大木8a・8b式	土偶	石囲炉

第2章　調　査　経　過

6月19日、調査のため家屋を借用した菅野佐市宅の庭前で、作業員に次の話しをする。①調査の理由、②遺跡の種類と時期、③作業上の諸連絡、④調査主体。その後、ただちに作業開始。まず伐採したリンゴの木の片付けをし、中心杭を基準にグリッドを組む。次の日から雨で能率は悪いが、時節柄やむを得ない。作業員が多いので数地点にわけて発掘する。ほとんどが縄文中期でF—19グリッドよ

り埋甕のある炉址を検出。またG—19グリッドからも土師器がはじめて出る。しかし後世の川の氾濫があったと見え、遺構不明。一軒家の東側の水田は、黒色土層の落ち込みがあり、住居址の可能性がある。

6月29日より実測に入る。7月1日東湯野公民館と現場で現地説明会を行う。土器は遺跡全体から出土するが、摩滅したものが多い。またかつての川の氾濫による河原石が遺物包含層に混じってごろごろしている。しかし、この中にピットがあったり、溝があったりするので、すべてがすべて流されてきたものではないようである。土器片の密集する所が点在している。7月6日第1次調査終了。

9月4日第2次調査に入る。今回の地点は主として第1次に地権者の関係で調査不可能だった地区である。地下道ボックス部分は大きな礫群のみで遺構・遺物はほとんどない。また道路部分のB地点も遺物は少量であるため、9月6日で終り、後半A地点のA～B列グリッドに中心を移す。7日、B地点の全測を行う。A地点では今回石鏃・スクレイパーをはじめ石器が多い。12日、第3次予定地区にグリッドを組む。後半に入り、土製耳飾・土偶片・ミニチュア土器等、種々の遺物が出土する。18日、A地点の実測を行う。グリッドごとの平面図やセクション図作製に全力をあげる。19日、H—26・B—32から石囲炉検出しはじまる。また石囲炉にともなう住居址がほぼ完全に検出される可能性があり、全力をあげて努力。この住居址は福島市内で最初の完全な住居址検出となった。予定を延長して9月23日やっと実測完了。

遺跡の範囲が当初計画したより広がっているので、第3次調査を東北学院大学に依頼。第4次調査を11月6日より開始。今回は主として第2次調査の残存部と住居址の確認調査である。また7日よりH地点の発掘開始。縄文中期の土器片が出土する。11月11日、H地点a—4より炉址確認。g—28で溝状遺構を検出した。11月17日、F・G地点を中心に調査。11月21日よりE地点発掘開始。多量の縄文中期土器片と炉址を確認。11月28日まで図面・写真などの記録をとり、同日出土品等の運搬を終えすべて完了する。（図版60）　（渡辺一雄）

第3章　遺　　構

第1次・2次・4次の各調査で発見確認された遺構は、住居址6（二つの住居址プランと炉址4を確認）、埋甕5、土壙11であった。そのほか、土器が密に検出されたグリッドもあったが、遺構と判定されるものはなかった。

住居址は、大木 8a式期相当と考えられる二つのプランを確認（縄文時代の竪穴住居が明確に検出

されたのは、福島市内で初めてである。）し、他に４個の炉址が認められた。埋甕は、大木８b式期の所産と考えられるもの４、大木９式期の所産と考えられるもの１である。土壙は、大木 8b式期の所産と考えられるもの２、大木９式期と考えられるもの１で、他の土壙の時期は、遺物がないため不明である。

第１節　住　　居　　址

１号住居址（図版２・３・４・５）

C—32グリッド付近を中心とした竪穴住居址で、長辺約6.6m、短辺約5.9mの不正隅丸方形プランを呈している。本住居址は氾濫原に位置するため、プラン上面には河原石が散乱しており、その石の間に土器片が混在している状態であった。

河原石は大きなものもあり、住居址プランの確認は困難をきわめた。しかしながら、地表からおよそ60～80cm位掘り下げたところで土器片が密集して堆積しているのを認め、精査の結果プランが確認された。

住居址床面は、地山を掘り込んで形成されており、中央部がかたく、周辺はやわらかい。壁の床面からの高さは北側で約25cm、南側および東側で約15cm、西側で約22cmの高さで、覆土と壁との境は比較的明瞭であった。床面と壁との間には、２本の周溝がめぐっており、住居址プランの壁近くで、双方の溝が接続している。さらに内側の周溝は、南側で二またに分かれてとぎれている。周溝の床面からの深さは、北で外側が65cm、内側が74cm、南で外側が45cm、内側が62cm、東側で外側が60cm、内側が45cm、西側で外側が65cm、内側が60cm程である。周溝の幅は、およそ30～50cmとなっている。

炉（図版10—１）の形態は、ほぼ長方形を呈する石囲炉であり、石組に使用された石は、河原石とみられ、埋設土器・木炭・焼土・灰等は確認されなかった。炉の長軸は、南北に約95cm、幅は東西に約60cm、深さは約10cm位である。

柱穴と考えられるピットは、全部で13認められた。深さは、約70～99cmまであるが、ピットが周溝にそってめぐっている配置状態から柱穴と考えてよさそうである。

本住居址の覆土から検出された遺物は、大木８a式期や、大木８b式期に相当する土器片が認められた。床面から約10cm浮いた所で検出された深鉢の破片は、接合補修の結果、完形品（図版39—10、41—４）になった。この深鉢は大木8a式相当の土器であり、本住居址は、大木8a式期相当の時期に営まれたものと考えられる。

２号住居址（図版７・10—２）

F—19グリッド付近を中心とした地域から検出された炉址で、長軸は、北北西～南南東方向に約70cm、幅は約50cmである。炉の検出された時の状況は、埋設土器1個体が炉の北北西隅に設置されており、土器を頂点として左右に袖石が開いているような状態であった。しかしながら、本来の形態は長方形の石囲炉であった可能性が強い。炉に使用されたとみられる埋設土器は、保存状態がきわめて悪く、土器洗いをするとくずれる状態であったため、復元実測図等は作製できなかった。埋設土器は、キャリパー状を呈し、底部欠損しており、時期は大木 8b 式期の土器に比定されるものと思われる。

炉の周辺からは、付属施設等の検出はなく、隣接グリッドからも大木 8b 式期に属する土器が少量検出された程度であった。炉の検出をみたので、当然住居址を想定し、住居址のプランの検出に努めたが、プランの確認はできなかった。しかし、屋外の炉址とは考えられず、住居址内に設けられた炉址と理解される。なお、炉址から、焼土・木炭・灰等は検出されなかった。

3号住居址（図版10—3）

H—24グリッドから発見された炉址で、長軸は北西から南東の方向に約1.40cm、短軸は南西から北東の方向に約87cmである。

検出時の炉の形態は、「コ」の字状の石囲炉であったが、本来は長方形の形態であったものか、もともと「コ」の字状を呈していたのかは不明である。炉床より埋設土器・焼土・木炭・灰等の検出はなく、この炉に伴う住居址のプランも、確認はできなかった。炉の周辺からの出土遺物はなく、堆積土は小石混りの泥土であった。また、炉床付近の土は砂質であり、住居址の壁は、水の作用で流失した可能性が強い。

4号住居址（図版6）

E—36グリッド付近を中心として検出された竪穴住居址で、長辺約6.3m、短辺約5.1mの不正隅丸方形プランを呈している。

本住居址の壁の高さは、約20～30cmで、床面のほぼ中央部に、「コ」の字状を呈する石囲炉址がある。炉址（図版10—4）の長軸は、南南西～北北東の方向に約1.8m、幅は約80cmである。炉床から焼土・木炭・灰等の検出はなく、土器片も大木8a～8b式期の破片が少量しか出土しなかった。

本住居址南西コーナー付近の床面からは、大木 8a 式期と思われる土器片の出土をみているので、大木 8a 式期頃の住居址かと考えられる。壁と床面との間に周溝等は確認されず、柱穴も不明であった。

5号住居址（図版8・10—5）

H—26グリッドから発見された炉址で、長軸は、北西から南東の方向に約1.15m、幅は北東から南西の方向に約55cmである。検出時の炉の形態は、長方形の石囲い炉で、炉床の中から焼土・木炭・灰等の検出はなかった。また炉に伴う埋設土器等の付属施設も認められなかった。

炉址の周辺から縄文式土器の完形品１個体（図版40—1、42—2）を含む、若干の土器が出土しており、それらの土器が、大木 8b 式期の土器と考えられるので、本住居址は、大木 8b 式期頃に営まれた遺構と考えられる。なお、本住居址の炉址は、３号住居址の炉址に近く、切り合い住居址とも考えられるが、両方の住居址とも壁の確認ができなかったので、それらの問題は不明確である。

６号住居址（図版９・10—６）

H—28グリッドから発見された炉址で、長軸は南南西から北北東に約１ｍ、幅は約45cmである。形態は、長方形の石囲炉であり、南南西端に埋設土器が１個体ある。埋設土器は底部欠損のキャリパー形を呈する大木 8b 式期の土器で、保存状態が悪く、土器洗浄の段階で表面が剝離したり、くずれたりして、復元実測は不可能となった。

炉の周辺には、大木９式期の所産と思われる土器や、大木 8b 式期の所産と考えられる土器および破片等が散乱していた。炉床および埋設土器の内部からは、焼土・木炭・灰等の検出はなく、住居址プランの確認もできなかった。

第２節　埋　　甕

１号埋甕

G—３グリッドから検出された埋甕で、土器を囲むように２個の大きな石があり、土器は、横に倒れ、つぶれたような状態で発見された。土器は、浅いピット内に埋納されており、プランの長軸は約80cm、幅は約65cmである。土器の時期は、大木 8b 式期と考えられ、人骨等は確認できなかった。埋甕の周囲から出土遺物はなく、付属施設等も認められなかった。

２号埋甕（図版10—７・11・12）

G—６グリッドを中心として検出された埋甕の一つで、土器を囲むように石が配置されていた。土器は、押しつぶされたような形で横に倒れており、10～15cm位のごく浅いピット内に埋納されていた。この埋甕にともなう付属施設は認められず、土器内を精査したが、人骨の確認はできなかった。埋甕が埋納されていたピットの長径は約70cm、短径は約50cmである。時期は、大木 8b 式期の所産と考えられる。

３号埋甕（図版10—８・14）

G—６グリッドから発見された埋甕で、２号埋甕の西側およそ1.50ｍ位の所に位置する。土器は横に倒れた状態で、上半分はなく、特にピット内に埋納されている様子もないので、埋甕と呼ぶのは適切でないかもしれないが、周辺からも埋甕が発見されており、この破片も埋甕の一部と考え、３号埋

甕とした。なお、本埋甕から人骨・副葬品等は発見されなかった。

土器の保存状態は悪く、洗浄をするとくずれる状態であり、文様も不明瞭であったが大木 8b 式期の所産と考えて大過ないものと思われる。

4号埋甕（図版10—8・13・14）

G—6グリッドから検出された底部穿孔の土器で、3号埋甕の北約80cmの所から発見された埋甕である。底部穿孔土器は、深さ25cm前後の浅いピットの底から検出され、その上を大きな石で覆っているような状態で発見された。土器内から人骨などは検出されず、伴出遺物も発見されなかった。時期は、大木 8b 式期の所産と考えられる。

5号埋甕（図版15・21）

D—14グリッド11号土壙内から検出された埋甕で、倒立した状態で埋納されており、図版21のB—Dセクション図のような構造をもつ土壙が検出された。土器は、大木9式期のもので（図版15）、隆帯による縦位の渦巻文を主体とする文様構成をしている。埋葬施設と考えられるが、人骨等は認められなかった。

第3節　土　　壙

1号土壙（図版20）

E—11・12グリッド付近を中心として発見された土壙の一つで、2号土壙の一部を破壊して構築されたものである。長径は約50cm、短径は約40cmで、掘り込み面からの深さはおよそ40cmの比較的小さな土壙で、出土遺物はなかった。土の堆積状態から1号土壙は、2号土壙を切っていると考えられるが、出土遺物がないので、いずれの時期の所産か不明である。

2号土壙（図版20）

E—11・12グリッド付近を中心として発見された土壙の一つで、1号土壙に一部切られている。長径は約2m、短径は約70cm、深さ約65cmの土壙である。形状は、東西に細長い紡錘形を呈しており伴出遺物は認められなかった。本土壙の構築時期は、出土遺物がないので不明であるが、1号土壙よりは、古い時期の所産と考えられる。

3号土壙（図版20）

F—11グリッドから発見された土壙で、長径約1.55m、短径約70cm、深さ約53cmの長円形を呈している。土壙床面からは、5～30cm位までの石が検出されているが、土器などの出土遺物はなく、本土壙が、いずれの時期の所産か不明であるが土壙周辺のグリッドからは、大木 8b 式期の土器が出土し

ているので、大木 8b 式期ころ構築された土壙とも考えられる。

4号土壙（図版20）

G—11・12グリッド付近を中心として発見された3基の土壙の一つで、3基の土壙の中で一番新しい時期に構築されたものである。長径は約50cm、短径は34cm、深さは97cmである。本土壙は、5号土壙の一部を破壊して構築されており、出土遺物はなかった。

5号土壙（図版20）

G—11・12グリッドから発見された土壙の一つで、4号土壙に一部を破壊され、6号土壙の一部を破壊している状態で発見された。長径は約1m、短径は55cm、深さ1mの長円形を呈する土壙である。出土遺物はなく、構築時期は不明である。

6号土壙（図版20）

G—11・12グリッドから発見された土壙の一つで、一部を5号土壙に破壊されており3基の土壙のうち一番古い時期に構築されたものと考えられる。本土壙は、長径2.35m、短径80cm、深さは約40cmの長円形を呈している。土壙両端には、石や土器片が若干出土しており、土器片は大木 8b 式と認められるものである。したがって、本土壙は大木 8b 式期の所産と考えられ、4号・5号土壙も、この周辺の時期の所産と思われる。

7号土壙（図版21）

F—11グリッドから発見された土壙で、3号土壙の北側に位置する。長径は1m、短径70cm、深さ50cmの長円形を呈している。床面に石・土器などが認められ、土器片は大木 8b 式期の所産と考えられる。

8号土壙（図版21）

C—34グリッド付近から発見された土壙で、長径約1.05m、短径約60cm、深さ約15～20cmの楕円形を呈している。本土壙内から遺物の検出はないので、構築時期は不明であるが、長径50cmの大きな石が、ずり落ちたような格好で発見されているので、あるいは墓址的な性格をもつ土壙かと考えられる。

9号土壙（図版21）

B—32グリッドから発見された小土壙で、長径65cm、短径38cm、深さ25cmの長円形を呈している。土壙内部からは浮いた状態で小石が1個認められた。他に出土遺物はない。

10号土壙（図版21）

D—14グリッドから検出された土壙で、長径1.25m、短径55cm、深さ50cmの不整形を呈し、内部からは3～15cm位までの小石が7個検出されている。

本土壙は、11号土壙の一部を破壊して構築されており、10号・11号両土壙を囲むように大きな凹みがある。この凹みの内部に両土壙が、構築されている。この二つの土壙と凹みとの関係は、明確では

なく、切り合い関係から10号土壙は、11号土壙より新しい時期の所産と考えられる。

11号土壙（図版21）

D—14グリッドから検出された土壙で、一部を10号土壙に破壊されている。本土壙には、もう一つのピットが設けられ、大木9式期の土器が、ふせた状態で埋納されていた（5号埋甕）。土器の下には、大きな石があり、その上に土器が乗っている状態であった。この大きな石の下には、さらにピットがあり、この穴をふさぐように、大きな石が乗っている状態であった。この5号埋甕と11号土壙が、同時期のものとすれば、本土壙は大木9式期の所産と考えられる。（長尾　修）

第4章　遺　　物

遺跡の時期は、縄文時代中期で、土器編年の大木 8b式の土器を中心とする遺跡である。他には、大木 7b・ 8a式等の土器片や、大木9式に属する土器片、関東系の五領ヶ台式・下小野式・阿玉台式等々の系統をひくと思われる土器片が僅少ながら検出された。また、土師器や須恵器の細片も若干出土しており、土師器の甕は、実測可能なもの1個体分の出土をみた。

遺物は、一般に摩滅が激しく、氾濫による二次堆積かと思われた。しかし、一部に埋甕や炉址、住居址などが発見され、また数か所遺物の密集している所もあることから、この遺跡は、河川の氾濫による攪乱を受けたものと思われる。

第1節　土　　器

八景腰巻遺跡の発掘調査で得られた土器資料は、第1次・第2次・第4次の各調査で得られたものを総計すると整理箱で635箱分におよぶ。縄文式土器は、その主体を占めるものであり、量も多く、内容も細分すれば、多種多様にわたっている。少ないスペースで、その詳細を述べきることはできない。そこで、口縁部破片資料についての分析を中心に述べてゆくことにする。

なお、八景腰巻遺跡における土器資料は、河川の氾濫をうけているため、原位置にないと思われるものが多く、したがって層位的な分析は無意味な状態なので放棄せざるを得なかった。口縁部資料については、施文技法を中心に分類した。底部については、網代底を中心に述べることにする。

1　口縁部資料

縄文式土器の口縁部破片資料を検討すると、その総数は1,440点におよぶ。そのうち、分類上、器形

と文様が明確で特徴的なもの、191点（同一個体はないと思われるもの）を選び出し（図版22～33）、この資料をもとに分類記述することにした。なお補足として、完形土器の写真（図版41～44）と実測図（図版39・40）および土器破片の拓本資料（図版34～36）を若干掲載した。この191個体分の口縁部資料は、時期・文様・施文技法等に応じて、3群に大別され、さらに10類に細別される。

第1群土器

本群は、縄文時代中期前葉に位置づけられる土器群である。

＜第1類土器＞　折返し口縁をもつ土器（図版22—1～7）

〔Ⅰ〕図版22—1は、地文として縄文を施文し、折返し口縁部にも、体部とは逆の方向の縄文を施文している。さらに、綾絡文を縦位に押してあり、体部から口縁上端まで施文されている。

〔Ⅱ〕図版22—2・7は、図版22—1と様相をほぼ同じくするが、折返し口縁部には、縄文および綾絡文の施文はなく、折返し口縁部下端で、文様施文は終っている。図版22—7は、図版22—2に比して綾絡文の間隔が若干せまい。

〔Ⅲ〕図版22—3は、折近し口縁を形づくっているが、地文はなく無文である。図版22—4は、縦位の方向に数条の綾絡文が観察される。大分摩滅が激しく、わかりにくいが、地文はないようである。

〔Ⅳ〕図版22—5は、図版22—1の施文に近似しており、体部と折返し部における縄文の施文は、ほぼ同一方向であるが、綾絡文の施文がない点、図版22—1と若干異なる。

〔Ⅴ〕図版22—6は、図版22—2・7に近い様相を示すが、綾絡文の施文がなく、地文は縄文のみで、折返し口縁部は無文である。

以上、これら第1類に属する土器は、本遺跡出土の土器群中最も古く縄文時代中期初頭、関東の下小野式系の土器に同定、または対比される土器と理解して大過ないように思われる。

下小野式土器は、折返し口縁を形づくり、五領ヶ台式土器等に伴って検出されるのが通例で、単独で出土する例は知られていない。当然本遺跡においても、五領ヶ台式土器の摘出ができるものと思われたが、明確に五領ヶ台式土器と判定されるものは、ついにみつからなかった（一部五領ヶ台式土器と思われる破片があるが、小片のため不明確）。いずれにしても、以上の事実から本遺跡成立の時期は、縄文時代中期初頭にさかのぼるものと考えられる。なお、これらの土器片の器厚は、8㎜前後で、色調は褐色である。

＜第2類土器＞　彫刻文・角押文・有節線文・Y状貼付文等を有する土器（図版22—8～23）

〔Ⅰ〕図版22—8・10は、土器の表面および口縁部裏面に、三角形を呈する彫刻文を有しており、一般に初期阿玉台式土器の特徴と理解されている土器と観取される。胎土中には、石英粒・金雲母等の混入が目立つ。

〔Ⅱ〕図版22—11～16は、有節線文を有する土器である。貼付による隆帯文と、それに添った沈線・有節線文等で文様区画がなされている。有節線文は、図版22—13・16において顕著に観察される。

〔Ⅲ〕22—17～19は、粘土紐の貼付による隆帯文と、それにそって一列に押された角押文を主体とした文様構成を基調とする、いわゆる角押文系の土器である。22—17は、口唇部に蛇体をかたどった粘土紐による貼付文が認められる。

〔Ⅳ〕図版22—20～23は、粘土紐でY状の貼付文を施しているのが、特徴的な土器である。図版22—20～22は、地文がなく、貼付文のみで口縁部文様帯を造り出している。図版22—20は、口唇部に沈線で、一見「八」の字状を呈する刻み目を付している。図版22—23は、地文に縄文を施文し、Y状貼付文と沈線で文様区画をしている。この土器は、阿玉台式系土器の中に再び縄文技法が復活する時期の所産と考えられ、阿玉台式系土器の中でも終末に近い時期と推定される。図版22—21の貼付文は、図版22—20・22・23のY状貼付文と若干違うが、基本的には同じなので、この仲間に入れた。図版22—20～22の色調は褐色であるが、図版22—23は、黒褐色を呈している。

以上、これら第2類の土器は、関東の阿玉台式系土器の特徴を備えており、これに同定または対比される土器と考えられる。総じて、これらの土器の胎土中には、白色の微石や石英粒・雲母等の混入が目立つ。色調は一般に、褐色および黒褐色で、土器自体は比較的もろい。器厚は、8～10㎜位である。

本遺跡より出土した阿玉台式土器に同定または類似の土器片のうち、初期阿玉台式土器として一般的な、彫刻文を口縁部内面等に備えた土器〔Ⅰ〕は、3例の検出をみている。これらは、いずれも三角形の彫刻文を備えており、関東における阿玉台式初期のものに同定または対比して大過なかろう。

本県中通り地方における阿玉台式土器の分布をみると、その様相は後半期のものの方が圧倒的であり、八景腰巻遺跡においても例外ではない。しかし、初期阿玉台式土器が、少量といえども検出されたことは、関東の霞ケ浦周辺に文化圏の中心をもつ阿玉台式土器文化が、その初期において、すでに本県北部にまで、影響を与えていたことがうかがえる。

本遺跡においては、前述の外、有節線文・角押文・沈線や縄文などを施した阿玉台式土器に同定、対比される土器も検出されている。その中で、阿玉台式土器に縄文技法が復活する土器は、阿玉台式土器でも後半から終末に近い頃の所産と考えられており、関東地方においては、加曽利EⅠ式土器成立の一要因となっていくのであるが、加曽利EⅠ式土器の渦巻文は、東北の大木系土器の影響を受けているとも考えられ大木8a・8b式土器との関係など、なお多くの問題が山積している。

＜第3類土器＞　側面圧痕文系土器・瘤状貼付文系土器、阿玉台式系土器類似の貼付文をもつ土器、および波状口縁で隆帯と沈線で文様構成している土器（図版23—1～22）

〔Ⅰ〕図版23—1は、折返し口縁を形づくり、地文として縄文・綾絡文が施文されている。口縁折

返し部に、図版22—17等と類似の貼付文がみられる。この土器は、第1群第1類系の土器とは焼きが違うことや、貼付文が存在する点、別に分類されるべきものと考えた。図版23—5の土器は、口縁部付近における横位の貼付による隆帯など、関東系阿玉台式土器の匂いを感じさせるものであり、この仲間に組み入れた。

〔Ⅱ〕図版23—2～4は、波状口縁で、隆帯とそれにそった沈線で文様区画している。図版23—2の口唇には、鋸歯状の刻み目が施されている。図版23—3の口唇には、「八」の字状の線刻が施されている。図版23—2・3は、色調・焼成・文様等の類似から同一個体の口縁と考えられる。

〔Ⅲ〕図版23—6～17は、いわゆる側面圧痕文系の土器である。横位に2本の撚糸を圧痕して、文様を構成するのを基調としているようであるが、図版23—8のごとく縦位で2本平行に口縁上端折返し部に押したものもある。また、図版23—10のごとく、2本平行に押した下に縦位に連続して施文したものや（図版23—11・12）、隆帯にそって押したものなどもある。図版23—6は、側面圧痕文及び沈線で文様区画をしており、波状口縁で、大木8a式程の加飾性はうかがえない。

〔Ⅳ〕図版23—20・21は、瘤状貼付文を口縁上端、または口唇部付近に有している土器である。図版23—20・21は、地文がなく波状口縁であり、口縁部上端付近に瘤状貼付を有している。図版23—21は、口縁上端にそって、1列の側面圧痕文が観察される。

〔Ⅴ〕図版23—22は、図版23—20・21と同じように瘤状貼付文を有しているが、折返し口縁で平縁であり、地文として縄文が体部・折返し口縁部一面に施文されており、その方向は同一方向であること、また瘤のついている場所が違うことや、瘤が2～3並べて施文されている点、区別されるべきであろう。

以上、これら第3類に属する土器は、いわゆる側面圧痕文系の土器を主体とする大木7b式期ころの所産と考えて、大過ないと思われる。

大木7b式期相当の土器は、本県において下大越松林貝塚・台ノ上貝塚等からの出土が著名である。仙台湾周辺で盛行した大木7b式の土器は、本県において、側面圧痕文系の土器片を中心に一応認めることができる。この側面圧痕文系土器の位置については、意見のわかれる所であり、厳密なる区分はできかねるが、ここでは、大木式7b期の所産と考え分類した。しかしながら、層位的な出土をみていないため、ここにあげた側面圧痕文系の土器が同一の時間的範囲におさまるかどうかはなお不明である。

＜第4類土器＞　太い隆帯で文様構成をしている土器（図版24—1～10）

〔Ⅰ〕図版24—1は、折返し口縁を有し、粘土紐の張付けと沈線で文様区画をしており、図版22—20・22・23等と同じようなY状貼付文を有している。焼成は良く、赤褐色で図版22—23と若干様相を異にする。地文は、縄文が施文されており、折返し口縁部とY状貼付文の所にも縄文による施文

がある。この土器は、阿玉台式系土器の中でも、新しい時期に対比されるものと思われるが、時間的位置づけをする必要上、この類に入れてみた。

〔Ⅱ〕図版24—2は、口唇部に鋸歯状の刻み目をもち、円形刺突列点文や、沈線・隆帯による波線文等で文様区画しており、波状口縁を呈している。図版24—1同様太い隆帯で文様構成しているわけではないが、第1群第4類に近い所産と考え、この仲間に入れた。

〔Ⅲ〕図版24—3は、口唇近くに太い隆帯を集中させて盛り上げ、把手状の突起を作り出している。

〔Ⅳ〕図版24—4・5・7・8は、横位の太い隆帯と円形眼鏡状の文様を粘土紐で貼付し、体部は、地文として縄文が施文され、他の土器群に比べ厚手である。

〔Ⅴ〕図版24—6は、隆帯による耳様の文様に添って、撚糸の圧痕が2条観察され、大木7b式的要素と大木8a式的要素をそなえたこの類の特徴的な土器である。

〔Ⅵ〕図版24—9は、横位を基本とした隆帯上に、円形刺突列点文を施文したもので、地文はない。器面が、研摩されたかのように見えるが、磨消縄文の盛行する大木9式や大木8b式期の土器に該当するものがみあたらず、貼付文による隆帯で文様区画をしていることから、大木8a式期直前あたりの所産かと考えられる。

〔Ⅶ〕図版24—10は、貫孔する把手を有し、口縁部文様帯を貼付文で区画している。地文は縄文を施文しているが、摩滅のため磨消縄文かどうかの判別は不明である。把手や文様帯の構成から大木8a式期の所産と考えられる。

以上、これら第4類の土器は、時間的位置を考えると、図版24—10を除き、大木7b式期から大木8a式期にかけた時期の所産かと思われる。色調は一般に褐色、器厚は13㎜前後であり、比較的厚手である。

第2群土器

本群は、縄文時代中期中葉に位置づけられる土器群である。

＜第1類土器＞　貼付文系の土器（図版25—1～20）

ここであつかう貼付文は、いわゆる大木8a式共通の要素として紐状貼付文がみられるものを指す。

〔Ⅰ〕図版25—1は、大木8a式特有の細い粘土紐による貼付文をもつ土器であり、斜め右上から左下へ粘土紐による貼付を施した後、斜め左上から右下へ同様の施文をして、網目様の貼付文様を作り出させている。地文として縄文が施文してある。

図版25—2～4・6・7は、地文として縄文を施した上に細い粘土紐による貼付が施され、その貼付文は、平行線や波線を形づくっている。図版25—6は、図版25—2～4の貼付に比して幾分太めの貼付を施している。図版25—5・8・10は、図版25—1～4等の土器に比べ貼付文が太いが、基本的施文技法から見ると図版25—1～10は共通の施文法によっている。

〔Ⅱ〕図版25—11・16は、隆帯上に連続して、円形刺突文が施されており、地文は縄文である。図版25—11の口唇部には、連続した刻み目が観察でき、それは、鋸歯状を呈している。隆帯も、大木8a式のように研摩されておらず、渦巻文に近い貼付がみられるが、判然としない。大木8b式の中でも新式に属するものと考えられる。

〔Ⅲ〕図版25—12・13は、隆帯上に楕円文を押圧したもので、基本的には図版25—11・16と同じである。図版25—14も刺突文が上下に連続して施されており、この仲間である。

〔Ⅳ〕図版25—15・17は、口縁部文様帯にx状の貼付文を有しており、図版25—17には細い粘土紐による貼付文も観察される。

〔Ⅴ〕図版25—18・20は、隆帯により、口唇部に把手状のものを作り出している。地文は縄文が施文されている。図版25—18は、波状口縁を呈し、図版25—20は平縁であるが、基本的には近似している。

〔Ⅵ〕図版25—19は、貼付による隆帯で、渦巻文を形づくっており、地文に縄文が施文されている。隆帯にそって沈線が施文され、隆帯は第2群第1類〔Ⅰ〕～〔Ⅴ〕の土器と比して、比較的よく研摩されている。しかし、大木8b式期の土器ほど渦巻文が発達しておらず、隆帯の研摩もおとるので、この仲間に加えた。

以上、これら第2群第1類の土器は、大木8a式の土器に同定または対比される土器と考えられれる。

紐状の貼付文を文様構成の主体としている土器類で、紐状貼付文の隆帯は、細いものや、太いものがあり、また、口縁部に耳状把手様の隆帯を形づくっているものもあり、細分すればいくつかの分類が可能である。当遺跡においては、大木8b式期の土器についで主流をなす土器である。

＜第2類土器＞　口縁部文様帯の確立された土器（図版26・27・28・29・30）

縄文時代中期中葉から後半、すなわち大木8b式期ころになると、いわゆるキャリパー形を呈する土器が多くなり、磨消縄文の手法が発達してくる。また、このころから口縁部文様帯と体部文様帯が明確に分離されてくる傾向にあり、渦巻文がモチーフの主体となってくる傾向がみられる。

〔Ⅰ〕図版26—1～10は、貼付による隆帯で、口縁部文様帯が形成されており、渦巻文に接して剣先（トゲ）様の文様がみられるものもある。図版26－5のような剣先文を有するものは、大木8b式期の土器でも古式と理解されるが、図版26—1・4・7・8のようなより発達した技法で施文された剣先文を有する土器もある。ゆえに、これらの土器が同一の時間的範囲内におさまるかどうか確証はなく、剣先文を有する土器の中で若干の時間的な細分が可能であるかもしれない。図版26—2・3・11等も古式の要素が観察される。図版26—2は、貼付文の様相から大木8a式とみれないこともないが、渦巻文類似のものも観察されるので、ここでは大木8b式の古式に位置づけた。

〔Ⅱ〕図版26—17～19、27—1～12の土器は、前者の土器に比べ、より発達した段階を示しており、隆帯にそって沈線を施し、隆帯を研摩しているのが認められる。これらの土器の中には、磨消縄文のものや、充填技法により縄文が施文されたものもある。図版27—12は、口縁部文様帯を区画する隆帯の研摩が顕著であり、充填された縄文が磨消技法を受けているなど大木9式に近い施文上の発達が認められる。しかし、一般に大木 8b 式が横位に口縁部文様帯を形成するのに対し、大木9式が、縦位に形成していることを考えれば、大木 8b 式の新しい時期の所産と判断して大過ないと考えられる。

〔Ⅲ〕図版28—1～19の土器は、口縁上端から口唇部付近に渦巻文を主体とした文様帯をもつ土器である。そしてこれらの土器は、さらに三つに区分される。すなわち、(1)図版28—1～3・13のごとく地文が縄文のみのもの、(2)図版28—4～10のごとくさらに沈線が加わっているもの、(3)図版28—11・12・14～19のごとく地文がないものに細分される。(3)の器形は浅鉢が目立つ。

〔Ⅳ〕図版29—1～13は、渦巻文を主体として文様区画し、口縁部文様区画内部に、横位の方向で撚糸の圧痕を施文、充填している土器である。図版29—11・12は、第1群第3類のいわゆる側面圧痕文系の土器に近似しているが、口唇部上端に渦巻文を有しているなど、相違点がみられ分離されるべきものと考えた。器形は一般にキャリパー形が多い。

〔Ⅴ〕図版30—1～8は、口縁部文様帯に渦巻文を主体とした横位の文様区画を形づくり、文様帯内部に、沈線もしくは圧痕で「ハ」の字状の文様を充填している土器である。図版30—8は、眼鏡状のわくの中を刺突文で充填している。以上のような文様構成をもつ土器は、関東（加曽利系土器）、中部（曽利系土器）等に広く分布し、北陸方面にも類例があるようであるが、宮城県で出土しているとの報もあり、また、福島県福島市飯坂町の月崎遺跡からも、同類のものが出土しているので、東北自生のものか、中部・北陸地方等からの影響か、現段階では論じ得ない。基本的には、第2群第2類〔Ⅵ〕と同じであるので、ここではあえて新しい類を設けず、この仲間に入れた。時期的には、大木 8b 式の範囲内であると考えられる。

〔Ⅵ〕図版30—9～13は、基本的な文様構成は、第2群第2類〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕と同様であるが、口縁部文様帯内部が、竹管によるとみられる縦位の沈線で充填されている点前者と異なる。図版30—10は、体部にも縦位の沈線が施文してあり、図版30—9～13は、文様構成の上で若干の差異をもっている。これらの土器は、関東の加曽利EⅠ式の匂いが濃く、加曽利EⅡ式的なものも認められる。図版35—21はこの仲間に近い要素を備えているが、中部山岳地方の曽利Ⅲ式に対比されると考えられる土器である。時間的には、大木 8b 式末から、大木9式にかけての所産と考えられる。

以上、これら第2群第2類の土器は、大木 8b 式期を中心とした時期の所産と考えられる。本遺跡出土の土器のうち量的に最も多いのが、この大木 8b 式期相当の土器である。

大木 8a式に盛行した稚拙な貼付文は、大木 8b式に至って、衰退化の現象がみられ、洗練された隆帯へと移行してゆく。また、大木8a式期において口縁部文様帯が確立されてくる傾向は、大木8b式に至って完成期へと入る。そして、文様を構成する隆帯は、研摩されてくる傾向がみられる。磨消縄文技法の発達が認められる。口縁部文様帯と体部文様帯の明確な区分は、大木 8b式に至って明確な分離をみせるようになる。大木 8b式土器の基本的形態は、キャリパー形を基本とし、口縁部文様帯と体部文様帯とが明確に分離されているものとなる。しかしながら大木 8b式に同定される土器の中には、口縁部文様帯をもたないものもあると認識されそうである。

第3群土器

本群は、縄文時代中期後葉に位置づけられる土器群である。

＜第1類土器＞　口縁部文様帯に楕円状の文様区画を有する土器（図版31—1～12）

〔Ⅰ〕図版31—1～3・6は、太い隆帯による眼鏡状楕円形の文様区画を有し、隆帯および区画内が研摩されており、無文である。

〔Ⅱ〕図版31—4・5は、隅丸長方形の文様区画をもち、隆帯・文様区画は、〔Ⅰ〕同様研摩されている。隆帯の研摩が著しい。地文はなく無文である。〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕とも、口縁部文様帯は横位に構成されている。

〔Ⅲ〕図版31—7・8は、基本的文様構成において、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕と同じであると観取されるが、文様区画内に縄文が施文されている点異なる。

〔Ⅳ〕図版31－9・10は、〔Ⅲ〕と同様の基本的文様構成をなしているが、隆帯で把手様の突起を作り出し、そこに楕円状文様を形成している点、若干の差異が認められる。

〔Ⅴ〕図版31—11・12は、渦巻文等の文様区画に並置させるようにして、眼鏡状楕円形の文様区画を配置させ、文様帯を構成している。また、文様区画内には、縄文を充塡し、磨消縄文の手法もとり入れられている。

以上これら第3群第1類の土器は、大木9式期の所産と考えられる。

＜第2類土器＞　渦巻文を中心とした文様区画をなし、磨消縄文の顕著な口縁を有する土器（図版32—1～14、33—1～3）

〔Ⅰ〕図版32—1～4は、比較的平坦な渦巻文を主体とした口縁部文様帯を有し、口縁部文様区画内、体部とも研摩されている。これらの土器は、隆帯にそって沈線を施し、研摩しているなど、施文技法の向上が観取される。図版32—4の器形は、浅鉢と思われる。

〔Ⅱ〕図版32—5・6は、体部に縄文が施してある点〔Ⅰ〕と異なるが、口縁部文様区画内は研摩されており、基本的な文様構成は〔Ⅰ〕と同様である。

〔Ⅲ〕図版32—7～11・13は口縁部文様帯区画内に縄文が充塡してあり、磨消技法を施してある。

第2表　完形土器一覧表

図版番号	遺物名称		寸法(cm)			出土地点	分類	特徴
	時期種別	器形	高さ	口径	底径			
39－1・41－1	縄文	深鉢	18.6	19.0	9.7	C－9	1群	獣面・「Y」状貼付文
39－2・41－3	縄文	深鉢	－	11.2	－	C－4	1	折返し口縁
39－3	縄文	深鉢	－	16.0	－	表採	1	口縁に撚糸の側面圧痕文
39－4	縄文	深鉢	－	22.4	－	H～I－25	2	耳様装飾・把手様装飾
39－5・41－5	縄文	深鉢	－	16.0	－	4号住居址	2	把手様突出（貼付文）
39－6・43－3	縄文	ミニチュア土器	3.6	3.2	2.5	1号住居址	2	器面は磨いたように整形
39－7	縄文	注口土器	－	－	－	表採	2	縄文と貼付文
39－8・41－6	縄文	ミニチュア土器	5.8	7.4	3.3	表採	2	沈線と縄文による
39－10・41－4	縄文	深鉢	43.6	24.2	15.4	1号住居址	2	口縁は貼付文、体部は沈線文
39－11・41－2	縄文	深鉢	－	38.6	－	4号住居址	2	耳様装飾あり
40－1・42－2	縄文	深鉢	16.0	11.4	4.8	H－25	2	把手様装飾・渦巻文が縦位に走る
40－2・42－3	縄文	深鉢	14.1	8.5	5.9	E－11	2	隆帯と沈線で文様、頸部に無文帯
40－3・42－6	縄文	深鉢	15.7	12.0	6.5	H－26	2	隆帯と沈線で加飾、頸部に無文帯
40－4・43－2	縄文	深鉢	－	－	6.0	E－11	2	体部は沈線、口縁部は隆帯で加飾
40－5・41－7	縄文	深鉢	8.2	8.5	4.9	1号住居址	2	体部は沈線、口縁は隆帯で加飾頸部に無文帯
40－6・42－5	縄文	深鉢	11.2	15.8	6.6	1号住居址	2	口唇に沈線による渦巻文
40－7・43－5	縄文	深鉢	16.3	11.7	6.4	B－11	2	沈線による渦巻文
40－8・43－1	縄文	深鉢	20.8	18.4	6.8		2	沈線による渦巻文
40－9	縄文	深鉢	－	－	6.5	E－11	2	沈線による文様構成。
40－10・42－1	縄文	深鉢	－	16.4	－	B－9	2	口縁部に隆帯による渦巻文。
40－11	縄文	深鉢	－	－	6.0	H－27	2	沈線で文様構成、地文は縄文
40－12	縄文	深鉢	16.9	18.1	8.4	G－6	2	底部穿孔土器
40－13・43－4	縄文	有孔壺	－	－	6.0	H－11	2	有孔土器、器面研摩
44－1	縄文	深鉢	－	－	－	D－10	3	縦位の渦巻文（隆帯）
39－9・44－3	土師	長胴甕	31.0	23.4	10.0	H－20付近小川土手中	－	胴下半部に篦削り痕あり、底部の切り離し不明、内面の一部に刷毛目あり、底には渦状の隆起がみられる。

図版32—10は、口縁部文様帯から無文帯を経て、体部に磨消縄文が施文されており、沈線による文様区画が、わずかにうかがえる。基本的には〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕と同様の文様構成を示しているが、図版32—8・10等の渦巻文は、かなりかたい感じになってきている。しかし、文様構成をしている隆帯の断面はまだ丸く、いわゆる隆渦巻文といわれるものにはいたっていない。

〔Ⅳ〕図版32—12・14は、口縁部文様帯区画内に、縦位の文様区画があらわれてくるなど新傾向が観取されるが、まだ口縁部文様帯が横位に構成されているなど、大木8b式からの伝統がうかがわれる。

〔Ⅴ〕図版33—1～3は、いわゆる隆渦巻文を有する土器に属すると考えられる。渦巻文を形成する隆帯は、大木8b式にみられる渦巻文に比して立体的であり断面は角ばっている。しかし、口縁部文様体の構成は横位であり、体部文様帯との区別が明確であるなど、〔Ⅳ〕と大差ない時間的範囲の所産と考えられる。

以上、これら第3群第2類の土器は、大木9式の中でも古式に位置づけられる土器と考えられる。

＜第3類土器＞　口縁部文様帯と体部文様帯の区別がなくなる土器（図版33—4～14）

〔Ⅰ〕図版33—4・5・8～11は、体部文様帯の隆帯が、口縁部付近で渦巻文を形成している土器である。この段階の土器になると、いままでみられた口縁部文様帯と体部文様帯の明確なる分離はみられなくなる。そして、文様帯の構成が、横位から縦位へ変化してゆく傾向が観取される。図版33—4・8は、一部の文様区画内に撚糸によるとみられる側面圧痕文が観察される。図版33—4は縦位、図版33—8は横位に押されている。

〔Ⅱ〕図版33—6・7は、口縁部文様区画が縦位に構成されており、渦巻文を形成する隆帯は、〔Ⅰ〕に比して扁平である。図版33—6は、文様区画内に縄文が充塡されており、磨消技法を施している。

〔Ⅲ〕図版33—12・13は、口唇部付近で渦巻文を構成しており、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕にみられるような、隆帯による文様区画は観察できない。器面には、地文として縄文が施文されている。これらの土器の編年的位置は、意見のわかれる所であるが、体部文様帯と口縁部文様帯との明確な分離が予想されない点や、渦巻文を有する点、地文の縄文が、一部磨消技法を施されている点などから、第3類の範囲に加えた。

〔Ⅳ〕図版33—14は、楕円様の文様区画内に縄文が施されており、基本的には、第3群第1類〔Ⅲ〕と類似した様相を呈している。しかし、詳細に検討すると焼成・器厚等も異なり、他の類例等と比較してみた結果、大木9式でも後半に属するもののようである。すなわち、渦巻文がなくなり沈線区画で文様構成をし、区画内に縄文を充塡する段階の土器である（図版36—10・14）。これらの土器は、本遺跡においては、きわめて少量検出されている。

以上これら、第３群第３類に属する土器は、大木９式期の所産と思われる。

大木 8b 式土器の一部にみられた縄文の磨消技法は、大木９式の土器に至って著しい発展を示す。本遺跡の遺物からも、そのことがうかがえる。しかしながら、大木 8b 式期の土器と、大木９式期の土器の接点をどこにもとめるかは、意見のわかれるところであり、一般には、いわ隆渦巻文といわれる段階から、すなわち、渦巻文がかたい感じになり、口縁部文様帯が横位から縦位の方向へ変化するものを大木９式と理解しているようである。大木９式の土器については、現在細分が進んでいるが流動的であり、ここでは大きく大木９式土器としてとらえた。

第3表　土 器 分 類 表

〔第１群土器：縄文時代中期前葉〕
- 第１類土器：下小野式系の土器
- 第２類土器：阿玉台式系の土器
- 第３類土器：大木 7b 式系の土器
- 第４類土器：大木 7b 式～大木 8a 式系の土器

〔第２群土器：縄文時代中期中葉〕
- 第１類土器：大木 8a 式系の土器
- 第２類土器：大木 8b 式系の土器
- 〃　〔Ⅵ〕：加曾利Ｅ式系の土器／曾利Ⅲ式系の土器　大木8b式期の中に包括した。（図版35—21）

〔第３群土器：縄文時代中期後葉〕
- 第１類土器：大木９式系の土器（口縁部文様帯に楕円状の文様区画と有する。）
- 第２類土器：大木９式系の土器（渦巻文をもっており横位の口縁部文様帯がある。）
- 第３類土器：大木９式系の土器（口縁部文様帯と体部文様帯の区別がなくなる土器）

2　底 部 資 料

八景腰巻遺跡における縄文式土器底部の出土総数は、638個であった。このうち網代の痕跡あるものは137個で、全体の21.5％にあたる。他に木葉底３個（全体の0.47％）、無文底498個（全体の78.1％）を数えた。しかしながら網代痕のある底部の中には、小破片や磨滅が著しいものが多く、網代の種類を判読できるのはきん少であった。

本資料による網代の編み方は、現在までのところ図版37—ａ～ｆの６種類を認めた。しかし、この他にも幾種類かの編み方があるようであるし、また、一つの組型の表裏の使用により二通りの網代痕ができるので、これらを考慮に入れ厳密に細分すれば、10種類以上に分類できそうである。ここでは、網代痕が比較的鮮明な52個の網代底を対象に、現在までに判明した組型を掲載して、概略を述べる。

本遺跡において検出された網代に使用されている原体の幅は２～５㎜位のものが一番多く認められた。大方は、経緯の条は同じ幅のものを用いるが、中には幅の異なる場合も若干見受けられるようである。

本遺跡において最も多く見い出された網代の種類は、図版37—９～12・14等の資料にみられる種類

である。次に図版37—6・13・15等の種類が多く、図版37—2～5等の種類がこれに続く。図版37—a～fの網代編みの拡大模式図は、左端と上端が編み始めになっており、一定間隔で組んであるので編み方の法則が実際の網代と違うようにみえるが、基本的には同じである。なお模式図の基本的法則は表を参照されたい。（長尾　修）

第4表　網代編みの基本的組合せ

		越	潜	越	潜	越	潜
a	イ	2	2	2	2	2	2
1本組	ロ	2	2	2	2	2	2
b	イ	1	2	1	2	1	2
1本組	ロ	2	1	2	1	2	1
c	イ	1	1	1	1	1	1
1本組	ロ	1	1	1	1	1	1
d	イ	2 1	1 2	2 1	1 2	2 1	1 2
1本組	ロ	3	3	3	3	3	3
e	イ	2	3	2	3	2	3
イロ共 2本組	ロ	4	2	4	2	4	2
f	イ	3 2	2 3	3 2	2 3	3 2	2 3
1本組	ロ	2	1	1	1	2	1

注：イ…緯の条，ロ…経の条

第2節　石　　器

本遺跡出土の縄文時代中期中葉の石器群は、打製石斧4点（完形品1点、破片3点）、磨製石斧2点（完形品1点、破片1点）、石鏃19点（無茎15点、有茎3点）、石匙26点（完形品17点、破片9点）石錘8点（完形品6点、破片2点）、石槍1点、凹石17点、石皿2点（いずれも破片）、磨石17点、スクレイパー50点（完形品36点、破片13点）、石棒1点、石核2点、フレイク91点、不明石製品1点、三角状石製品1点の計241点である。いずれも縄文時代中期中葉より後葉にかけての所産と思われる。本遺跡出土の石器群は、層位的にとらえられなかったので分類基準を多くして考えてみた。

1　石　　斧（図版45・48—1～6）

本遺跡出土の石斧には磨製石斧と打製石斧とがある。磨製石斧には大形品（図版48—6）と小形品（図版48—5）がある。図版48—6は定角形磨製石斧である。両面に使用痕が認められる。図版48—5は小形品である。刃部及び側縁部を欠損している。打製石斧は計4点としたが、図版48—2はチョッピングトゥールとしてよいか、打製石斧としてよいか疑問があるものである。図版48—1～3はいずれも短冊形である。図版48—2・3ともに、くびれ部より破損し、両者ともに刃部の剝離は荒い。

2　石　　鏃（図版49—1～19）

有茎と無茎とに形態分類できる。有茎3点、無茎15点、不明1点である。長さが1.5cmから1.7cmまでのもの4個体、2.1cmから2.9cmまでのもの9個体、3.1cmから3.5cmまでのもの5個体、4.1cm以上は1個体である。図版49—2・4・9は他と比較して特に小さい。出土状況において特殊な出土はしていない。無茎には、えぐりの強いもの（図版49—3・4～10・12）と直線的なもの（図版49—1・2）とがある。

3　石　　匙（図版49—20～25・37～39）

全部で26点出土した。その中で完形品18点、破片8点（柄の部分の破損3点）、未加工品1点である。石匙のもつ属性を抽出するには種々の面からの分類的検討を必要とするが、ここでは形態と刃部の加工状態を中心に検討してみた。分類の結果、刃部の加工状態において両面加工が17個体、表面加工が9個体と両面加工が半数以上を占め、縦型が19個体、横型が7個体と縦型が多い。そして刃部の位置について、とくに特徴はみられないが、両面全域を加工するものが10個体、表面全域の加工が4個体と全体の約半分を占めていることが認められた。

4　石　　錘（図版49—34～36）

本遺跡出土の石錘は全部で8点出土した。完形品6点、破片2点である。図版49—34・35・36はいずれも完形品である。長さがいずれも4cm以上を示し、断面は円形を呈している。出土状況において特殊なものはない。

5　石　　槍

1点出土している。長さ8.4cmを示し、先端が錐状を呈している。基部は、丸みをもった短いもので、長さの割合に対して短い基部をもっている。剝離は緻密であり、両面加工で刃部の形状は直刃である。石匙の製作技法に近似している。

6　凹　　石（図版50—2～6）

本遺跡出土の凹石は17点で、形態は円形・楕円形の2種類である。凹みが両面にあるもの（図版50—2～5）、小孔が片面にあるもの（図版50—6）の2種類がある。いずれも中心に小孔が集中しており、その小孔の数は1個から4個まであり、不定である。本遺跡においては両面に孔があるものが

多く、図版51—6は表面を円形に深くえぐり、裏面も四角に区画して多少えぐり、中に2個の小孔を穿っている。

他に蜂窩石がある。平石に径1cm前後の小孔を多数穿っている。いずれも縄文時代中期中葉より末葉にかけてのものと思われる。

7　石　　皿（図版45・51—1・2）

石皿は2点出土した。いずれも破片である。安山岩質の石質で、いずれも縁があり、内面は摩耗した痕がある。図版51—1は中心に脚があり、全体を類推すると平面が楕円形となり、脚が2個ある石皿になると思われる。図版51—2は縁があり平面形は楕円形になると思われる。両側縁の底部が少し突起しており脚を構成している。縄文時代中期後葉のものと思われる。

8　磨　　石（図版47・51—3・4・5）

本遺跡出土の磨石は17点である。形状は円形（図版51—4）と楕円形（図版51—3・5）とがある。断面が扁平なものが多い。側縁の全域を研摩したものと、側縁の半分を研摩したもの、その他研摩したかどうか不明なものがあり、形態的には凹石に類似している。図版51—5の表面には不明確な付着物がある。

9　スクレイパー（図版49—26～33）

スクレイパーは、50個体検出した。そのうち完形品36点、破片14点である。形態的には、刃部の加工状態が表面加工20点、裏面加工7点、両面加工22点と、表面加工と両面加工とで大半を占めている。また刃部の形状は直刃32点、内湾17点、外反1点と刃部の形状が直刃を示すものが多い。素材には剝片を用いたのが42点、表面に自然面を残したものが8点と、剝片を素材に用いた縦長の形状を示す石器製作技法をなしたと思われる。また刃部の位置について、普遍的は見いだせない。特筆すれば表面の両側縁加工8点と両面全域加工5点とが、他の刃部の位置の統計値に比べて多いことが認められる。

10　石　　核

本遺跡からは2点出土したが、いずれも遺構と結びつかない。形態は両方とも小形であり、形状は球状を呈している。

11　フレイク（図版52・53）

本遺跡からは、91点のフレイクが出土した。フレイクの石器としての機能性を論じることは困難であるが、フレイクの内包的属性と状況的属性を考えれば、特性を抽出することが可能である。分類基準は石質・大きさ（長さ・幅・厚さ）・打角・打面・加撃点や最大幅の位置、最大厚の位置、使用痕の有無、形状においた。その結果、特性として形状が縦型を示し、加撃面に対して中心方向からの加撃点の優位性、そして最大幅、最大厚の位置を石器の基部に中心をおいて求めていたことが導きださ

れる。その他、使用痕のあるものが2個体にすぎないこと、そしてフレイクの表面に自然面を残したものが22個体と、技法の上では必要不可欠なことではなかったかと考えられる。以上のことが八景腰巻遺跡において認められたフレイクの技法であると考えられる。

またフレイクの状況的属性を考えてみると、ある一定の場所に集積されている事例がいくつか知られている。これはフレイクのもつ属性の一つであると考えられる。本遺跡において、フレイク32個体がC—32グリッド内の小竪穴遺構より集積して出土している。これらのフレイクの中には、剝離面が結合するものがある。一般にフレイクは、いわゆる剝片として放置されることが多いが、種々な属性を内包しており、とくに使用痕の存在など、今後検討すべき点が多い。

12　石　　棒

石棒と推定されるものが1点出土している。形状は先端が丸みのある棒状を呈している。現状の長さ40㎝であり、遺構と特別に結びつくものではなかった。明確に石棒と断定することはできない。

13　不明石製品（図版51—6）

本遺跡出土の石製品は小型で、片面研摩して凹状にし、もう一面を凹石に利用している。石製品は径10㎝の円形を呈し、安山岩質の石質である。時期は縄文時代中期のものであろう。

本宮町上原遺跡出土の臼状石製品に近似しているが、上原遺跡出土の臼状石製品は形状が大きく、臼のように両面から研摩され、孔が貫通している。

14　三角壕形石製品（図版46・50—1）

本遺跡出土の三角壕形石製品は、その名称自体不正確であるが、郡山市山王館遺跡において同様な形態の土製品が発見されている。本遺跡出土の三角壕形石製品は長さ9㎝、幅6㎝、高さ3.5㎝の三角柱状を呈し、三面が研摩され平面的になっている。自然石を研摩したものと思われる。

以上、八景腰巻遺跡の石器群を説明してきた。東北地方南部縄文時代中期後葉の石器群と本遺跡出土の石器群は同様な一般的傾向を示している。大木9式期以後、複式炉をもつ竪穴住居跡が検出され、その前段階の生産体系を検討するうえで本遺跡の石器群のもつ意味は重要である。（八巻一夫）

第3節　その他の遺物

1　土　　偶

完形品は1点もないが、扁平な板状土偶を中心として、12点検出された。文様構成は福島市月崎遺跡や矢細工遺跡などの土偶とよく似ている。

〔I〕（図版57、58、59—1）　半欠品で上半分が残る。頭部や脚部は不明だが、張り出した肩部

は手をも表現したものであろう。板状土偶では手足を集約化したものが通例である。肩部から腋下へかけて斜めに小さな貫通孔がある。他にも例があるが、紐を通してかけておいたものであろうか。

文様は正面・背面ともに単位文様そのものは基本的には同一である。大木８ｂ式土器の胴部によくみられる沈線による釣鉤文に似ている。すなわち平行沈線に続く渦巻文、その先に続く三角文の組み合せは、大木８ａ式土器の口縁部にみられる蛇体文が変化したものであろう。肩部上面と側面にも、２本の平行沈線文が入っている。焼成は良い方ではなく、小砂粒を多数含んでいる。

〔Ⅱ〕（図版57、58、59―２）　右上半部のみが残る半欠品である。しかし乳房の表現があるために、正面・背面や全体の大きさが推定できる。中央に近い上部の同心円のある部分はやや突起しているが、乳房の位置から考えて頭部とは異なると思われる。単位文様は59―１と同一の釣鉤文がみられるが、平行沈線が正面・背面ともに多用されている。側面にも２本の沈線が入る。

〔Ⅲ〕（図版57・58・59―３）　割合大型の板状土偶片で、左上半部が残る。正中線の部分は隆帯となり、乳房の周りに文様が展開する。断面は他の土偶がほとんど平板なのに、本例ではややそりかえっている点に特徴がある。正面乳房下にみられる単位文様は、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕と同じくしながら、かなりくずれた感じとなっている。背面の莉のある渦巻文は大木８ｂ式土器にしばしばみえる文様である。

〔Ⅳ〕（図版57、58、59―４）　本遺跡の土偶中で一番よく残っている。やや小型の板状土偶で、二つの乳房と、わずかに隆起した正中線の表現が、上半部にはあるのみで、他に文様はない。文様は下半身に集中してみられる。左右対称の単位文様は、両側面にまでおよんでいるが、側面では左右は異なった文様となっている。この下半身は皿状臀部となって太くなっている。背面臀部の周りの１条の沈線文は、その形態とともに山梨・長野方面の土偶に類例が多い。

〔Ⅴ〕（図版59―５）〔Ⅵ〕の土偶とその形態や製作技法は似ている。胴部片と思われ、体側に一定のカーブを有する。文様は〔Ⅰ〕の基本に類似するものがある。もう一面の方には残存部にみる限り文様は全くみられない。

〔Ⅵ〕（図版59―６）　現存するのは柱状となっている部分で、カーブを有する体側の反対側は剝落した感じである。砂粒混入の粘土の芯に、もう一度粘土を巻いて整形したようになっており、正面では、渦巻文と三角文を有し、側面には２本の沈線が入る文様等からみて、土偶の胴部破片と思われる。この点で〔Ⅴ〕に酷似する。ただ〔Ⅴ〕とともに厚手で、板状土偶とは思われず、製作法も胴部を左右別々につくってあわせたのは解せない。

〔Ⅶ〕（図版57、58、59―７）　下半身の半欠品で、焼成はもろく小砂利を多量に含む。〔Ⅳ〕に似て臀部は大きく皿状を呈する。文様もこのような形に通有のものである。すなわち腰部の正中線の位置に太い沈線があり、その下に左右対称に半円形の沈線がそれぞれ二つずつ描かれている。背

面文様は簡略化されくずれている。左右両側にも2本の沈線がある。脚の位置2か所に剝落痕があり、小さな盲孔が右に2個、左に1個ある。おそらく脚と体部を別々に作り小枝をはさんで、製作時に作ったのであろう。

〔Ⅷ〕（図版59—8）　左肩部の小破片で、肩から腋下へ斜めに貫通孔がある点は〔Ⅰ〕と同類である。全体に黒褐色で砂をほとんどふくまない。横に平行沈線が入るが、小破片のため単位文様は不明である。

〔Ⅸ〕（図版59—9）　土偶の足部であるが、板状土偶につくものではなかろう。足底部はやや肥厚している。茶褐色を呈し砂粒を混入する。

〔Ⅹ〕（図版59—10）〔Ⅸ〕と同じような土偶の足部破片である。底部はやや丸味がある点も〔Ⅸ〕に似る。足首部に1条の沈線がまわる。足指部は折損している。

〔Ⅺ〕（図版57、58、59—11）　板状土偶の一つで、下半部残次である。正面中央部にある沢山の小さな盲孔は、臍か女性陰部のいずれかを表したものであろう。そこから「ハ」の字状に1本ずつ沈線が走る。また、左右には縦に区切った中を細い沈線が5～6本横に入れてある。背面外周に沿って1本の沈線が走り、その形態とあわせてやはり皿状臀部を示していると思われる。両側には2本の沈線が走るのも通有である。正面は黄褐色を呈するが、背面は黒くなっている。

〔Ⅻ〕（図版57、58、59—12）　唯一の頭部資料である。顔は三角形で、目は沈線で表してある。目の裏面に矢印の方向に溝のようなものがあるが、あるいは原形は貫通孔であったかも知れない。これは左右2か所にみられる。図ではたてて書いたが、胴部とついた時は、顔面は斜め上を向いていたと思われる。

2　装　身　具（図版55、56、59—13～19）

装身具と思われるものは、7点出土している。〔Ⅰ〕は石製品であるが、他はすべて土製品である。

〔Ⅰ〕図版59—13は、J—24グリッドより出土したシルト質凝灰岩製のペンダントである。長径5.1cm、短径3.6cm、厚さ1.0cmの楕円形をしており一部欠損している。左右両側から穿孔しているが、未貫通である。おそらく穿孔途中で破損したので、放棄したものであろう。表面両側に整形のための細い条痕が短径の方向についている。

〔Ⅱ〕図版59—14は、滑車形耳飾で直径2.4cm、高さ1.7cmの大きさで、赤褐色を呈している。1号住居址外溝のピットより出土している。

〔Ⅲ〕図版59—15は、臼形耳飾で直径2.4cm、高さ1.8cmの大きさである。灰黒色を呈し、H—27グリッドより出土した。

〔Ⅳ〕図版59—16は、いわゆる耳飾とは形態が異なるが、ここであつかった。一端はラッパ状に開き、径3.3cmをはかる。他の一端は、1.9cmである。高さは3.7cmである。赤褐色の精製された堅緻

な土質で朱塗りである。これはE—10グリッドより出土した。

〔Ⅴ〕図版59—17はE—11グリッドから出土したものである。径約4.7cm、高さ4.2cmの縦長で中心孔があり、円筒状の一端がラッパ状に開く。このつば状の周縁は欠けていて全形は不明である。砂混入の焼成不良な粗製品で、赤褐色を呈し、縦に篦による条痕がわずかにみられる。

〔Ⅵ〕図版59—18は、直径2.8cm、高さ3.0cmで、〔Ⅳ〕と器形は酷似している。砂混入の焼成不良な粗製品で、赤褐色を呈している。D—32グリッドより出土している。

〔Ⅶ〕図版59—19は、半欠品であって全形不明である。皿状部が残っている。

これらの出土遺物は、大木 8a～ 8b式期の土器の出土地点にかぎられており、いずれも縄文中期中葉に属するものであろう。

3　その他の遺物

鉄鏃の柄部と思われるもの1点出土しているが、錆化がすすんでいる。ほかに鉄片や針金が検出されたが時期不明である。

錆化した「祥符通宝」1枚も検出されたが、これに伴う遺構はない。

第5章　考　　察

本遺跡は、後世の河川氾濫により、攪乱され埋没したものと思われる。こぶし大から人頭大位の河原石が遺構の上に、あるいは遺物の間に混じって検出された。水摩を受けて土器片の文様もはっきりしないのがある。しかし、遺構として縄文時代住居址やピットがあり、土師器片なども出土しており、何回かにわたり、この地に集落が営まれていたことがわかる。

中心をなす遺構の時期は縄文時代中期中葉で、土器編年では大木7a式から大木9a式までおよぶ。ただこれらの土器群が層順として編年的にきちんと分離できる状況の地点はなかった。遺物も遺構の中とは限らず、かなり原位置から移動してきたと思われる状態のものが少なくなかった。

縄文時代のいくつかの炉址が検出されたにもかかわらず住居址プランの全体が確認されたものは一軒にすぎず、他は河川の氾濫によって検出不可能の状態であった。ちなみに福島市内で完全にプランの確認された縄文時代の住居址としては初めての資料である。

遺物には多量の縄文中期土器片があり市内でまだ明らかにされたことの少ない該期の土器資料として貴重である。また土偶についても、その形態ならびに文様等、当地方の同時期の月崎遺跡の土偶との強い類似性など、興味を引くものがある。　　（渡辺一雄）

第4編　八景腰巻遺跡

第3次、南地区

遺跡番号	7—35
所在地	福島市飯坂町大字東湯野字腰巻
時代・種類	縄文時代、集落址
調査期間	昭和47年11月20日～12月19日
担当者	東北学院大学教授　加藤　孝
調査員	東北学院大学学生　高橋勇治　阿部正光　佐藤正人　橋本博幸
協力機関	福島市教育委員会
調査参加者	東北学院大学卒業生　菊地照夫　野崎準　小水達夫 東北学院大学学生　高倉敏明　三品　隆　清水　毅　門間俊彦　武山純一　佐藤　忠　渡部幸雄　阿部俊則　荒田昌典　佐藤房枝　田中礼子　笹森洋子　斎藤真澄　高橋和子　滝口よう子　門間巳恵子　渋谷　享　西原克久　菅原　孝　吉木　敏　門馬敦子　我妻智恵子　原　志津早坂範子　山形県米沢市　泰昭　繁

目　　次

第1章　遺跡と環境……63

第2章　調査経過……63

第3章　南地区の基本層序……65

第4章　遺　　構……65
　第1節　土　　壙……65
　第2節　礎石その他……68

第5章　遺　　物……69
　第1節　土　　器……69
　　1　口縁部資料……69
　　2　底部資料……72
　第2節　土製品……73
　第3節　石器・石製品……74
　　1　石　　器……74
　　2　石製品……76

第6章　総　　括……77

第1章　遺跡と環境

当遺跡は、福島盆地中央部、飯坂町東湯野の摺上川が形成した河岸段丘の下低段丘面左岸に位置する。この下低段丘面は八景段丘・長岡段丘と呼ばれる。摺上川左岸は五つの段丘が階段状に顕著に発達し、その東端部は阿武隈川の浸食を受けている。

当遺跡は長岡段丘中央部に位置し、高度74m、現河床からの比高は約6mである。現在この段丘面には、前野・四箇・板谷内・志和田等の集落が存在し、伊達長岡付近までの広い沖積段丘を形成している。遺跡周辺は大正から昭和初期にかけて摺上川からの引水工事が行われ、引水不可能な一部微高地に果樹園を残して多くの段丘面は水田化されている。　（渡部幸雄）

第2章　調査経過

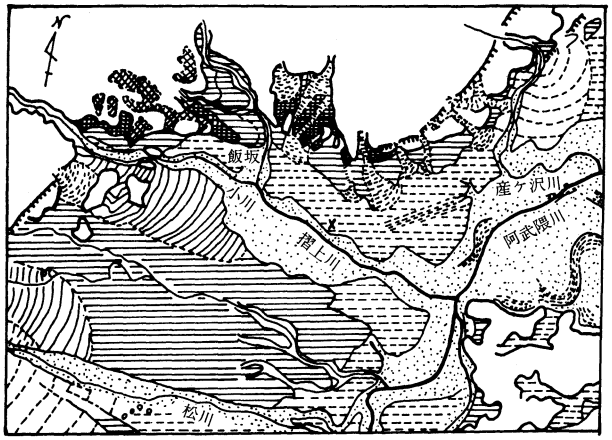
調査はグリッド方式を採用し、東北縦貫自動車道中心杭№530と№531＋80を結ぶ線を基準として3m四方のグリッドを設定した。グリッドの名称は基準線上にアラビア数字、その直交線上にはアルファベットを用いた。調査区域は縄文式土器破片が散布する地区と、土師器・須恵器破片がまばらに散布する地区の2か所である。前者を南地区、後者を北地区と呼称した（図版1）。

南地区の調査は、果樹の切り株が多く作業は難行した。また精査の段階では遺構の認定がむずかしく、かなりの時間と労力を費した。平面図作成には平板測量を用いた。

北地区の調査は表土から基盤までの深さが浅いことから作業は順調に進んだ。しかし精査の段階では、両地区の作業を並行して行ったため、調査人員の不足で作業は難行した。平面図作成には遣り方測量を用いた。　（橋本博幸）

（注　北区の調査内容は、第31編として収録した。）

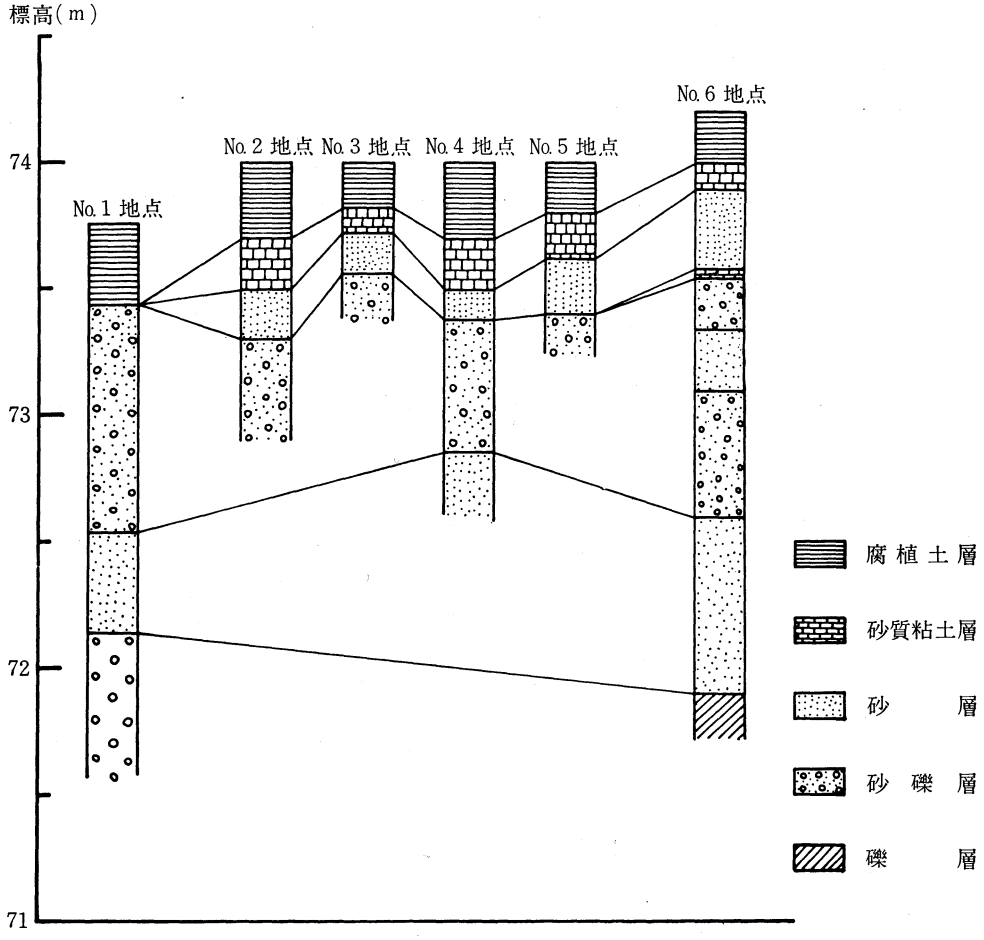
第1図　地形分類ならびに柱状断面図



地形分類図

高位河成堆積物
高位面
中位面
低位面
旧沖積扇状地
新沖積扇状地
角礫質の沖積錐
河川と氾濫原
旧河道
断層崖
× 遺跡

（藤原健蔵 原図）



第3章　南地区の基本層序

南地区における基本層序は、上から暗褐色土層（第1層）、黒褐色土層（第2層）、黄褐色土層（第3層）となる。

第1層はシルト質砂よりなる表土で、遺物の出土量は僅少である。第2層はシルトよりなる遺物包含層である。色調は上部では黒褐色を呈するが、下部になるにつれて漸移的に第3層に近くなる。この層より出土した遺物はすべて縄文時代のものに限られる。第3層は本遺跡の基盤に相当するものである。なお、土質は地点によって異なる。グリッド名で述べると09以北の土質は砂であるが、それ以南は漸移的に砂礫となる。（阿部正光）

第4章　遺　　構

南地区で発見された遺構は、土壙12基、礫石及び根石群、配石遺構1基である。なお、南地区の範囲外から土壙1基、石組炉跡1基が発見された。それも合せて報告する（図版2・3）。

第1節　土　　壙

1号土壙（図版4、6）

J—012 グリッドにおいて第2層上面より発見された。平面形は長軸1.93m、短軸1.46mの楕円形を呈する。側壁は第2層及び第3層からなり、急な傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は多量の礫を含む黒色の砂質シルトで、堅く粘質性に欠ける。埋土より縄文式土器の小破片150点、凹石3点、剝片6点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。（縄文式土器は図版25—1～5、凹石は29—34、31—22参照）

2号土壙（図版4、6）

K—012 グリッドにおいて第2層上面より発見された。平面形は長軸2.44m、短軸1.22mの楕円形を呈する。側壁は第2層及び第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は2段になっており、いずれも平坦である。埋土は多量の礫を含む黒色の砂質シルトで、堅く粘質性に欠ける。埋土よ

り縄文式土器の小破片２点、敲石１点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。

３号土壙（図版４、６）

N—010 グリッドにおいて第２層上面より発見された。平面形は長軸2.18ｍ、短軸1.34ｍの楕円形を呈する。側壁は第２層及び第３層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は多量の礫を含む黒色の砂質シルトで、堅く粘質性に欠ける。埋土より縄文式土器の小破片75点、剝片１点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。(縄文式土器は図版25—６～10参照)

４号土壙（図版５、11）

M—７グリッドからN—７グリッドにかけて第３層上面より発見された。平面形は長軸2.16ｍ、短軸1.06ｍの楕円形を呈する。側壁は第３層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は湾曲している。埋土は少量の礫を含む黒色のシルトで、軟らかく粘質性に富む。なお、埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。埋土より縄文式土器の小破片85点、敲石１点、剝片１点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。（縄文式土器は図版25—11参照）

５号土壙（図版７、８、９、10）

P—４グリッドにおいて第２層上面より発見された。平面形は長軸2.10ｍ、短軸1.88ｍで、ほぼ円形を呈する。側壁は第２層及び第３層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は２層に区別される。上層は少量の礫を含む黒色のシルトで、軟らかく粘質性に富む。下層は暗褐色の砂質シルトで、軟らかく粘質性に欠ける。上層からは多量の縄文式土器と土偶１点、尖頭型石器１点、剝片10点が出土した。出土状況は面をなさずレベルがまちまちであったことから、遺物の廃棄は何回かにわたって行われたものと考えられる。

なお当土壙より出土した縄文式土器に完形品は１点もなく。すべて遺物整理の際復元したものである。下層からは遺物は出土しなかった。（縄文式土器は図版20—３～７、21—１～４、22—１、25—12～19、17—２～５、18—１～３、土偶は図版27、28—６、尖頭型石器は図版28—13、30—６参照）

６号土壙（図版11）

N—06グリッドにおいて第２層上面より発見された。平面形は長軸2.60ｍ、短軸1.44ｍの楕円形を呈する。側壁は第２層及び第３層からなり、急な傾斜で底部に至る。底部は３段になっており、中央の底部は湾曲し、両端の底部は平坦である。埋土は黒色のシルトで、軟らかく粘質性に富む。なお、埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。埋土より縄文式土器の小破片６点、石錐１点、剝片１点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。（石錐は図版28—14、30—11参照）

７号土壙（図版11）

K—012グリッドからK—011グリッドにかけて第２層上面より発見された。平面形は長軸1.20ｍ、短軸94cmの楕円形を呈する。側壁は第２層及び第３層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は

平坦である。埋土は多量の礫を含む黒色の砂質シルトで堅く、粘質性に欠ける。埋土より縄文式土器の小破片2点が出土した。出土状況は面として並ばず不規則であった。

8号土壙（図版11）

J－1グリッドにおいて第3層上面より発見された。平面形は長軸1.14m、短軸97cmの楕円形を呈する。側壁は第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は少量の礫を含む黒褐色のシルト質砂で軟らかく、粘質性に欠ける。埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。

9号土壙（図版12）

I－02グリッドにおいて第3層上面より発見された。平面形は長軸1.61m、短軸84cmの楕円形を呈する。側壁は第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は少量の礫を含む暗褐色の砂質シルトで、軟らかく粘質性に欠ける。なお、埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。

10号土壙（図版12、13）

N－1グリッドにおいて第3層上面より発見された。平面形は長軸1.18m、短軸82cmの楕円形を呈する。側壁は第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は暗褐色の砂質シルトで、軟らかく粘質性に富む。なお、埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。

11号土壙（図版12）

I－06グリッドからJ－06グリッドにかけて第3層上面より発見された。平面形は長軸1.54m、短軸1.03mの楕円形を呈する。側壁は第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は暗褐色の砂質シルトで、軟らかく粘質性に欠ける。なお、埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。

12号土壙（図版12）

N－02グリッドにおいて第3層上面より発見された。土壙の一部が配石遺構によって破壊されている。平面形は長軸1.89m、短軸1.18mの楕円形を呈する。。側壁は第3層からなり、急な傾斜で底部に至る。底部は平坦である。埋土は少量の礫を含む黒色のシルトで軟らかく、粘質性に欠ける。なお埋土は黄褐色の砂をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。

13号土壙（図版15、16）

ここに報告する土壙は、本遺跡第4次発掘調査区域において発見されたものである。第4次発掘調査の時間的理由により、我々が調査を担当することになったものである。本土壙は第4次発掘調査時の竪穴住居址の北側、B－33グリッドにおいて基盤と考えられる黄褐色土上面から発見された。平面

形は長軸1.08m、短軸1.01mの円形を呈する。側壁は黄褐色土層からなり、ほぼ垂直に底部に至る。底部は平坦である。埋土は黒色の炭化物を斑点状に含む暗褐色のシルト質砂で、軟らかく粘質性に欠ける。埋土より多量の縄文式土器破片と石皿1点、凹石4点、剝片3点が出土した。なお、縄文式土器破片の大部分は石皿の上から横位状態で発見された。(縄文式土器は図版22—2～4、26—1～6、石皿は図版29—37、33—39参照)

第2節 礎石その他

礎石・根石群(図版14、16)

H—010グリッドからL—013グリッドにかけて礎石6基、根石3基、合計9基が発見された。しかし、今回の調査では時間的理由より、全容を明らかにするに至らなかった。礎石には凝灰岩、根石には安山岩が用いられている。各礎石には掘り方が観察された。各礎石及び根石のレベルはほぼ一致する。本遺構はほぼ東西に走り、その間隔は8尺、10尺、10尺、10尺、8尺である。なお、残りの3基の礎石は上記の礎石及び根石とは並ばないが、その間隔には規則性が見られるので、すべて同一建築物に関連する遺構と観察される。間尺の数値は民家ではなく、北地区の遺構と関係ある寺院跡に求めるのが自然であろう。

配石遺構(図版2)

J—4グリッドからO—2グリッドにかけてほぼ東西方向に走る。幅は平均60cmで第1層の下部から掘り込まれている。側壁は第1層下部、第2層、第3層からなり、緩やかな傾斜で底部に至る。底部は平坦で、大量の安山岩質の大礫が敷き詰められており、その上には灰白色のシルトが薄く堆積していた。このことから本遺構は水利施設の一部であると考えられる。なお、安山岩に混じって縄文式土器の破片、石器が出土した。しかし、現代のガラス片も混入していたことから、本遺構は近代の施設であると考えられる。

1号石組炉(図版16)

この遺構は、本遺跡第4次発掘調査区域において、東北縦貫自動車道建設工事のため一部破壊された状態で発見されたものである。遺構が発見された地点の層位は、上から表土(暗褐色のシルト質砂)、遺物包含層(黒褐色のシルト。なお、この層の色調は上部においては黒褐色を呈するが、下部になるにつれて漸移的に基盤の色調に近くなる。)、基盤(黄褐色の砂)となる。本遺構はH—15グリッドにおいて黄褐色土上面から発見された。石組炉に用いられた石は安山岩であり、破壊のため合計8個残存していたに過ぎない。本来は長方形石組炉、または「コ」字状石組炉であったと考えられ

る。石組炉内の底面には土器・石等の施設はなく、石組炉の掘り方も認められなかった。遺物は遺構の上に堆積する黒褐色土中より多量の縄文式土器破片、磨石2点、剝片3点が出土した。（図版26—7～13参照）　（高橋勇治・阿部正光）

第5章　遺　　物

第1節　土　　器

本調査で出土した土器破片の総数は4064点を数える。その大部分は第2層から出土した縄文式土器である。本節では口縁部資料（第2層出土資料）と底部資料（第1層、第2層、土壙出土資料）を用いて、本遺跡第3次発掘調査南地区出土土器の概略を述べる。

1　口縁部資料

器形、文様、その他の特徴から2群に大別し得る。（口縁部資料の個体数散布状況は第2図を参照）

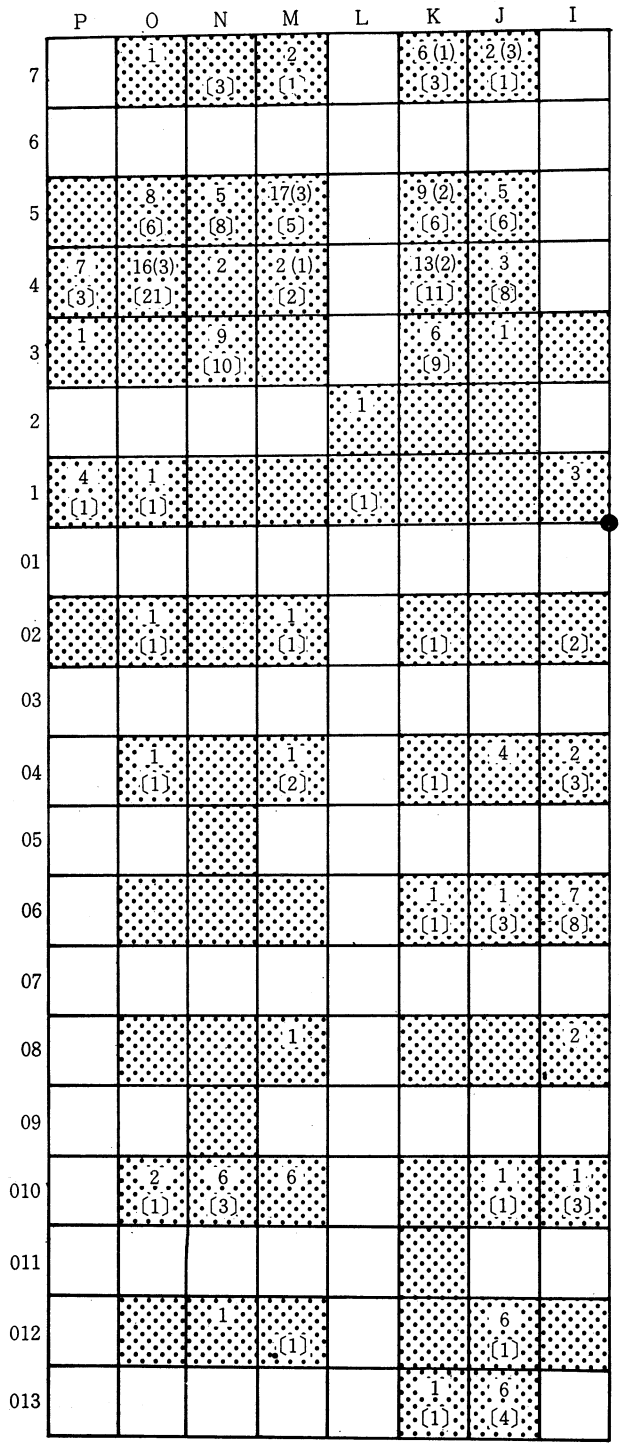
第1群土器

器形は各種深鉢形を主体とするが、浅鉢形土器の占める割合も比較的大きい。文様は器形によって異なるが、口縁部においては貼付文・沈線文・撚糸圧痕文・斜行縄文が多用される。胴部においては縦方向に綾絡文が胴部を区画し、地文として斜行縄文が施されるもの、斜行縄文のみが施されるもの、無文のもの、以上三通りが一般的である。土器の厚さは0.7*cm*～1*cm*のものが多く、胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は褐色または暗褐色を呈するものが多く、焼成は一般的に悪い。土器の保存は概して悪く、大部分は風化摩滅している。本群の個体数は176点を数え、第2層出土口縁部資料の大部分を占める。そのうち器形が推定し得るものは113点、推定し得ないものは63点を数える。以下器形ごとに概略を述べる。

＜第1群第1類土器＞（図版17・19—1、23—1～9）

器形は、2対の突起をもって波状を呈する口縁部が内側に湾曲しながら外反するもので、胴部が円筒状の深鉢形土器である。口唇部内側には貼付による段を有するのが一般的である。口縁部の文様は突起を中心として展開され、貼付文・沈線文・撚糸圧痕文、斜行縄文が施される。個体数は27点。

第2図 グリッド別出土遺物個体数



上段の数字は第2層出土第1群土器の個体数。( )の数字は第2層出土第2群土器の個体数。

下段〔大カッコ内〕の数字は第2層出土石器及びフレイグ・石核出土数。

＜第1群第2類土器＞（図版23—10～16）

器形は口縁部が直線的に外反するもので、胴部が円筒状の深鉢形土器である。口唇部上に半円状の小さな突起を有するのが一般的であるが、その突起の数は不明である。器面は無文が一般的であり横方向に研摩されている。個体数は9点。

＜第1群第3類土器＞（図版19—2、23—17～24）

器形は貼付による複合口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器である。口縁部は平縁が一般的であるが、中には口唇部に刻み目が施されているものもある。本類は文様により3種に分けられる。本類の個体数は22点。

第1種（23—17・18）　口縁部及び胴部に、貼付文・沈線文を施した土器。

第2種（19—2、23—19～22）　口縁部には横方向に撚糸圧痕文を施し、胴部には綾絡文・斜行縄文を施した土器。

第3種（23—23・24）　口縁部、胴部共に無文の土器。

＜第1群第4類土器＞（図版17—2、19—3、23—25・26）

器形は口頸部がキャリパー状を呈し、胴部が円筒状の深鉢形土器である。個体数は3点。

＜第1群第5類土器＞（図版24—1～3）

器形は口縁部が「く」の字状に強く外反し、胴部が強く膨らむ深鉢形土器である。文様は口縁部が無文で、胴部には綾絡文・斜行縄文が施されるのが一般的である。個体数は7点。

＜第1群第6類土器＞（図版19—4、24—4）

器形はごく短い口縁部が外反するもので、胴部が膨らむ深鉢形土器である。本類は文様により2種に分けられる。本類の個体数は4点。

第1種（24—4）　器面に斜行縄文が施される土器。

第2種（19—4）　無文の土器。

＜第1群第7類土器＞（図版24—5～8）

器形は貼付による複合口縁部と胴部が直立する深鉢形土器である。本類は文様により2種に分けられる。本類の個体数は16点。

第1種（24—5・6）　器面に斜行縄文が施された土器。

第2種（24—7・8）　無文の土器。

＜第1群第8類土器＞（図版20—1・2、24—9～14）

浅鉢形土器と考えられるものを本類にまとめた。器形により4種に分けられる。本類の個体数は18点。

第1種（24—9）　胴部が強く外反し、口縁部が強く内反する土器。断面形は「＞」状を呈する。

第2種（20—1・2、24—10） 胴部が強く外反し、口縁部が緩やかに円弧を描いて内反する土器。

第3種（24—11） 直線的に外反する土器。

第4種（第24—12～14） 直線的に外反する土器で、口唇部内側に貼付による段を有するもの。

＜第1群第9類土器＞（図版17—3、19—5）

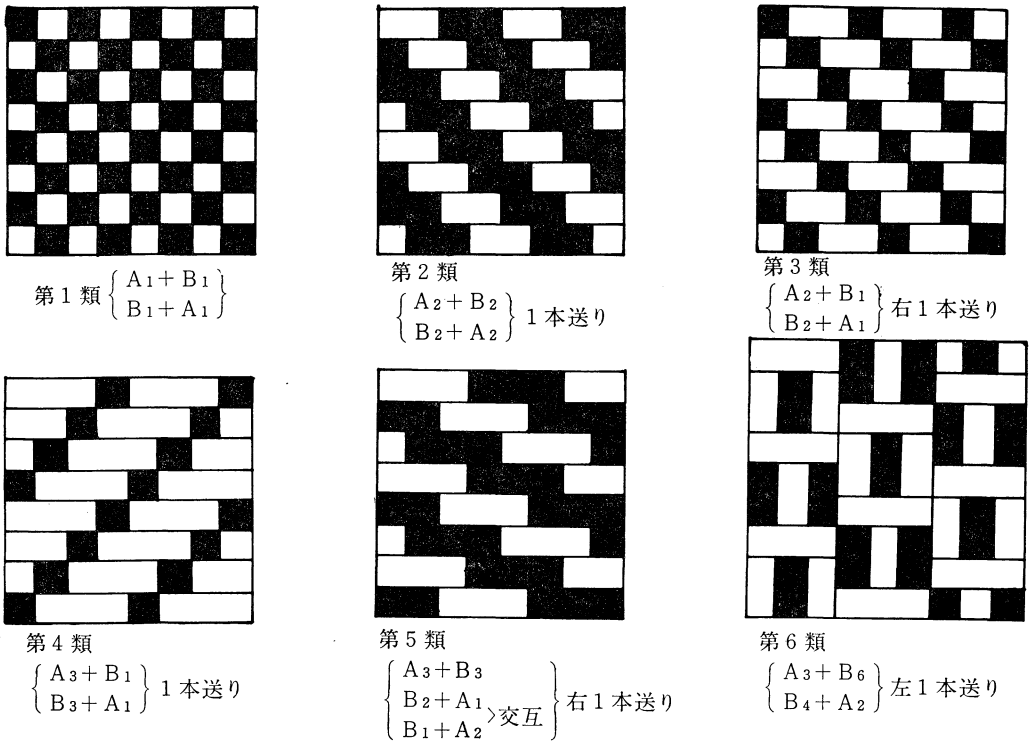
皿形土器。1点出土したにとどまる。

第2群土器（図版24—15～18）

器形は、口頸部がキャリパー状を呈する深鉢形土器を主体としている。口縁部の文様は貼付文と沈線文とを併用して渦巻文が施され、地文として斜行縄文が用いられるのが一般的である。土器の厚さは0.6～0.8cmのものが多く、胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は、褐色または灰褐色を呈するものが多く、焼成は一般的に良好である。土器の保存は概して悪い。出土状況は南地区の北東部、第2層上面から局地的に出土した。本群の個体数は極めて少なく、突起破片資料も含めて21個体出土したにとどまる。（阿部正光）

2 底部資料

ここで取り扱う縄文式土器底部破片資料は、大部分小破片で保存状態は悪い。個体数は破片資料の接合作業終了段階での数をもってした。実際の個体数はここで算出した個体数より少ないと考えられる。個体の総数は227点に達し、すべて平底である。底部内面において中央部が幾分高くなるものと平坦なものとがあり、厚さは0.7～1.3cmのものが多い。底部直径は小さなもので7.1cm、大きなもので23.6cmのものもあるが、ほぼ9cmから16cmの間に多く集中している。底部から胴部への立ち上がりは直立または外反のものが大部分である（内反するものは1点）。直立するものの中には、底部から胴部にそのまま直立するものと、一度内側に入り込んでから直立するものとがある。また外反するものにも急に外反するものと、緩やかに外反するものとがある。底面は網代のものと無文のものとに分けられ、前者は99点、後者は96点を数える。その他摩滅のため判別不可能なものが32点ある。網代底と判明した99点のうち、編み方が判別できたものは50点、判別できなかったものは49点である。網代の同一物は見られなかったが、編み方によって6類に分類することができる（第3図、図版24—19～28参照）。各類の個体数は第1類18点、第2類5点、第3類4点、第4類2点、第5類4点、第6類17点である。網代の編み方は密なものもわずかに見られるが、ほとんど0.3～1cmと間隔のある荒いものである。繊維の幅は、縦糸及び横糸とも0.2～0.4cmである。（佐藤房枝・田中礼子）



第3図　網代痕模式図

第2節　土　製　品

1　土　偶

＜土 偶 1＞　（図版27、28—1）

土偶1は女性土偶と見られ、N—4グリッド第1層から出土した。頭部・脚部及び左右の乳房が欠失している。胴部両側面には2本の平行沈線文が施されている。背面には縦に1本太い沈線文が施されている。胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

＜土 偶 2＞（図版27、28—2）

土偶2は女性土偶と観察され、I—02グリッド第2層から背面を上にして出土した。頭部、右腕半分及び胴部下半を欠失している。乳房の頂点から腕にかけて2本の沈線文と、乳房の下から腋下にかけて1本の沈線文が施されている。胴部の両側面には2本の平行沈線文が施されている。背面は

無文である。胎土には少量の砂粒が含まれている。色調は赤褐色を呈し、焼成は極めて良好である。

＜土 偶 3＞（図版27、28－3）

土偶の頭部でO－4グリッド第2層から左側頭部を上にして出土した。顔面は眉と鼻をY字状に粘土を貼り付け、眉・目・鼻孔・口を太い沈線文で表現している。後頭部にはΩ状に粘土を貼付けている。胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。表面は良くみがかれている。

＜土 偶 4＞（図版27、28－4）

土偶の右脚部でK－4グリッド第2層から出土した。表面には平行沈線文が施されている。胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

＜土 偶 5＞（図版27、28－6）

土偶5は、5号土壙埋土上層から縄文式土器破片と共に出土したものである。女性土偶と観察される。胴部正面には粘土の貼り付けによって乳房と腹部を表現したあと、沈線文を施している。胴部の両側面には沈線文が施されているが、背面は無文である。胎土には多量の砂粒が含まれている。色調は胴部正面が茶褐色、背面は暗褐色を呈する。焼成は良好である。（阿部正光）

2 三角形土製品

＜三角形土製品＞（図版27、28－5）

K－5グリッド第2層から出土したものである。本土製品の製作法は粘土紐を「∧」状に折り曲げ、それにもう1本の粘土紐を付け加えて「△」状にしたものであることが、粘土の接合状況から観察される。胎土には少量の砂粒が含まれている。色調は茶褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

第3節 石器・石製品

本調査で出土した打製石器は14点、磨製石器は3点、石製品は57点、剥片及び石核は210点を数える。そのうち第2層出土の石器及び石製品は22点、剥片及び石核は127点である。この散布状況は第2図を参照していただきたい。石質は打製品には頁岩、磨製品には安山岩が多く用いられている。以下、その概略を述べる。なお、説明文中の番号は図面の遺物番号を意味する。

1 石 器

石 斧（図版28－7～10、30－1～4）

石斧出土数は4点で、形態上それぞれ異なる。30－1は横断面が三味線胴型の定角石斧に近い磨製

石斧である。やや末広がりで各稜は鋭い。石質は硬く研摩の跡は不明である。刃部にはひびが入っていることから使用によるものと考えられる。30—2は定角式磨製石斧で、横断面は長方形を呈し、研摩の跡が顕著である。刃部は一部破損しており、これは使用によるものと考えられる。30—3は刃部のみを研摩した局部磨製石斧であり、自然面を多く残している。刃部には整形の際に生ずる敲打の跡がわずかに認められる。30—4は中央にくびれを有する分銅形の打製石斧である。打撃点を基部として、背面（凸面）には大きく、また正面（凹面）には小さく周囲に剝離を加えて調整している。刃部角度は鈍く、基部は使用による摩滅が著しい。

石　　鏃（図版28—12、30—5）

本調査における出土数は1点のみである。三角鏃で、調整が粗雑であることから未成品とも考えられる。両面剝離で刃部は鋭い。

石　　匙（図版28—9～11、30—7・8・10）

30—7・8は縦型石匙である。縦長の剝片の背面に剝離を加え、打瘤のすぐ下に両側から抉りを入れて基部を作り出している。使用痕は基部を除く全面に認められ、特に先端部が顕著である。30—8は中央で欠損しているが、これは使用によるものと考えられる。30—10は横型石匙である。縦長の剝片を横にして、背面に多くの剝離を加え、打瘤の下部に基部を作り出している。

石　　錐（図版28—14、30—11）

本調査における出土数は1点のみである。つまみを有する小型のもので、全体に両面剝離を加え刃部断面は菱形を呈する。刃部の破損は使用によるものと考えられる。

尖頭型石器（図版28—13、30—6）

これは本来石鏃の類に属するものかも知れない。全体に両面剝離を加え調整しているが、作りは粗雑である。本品は第5土壙埋土上層から出土したものである。

三脚石器（図版28—11、30—9）

薄く剝離し易い頁岩が用いられ、剝片に三方向より抉りを入れ、それを刃部としている。図の下方の刃部は破損している。刃部以外は自然面を多く残す。

掻　　器（図版28—18～22、30—12～16）

30—12～15は横断面が三角形を呈する縦長の剝片を用いている。打撃面を基部、背面を底面とし正面の周囲に片面剝離を施している。側辺には使用痕が認められる。30—16は縦長の剝片に両面剝離を施しているもので、側辺には使用痕が認められる。

剝　　片（図版29—39～46、32—31～34、33—35～38）

形態上、打撃点を頂点として〔1〕縦長（33—37・38）、〔2〕逆三角形（32—31・32）、〔3〕台形（33—35・36）、〔4〕不定形（32—33・34）の4種に分類できる。出土数は211点でそれぞれ52点、

10点、61点、55点である。その他石核11点、不明なもの22点が出土している。以上の中には未成品も多く見られ、その観察から一部の剝片については、〔1〕は石匙・掻器類に、〔2〕は石鏃・石錐類に、〔3〕〔4〕は各種石器に仕上げられるものと考えられる。

2 石製品

凹　　石（図版29—29～36、31—17～24）

凹石は形態より2種に分類できる。一つは楕円状安山岩の両面に凹みを有するもの（31—17～23）で、他の一つは球状安山岩の頂部に凹みを有するもの（31—24）である。前者は石の両面に各々2個の凹みを有するものが多く、1個または3個の凹みを有するものは極めて少ない。凹みが1個の時は石の中央に、2個の時は中心から対称の位置に存在する。凹みが3個の時は2個が中心から対称の位置に、もう1個は小さくて位置は不定である。これらの凹みの位置は両面はほぼ同じ位置にある。以上のように、凹みの位置にはある程度規則性が見られる。凹石の大きさは7×13㎝、重量は500g（片手でちょうど持てる程度）で、凹みの直径は1㎝、深さは0.3㎝前後が一般的である。凹石の周縁には多少破損が認められるのもあるが、破損が顕著なものは少ない。なお、31—22は1号土壙埋土より出土したものである。後者は重量感があり、凹みの位置が石の頂部にあり、また凹みが比較的大きいことより敲石としての機能が考えられる。

石　　皿（図版29—37・38、33—39・40）

33—39は13号埋土壙よりA面を上にして出土したものである。A面は石皿で、B面は多孔凹石である。全体的に火熱を受けて脆く、炭が付着している。一つの石が二つの用途に用いられている点が注目される。33—40は破損品であるが、両面とも良く研摩されている。全体形は楕円形を呈するものと考えられる。

磨　　石（図版29—23～27、32—25～29）

32—25は各面がきれいに面取りされている。32—27は1面、32—26・28は2面、32—29は3面が摩滅している。

砥　　石（図版29—28、32—30）

やや扁平な安山岩質のもので、両面が使用されている。中央部には使用による凹みが見られるが周辺部では自然面を有する。本品は約半分を欠損している。　　（高橋勇治）

第6章　総　　括

南地区出土土器の大部分を占める第1群土器は縄文時代中期前葉に、第2群土器は中期中葉に位置づけられると考えられる。また、南地区から出土した各種石器・石製品の大部分は第1群土器に伴うものである。

本調査で発見された13基の土壙は、出土遺物・層位等から2時期に区分される。1～12号土壙は第1群土器の時期、13号土壙は第2群土器の時期の遺構であると考えられる。1～4、6～12号土壙については、土壙の形態、埋土の状況等から墓壙と考えるのが自然であろう。また、5号及び13号土壙については、土壙の形態、埋土の状況、出土遺物等から上記の土壙と異なる性格のものであると考えられる。

（高橋勇治・阿部正光）

本編執筆にあたっては、発掘担当者 加藤孝の指導により分担執筆し、さらに校訂をえて構成した。

第5編　塩沢上原A遺跡

遺跡番号	13—36
所在地	二本松市大字塩沢字上原
時代・種類	縄文時代（中期）集落址
調査期間	昭和46年7月11～31日
担当者	目黒吉明
調査員	木本元治　一條孝夫
協力者	福島大学考古学研究会員
協力機関	二本松市教育委員会・塩沢公民館

目　　次

第1章　遺跡と環境……81
　第1節　位置と地形……81
　第2節　周辺の遺跡……81

第2章　調査経過……82
　第1節　調査までの経過……82
　第2節　調査経過……82

第3章　遺　　構……83
　第1節　住居址……83
　第2節　ピット……90
　　1　袋状ピット……90
　　2　円筒状ピット……93
　第3節　埋納土器……94

第4章　遺　　物……95
　第1節　土　　器……95
　　1　縄文時代中期前～中葉の土器群……95
　　2　縄文時代中期後葉の土器群……97
　　3　縄文時代前・後期の土器……99
　　4　土器編年……100
　第2節　石　　器……101
　第3節　土製品……103

第5章　考　　察……105
　第1節　複式炉……105
　第2節　住居址……110
　　1　住居址の総括……110
　　2　住居址の問題点……111
　　3　まとめ……113
　第3節　ピット……113
　　1　袋状ピット……114
　　2　円筒状ピット（A）……115

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

塩沢上原A遺跡は、東北本線二本松駅のほぼ北方、直線距離にして約3.5*km*にあり、県道二本松～塩沢線を塩沢温泉に向かい、上原部落を西に出た地点にある。

地形的には、東西に長い約5*ha*ほどの台地上に位置している。台地の平坦部の東半部には上原部落が占地しており、西半部は桑園と菜園となっている。遺物は、この西半部の畑地ほぼ全域、約2.5*ha*に少量ずつ散布している。（図版1～3）

この台地は、安達太良山の東山麓の末端近くに位置しており、南と東側とには湯川等によって形成された沖積地が東西に広がっており、西側は開析谷によって削られ、狭長な尾根を経て西側の山地と接している。標高は270～273*m*ほどあり、台地平坦部と湯川河床との比高は約16*m*となっている。台地の北西部には、幅約20*m*、長さ約50*m*ほどの張出し部があり、さらに北へ約50*m*ほどはなれて、上原B遺跡が所在する独立丘陵が存在している。上原B遺跡は、当遺跡とほぼ同時代の遺跡であり、複式炉を伴う住居址が発掘されており（第6編参照）、その関連が注目される。

なお、台地の西端の尾根を伝い、遺跡の西および北端を流れ、上原部落へと通じる用水堀が開さくされており、この用水堀の開さくに際して、多少の地形的変化が加えられたものと推定される。

第2節　周辺の遺跡

阿武隈川西岸の低地帯には、いくつかの遺跡密度の高い地域がみられる。その一つに安達郡大玉村を中心とする安達太良山麓の遺跡群をあげることができる。大玉村の遺跡群は、開けた平坦地にあり、弥生・古墳時代のものが多い。

これに対し、同じく安達太良山麓地帯でありながら二本松市内においては、山地あるいは丘陵等が発達しており、縄文時代の遺跡が多いことが指摘される。さらに縄文時代の遺跡を時期的に検討すると、当遺跡をはじめとして、上原B遺跡・田地ヶ岡遺跡・原瀬上原遺跡などの中期の遺跡が、いずれも独立丘陵等の平坦部に立地している。一方、小塚前遺跡・川原田遺跡などの後・晩期の遺跡は、小河川の氾濫原内の低地に立地する傾向を示し、集落の立地のうえで差を示している。（周辺の遺跡名

については、「第７編　田地ヶ岡遺跡」136ページを参照されたい。）

第７編の「周辺の遺跡一覧表」にみられるように、当地域の特色として、中期後半の複式炉をもつ集落の密度の高さと、中期後半から後期にかけての立地状況の変化とが、周辺遺跡の関連で注目される。

（目黒吉明　木本元治）

第２章　調　査　経　過

第１節　調査までの経過

当遺跡は、古くから知られていたが、断片的資料のみであった。

東北縦貫自動車道が台地の北西端にかかることになったため、昭和44年予備調査が行われた（調査員　渡辺一雄）。試掘の結果、複式炉１基が発見され（本調査の１号住居址）、本調査が企画された。

発掘担当者は、当時、県文書学事課県史編さん係勤務の目黒吉明に依頼し、社会教育課からは嘱託の木本元治と掘越主事が加わり、福島大学考古学研究会員の参加をえて調査体制を組織し、大学の夏休みを利用して調査することとした。当初、15日間で上原Ａ・上原Ｂ・上原Ｃ（土師）の３遺跡の調査を企画したが、発掘担当者の意向により上原Ａ遺跡のみの調査とした。

第２節　調　査　経　過

７月11日、発掘基地とした塩沢公民館に回り、10時半現地に到着する。発掘予定地の中心部には、野菜・桑樹があり着手困難であった。早速旧地主に耕作物の取上げを依頼するとともに、桑樹・雑草の除去を行う。一方、台地西端部の斜面の空畑９×12ｍに３×３ｍのグリッド設定を行う。午後、千鳥に掘り下げを開始。このＪ～Ｍ―23～25グリッドの地区は、12日まで調査したが地層が白色粘土・黒色土・黄色土などが、各グリッドごとに相反するような堆積を示し。遺構はなく遺物もほとんどみられず、遺跡をはずれていることが確認された。おそらく、用水路建設あるいは県道工事の際、盛土したものと推定された。12日から中心部にグリッドを設定し、午後から表土はぎに入る。自動車道路線敷内の台地平坦部は、県道から北へ約30ｍの地点で非常に狭くなっているため、当初は、この狭隘部の南側にのみ設定した。グリッドの単位は３×３ｍとし、道路幅をＡ～Ｈまで、これと直交する北

東部から西南部にかけての線は、1～15までの記号を付した。7月20日、既定のグリッド設定部をⅠ区とし、それ以北をⅡ区としてグリッドを設定し、調査を行った。（図版4）

調査の進行とともにⅡ区南半からⅠ区全域にかけて住居址が発見され、またⅠ区南端からは、袋状ピット群が発見されるなど、遺構の密度が高いため、10日間調査を延長した。25日間の調査により、縄文時代中期中葉1、中期後葉19の住居址と、袋状ピット7基、円筒状ピット4基とが確認された。また遺物も同期の土器・石器・土偶その他多くの出土をみた。（図版5）　（目黒吉明　木本元治）

第3節　遺　　構

第1節　住　居　址

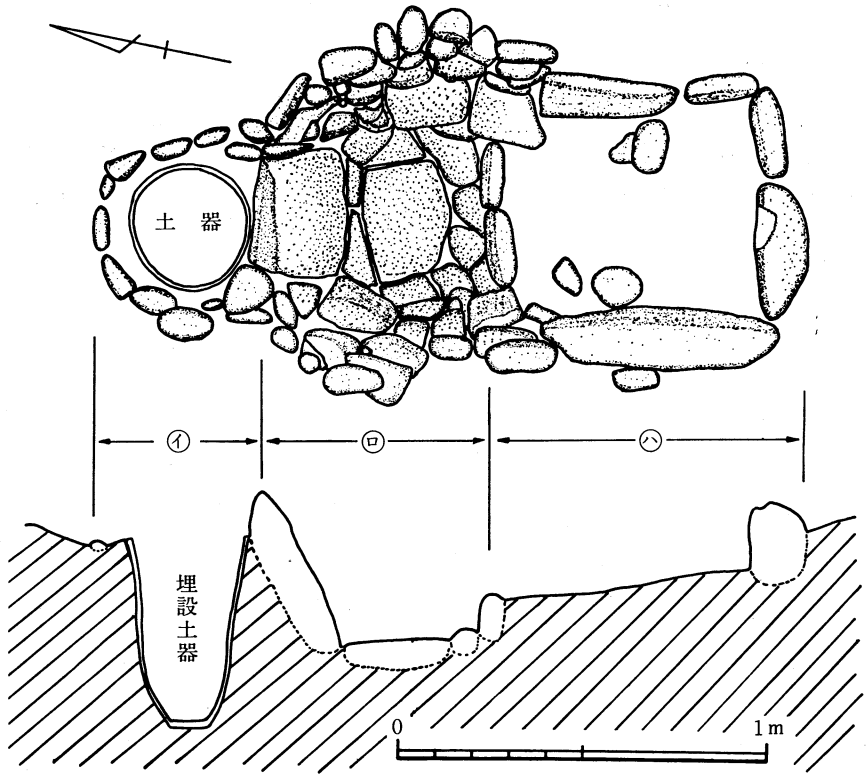
本調査によって発見された住居址は、Ⅰ区から16軒、Ⅱ区から4軒、計20軒を数え、さらに建直しなどを考慮すれば21軒以上の存在が推定されるが、確実な20軒について記述する。なお大部分の住居址は周壁を伴わないが、本来はローム層を掘り込んだ竪穴住居址であったものが、後世の諸工事等による上土の削除と耕作により炉・柱穴・周溝のみが残されたものと推定される。

また、20軒の住居址の中には、周壁はもちろん周構・柱穴などが不明で、複式炉のみが検出されたものもある。しかし、複式炉は、東北地方南部における縄文時代後葉の住居址内の炉として理解されているので、複式炉のみの遺構も1軒の住居址としてとりあげた。（Ⅱ区南端の住居址は、Ⅰ区住居址群に入れた。）

Ⅰ区1号住居址（図版9・31）

予備調査により発見されたものであり、Ⅰ区B－5グリッドを中心に、地表下約35cmから複式炉が発見された。本来は竪穴住居址と推定されるが、耕作等の攪乱により周壁が失われ、周溝・柱穴も発見されずプランは確認されなかった。炉は、土器埋設石囲部（以下㋑とよぶ）と石組部（以下㋺とよぶ）と配石開口部（以下㋩とよぶ）との3部分からなる複式炉である。長軸方向はNW－SEであり、長さ2.0m、幅1.16mである。埋設土器は1個であり、その周辺の土は厚く焼けていた。炉の南に8・9号のピットが発見されたが、住居址との関連は不明である。

出土遺物は、㋺部から石鏃2点、炉周辺から凹石が発見された。埋設土器は大木10式並行と考えられる。



第1図　複式炉形態区分図

Ⅰ区2号住居址（付図1）

Ⅰ区C－3グリッドにおいて、地表下約30*cm*に複式炉の残存が確認された。上土の削平や耕作により攪乱され周壁・周溝は検出されなかった。炉の長軸はNW－SEであり、㋑部からは土器の下半部が焼土とともに発見された。なお炉の南から直立埋設された深鉢型土器が発見された。口縁部は水平に切断されており、他の複式炉の埋設土器とも推測される。埋設土器は大木10式並行と考えられる。

Ⅰ区3号住居址（図版6、付図1）

C－5グリッドの地表下約35*cm*から複式炉の残存部が発見された。炉の南に弧状の周溝があり、直径約4.5～5*m*の円形プランの竪穴住居址であったと推定される。柱穴は他のピットと重複し不明確

であるが、付図1の3－1、3－2、3－3の3個のピットが推定される。埋設土器は破壊されていたが、㋑・㋓・㋕の3部で構成された複式炉とみられる。長軸はNW－SEであり、現存部の長さ1.70m、幅82cmである。埋設土器は1個であり、破片となっている。炉の南側に40×50cmのピットがあり、土器片少量が発見された。

出土遺物は、㋓部から、石鏃1点、円盤状土製品1点、炉の周辺から凹石2点が発見されている。埋設土器の年代は不明である。

Ⅰ区4号住居址（図版8・31、付図1）

D－8グリッドにおいて地表下約30cmから複式炉が発見された。㋑部の西約3mに3mほどの溝が残存しており、これを4号住居址の周溝とみるなら直径4mほどの住居址であったと推定される。柱穴は付図の4－2、4－3の2個のピットが想定されるが、3本柱か4本柱であったか明確ではない。炉は、㋑・㋓の2部分で構成された複式炉であるが、埋設土器は2個あり、㋓部は炉の長軸と直交する舟底形をなしている。長軸方向はN－Sであり、長さ1.70m、幅1.20mである。埋設土器周辺の土は厚く焼けている。土器は大木9式平行とみられる。㋓部から円盤状土製品が発見されている。

なお、6号住居址と切り合っているが、6号住居の主柱と想定されるピット（付図1の6－1）が埋設土器を破壊しており、4号住居址が6号住居址に先行するものと理解される。

Ⅰ区5号住居址（図版9、付図1）

D－7グリッドの地表下約35cmから複式炉の㋓部の石組が発見された。上土の削平と耕作とにより周壁は失われ、わずかに㋓部の南1.5mの地帯に周溝の一部が弧状に存在した。円形プランが想定されるが規模は不明である。柱穴は付図1の5－1、5－2、5－3の落ち込み3か所と推定される。炉は㋑部を欠いており、㋓部と配石のない㋕部とが確認された。

㋓部から円盤状土製品が発見されている。埋設土器を失っているため、時期は明らかでない。なお、3号・6号住居址と切り合っているが、上土を欠き相互の時間的関係は不明である。

Ⅰ区6号住居址（図版32、付図1）

D－8グリッドを中心に、地表下約20～30cmに複式炉が発見された。上土の削除と耕作とにより周壁は失われていたが、幅20cm、深さ10～15cmの周溝が存在し、直径4.5mの円形プランであったことを示している。柱穴は炉の長軸の延長線上に1か所（付図1の6－1）と、炉の㋓部を中心に左右に各1か所（同図6－2、6－3）と3個の柱穴が三角形に配置されており、複式炉を伴う住居址の典型的形態を示している。

炉は、㋑・㋓・㋕の3部を備えた複式炉であり、長軸方向はNW－SEで、長さは1.55m、幅90cmで、比較的小型のものである。埋設土器は1個で周辺の土は厚く焼け、土器内は焼土少量が混じった黒褐色が上層にあり、下層は灰黒色土層となっていた。

出土遺物は、炉付近から石鏃１点、周溝内から石匙１点、ピットと床面から掻器２点が発見されている。住居址の時期は埋設土器から大木10式期とみられる。なお４号・５号・９号住居址と切り合いを示しているが、４号住居址の炉をロームで埋め、また埋設土器の一部を柱穴で破壊しており、４号住居址より新しい時期を示している。おそらく５号・９号よりも後行する時期が想定される。

Ⅰ区７号住居址（図版11、付図１）

県道南のＢ—11グリッドから複式炉の残存部が発見されたが、県道工事や上土の削除と攪乱とによりプランを確認することはできなかった。炉は10号住居址の炉により㊁部が破壊されており、開口部の存在は不明である。長軸の方向はＮＷ—ＳＥで、大きさは現存部の長さ1.0ｍ、幅80ｃｍである。埋設土器は上半部が削り取られ下半部のみが残っており、周辺の土は厚く焼けていた。時期は不明である。

Ⅰ区８号住居址

Ⅱ区Ａ—２グリッドの掘り下げにより、炉と推定される石組が破壊された状態で発見された。住居址の複合と耕作等による攪乱のため詳細は不明であった。発掘地区としてはⅡ区に入っているが、Ⅰ区住居址群に密接するので、Ⅰ区住居址の通し番号を付した。

Ⅰ区９号住居址（付図１）

Ｃ—７グリッド地表下約35ｃｍに複式炉が発見された。上土の削除や耕作のため周壁はなく、わずかに炉の北東側に幅25ｃｍ前後、深さ10～15ｃｍの周溝が３ｍほど弧状に残存していた。㊀部の中心から周溝外線までの距離は2.5ｍあり、直径約５ｍの円形プランの竪穴住居址であったと推定される。柱穴は炉の長軸線延長上に１（付図１の９—１）、㊀部を中心として左右に各１（付図９—２、９—３）の３か所が想定され、いずれも直径70ｃｍ、深さ80ｃｍをこえるピットが、正三角形に配置されている。

炉は、かなり破壊されており、開口部は不明であった。埋設土器は２個あり、㊁部の石組は長軸に直交する舟底型を示すようである。埋設土器周辺の土はよく焼けている。土器内部には上層にローム混入の黄褐色土、下層に黒褐色土が堆積していた。長軸方向はＮＷ—ＳＥで、現存の長さ1.2ｍ、幅70ｃｍである。埋設土器は大木９式期に入ると思われる。

Ⅰ区10号住居址（図版11、付図１）

県道の南側のＡ—11グリッドにおいて、７号住居址の複式炉を切った状態で複式炉が発見された。県道と発掘予定外地とにはさまれ、また攪乱をうけており住居址のプランは確認されなかった。周溝柱穴とも不明であり、炉の東半分は13号住居址によって切られている。このため複式炉の開口部の存在は不明であり、埋設土器１個と㊁部石組の一部が確認されたのみである。長軸方向はＮＷ—ＳＥで現存の長さ1.60ｍ、幅１ｍである。埋設土器の周辺は厚さ５ｃｍほど焼けており、土器内部は上層が骨片を含む茶褐色土、下層が木炭を多く含む黒色土となっていた。なお、土器内から凹石１点が発見されている。土器は大木９式期である。

Ⅰ区11号住居址（図版15・16・33、付図1）

C—1グリッドを中心として大型複式炉が発見された。炉のすぐ北は用水堀が流れており、そのさきは浸食谷の崖となり、プランの半分は調査不能であった。南半分は、耕作等により周壁は失われていたが、幅25cm、深さ20～25cmの周溝が約6mほど巡っており、円形プランの竪穴住居址であったと想定された。埋設土器中心点から柱穴（付図1の11—3）を通して周溝外線までの距離が3.6m あり推定規模は7.2m 程度の大型住居であったろう。発見された柱穴は㋑部の右側に直径1.3mのピット（11—3）1か所のみであるが、恐らく調査区域外に2個存在し、3本柱の典型的形態であったと想定される。

炉は、㋑・㋺・㋩の3部分からなり、石組外線が放物線を構成し、開口部が大きく開いた形態を示している。埋設土器は2個を内蔵し、小型土器1個を近接併置している。㋺部の石組は長軸に直交する舟底型をなしている。長軸方向はN—Sであり、長さ幅とも2.45mと当遺跡最大の規模となっている。㋩部の下端中央に直径40cm、深さ18cmのピットを伴っている。埋設土器周辺の土はいずれも厚く焼けていた。出土遺物は、炉の石組に凹石2点が利用されており、そのほか炉内から石匙・石皿・掻器各1点、周溝から石匙1点が発見されている。埋設土器は大木9式期である。

なお、17号住居址の周溝を11号の周溝が切っている。

Ⅰ区12号住居址（図版17～19、29、付図1）

Ⅱ区A—1グリッドを中心として複式炉を伴う竪穴住居址が発見された。高さ20cm前後の周壁が存在し、長軸5.5m、短軸5.2mの隅丸方形のプランが確認された。周壁下には幅20～25cm、深さ15～20cmの溝が回り、さらに内側にも幅15cm 前後の溝が存在し、長軸4.5mほどの隅丸方形のプランとの重複を示している。柱穴はプラン内に5個存在するが、主柱は付図1の12—1、12—2、12—3の3か所が、直径60cm前後、深さ70～90cmの規模でそろっており、3本柱を構成していたと推定される。なお炉㋩部の末端にあるピットはやや小規模で浅く、11—4と同様のものと考えられるが、その性格を今後検討する必要があろう。15—1は隣接する15号住居址の主柱と考えたい。

炉は、㋑・㋺・㋩の3部分で構成された複式炉であり、長軸方向はNE—WSを指し、埋設土器2個を有し、長さ2.50m（㋑～㋺部1.70m）、幅1.00mである。㋺部は長軸に直交する舟底状を呈しており、㋩部は11号炉のような広がりを見せず、両端はほぼ平行した溝となっている。埋設土器（№2）の1個に、蓋が落ちこんだような形で、平石が斜めにのっており複式炉の使用法を検討するうえで注目される。他の埋設土器（№1）の内部には黒色の有機質の付着がみられた。土器周辺の土は厚く焼けている。出土遺物は、床面から石鏃4点、打製石斧1点、炉石のなかに凹石5点、㋺部から磨石・石皿各1点、周溝から剝片多数が発見された。埋設土器は大木10式期である。なお15号住居址を切っている。

Ⅰ区13号住居址（図版10・33・45、付図１）

県道の南側のＡ―10グリッドの複式炉を中心とする竪穴住居址である。県道と路線外とにはさまれた狭長な地域であり、住居址の東半のみ調査した。周壁は高さ30㎝前後あり、直径6.10ｍの円形もしくは隅丸方形の竪穴住居址と推定される。周壁下に幅30㎝前後、深さ10㎝前後の周溝が回っている。柱穴は２個発見されたが他は不明である。

炉は埋設土器２個と㊁部石組の一部が残存していたが、開口部の存在は不明であった。長軸はＮＷ―ＳＥで、現存の長さ1.45ｍ、幅90㎝である。埋設土器の周辺は厚く焼けており、内部に有機質を含む黒色土が入っていた。

床面から土器２個体の破片と打製石斧２点、床面直上から磨製石斧１点、石鏃３点、掻器３点、円盤状土製品３点、周溝内から剝片が一括出土した。上層から石棒１点が発見された。埋設土器は、大木10式期と思われる。なお10号複式炉を切っている。

Ⅰ区14号住居址（図版12・32、付図１）

Ⅰ区Ｂ―３～４グリッドから複式炉が発見された。この炉の東に半月状の周溝等がみられるが、炉との関係は不自然なものがあり、むしろ15号炉の西にある付図１の「14号？」が周溝であったと推定したい。埋設土器の中心から2.5ｍ あり、直径５ｍほどの隅丸方形の竪穴住居址であったと想定される。柱穴は確認できなかった。炉は、㋑・㊁・㋭からなる複式炉であり、埋設土器は１個、㊁部は箱状の小型の炉である。長軸方向はＮ―Ｓであり、長さ1.63ｍ、幅70㎝である。

炉石に凹石２点が混じっていた。埋設土器は大木10式期と考えたい。

Ⅰ区15号住居址（図版13・34、付図１）

Ａ―１グリッドを中心に複式炉が発見された。開口部は路線外にあり確認できなかった。周壁・周溝は不明であり規模は推定できない。付図１の「15―１？」のピットが主柱穴の一つと推定される。炉は３個の埋設土器をもつ複式炉であり、長軸はＮＷ―ＳＥで、現存の長さ1.25ｍである。出土遺物は炉石に凹石４点が利用されていた。埋設土器は大木10式期とみられる。

Ⅰ区16号住居址（図版14・32、付図１）

Ｂ―３グリッドから複式炉が発見された。周壁はなく、周溝・柱穴も不明であり、プランは確認できなかった。炉は㋑・㊁・㋭で構成されている。埋設土器は１個、㊁部は箱状、㋭部は末端に閉鎖石を備えている。長軸はＮ―Ｓであり、長さ1.90ｍ、幅1.10ｍである。埋設土器周辺の土は厚く焼けていた。土器は大木10式期のものとみられる。

Ⅰ区17号住居址（付図１）

Ｂ―２グリッドの土壙状の落ち込みと、この落ち込みを中心として隅丸方形プランを示す周壁（東南部）と周溝（北東部）とがある。軸長は6.50ｍほどであり、中央の落ち込みは複式炉が存在した可

能性が強い。これらの遺構を一つの住居址と推定した。11号住居址の周溝によって切られており、大木9式期と想定される。

Ⅱ区1号住居址（図版21・22・28・29）

Ⅱ区A－9グリッドを中心に、ローム層に掘り込んだ竪穴住居址が発見された。長径5.6m、短径5.4mの円形プラン（隅丸方形に近い）を示し、周壁はローム層を40cmほど掘り込んでいた。周溝は幅15～50cm、深さ10～35cmのものが断続的に一周している。なお複式炉の東南後方の周溝外にも周溝らしい掘り込みが検出された。柱穴は、径30～50cm、深さ60～62cmのものが5か所発見された。

住居址中央から南々西にかけて複式炉が設置されている。㋩の開口部は配石はないが、周溝までのびており、炉の全長は2.60m（㋑㋥は1.50m）、㋥の最大幅は1.20mとなっている。埋設土器は2個あり、火をうけて脆くなっていた。内部にはいずれも焼土・木炭等が混入していた。炉の頭部に接近して深さ25cmほどのピットがあり、内部から骨片・木炭が多量に発見され、また磨製石斧の破損品と土器底部なども検出された。

出土遺物は、堆積土中から磨製石斧2、石鏃1、掻器4、床面から尖頭器3（うち1点は周溝）、石皿（東壁近く）、石錘2（炉内1、ピット内1）、異形土製品1が出土している。

住居址の時期は、埋設土器から大木10式期と推定される。

Ⅱ区3号住居址（図版23・24・28・30・43）

Ⅱ区A－11グリッドを中心に、ローム層を掘り込んでつくられた竪穴住居址であり、北西部の一部が破壊されていたが、横軸6.20mの隅丸方形プランである。周壁はローム層を30cmほど掘り込んでいる。周溝は、北西側は検出されなかったが、幅20～30cm、深さ10～30cmの溝が巡っていた。南々東部では周溝が2条存在しており、建替えられた可能性を示している。

住居址内から直径90～120cm、深さ87～118cmのピットが8か所発見された。ピット1・2からは大形の土器片が出土し、またピット6からはクリの炭化物、骨片が検出された。これらのピットは直径が1m前後と、柱穴にしては大型であり、また遺物も出土している点、円筒状ピットとの類似が指摘される。しかし、炉を中心として対称形に配置されており、また住居址の建替えの可能性などから、3本組と5本組の柱穴とみることもできる。

住居址の中央部から南々東にかけて複式炉が設置されている。炉は㋑㋥㋩の3部から構成されており、長軸は2.60m、幅1.90mである。埋設土器は2個あり、土器とその周辺の石組とも熱をうけ脆くなっていた。土器内部からは、焼土・木炭が層をなして検出された。複式炉の頭部に接近して深さ24cmほどのピットが発見されている。なお、床面直上に炭化したクリが、広範囲にわたり検出された。

遺物は、ピット5の上面から石鏃1と石錘1、ピット2および炉石・炉付近から凹石5点、炉付近から石皿、周溝内から剝片一括が発見されている。

住居址は、埋設土器から大木９式期と推定される。わずかに４号住居址を切っている。

Ⅱ区４号住居址（図版25・26・27・28・30）

Ⅱ区Ｚ—13グリッドを中心に、ロームを掘り込んでつくられた竪穴住居址であり、北側約４分の１が破壊されていた。直径5.80ｍほどの円形プランであったと推定される。

周壁は、ローム層の掘り込みが40㎝ほどみられた。周溝は、幅15～30㎝、深さ30㎝前後で、断続的に一周している。また、これに平行して幅35㎝、深さ20㎝の周溝かみられ、複合住居址の可能性がある。柱穴状ピットは、９個検出されたが、配置は不明であった。

住居址のほぼ中央に、土器片の文様面を内側に向けて配列して囲った部分と、約70㎝間隔をもって平行に配置された配石部分とによって構成した炉が発見された。両部分の境は土器片で仕切られ、全長は1.80ｍ、幅70㎝であり、炉の方向はほぼ南北であるが、わずかに東にかたむいている。炉のほぼ中央部に２個の土器が埋設されており、内部から骨片が検出された。炉床には、全面に３～５㎝の厚さで焼土が存在し、全面で火を使用したと推定される。このような形態は、埋設土器を有する点と、炉を機能的に分離している点において、新しい傾向を示すものであり、中期後葉に発達をみる複式炉への過度的な様相として注目される。なお、土器内部から骨片が検出されたことも、複式炉の機能を検討するうえで重要視される。

住居址からの出土遺物は、石鏃10（周溝内２、ピット内２、床面直上６）、剝片一括（周溝内）である。住居址の時期は、埋設土器から大木８ｂ式期と推定される。　（目黒吉明　一條孝夫　森貢喜）

第２節　ピ　ッ　ト

当調査により発見されたピットの数は10基以上にのぼった。しかし、その一部には、住居址の柱穴と思われるものもあり、また調査日数の都合上十分な調査ができなかったものもある。ここでは、ピットとして独立した遺構と見られるものを中心として記述する。なお、ピットの形態には、断面が台形をなす、いわゆる袋状ピットとよばれるものと、円筒状のピットの２種類がある。

１　袋状ピット

袋状ピットは、台地の西端にあたるⅠ区西南部、県道の南側に集中して発見された。その数は６基が確認されたが、そのほかG—11グリッドの浅いピットも同類である可能性をもっている。

２号ピット（図版35・46、付図１）

Ⅰ区Ｂ～Ｃ—13グリッドの黄色ローム層に掘り込まれたもので、上縁口径1.45ｍ、底径1.75ｍの円

形プランであり、深さ62cmであった。ピット上の土層は20cm前後であり、耕作その他によりピットの上部は削られているとみられる。内部の土は、黒褐色土が主体となり、地山の黄色ロームも混在し、また木炭・骨粉・焼土も少量ずつ混在していた。

出土遺物は、底部中央にほぼ完形の深鉢１点、中間層からは小型土器を含め、ほぼ完形に近いもの５点と破片とが発見された。中間層の土器群は、投げこまれたという感じである。土器型式は、底部出土のものは大木８ｂ式、その他は大木７ｂ～８ｂ式のものと推定される。

３号ピット（図版36・46、付図１）

Ⅰ区Ｃ―13～14グリッドの黄色ローム層に掘り込まれたもので、上縁の口径90～95cm、底径1.80～2.00mの円形プランであり、深さは85cmであった。２号の袋状ピットと同様に上部が削られた可能性がある。内部の土は、茶褐色土、焼土を含む茶褐色土、木炭少量を含む茶褐色土、ロームが混在する黄褐色土と堆積している。なお北西隅の底面直上の黄褐色土の上に、ロームが薄い層で存在していた。

出土遺物は、底部から土器片一括と剝片３点とともに、土器片の周辺から木炭片と多量の骨片が発見された。そのほか中間層から凹石・円盤状土製品・土器片などが発見されている。底部出土の土器は時期色を示すものが少なく不明確であるが、大木７ａ～７ｂ式期のものと推定される。

４号ピット（図版37・46、付図１）

Ⅰ区Ｄ―14～15グリッドの黄色ロームに掘り込まれたもので、上縁口径1.40m、底径2.70m、深さ60cmである。内部の土は、木炭片の混入した黄褐色土・黄色土（少量の褐色土を含む）・ローム（混入物を含まないが、掘り起こされたため柔い）と堆積している。またローム上面から深さ40cmの地点に10×25cm、厚さ１～５cmの焼土がみられた。

出土遺物は、焼土周辺から大木７ｂ式と推定される土器片が少量発見された。その他にも土器片が混入していたが、いずれも小片であった。全体的にかなりの木炭片が混入しており、また骨片も少量みられた。深さを増すにしたがい木炭片・土器小片の混入は減少している。底部近くに長径40cm、厚さ20cmほどの石が存在した。ただし、底面に貼り付いた状態ではなく、わずかであるが間層がみられた。

５号ピット（図版38・39・46、付図１）

Ⅰ区のＥ―14、Ｄ―13・14グリッドの黄色ロームに掘り込まれた袋状ピットであり、上縁口径1.58～1.43m、底径2.35～2.20m、深さ58cmである。底面は、黄色の硬質粘土とパミス状堆積層になっている。内部の土は、上から黒褐色土・赤褐色土・黒色土・白色粘土混り硬質砂と変化している。赤褐色土層中にはブロック状の焼土がみられた。出土遺物は、底面直上から上半身を東南方向にむけ仰臥した状態で土偶１点（図版63―７）が発見された。胎土には金雲母が混入しているが、同ピット内出土の土器底部片にも金雲母が混入しており、同時期と推定され阿玉台式並行とみられる。その他、土器小片と剝片とが出土している。底部直上からの土偶出土は、遺構内出土とみることが可能であり、

土偶および袋状ピットの性格を検討する上での新しい資料として注目されよう。

10号ピット（図版40・47、付図1）

Ⅰ区のE—13～14グリッドの黄色ローム層に掘り込まれたもので、5号ピットと切り合っている。上縁口径1.95m、底径2.10m、深さ31cmの袋状ピットである。他の袋状ピットと比較して浅い形態を示しているが、ピット群の西北端にあり、台地周縁に近く位置しており、後世の削平により上部を欠失したものと推定される。底部に径28cm、深さ34cmの小ピットが存在している。ピット内の土は、褐色土のみであるが、多量の焼土と木炭が混入していた。出土遺物は、小形鉢の下半部と土器破片とが発見された。土器片は、縄文原体の圧痕を有するもの、角押文などがみられ、胎土に金雲母を含むものなどがあり、阿玉台系の影響を示している。

袋状ピット総括

袋状ピット5基についてのべたが（1号は、記録不十分のため省略）、G—11グリッドに直径2.20mの非常に浅いピットが確認されている。同遺構は台地の西北端にあるため、後世の影響を大きくうけて袋状ピットの底部のみが残存した可能性が高い。これを加えると7基になるが県道部分にも存在した可能性があり、また発掘地区の南側にも存在の可能性があり、かなりの数にのぼることが推測される。次に5基の袋状ピットを総括すると次の諸点が指摘される。

(1) 形態・規模は、断面が袋状をなすことはもちろんであるが、平面は円形プランを基本とし、底径が1.80～2.45mの範囲にある。深さは最大が80cmであるが、本来はさらに深いものであったことが想定される。

(2) ピット内の土層は、さまざまであるが、腐植土とともに黄色のロームが多量に混在している。この黄色ロームは本来ピット内に堆積していたものが、掘り上げられ、さらに埋戻されたものと推定される。このことは、袋状ピットが掘られて直ちに埋戻されたことを示すものといえる。なお、焼土と木炭が混在することも共通している。

(3) ほとんどの遺構が遺物を伴出しており、出土遺物には土器と土偶と剝片とがある。土器は小破片として混在するものと完形に近いものとがある。完形に近いものも一部分を欠失する場合が多い。土器の型式は、大木7bから大木8b式期にわたっている。したがって当遺跡の袋状ピットは、この時期の遺構と推定される。なお2号ピットは時期を異にする土器が混在していたが、遺構が重複したものと考えたい。

(4) 各ピットとも石を伴出すること。

(5) 群をなして存在し、住居址とは離れて存在したと推定される。

2 円筒状ピット

円筒状ピットは、かなりの数にのぼると思われるが、多くは住居址と混在しており、円筒状ピットとしての把握が困難な面があった。次の4基についてのみ述べる。

6号ピット（図版41・47、付図1）

Ⅰ区E－8～9、D－8～9グリッドの黄色ロームに掘り込まれたもので、平面不整形を呈しているが、3～4個の円筒状ピットが複合し、さらに、4号住居址に伴う柱穴が複合したものと推定される。内部の土層は図版47のように複雑な状況を呈しており、西から順に掘り込まれ、最後に中央の柱穴状ピットが掘り込まれたと推定される。したがって、これらの遺構は4号住居址に先行するとみられる。伴出遺物がなく不明確であるが、大木9～10式期のものと推測される。黄色ロームが混在する点は袋状ピットと同様である。

7号ピット（図版42・47、付図1）

Ⅰ区E－8グリッドの黄色ロームに掘り込まれたピットで、不整長円の平面を呈しているが、2基のピットが重複したものと推定される。内部の土は、ロームが混入した黄褐色土・茶褐色土・ロームからなっている。南側のピットは、口径96cm、底径68cm、深さ1.15m、北側のピットは口径約85cm、底径62cm、深さ1.05mである。南側のピットが古いと推定されるが、伴出遺物がなく時期不明である。

8号ピット（図版47、付図1）

Ⅰ区A－5、B－5グリッドの黄色ロームに掘り込まれたもので、断面がわずかに胴張りを示し、口径・底径85～93cm、深さ63cmである。内部の土は、ローム混りの茶褐色土であった。伴出遺物はなく時期不明である。

9号ピット（図版47、付図1）

Ⅰ区A－5グリッドの黄色ロームに掘り込まれたピットであり、1号複式炉の開口部に位置している。複式炉の開口部分には、小ピットが存在するものがあるが、本例は大型なので一応円筒状ピットとして図示した。口径75cm、底径55cm、深さ70cmである。試掘時に複式炉内の土があげられたため炉との新旧は明確にされなかったが、炉の末端の石が、かすかであるがピット上にかかっているので、1号複式炉より古い時期のものと推定される。内部の土は、ローム混りの茶褐色土であった。伴出遺物はなかった。

Ⅱ区3号住居址内ピット（図版28・30）

Ⅱ区3号住居址内から8個の円筒状ピットが発見された。直径1～1.6m、深さ0.8～1.18mのものであり、複式炉を中心として左右対称に存在しており、柱穴の可能性が強い。このうちピット1は、

内部の土は、上から暗褐色土・木炭混り褐色土・赤褐色土・木炭混り暗褐色土・赤褐色土・木炭混り暗褐色土・ローム混り褐色土・パミスの順に堆積していた。焼土が検出され、大木10式期の土器が多量に発見された。ピット2の内部の土は床面から20cmほどロームが堆積し、以下、赤褐色土・ローム混り褐色土と堆積していた。出土遺物は大木 8b 式期の土器が発見された。ピット6は、床面から深さ60cmに大きな石があり、これを境にして上層は黒色土混りのローム層、下は有機質を含む黒色土であり、この黒色土中からクリの炭化物と骨片少量が検出されている。

円筒状ピット総括

単独の遺構として発見された4基と、住居址内のピット3基についてのべたが、柱穴との関連が推定される後者を除き、前4基を中心に総括すると次のような特色が指摘される。

(1) 規模は、口径80cm前後、深さは0.65～1.15m、断面はやや底部径が減少する円筒状を呈する。

(2) 内部の土は、腐植土とロームとが混在するもの(A)と、腐植土が主体を占めるもの(B)とに大別される。前者(A)は袋状ピットと同様に、掘りあげてすぐ埋戻したものであるのに対し、後者(B)は、やや異なった性格をもつ遺構と考えられる。焼土は3号住居址1号ピット以外は発見されていない。

(3) 出土遺物は、II区3号住居址内ピット以外に伴出していない。時期は、複式炉との関係（6号・9号ピット）から大木9～10式期ころと推定される。

(4) 遺構底部から石は検出されていない。

(5) 袋状ピットが一群をなしているのに対し、円筒状ピットは散在する傾向を示し、住居址群と複合して存在している。

袋状ピット・円筒状ピットの性格については、第5章の考察においてふれることとする。

（目黒吉明　柴田俊彰　芳賀寿幸　渡辺寿子）

第3節　埋納土器

II区Y—16グリッドの北西壁から西に30°傾斜し、地表下20～45cmにかけて埋納土器1個が発見された。埋納のためのピットは小さなものであり、土器1個を埋納できる範囲のものであった。なお土器の周辺から剝片1点が発見された。土器内部に骨片がわずかに確認された。骨片は小片であり、人骨・獣骨の区別ができないため、その性格を明確にすることはできないが、幼児骨を納めた甕棺であった可能性が強い。（図版44）

（森貢喜　渡辺寿子）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

今回の調査によって本遺跡より出土した土器は、ダンボール箱にして60箱を超える相当な量に達した。時期的には縄文時代前期末より後期初頭にわたるものと言えるが、前・後期土器は数点得られただけで、ほとんどは中期に属している。中期の前葉より中葉にわたるものは、主として、Ⅰ区の西端に検出された袋状ピット内とⅡ区4号住居址周辺から得られ、後葉の土器は各竪穴住居址から大量に出土している。完形土器および図上復原土器を中心とし、一部拓影を含め説明を加えたい。

1　縄文時代中期前～中葉の土器群

編年的には、大木7a～8b式に相当するものとした。Ⅰ区の西端において発見された袋状ピット2・3・4・5・10号とⅡ区4号住居址周辺から主として出土している。そのほか、各発掘区域より、小破片が散逸的に出土している。全体の出土資料を総括的に分類し、その特徴を概述したい。

第1類土器（図版58—53・60—1）

折り返し口縁を有している。縄文地のものと無文の二者があり、前者には綾繰文がみられる。小破片がほとんどで、2・3号ピットより若干得られたに過ぎない。53は3号ピット出土である。

第2類土器（図版60—2～5）

交互刺突による鋸歯状文、三角形の彫刻文、平行沈線文などを有するものを一括した。4・5号ピットより小破片が得られている。

第3類土器（図版55—37、58—54・55・58、60—6～8）

胎土に金雲母を含有し、連続的に角押文・爪形文が施文されるのを特徴とする。口縁は平縁と突起を形成するものがある。後者には扇状、あるいは板状を呈するものが見うけられる。また角押文・爪形文を有せず、単なる沈線が配されるものもある。器形をうかがえるものもあり、比較的資料は多い。2・3・4・5・10号ピットより出土している。55—37は2号ピット出土で、口唇部にS字状の隆起帯を備えている。幅の広い爪形文が、窓枠状の隆起帯内に連続的に施文されており、胴部は単節斜縄文が施されている。58—54は胴下部のみであるが、金雲母の混入が顕著である。3号ピット出土。58—55は10号ピット出土でキャリパー形深鉢を呈す。口縁に断面三角形の微隆起線によって窓枠状の

文様を構成し、微隆起線に沿って細かな爪形文が連続的に施されている。頸部には平行沈線文・三叉状彫刻文が配される。58—58は10号ピット出土で、口縁がわずかに内湾して開く深鉢。口縁にX字状に隆起帯が配され、連続角押文が楕円状に施文されている。

第4類土器（図版55—38、58—56）

篦状工具によって刻み目の付された隆起帯を文様の基調とするものと、無文地に隆起帯・沈線が縦走するものなどを一括した。2・3号ピットより出土している。55—38は2号ピット出土の小形深鉢であり、縄文地に刻み目の加えられた隆起帯が口縁を一周し、2か所において垂下している。貫孔を有する。58—56は3号ピット出土で、胴下半のみである。無文地に隆起帯・沈線が縦走する。

第5類土器（図版60—10～12）

撚糸圧痕文が横位に押捺されているのを特徴とする。口縁は平縁と波状をなすものがあり、波状をなすものには、S字状の突起を形成するものがある。2・3・5・10号ピットより出土しているが、ほとんどは小破片である。

第6類土器（図版56—42、59—59）

口縁が太い粘土紐によって窓枠状・S字状に立体的に形成され、胴部は貼付文・沈線文が施されるのを本類とする。Ⅰ区G—11グリッド、Ⅱ区の北東部より出土している。59—59はⅠ区G—11グリッド出土であり、口縁に環状の突起を構成し、胴部には貼付文・沈線文によって鋸歯状文や幾何学的な文様が施されている。

第7類土器

形態的にはキャリパー状の深鉢を特徴とし、文様的には貼付文・沈線文が多用され、渦巻文・棘文が描かれている。前・中葉の土器群の中で最も多数を占め、袋状2号ピット、Ⅱ区4号住居址よりまとまって出土している。幾つかの類型に細分できるが、ここでは出土地点ごとにみていきたい。

＜袋状2号ピット出土土器＞（図版48—1、55—31・35～39）

55—35は底面の中央に横たえられたような状態で発見された。キャリパー形深鉢で、口縁に環状の突起を有する。55—36は厚手の土器で胴部がふくらんだ深鉢形をなすものと考えられる。貼付文と沈線文の併用により棘文などが描かれる。55—39は底部を欠いている。口縁に貼付文・沈線文の併用により渦巻文などが描かれる。更に貼付文上や、文様間の無文部に撚糸圧痕文が押捺されている。55—31は胴下部のみで、縄文地に平行沈線による文様が描かれている。

＜Ⅱ区4号住居址出土土器＞（図版55—30・32～34）

55—33・34は炉内埋設の深鉢で、共に口縁が内湾気味に開き、頸部でいったん締まり、胴部で膨らむ器形である。口縁には渦巻文・楕円文が配され、頸部は無文化されている。胴部は55—33では磨消手法により、扁平化された貼付文によって渦巻文が縦位に配される。55—34では縄文地に沈線

により渦巻文・平行線文が描かれる。55—32はIb層より出土した胴下部である。55—30はIc層より出土した。本類より後出的な様相を帯びる。

＜その他＞（図版57—52、59—61・63）

57—52はII区B—10グリッドIb層出土。59—61はII区Z—10グリッドの落ち込み内より得られた。貼付文・平行沈線文を施文している。59—63はII区Z—15グリッドのピット出土である。

2　縄文時代中期後葉の土器群

編年的に大木9～10式期に相当するものを一括した。本遺跡出土土器の8割強を占めている。この時期は、いわゆる複式炉が発達し、炉内埋設土器が多出した。また竪穴住居址の覆土、住居内ピットからも完形に近い土器が得られている。ここでは住居址ごとに出土資料を通観していきたい。

I区1号住居址出土土器（図版50—1）

50—1は炉内埋設の深鉢で、胴部のみ遺存していた。文様は断面が三角形を呈する隆起線（以下稜線と呼ぶ。）によってS字文・楕円文などを描き、内部に斜縄文を充填している。

I区2号住居址出土土器（図版50—2）

50—2は炉の南側に埋設された深鉢で、口縁が欠失している。稜線によって方形文・楕円文が描かれ、胴中央部を一周する稜線と連結する。

I区6号住居址出土土器（図版50—3）

50—3は炉内埋設の深鉢で、ほぼ完形。複合口縁を有し、口縁直下に刺突文帯が巡る。胴部には、磨消手法によって楕円文が縦位に2個配され、この楕円文より発した沈線が複雑に巡る。

I区7号住居址出土土器（図版50—4）

50—4は炉内埋設の土器。胴下部のみで単節斜縄文が施文されている。

I区9号住居址出土土器（図版50—5・6）

50—5・6共に炉内埋設の深鉢で、口縁を欠く。50—5はS字文・C字文・楕円文が配されている。50—6も同様と考えられるが、胴腹部に波状沈線を巡らせて、単節斜縄文が付された胴下部と画している。

I区10号住居址出土土器（図版51—7）

51—7は炉内埋設の深鉢で口縁を欠く。間隔をもって沈線が縦走し、沈線間に斜縄文を充填し、懸垂文を構成する。

I区11号住居址出土土器（図版48—3、51—8・9・10）

51—8・9・10は、すべて炉内埋設の深鉢。51—8は、口縁と胴下半を欠き、懸垂文が認められる

が、全体の文様構成は判明しない。51—9は口縁が軽く外反し、胴で膨らむ深鉢・懸垂文の上端が連結しあい、特徴的な懸垂文を構成する。51—10もほぼ同様であるが、胴下部に擦痕を有する。

Ⅰ区12号住居址出土土器（図版51—11、56—40・41・42）

51—11、56—40は炉内埋設の深鉢。51—11は胴部のみである。沈線と稜線の併用により文様が描かれるが、文様構成は判明しない。56—40は口縁を欠く深鉢。S字文、変形したS字文が胴上半に配され、その下を波状沈線が一巡する。56—41は覆土より出土した深鉢。楕円文・S字文が配され、これらの文様間・頸部・胴下部を沈線が一巡する。

（56—42は、覆土より出土した。大部摩滅している。太い隆起帯によって窓枠状の文様が口縁部に形成され、環状把手を有する。これは明らかに、51—11、56—40よりも先行するものであり、2次的な堆積と考える。）

Ⅰ区13号住居址出土土器（図版48—6、52—14、56—43・44・45）

52—14、56—43は炉内埋設の深鉢。52—14は胴部のみで稜線によってS字文がくずれたような文様を構成する。56—43は口縁を欠く。稜線によって「コ」の字形、横位の長楕円文、内外に円形刺突を施す円文を描く。56—44は床面において発見された。背丈の低い深鉢で底部が欠失。口縁が突き出るように強く外反し、胴腹部で膨らむ。口縁は無文化され、胴腹部に稜線によって方形状の文様を構成する。56—45は覆土内出土の深鉢で口縁と底部を欠く。稜線が巡り、その下に間隔の粗い櫛歯状工具によって、不規則に描かれる。一部に縄文も施文される。

Ⅰ区14号住居址出土土器（図版52—12・13・16）

52—12は炉内埋設の深鉢。口縁が強く外反し、胴で膨らむ。無節斜縄文を施文。52—13は炉の西側のピットより出土した。口縁が内湾する浅鉢で底部を欠く。口縁下を沈線が一周し、貫孔を有する。52—16は炉の南側床面において発見された。口縁が内湾するキャリパー形深鉢で底部を欠く。口縁に縦位の楕円文、胴部に懸垂文を有する。

Ⅰ区15号住居址出土土器（図版48—2、49—3、52—15、53—17・18・19）

52—15、53—17・18は炉内埋設の深鉢。52—15は背丈が高く胴部に最大径を有し、口縁がわずかに外反する。胴下部から上方に、磨消縄文帯が立ち上がり、わらび手状に右に折れ曲がる文様が、横位に連続する。53—17はキャリパー形深鉢で、稜線によって渦状の文様が描かれる。口縁下に2条の稜線が一周する。53—18は小形の土器で磨消縄文によるU字文が配される。53—19はキャリパー形深鉢で底部を欠く。炉址上に若干浮いて発見されたが、器形的には53—17、文様的には52—15に類似している。ほぼ同時期の所産といえよう。

Ⅰ区16号住居址出土土器（図版49—4、53—22）

53—22は炉内埋設の深鉢。背丈が高く、底部が小さい不安定な器形である。無文化された口縁より「ノ」の字形に稜線が垂下し、更にそれがS字文がくずれたような文様を描く。

Ⅱ区1号住居址出土土器（図版49—1、53—20・21、57—46～48）

53—20は炉内埋設の深鉢。底部を欠き、U字文が配され、胴部を波状沈線が巡る。57—48は口縁を欠く。胴部に横位にS字文が展開するものと考えられる。57—46は炉の東側のピットより出土した。口縁のみである。53—21は浅鉢形の注口土器で注口部は欠失。覆土内より出土した。57—47は口縁が強く外反した小形の浅鉢で覆土内より得られている。

Ⅱ区3号住居址出土土器（図版54—23～29、57—49～51）

54—23・24は炉内埋設土器で、54—23は胴部に最大径を有し、頸部で締まり、口縁がわずかに外反する大形の深鉢。懸垂文の中央が連結しH字形を示す。54—24は胴下部のみで単節斜縄文施文。54—27～29は住居址内1号ピット出土。54—27は口縁・底部を欠く。台付鉢の可能性もある。口縁には、稜線と沈線の併用により、人面を思わせる立体的な文様が横位に連続する。胴部を1条の沈線が一周する。54—28は波状口縁をなす台付鉢。脚下部を欠損しているが、4個の円窓を有するらしい。54—29は口縁が大きく開き、胴腹部において膨らむ深鉢。H字文が中央から分離したようにU字文、その下にΩ字文が配される。54—25、57—51は住居址内2号ピット出土土器。54—25は口縁のみで文様が大部剝落している。渦巻文と楕円文が配され、楕円文内部には羽状沈刻文を有する。57—51は胴部以下を欠失した深鉢。頸部に横位にS字文を配し、上下に縄文帯・刺突文帯を巡らす。57—49は胴下部のみで、住居址内4号ピット出土。54—26は床面より若干浮き上がって検出された。口縁が内湾する浅鉢。頸部に楕円文、くずれたU字文が配される。57—50は覆土より出土した。単節斜縄文施文の小形深鉢である。

住居址外出土土器（図版49—2、58—57、59—60・62）

58—57はⅡ区Y—16グリッド北西壁出土の深鉢。土器の大きさをわずかに上まわる黒色の落ち込みから、傾斜した状態で発見された。土器内より骨粉が少々検出された。太い沈線によってS字文・U字文・懸垂文が描かれ、文様間・胴下部を沈線が一巡する。59—60はⅡ区B—12グリッドIc層出土の台付鉢。波状口縁をなし、口縁部に隆起線と沈線が併用され、人面を思わせる文様が配される。脚部には円窓を有し、稜線によって渦状の文様が描かれる。59—62はⅠ区G—11グリッド出土。小形の深鉢でU字文が配され、胴部を波状沈線が一巡する。

3　縄文時代前・後期の土器

数点得られたに過ぎず、破片資料である。図版60—13はⅡ区A—2グリッド出土。口縁部資料で、細い粘土紐が鋸歯状に貼り付けられ、更にその上に細かな爪形文が加えられている。

図版60—14はⅠ区J—2グリッド出土。無文の口縁に眼鏡状の隆起帯が逆「ノ」の字形に配されて

いる。

4 土 器 編 年

1 縄文時代中期前～中葉の土器群

第1類・2類はわずかな資料であったが、関東地方において中期初頭に編年される下小野式・五領ヶ台式に各々比定される。第3類の58—55・58は地文に縄文をもたず、金雲母の混入が顕著であり、明らかに阿玉台式としての特徴を具備している。58—55には五領ヶ台式の要素もうかがえる。55—37は地文に縄文を有し、口唇部にS字状の隆起帯を備えており、第5類に近似する点がある。第4類は勝坂式に類似するものを一括したが、時期が更に降下する可能性もある。本類までは関東系の土器群である。

第5類以降は東北地方に分布の中心を置く土器群であり、第5類は大木7b式に、第6類は大木8a式に各々相当する。第7類は大木8b式土器である。袋状2号ピット出土土器とII区4号住居址出土土器では時間差が存在するようである。前者の中でも、55—35は特に古い様相をもっている。55—39には撚糸圧痕文が押捺されており、注目される。後者は磨消手法が盛用され、貼り付けられた粘土紐は完全に器体に密着し、貼付文といった感じはもはやない。渦巻文も流麗なものとなり、膨隆するものも見受けられる。大木9式により近似したものであるが、渦巻文には棘文が付加されており、55—34などの胴部文様は、いまだ大木8b式の特徴を残している。

2 縄文時代中期後葉の土器群

大木9式の前半期の資料は、まとまって得られていないが、54—25、55—30などが相当するであろう。54—25は羽状沈刻文を有しており、中部・関東地方の影響が認められる。大木9式の後半に位置づけられるものは、14号・11号・10号住居址出土土器である。14号では深鉢形土器で、口縁が内湾するものと外反するものが得られている。11号の51—9・10などは口縁部文様帯が消失しているという点では、14号の52—16と差異が見出され、より後出的な位置が与えられるかもしれない。10号の51—7は明らかでない。

次に大木9式より10式への過渡的な在り方を示したものとして、II区3号住居址出土土器がある。炉の埋設土器としてH字形懸垂文を示すものが得られ、住居址内1号ピットからは、54—27～29が一括検出された。54—27は口縁に人面状の立体的文様が配され、胴部には胴下部と区画するために一周する沈線が存在する。住居址内2号ピットからは54—25、57—51が得られている。54—25は問題があるが、57—51は本住居址に伴ったと理解して良いと思う。S字文・U字文・懸垂文の共存は58—57の土器が集約的に示している。

12号・15号住居址は、大木10式の前半に位置づけられる。懸垂文のモチーフからはほぼ脱却しC・U・S字状のモチーフが多用され、胴上半にそれらが配され、縄文施文の胴下部と区画する沈線が一周するようになる。15号住居址を12号住居址が切っており、埋設土器のみを摘出し、比較すると、15号住居址出土土器よりも12号住居址出土土器が新しいようにも感じられるが、型式的に細分できるかどうかは、もう少し検討してみたいと思う。この時期に対比されるものは、Ⅰ区の1・6・9号とⅡ区の1号住居址出土資料がある。

大木10式後半に位置づけられるものは、Ⅰ区の2・13・16号住居址出土土器である。器形的には胴がほぼ直立し、口縁がわずかに外反する器形が多くなる。文様的には、前半のものと比較すると流動性が失われ、文様モチーフは硬化しつつある。単位文様は横位に展開する。また稜線によって文様が描かれるのも特徴の一つである。2号の50—2は、ほぼ方形状の文様構成を示し、13号の56—43は稜線に沿って、刺突文が施されている。これらの特徴は仙台湾地域の土器に類似する。

3　縄文時代前・後期の土器片

大変わずかな資料であったが、本遺跡の歴史的構成を考える上で、貴重である。今回の発掘区周辺に集落があるかもしれない。60—13は前期末の十三菩提式に類似している。60—14は後期初頭の堀ノ内Ⅰ式に相当するものであろう。　（森　貢喜）

参　考　文　献

西村正衛　「利根川下流域における縄文中期文化の地域的研究」『古代　34号』1960

馬目順一　「台の上貝塚における土器意匠文の研究」『小名浜』1968

丹羽　茂　「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会紀要』第一冊　1971

目黒吉明ほか　「塩沢上原A遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報3』1972

第2節　石　　器

出土した石器は全部で319点になり、その内訳は次の通りである。打製石斧5点、磨製石斧8点、石鏃110点、石錐16点、石匙18点、掻器47点、尖頭石器7点、剝片石器22点、凹石60点、蜂の巣石2点、敲石2点、磨石3点、石皿14点、砥石2点、装飾品（耳飾り？）1点、石鏃型磨製石製品1点、石棒1点となっている。その他、剝片が約300点出土している。

1　打製石斧（図版61—13）

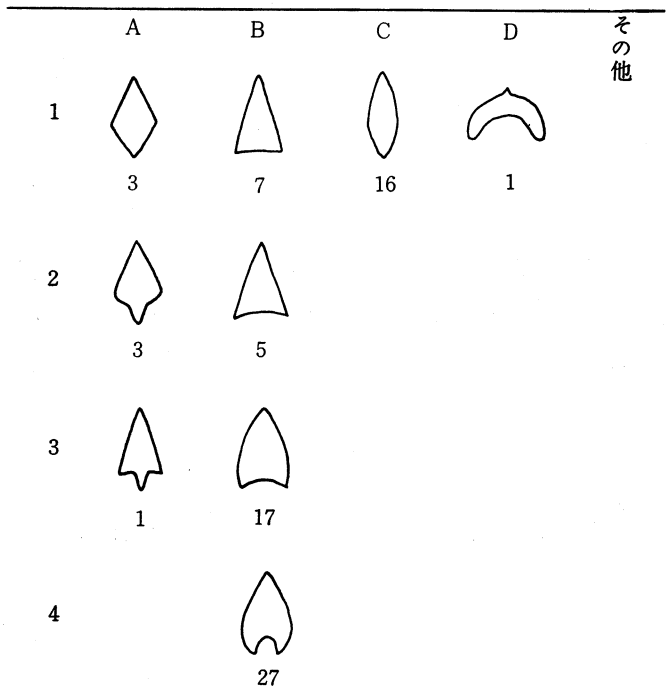
打製石斧は、5点出土しており、形態的には分銅形が1点、短冊形が1点、欠損品が3点となっている。

2　磨製石斧（図版61—14・15）

磨製石斧は、８点出土しており、形態的には定角式５点（完形品２点、欠損品３点）、小形定角式石斧１点という内容である。

3　石　　鏃（図版61—１～７）

石鏃は、総計110点出土している。次にそれを形態的に見ていく。（第２図参照）



注　石鏃の下の数字は出土の個数を示した。

第２図　石鏃の形態分類と個数

＜A類＞　いわゆる有茎石鏃である。

A—１類：ほぼ菱形に近い形の石鏃である。３点出土している。

A—２類：茎部が、ゆるやかに広がり、鏃身に移行する石鏃である。３点出土している。

A—３類：基部が内側に入りこんだ有茎石鏃である。１点出土している。

＜B類＞　いわゆる無茎石鏃である。

B－1類：基部の線が直線的で全体が三角形を呈する。7点出土している。

B－2類：基部が若干内湾しており、側辺は直線的な石鏃である。5点出土している。

B－3類：基部の抉り込みは浅く、側辺が基部にきてしまる石鏃である。17点出土している。

B－4類：基部の抉り込みが深く、側辺が基部にくるほどしまるよう湾曲している。27点出土している。

＜C類＞　いわゆる柳葉形石鏃である。16点出土している。

＜D類＞　無茎石鏃の一種であろうが、非常に抉りの深い馬蹄形の石鏃である。1点出土している。

＜その他＞　欠損品7点、未成品11点、不明12点の石鏃が出土している。

4　石　　匙（図版61—11・12）

石匙は18点出土している。形態別出土状況を見ると、縦形石匙8点、横形石匙4点となっている。その他、欠損品1点、未成品2点、不明3点となっている。

5　石　　棒（図版62—1）

Ⅰ区13号住居址内の床面からやや浮いた層から出土したもので、小型の完形品であり、全長24㎝、最大径3.3㎝の灰緑色の水成岩質のものである。　（一條孝夫）

第3節　土　製　品

1　管状土製品（図版63—1）

管状土製品とは、仮に用いた名称である。Ⅱ区第1号住居址の東南隅、地表から70㎝の1c層（暗茶褐色土層）から発見された。形状は、長径12.7㎝、短径7.87㎝、厚さ7.17㎝で、平面は、不整長円形、断面は隅丸三角形を呈しており、フットボールかヤシの実を思わせる形の土製品である。表面にひびが入ってはいるが、原形を保っている。長軸にそって、中央に径5㎜ほどの円形の孔が貫通している。焼成は良好で、全体に黄褐色を呈しているが、一部黒色の部分がある。表面は、研磨されたように、光沢があり、全く無文である。伴出した土器片は、大木8b～9式期のものと思われる。三角壔土製品と類似するが、やや大型であり、大型の錘とも考えられるが用途は不明である。

2　円盤状土製品

円盤状土製品は、土器片を円形にうちかいたもので、土製円板・円形小土板などともよばれている。周囲をうちかいただけのものと、たんねんに研磨したものとがある。この遺跡における両者の比率は、ほぼ10：1である。Ⅰ区出土のもの39個（12号住居址はⅡ区にもかかっているので、12号住居

址及びその付近出土のものも含む）、Ⅱ区出土のもの21個の計60個が、出土総数である。重量は、最小が4.9ｇ、最大が36.0ｇであり、10～29ｇのものが最も多い。直径は、最小が16.8㎜、最大が49.1㎜で、30～40㎜のものが最も多い。

使用されている土器片は、圧倒的に縄文のみの、土器体部破片が多く。無文のものが、それにつぐ。その他には、沈線・隆線文をもつもの等がある。口縁部破片を利用したものも、１点みられる。用途については、種々論じられているが、定説となるものは、まだないようである。

3 土　　偶

〔Ⅰ〕（図版63―７）　Ⅰ区西南端の袋状ピット群の一つ５号ピットから出土したものである。ピットの南壁の底部近くより出土した（出土状況の詳細は、遺構の項を参照）。右腕部、右胴下部、下部（脚部？）及び、上部に欠損が見られるが、ほぼ、全体の形を残していると思われる。全体的に背面にやや湾曲しており、扁平に近いが、臀部で、やや厚くなっている。現在残っている部分の大きさは、長さ14.9㎝、幅10.2㎝、厚さ4.6㎝である。腕は、胴体から、やや突き出た形で表現されている。胴は中央でややくびれている。脚部の存在は不明である。胸部には、豊かな乳房が表現されており、また腹部のほぼ中央に、臍と思われる部分が突き出しており、いわゆる妊婦を表現したものと思われる。

全体に、沈線で文様が施されているが、その沈線には、角押文的なものもみられる。前面には、両腕の上端より、胸部にかけて３本、体部中央に正中線、乳房の直下にかぎの手状の沈線が施されており、特に右半分のものに、角押文のような、施文具のあとが残っているのがみられる。また正中線は、腹部の突き出した部分で４本に分かれ外側の２本は左右に弧をえがいて分かれ、胴のくびれまで達している。背面は、中央がくぼんでいる。背面上部には、腕の部分に「く」の字状の沈線が左右対称に施されており、ここでも、右側のものには、角押文的なものがみられる。側面には、角押文的な沈線で、幾何的な文様が施されている。足部は欠損しているが、股部がえぐられた状態にある。色調は、全体に赤褐色を呈し、胎土に金雲母を多量に含んでいる。焼成は良好であるが、欠けた部分は、非常にもろくなっている。

〔Ⅱ〕（図版63―３）　Ⅰ区Ａ―11グリッド２ａ層より出土した。胴下半部の破片と思われる。焼成はやや悪く表面は、白っぽい茶色をしており、ざらざらしている。一部に火をうけたような黒色の部分がある。胎土の粒子はあらい。

〔Ⅲ〕（図版63―４）　Ⅱ区Ｚ―14グリッド１層より出土した。脚部の破片で、片方の足であろう。足裏と思われる部分は、扁平で、安定がよい。焼成はやや不良で、白みをおびた茶褐色をしている。

〔Ⅳ〕（図版63―６）　Ⅱ区Ａ―１グリッド1b層より出土した。焼成は良好で、黒褐色を呈し、刺突文を有するが、土偶の胴部破片であろうと思われるだけで、詳細は不明である。

〔V〕（図版63—5）　II区B—9グリッド1b層より出土した。土偶の手かと思われるが、土器の装飾の一部とも考えられる。側面に2本の沈線を有している。焼成は良好で、色は白みをおびた茶色で、一部黒色のところもある。

4　三脚土製品（図版63—8）

II区A—6グリッド1a層から出土した。三角形の頂点の一つの先端を欠くだけで、ほぼ完全な形である。文様は沈線と刺突文が、全体に施されている。三角形の一辺から一つの頂点へ一本の沈線が走り、他の二つの頂点から、その沈線へ向けて三本の沈線が施されている。沈線と沈線の間に刺突が施されている。真ん中の沈線を中心として、全体に裏側へ湾曲している。また縁辺部は非常に薄くなっている。焼成は良好で、色は黒褐色を呈している。

5　蓋状土製品（図版63—2）

I区A—10グリッド2層より出土した。半分ほど欠損しているが、ほぼ円形になると思われる。内側に湾曲しており、表面に2本の隆線が、弧をなして走っている。その2本の間に、橋状の把手がついている。その向い側にもあったと思われ、一対で用をなしたものであろう。焼成は良好で一部に黒色の部分が見られる。伴出土器は、中期後葉のものと思われる。　（渡辺幸子）

第5章　考　　察

当調査により、20軒の住居址と多数の遺物を発掘することができた。本来であれば、これらについて総合的に考察を行うべきものであるが、紙数の関係もあるので、当調査において最も注目された複式炉と住居址とピットについて、若干ふれておくことにする。

第1節　複　式　炉

1　複式炉の構造と形態分類

＜構　　造＞

複式炉は、県指定史跡の飯野町白山遺跡をはじめ、二本松市原瀬上原・塩沢上原・田地ヶ岡遺跡、本宮町上原遺跡、郡山市渕ノ上遺跡など多くの遺跡から発見されている。その基本的構造は、第1表の㋑㋺㋩の3部分からなっている。

第1表 複式炉構造分類表

	構造	概要
㋑土器埋設部	土器を埋設し、その上縁を石で囲った部分。（石囲は、じょうろ状に傾斜するものと、土器口縁と水平に巡らすものとがある）	大型完形土器を埋設する場合と、土器の胴下半分を除去し代わりに石を敷いている場合がある。土器周辺の土は、深くまで厚く焼けている。土器内には流入したと推定される土が充満し、わずかな焼土が混在することもある。
㋺石組部	楕円形の舟底状、もしくは箱状の石組の部分。（埋設土器の反対の部分の石組を低くし、次の㋩に接続することが多い）	この部分の石は、各例とも火を使用した痕跡をよくとどめており、石組は火の作用により焼けくずれを示すものもある。とくに埋設土器に近い部分が顕著である。内部には、焼土・灰はあまり発見されず、流入土が堆積している。ごく稀に土器が存在することがある。
㋩開口部	㋺の石組に接してつくられる浅く幅広い溝状遺構。この溝の周辺に「コ・ロ・ハ」字状に配石されることが多い。	この部分の石組や床土には、火気使用痕がみられず、火気の使用は考慮されない。床面が㋺の石組にむかい傾斜するものもある。

＜形態分類＞

前述のような炉に対し、梅宮茂は複式炉の名称をあたえたが、丹羽茂は上原型土器埋設石組複式炉（略して上原型複式炉ともいう）と名付け、その形態分類を行い、㋑＋㋺をD—6a類、㋑＋㋺＋㋩（コ字状配石）をD—6b類、㋑＋㋺＋㋩（ロ字状配石）をD—6c類、の3類に分類した（A～Cの分類については省略）(1)。

二本松市原瀬上原遺跡の調査により(2)、複式炉が、東北地方南部における縄文中期後葉の住居址内の炉として普遍的に存在することが明確にされた。ところが、同市塩沢上原A遺跡の今回の調査により、この複式炉がかなり複雑な変化を示すことが注目された。すなわち原瀬上原の複式炉は、埋設土器が1個で、炉幅も狭い。これに対し、塩沢上原A遺跡において、埋設土器が複数で、炉幅が広く外線が放物線を描く炉の存在が明確になり、しかもこの一群が時期的に先行することが推測され、塩沢型と原瀬型とに大別される可能性を呈示した。

丹羽茂は、前述のように複式炉の3分類を試みているが、ここでは、塩沢上原・原瀬上原の両遺跡の資料をもとに形態分類を行い。複式炉の変遷を検討のための資料提示と試論を述べてみたい。なお、便宜上「塩沢型」「原瀬型」で記述を進めたい。

まず、複式炉の㋑㋺㋩の各部分の観察により、形態的な分類を第2表に示した。

第2表　複式炉形態分類表

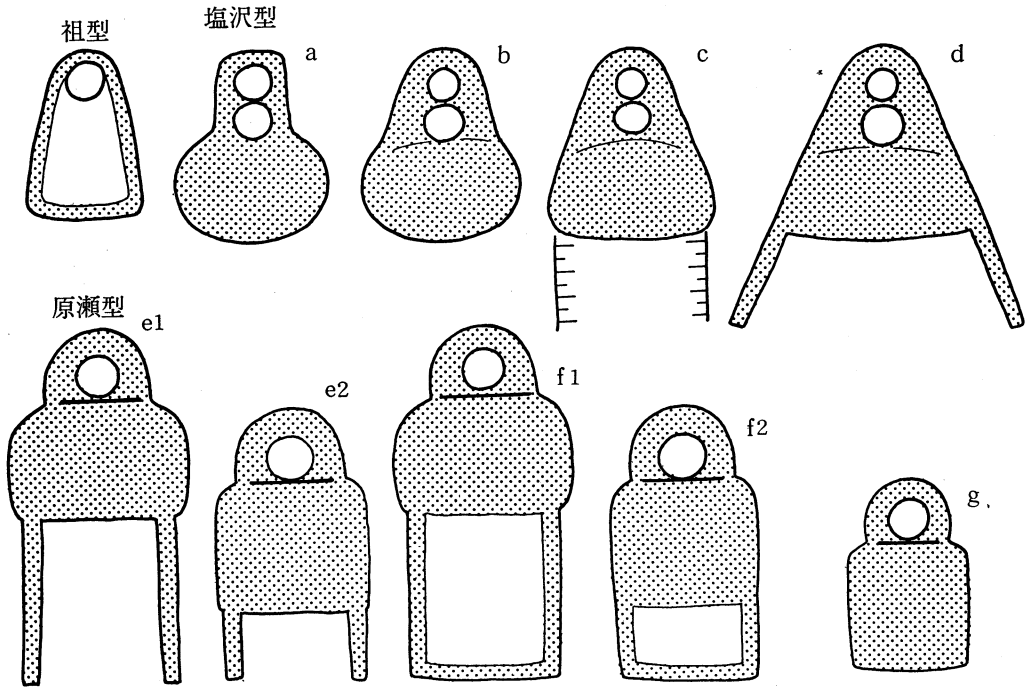
型		㋑土器埋設部	㋺石組部	㋩開口部（溝状遺構）
塩沢型（発達期）	a型	石組みが不整形、土器は1個～2個。	炉の長軸に直交する浅い丸みのある舟底形。	未発達
	b型	土器は1～2個。有底土器が多い。 石組は埋設土器に向かい内傾する。	石組は㋑からなだらかに移行し、a型同様の長軸に直交する舟底形。	未発達
		石組の外線は、㋑から㋺にかけて切れがなく連結し、ダルマ形を呈する。		
	c型	埋設土器複数となり、完形土器が多い。石組はは内傾。	石組は、長軸に直交する舟底形であるが、㋩に接する部分が低く作られる。	浅く広い溝が発達する（石組はない）。
		石組の外線は、㋑㋺切れなく連結し、b型同様ダルマ型。		
	d型	土器は、c型と同様複数で有底土器が多い。石組は内傾。	石組は、c型同様、長軸に直交の舟底形で、㋩に接する部分が低い。	溝が最も発達し、両側に「ハ」の字状の配石がつく。
		石組の外線は、㋩まで伸び、放物線を描き、最も発達した形を示す。		
原瀬型（退化期）	e_1型	埋設土器は、1個となり胴下部を欠き（無底土器）、底面に石を敷くものあり。配石は土器口縁に水平になる。	石組は深くなり、㋑に接する部分に石を立て、㋑と㋺を明確に区分する。	溝は、幅を減じ、「コ」の字状の配石となる。深さを増すものあり。
		石組外線は、㋑と㋺の間がくびれ、人形となる。幅は減ずるが長大なものあり。		
	e_2型	埋設土器1個、無底土器が多い。底面敷石あり。配石は円形で水平。	石組は深くなり、箱形をなすものあり、仕切り石をたて㋑と㋺とを分離する。	e型同様「コ」の字状配石をもつが幅・長さとも減じ小型化する。
		石組外線は、e_1型と同様の人形と、㋺㋩が直線的な、こけし形とがある。小型化。		

型		㋑ 土器埋設部	㋺ 石組部	㋩ 開口部（溝状遺跡）
原瀬型（退化期）	f_1型	埋設土器1個、無底土器が多い。底面敷石あり。配石は円形で水平。	石組は深くなり、仕切り石を立て、㋑と㋺とを分離する。	溝の幅を減ずるが長大なものあり。配石は「ロ」の字状。
		石組外線は、㋑と㋺との間がくびれ、こけし形を呈する。		
	f_2型	土器1個、無底土器多く、底面敷石のものあり。配石は円形・水平。	石組は深く箱形のものあり、仕切り石をたて㋑㋺を分離。	溝は、幅・長さとも減じ小型化する。「ロ」の字状配石。
		石組外線は、㋑と㋺との間がくびれ、人形もしくは、こけし形を呈する。小型化。		
	g型	土器1個、無底土器が多い。配石は円形・水平。	石組は、小型箱形を呈する。仕切り石で㋑㋺を分離。	開口部消滅。（わずかに溝の痕跡をとどめるものあり。）
		石組外線は、㋑と㋺との間がくびれ、小こけし形を呈する。		

第2表のように複式炉の形態分類を行ってみたが、塩沢型のa～d型の特長は、(1)完形に近い有底土器を多用すること。(2)埋設土器周辺の石組が土器に向かって傾斜し、さらに自然に㋺の石組部に移行すること。(3)石組部が炉の長軸に直交する舟底形を呈すること。などがあげられる。そして、埋設土器の容量が次第に増大し、それと関連して㋺の石組部、㋩の開口部が大規模化する傾向を示しているといえる。すなわち、塩沢型は複式炉の発達期に相当するといえる。

次に、原瀬型をみると、(1)埋設土器は無底土器1個が多くなり、土器内容量の減少を示すこと。(2)e_1型・f_1型では長大なものがあるが、すでに幅を減じ小型化への傾向を示すこと。(3)仕切り石をたて㋑㋺の分離がなされること。(4)埋設土器周辺の配石は、円形プランとなり水平になること。(5)㋺の石組部が箱型化の傾向を示すこと。などがあげられ、土器内容量の減少とともに小型化し、退化的傾向が指摘される。

以上のように複式炉変遷の基本となったものが、㋑の埋設土器の容量であることが指摘される。すなわち、容量の増大とともに炉全体が大型化し、容量の減少とともに小型化し、土器容量と複式炉の規模とは密接な関係を示しており、土器埋設複式炉発達の基本が㋑の土器埋設部にあったといえる。なお、複式炉の発達・退化による規模の変化以外に、住居址の規模との関係をも今後検討の必要があ



第3図　複式炉の形態分類模式図

ろう。

2　複式炉の機能

現在、複式炉の機能を検討すべき十分な資料は収集されていない。とくに㋑部の手掛かりはない。しかし、調査者として一応の機能推定をしておきたい。

㋑土器埋設部＝食料蒸焼加工（堅果を主原料とするパン状加工）

埋設土器周辺の石組は、いずれも土器内を密封しやすい形状を備えている。次に土器の周辺は深くまで火が回っているが、また底面に敷石が存在すること、土器内の堆積土の状況などから、土器の上辺のみで火を用いたものではなく、土器の深部まで火気を用いたと推定される。土器の深部で木を燃焼させることは適せず、その火気は、㋺で作られた「おき」であったと推定したい。このような活用法として蒸焼きの方法が考えられる。その目的をドングリ・トチ等の堅果を主原料としたパン状加工の可能性を考えるわけである。しかし決定性はない。Ⅱ区4号住居址においては骨片が検出されており、今後類例の増加をまって機能面の再検討を要する。

㋺石組部＝食料煮沸加工＋「おき」供給

石組が焼けている点から木を燃焼したと考えられ、一つには土器を用いての食料煮沸加工が目的であったと推定される。次に石組の構造は、㋩の送風機能とともに石組炉内での燃焼が盛んであったこ

とを示している。このような燃焼機能の充実は、他の時期の炉には見られないものであり、㋑への「おき」の供給が重要な目的であったと考えられる。このことは前述のように、㋑の埋設土器の容量と㋓・㋒の規模が密接な関係を有していることからもいえる。なお、石組部の深さは、通風をよくし燃焼を盛んにする機能のほか、堅果の渋抜きに用いる灰溜場としての機能も検討する必要があろう。

㋒開口部＝燃料差し入れ口（きじり）＋送風機能

㋓の石組部で燃焼させる焚木の差し入れ口と燃焼のための送風機能があったとみたい。当時木材を短く切断することは容易でなかったと思われ、農家の「いろり」にみられる「きじり」の役割をはたしたと思われる。なお、開口部の床を内傾させたのは、焚木の燃焼をよくする効果があったと考えられる（マッチを斜めにすればよく燃える）。

なお、埋設土器に接近する㋓の石組部分が傾斜しているのは、㋒から差し入れた焚木をささえ、下部の空間を保ち、通風をよくする役割があったと考える。（目黒吉明）

第2節　住　居　址

1　住居址の総括

今回の発掘調査により全部で20軒の住居址が発見された。しかし、そのほとんどが耕作、住居址の重複などによる攪乱が目立ち、住居プラン、内部構造がほぼ完全に明らかにされたのはⅠ区12号、Ⅱ区1号・3号・4号住居址の4例を数えるのみであり、一部が明らかなものは、Ⅰ区3号・6号・11号・13号・14号である。以上のようなことを踏まえて、平面形・周壁・周溝・柱穴・複合関係・炉等について調査の結果、判明した事実の総括を行いたい。

〔平面形〕　当遺跡より発見された住居址の内、平面形が判明したのはⅠ区3号・6号・11号・12号・13号・17号、Ⅱ区1号・3号・4号の各住居址であり、円形（不整円形）あるいは隅丸方形のいずれかを呈する。円形（不整円形）を呈するのはⅠ区6号・11号・13号・17号、Ⅱ区4号住居址の5例、隅丸方形を呈するのは、Ⅰ区3号・12号、Ⅱ区1号・3号住居址の4例であり、隅丸方形を呈するものも比較的円形に近い形態を示している。

〔周壁〕　後世の攪乱、住居址の重複などにより保存は良好でなく、確認されたのはⅠ区12号・13号、Ⅱ区1号・3号・4号住居址の5例のみである。住居址の掘り込みの深さを壁高とすれば、Ⅰ区12号は20㎝、13号は30㎝、Ⅱ区1号は40㎝、3号は40㎝、4号は30㎝を計り、他の時期の住居址にくらべ、壁高は高い傾向を示している。

〔周溝〕　全部で13の住居址において周溝が確認されたが、いずれも完全に周るものはなく、断続的

にまわるものや部分的に存在するものだけである。幅はⅠ区6号で20cm、9号で25cm、11号で25cm、12号で20cm、13号で30cm、14号で15～25cm、Ⅱ区1号で15～50cm、3号で20～30cm、4号で30cmを計り、深さ（床面下）はいずれも10～35cmの間である。また注意すべきものとしてⅠ区12号、Ⅱ区1号・4号の各住居址には周溝が2周している痕跡が認められる。これは建て替え現象と思われる。

〔柱穴〕　柱穴と思われるピットが確認されたのはⅠ区3号・5号・6号・9号・11号・12号、Ⅱ区1号・3号・4号住居址の9例であるが、住居内における位置、数が判明したものとなると少なくⅠ区6号・12号、Ⅱ区1号・3号の各住居址である。Ⅰ区6号（不整円形）は、3本で三角形配置が考えられ、12号(隅丸方形)は4本で四角形にみえるが、主柱は3本で三角形配置と思われる。Ⅱ区1号（円形）は5本で五角形配置が考えられ、3号（円形）は、3本の三角形配置と5本の五角形配置が考えられる。なお、不明確ではあるが、3号・5号・9号も3本三角形配置と推定される。以上のように柱穴の数、位置（住居内）が判明した例が少なく、平面形と柱穴の数、配置の関係については論じることは困難であるが、主柱3本を三角形に配置したものが多いと推定される。

〔複合関係〕　20軒の住居址のほとんどは各々切り合った状態で検出されており、その複合状態から各住居址間の先後関係がある程度明らかにされた。特に切り合い関係が良好状態で検出されたものに次の4か所がある。すなわち、Ⅰ区4号・5号・6号・9号住居址のグループ、Ⅰ区7号・10号・13号住居址のグループ、Ⅰ区11号・17号住居址のグループ、Ⅱ区3号・4号住居址のグループである。これら各グループごとの先後関係はその切り合い状態から以下のようになる。

（Ⅰ区4号→9号→6号）　（Ⅰ区7号→10号→13号）

（Ⅰ区17号→11号→14号）　（Ⅱ区4号→3号）　（注）〔古→新〕

各グループの住居址はこのような先後関係で各々構築されたと思われるが、各グループ間の先後関係は切り合い状態も良好でなく不明である　（目黒吉明　一條孝夫　森 貢喜）

2　住居址の問題点

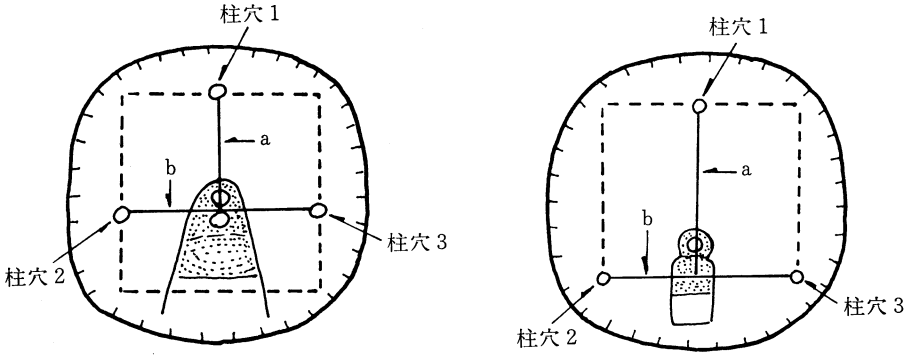
当遺跡において発見された住居址のうち平面プランが明確なものは19軒ある。その形態は隅丸方形と円形とにわけられるが、隅丸方形も非常に円形プランに近いものである。規模は4.5～5 m 程度のものが中心となっており、7 mを超えると思われるものがわずかにある。大型の住居址は大型炉を備えており炉と住居プランが密接な関係にあったことが知られる。

次に発見された住居址の多くは周壁を欠いているが、炉はいずれもローム面に掘り込んで築かれており、竪穴住居址であったことは論を待たない。他の遺跡出土の複式炉をもつ住居址は、いずれも高さ50cm前後の周壁をもったものが多く、当遺跡の住居址も本来は、同程度の掘り込みを有したと思わ

れる。遺跡西面の浸食や、遺跡の西～北端を流れている堰の開さく、あるいは県道工事などによって上土が削除されたため、周壁を失ったものであろう。

柱穴については、Ⅱ区1号・3号のように5本柱の可能性をもつものもあるが、ほとんどは、炉の長軸の延長線上に1、炉の左右に各1個を配した3本柱であり、複式炉を伴う住居址の典型的なタイプと見ることができる。その原因は、炉の大規模化に応じ、床面積における使用有効面積を広げるためと、後述のように複式炉の㊁部上に梁を通さないという構造上の必要性があったためと思われる。

3本柱設計のためには、安定性に対する配慮が必要であり、また火気使用の面からも屋根と床面との間隔を大きく取る必要性がある。この問題解決の一つの方法が、竪穴の深さを増すことであったと想定されよう。竪穴の深さを増すことは、床面積に対する屋根面積の関係において効率的でもある。



第4図　主柱穴の位置変化図

3本柱における上屋構造の設計については、種々問題があるが、第4図の柱間の関係において次のような傾向を示す

大型炉（発達期）　第4図bの位置は、埋設土器上におかれ、$^{a}/_{b}$は0.6～0.7程度の数字を示す。

小型炉（退化期）　炉の小型化とともにbの位置は石組部上に移り、$^{a}/_{b}$は1倍前後の数字を示す。

以上の関係は、大型炉の場合、柱2～3にかける梁を石組部の火気にあてない配慮がなされたが、炉の小型化とともに、火気に対する配慮の必要性が低くなり、a：bが1：1という安定した型へ変化したと推定される。

ところで、3本柱の構造では、3本柱を結ぶ梁に棰を直接かけては竪穴の周辺部とくに炉の上部は非常に低い屋根となり、炉での火の使用はもちろん使用上非常に不便なものとなる。したがって上屋を葺くには、方形に近い桁が必要とされる。この対策として図の点線のような浮桁設計により石組上

部の空間を大きくとることが考えられる。二本松市原瀬上原遺跡と国見町岩淵遺跡の復原住居は、以上のような構想をもとに復原したものである。実見のうえご検討願えれば幸いである。

3　ま　と　め

以上、複式炉についての形態分類と機能の考案を行い、また複式炉と3本柱の住居址との関係についてふれてみたが、複式炉は縄文時代を通じて時間・空間的に最も発達した炉の形態を示すものといえよう。

この複式炉は、縄文中期後葉において福島県を中心に宮城・山形・新潟の各県と北関東地方にもわずかにみられるといわれる。福島県内では、すでに約100例が知られているが、上原A遺跡の調査により詳細な形態分類が可能であることを提起することができた。その変化は土器編年以上に細分される可能性をもっており、縄文時代の社会構造を追究するには重要な手掛かりとなるものと思料される。そのためには、今後、各遺跡の調査結果の公表をまち、集落内における住居址の配置、炉の方位、土器編年、住居址のプランとの関連などを総合的に把握し、そのうえで検討すべきものと考える。

土器埋設部の機能については、先にパン状加工を推定したが、その退化と消滅については、加工技術の改善があったと思われるが、基本的には堅果類への依存率の減少にあると考えたい。その原因としては、人口増と採集による絶対量の不足であり、堅果類を中心とした採集経済形態の崩壊にあると推定したい。

そこに東北地方南部における縄文中期の内陸的採集経済の崩壊を考えたい。そして縄文後期における漁撈依存度の高まり、内陸における後期集落の低湿地への立地など、後期的採集経済への転換が必要となったと推定しておきたい。このような観点から複式炉の消滅を縄文中期のピリオドと見ることも可能であろう。

（目黒吉明）

第3節　ピ　ッ　ト

ピット状遺構としては、埋納土器に付随するピットと柱穴・袋状ピット・円筒状ピットなどがあるが、ここでは、ピット自体が問題とされる後二者について検討してみる。

第3章の「第2節ピット」において、袋状ピットと円筒状ピット(A)の特色を指摘したが表記すると第3表のとおりである。

第3表　袋状・円筒状（A）ピット対比表

	袋　状　ピ　ッ　ト	円 筒 状 ピ ッ ト （A）
形　態	平面…円形、断面…台形（袋状）	円筒形
規　模	口径（現存）90～158cm、底径180～245cm、深さ（現存）30～80cm	直径80cm前後、深さ（現存）65～115cm
内部の土　層	腐植土と地山のロームが混在し、焼土・木炭を含むことが多い。	腐植土と地山のロームが混在するが、焼土・木炭はほとんどみられない。
伴出物	土器・土偶・剝片などを伴出し、数個の礫を伴う。大石伴出例あり。	遺物は、ほとんど伴わず、礫も伴出せず。
住居との関連	住居址とは離れ、一群として存在。	住居址群と複合して散在。
時　期	大木7ｂ～大木8ｂ式期と推定される。	大木９～10式期と推定される。

1　袋状ピット

袋状ピットは、その特意な形態から、①貯蔵穴、②墓穴、③仮設のねぐら[3]、の３説があるが、定説といえるものはない。

第３表をもとに「貯蔵穴」としての利用について検討すると、①多量のロームが存在することは、貯蔵物をとり出した時点で埋戻した土とはみられない。もちろん自然の堆積とは考えられない。②崩れやすい形態（発掘中に崩れたものもある）にもかかわらず、使用による崩壊がみられない。貯蔵物を取り出すための、２次的掘り込みの痕跡もみられない。③住居と離れて存在しており、管理上の問題がある。④焼土・木炭・土偶の出土は、貯蔵とは関連付けが困難であり、むしろ土偶の出土は、ピットが信仰と関連したものであることを感じさせる。⑤伴出の土器は、ほとんど完形品ではなく、また大型の器形のみでなく、出土状況からも貯蔵用具としての使用状態とはみられない。

以上の諸点があげられるが、とくにピット内部の土が、沖積世の腐植土とともに、地山である洪積世ロームを多量に混在していることは、掘り上げた土を直ちに埋戻したものと推定される。これらのことから食物などの貯蔵穴とすることは困難とみられる。（もちろん「仮設のねぐら」とみることも困難である。）

以上の結果から袋状ピットは、永久的に物体を埋納した遺構と推定したい。埋納した物体が何であったかが問題となるわけであるが、伴出した土器等は出土状態（多くは中間層に大形破片として検出される）から副次的なものとしかみられない。現時点では明確な回答はみいだせない状況にあるが、死者を埋葬した墓壙とみることが妥当のようである。

その一つの視点として、袋状の形態に注目したい。袋状に口を小さくすることは、地上との隔離が目的であったと考えられる。

草間俊一は、民俗例にもとづき、ピット内の保温の効果があることをあげているが、むしろ死霊の封じ込めのための精神的な機能の存在を推定したい。すなわち、ピット上層部の焼土の存在とあわせて、袋状の形態は、死霊を地下に封ずるため口を小さくするという呪術的思考にもとずいた構造と考えたい。袋状ピットが住居から離れた地点に群をなして存在することも死霊に対する恐怖観念が強かったことを示すといえよう。ピット上層の焼土は火の使用を推定させるわけであるが、火によって口を封ずるという呪術的行為の存在も推定される。

次に伴出物の面からの考察を行うならば、まず4号ピットの石の存在が注目される。すでに貝塚等において抱石葬の存在が知られており、遺体は発見されていないが、抱石葬との関連が考慮され、ここにもまた死霊に対する恐怖観念の存在として理解されるものがある。

さらに、伴出する土器片とともに小礫が発見されているが、土器は大形の破片として中間層に投げ込まれたような感じで発見され、礫で打ちこわして埋納したとみることも可能である。当時、土器類に対する個人的所有権が存在したかは不明であるが、被葬者が生前密接な関係にあった物を破壊して埋納したとみることはできないであろうか。時期は降るが、弥生時代に独鈷石（金山町居平遺跡）や管玉（郡山市柏山遺跡ほか）を破砕して墓壙に埋納したものがあり。その可能性は高いとみられる。

郡山市山王館遺跡では、袋状ピットから三角壕土製品や小型土器が出土した例もあるが、被葬者が密接な関係があった物を埋納したとみることができるならば、被葬者の生前における社会的地位をうかがうことができる。

前述の論考が肯定されるならば、土偶を出土した5号ピットは、生前に呪術にたずさわった人物の墓壙とみることができよう。

以上、袋状ピットについて調査者として現時点での考察を行ったが、今後、新資料の増加をまって再検討してゆきたい。

なお、昭和48年、福島県教育委員会（担当者　目黒吉明）が調査した白河市泉川遺跡において、鵜ケ島台式土器（底部欠失）を伴う袋状ピット2例が発見されており、袋状ピットの上限は縄文早期後葉にさかのぼることがうかがえる。

2　円筒状ピット（A)

円筒状ピットには、内部の土が地山のロームを含むもの(A)と、沖積世の腐植土のみが堆積したもの(B)とがあることをのべたが、出土例の多い(A)型について簡単にふれておきたい。

円筒状ピット(A)の特長は前述したが、ロームが混在する点、袋状ピットと共通点をもっており袋状ピット同様墓壙であったとみておきたい。

袋状から円筒状へと形態変化をしたのは、時代の下降とともに厚葬へと変化する過程で、死霊恐怖観念の希薄化によるものとみたい。それは、住居址に接近して存在することや、土器類を破壊して埋納する風習がみられなくなる傾向とあわせて肯定されよう。

袋状ピットと円筒状ピットについての試論をのべたが、これらのピットが墓壙として肯定されるならば東北地方南部における縄文早期から後期にかけての葬制は下記のような変遷が推定されよう。

	早期（後葉）	前期	中期（前葉）（大木8式まで）		中期（後葉）（大木9～10式）		後　期
〔形態〕	袋状ピット		袋状ピット	→	円筒状ピット	→	長円形ピット
	土壙（僅少）	？	？		土壙（少数）	→	土　壙
			甕棺（小数）		甕棺（少数）	→	甕棺（盛行）

（目黒吉明）

参　考　文　献

(1) 丹羽　茂　「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古　第15号』福島県考古学会　1974

(2) 目黒吉明ほか『上原遺跡概報』二本松市教育委員会　1969

(3) 草間俊一　「日本原始時代の生活についての一考察」『森嘉兵衛教授退官記念論文集』

第6編　塩沢上原B遺跡

遺跡番号	13—34
所在地	福島県二本松市塩沢字上原
時代・種類	縄文時代（中期）集落
調査期間	昭和46年11月23日～11月29日 昭和47年7月31日～8月12日 昭和47年9月1日～9月3日 昭和47年9月6日～9月11日
担当者	永山倉造
調査員	岩田敏之　永山祐三　木本元治　吉田幸一　横山英介 渡辺一雄
協力機関	二本松市教育委員会　二本松市塩沢公民館　塩沢区

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 119
　第1節　位置と地形…… 119

第2章　調査経過…… 119
　　第1次調査…… 119
　　第2次調査…… 120
　　第3次調査…… 121

第3章　遺　　構…… 122
　第1節　住居址…… 122

第4章　遺　　物…… 127
　第1節　土　　器…… 127
　第2節　石　　器…… 130
　第3節　土製品…… 130

第5章　考　　察…… 131
　第1節　土　　器…… 131
　第2節　炉の形態と集落構成…… 131

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

阿武隈川の支流である湯川・渋川などの流域にあり、安達太良山の東に広がる裾野一帯にある遺跡の一つである。上原A遺跡から北東に延びる低い尾根続きの丘陵上に上原B遺跡がある。（図版1、4、6）

丘陵は、南北約140m、東西の幅60m、比高は15mほどの小規模な丘陵である。尾根は中央線より西によっており、したがって西斜面は急勾配となっている。東斜面は西斜面ほどではないが、かなりの勾配を示し、かつ雑木林となっており、一般的な集落が存在する地形とは考えられない状況であった。

なお、上原A・上原B・田地ヶ岡の3遺跡は接近して存在しており、周辺の遺跡は共通するので当編では省略した。

（永山倉造）

第2章　調査経過

第1次調査

調査現場は山林で、遺跡が所在すると考えられる場所は急傾斜であり、当初から調査の困難が予想された。まず雑木林と藪のため、ふみ込むことが出来ないので、南西部に人員を投入して刈り払い作業に入ったが、作業は進展しなかった。このため調査員協議のうえ、遺跡一帯の雑木を焼き払うこととし、二本松市教育委員会を通じて野火をつけることを二本松消防署へ通知し、許可を受ける。まず野火止め帯を2か所設け、刈り払いを行う。11時ごろ無風となったため2か所に火を入れ、調査員・作業員全員警戒のうえ焼き払いを進める。同日中に4,000㎡の焼き払い作業が終了した。

11月24日よりAトレンチを南面道路に平行して、長さ20m、幅2mに設定する。同じく南面道路に平行して、長さ20m、幅2mのBトレンチを設定する。土器片が出土する。川石が多数出土したが用途不明である。この両トレンチ内には遺構が発見されないため、25日、中腹部・頂上部にC・D・E・Fの各トレンチを設定する。この4トレンチとも土器片・川石が出土するが、遺構は不明である。

この山頂部一帯は安達Oローム と呼ばれる沖積世の火山灰層があり、洪積世ローム層と非常にまぎらわしく調査は難行した。遺跡の性格がつかめないまま、26日新たにGトレンチを丘陵中央山頂部から麓にかけて、長さ30m、幅2mに設定した。Gトレンチ内からも土器・川石などが、ほかのトレンチと同じ状態で発見された。29日の調査期間最終日まで調査を進めたが、確定的な遺構は発見できないまま第2次調査にゆずることとして第1次調査を打切った。

第2次調査

昭和47年7月31日、前年に引続きAトレンチ・Fトレンチ・Bトレンチを重点に調査をはじめる。担当者永山倉造、調査員岩田敏之・永山祐三・木本元治・吉田幸一、県教育庁文化課より渡辺一雄・横山英介・長尾修が参加した。

まずBトレンチを拡張し調査を進めたが、遺構はなかなか発見されない。遺物は石皿・凹石・土器片など多量に出土する。Bトレンチの西に設定したFトレンチの調査もあわせて行ったところ、セクションに住居址プランの落ち込みを発見、8月8日より精査を進める。8月9日、この遺構の東のB—1トレンチのセクションに新たに住居址と考えられる落ち込みが発見されたため、並行して精査を進めたところ、炉址と思われる石組が発見された。8月11日、F・Bトレンチにかかる遺構を1号住居址と名づける。同じくBトレンチの遺構を2号住居址と名づけ、本遺構についての調査は8月末に予定している第3次調査に持ち越すこととする。

Dトレンチは山頂部の平担地であるが、第1次調査により黒土の落ち込みが発見されている場所である。8月7日、ここにA～D—1～11のグリッドを設定する。A—3・4、B—8・11、C—7・11、D—7より土器の出土が多い。8月7日、C—11より石組が発見された。これは炉址の可能性が考えられる。このグリッドを設定した地区は全面にローム層があり、その中から縄文土器が発見されているため、住居址の床面を検出するのに非常な苦心をしていたところである。このローム層も第Ⅰ層・第Ⅱ層ともに土器を包含していたが、8月10日、第Ⅲ層の精査を進めたところ、この第Ⅲ層からも土器が発見されたため、思い切ってローム層を掘り下げることにした。8月11日、第3次調査のための遺構保存作業を行った。

第1次のAトレンチに接して、A—2トレンチを設定し調査を進めたところ、8月4日石槍が発見された。このトレンチは土器・石器等完形に近い遺物が出土するため、この斜面上方に遺構の存在が考えられ、新たにAトレンチに直角にHトレンチを設定し調査を行ったが、8月11日の第2次調査終了時までには遺構は発見されなかった。

第3次調査

9月1日より第3次調査を開始。B・Fトレンチの石組は、精査を進めるにしたがって、炉址であることが明らかとなった。さきに1号住居址と名づけたもので、調査の結果住居址のプランは北壁のみであとは崩壊したものと考えられる。炉址は割合完全に近い形で残っており、2×0.9mの複式炉で埋設土器は2個である。柱穴などについては不明であった。

2号住居址は、1号住居址と同時に精査を進めたが、東・北・西の3方の壁が確認され、中央部にあった川石を掘り下げたところ複式炉が発見された。住居プランは、ほぼ円形で径5mである。

第2次調査において発見されたC—10グリッドの石組は炉址の一部と考えられたため、セクションを取りはずし調査を進めたところ、3.20×1.8mの複式炉で埋設土器が2個発見され、住居址であることを確認した。3号住居址と名づけた。

9月1日、第2次調査の際土器片が多く発見されたD—7、C—7及びA—4、B—4グリッドを並行して調査を進める。まずA—4、B—4から把手付カップ形土器等が発見され、第Ⅳ層より住居プランが発見されたため、4号住居址と名づけ調査を進める。径5.5mの円形プランを持ち、中央に1.8×1.2mの埋設土器2個を持つ複式炉を中心として小形の埋設土器5個が炉の周辺を取りまく形で検出された。柱穴は6個あるが、3個は構築時のものであり、あとの3個は再築時のものと考えられる。この遺構は一面に炭化物があり、柱状のものもある。

D—7、C—7グリッドからも炉址と思われる石組が見つかったため、精査を進めたところ1.9×0.9mの埋設土器が2個ある複式炉が検出された。これを6号住居址と名づけた。プランは5.3×5.8mで柱穴は2個のみであった。

Dトレンチで第2次調査時に粘土のブロックが発見され、この用途について調査が難行したが、結局は住居址埋没の際に混入したものと考えられた。粘土ブロックを取り除き精査を進めた結果、埋設土器2個を有する複式炉と判明し、本遺構を5号住居址と名づけた。プランの東南部崖に面した一部分は欠失して明らかではないが、その大部分は保存されていた。プランの径は約6.6mで、炉址は中央にあり1.8×1.4mである。柱穴は3個である。

Dグリッド地区の調査を進めている9月3日午後2時頃、工事用道路を設置するため、ブルドーザーで遺跡の東南部を整地作業中、焼土が発見されたので、緊急に調査を行ったところ、炉址が発見された。このため工事中止を申し入れ、直ちに県教育庁文化課に連絡、事後処理を依頼する。夕方、今野係長が到着し今後の調査について協議を行い、9月6日より5日間、調査を延長することとした。

7号住居址は、さきの緊急調査により住居址であることが明らかになったものであるが、9月6日

より精査を行う。プランの径は4mと小形である。炉址は埋設土器が1個の複式炉で、大きさは1.2×0.8mと小さい、柱穴等は不明であった。

調査の後半は順調に進んだが、工事も進行し、焼土の中から複式炉の埋設土器と思われる土器が発見され、8号住居址と名づけたが、この住居址はブルドーザーが、その上部を完全に削平したため調査は不可能となった。

3号住居址の精査中、今調査の最後の遺構が発見された。まず3号住居の南斜面のセクションに切り合った別の落ち込みが見られたため、床面を掘り下げたところ、隅丸方形の住居址らしいので精査を続ける。床面東側より中空土偶が発見された。最後に崖のすれすれの南東部より埋設土器2個を有する複式炉が発見されたため、本遺構を9号住居址と名づけた。各住居址及び炉址の実測を行い、上原B遺跡の全調査を終了する。（図版2、3、5）　（永山倉造）

第3章　遺　　構

第1節　住　　居　　址

本調査により発見された住居址の数は9軒を数え、うち2軒は工事中発見であり、8号住居址は、そのほとんどが破壊されたものである。これらのうち特筆すべきものとして4号住居址をあげることができる。それは埋設土器が全部で7個あることである。また9号住居址は中空土偶を出土したことで注目されるものである。

遺跡のある丘陵は、上原A遺跡の東方約50mにある独立丘陵で、140×60mの大きさである。調査の結果として明らかにされたところによれば、ふもとを流れる小河川の氾濫などによって、遺跡の西部地区が最も崩壊していることが明らかである。3号住居址は、その北東部約3分の1を失っている。1号・2号・9号住居については、土地狭隘のため南東部を土盛りにより造成した形跡がみられるが、いずれもその部分は崩壊している。

1号住居址（図版7・14）

立地は上原A遺跡のある丘陵から低い尾根伝いに通ずる通路を上原B遺跡に入って最初の住居址である。

平面プランは、南東部の土盛りによると思われる造成部が崩壊しているため全形は明らかではないが、北西部に残存する3壁面から推定すると円形と考えられる。径は約5mと推定される。北西部に

残存する竪穴の壁は、床面から35cmである。東部・西部の壁は大部分は流されているようであり、南部は崩壊し流失している。周溝は、床面及び堆積土がロームの黄色土であるため検出がむずかしく、明らかでなく、柱穴も検出できなかった。

炉址は、主軸線がほぼ南北に通り、2.1mの長さを持ち、幅80cmである。組石の状況は不明であった。埋設土器は2個あり、それに続く、敷石のある部分は、外側の石組は保存されているが、底部については明らかでない。この大きさは80×80cmである。石組部は80×60cmである。住居址内の遺物出土状況は、炉址を中心として土器片が散乱していたが、完形品はない。第1次調査の際、Bトレンチから発見された土器は、本住居址が崩壊するとき、流れ出し傾斜面に堆積したものと考えられる。

2号住居址（図版17）

本住居址は、第1次調査においてBトレンチのピット状の遺構内より土器が数点発見された地点で、その際にも住居址の可能性が考えられていた。

平面プランは、径5mであるが、南側は盛土により造成した遺構と思われるため、南側1.5mは地すべり等により崩壊したことが考えられる。

周壁は、北部のみが残存しており、南部は盛土のため崩壊したものと思われる。また周溝と柱穴とは明らかでなく、炉址も工事中に発見されたため明らかでない。本住居址では、遺物はローム層の黄色土の中から発見されているが、完形のものは出土していない。

3号住居址（図版8・9・14・21）

本住居址は北及び西が崖となっており、渋川の氾濫によって、上原B遺跡のある丘陵のふもとがえぐられ、地すべりを起したため住居址の主要部が崩壊し、炉址及びピットだけが残存している。

炉址から東壁までの半径が4mあることから推定すると、3号住居の径は8mと大形のプランを持っていることが考えられる。壁は、東壁が比較的良好であるが、北及び西壁は欠失して不明である。南壁は、9号住居址によって切られているため不明である。周溝は平均18～20cmの幅を持ち、深さは5～10cmである。これも東溝が残存しているのみで、ほかは不明である。炉址の南袖70cmに、径55cm、深さ35cmの柱穴が検出され、また炉址の東170cmに径50cm、深さ20cmの柱穴がある。その他の柱穴は住居址の北側が崩壊しているため不明である。

炉址は複式炉で、ほぼ南北に位置し、東南部に焚口があり、埋設土器は西北側に2個、たてならびに埋設されている。全長3.20m（浅い開口部を含む）、石組の長さは2.4m、幅1.8mで、本遺跡では最大の規模を持つものである。焚口に当る部分は50cmの長さを持ち、幅は1.50mで少し凹んでいる。敷石石組部は灰白色を呈した川石を使用し、長さ1.10m、幅1.80m、深さは35cmである。立上りの奥壁部の大形の石は焼けた痕跡がみられ、花崗岩は焼け崩れがはげしかった。奥壁に接触している埋設土器は径34cm、深さ45cmあり、これに接続する土器は径45cm、深さ40cmである。これらの土器の内部

は熱のために焼けただれ軟弱化している。この埋設土器の外側には小さな川石を敷きつめてある。

炉址の北東2mの場所に東西85cm、南北110cm、深さ83cmのピットがある。このピットはほぼ方形を呈して壁は直立しており、底部も同じ大きさである。内部の堆積土は底部に近い部分は黒色土で、上層はローム混入の黒褐色土である。遺物の出土はなかった。住居址内の遺物出土状況は、土器が第Ⅲ層から多く出土している。第Ⅲ層は茶褐色土で第Ⅰ層の黄褐色土との見分けが困難で、遺物の検出がむずかしい状態であった。9号に近い床面に埋設土器が1個発見されている。　　（永山倉造）

4号住居址（図版10・15・18・21）

平面プランは楕円形を呈し、5.5×5.0mの径を計る。壁の立ち上がりは南側の一部を除き非常に良好で垂直に立ち上がり、壁高は東壁で床面から45cm、西壁で32cm、北壁で45cmであるが、南壁は崩壊しており、わずかに1.5cm程度の立ち上がりが辛うじて確認できたにすぎなかった。周溝は、比較的良好な状態で確認されたが、南側においては明確に確認することはできなかった。周溝の幅は東側で15cm、西側で20cm、北側で20cmであり、底部は平底である。柱穴と思われるピットは合計6個確認されている。55～60cmの大きいピットと、35～40cmの小さいピットが二つで一組になるような状態で、東側・西側・北側に位置している。北側のピットは周溝に接するような位置にあるが、東側のピットは壁より130cm程度、西側のピットは壁より80cm程度内側に位置している。ピットの底部は平底である。

炉址は川石を使用したいわゆる複式炉で土器埋設石囲部内に2個の埋設土器を配していて、ほかに土器埋設石囲部の北側に東西に10～15cmの間隔で3個、また東脇・西脇に各1個ずつ土器を埋設している。そのプランは土器埋設石囲部を馬蹄形に囲むような状態になっている。敷石石組部は、25×30cm程度の石を東西・南北に3個を基礎として敷き、間に小石を利用してパッキングし、側面も5×10cm～10×20cm程度の小形川原石で囲んでいる。石組部は、20～30cmの川原石を両脇に1個ずつ配置してあるにすぎず、それに伴う遺構は確認できなかった。

2個の埋設土器は、その周囲とともに土器自体が非常によく焼けており、土器内には焼土及び灰が多量に含まれていた。また敷石石組部の土器に近い3個の石はその影響を受けたと見え、良く焼けており、赤味を帯びていた。複式炉外の5個の埋設土器の場合は、やはり焼けていて土器中に焼土や灰が含まれてはいるが、炉内の土器よりは焼けてはいない。かかる事実によれば、炉内の埋設土器は恒常的に火が燃やされていたのに比べ、炉外の埋設土器は利用度がそれよりは少なかったと見るべきであろう。

本住居址内には、幅15～20cmで、長いものでは1.70～1.80mの垂木や柱などを思わせる炭化した木材が多数確認されているが、住居址の床面や壁などが火災を思わせるような焼け方をしていないことから一概に火災家屋とは判断できないようにも思える。住居址と炭化木材、それに焼土との関係は、

これからの研究課題であろう。出土遺物は土偶・把手付カップ形土器・円板状土製品等が出土しており、複式炉東側に集中している。また円板状土製品の出土量が多いことも注目しなければならないであろう。

5号住居址（図版11・15・21）

本住居址は、南側4分の1が傾斜に沿って崩壊しているため全体のプランは明らかでないが、形のくずれた隅丸方形に近い楕円形を呈していたと思われ、東西6.0m、南北は北壁から崩壊している所までで4.5mを計る。壁の立ち上がりは比較的良好でしまりも良い。周溝は現存する住居址プランの全体にわたって確認されている。深さは住居址床面から、深い西側周溝で4cm、浅い東側周溝においては2～3cm程度である。

ピットは住居址中央において東西に2か所、北側周溝においては1か所が壁から16cmはみ出して位置している。東西にならぶピットのうち、東に位置するものは南北80cm、東西82cm、深さ64cm、西に位置するものは南北74cm、東西60cm、深さ62cmを計り、大型なもので、また両方のピット中より縄文土器片が検出されており、柱穴として考えるには問題が多い。また北側周溝において確認されているピットは、南北50cm、東西46cm、深さ50cmを計る。

炉址は複式炉である。埋設土器は2個あり、その周辺を大小9個の川原石が囲んでいる。敷石石組部は土器埋設石囲部寄りが45×60cmを最大として、ほぼ同じ大きさの川原石が3個並べられ、その後側を20×23cmの比較的小さい川原石を使用して敷いている。石組部は15×50cmの長い川原石を1個ずつ配置して石組部としている。埋設された土器は2個とも良く焼けており、土器埋設石囲部に利用した川原石、敷石石組部とも良く焼けており恒常的な火の使用をうかがわせる。全体的なプランは南北1.5m、東西1.4mで他の住居址の例と比べて幅がやや広い感じがする。遺物は縄文土器片が住居址内各所から出土している。

6号住居址（図版12・13・16・19・21）

楕円形で隅丸方形プランのくずれたような形を呈している。住居址の東壁半分は崩壊しており、南北5.4m、西壁から東壁の残存している部分まで5.7mを計る。壁の立ち上がりは、西壁においては良好で壁高も46cmを計るが、他は壁高も低く南壁では周溝において、かすかに確認できるにすぎない。周溝は東側の崩壊部を除いて全体に確認でき、7～15cmの幅を計る。深さは西側の部分で10cm、北側で8cmであり、南側は比較的浅く4cm程度しかない。

柱穴と思われるピットは住居址の北側と南側で確認されており、北側ピットは東西45cm、南北50cm、深さ83cmを計り、円柱形の断面を呈す。南側ピットは東西45cm、南北40cmの円形で、深さ68cmを計り、同じく円柱形の断面を呈する。おそらく住居址内西側にも同じ程度の大きさを持つ柱穴の存在が考えられる。

炉址は複式炉で全長1.9m、幅0.9m内外を計る。土器埋設石囲部の土器は2個あり、大きい方が口径32cm、小さい方が18cmを計る。土器を囲む石は10個近くあり、小さいもので5cm、大きいもので15×25cmの川原石を利用している。敷石石組部は15×20cm内外の石を敷いて、その外周や石の間を5cm程度の川原石でパッキングしている。石組部は両脇に25×20cm、40×18cmの川原石を1個ずつ配置している。土器埋設石囲部中の2個の土器の内外面とも良く焼けており、土器内には焼土及び灰が多量に含まれていた。また敷石石組部も焼けて赤味を帯びていた。出土遺物は住居内全般にわたって縄文土器片が出土している。

7号住居址（図版16）

円形の平面プランを呈する住居址で、傾斜下方である南側3分の1が崩壊してしまっている。壁は比較的良くしまっているが、壁高は西壁で7cm、北壁で8cmしか残存していない。周溝は検出されておらず柱穴等のピットも検出されなかった。

炉址は石組部が若干くずれているものの、いわゆる複式炉で、土器埋設石囲部には径18cmを計る土器が埋設されており、その周辺を7～8個の川原石で囲むように石組されている。敷石石組部は中央部がへこむように構築し、小さいもので6×6cm、大きいものでは42×16cmの川原石を利用している。石組部については施設が検出されておらず、炉址全体の形が他の住居址のそれと比較して若干くずれている。このくずれた形が崩壊によるものであるか、または初現的タイプ、衰退期におけるタイプかについては、他の類例及び土器の新旧関係とも考え合わせて判断する必要があるであろう。埋設土器、それを囲む石囲、及び敷石石組部は強く火をうけており、土器中には焼土・灰が多量に含まれていた。出土遺物は土器埋設石囲部の土器以外には縄文土器小片が若干検出されたにすぎない。

8号住居址

本住居址は、7号住居址の北東方向10mの地点において、平面プランが確認された。径4.5mの円形プランを呈していた。発見されたのが、調査終了日であったため調査は不可能となった。

9号住居址（図版14、20）

本住居址は、北西壁が一部残存しているだけで、他の壁は崩壊してその全体の平面プランを確認することはできなかったが、北西壁のコーナーからコーナーまでの長さは5.0mを計る。残存している壁の立ち上がり、硬さは共に良好で、周溝は幅5～10cm、深さ5cmで比較的しっかりしている。柱穴と思われるピットは住居址内には確認できず、北西壁の周溝から壁外に張り出す径40cmのピットが確認されているだけである。炉址は複式炉で、住居のほぼ中央に位置していたと思われる。埋設されている土器は2個で小さいものが径30cm、大きいものが径38cmである。土器埋設石囲部は良好な状態で残っており、5～15cm内外の川原石を利用している。敷石石組部は中央に5～15cm内外の比較的小さい川原石を敷き、外周に15×35cm～25×40cmの大きい川原石を敷いている。石組部は敷石石組部から

54cmほどはなれて、35×12cm、45×20cmの川原石を配置し、2個の石の間に10×20cmの川原石を置いている。埋設土器は内外面とも良く焼けており、土器中には多量の焼土・灰が混入していた。また敷石石組部も焼けて、石上面が赤味を帯びている。石組部の石は意識的に離して置いたようにも見えるが、住居の崩壊が激しいところからその際に流出してしまったとも考えられる。遺物は住居中央部の炉址から東に60cmの所で土偶、また炉の北側50cmの所で土器が出土しているが、ともに住居址床面からわずかに浮いて検出されている。（吉田幸一）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

1号住居址（図版22・29—1）

住居址内堆積層中より把手付土器が検出されている。現高は16.3cm、最大径18.7cmを計り、文様は胴部中位に幅広い沈線で区画された磨消縄文による文様がある。また頸部にも同様な文様があったらしい。縄文の部分以外は、外面全体に磨きがかけられており、縄文は単節でL—Rであった。縄文の末端は沈線の磨きにより削られており、縄文を施文したのち、最終的に磨きをかけた状況を示している。

炉内からは、胴部下半にL—Rの縄文が施され、底部付近に磨きのかけられた土器片が検出されている。粗製土器の一部分かどうかは不明である。

2号住居址（図版22—2～5、29—2・4、30—11）

複式炉からは2個体の埋設土器が検出されており、1個は下半分のみで全体に乱れたような浅い縄文が施され、底部とその付近は磨きがかけられている。胴部の厚さは6～10mmで、色調は再酸化を受けたものらしく全体に明るいオレンジ色を呈し、内面はかなり崩れ、凹凸が見られる。

別の1個は口縁部を欠くのみで頸部のややくびれた深鉢形土器で、現高30.7cm、胴部最大径24.2cm底径7.9cmを計る。土器外面はほぼ全体に無節L$\begin{cases} r \\ r \end{cases}$の縄文が施され、底部及び底部より5cmくらいの部分まで磨きがかけられている。内面は全体に磨きが施され、上部は横方向、くびれより下は縦方向の磨きが観察される。色調は全体にオレンジ色がかった黄土色を呈し、強く再酸化を受けた部分は赤味がかっている。

住居址内堆積層からは胴部のややくびれた小形深鉢形土器が検出されている。現高9.7cm、胴部最

大径 9.4cmを計り、最大径付近には胴下半部の縄文帯と上部文様帯を区画する沈線があり、その上には沈線により区画された磨消縄文による文様が施されている。この文様はおそらくU字または「の」の字形になるものであろう。

3号住居址（図版22—6、23—1～3、29—3）

複式炉から2個体の埋設土器が検出されている。№1埋設土器は、口縁部の外反する深鉢形土器で現高30.0cm、口縁径28.4cm、胴部最大径24.2cmを計り、文様は隆帯と沈線により区画された磨消縄文による文様が施されている。縄文は単節R—Lである。内面は、全体に横方向の磨きがかけられている。内面上半及び外面口縁部に再酸化の痕跡が見られる。

№2埋設土器は底部付近のみであり、外面には撚りのゆるい単節L—Rの縄文が施され、底部とその付近には磨きが施されている。また沈線と磨きの一部が残っており精製土器の底部と考えられる。

床面からは沈線で区画された磨消縄文による「∩」字文様、及び懸垂文を有する深鉢形土器の大形破片及び頭部の角張った懸垂文を有する土器片が検出されている。縄文は単節L—Rである。

4号住居址（図版23—4・5、29—5・7）

複式炉より2個体、その周りから5個体の埋設土器が検出されている。複式炉№1埋設土器は深鉢形土器で、口縁部を欠き、現高37.9cm、胴部最大径25.5cmを計り、胴部中位のくびれより口縁は外反するようである。文様は胴の上半と下半に分かれ、沈線で区画された磨消縄文によるSを横にしたような単位文様を、上下とも2回くり返している。縄文は単節L—Rで、充填技法が用いられているらしい。外面のくびれの上の部分と胴最大径付近に著しい再酸化の痕跡が見られ、内面の下半部には炭化物の付着が見られる。

№2埋設土器は、胴部中位から上位付近でややくびれ、口縁が外反するらしい深鉢形土器で、現高23.0cm、胴部最大径22.9cm、底径 6.6cmを計る。文様は上部には沈線で区画された磨消縄文による縦長の楕円文と「∩」字らしい文様、下部には懸垂文が施されている。縄文は単節R—Lである。内外面とも全体に入念な磨きが施されており、色調はやや暗い黄土色を呈し、くびれの部分幅3～5cmくらいに再酸化による赤色化が見られる。内面では赤色化は見られないが、くびれより上の部分が荒れざらざらになっている。

その他の埋設土器は胴下部から底部にかけてのものと、破片を組み合わせたものである。文様は縄文のみで、外面に再酸化による赤色化、内面に炭化物の付着が見られる。

床面からは小形の把手付カップ形土器が検出されている。高さ14.0cm、口縁径3.25cmを計る。文様は、文様帯とその下の部分を区画した波状沈線の上の部分に、沈線で区画されたC字形の文様が施されている。さらに全体に入念な磨きが施され、外面及び内面口縁付近には、丹塗りの痕跡が見られる。

5号住居址（図版29—6）

複式炉の埋設土器は胴張りのある深鉢形土器が用いられている。口縁部と底部を欠き、現高22.0cm最大径26.4cmを計る。胴下部には文様帯とそれ以下を区画する波状沈線が施され、その上半部には沈線により区画された磨消縄文による文様が見られる。その文様は上原A遺跡I区15号住居址複式炉埋設土器と類似したものとなるらしい。縄文は単節L—Rである。

そのほか沈線で区画された磨消縄文により、S・C字形の文様と考えられる文様が施された土器片も検出されている。

6号住居址（図版23—6、24—1、30—1・6）

複式炉より2個の埋設土器が検出されているが、1個は胴下部のみで底がぬけており、磨きのみで文様はない。別の1個は深鉢の一部らしい縄文のみのものであり、縄文は単節L—Rである。住居址内堆積層中からは、沈線で区画された磨消縄文のある土器が検出されている。

7号住居址（図版24—3、30—2）

7号住居址は遺物が少なく、かなり崩れた状態の複式炉から縄文のみの埋設土器が1個検出されたのみであった。この土器は底部と口縁部を欠くが、深鉢形であったと考えられる。器形は頸部がくびれた形を呈し、現高9.0cm、胴部最大径19.7cmを計る。縄文は単節R－Lであり、全体に再酸化を受けており、オレンジ色がかったクリーム色を呈している。

9号住居址（図版24—4、30—3・4）

複式炉からは2個の埋設土器が検出されている。№1埋設土器は外面全面に縄文が施文された頸部のややくびれた完形の深鉢である。高さ32.3cm、口径29.3cm、胴部最大径29.5cm、底径9.5cmを計る。外面には撚りのきつい単節R－Lの縄文が全面に施され、内面は頸部より上は横方向、下は縦方向のなでが施されている。

別の1個は、キャリパー形と考えられる大形破片で、沈線で区画された磨消縄文による文様が見られる。

住居址内堆積層中からは、口縁部を欠く、そろばん玉形をした把手付土器が検出されている。現高13.0cm、胴最大径22.9cm、底径9.0cmを計る。文様は沈線による渦文、沈線で区画された磨消縄文によるC字文等の文様が見られる。

Aトレンチ（図版24—2、30—7）

第Ⅳ層より、そろばん玉形のひもかけらしい把手の付いた土器が検出されている。底部が欠損し、現高14.0cm、口径10.2cm、胴最大径14.8cmを計り、全体に磨きが施され、暗茶褐色を呈す。

Cトレンチ（図版30—9・12）

Cトレンチ第Ⅱ層中よりミニチュア土器2点が検出されている。1点は全面に縄文が施され、1点

は全面に磨きがかかっている。

第2節　石　　器

石　　斧（図版31—6・7・9）

3号住居址より緑泥片岩製（図版31—6）、5号住居址より蛇紋岩製の磨製石斧（図版31—7）、4号住居址より安山岩製分銅形打製石斧（図版26—8、31—9）が検出されている。磨製石斧はそれぞれ定角形と考えられる。3号住居址の例は刃部を欠損し、欠損した部分にペッキングにより加工を加え再利用しているらしい。5号住居址の例は刃部のみで、刃部付近に使用痕と思われる擦痕が見られる。4号住居址出土の打製石斧は一部に自然面を残す比較的扁平な大形剝片を用いて作られている。

石　　槍（図版26—10、31—8）

Aトレンチ第Ⅳ層より検出され、石材は流紋岩である。両面加工の細長い形を呈し、一部にステップフレーキングによる加工が行われ、表面はやや稜を形成している。

石　　鏃（図版26、31）

当遺跡では石鏃の検出例は少なく、表土より出土した2点のみであった。1点は黒曜石製で（図版26—6、31—1）入念に両面に加工の加えられた無茎の三角形を呈する。他の1点は（図版26—5、31—2）瑪瑙製で、うすい剝片の周辺部にのみ加工を施したもので基部が丸味をおびている。

石錐・その他（図版26、31）

表土中より石錐（図版26、31—3）・スクレーパー（図版26）と若干の剝片・チップが検出されている。

第3節　土　製　品

土偶・その他（図版27、32）

4号住居址上面（図版32—13）と同Ⅲb層（図版27—1、32—12）から土偶2点が検出されている。前者は縄文時代中期には例の少ない中空の妊娠形土偶であり、胴部両側に胴体とは別の足を付けたらしい穴が見られる。しかしこれは層位的には4号住居址に伴うものとは考えられず、文様からして大木8b式の時期と考えられる（伊藤　八巻　他　1969）。その他に土器片を利用した円板状土製品が27点検出されている。（図版28、31—1～11）　　（木本元治）

第5章　考　　察

第1節　土　　器

当遺跡の住居址に伴う土器を見た場合、共通する要素を強くもった一つのグループが考えられる。すなわち、3・4・5号住居址出土の土器群がそれであり、これらは幅広い沈線で区画された磨消縄文によりC・S・U字文様、波状文が施文されており、一部には充填技法が用いられている。これらの土器群に一部隆帯による文様を有する土器が伴うことはすでに知られている（目黒　木本　他1973）。3号・4号住居址の土器の中には、一部にまだ懸垂文を残しているが、しかし特別な例を除いて懸垂文のみによる文様の土器は伴わないと考えられる。

9号住居址出土の把手付土器も、これらに近いものと考えられる。また1・2号住居址内堆積層中出土の土器もこのグループに入るものである。

これらの土器群に近いものは、塩沢上原A遺跡第Ⅷ群土器（目黒　木本　1973）、本宮上原遺跡第Ⅴ群土器（目黒　他　1970）等がそれである。これらの土器群の編年的位置は塩沢上原A遺跡での編年に従えば、中期末葉大木10式の初頭、大木10a式と考えられる。それを裏づけるように、3・4号住居址の土器は大木9式からの残存形態と考えられる懸垂文と大木10式的な文様とが共存している。しかし他の遺跡では、これらの時期に懸垂文のみの土器が検出された例は今のところないが、3号住居址ではやや変った懸垂文のみを有する土器が伴っている。この文様は大木9式に一般的に見られる懸垂文とは異なり上の部分が角張り、長さも短くなっている。これはおそらく関東の加曽利EⅢ～Ⅳ式の影響を考慮すべきものであろう。

第2節　炉の形態と集落構成

炉の形態は、いわゆる「複式炉」と呼ばれるもので、構成は埋設土器石囲部、敷石石組部、それにつづく配石、又は掘り込み部の三つの部分よりなっている。これらを形態的に分類した場合、当遺跡においては次の三つの形態が認められる。

Ⅰ類…埋設土器の周りに石組みが無く、敷石石組部の底に石のしいてないもの…1号住居址

Ⅱ類…埋設土器の周りに石組みがあり、敷石石組部もしっかりしており、それにつづく部分に配石

または掘り込み部があるもの…３・４・６号住居址

Ⅲ類…配石または掘り込み部のないもの…９号住居址

このうちⅡ類は、塩沢上原Ａ遺跡Ⅱ区１号と近い形態をなしている。土器は両者とも大木10ａ式であり、同時的存在と考えられるものである。またⅠ類の炉を有する１号住居址も大木10ａ式である可能性がある。さらに本宮上原遺跡１号住居址のような形態の炉も大木10ａ式の時期には存在する点からして、炉の変化は複数の道筋を有するかなり複雑なものであったと考えられる。

前述の炉の形態と土器型式を手がかりとして、これらに地形的要素を加え塩沢上原Ａ遺跡との関連を考えてみると、Ａ遺跡においては大木10ａ式の住居址は４軒検出されている。当遺跡においては確実に大木10ａ式に属するもの３軒、その可能性のあるもの３軒が検出されている。また炉の土器の時期不明の住居址でも覆土中の土器片はほとんどが大木10ａ式であり、この集落は大木10ａ式に近い時期にのみ存在していた可能性が強い。地形的に見た場合、かつては尾根づたいに塩沢上原Ａ遺跡とつづいていたとはいえ、条件は塩沢上原Ａ遺跡に比べ平坦面が少なく、あまり良好ではない。二本松付近の中期末の集落は、原瀬上原・塩沢上原Ａ・田地ヶ岡遺跡のごとく広い平坦面を有する台地上に形成されており、当遺跡のように狭小な丘陵上に集落を形成している例は今のところ発見されていない。またＡ遺跡においても大木10ａ式の住居址も前述のごとく検出されており、この時期にのみ当遺跡に集落が移動したものとも考えられない。またＡ遺跡のごとく大木10ａ式の前後の時期の住居址も検出されていないことから、当遺跡は大木10ａ式の時期に形成されたＡ遺跡の枝群としての性格を有するものと考えられる。

（木本元治）

参　考　文　献

目黒吉明・他『上原遺跡発掘調査概報』　二本松市教育委員会　1969
目黒吉明・他『上原遺跡発掘調査概報』本宮町教育委員会　1970
目黒吉明・木本元治　他「塩沢上原Ａ遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報 3』福島県教育委員会　1972
梅宮　茂・他「田地ヶ岡遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報　３』福島県教育委員会　1972
伊藤玄三・八巻正文「月崎遺跡」『福島市文化財調査報告書　第７集』福島市教育委員会　1969

第7編　田地ケ岡遺跡

遺跡番号　13—38

所在地　二本松市塩沢字田地ケ岡

時代・種類　縄文時代（中期）　集落址

調査期間　第1次　昭和46年8月3日～8月12日
第2次　昭和46年8月18日～8月27日
第3次　昭和46年9月20日～9月29日
第4次　昭和46年9月30日～10月6日

調査担当者　梅宮　茂（日本考古学協会員）

調査員　第1次　江藤吉雄（須賀川女子高校）　古川　猛（福島県教育庁嘱託）　八巻一夫（駒沢大学文学部）
第2次　田中正能（福島県文化財専門委員）　古川　猛　八巻一夫
第3次　田中正能　古川　猛　八巻一夫
第4次　古川　猛　木本元治（福島県教育庁嘱託）　八巻一夫

協力機関　二本松市教育委員会　塩沢公民館

参加者　二本松市塩沢地区有志 県立二本松工業高校土木科 県立安達高校歴史クラブ　県立須賀川高校文化部歴史クラブ

協力者　丹羽　茂（宮城県文化財保護室）　斎藤　隆（立正大学文学部）　橋本弘一（郡山市教育委員会）　金崎佳生（郡山市教育委員会）　渡辺征一（郡山市教育委員会）　村川友彦（歴史資料館）　馬目順一（日本考古学協会員）　石岡鉄男　斎藤正太郎　渡辺令子　髙橋賢樹（福島県考古学会員）

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 135
　第1節　位置と地形…… 135
　第2節　周辺の遺跡…… 135

第2章　調査経過…… 136

第3章　遺　　構…… 137
　第1節　住居址…… 137
　第2節　小竪穴遺構…… 147
　第3節　住居址外土器埋納遺構…… 147
　第4節　積石遺構…… 148
　第5節　焼　　土…… 148

第4章　遺　　物…… 148
　第1節　縄文時代前期土器…… 148
　第2節　縄文時代中期後葉土器…… 149
　　1　機能による分類…… 150
　　2　器形による分類…… 151
　　3　住居址覆土中出土土器群の分類…… 152
　第3節　縄文時代後期土器…… 153
　第4節　弥生時代中期土器…… 154
　第5節　石　　器…… 154
　第6節　その他の遺物…… 156
　第7節　植物遺存体…… 157

第5章　考　　察…… 157
　第1節　総　　記…… 157
　　1　集落構成と住居址…… 157
　　2　遺　　物…… 159
　第2節　複式炉の構造と機能…… 160
　　1　複式炉の発展…… 160
　　2　複式炉の形態と機能…… 162
　　3　家屋構造の改善と火の分化…… 163
　　4　複式炉出現の背景…… 165
　　5　複式炉文化圏…… 166

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

田地ヶ岡遺跡は、東北本線二本松駅の北方約2.5kmの所に位置する。本遺跡は安達太良山系（標高1,700m）の矢筈森付近に源を発する湯川の南岸に位置する独立丘陵の末端部で舌状台地を形成し、標高280mを数える。丘陵の主軸は400m、幅70m、面積28,000m²を算する。四方の水田との比高は13mである。西から東に流れる湯川によって開析された独立丘陵で、丘陵西側には水田をへだてて410～570mの丘陵性の山地が安達太良山に続く。

戦後、遺跡の西側を南北に通る県道の路幅拡張工事を行った際に生じた崖面には、表土下4m程の深さに礫層があり、その上に3枚のローム層が堆積していることが観察された。本遺跡の住居址は上部第Ⅰ層の黄色砂質ローム層を掘ってつくられ、柱穴等にはオレンジ色を呈する軟質熔結凝灰岩がブロック状に混在し、第Ⅰ層より固い第Ⅱ層のローム土を貫いて構築していることが理解できる。なおこの道路幅拡張工事に際して6軒の竪穴住居址と大型の注口土器が発見されており、今回実施した調査により当時の住居址3軒が検出された。

台地上の遺物散布状態は北側の60×150mに濃く分布し、南側や台地中央部では少ない。本遺跡は中世に台地中央より南部にかけて城館（田地岡城址）として使用している。

以上概述したごとく、田地ヶ岡遺跡は安達太良山の山麓の独立丘陵上の遺跡であり、この地方には同様な自然環境をもつ遺跡がいくつかある。原瀬上原（うわはら）遺跡、塩沢上原（うわはら）A・B遺跡、本宮町上原（かんばら）遺跡等であり、時期・遺構・遺物等の点において共通性をもっている。

遺跡は舌状台地上と、その西斜面とに2分され、その中間に県道が貫通しているので、台地上をA区、斜面下をB区とした。なお遺跡は、道路敷の南に接続する雑木林および墓地にのび、さらに北部から東部にかけてのびているようであるが、これは路線外のため調査の対象から除外した。

第2節　周辺の遺跡

安達地方に分布する遺跡は、安達太良山に源を発する駒寄川・湯川・杉田川により開析された洪積台地上に多く発見されている。縄文時代の遺跡を表記すると次のようになる。

第1表 周辺遺跡一覧表（二本松市内）

遺跡番号	名称	所在地	立地	遺物	備考
13—74	三雄山遺跡	大字箕輪字小館	山麓、畑	縄文土器、石鏃、石斧、石匙	
13—76	宮ノ脇遺跡	〃 宮坂	畑	縄文土器、石鏃、石斧	三渡神社裏
13—75	揃ヶ平遺跡	〃 揃ヶ平	丘陵、畑	縄文土器、石鏃、石匙	
13—58	田尻遺跡	〃 馬場平	山麓、畑	縄文土器、石鏃、石斧	
13—60	馬場平A遺跡	〃 〃	〃	縄文土器、石鏃、石斧	開拓地
13—81	館野遺跡	館野字熊野	丘陵、畑、墓地	縄文土器、石器	杉田駅西方
13—78	原遺跡	〃 原	丘陵、畑	縄文土器	
13—42	左手内遺跡	南杉田字佐手内	丘陵、畑	縄文土器、石鏃、石斧、石錐、石槍	
13-210	大沢遺跡	〃 稲荷山	丘陵、山林	縄文土器、石鏃、石斧、石匙、石棒	昭和25年7月 安達高校調査
13-208	長者宮遺跡	〃 長者宮	丘陵、畑、宅地	縄文土器、石斧、石匙、石棒 石槍、勾玉、管玉	
13—88	中森山遺跡	北杉田字舟形石	丘陵、山林	縄文土器	
13-214	穏里遺跡	大沢字分前	畑、水田、宅地	縄文土器、石鏃、石斧、石匙、石錐	
13—84	石畑遺跡	大字大平字石畑	畑	縄文土器、石鏃	
13—93	太子堂遺跡	〃 太子堂	宅地	縄文土器	大平中学校敷地
13—44	代官町遺跡	〃 廓内	宅地	縄文土器	二本松中学校敷地
13—70	上原遺跡	原瀬字久保	畑、宅地	縄文土器、土偶、石鏃、石棒	昭和35年9月24日 昭和43年4月発掘
13—65	神平遺跡	〃 神ノ原	畑	縄文土器、石斧、石鏃、石棒	昭和46年8月発掘
13—37	竹ノ花遺跡	塩沢字上原	丘陵、畑	縄文土器、石鏃、土偶、石皿	昭和46年8月発掘
13—34	上原B遺跡	〃 〃	丘陵、山林	縄文土器、石鏃、土偶、石皿	（第6編参照）
13—36	上原A墳跡	〃 〃	丘陵、畑	縄文土器、石鏃、土偶、石皿	（第5編参照）
13—32	休石原山遺跡	〃 休石原山	丘陵、畑	縄文土器	
13—29	木ノ根坂遺跡	〃 ぐみ塚	丘陵、山林	縄文土器	
13—30	不動平遺跡	〃 不動平	丘陵、畑	縄文土器	

なお本遺跡の各称は、かつて館遺跡（№2068）と呼称されたが、今回の実施された発掘調査区域が二本松市塩沢字田地ヶ岡地内であるために新しく字名を取り「田地ヶ岡遺跡」と称することにした。

（古川猛）

第2章 調査経過

昭和46年8月3日、ＳＴＡ245＋40の工事用測量杭を基点とし、路線全域に南北1から29、東西A

からNまで3×3mのグリッド設定を行い、千鳥式に発掘を開始した。8月6日に1号住居址を検出、8月12日までに8号住居址を検出し、精査を完了した。しかし台地上の半分の面積ほどしか発掘しておらず、第2次調査を8月18日より8月27日まで行うことを決めた。8月18日より第1次調査の継続精査をする一方、9号～13号住居址の検出、そして精査・測量を行ったが、住居址の測量精査の不十分および未調査区域が多く、第3次調査を9月11日より行うことを決めた。しかし9月11日より台風接近のため悪条件が多く延期を決定、9月20日よりとした。ところが9月20日、遺構の土器が盗難にあっていたので、その旨関係方面に連絡した。その後、順次14～19号住居址の確認と精査を行った。13号・17号・16号・19号の各住居址は実際的には時間の不足によりグリッド外の拡張が困難であった。この状態で9月29日、事実上発掘作業を終了とした。翌30日より10月6日まで古川・木本・八巻は測量と遺物収納を行い10月6日に終了した。（八巻一夫）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

本遺跡は台地上のA区と西斜面のB区からなるが、予備調査で台地上のA区が極めて重要であることがわかり、調査の重点をA区においた。A区において発掘された遺構は、黄色粘土層を掘りこんで構築した竪穴住居址23軒、小竪穴遺構13か所、焼土4か所、住居址外土器埋納遺構7か所、積石遺構3か所である。（複式炉の分類は、第5章の第2節参照）

1号住居址（図版4、22）

北東隅のB－6グリッドから発見され、長径6.3m、短径6.2mの円形プランを呈し、床面積は39m²を算する。床面は水平で第Ⅱローム層の上面を利用しているために固く、柱穴・壁溝・壁柱穴・壁体等の検出は明瞭であった。壁際よりN－25°－W方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており、長さ2.5m、幅1.3mのD－6－b_1類複式炉である。炉の構造は扁平礫で周囲をかこんだ埋設土器(a)、四周を円礫で囲み舟底形敷石のある石組炉(b)、比較的大型の楕円礫をコの字に配した前庭部(c)の三つの部分から構成されており、埋設土器(a)、石組部分(b)は熱による風化が著しい。埋設土器(a)にはB－1類土器（図版58－1）が利用されている（以下炉の構造はこの(a)(b)(c)の略号を用いる）。明らかに主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、各々の深さは1.00～1.10m、直径50～60cmである。柱の割付は、複式炉埋設土器の中央部で炉の主軸と直交する柱間（3.6m）と壁際に相対

して2本の柱が配置された4本柱で、ほぼ台形を呈する柱配置であるが極端に複式炉の主軸方向の壁際に片寄った割付であることが指摘される。壁溝は壁際に壁体と平行して2条検出され、外壁溝は北側で切れ内溝と合流してしまうがほぼ円形を呈し、内壁溝は隅丸方形を示す。壁柱穴と思われる柱穴は内・外壁溝を切って20個が発見され、その柱割付は合理的である。壁高は全体的に60cmを計る。住居址の覆土は中央部で厚さ30cmであり、遺物を包含している。床面の遺物としては、注口土器1点、小形土器3点、石鏃1点、フレイク3点、異形石器1点等が出土した。

2号住居址（図版5、23）

Ⅰ—8グリッドから発見され、長辺5.5m、短辺5.0mの隅丸方形プランを呈し、床面積は27.5m²を算する。床面は第Ⅱローム層の上面を利用しているため固く水平である。壁際よりN—29°—E方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており、長さ2.3m、幅1.1mを示す。D—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、(a)・(b)は熱による風化が著しい。(b)部の構造は掘り込みが深く両壁が角度をもって立ち上がっている。(a)の土器にはA—Ⅱ—1類土器（図版54—5、58—2）が使用されている。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、各々の深さは70～90cm、径30～45cmである。柱の割付は石組部の中央部で炉の主軸と直交する柱間(3.5m)と、壁際に相対して2本の柱が配置されたほぼ方形を呈する柱配置で、1号住居址と同一のパターンである。壁溝は壁際に壁体と平行して2条検出され、内外壁溝共に隅丸方形を呈する。壁柱穴は内外壁溝を切って32個が発見され、その柱配置は合理的である。壁高は全体的に40cmを計る。住居址内の覆土中には遺物を包含しなかったが、北壁中央部付近より単独で第Ⅱ層より直立した精製深鉢形土器が発見された。生活面の遺物として、北隅の壁溝より隆帯文による文様を施した精製深鉢形土器が、床面よりわずかに深く直立埋納された状態で出土した。

3号住居址（図版6、23）

J—6グリッドから発見され、長径5.00m、短径4.80mの円形プランを呈し、床面積は24m²である。床面は第Ⅰローム層を利用しているため、軟らかく不安定で、柱穴・壁溝・壁柱穴・壁体等と共に第Ⅰローム層よりも軟らかい、汚れた黄褐色土で覆われていたので識別は困難を極めた。壁際よりN—21.5°—E方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており、長さ2.0m、幅1.0mを示すD—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されている。前庭部壁際に炉の主軸線上に径20cm、深さ15cmのピットが検出された。このような条件を備えた前庭部を持つ複式炉としては、2・5～12・14・15・17号住居址が数えられる。埋設土器(a)にはA—Ⅱ—Ⅰ類土器（図版55—3、58—3）が利用されている。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは50～60cm、径20～25cmを計る。柱の割付は炉の主軸線上西側寄りに1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で、二等辺三角形を示し、底辺3m、斜辺2.50mを

計る。炉の左側に配置された柱穴は径1.3m、深さ 58cmでピット内の西壁際に位置しており、ピット内の堆積土と柱穴内の堆積土の土質には明瞭な違いが認められるが、時間的な差は無く同時期の構築である。このように炉の左側に位置する柱穴に径1m前後のピットが伴う住居址としては2・8・10号住居址が数えられる。壁溝は構築されず壁柱穴が3個、不規則に配置されている。壁高は全体的に25cmを計る。住居址内の覆土中には遺物包含層が見られ、遺物包含層下部に住居址中央部で10cmほど堆積した焼土が伴う。このように竪穴住居址の廃絶後に推積途上の凹地を利用して火を使用した住居址としては1・5・11・19号住居址がある。生活面の遺物としては、注口土器・磨製石斧・フレイクがある。

4号住居址（図版7、24）

M—13グリッドから発見され、一辺4mを計る円形を示し、床面積は16㎡である。遺跡西端の緩い傾斜地に構築されたために、床面は西側に幾分傾斜して軟らかく崖面をけずり埋土して構築したと思われる。住居址中央部にN－58°—W方向に主軸を持つ複式炉が設備されており、長さ3m、幅1.0mを示すD—6—a_2類複式炉である。炉の構造は土器2個からなる、(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、(a)(b)は熱による風化が著しい。(b)は掘り込みが浅く底部が舟底状を呈し、10cmほどの河原石を小口積みに施工していることなどが特徴であり、この特徴はD—6—a_2類複式炉の一般にいえることである。埋設土器は「複々式炉」の名で呼ばれている2個の埋設土器を使用し、炉の内側にも外側にもB—1類深鉢形土器(図版56—2・7)を利用している。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは50～60cm、径20～25cmである。柱の割付は炉の主軸線上北側寄りに1個と、内側の(a)と(b)の境の地点で主軸と直交して、炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で、ほぼ二等辺三角形を示し、底辺3.2m、斜辺2.6mを計る。壁溝は検出されず、壁柱穴と思われるピットが不規則に5個配置されていた。壁高は東壁74cm、西壁3cmを計り、東に高い崖面をけずり西壁を構成したのであろう。住居址内の覆土中には遺物包含層が見られる。生活面の出土遺物としては、住居址東隅の壁に構築された袋状ピット中より小形土器が出土した。

5号住居址（図版8、24）

K—12グリッドから発見され、長径4.0m、短径3.8mの円形を呈し、床面積は15.2㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用しているため軟らかい。わずかに住居址中央部が壁際よりも低いがほぼ水平である。壁際よりS—79°—E方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており、長さ1.9m、幅0.9mを示すD—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分より構成されており、(a)(b)は熱による風化が著しい。埋設土器にはB—Ⅰ類深鉢形土器(図版55—1、59—2)が利用されている。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、各々の深さは56～82cm、径25～30cmである。柱の割付は石組部の中央で炉の主軸と直交する柱間（2.0m）と壁際に相対して2本の柱が配置されたほ

ぼ方形を呈する柱配置である。壁溝は複式炉の前庭部壁際より、左右に各々1.5mと北壁に1mほど見られ、壁柱穴は柱間50cmほどの割付で壁溝を切って9個と壁際に8個の計17個が、前者と合理的な配置関係をもって検出された。壁高は全体的に35cmを計る。住居址内覆土中には遺物包含層が見られる。生活面の遺物として、住居址中央部から潰れた状態で粗製深鉢形土器が出土した。このような状態の出土例はほかに8・10・12号住居址がある。

6号住居址（図版9、25）

J—12グリッドから発見され、長辺4.0m、短辺3.8mの隅丸方形を呈し、床面積は15.2㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用しているために軟らかく不安定である。

壁際よりN—31°—E方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており長さ1.5m、幅0.7mを示すD—6—a_1類複式炉で、構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、(a)(b)の各部分は熱による風化が著しい。埋設土器にはA—Ⅰ—1類深鉢形土器（図版54—6、59—4）が利用されている。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、深さは49～62cm、径20～25cmである。柱の割付は石組部の中央で炉の主軸と直交する柱間（2.0m）と壁際に相対して2本の柱が配置されたほぼ方形を呈する柱配置である。壁溝は北壁を除き住居址の壁際に壁体と平行して構築されており、壁柱穴は壁溝を切って8個、北壁際に6個が、合理的な柱割付で検出された。壁高は全体的に30cmを計る。覆土中には遺物包含層は見られない。

7号住居址（図版10、25）

J—10グリッドより発見され、一辺が4.0mの隅丸方形を呈し、床面積は16㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用しているために軟らかく不安定である。

壁際よりN—54°—E方向に主軸を持つ複式炉が住居址中央部に設備されており、長さ1.5m、幅0.8mのD—6—c_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、石組部の底部石敷は省略されており、(a)(b)は熱による風化が著しい。埋設土器にはA—Ⅰ—1類深鉢形土器（図版59—3）が利用されている。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、各々の深さは32～53cm、径15～20cmである。柱の割付は石組部の中央で炉の主軸と直交する柱間（2.0m）と壁際に相対して2本の柱が配置されたほぼ方形を呈する柱配置である。壁柱穴は壁溝を切って18個が合理的な柱配置を行っている。生活面の遺物として住居址中央に潰れた状態でB—Ⅰ類深鉢形土器が、住居址北側隅の壁溝よりB—Ⅰ類深鉢形土器が床面よりわずかに深く直立した状態で埋納されて出土した。

8号住居址（図版11、26）

H—12グリッドより発見され、長径4.3m、短径4.2mの円形を呈し、床面積は18㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用している。

壁際よりN—36°—E方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており長さ1.8m、幅0.8mの

D－6－b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分から構成されており、(a)(b)は熱による風化が著しい。(b)(c)の境から30×30cmほどの袖石が前庭部に張り出し、弱体な石組部を補強している。この施工は石組部の掘り込みが深ければ深いほど行われる施工法である。盗掘にあったが埋設土器にはA－Ⅰ－1類深鉢形土器が利用されていたと思われる。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、深さは50～70cm、径20～35cmを計る。柱の割付は石組部の中央から20cmほど前庭部に寄った地点で炉の主軸と直交する柱間（2.0m）と壁際に相対して2本の柱が配置され、ほぼ方形を呈する柱配置である。壁溝は住居址西壁で幅1.5mほどが切れるが、その両端を起点として住居址の壁際に壁体と平行して構築されている。壁柱穴は壁溝を切って22個が合理的な柱割付で検出された。壁高は全体的に21cmを計る。住居址内の覆土中には遺物包含層は見られない。生活面の遺物としてB－1類深鉢形土器がある。

9号住居址（図版12、29）

L－15グリッドより発見され、住居址西側50cmほどは13号住居址により切られているが、長辺5.5m、短辺5.3mの隅丸方形を呈し、床面積は29.1㎡である。本遺構は緩く西に傾斜した斜面に構築してあるが覆土が深く、東壁高95cm、西壁高20cmを計る。床面は第Ⅱローム層を利用しているために固く水平である。壁際よりN－57°－W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ2.3m、幅1.1mのD－6－a_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)からなるが、前庭部は石がなく落ち込みのみである。(a)(b)は熱による風化が著しい。埋設土器にはB－1類深鉢形土器（図版56－4、59－5）が使用されている。柱穴は他の住居址とは異なって3本柱と4本柱が重複して存在している。3個の主柱穴は各々の深さは52～57cm、径25～45cmであり、炉の主軸線上の東壁際に1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で、二等辺三角形を示し、底辺3.4m、斜辺3.0mを計る。この主柱穴とは配置を異にする柱穴が別に4個検出されている。各々の深さは35～60cm、径20～25cmである。柱の割付は炉の主軸線上の(b)と(c)の境で主軸と直交する柱間（3.0m）と壁際に相対して2本の柱が配置され、ほぼ方形を呈する柱配置である。住居址外の遺構として住居址の南東隅から南壁中央部にかけて、階段状の設備が見られた。住居址内覆土中には遺物包含層が見られ、住居址南東隅には一段上層に径1m程の積石遺構が検出された。生活面の遺物として軽石質の小判形石器が出土した。

10号住居址（図版13、14、26）

F－8グリッドから発見され、長辺4.8m、短辺4.5mの不整隅丸方形を呈し、床面積は21.6㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用している。壁際よりN－49°－W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長軸1.8m、短軸1.1mのD－6－a_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、(c)の三方の壁には大きな石でコの字状の貼石施行を行っている。底石は

ない。(a)(b)は熱変が著しい。埋設土器にはA—I—1類深鉢形土器が使用されている。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは30～66cm、径25cmである。柱の割付は炉の主軸線上で、北東壁際の壁溝を切って1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺2.5m、斜辺2.7mである。壁溝・壁柱穴の検出にあたり、住居址の北側隅において本住居址構築以前に構築されていた長径2.2m、短径1.8m、深さ50cmの楕円形ピットがあり、それを切って本住居址が構築されていたことが判明した。ピット内には遺物は存在しない。壁溝は住居址の壁際に壁体と平行して構築されており、壁柱穴は壁溝を切って17個が合理的な柱割付で検出された。壁高は全体的に22cmを計る。住居址の覆土中には遺物包含層は見られない。生活面の遺物として、埋設土器の右側から潰れた状態でB—1類深鉢形土器が出土している。

11号新住居址（図版15、16、28）

最北東端のD—2グリッドから発見された。同じ住居址内において建て替えが行われ、重複した住居址プランが検出された。またピットから縄文前期土器片が検出され、複雑な遺構を呈している。

新竪穴住居址のプランは長辺4.6m、短辺4.5mの隅丸方形を呈し、床面積は20.7m²である。床面は第Ⅱローム層を利用している。覆土は厚く、壁際よりN—35°—W方向上に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ1.9m、幅0.9mのD—6—a_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)からなり、(c)は浅い凹みを呈する。(a)(b)は熱変が著しい。埋設土器にはB—1類深鉢形土器（図版55—4、60—2）が使用されている。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは48～55cm、径20～25cmである。柱の割付は炉の主軸線上の北東壁際に1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺2.25m、斜辺2.5mを示す。壁溝は北東壁で幅3m程が切れるが、その両端を起点として住居址の壁際に壁体と平行して構築されている。壁柱穴は北東壁中央部の壁際に1個と壁溝を切って12個が合理的な柱割付を持って検出された。壁高は全体的に40cmを計る。住居址内の覆土中に遺物包含層が見られる。生活面の出土遺物として北東壁際より三窓器台付注口土器・器台・粗製深鉢形土器が一括して出土した。

11号旧住居址（図版15、16、28）

床面は新住居址と同レベルに位置し、柱穴・壁溝・壁柱穴・炉址等には新住居址構築時に生じた切土（第Ⅱローム）が貼られていた。壁際よりN—50°—E方向に主軸をもつ積石の抜かれた複式炉が住居址中央に設備されており、長さ2.1m、幅1.0mである。炉石が抜かれているが、埋設土器はそのまま存在している。埋設土器にはB—1類深鉢形土器（図版60—3）が使用されており、埋設土器のまわりのローム土は熱のために3～5cmほどの厚さで赤変していた。主柱穴と思われるピットが3個検出されており、各々の深さは60～70cm、径25～30cmである。柱の割付は炉の主軸線上の北西壁際に1個と埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で、正三角形を示

し、一辺が3.5mを示す。壁溝・壁柱穴は新住居址構築時数か所が破壊されているが、壁溝は住居址壁際に壁体と平行して構築されていたと思われる。壁柱穴は壁際に単独で2個と壁溝を切って5個が検出された。壁高は新住居址と同じ40cmである。この竪穴住居址の建て替えに際しては拡張は全く行われなかった。生活面からの出土遺物は無い。旧住居址構築にあたり縄文時代前期の土器片を包含した径1.0m、深さ1.2～1.6mのピット4個を切って構築しているので、11号住居址は3時期の遺構が重複して複雑を極めた。

12号住居址（図版16、17、28）

F－3グリッドから発見され、長辺4.0m、短辺3.9mを計る不整隅丸方形を呈し、床面積は15.6m²である。床面は第Ⅰローム層を利用しているために不安定で柱穴・壁柱穴・壁体等と共に第Ⅰローム層よりも軟らかい、汚れた黄褐色土で覆われ、また攪乱を受けており精査は困難を極めた。壁際よりN—45°—E方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ1.6m、幅が0.8mのD—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、(a)(b)は熱変が著しい。埋設土器は盗難にあい不明である。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは48～56cm、径20～25cmである。柱の割付は炉の主軸線上に1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺2.25cm、斜辺1.95cmである。壁溝は構築されておらず、壁柱穴が不規則な配置で4個検出された。住居址内の覆土中には遺物包含層は見られないが、複式炉の上層南半に積石遺構が検出された。壁高は全体的に25cmを計る。生活面の遺物として、複式炉付近の床面に潰れた状態でB－1類深鉢形土器が出土した。また縄文前期土器片を包含したピットがあり、ピット外に自然石の石柱があり、立石とみられる。

13号住居址（図版12、27）

西縁の9号住居址と重複するN—15グリッドから発見され、完掘はできなかったが住居址の概略は把握できた。西に緩く傾斜する斜面に構築され、一辺が4.5mを計る隅丸方形プランを呈し、床面は第Ⅱローム層を利用しているために固く水平である。壁際よりN—62°—W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ2.5m、幅1.2mのD—6—b_2類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)から成り、(c)は袖石を伴うもので、埋設土器の右側石組の部分には小形土器が併設されていた。(a)(b)は熱変し、埋設土器にはB－1類深鉢形土器（図版54—4、60—4）が使用されている。主柱穴と考えられるピットが2個検出されており（一部未発掘）、深さ55～60cm、径35～40cmを計る。県道直上の崖端であり、部分発掘であるが、柱の割付は炉の主軸線上東壁際の壁溝を切って1個と、埋設土器の地点で主軸と直交して1.5mの位置に1個の配置をもつ割付である。確認された柱穴は2個であるが、平面プランから推定して3本柱構造であったと思われる。壁溝・壁柱穴については全体を把握することはできなかったが、東壁を中心に一部を検出した。壁高は東壁で35cm、西壁で0cmを示す。住居址内

の覆土中には遺物包含層が見られる。生活面の遺物としては、北東隅の壁際から検出された50×30cm、厚さ25cmほどの河原石を使用した立石遺構に伴って壁溝より52個のフレイクが一括して出土した。本住居址廃絶後に東壁中央部の堆積土中に長辺1.0m、短辺60cm、深さ25cmで底部が舟底状を呈するピットが構築されおり、内部は熱による赤変が著しく、内部から5×10cm、長さ80cmほどの保存の良い木炭がピット長軸に平行して6本とピット内より斜縄文を施した土器片が1個検出された。木炭充満のピットの性格は不明である。

14号住居址（図版18、30）

K—17グリッドより発見され、長辺4.7m、短辺4.5mの隅丸方形を呈し、床面積は21.1㎡である。床面は水平で第Ⅱローム層を利用している。壁際よりN—56°—W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ1.5m、幅0.8mのD—6—a_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)と袖石の伴う(c)の三つの部分により構築されており、(a)(b)は熱変している。埋設土器にはA—Ⅰ—1類深鉢形土器が使用されていたと思われる。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、深さは57～73cm、径40～50cmを計る。柱の割付は炉の主軸線上東壁際の壁溝を切って1個と埋設土器の地点で、主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺2.8m、斜辺2.7mである。壁溝は住居址の壁際に壁体と平行して構築されており、壁柱穴は壁溝を切って7個が合理的な柱割付をもって検出された。住居址の覆土中には遺物包含層が見られる。生活面の遺物として北壁中央部壁際より大きな磨石、石皿、大きな硅石質原石2個が出土した。

15号新住居址（図版18、19、29）

K—19グリッドより発見され、同じ住居址内において建て替えが行われ、住居址プランが重複している。

新竪穴住居址のプランは、一辺が6.8mを示す隅丸方形で、床面積は33.6㎡である。床面は第Ⅱローム層を利用し固い貼り床である。壁際よりN—87°—W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ2.0m、幅1.1mである。炉の石が抜き取られているためわからないが、複式炉構築時の床面掘り込みの構造等から推定すると、D—6—a_1類複式炉である可能性が強い。炉の構造は(a)(b)と浅い掘り込みの(c)の三つの部分により構成されていたものと思われる。埋設土器にはA—Ⅰ—1類深鉢形土器（図版61—1）が使用されている。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており，各々の深さは50～73cm、径35～40cmである。柱の割付は炉の主軸線上の北壁際に1個と、石組部の中央で炉の主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺4.0m斜辺4.2mを示す。この主柱穴とは配置を異にする柱穴が3個検出された。深さは25～40cm、径20～25cmを計り、柱の割付は前者とほぼ同じ寸法の二等辺三角形を呈し、前記の主柱穴の3本柱構造を中心として六角形を形づくる割付であり、本住居址の柱割付は主柱穴3本柱構造を中心として六角形を

形成する割付が考えられ、方形プラン内で六角形を呈する柱構造は複式炉と有機的な配置関係をもつ3本柱構造の解明に重要な示唆を与えるものと思われる。壁溝は検出されず、壁柱穴が四隅に合理的な配置をもって4個検出された。壁高は西に緩く傾斜する斜面に構築された住居址のために四隅の壁高は異なり東壁65cm、西壁30cmで、住居址内の覆土中に遺物包含層が見られる。生活面の遺物としては北壁中央部壁際より石弾があり、複式炉石組部底部の組石に利用されていた石皿片がある。

15号旧住居址（図版29）

旧住居址は新住居址構築時に、20cmほどの床下げが行われたので、大部分の遺構は破壊されていたが、辛うじて炉の掘り込み跡と柱穴・壁柱穴等の遺構が残っていた。確認された遺構は新住居址構築時に生じた切土（第Ⅱローム土）を埋土しており検出は容易であった。複式炉はN—2°—E方向に主軸をもつ複式炉と推定され、住居址中央西寄りに設備されており、埋設土器は底部10cmほどが木炭・焼土を伴って残存していた。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、各々の深さは45～42cm、径20～30cmである。柱の割付は炉の主軸線上に1個と埋設土器の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱構造で二等辺三角形を示し、底辺2.3m、斜辺2.5mである。

以上15号の新旧住居址について略述したが、旧住居址の平面プランを推定すると、新住居址の複式炉の主軸を旧住居址の炉に直交させて構築したということは、旧住居址の平面プランが方形を呈していたことを示唆するものと思われる。同じ性質の建て替え例としては11号住居址がある。

16号住居址

Ⅰ—20グリッドから発見され、長辺3.6m、短辺3.5mの隅丸方形を呈し、床面積は12.6㎡である。竪穴住居址の主軸はN—16°—E方向を示し柱穴等の遺構は検出されなかった。壁高は全体的に30cmである。住居址覆土中から2㎡の広がりをもつ厚さ5cmの焼土層が確認されたが遺物包含層はない。出土遺物としては南西隅の壁際より縄文時代後期初頭の土器片が3点出土した。本遺跡としては異例の竪穴住居址である。

17号住居址（図版19、20、30）

J—20グリッドから発見され、大樹の根があり、崖際であるため完掘できなかったが、住居址の概略は把握できた。本住居址は緩い南西斜面に構築された長径4.9m、短径4.4mの円形プランで、床面積は21.6㎡である。床面は第Ⅰローム層を利用しているために軟らかく不安定で、柱穴・壁柱穴・壁体等の検出は困難を極めた。壁際よりN—4°—E方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ2.0m、幅0.9mのD—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成されており、埋設土器にはA—Ⅱ—3類深鉢形土器（図版55—5、60—5）を使用している。主柱穴と考えられるピットが4個検出されており、深さ55～60cm、径20～25cmである。柱の割付は石組部の中央で炉の主軸と直交する柱間（2.5m）と壁際に相対して2本の柱が配置され、ほぼ方形を呈する柱

配置である。壁溝は分断して壁際に構築されており、壁柱穴は壁溝を切って7個が検出された。

壁高は東壁44cm、西壁22cmを示し、住居址の覆土中に遺物包含層が見られる。生活面の出土遺物としては北東隅の壁際より大形の凹石、北壁中央の壁際より硅石質フレイクが一括して11点、石組部の積石に使用されていた磨石1点等がある。

18号住居址（図版21、29）

H—22グリッドから発見され、長辺4.5m、短辺3.8mの隅丸方形を呈し、床面積は17.1m²である。床面は水平で第Ⅱローム層の上面を利用している。壁際よりN—49°—W方向に主軸をもつ複式炉が住居址中央に設備されており、長さ1.7m、幅1.0mのD—6—a_2類複式炉である。炉の構造は(a)(b)と浅い掘り込みの(c)の三つの部分により構成されており、(a)(b)は熱変が著しい。2個の土器が炉の主軸ぞいに併設された構造で、内側の埋設土器はA—Ⅰ—1類深鉢形土器（図版61—2）、その外側の小埋設土器はA—Ⅱ—1類小形深鉢形土器（図版56—5、61—3）を使用している。主柱穴と考えられるピットが3個検出されており、深さは40～60cm、径20～25cmである。柱の割付は炉の主軸線上北東壁の壁際に1個と埋設土器の境の地点で主軸と直交して炉の左右に2個の配置をもつ3本柱の構造で二等辺三角形を示し、底辺2.9m、斜辺2.25mを示す。壁溝は南西壁の壁際に3.5mが構築されており、壁柱穴は壁溝を切って4個と、住居址壁際にそって7個が、合理的な柱割付をもって検出された。住居址内の覆土中には遺物包含層が見られる。

19号住居址

G—24グリッドより発見され、調査日程の関係から完掘できなかったが、住居址の概略は把握できる。本住居址は長辺6.2m、短辺6.1mの隅丸方形を呈し、床面積は38.4m²である。床面は水平で第Ⅱローム層を利用している。壁際よりN—59°—W方向に主軸をもつ複式炉が、住居址中央に設備されており、長さ2.3m、幅1.1mのD—6—b_1類複式炉である。炉の構造は(a)(b)(c)の三つの部分により構成され、(a)(b)は熱変が著しい。埋設土器にはA—Ⅰ—1類の深鉢形土器（図版56—3、61—4）が使用されている。主柱穴と考えられるピットが2個検出されており、深さは60～75cm、径45～50cmを示す。柱の全体的な割付は把握できなかったが、2個の柱は炉の主軸線上の石組部と埋設土器の境で主軸と直交して（柱間3.2m）位置する。壁溝・壁柱穴は壁際に壁体と平行して検出されたが、全体は把握できなかった。壁高は発見された壁体部で63cmを計る。住居址内の覆土中に遺物包含層が見られ、また住居址の周壁上に石組があり、長時間焚火をしたごとく著しく赤変していた。生活面の出土遺物は炉近くに粗製土器片多数、石鏃1点等で、石組部に黒色有機物が付着した大形の土器底部破片が落ち込んでいたが、調査途上持ち去られた。石組部の使途として参考に供さるべきであった。

20・21・22号住居址

この三つの住居址は、遺跡の西側を南北に通る県道の道路幅拡張工事に際し破壊をうけた竪穴住居

址で、今回の発掘で東壁の壁体部が確認された。住居址はF—29、I—25、G—28グリッドより発見され、主軸は9・13・14号住居址と平行する。NW軸を示し平面プランは方形を呈する。台地西側の末端部斜面に構築された住居址と思われる。現在、二本松市教育委員会に保管されている大型の注口土器（図版57—3）は21号住居址の複式炉付近から採集された遺物である。　（古川猛　八巻一夫）

（注）　複式炉の形態D—6—b_1類の表現は丹羽茂『福島大学考古学研究紀要第1冊』（1972）による。

第2節　小竪穴遺構

本遺跡において確認し得た小竪穴遺構（ピット）は22基を数えた。小竪穴は、集落の内外にいくつかのグループをなして位置しており、時期的な差異がうかがわれる。そのなかには、①長軸1m前後の浅い舟底状を呈し遺物のないもの。②径1m前後の深いフラスコ状を呈し、少量の焼土や遺物を伴うもの。③径1m前後で浅い舟底状を呈し、上部に積石遺構を伴うもの。④長軸1mほどで深さ1.5mを数え、縄文時代前期の土器片が伴うもの等に大別できる。その機能については、まだ実際的研究が進んでいない現在、不明な点が多い。

第3節　住居址外土器埋納遺構

本遺跡において確認し得た住居址外土器埋納遺構は7か所を数えた。土器埋納遺構は本遺跡の各部にわたり、小竪穴遺構と近似した配置を示している。住居址外土器埋納遺構は次のように分類される。

〔Ⅰ〕　土器の埋納状態が黄色砂質ローム層を掘って直立埋納されているもの（図版47）。

〔Ⅱ〕　土器の埋納状態が倒立埋納されているもの（図版49）。

〔Ⅲ〕　径1m前後の浅い舟底状を呈しているところに焼土とともに土器が埋納されているもの（図版53）。

〔Ⅳ〕　径1m前後の深いフラスコ状を呈し、この覆土中に土器を埋納しているもの（図版50）。

〔Ⅴ〕　土器埋納状態が横倒埋納されているもの（図版48）。

〔Ⅵ〕　ローム面に土器胴部以下を切って埋納しているもの（図版51）。

この住居址外土器埋納遺構に使用された土器の器形は、深鉢形土器4例、浅鉢形土器2例、注口土器1例である。浅鉢形土器が各竪穴住居址内より出土していないで、住居址外土器埋納遺構より出土していることが注目される。

第4節　積石遺構（図版45、46）

本遺跡において積石遺構は3例検出された。№2積石遺構は、9号住居址覆土中発見のもので、河原石20数個を無秩序に積んだもので焼けた様子はない。掘り込みも確認されず、土器片も発見されなかった。また№1積石遺構は12号住居址の覆土中から発見された。№2積石遺構と同様に複式炉の上部に積んだものである。12号住居址南側にも同様な積石遺構が検出された。いずれも掘り方は検出されず、土器片も出土していない。

第5節　焼　　土（図版52）

焼土が集積されて確認されたのは6か所である。

〔Ⅰ〕住居址の脇に伴い、焼土の範囲が小面積なもの。

〔Ⅱ〕焼土の範囲が広く、面としてとらえられるもの。

〔Ⅲ〕小竪穴遺構の脇に焼土痕があるもの。

〔Ⅳ〕住居址の覆土中に焼土層が多量に堆積しているもの。

以上4類に分けられる。遺物はほとんど含まず、わずかに小竪穴遺構に伴う焼土中に少量の土器片を含んでいたにすぎない。特に19号住居址の東に接して6×9mにわたり広範囲に焼土があるのは注意を要する。付近から土偶と弥生式土器片少量が出土している。遺構との関連は不明である。

（八巻一夫）

第4章　遺　　物

本遺跡からの出土遺物は、縄文時代前期後葉、中期後葉、後期初頭、弥生時代中期中葉の各期にわたった。しかし縄文時代中期後葉の遺物が主体を占めている。

第1節　縄文時代前期土器

本遺跡より出土した縄文時代前期の遺物は主として遺跡の北辺から出土し、他に南辺からも少量出

土したが、総数33片であった。これらの土器群は文様構成により大略5群に分類できる。沈線文グループ（第1群土器）。隆帯文（貼付）グループ（第2群土器）。地文が縄文のグループ（第3群土器）。竹管文グループ（第4群土器）。そして爪形文グループ（第5群土器）に分類できる。

第1群土器

平行沈線文で文様区画を行い、地文を縄文で施文しているもの（図版66—1・2・3）及び竹管文と沈線文を併用して施文しているものがある（図版66—10・11・12）。

第2群土器

隆帯（貼付）による平行三角文の文様区画構成（図版66—6・7）と隆帯（貼付）文の上に刻み目を入れ、波状口縁を呈するもの（図版66—4・5）がある。

第3群土器

地文が縄文のみ施文されているもの。図版66—9はRLの原体で、長さ2cmの間隔をもって施文している。また縄文に結節をもっているもの（図版66—8）及び口縁部に工具による沈線を入れたものもある。

第4群土器

竹管文による文様区画構成である。竹管文のみで文様構成をしているものはなく、沈線文と併用しているのが多い。図版66—10は竹管文のみの地文であるが、小破片なので不明である。

第5群土器

爪形文を主体とした土器片である。1片のみである。口縁部に爪形文を施文し、その下に図版66—13に類似した押型文を施文している。本遺跡において前期の土器は主体を占めるものではなく、11・12号住居址の周辺部の小竪穴遺構に伴出しているにすぎない。資料も少なく、田地ヶ岡遺跡独自で遺物を考察することはできない。したがって前述の土器群が縄文時代前期の大木6式土器に最も近似していることのみを指摘しておく。

第2節　縄文時代中期後葉土器

土器の型式分類は、文様・器形、その他の土器のもつ属性（胎土・焼成・色調等）から検討しなければならない。もちろん土器の出土状況も重要な要素となる。この初期的段階として分類を行った。

まず土器面に文様区画がなされているもの（精製土器）をA類とし、土器面に文様区画の無いもの（粗製土器）をB類とする。さらに文様区画のあるものは、隆帯（断面が丸みを帯びた貼り付け文）で区画を行うものをⅠ類、沈線で区画を行うものをⅡ類、細沈線文で文様区画を行うものをⅢ類、微

隆起線文で文様区画を行うもの（断面が三角錐状を呈す）をⅣ類とした。地文には、1…縄文、2…列点文、3…櫛目文、4…無文、5…刺突文をそれぞれ施文する方法がとられている。以上の諸点から次のような分類を行ってみた。

1　機能による分類
- a　複式炉埋設土器
- b　住居址内埋甕
- c　住居外土器埋納

2　器形による分類
- a　深鉢形土器
- b　浅鉢形土器
- c　注口土器
- d　小形土器
- e　器台

3　住居址内覆土中出土の土器群の分類

以上の三つの項目別によって本遺跡の中期後葉の土器群を検討してみた。

1　機能による分類

a　複式炉埋設土器

各住居址ごとの複式炉埋設土器の土器文様分類は次のとおりである。

〔A－Ⅰ－1類〕（6、10、15、18、19号住居址）いわゆる精製土器である。隆帯文（貼付）により文様区画が行われて、充填縄文により文様区画構成が行われている。口縁部が直立ないしは外反するものがある。口縁部が直立する器形は、文様区画構成が胴部上半に限られ、下半部には縄文のみが施文されている。

〔A－Ⅱ－1類〕（2、3、18号住居址）　文様区画が沈線文により構成され、そのあと充填縄文が施文される類である。器形は口縁部が外反し胴ぶくらみの器形により統一され、文様区画構成は縦構成に集約され、胴部下半には縄文のみ施文し区別している。

〔A－Ⅱ－3類〕（17号住居址）　地文に櫛目文を施文し、文様区画を手で磨消している。櫛目文自体でも半円を描いている。胴部より口縁部まで直立している器形で、文様構成は縦構成である。

〔B－1類〕（1、4、5、9、11、13号住居址）　縄文が全面に施文された、いわゆる粗製土器である。器形は深鉢形で統一されている。口縁部が外反するもの、直立するもの、内湾するものとがあり、口縁部に沈線を巡らしたものもある。

b　住居址内埋甕

いずれも盗難にあったために全体を把握できないが、出土状況写真により分類が可能である。

〔A－Ⅰ－1類〕（図版34）　詳細は不明であるが文様区画を隆帯文（貼付）で行い、口縁部が外反し、胴部がつぼまる深鉢形土器であったと思われる。

〔B－1類〕（図版33）　器形は口縁部が直立して胴部下半でつぼまる器形と思われる。口縁部下には縄文の施文がない。

c　住居址外埋納土器

〔A－Ⅰ－1類〕　隆帯文（貼付）による縦構成の文様区画構成である。他と同様に文様区画ののちに充塡縄文を施文している。

〔A－Ⅱ－1類〕　沈線文による縦構成文様区画である。口縁部が外反し胴部はゆるいふくらみをもつ。

〔B－1類〕　全面に斜縄文が施文された粗製深鉢形土器である。

2　器形による分類

a　深鉢形土器

〔A－Ⅰ－1類〕（7例）　隆帯文による文様区画構成は7例ある。5例が複式炉埋設土器であり、あとの2例は住居址床面、及び住居址外埋納土器である。器形はいずれも口縁部が外反し胴部にゆるいふくらみをもつものである。

〔A－Ⅱ－1類〕（6例）　6例のうち3例が複式炉埋設土器である。文様構成は縦構成で胴部下半を沈線文により区画し、そこに斜縄文を施文している。

〔A－Ⅱ－3類〕（1例）　細沈線文でU字状の文様区画構成を行い、櫛目文を波状に施文している。施文順位は、研摩→櫛目文の施文→文様区画→区画内の磨消しと観察される。明らかに充塡縄文と相反する磨消縄文の手法がとられている。

〔B－1類〕（13例）　粗製深鉢形土器の出土例が多いのが本遺跡の特色である。粗製深鉢形土器12例中複式炉埋設土器が6例、床面出土が4例であり、大半を複式炉埋設土器と床面出土とで占めている。粗製深鉢土器の器形は口縁部が(1)直立するもの、(2)外反するもの、(3)内湾するもの、があり、それぞれ(A)口縁部下に沈線が入り縄文を付すもの、(B)口縁部直下より縄文を付すもの、(C)口縁部下に無文帯をおき縄文を付すものがある。

(1)(A)…3例、(1)(B)…2例、(2)(B)…2例、(1)(C)…1例、(3)(A)…1例、(2)(C)…1例

b　浅鉢形土器

〔A－Ⅰ－1類〕（1例）　住居址外の小竪穴遺構より出土した。胴部以下が欠けており、隆帯文による文様区画構成で口縁部が外反している。

〔A－Ⅱ－1類〕（1例）　住居址外の小竪穴遺構に埋納された状況で出土した。沈線文による文様区画構成で口縁部が内湾している浅鉢形土器である。

c　注口土器

〔A－Ⅰ－1類〕（2例）　隆帯（貼付）文による横の文様構成である。1号住居址、3号住居址

の床面よりそれぞれ出土している。A－Ⅰ－1類の注口土器は、そろばん珠形を示し、口縁部に環状把手があり、使用のための表面摩滅がみられる。

〔A－Ⅱ－1類〕（2例）　沈線文による縦構成（15号住居址覆土中出土）と横構成（11号住居址床面出土）の文様構成をもつ注口土器である。15号住居址出土のものは注口部が直立しており、胴部下半を欠く、深鉢形土器からの転化例である。11号住居址出土の注口土器は、三窓器台付注口土器である。

〔B－1類〕（3例）　3号住居址覆土中出土、及び1号住居址南小竪穴遺構出土の注口土器である。2号住居址出土のものは小形鉢形土器からの転化例であり、1号住居址南側小竪穴出土の注口土器は浅鉢形土器からの転化例である。

d　小形土器

器高が26㎝以下の土器を小形土器とした。複式炉埋設土器、住居外埋納土器等と比較して小形の土器である。

〔A－Ⅰ－1類〕（4例）　4例の内訳は深鉢形土器2例、注口土器2例である。15号住居址出土の小形土器は隆帯（貼付）による横の文様構成で、胴部下半は斜縄文が施文してある。

〔A－Ⅱ－1類〕（6例）　4例が小形深鉢形土器である。4号住居址ピット内出土の土器はコップ状を呈したミニチュア土器である。11号住居址出土の注口土器も小形である。

〔B－1類〕（3例）　小形深鉢形土器が2例、注口土器が1例である。注口土器は頸部に一条の隆帯（貼付）を行い区画し、その直下より斜縄文を施文している。2例はいずれも1号住居址床面及び柱穴内より出土している。

e　器　　台

〔無文〕　11号住居址出土のものである。全体に篦整形が行われ、四窓である。焼成はよく、色調は茶褐色を呈する。15号住居址覆土中出土の器台も無文である。破片であるため、器形は推定が不可能であるが有窓である。焼成・胎土ともに良く、色調は縄文時代後期土器に見られるような黒色を呈し、篦整形痕が認められる。

3　住居址覆土中出土土器群の分類

住居址内覆土中出土の土器片は全部でミカン箱30個を越す数量である。このうち特異な存在の土器片を抽出した。これら一群の土器には、複式炉埋設土器及び床面、住居址外埋納土器等には使用されなかった土器片がある。この土器片は本遺跡において主体を占めるものではない。

〔A－Ⅰ－1類〕　隆帯文（貼付）により文様構成するもので、文様構成体が渦巻文を主体として

いる。各住居址複式炉埋設土器及び床面出土の土器群には無かった文様構成要素である。

〔A－Ⅰ－1・2類〕　隆帯文（貼付）により文様構成するもので、地文が縄文と列点文を主体としている土器群である。ここでは刺突文と列点文を区別し分類した。小破片のためにA－Ⅰ－2類と分類が可能であるがA－Ⅰ－1・2類土器群の可能性をとった。

〔A－Ⅰ－1・5類〕　隆帯文（貼付）により文様構成するものであり、さらに刺突文を配し、地文には縄文を施文している。

〔A－Ⅱ－1類〕　沈線文により横構成、縦構成の文様を付したもので、沈線文による区画内に斜縄文を施文している。この類には口縁部周辺に斜縄文帯を巡らし、その下より文様構成をなすものと、縄文帯がなく沈線による横構成の文様構成体のみのものとがある。

〔A－Ⅲ－1類〕　細沈線文により文様構成するもので、地文に斜縄文を施文する。幅2㎜以下の沈線を細沈線文と称した。図版66—23は細沈線文内の磨消しを行っている。斜縄文は充填縄文による施文方法をとっている。この類は本遺跡において主体をなすものではない。

〔A－Ⅳ－1類〕　微隆起線文により文様構成するもので、地文には斜縄文を付している。隆帯（貼付）とは明らかに異なる。本遺跡では主体的でない。

〔B－3類〕　17号住居址複式炉埋設土器はA－Ⅱ－3類土器であるが、この類は櫛目文を地文とした粗製土器であり少量出土しているに過ぎない。

以上の様に本遺跡における縄文中期後葉の土器群についてのべたが、これらの土器群を大略2群に分類することが可能である。まず複式炉埋設土器及び床面出土の土器群、住居址外埋納土器などの主要遺構に伴ったA－Ⅰ－1類、A－Ⅱ－1類、B－1類土器群であり、本遺跡出土土器の主体をなすこの群を第1群土器とする。その他、住居址内覆土中出土の土器群A－Ⅰ－1類、A－Ⅰ－1・2類、A－Ⅰ－5類、A－Ⅱ－1類、A－Ⅱ－3類、A－Ⅲ－1類、A－Ⅳ－1類、B－3類を第2群土器とすれば、第1群土器⇨第2群土器という前後関係が考えられる。

第3節　縄文時代後期土器

後期初頭土器（図版66—25・26）

後期初頭の土器は、16号住居址床面より2片出土している。口縁部に突起があり、口縁部下より撚糸文を施文し、口頸部より細沈線文による文様区画がなされている。土器は薄手であり胎土に少量の植物質繊維を含み、焼成が良好な茶褐色の土器片である。大木10式土器には撚糸文の多用が指摘されており、また細沈線文による文様構成は、西の浜貝塚第4層出土(1)の土器群に近似しているが、門前

遺跡・袖窪遺跡出土[2]の土器群とは時間差を考慮すべきであろう。

後期中葉土器（図版66—27）

後期中葉の土器は1片のみである。口縁部に瘤状貼付を行い、その下に浅い沈線で文様区画がなされている。

参 考 文 献

1 後藤勝彦 「西ノ浜見塚発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書13集』 1967

2 吉田義昭 『門前貝塚』 1957

第4節 弥生時代中期土器（図版66—28・29）

少量の弥生式土器が出土している。図版66—28は付加縄文を主体とした土器片であり、図版66—29は口縁部下に結節をした壺形土器の口縁部である。2片のみで類推が不可能であるが、中期中葉の南御山2式あるいは円田式に相当するものと推定される。（八巻一夫）

第5節 石 器

本遺跡出土の石器は、打製石斧3点、磨製石斧2点、石鏃10点、石匙4点、石錐3点、凹石8点、石皿2点、凹石と石皿の併用2点、磨石8点、スクレイパー42点、フレイク100点、原石4点、異形石器1点、石弾1点、軽石質の小判形石器1点の計191点である。いずれも縄文時代中期後葉の所産と思われる。

1 石 斧（図版68—1～5）

石斧は、磨製石斧と打製石斧とがある。磨製石斧は一般に小形であり、図版66—2は石質が悪くよくない。打製石斧は3点出土し、1点は大形、図版66—4は分銅形である。

2 石 鏃（図版67—1～10）

計10点出土したがすべて無茎である。最大幅が2㎝から3.5㎝まである。図版67—1を除いてすべて住居址内覆土中出土である。

3 石 匙（図版67—11～13）

4点中完形品2点、破片2点である。刃部の形状が内湾するものが2点、直刃が1点と内湾するのが多い。また刃部の加工状態が表面加工2点、両面加工1点、その刃部の位置が全域2点で全域を加工する縦長の製作技術が観取できる。

４　石　　錐（図版67—32～34）

本遺跡出土の石錐は全部で３点出土した。いずれも完形品である。

５　凹　　石（図版68—６～13、69—２）

凹石は８点出土した。形態は円形と長円形の２種類である。小孔が両面にあるもの（図版68—６～８・10・12・13、69—２）と小孔が片面にあるもの（図版68—９・11）がある。図版68—６の凹石はアスファルトが付着している。１㎏以下の凹石は５個、１㎏以上の凹石は３個体である。

６　石　　皿（図版69—１）

完形品２点が出土した。重量はいずれも14㎏と18㎏で重い。14号住居址出土の石皿は磨石とセットをなして原石と一括して出土した。

７　磨　　石（図版68—14・15、69—３）

磨石８点は、円形・長円形・長方形の形態がある。重量は0.25㎏から0.82㎏まである。

８　凹石と石皿の併用（図版69—４・５）

計２点出土した。石皿として使用中、あるいは壊れたのを再度、凹石に利用したものと思われる。小孔は普通の凹石に比較して孔が多く重量自体、普通の凹石に比べても1.5㎏、４㎏と重い。

９　スクレイパー（図版67—14～23、26～28、31・35・36）

発見された42個体のスクレイパーを、大きさ（長さ・幅・厚さ）・素材（礫核・剝片）・刃部の位置・刃部の形状（直刃・外湾・内湾）、刃部の加工状態（表側加工・裏側加工・両面加工）、刃こぼれの有無により検討してみた。分類の結果スクレイパーの刃部の加工状態において、表側加工を施したスクレイパーの数量が両面加工、裏側加工を施したものよりも数量において優位性を示し、刃部の形状が内湾するという特性を示す。とくに表側の全域を加工しているスクレイパーが全体の３分の１を占めている。以上のことよりスクレイパー属性を認めることができる。各層ごとのスクレイパーの個体数は、Ⅰ層より８個、Ⅱ層より17個、Ⅲ層より５個、Ⅳ層より１個、床面より３個、ピット内より３個、炉内部より１個、周溝内より４個が出土した。具体的には、住居址床面、住居址ピット内、炉内部、周溝内とその属性を知ることができる。とくに２号住居址ピット内からはフレイク11個、スクレイパー３個が、そして13号住居址周溝内からはフレイク38個、未加工石材14個とスクレイパー３個とが出土している。

10　フレイク（図版67—24・25・29）

本遺跡において102個のフレイクを検出したが・大きさ（長さ・巾・厚さ）・打角・打面状態（自然面・剝離面、２次加工）、加撃点の位置（R・M・Lと三等分する）、最大幅の位置（A・B・Cと三等分する）、最大厚さの位置（A・B・Cと三等分する）、使用痕の有無、形状(縦・横)の面から検討してみた。この分類により本遺跡におけるフレイクの特性が次のように観取できる。すなわち打面状

態は剝離面であり形状が縦長のフレイクが62個を占め、その中の20個には使用痕が認められる。また個々の分類の基準としてあげた加撃点の位置については左方向からの優位性が認められること、そして最大幅、最大厚さの位置を三等分中のAに求めていたことが認められることである。このようなことはフレイク自体がもつ属性として石器製作技術と認定できる。

フレイクは住居址内の1か所に集積されていることが本遺跡においても2・4・7・11・13・15・17号住居址において認められる。2号住居址ピット内においてフレイク11個、2号住居址周溝内においてフレイク32個、4号住居址周溝内において未加工石材5個、7号住居址炉内部においてフレイク2個、11号住居址北側壁ぎわよりチップス19個、15号住居址ピット内よりフレイク1個、未加工石材2個、13号住居址周溝内よりフレイク38個、未加工石材14個、17号住居址床面より未加工石材12個が出土した。以上は主要なフレイク等の出土状況である。それらの出土状況から人為的なものとみることができる。これらのフレイク群の属性は個々のフレイクの特性と合致する。（八巻一夫）

第6節　その他の遺物

本遺跡から出土したその他の遺物として、土偶・円板状土製品・不明土製品・不明石製品・植物遺存体及び木炭が出土した。

1　土　　偶

本遺跡出土の土偶は全部で3個出土した。

〔Ⅰ〕　F—28グリッド出土の土偶（図版71—1）は、たくさんの焼土とともに出土した。頭部・両手部・胴部下半を欠き、全長6.8cm、最大幅3.1cmの棒状の土偶である。乳房部には0.4cmの突起があり、乳房の上部に沈線で一線を画し列点文が配してある。裏面には竹管文によるボタン状の穴が10個うがってある。そして両腕部つけねより放射線状に沈線で画してある。

〔Ⅱ〕　図版71—2は、土偶の脚部であると思われる。側面の形状は三角錐状を呈し、裏面は竹管文による円文が計9個ある。

〔Ⅲ〕　図版71—3の土偶は奴凧状を呈し頭部・左手部・胴部下半を欠く。全体の長さ4.5cm、最大幅7.3cmを示す。胸部には粘土紐によるY状の突起を施し、その周縁に列点文を施文している。裏面中央部に縦列4個の沈線による長円形を画してある。両手を結ぶ線に列点文が2列に並列しており、手・足を表現しない三角状の中期特有の土偶である。

2　土　製　品

〔Ⅰ〕　7号住居址覆土中出土の土製品（図版71—5）は中空であり、口縁部には3個の装飾体が付

けられていたと思われる。直径5.2cm、器高3.2cmで、3個の装飾体の一部に穴がある。長野県で出土例が認められる土鈴ではないかと思われる。

〔Ⅱ〕15号住居址覆土中出土（図版71—6）の棒状土製品は、全く器形の類推が不明である。現状の高さ5.5cm、最大幅4.6cmの刀剣を示し、表裏ともに整形・研摩が行われている。15号住居址出土のスプーン状土製品は長さ4cmを示し小形である。色調は赤褐色を示している（図版71—4）。

〔Ⅲ〕図版70—3の土製品は形状が製品として価値を認め難い。色調は赤褐色を呈し、粘土塊を焼成したにすぎないように思われる。

3　円盤状土製品（図版71—7～14）

縄文式土器破片を加工したもので、全部で8個出土している。最大径が3cmから5.4cmまである。最大厚さは0.6cmから1.2cmまである。それぞれ各住居址覆土中より出土している。図版71—13は切り込みがあるので土錘とも思われる。

4　石　製　品

〔Ⅰ〕図版71—15の石製品は全体が研摩されており、現状の長さ4.5cm、直径2.5cmを示すが、器形が不明である。現状の形態は勾玉のような形を示している。石製品には全く人為的な装飾部分は付けられていない。

第7節　植物遺存体

11号住居址床面出土の深鉢形土器・器台・注口土器と一括して植物遺存体が出土した。鑑定の結果がまだなので不明であるが、クリの実ともう1種類不明な植物遺存体がある（図版72）。13号住居址の壁際に浮いた状態で集積していた木炭はクリ材と思われる。小竪穴を構築した後、木材を横積みにし、熱を加えた後、一度に堆土を混入したと考えられ、小竪穴の周囲が熱変していた（図版73）。

（八巻一夫）

第5章　考　　察

第1節　総　　記

1　集落構成と住居址

23軒の竪穴住居址は、舌状台地の北辺および西辺に馬蹄形に分布している。調査部分のみで集落構

成を結論づけることは早計であるが、一応調査範囲内において得た結果から観察すると次の特色があげられる。

1　田地ケ岡遺跡の特色

①すべて複式炉をもつ住居址である。

②竪穴住居址平面プランは、円形のもの1号・3号・4号・5号・8号・17号であるが、1号住居址の壁溝のプランは隅丸方形を呈し、4号住居址のプランも隅丸方形に近いので、田地ケ岡遺跡は隅丸方形が主体をなしているとみられる。

③主柱は4本柱が1号・2号・5号・6号・7号・8号および17号住居址で、他は複式炉をもつ住居址の一大特色である3本柱である。特に、9号・14号・15号住居址は、3本柱を主体構造とするが、4本柱と併用である。主柱の2本は複式炉の中心の左右にあって、3本柱の頂点をなす奥壁に近い柱が壁際によっていることは、炉の上が最も高く、炉の奥が片下りとなる上屋構造で、入口も炉付近と想定される（目黒吉明の復元住居構想による）。

④壁溝が検出されたその中に壁柱穴があり、竪穴内における壁の構成が把握され、柱構造と壁構造との分離が早く進められていたことが知られる。

⑤複式炉の構造は別項のとおりであるが、複々式といわれる複数（2個）の埋設土器があり、「コ」の字状前庭部の中央に、小柱穴状のピットを伴う例が多い。

⑥竪穴住居址の配列には一定の規制があり、台地の縁辺に分布して、台地の中央には存在しない。

⑦台地中央部には焚火場とみられる焼土とピット、単独に土器が埋納されてある。ピットは住居址内にもあるが、ピットの性格を証する遺物は検出されていない。

田地ケ岡遺跡の住居址には、以上のように多くの問題が内在している。田地ケ岡遺跡のもつ問題点については、共同調査員である八巻一夫が『福島考古』（14号）に「東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成」を発表しており、梅宮は『福島考古』（15号）に「複式炉文化論」という試考をのべておいた。本考察は八巻の所論を要約し若干私見を加えることにする。

2　北大群と南大群の構成

田地ケ岡遺跡においては、炉址の主軸方向によって南北両大群が形成されており、この2大群は炉の形態・柱配置において異なった特性をもち、また埋設土器の精製・粗製の区別があり、大群の中に二つの集団（小群）がある。

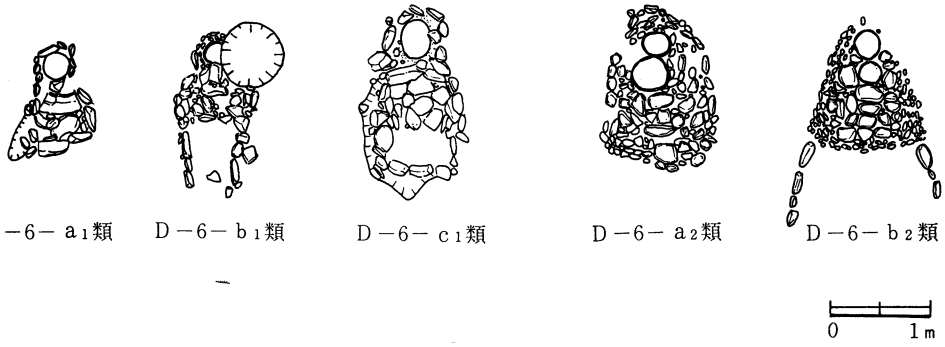
北大群は3本柱を主体構造とする竪穴住居址と、4本柱をもつ竪穴住居址の2群に分類され、炉の形態ではD－6－b_1類複式炉が主体を占めている。これに対して南大群は主柱穴3本の外に四隅に主柱に準ずる壁柱穴を配し、この壁柱穴が重要な役割を果している。

この形態は3本柱を主体構造にもつ竪穴住居址と四本柱をもつ住居址との中間的要素が強い。好例

は北大群の10号住居址で、10号⇨9号⇨7号と移行したことが構造から認められる。

田地ヶ岡遺跡の複式炉埋設土器を検討すると、南大群の土器群が古い様相を示し、床面出土の土器は北大群には認められるのに、南大群中にはこの例が認められない。このことから、南大群から北大群へ移行したことが推察される。このことは前述のとおり複式炉の形態分類からも、また柱配置についても、4本柱と3本柱の比率が北大群において3対2であるのに対して、南大群では1対2の比率を示して若干の時差があったことが考えられる。

しかし、田地ヶ岡遺跡と塩沢上原A・B遺跡、原瀬上原遺跡の住居址群を比較すると、23軒の住居址群は時差はあっても、ほぼ同一期に存在した同一集団で、南北の2大群から形成されていたという事実をそのままうけとりたい。



第1図　複式炉の形態分類

2　遺　　物

1　精製土器と粗製土器

田地ヶ岡遺跡の住居址群に伴う縄文中期末葉の土器は、深鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器・器台および小形土器がある。これら土器の編年は、大木9b式に次ぐ大木10a式～大木10b式と並行とみられる。なお、600mを隔てている塩沢上原A・B遺跡の土器群と共通し、両遺跡は同時に存在していた可能性がある。

田地ヶ岡遺跡の土器群、特に複式炉埋設土器には精製深鉢形と粗製深鉢形土器の二様があり、縄文後期で一般化する精製・粗製の区分は、田地ヶ岡遺跡においてはこの時期に明確に確立されており、土器使用方法の多様化を示している。

2　注口土器の問題点

田地ヶ岡遺跡の土器群中注意したいのは注口土器が多く検出されたことである。関東地方の縄文中

期の注口土器は勝坂期に初現しているが、東北地方南部において大木8b式にさかのぼり、大木9式、10式に発展をとげ、特に複式炉をもつ住居址に多く出土していることは注目すべき現象である。これらの地方から出土する注口土器は鉢形土器からの分化とみられ、精製・粗製の区別があり、11号住居址のごとく他の土器とセットを構成していることは、土器の様式論に変革を与えるもので、中期末葉の注口土器と、後・晩期に多く出現する注口土器群とは基本的に同一の構造を有するものであろう。

注口土器、特に小さな土瓶形はガマズミ、ヤマブドウ、カジノキなどで作った果酒の容器と考えられており、酒造社会の存在を裏付け、小形土器や器台が出現していることから食生活の多様化、家屋内における家族生活の変貌という文化的要因が考えられる。

3　石器その他の出土品

土器についても考察すべき問題がさらに多いし、土製品、特に土偶についても看過できないものがある。石器においては14号住居址のごとく石皿と磨石がセットとなり、硅石質原石2個と共に出土し、13号住居址からは立石遺構に伴って多量のフレイクが一括出土している。また打製石斧が極めて少ないことも問題視されよう。

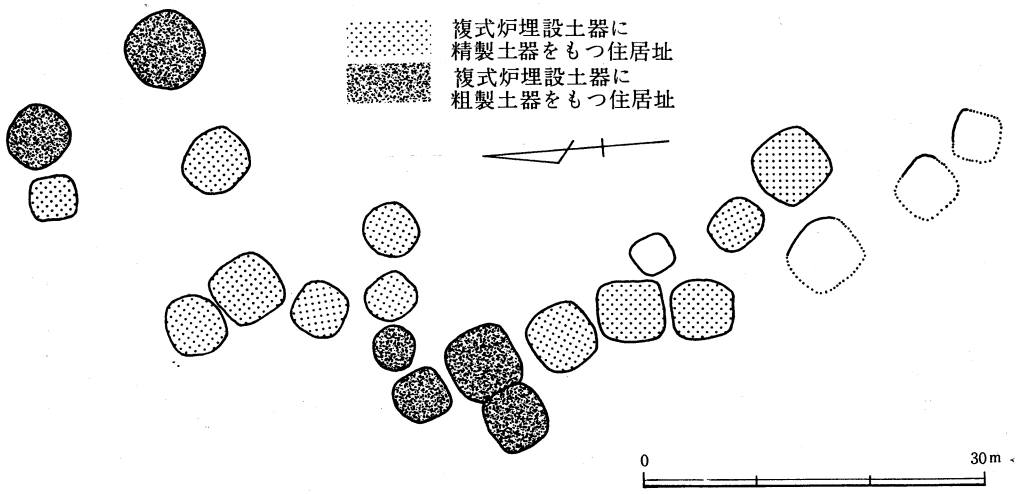
第2節　複式炉の構造と機能

1　複式炉の発展

「複式炉」という名称は、昭和32年発掘調査した伊達郡飯野町白山遺跡について、梅宮茂が後藤守一と協議して命名した。その後福島市松川町日向道内遺跡、二本松市大沢遺跡、石川町田上遺跡、東白川郡鮫川村壇ノ岡遺跡、二本松市原瀬上原遺跡（学校敷地内）、川俣町庚申森遺跡、同細越遺跡、飯野町和台遺跡を検出して、埋設土器が2個以上複数をもち、石組炉に続いて前庭部を伴うものについて「複々式炉」と仮に命名した。さらに昭和42年二本松市原瀬上原遺跡（13軒）、同市塩沢上原A遺跡（20軒）、安達郡本宮町上原西遺跡（5軒）等が、福島県や関係市町村教育委員会により発掘され、複式炉の様相はかなり明確となった。さらに田地ヶ岡遺跡では（23軒）を検出した。

丹羽茂は炉の形態分類として、地床炉（A類）、土器埋設炉（B類）、石組炉（C類）、土器埋設石組炉（D類）としD類を六つに小分類してD—1類（土器埋設石匿炉）、D—2類（円形石組内土器埋設炉）、D—3類（長方形石組内土器埋設炉）、D—4類（「コ」字状石組内土器埋設炉）、D—5類（石組外土器埋設炉）、D—6類（上原型土器埋設石組複式炉）とし、D—6類は埋設土器の数によりan、bn、cnと細分する。梅宮が当初提唱した「複式炉」は埋設土器部と石組部が1セットと

なったものと、広義にとったのである。丹羽は「上原型複式炉」と細分類した中で、最大公約的に例証の多い一般的なものとして「上原型」を提唱したようである。



第2図　複式炉埋設土器の精製・粗製土器による分類

丹羽は炉の変遷を次のように図示している。

前期	中期初頭	中期前葉	中期中葉	中期後葉
A－2類	⟶ Bn類（$1 \leqq n <$……∞）	⟶ C 1～2類 / D －1類	D－2類 ⟶ C－3類 / D－3類	⟶ C－1類 / C－4類

また、中期後葉の複式炉の成立過程を論じ、中期前葉の中心地域を長野県東南部と仮定し、井戸尻周辺における炉の構造が中期中葉の新潟県栃倉・馬高遺跡に移行して長大化する現象に注目し、中期社会の発展にともない炉の構造が大規模化・複雑化するという一定の関係を導き出し、中期社会が退えい化する曽利Ⅱ式以降、炉の構造が簡略化される方向に進む。一方、中期後葉の大木9～10式期にいたると、東北地方南部内陸部では、遺跡数が激増し、複式炉が盛行する。この現象をもって前時代の社会の中心であった長野県東南部から、中期後葉になると中心の移動が行われ、福島県を中心とする東北地方南部がとって代ることを指摘した。

一方複式炉という炉の極限の形態を産み出した福島県地方には、既に中期初頭には屋内地床炉が存在し、中期中葉になると飯坂町月崎遺跡のごとき長方形石組炉に埋設土器を伴う一連の比較的規模の大きい炉が出現している。中期後葉、大木 9a 式期になると上原型複式炉が完成され、しだいに周辺地域に広まり山形・宮城・岩手県の一部、さらに栃木県北部に影響を与え、かくして東北地方南部の中期末葉住居址の一般的な要素となった。

複式炉における、埋設土器部(a)・石組部(b)・前庭部(c)の三部が完備するのは、大木 9b 式期の比較

的新しい時期から、大木10古(a)式期頃に成立し、この地方に普遍化し、巨大化、複雑化を経過して規模が2～3mと安定した形態となる。しかし前庭部のコの字配石は必ずしも必要な条件ではない。

大木10古(b)式をへて、大木10新式期に近ずくと、複式炉は精巧さを欠き、石組部が小形化し、全体的に小規模となる。原瀬上原遺跡では石囲炉が発見されており、大木10新式期には、単式の石囲炉と複式炉の両形態が共存し、その後になると埋設土器部(b)と石組部(b)のセットが分解して、縄文後期初頭になると複式炉は完全に姿を消してしまう。

2　複式炉の形態と機能

複式炉が、短時期に形成され一般化し、それが一挙に消滅した要因をさぐることは、縄文中期社会の性格、崩壊の原因を導き出す重要な課題である。複式炉の基本は、埋設土器部(a)＋石組部(b)＋前庭部(c)の3要素からなり、それが1セットとして一連の関係をもって竪穴住居址内の中心をなしている施設である。次に各部分についてふれてみたい。

藤内Ⅰ式から井戸尻Ⅲ式期は、東北地方南部における大木7b式期前後とされ、土器埋設石囲炉（D－1類）を伴っている。(a)部分はこれに類似する。ここで注意すべきは、D－1類は単なる埋甕炉（B類）と石囲炉（C類）が合体したのではなく、本質は埋設土器(a)で、土器の破壊を防ぎ永続性を保つための補強策として埋設土器の周囲を礫で囲ったのである。

前時代の石囲炉の形態を引き継いで発展した形態は(b)部（石組部）である。石囲炉の形態は、円、方、コの字、楕円と数種ある。これには上端の列石のみと、底部に敷石がある別がある。複式炉の石組部(b)もまた上端の側石には諸形態があるが、前者と異なることは石組部が深く側石が直立する場合と舟底形に傾斜する場合があり、大木9b式になると舟底形が長大化し、埋設土器部と直角に交わる楕円形舟底形となる。

梅宮は埋甕炉（埋設土器炉）と石囲炉（石組炉・積石炉）は炉の機能―火の扱い方、使途―に基本的に相違があったものと解している。埋設土器部の上に薪を並べ、篝火のごとく炎をあげて燃やすことは不可能に近い。屋内の埋甕炉は屋外において行った焚火の完全燃焼した「おき」を移したのではないかと思われる。比較的大型の石囲炉は焚火専用の炉である。複式炉の(b)部分が特に発達したことは暖房用の焚火を必要とした条件にそなえるための炉変革である。焚火をする場合は、吹き上げる炎に対処する施設が必要である。例えば農家における炉上の「火棚」のごときものを架設してあったのではないか。火棚は火炎を一時的に弱め、この上に乾果や肉・魚を並べて保存用乾物を作る術として存在したのではないか。

この二つの異なった機能をもつ炉がセットとなって存在し一貫した関連のある使途が行われたとこ

ろに複式炉のもつ大きな意義が存している。

次は前庭部(c)である。(c)部は複式炉において創案された特異な施設で、農家の炉における「木尻」で焚口に当る。この箇所は火を使用した痕跡はない。田地ヶ岡遺跡においては前庭部の列石があるのは4例で、やや短かく1個の石を張り出した未発達（退化か）を思わせるものと、全く列石がなく「コ」の字状の溝のみのものとがある。この凹部に径20cm前後の小柱穴を思わせるピットがある。このピット内には遺物は見当らないが、前庭部の性格上見逃せない遺構であろう。(b)部における焚火の際の焚口が、複式炉に限って何故に一つの施設として出現したのであろうか注目すべき構造である。

3　家屋構造の改善と火の分化

田地ヶ岡遺跡における竪穴住居址の構造をみると、1号・6号・7号・8号においては、明らかに入口の構造は複式炉の左に位置する。

この地方の中期末葉の竪穴住居址の入口はこのパターンが一般的な傾向とみられる。入口より入った炉の左側にピットや混土の落ち込みなど層位の乱れがある場合が多い。14号住居址は炉の左側壁際に大きな磨石・石皿および硅石質原石2個がまとまって検出されており、住居址の左半分が作業場であったのではないか。この地点は入口から射す外光で、昼間の作業に適する場所である。炉の周辺には熱変し、時には有機質の黒こげが付着している粗製土器が存在する場合が多い。特に炉の右側であることから火を使用する調理担当者（女性）はこの付近に位置していたと想定される。

11号住居址の炉の奥壁際の生活面に高杯状注口土器と器台が粗製深鉢形土器と一括出土している。注口土器は特殊な水容液（果酒）を入れたものであるから、炉の奥は家長（男性）の占有地であろう。13号・17号住居址の場合はこの地点に立石遺構があり、多数のフレイクが一括出土したのは何と解釈されようか。とにかく炉を中心として左右、奥の空間が、性格を異にした使途があったことが想定されよう。

さて、埋設土器部(a)・石組部(b)、および前庭部(c)には、一体どのような使途があったのであろうか。

石組炉と埋設土器炉の境界や石組の上端が強く火気をうけていることは、石組炉が焚火をした箇所であるとみるのはあやまりがない。ところが舟底形底部には木炭や灰が厚く堆積した例は少ない。これは焚火によって生じた「おき」を埋設土器部に移し、取灰を他に除去したと考えられる。熱気をうけた粗製土器片が炉中にあることは、石組部において土器を使用して煮沸を行ったことを示している。すなわち石組部は焚火を行って、房中の暖と照明をかね、煮沸も行ったことを知ることができよう。

埋設土器部は、石組部において生じた「おき」を移し調理を行ったことが考えられる。埋設土器部

の傍らに粗製土器がおかれている場合が多いからである。埋設土器の上に食料を入れた土器をかけ、あるいは直接火を使用して魚肉類を焼き蒸焼をやったことも考えられよう。つまり焚火炉と埋設土器が分化したことは調理法・食生活の変化が指摘される。埋設土器が2個以上複数となること（複々式炉）は大木9b式末葉にあらわれる。大林太良はアイヌの民俗例をひいて、家屋内に炉を二つ設けるのは、家族の多い家、格式の高い家、2世帯が同居する家をあげている。

しかし田地ヶ岡遺跡4号住居址のごとき径4mの小型な竪穴住居址が複々式炉であるのはどうであろうか、まして18号住居址のごとき非実用的な小型埋設土器を2重に礫が囲んでいるのは、家族の増加、人口の増加、家格の高い家をもって解釈されるものではない。

複式炉の特異性を知るには、この埋設土器が複数となることの解明にあると思われる。複々式炉の場合、注目すべきは、田地ヶ岡遺跡4号住居址からは、奥の埋設土器が極めて精巧な精製土器であり、18号住居址は2個とも精製土器であるが奥の方の土器は径10cm弱の極めて小さいもので、やはり列石が2重に囲み、火力を強く受けている。本宮上原遺跡西群1号住居址は4個の複々式炉で、大型埋設土器が炉の主軸に配され、中間の左右に小さい土器が2個配されている。何故にこのように小さい埋設土器があるのか、どのように使用されたのであろうか。非実用的な小型埋設炉は、火の第3の用途があったのではないか、林謙作は「火に関する観念が複雑化し、たとえば祭祀用の火と日常実用の火を区別するといった慣習が出現したことを物語るのではないか」とのべている。

梅宮は『田地ヶ岡遺跡概報』において非実用の小型埋設土器は供献用の埋設土器でないかとみており、さらに埋設土器部は、「火種」の保存に供したのではないかと民俗学上の「断えずの火」を例証にあげている。

次にコの字形部分（(c)前庭部）の空間に注目したい。農家の一般的な炉における焚口（木尻）に当るが、この空間は全く火気を使用しておらず、石組部(b)の木炭、取灰すら捨てていない箇所である。ただしこれだけの理由で祭祀的な特殊な空間とみるには何らの積極的証左がない。ここで注意を促したいのは、この前庭部の中心（やや壁溝に近く）にピットがあることである。何らかの儀礼用の木製品が建てられてあったか、あるいは木下忠の「戸口に胎盤を埋める呪術」（『考古学ジャーナル』）や渡辺誠の「埋甕考」のごとき意図があった小ピットではないかという想定も考えられる。ただしこの小ピット内には土器その他の遺物が検出されていない。

東北地方南部の民俗例においては、胎盤・死産児、江戸時代の「間引」による出生児圧殺死体は戸口ではなく、台所（流し）のカマドの近い縁の下に埋められた。出生して7日を経過しない死生児は名前がないので〝人間〟としては扱わず台所の縁の下に簡単に埋められたものである。「台所のカマドの近く」ということは炉（火）のもつ呪力により鎮魂の儀が背景にあったとした場合、複式炉における前庭部の小ピットが何らかの鎮魂か、火の呪術のごとき儀礼を行った空間とみては如何であろう

か。つまり焚口という実用性の外に、火の属性における第3の性格が加味されていやしないかという問題を提示したい。

4　複式炉出現の背景

安達太良型複式炉は大木 9a式期に突然完成をみ、安達太良山麓を中心に急激に半径50～80㎞の範囲内に分布したが、大木10新式期になると、短時間に消滅してしまった。この意味では地方的な特殊文化現象とみられる。では何故に半径50㎞の範囲内にかかる地方的特殊文化が醸成されたのであろうか。これは次の要因が考えられよう。

1　自然環境と食料資源の変革

藤則雄は花粉分折結果から約8,000～約4,000年B．P．を温暖期として、現在よりも2℃高温、また約4,000年～1,500年B．P．を冷涼期とし、現在よりも1℃位低温であったとし、縄文中期末葉が温暖期から冷涼期へ徐々に移行する時期としている。

この時期の食料資源確保としての生産的労働手段は、狩猟活動によるシカ・イノシシ・カモシカ・クマ等の大型獣と、ウサギ・タヌキ・テン・ムササビ等の小動物、ならびに漁撈としては淡水魚、その中でも季節的に溯上するサケ・マス漁である。植物質食料は落葉広葉樹林、照葉樹林帯が重層化に生ずるクリ・クルミ・トチ・ドングリ等の堅果類および下草・球根類である。

縄文中期にヤマイモ等の食料植物の初歩的な根栽文化・半栽培が行われたのではないかという試論が出されている。縄文中期に根栽文化があり、これが原始農耕とみるには問題があるが複式炉という巨大な火を使用する炉が出現した背景には食料資源の上に変革が生じ、調理法が多様化したということは想像のみではなかろう。

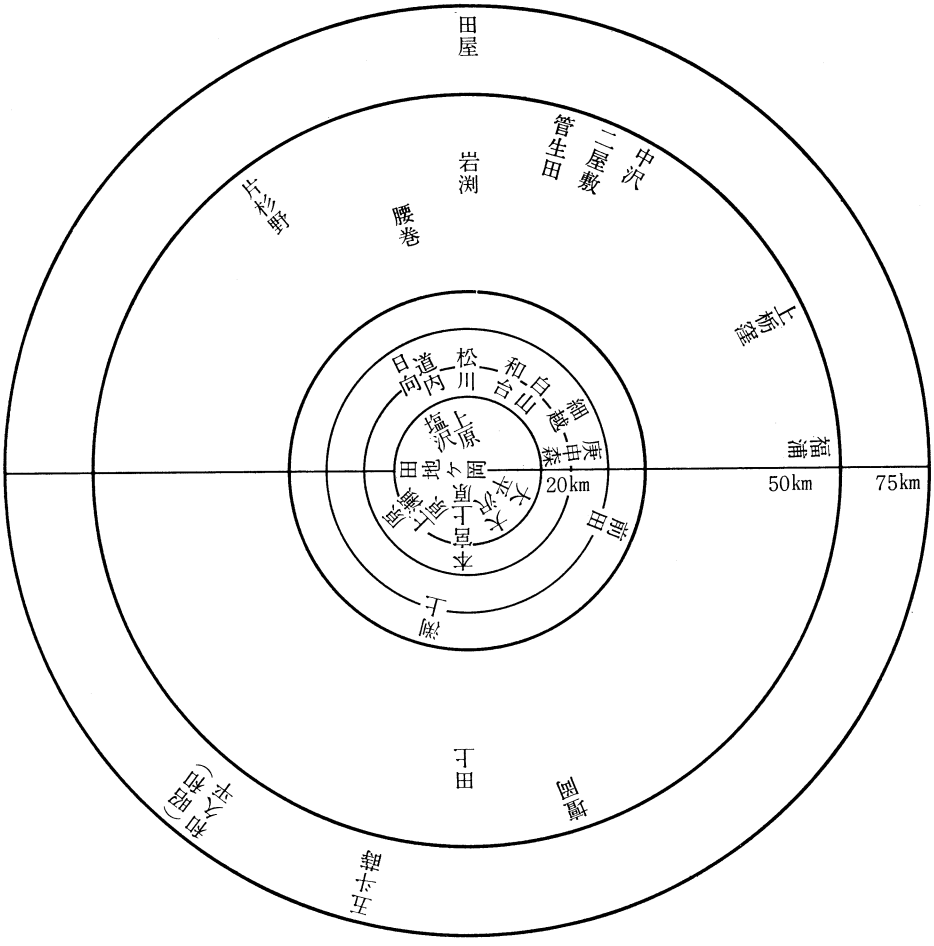
食生活、調理法の変容は粉末食料によるパン状食品が工夫され、乾燥食料も考えられているようであり、注口土器の出現は特殊な溶液―木の実酒が醸造されて火の使途が増加したことから、複式炉の機能を裏付けていよう。もう一つは北部太平洋に注ぐ河川に多いサケ・マス漁が東北地方における食生活に大きなウエートを占めていることに注意したい。鮭の乾魚保存には巨大な炉はうってつけの条件ではなかろうか。

2　中期末葉の集落構成と住居構造

田地ヶ岡遺跡が典型的な環状集落（馬蹄形）であることは、前項において既にのべてあるので省略するが、人口の増加と共同体の規制のため、この時期に大きな支配力があったことは先学が指摘しており、住居址の構造として巨大な複式炉が住居の空間を大半しめることから、3本柱という独創的な家屋構造を作るに至った。柱構造はすべてが3本柱ではなく、従来からの4本～6本もみられるが、この場合は柱穴を壁際によせて空間を多くとるように努めていることも見のがせない。

5 複式炉文化圏

複式炉の形成過程試論については、前述の丹羽・越田両名の労作があるが、初現が、どの地点であるかは勿論知るよしもない。しかし極度に発展し、しかも住居址群として同一の複式炉パターンを採用しているのは福島県内陸部で、最も緻密に分布し、数が多いのは安達太良山麓の安達郡である。試みに分布図を作製してみると、原瀬上原、塩沢上原A・B、田地ヶ岡、本宮上原、杉田大沢、大平遺跡と1地点に群集し核を形成している。この核にコンパスの脚をあて円周を描くと、水原日向道内、松川、飯野白山、同和台、川俣細越、同庚申森の各遺跡が安達太良山麓の核から20kmの狭い範囲内に



第3図 複式炉文化圏

ふくまれ、郡山淵ノ上、船引前田遺跡らもこの文化圏にふくめてよかろう。

さらに50kmの円周内には福島市八景腰巻、国見町岩淵、鹿島町上栃窪、小高町福浦貝塚、石川町田上、少しはずれて鮫川町壇ノ岡の各遺跡が含まれる。宮城県蔵王山麓の東部にある菅生田・二屋敷・中沢の諸遺跡、蔵王の西麓になる山形県最上の片杉野や東置賜の諸遺跡も、径50kmに内包されて、第2区の文化圏を形成している。それ以外の遠隔地である会津昭和村和久平遺跡、栃木県の五斗蒔遺跡、遠く岩手県の田屋遺跡などは、第3圏または圏外となり、安達太良山を遠くへだたるに比例して遺跡の検出例が逓減し、複式炉の範疇に入らない準複式炉とも称するものとなる。

石川・富山・新潟等の日本海豪雪地帯の複式炉は、安達太良型複式炉とは祖形を同一としていると解すると、同時発生の別系統とみてよかろう。江坂輝弥の調査になる新潟県沖ノ原遺跡の馬蹄形積石炉は、安達太良型複式炉に最も近似し、埋設土器部とセットになって石組部があり、しかも前庭部を思わせる列石が両袖をなしている。ただ前庭部に落ち込み空間が存在しない所に大きな差異がある。

第3図を凝視すると、二本松市周辺が最も多く、形式も同一パターンであり、この地点が中核となって、20km、50kmと外周にゆくに従って逓減し、遠隔化するに従って三部分からなる複式炉の形態が崩れ、または未発達となり、他の要素に支配される傾向がある。すなわち二本松市を中核とし周辺への距離に比例して、遺跡数が減少し、定型を欠除する傾向がある。ここに縄文中期末葉、二本松市周辺を中心とする75kmの範囲内に複式炉をもつ特殊な地方文化圏が存在していたことを指摘するものである。

（梅宮　茂）

第8編　川　原　遺　跡

遺跡番号	2—11
所在地	伊達郡国見町小坂字川原30
時代・種類	縄文時代（後期）特殊遺跡
調査期間	昭和48年6月12～7月2日
担当者	目黒吉明
調査員	木本元治　高倉敏明　八巻一夫　大越忠士
協力機関	国見町教育委員会　国見町郷土史研究会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 171
　第1節　位置と地形…… 171
　第2節　周辺の遺跡…… 171

第2章　調査経過…… 172
　第1節　予備調査…… 172
　第2節　調査経過…… 173

第3章　遺　　構…… 173
　第1節　第1遺構…… 173
　第2節　第2遺構…… 174

第4章　遺　　物…… 174
　第1節　縄文式土器…… 175
　第2節　石　　器…… 179
　第3節　土製品…… 179
　第4節　土師器・須恵器・木製品…… 180

第5章　植生と実年代…… 181
　第1節　植　　生…… 181
　　1　植生資料の採集…… 181
　　2　植物遺体…… 181
　　3　花粉分析…… 184
　第2節　C^{14}測定年代…… 185

第6章　考　　察…… 186
　第1節　遺物包含層…… 186
　第2節　遺　　物…… 187

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

遺跡は、東北本線藤田駅の西北西約700mにあり、行政区画上は国見町小坂字川原30番にあたる。地理的には福島盆地の西北端に位置し、小坂・泉田部落をかなめとする扇状地上にある。扇状地上の多くは水田化されており、当遺跡も水田下に埋没し、工事によって発見されるまで知られていなかった。遺跡の西には比高3mほどの洪積台地がせまっており、洪積台地の末端の崖下に位置している。台地上は桑畑となっており、表面採集を行ったが遺物は発見されていない。遺跡の標高は96mとなっている。（図版1・2）

第2節　周辺の遺跡

『全国遺跡地図(福島県)』には、国見町には31遺跡が掲載されている。このうち当遺跡周辺のものとしては第1表のようなものがあげられる。

第1表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	種類	所在地
2—6	日矢来古墳	古墳	国見町大字石母田字日矢来
2—7	正玄堂遺跡	古瓦	〃　〃　字台
2—8	大清水遺跡	縄文・土師	〃　〃　字大清水
2—9	二重堀遺跡	土塁・濠	〃　大字大木戸～森山
2—10	上川前遺跡	縄文・土師	〃　大字山崎字上川前
2—11	川原遺跡	縄文	(本調査遺跡)
2—12	堰下古墳	古墳	国見町大字泉田字堰下
2—13	源宗山古墳	古墳址	〃　大字山崎字北古館
2—14	硯石横穴群	横穴	〃　大字石母田字硯石
2—15	上野台古墳	古墳	〃　大字森山字上野台
2—16	神明遺跡	縄文	〃　大字森山字神明

国見町内においては、縄文早期・前期の土器は現在のところ発見されていない。しかし中山遺跡からは多量の石篦が発見され、また上野台遺跡からは玦状耳飾が発見され、また三吉神社にも古い石器が保管されており、早期・前期の遺跡も存在すると思われる。中期の遺跡としては、山田・岩淵・車

の3遺跡がある。後期から晩期にかけての遺跡としては、当遺跡のほか山田・竹ノ内・中島・館ノ内などの諸遺跡があり、後晩期の遺跡が比較的多く存在している。分布の上からは、石母田の北部、高城・大木戸・西大枝等に縄文遺跡が多く、大字小坂地域には数が少ない。（目黒吉明）

第2章　調　査　経　過

第1節　予　備　調　査

昭和48年5月、国見町内の東北縦貫自動車道の工事は、株式会社奥村組の手によって進められていた。この縦貫道建設に関連して県道藤田～小坂線は、従来の位置から約200m西南に付け替えられることとなり、立体交差の設計により県道部の掘下げとコンクリートパイプの打込みが行われていた。5月27日地表下約1.5mのコンクリートパイプの間から縄文土器片多数と植物遺体が発見され、その報が工事現場近くに住む安藤留作により国見町教育委員会に連絡され、更に日本道路公団を経て5月28日県教育委員会に連絡がとられた。県教育委員会では、昭和48年5月29日から6月1日にかけて予備調査を実施した。

工事は前述のように地表下約1.5mまで掘り下げられ、県道敷の両サイドにコンクリートパイプが打ち込まれていた。このパイプ間の土は工事区のほぼ中央部に放置されていたが、この土に縄文土器片と木片・種子などが混入していた。これらの資料の収集につとめるとともに、最初に遺物が発見された県道工事区の西側周辺の調査を行い遺跡の存否を検討した。

工事区の西端を北から約8～9m南によった地点のコンクリートパイプの間からは、木材・木葉・種子などが黒褐色土に包含されてほぼ原位置のまま発見され、これからわずか1m前後南によった地点で土器片がわずかであるが発見された。またこの近辺から、工事による掘り込みの断面にあらわれている黒色土中に、縄文土器が包含されていることが判明した。この工事区西側の断面は、表土層50cm（一部盛土）、褐色土層10～30cm、淡青色土層20～30cm、灰褐色粘土層50cm前後、青粘土層5～20cm、黒色土層5～25cm、礫を含む青粘土層と堆積しており、部分的に黒色土層が青粘土層をはさんで2層露頭していた。この黒色土層は南北に約13.5mほど断続して発見された。

このような状況から遺物包含層は、工事区の西側の中央部から北に13.5mほどの幅で西へのびていると判断した。

以上の結果により本調査区域を、南北18m、東西10mを予定し、この範囲の上土の除去を道路公団

に依頼した。またこの地域の北と南の両端に排水のための溝掘りをも依頼した。公団では、この上土をユンボによって除去し、本調査を迎えた。

第2節　調　査　経　過

上土を除去した地域に3×3mのグリッドを南北18m、東西9mに設定し調査を実施した。

調査の結果、B—1、C—1～4グリッドと、グリッドの東側に縄文時代の遺物包含層を検出することができた。この各グリッドの西側は、洪積層が高位に位置し、遺物包含層はこの洪積層台地の東裾に帯状に存在していることが判明した。なおA—5グリッドの北半分およびC—5グリッド以北の地帯は、黒色土が60～70cm堆積し、この黒色土から土師器・須恵器の破片が出土した。この黒色土の下層は淡青色粘土層が30～40cmあり、さらにその下層は砂と小礫の層となっていた。この砂礫層の中から流木状の太い木材とブナの殻斗をはじめ各種の植物遺体が発見された。この木片のC^{14}測定年代は後述のように比較的新しい時代のものであり、川の氾濫により洪積台地を浸食し堆積したものと思われる。

縄文時代の遺物は、前述の各グリッドおよびCグリッド東側（Dグリットと名付ける）の地域で、主として青粘土層にはさまれた黒色土層から発見された。下層の黒色土層は2層に分離することはできなかったが、遺物の出土に上下差がみられたので、第2文化層・第3文化層とわけて収納した。

なお発掘にあたっては、工事の延期その他について種々奥村組の配慮があったことを付記する。

（目黒吉明）

第3章　遺　　構

本遺跡で発見された遺構（注1）は、第1遺構（土器集積遺構）と第2遺構（埋木遺構）の二つに大別できる。第1遺構は縄文時代後期の所産であり、第2遺構は奈良～平安時代の所産と思われる。以下、各遺構についてのべる。（図版4・5）

第1節　第　1　遺　構

本遺構は、C—1グリッドからC—4グリッドにかけて発見された遺構である。工事に伴う破壊で

北と東は現状をとどめていない。しかし南北にのびる長い溝状のものが存在していた。溝は確認された部分で、南北に約12m、東西の最大幅約6.0mを計る。溝は自然に形成されたと見られ横断面は緩い弧を示しており、このカーブは南にいくほど緩くなっている。この溝中に多量の縄文時代の遺物が散在していた。遺物は3層にわたって出土し、各層ごとの遺物出土状況は付図3のとおりである。

＜第1文化層＞（第Ⅲ層）

C－2グリッドからC－4グリッドにかけて土器破片が検出された。土器片は、鉢形土器・注口土器・壺形土器などであり、完形品として異形壺形土器（図版29－8）が出土している。

＜第2文化層＞（第Ⅳ層）

C－1グリッドからC－4グリッドにかけて、本遺跡中もっとも多量の遺物が出土している。土器片は深鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・注口土器・小形土器・朱塗土器などであり、そのほかに土偶・石錐・土錘が出土している。

＜第3文化層＞（第Ⅴ層上面）

第2文化層と第3文化層との区別は明瞭でない。しかし第3層の青色粘土層上部からも遺物が出土している。C－1グリッドからC－3グリットにかけて、壺形土器・鉢形土器・注口土器・小形土器・磨石などが出土している。

第2節　第　2　遺　構

A－6グリッドから検出された埋木遺構であり、土器等の遺物は検出されなかった。しかし植物遺存体が多数検出され、また埋木の一部に人為的な切り口とも見られる部分があったが明確ではない。

この上層から土師器の杯が出土している。なおA－6グリッドの数メートル西の黒色土層から木製杯が偶然発見された。

（大越忠士）

注1　本遺跡で発見された遺構はない。しかし土器の出土状況と、立地条件等を考えあわせると人間集団が何らかの形である状態を創り出したと考えられる。たとえ人間集団が意識的に構築したものでないとしても、かれらの意志が働いた場に対しては遺構と称しても良いであろう。

第4章　遺　　物

川原遺跡の調査で得られた人工遺物は、大部分が縄文時代後期に属するものであり、そのほかにわ

ずかな土師器・須恵器・木器が検出された。縄文時代後期遺物の主体を占めるのは土器であり、完形品あるいはそれに近い大形破片が50点、破片が約3,000点ほどに達した。石器は磨石・石鏃・石錐・石斧などの9点であり、土器以外の土製品としては土偶・土錘の2点がある。

土器の出土状況は、前述のように三つの包含層に分離されたが、第2と第3文化層とは必ずしも明確ではなく、また3層間の時期差はほとんどないと考えられたので、一括して精製・粗製および各器形ごとに分類し、さらにこの類の中でも出土した層位によって細分してみた。

第1節　縄文式土器

粗製土器

第1類　深鉢形土器

＜1種＞（図版16—1～4、27—1～3、29—3）

第2文化層より出土した深鉢形土器を一括する。

〔a〕（図版27—1～3）　いずれも大形の器形で口縁は平であり、胴部の膨らみはなく、器面には櫛目文が施されている。図版27—2は完形の深鉢形土器で、櫛目文は6本が1単位であり、底部は無文である。

〔b〕（図版29—3）　口縁は平でやや内湾し、胴部は〔a〕に比べてやや膨らみが見られる。器面には縄文が施されており、底部には木葉痕がある。

＜2種＞（図版16—5・6、18—2、27—5・6、29—5）

第2文化層と第3文化層にわたって出土した土器、および第3文化層から出土した深鉢形土器を一括する。

〔a〕（図版27—5・6）　2点とも大形の器形で口縁は波状であり、胴部の膨らみはなく、底部は欠損している。27—5は四つの波状口縁からなり、口縁下に1本の沈線を巡らし、それより下に縄文をつけている。27—6は胴部のみ出土しているが、口縁は波状であると思われる。口縁下に7本の平行沈線を巡らし、縦にS字状の沈線を加えている。

〔b〕（図版29—5）　完形の深鉢形土器で、口縁は四つの波状をなし、胴部はやや膨らみがある。口縁下に1本の沈線を巡らし、それより下に縄文を施しており、底部は無文である。

第2類　浅鉢形土器（図版19—7、20—3、25—6、26—10）

＜1種＞

第2文化層より出土した浅鉢形土器である（図版25—6）。口縁は四つの波状をなし、胴部はやや膨

らんでいる。器面の文様はないが、底部には木葉痕がある。

＜2種＞

第3文化層より出土した浅鉢形土器である(図版26—10)。口縁は平であり、胴部は膨らんでいる。器面には縄文が施されており、底部には網代痕がある。

精製土器

第1類　深鉢形土器

＜1種＞(図版19—8、27—4)

第1文化層より出土した深鉢形土器である。口縁は三つの波状をなし、その中間には三つの小突起がついている。胴部はやや膨らんでいる。口縁下に巡らした3本の平行沈線内には縄文を施している。

＜2種＞(図版18—5、19—6、20—1、29—1・2・4)

第2文化層より出土した深鉢形土器を一括する。

〔a〕(図版29—1・2)　2点ともゆるやかな波状口縁であり、頸部から上が花のように開いた深鉢形土器である。29—2は完形で、五つの波状口縁からなり、胴部はやや膨らみ、底部は無文である。胴部には弧状の沈線文があり、磨消縄文がある。29—1は大形の深鉢形土器で胴部から下が欠損している。六つの波状口縁からなり、内側の肥厚した口唇には刻み目があり、頸部には点列が施されている。

〔b〕(図版29—4)　口縁は平で、二段の刻み目が施されている。胴部の膨らみはなく、底部には網代痕がある。胴部には2本の平行沈線を巡らし、その中に弧状の沈線文を加えており、磨消縄文が施されている。

＜3種＞(図版17—1・2・4、25—1～4)

第3文化層より出土した深鉢形土器を一括する。

〔a〕(図版25—1)　口縁は五つの波状であり、胴下半部が円筒状にすぼまった朝顔状の深鉢形土器である。口唇は内側にわずかに肥厚し、器面は磨きをかけられて光沢を呈しているのが一部観察される。頸部には7本の平行沈線を巡らし、2～3本の沈線で縦に区切っている。

〔b〕(図版25—2・3・4)　口縁は四つの波状をなし、上から見ると方形をした朝顔状の深鉢形土器である。口唇は内側に肥厚し、瘤状の突起がある。25—2・4は頸部に平行沈線を巡らし、25—3は頸部に弧状の沈線文と磨消縄文を施している。

第2類　浅鉢形土器

＜1種＞（図版17—3・6、20—2・4、25—5、26—6・7・8）

第2文化層より出土した浅鉢形土器を一括する。

〔a〕口縁は平らであり、胴部に膨らみのある浅鉢形土器である（図版26—7・8）。26—7は口唇の内側がやや肥厚している。胴部の沈線文を施した順序は、①7本の平行沈線、②弧状の縦の沈線③各平行沈線の間にさらに1本の沈線を加えたものと観察される。26—8は口縁に刻み目を施し、弧状の沈線文内には磨消縄文が見られる。

〔b〕口縁が平らであり、胴部の膨らみのない浅鉢形土器である（図版25—5）。口縁下に4本の平行沈線を巡らし、縦に直線の沈線で区切っている。

〔c〕口縁が波状の浅鉢形土器である（図版26—6）。口縁は四つの波状をなし、胴部はやや膨れている。口縁下には2本の沈線を巡らし、その中に縄文を施している。底部には網代痕がある。

＜2種＞（図版17—5、26—9）

第3文化層より出土した浅鉢形土器である。口縁は三つの波状であり、胴部はやや膨れている。口縁下に巡らした5本の平行沈線内に縄文を施している。

第3類　壺形土器

＜1種＞（図版22—2、28—4）

第1文化層と第2文化層の間より出土した壺形土器である。口縁部はやや内湾し、胴部に巡らした2本の沈線内には四つの幾何学的なひし形の沈線文がある。底部は中央部が凹んでいる。

＜2種＞（図版21—1・2・5、22—5・6、28—1・2・3・6、29—6）

第2文化層より出土した壺形土器を一括する。

〔a〕図版28—1・3はともに大型の壺形土器であり、胴下部以下を欠失している。図版28—6は口縁部がやや外反し、胴部には弧状の沈線文と磨消縄文が施されており、底部は平らで無文である。

〔b〕図版29—6は胴部のみ出土した壺形土器であり、頸部に1本の沈線を巡らし胴部全体に縄文を施している。

＜3種＞（図版21—3・6・7、22—3、28—5・7・8・9・10）

第3文化層より出土した壺形土器を一括する。

〔a〕口縁部は外反し、胴部には弧状の沈線文が施され、胴部から底部にかけてゆるやかな曲線を呈する壺形土器である（図版28—5・8）。

〔b〕口縁部は欠損しているが、肩のはった壺形土器とみられる（図版28—7）。胴部には5本で1単位の平行沈線がかぎ形に施され、刺突文が見られる。

〔c〕口縁部が外反し、1・2種に比べて頸部の長い壺形土器である（図版28—10）。胴部には四面にわたって長円と長方形の沈線文が施されている。

第4類　注口土器

＜1種＞（図版23—2～4、26—2～5）

第2文化層より出土した注口土器を一括する。

〔a〕口縁部が外反し、胴部の上半分に沈線文が施され、膨下部から底部にかけて膨らみのある注口土器である。（図版26—4・5）

〔b〕a同様、口縁は外反し、沈線文は胴上部だけに施されているが、胴下部から底部にかけて膨らみがなく、直線的な注口土器であり底部には網代痕が見られる。（図版26—2）

〔c〕口縁部は内湾し、口唇には小瘤および刻み目が見られる。胴部には1対の瘤があり、胴下部から底部にかけては膨らみのある注口土器である。（図版26—3）

＜2種＞（図版23—1、26—1）

第3文化層より出土した大形の注口土器である。口縁部は2段にわたって椀状に収縮している。胴上半部には、刻み目をつけた粘土紐で区画し、内部に曲体弧文を沈線文と磨消縄文により表現している。なお底部の欠失部分にはタール状のものが付着しており、修復して使用したものと推定される。

第5類　異形土器

本遺跡で出土した土器の内、特殊な器形を呈するものを一括して第5類とする。

＜1種＞（図版23—6、29—8）

第1文化層より出土した土器で、壺形土器とみられる。口縁部は外反し、頸部には2段にわたる膨らみが見られる。胴部の膨らみは少なく、胴下部に焼成前の穿孔があり、底部は小さい。沈線文で区画された縄文の施文されていない部分は、磨きがかけられ光沢をもっている。

＜2種＞（図版29—7）

第2文化層より出土した土器で、香炉形土器とみられる。上蓋部と下部が重さなって出土し、上をつなぐ把手状の部分が2点出土している。把手には紐を通す孔が2か所確認された。

＜3種＞（図版23—5、26—11）

第2文化層と3文化層にわたって出土した土器で朱塗の壺形土器とみられる。口縁部は欠損しているが、頸部には刻み目のある粘土紐を巡らしている。膨らみのある胴部には頸部同様の粘土紐をつけ4か所に小瘤起がある。底部は小さく無文であり、器面全体は、磨きがかけられて黒色の光沢を呈している。第4類2種の大形注口土器に器形が類似し、注口土器であったかもしれない。

第6類　小形土器

異形土器と同様に特に小形の土器を一括して第6類とする（図版30—1・2・3・4・5・16）。

＜1種＞（図版30—1・2・4・5・16）

第2文化層より出土した小形土器を一括する。

〔a〕小形の壺形土器であり、口縁は外反し、頸部には沈線文を巡らしている。膨らみのある胴部には縄文が施され、底部は小さい。（30—1・2）

〔b〕小形の浅鉢形土器であり、口縁は内湾し、胴部の膨らみは少なく、底部は丸底である。器面の文様はなく、作りは粗雑である。（30—4・5）

〔c〕小形の深鉢形土器である。口縁は外反し、胴部の膨らみはなく、底部は丸みをおびている。頸部および胴下部に2本の沈線と点列を巡らしている。（30—16）

＜2種＞（図版30—3）

第3文化層より出土した小形の土器である。口縁は外反し、胴部は膨らみが少なく縦長であり、底部は平で比較的大きく器面の文様はない、壺形土器である。　（目黒吉明　大越忠士）

第2節　石　　器

1　磨製石斧（図版30—15）

第2文化層より出土し、色調は暗青色を呈しており、下部は欠損している。

2　磨　　石（図版30—13・14）

2点とも第3文化層から出土しており、ともに楕円形の磨石である。30—13は暗緑色を呈しており、重さが781gである。また30—14は色調が灰白色を呈し、重さは632gである。

3　石　　鏃（図版30—6・7・8）

30—7・8は、ともに第1文化層より出土した石鏃である。30—6は表採のため出土層位は不明である。

4　石　　錐（図版30—9・10）

30—9は、第文化2層より出土した石錐で、色調は暗褐色である。30—10は、表採のため地点不明であるが、色調は黄褐色であり、先端部が欠損している。

5　石　　匙（図版30—11）

第1文化層より出土し、色調は暗青色をした石匙であり、一部に自然面が残されている。

第3節　土　製　品

1　土　　偶（図版30—12）

第2文化層より出土した土偶で胸部のみの破片である。

2　土　　錘（図版30—17）

第2文化層より出土した土錘であり、平面は倒卵形で、索溝は側面で十字に交差し、重さは8gである。（大越忠士）

第4節　土師器・須恵器・木製品

1　土　師　器

本遺跡から出土の土師器は、遺跡の西端A—6、B—5・6、C—5・6グリッドに集中していたが、ごく少量である。出土層位は表土下第4層にあたる灰褐色土層である。器種は、甕・杯・高台付杯の3種類で、いずれも器の大半は欠損しているが、底部残存にて大体の様相を知ることができる。しかし全体の法量を知れるものはない。

甕は、口縁部と体部破片各1点の他に、底部破片が出土している。前者は、それぞれ轆轤による調整痕が認められ、胎土に石英・砂を含んで粗い。後者は、内面を黒色処理し篦磨きの痕跡を残し、胎土は緻密で焼成良好のものである。

杯は、底部残存のもの3点、その他は細片にて出土している。いずれも轆轤調整にて内面黒色処理が行われている。底部残存のものは、底部内面に放射状方向の篦磨きが行われており、切り離しは、回転による糸切り手法が認められるものである。

高台付杯は、C—4グリッド攪乱層より出土のもの1点のみである。1.7cmと比較的高い台部を有し、杯部は、内面黒色処理が施されている。色調は茶褐色にて胎土に細砂を多く含み、粗いものである。

2　須　恵　器

土師器同様、遺跡西端部の灰褐色土層よりの出土である。

杯は、轆轤調整され、底部に回転による糸切り手法痕を有する底部破片1点のみである。胎土緻密にて灰青色を呈するものである。その他は、甕の体部破片3点で外面に平行条の叩き目痕がみられ、内面に青海波文を有するものである。

3　木　製　品

本遺跡の出土品中唯一の木製品は、A—6グリッドから西へ数メートルの第3層にあたる黒色土層中より出土したものである。辛うじて底部より体部の約3分の1程度を残存しており、その形状より椀形の器形を呈するものと思われる。器面には、轆轤回転による軽い数条の段がみられ、特に底部内面には、同心円状の凸を有する。径7.3cmの底部は、体部と一線を画して器厚1.3cmの台状風の平底に作られている。また、木質上面に黒色の上塗り（漆）がみられる。（高倉敏明）

第5章　植生と実年代

第1節　植　　生

1　植生資料の採集

川原遺跡の予備調査にあたり、工事区中央部に搬出された土壌中に、縄文時代遺物とともに植物遺体がかなり発見された。また縄文時代遺物包含層に近接した工事区西端の地点（D－5グリッド）では、遺物包含層の最低面直下に存在する黒褐色土中から、多量の木材と木葉・種子などの植物遺体とが発見された。植物遺体は、土中から掘り出された時点ではかなり鮮明な色彩を呈したが、外気にふれると見る間に退色した。これらの植物遺体は、縄文時代遺物包含層と密接な関係があると考え、木材・種子・土壌とを採集した。

本調査にあたっては、福島大学鈴木敬治教授に現地調査を依頼した。鈴木は、前述の植物遺体のほか、直接D－5グリッドとA～B－6グリッドと、同グリッドの西側の排水溝から植物遺体の採集を行った。

次に、D－5グリッド採集の土壌と、本調査において採集した縄文時代遺物包含層であるC－2グリッドの第2黒色土とを東北大学の竹内貞子に送り花粉分析を依頼した。

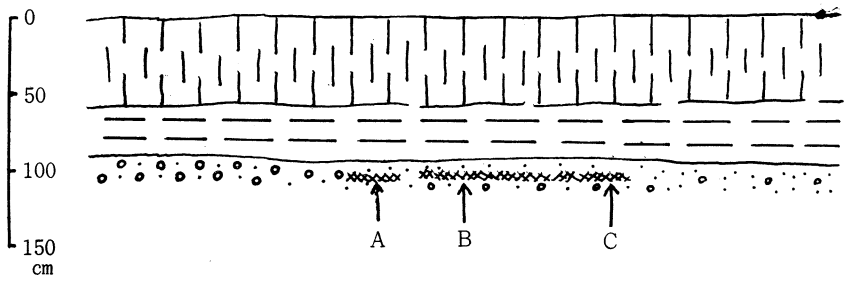
2　植物遺体

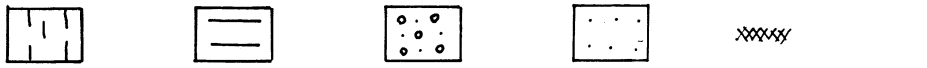
産出層と植生（図版32）

遺体は発掘地の最西端にある露頭断面から多産した。産出層の状況は第1図に示したとおりである。

遺体は種子・堅果・殻斗・翅果のほか同定不能な葉片をふくむ。このほか、材破片も多数みとめられた。第2表に示したように、17属21種が同定された。このほか、不明の数種分の遺体をふくむ。産出層の位置によって、産出種やその産出量に差異がみとめられるが、全体として産出量の多い種は、*Carpinus tschonoskii*（イヌシデ）、*Fagus crenata*（ブナ）、*Aesculus turbinata*（トチノキ）、*Meliosma myriantha*（アワブキ）、および *Styrax japonicus*（エゴノキ）等である。この遺体化石群は明らかにブナ林の植生をおもわせる。なかでも、イヌシデやアワブキの存在は、太平洋側のブナ林の特徴を示している。

第1図　植物遺体産出層の露頭断面のスケッチ





a 土壌化した部分　b 淡青色粘土　c 小礫　d 砂　e 植物遺体の密集部分

■ Aの地点付近では，果実と種子遺体は割合に少なく，葉(破損しているものが多い）の遺体が多くふくまれている。

■ Bの地点付近では，かなり多くの種の果実と種子遺体をふくむ（とくにブナの殻斗が多い)。

■ Cの地点付近では，かなり多くの種の果実と種子遺体をふくむ。とくにブナの殻斗の破片や種子，イヌシデの種子，エゴノキの種子等を多くふくんでいる。

第2表　植 物 遺 体

種　　名	産出遺体の器官	個数	採集月日			
			5.29	6.12	6.22	6.15
○ *Torreya nucifera*(Linn) Sieb. et Zuce.(カヤ)	seed	R	1			
Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.(サワグルミ)	nut	R				1
○ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis*(Miyabe et Kudo) Kitamura(オニグルミ)	nut	R	2	1		
Carpinus tschonoskii Maxim.(イヌシデ)	seed	A			3	13
C. japonicum Blume(クマシデ)	seed	C	2		1	1
C. cordata Blume(サワシバ)	seed	R			1	
○ *Corylus sieboldiana* Blume cf. var. *mandshurica*(Maxim.) C. K. Schn.(オオツノハシバミ)	seed	R				1
Fagus crenata Blume(ブナ)	cupula	A		13	3	23
○ *Quercus* sp.(*Q.* cf. *serrata* Thunb.)(コナラ属)	cupula	R	1		1	1
× *Phellodendron amurense* Rupr.(キハダ)	seed	R				1
○ *Staphylea bumalda* DC.(ミツバウツギ)	seed	R			4	
Acer sp.(*A.* cf. *japonicum* Thunb.)(カエデ属)	samara	R				1
A. sp.　(カエデ属)	samara	R				1
○ *Aesculus turbinata* Blume(トチノキ)	fruit, seed	C		4	4	1
○ *Vitis coignetiae* Pulliat(ヤマブドウ)	seed	R				1
Ampelopsis brevipedunculata(Maxim) Trautv.(ノブドウ)	seed	R			3	
Cayratia japonica(Thunb.) Gagn.(ヤブカラシ)	seed	R				1
Meliosma myriantha Sieb. et Zucc.(アワブキ)	seed	A			3	7
Cornus contraversa Hemsley(ミズキ)	fruit	R				2
C. brachypoda C. A. Mey.(クマノミズキ)	fruit	C			4	3
Styrax japonicus Sieb. et Zucc.(エゴノキ)	seed	A	10	5	10	14
S. obassia Sieb. et Zucc.(ハクウンボク)	seed	C			1	3

注　○印…食用に供される。×印…薬用に供される。　A…10個以上　C…4～9個　R…3個以下

産出層である砂礫や礫質層中の、いくつかの部分に集中的に多くの種が包含されていたり、少数の種が少量ふくまれたりする産状からみて、明らかに化石群は他地生のものであり、当時の谷ぞいに流下してきて含化石層に埋置されたと考えられる。

第3表　花粉百分率表

	種名	D-5グリッド植物包含層(No.5)	C-2グリッド第2黒色土(No.38)		種名	D-5グリッド植物包含層(No.5)	C-2グリッド第2黒色土(No.38)
樹木花粉	*Cryptomeria*(スギ属)	8.0		樹木花粉	*Salix*(ヤナギ属)	0.5	
	T-C-T *	2.0			*Tilia*(シナノキ属)	0.5	
	Pinus(マツ属)	2.5			*Fraxinus*(トネリコ属)	1.0	
	Alnus(ハンノキ属)	2.0		草本花粉	Gramineae(イネ科)	7.9	+
	Fagus(ブナ属)	5.5			Cyperaceae(カヤツリグサ科)	6.8	
	Quercus(コナラ属)	23.0	+		Nymphaeaceae(スイレン科)	0.7	
	Castanea(クリ属)	1.0			Umbelliferae(セリ科)	1.5	
	Carpinus(クマシデ属)	16.0			*Plantago*(オオバコ属)	0.7	
	Corylus(ハシバミ属)	1.0			*Sanguisorba*(ワレモコウ属)	0.4	
	Ulmus(ニレ属)	2.5			*Sparganium*(ミクリ属)	1.1	
	Zelkova(ケヤキ属)	7.5			Compositae(キク科)	0.4	
	Coriaria(ドクウツギ属)	9.5			*Impatiens*(ツリフネソウ属)	0.7	
	Juglans(オニグルミ属)	2.0	+		Rosaceae(バラ科)	0.4	
	Pterocarya(サワグルミ属)	2.0			*Lygodium*(カニクサ属)	0.4	
	Acer(カエデ属)	2.0			Polypodiaceae(ウラボシ科)	3.4	+
	Aesculus(トチノキ属)	11.0			花粉および胞子の総数	75.5	

注　* Taxodiaceae－Cupressaceae－Taxaceae（スギ科）（ヒノキ科）（イチイ科）（スギ属を除く）　　+ 見出されたもの

以上にのべてきた産状は、少なくともごみ捨て場のようなところの遺体群でないことを示すことは明白だが、人間の手の加わった遺体が流入されてきた化石群か、どうかの問題があろう。第3表中に示したように、食用や薬用に供されている種は、意外とその数が少ない。また、これらの種のなかで直接食用に供されている器官の遺体の破損の状態も、人間の手によると明確に断定されるものは認められなかった。これらの種も、トチノキをのぞいては、いずれもその産出量が稀少であった。また遠くはなれた地域から、もたらされたと考えられるような種類もみいだされない。遺体が多産する種は、食用にも薬用にも供されないものばかりだし、多少人間の手が加わったものがまじっているにしろ、大部分の種の遺体は、産出層の付近（後背地）に分布していた植生から、自然の営力でもたらされたものと考えて、差しつかえないであろう。

しかし、産地付近には高い山地はなく、かなり広い洪積面（藤田面や桜田面）と海抜200～300m程度の丘陵性の山地があるのみである。この遺体化石群はとおくとも、丘陵性の山地から搬入されたものと考えられる。産地のすぐちかくには、かなり広い洪積面があることからみて、すべてが丘陵性の

山地からもたらされたとみるよりは、山地の斜面から洪積面にかけての植生からもたらされたとみる方が妥当であろう。

気候条件について

ところで丘陵性の山地から洪積面にかけては、人手の加わった2次林のみしか存在しない。福島盆地周辺でブナ林の発達は、吾妻山では海抜800m以上にみられるが、この遺体化石群が生存していた当時は、ブナ林の植生地がより低下していたと考えられよう。花粉化石群の組成も、量的組成の上でいくらか差異を示すけれども、大型化石群の組成と大きな差異はない。

以上にのべたようなブナ林の植生地の低下は、当時の気温条件が現在にくらべていくらか低下していたと考えさせるようにも思われる。しかし、現在の東北地方では沿岸地域の丘陵地にも、ブナ等が残存的にみられる例が多い。さらに、先述したように、化石産地付近の丘陵や洪積面の植生は、ほとんど2次林となっていることを考えあわせるならば、ブナ林こそが産地付近の植生の原型ではなかったかと推測される。そして、このような考え方が正しいとするならば、現在とくらべて、植生分布帯を変えるほどの気候条件の変化は生じていなかったと推論される。（鈴木敬治）

3 花粉分析

試料および分析方法

福島県伊達郡国見町藤田駅西方の沖積層について、次の2試料の花粉分析を行った。

D—5グリッド（No.5）植物包含層

C—2グリッド（No.38）第Ⅳ層黒色土層（遺物包含層）

処理はすべてKOH—アセトリシス法によった。樹木花粉200個を数え、花粉百分率の基数とした。草本類の花粉および胞子は、花粉および胞子の総数を基数としている。

分析の結果（図版33）

分析の結果は、第3表に示すとおりである。No.38試料は炭状のため（何かの焼跡の試料ではないかと思われる）、花粉がほとんど検出されなかった。わずかに次の花粉および胞子が数個体含まれているのみである。*Quercus*（コナラ属）、*Juglans*（オニグルミ属）、Gramineae（イネ科）、Polypodiaceae（ウラボシ科）。

No.5：草本類に比して樹木類の花粉の割合が多い。樹木類の花粉では*Quercus*（コナラ属）、*Carpinus*（クマシデ属）、*Aesculus*（トチノキ属）の花粉を主とし、*Zelkova*（ケヤキ属）、*Coriaria*（ドクウツギ属）、*Cryptomeria*（スギ属）、*Fagus*（ブナ属）などをともなう。温帯生の落葉広葉樹の花粉が圧倒的に多く、針葉樹の花粉はごくわずかであり、寒冷系要素の花粉は出現しない。（竹内貞子）

第2節　C^{14}測定年代

予備調査ならびに本調査による植物遺体の採集はかなりの量となった。その中から第一に縄文時代後期遺物の実年代の測定を重視し、遺物包含層出土の木炭2件を選び、次に遺物包含層に近接して発見された植物遺体の関連を明らかにするためD—5グリッド出土の木材を選んだ。さらにグリッド北端の流木的木材の時期を明らかにするため同グリッドの木材を選び、日本アイソトープ協会にC^{14}による実年代の測定を依頼した（放射性炭素C^{14}の半減期5730年を基準とした実年代を主記した）。

その結果、次のような年代測定値がだされた。

C—1グリッド第Ⅳ層（遺物包含層）木炭	B．P．3,600年±105（3,500±100）
C—2グリッド第Ⅳ層（遺物包含層）木炭	B．P．3,690年±105（3,590±100）
D—5グリッド（植物遺体包含層）木材	B．P．2,160年±110（2,090±105）
A—6グリッド（　〃　）木材	B．P．1,480年±75（1,440± 75）

注　カッコ内は半減期5,568年とする年代。B.P.は1950年よりさかのぼる年数を示す。

次に各土層の形成を検討してみると、まず黒色土をはさんでいる青粘土層は、一時的な河川の氾濫によって堆積したとみられる。これに対し遺物包含層である黒色土層は、上下の青粘土層形成の中間期に、ある程度の時間をかけて堆積したものと見ることができよう。黒色土層の成因は、溝状の形態と土器中から発見された川藻の存在などから幅4～6*m*、深さ40～50*cm*程度の緩やかな流れの小川の底に堆積したものと思われる。

したがって堆積物は、上流からの漂着物の存在を考慮する必要があり、すべてを縄文時代人が土器とともに投入（あるいは納めた）したものと見ることはできない。また土器と堆積物の一部は時間的な差があることも考慮する必要がある。しかし、上下の黒色土出土の土器に型式的差が見られない点と青粘土によりはさまれている状況から比較的短年月に形成されたと見ることができる。

縄文時代後期は、3,000年前から4,000年前と推定されているが、今回の黒色土層出土の木炭の測定年代は、この中間に入るものであり、下層の黒色土層がB．P．3,690年前と、3,600年前という結果は、加曽利BⅡ式の時期として妥当な数値と思われる。2件の間に90年の差がでたことは、そのまま信じがたい。90年の数値は、誤差範囲の105年内にあり、計数上の誤差とみるべきであろう。

次にD—5グリッドの花粉分析の結果は、伴出木材のC^{14}測定年代がB．P．2,160年とされることから今回発掘の縄文時代後期遺物とは年代差があることが明らかとなった。しかし、同資料は縄文晩期末から弥生中期にかけて同地の植生を示す資料として、同時代研究のために注目されるものであろう。

（目黒吉明）

第6章　考　　察

第1節　遺物包含層

縄文時代の第1遺構においては、遺物が幅4～6mの溝状遺構内の主として黒色土層から出土したことを述べた。この溝状遺構は、東西の断面が弧状をなすこと、川藻の存在、黒色土の堆積状態などから、緩い流れの小川であったと推定されるのである。

ところで、この遺物包含層を小川の川底沈澱物とした場合、遺物投入（納入）の原地点が問題となる。すなわち、上流に投入（納入）されたものが原地点を離れて、流れの緩い当地点で堆積した可能性が問題となる。しかし、遺物は、川底だけでなく現存した溝状遺構の西岸近い傾斜面からも発見されており、西岸から投入され、ほとんど流水の影響をうけずに川底に埋没したと見ることが妥当のようである。それは遺物の密度と遺物の損傷が少ないことからも妥当性が裏付けられよう。このような観点から縄文時代の遺物群は、発掘された現地点の小川に投入(納入)されたとみられ、しかも、西側の台地上からなされた可能性が強い。

次にこれらの縄文土器群は、完形品が多く、完形品以外もいずれも大形の破片であり、一般の包含層における土器のあり方と相違することが指摘される。これについては、陸上の場合は衝撃が多く、かつ強いのに対し、流水と青粘土層の覆土により保護されたとみることもできる。しかし完形品の多さは、単に不用品を投棄したと単純に考えられない。そこに、完形品を投棄するという意識が存在した可能性が提起される。すなわち小川に物を納めるという信仰的行為の可否などを検討する必要があろう。青森県是川遺跡において遺跡近辺の沢から多量の完形遺物が発見されている事例もあり、問題提起をしておきたい。

発見された遺物と集落との関連は明らかにすることはできなかった。おそらく出土地点からほど遠くない洪積台地上に集落は存在したものと考えられる。

第2遺構としたものは、一つは砂礫層に包含された木材と種子類であり、その時期はC^{14}によって5世紀後半の数値がだされたが、出土状態から河川の氾濫によって現位置に埋没したものと推定され、遺構とはみられなかった。

この上部に土師器・須恵器を包含する黒色土層があったが、遺物包含の量は少なく、また発掘可能面積も少なかったため、遺構は確認できなかった。これらの遺物は、原位置を離れて次的堆積と推定されるが、そう遠くない地域に遺跡が存在すると思われる。（目黒吉明）

第2節　遺　　物

1　土器底部について

本遺跡から出土した土器のうち、底部の観察ができたものは121点であり、これらの底部を出土層位ごとに表わしたのが第4表である。

第4表　包含層別底部形態分類表

底部形態	第1文化層		第2文化層		第3文化層		表採		計	
	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
木葉痕	3	43	4	5	0	—	1	27	8	7
網代痕	1	14	43	55	6	30	10	66	60	50
無文	3	43	29	37	14	70	4	7	50	41
擦痕			3	3					3	2
計	7	100	79	100	20	100	15	100	121	100

底部に網代痕を有するものが全体の50%を占め、網代の盛行がこの時期の一つの特徴と見られよう。

2　土器組成について

各器形ごとに出土層位をもとに表わしたのが第5表である。

第5表　包含層別土器器形分類表

器形＼層位	第1文化層	第2文化層	第3文化層	計
深鉢形土器	1	3	4	8
浅鉢		4	1	5
壺	1	5	5	11
注口土器		4	1	5
異形土器	1	2		3
小形土器		5	1	6
粗製深鉢		4	3	7
粗製浅鉢		1	1	2
計	3	28	16	47

以上より、精製・粗製土器の区別、および器形の多様化がしられる。また注口土器の5点を最少に深鉢・壺形土器などの器形がセットとして取らえることが可能であろう。第1文化層からの出土遺物

は少ないため土器組成は明確ではないが、第2文化層・第3文化層においては、器形の多様化が見られる。

3　文様構成について（図版31—1～7）

各器形の文様について表わしたのが第6表である。

第6表　器形別文様分類表

器形 / 文様	深鉢		浅鉢	壺	注口土器	計	
4本以上の平行沈線(拓-1)	第1層	0	0	0	0	0	
	2層	2	2	0	0	4	
	3層	3	1	1	0	5	9
弧状の沈線(拓-2)	1	0	0	1	0	1	
	2	3	2	6	4	15	
	3	1	0	3	1	5	21
磨消縄文(拓-2)	1	0	0	1	0	1	
	2	3	1	5	0	9	
	3	1	0	3	1	5	15
櫛目文(拓-5)	1	0	0	0	0	0	
	2	3	0	0	0	3	
	3	0	0	0	0	0	3
縄文と1本の沈線	1	0	0	0	0	0	
	2	2	1	1	0	4	
	3	1	0	0	0	1	5
無文	1	0	0	0	0	0	
	2	0	3	0	0	3	
	3	0	0	1	0	1	4
計		19	10	22	6		57

これによると、土器の個体数が10点ほど多くなっているが、これは各文様が重複している器形があるためである。

弧状の沈線および磨消縄文を有する土器は、各器形に一様に見られ、全体の約6割を占めている。櫛目文を有する土器は粗製の深鉢においてのみ見られるが、第1文化層から第3文化層までの土器のうちで、特に著しい時期差のあるものが見られないことから弧状の沈線および磨消縄文と同時期と見

てさしつかえないであろう。また上の表には出ていないが、刻み目のある粘土紐を胴部全体に巡らした器形が、注口壺形土器の2点にある。いずれも精巧な作りであり、特殊な用途と考えられるが、時期的には前述の各文様と同時期であろう。

以上より、本遺跡におけるC－1グリッドからC－4グリッドにかけての溝状遺構内より出土した土器は関東での加曽利BⅡ式、東北での宮戸Ⅱb式あるいは宝ケ峰式に比定されよう。石器・土製品については、出土品が少なく明確ではないが、土器と同時期と見てさしつかえないであろう。

なお、最初の工事中発見遺物の中に小片であるが、朱漆塗と推定される土器がある。（大越忠士）

4　そ　の　他

土器組成については、器形のととのった47点の土器について検討したが、壺形土器が11個と最多数を示すことは注目されよう。壺形土器は堀之内Ⅱ式からみられるが、加曽利BⅠ式土器においてはまだ深鉢が主体をしめており、BⅡ式期になって壺形土器が増加する傾向を示しているといえる。次に注口土器は大型と小型とがあり、小型のものは平たい感じのものとなり、用途差を感じさせる。壺形土器の多用と注口土器における2形態の存在は、食生活の面での変化を考えさせる。

なお注口土器2点（図版24－3・4）にタール状の接着剤を用いて修復した痕跡がみられる。

関東地方の土器と対比してみると、まず加曽利BⅡ式においては、壺形土器は本遺跡のように多用されてはおらず、一つの相違が指摘される。次に関東地方の粗製土器は頸部がわずかにくびれた型で、縄文を地文とした上に条線文が加えられ、口縁や頸部に紐線文（粘土紐をはり付け、幅広い刻みを付けたもの）を巡らすものが多いが、当遺跡の粗製土器の器形は、直線的に広がり、口縁部でわずかに内湾を示すものであり、文様は縄文のみのもの、格子状撚糸文を施したもの、櫛目文を施したもの等であり、大きな差異があり、当土器群は東北南部の文化圏に属するとみられる。石器は、出土数が少なく特筆すべきものはなかった。

なお、当遺跡出土の縄文土器類を、当地方の縄文後期中葉の一型式とみなし、川原式土器の名称を与えたい。（目黒吉明）

第9編　大　窪　遺　跡

遺跡番号	13—10
所在地	福島市松川町水原字大窪
時代・種類	縄文時代（後～晩期）集落址
調査期間	昭和47年８月22日～28日（７日）
担当者	目黒吉明
調査員	冨田晴夫　森 貢喜　一条孝夫　八重樫良信
協力機関	福島市教育委員会　松川町公民館（宮田主事）
協力者	丹治宥順　柴田俊彰　中村善彦　佐藤良吉　渡辺昌宏 高松俊雄　八巻一夫

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 193
　第1節　位置と地形…… 193
　第2節　周辺の遺跡…… 193

第2章　調査経過…… 194
　第1節　調査計画…… 194
　第2節　調査経過…… 195

第3章　遺　　構…… 196
　第1節　住居址…… 196
　第2節　埋納土器…… 197
　第3節　特殊炉址その他…… 198

第4章　遺　　物…… 199
　第1節　土　　器…… 199
　　1　縄文後・晩期の土器…… 199
　　2　縄文前期・その他の土器…… 203
　第2節　石　　器…… 203
　第3節　土製品…… 205

第5章　考　　察…… 206
　第1節　遺　　構…… 206
　第2節　出土土器の考察…… 208

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

遺跡は、東北本線の松川駅のほぼ西方4.3㎞に位置している。『全国遺跡地図（福島県）』には13（二本松）—10に大窪遺跡があり、更に近接して、13（二本松）—238に関根遺跡があり、2遺跡が登載されている。関根遺跡の所在地は、松川町水原字大窪となっており、大窪遺跡と重複したものと考えられる。ここでは、「大窪遺跡」として報告する。

土湯の東約3㎞に源を発する松川（水原川ともよぶ）は、東流して下川崎を経て阿武隈川にそそいでいる。この松川は氾濫によりほぼ東西にのびる狭長な平地を形成し、その多くは水田として利用されている。

この狭長な河谷平地の北縁にそって、松川町から土湯温泉へ通る県道が走っている。遺跡は、この県道に沿っている半月状の緩い南斜面にあり、東西約80m、南北の最大幅約60mほどと推定される。遺跡の北側には県道を隔てて山地が急斜面でせまっている。遺跡が存在する南斜面の裾には、近世末もしくは明治はじめに開析され、昭和24年にコンクリートで改修された上井堰が、半円を描いて東に流れている。標高は209.5～212mほどである。

遺跡の存在する南斜面は、桑園・菜園となり、上井堰の南側は水田地帯となっている。東北縦貫自動車道は、この半月形の遺跡の東南部にかかることとなり、遺跡のほぼ半分について発掘調査を実施した。（図版1、3）

第2節　周辺の遺跡

当遺跡周辺の遺跡としては、『全国遺跡地図（福島県）』によれば松川流域に約30か所ほどの遺跡が登載されている。このうち古墳が8か所あり、また土師・須恵関係が4か所を数え、縄文遺跡の数は次の13遺跡となっている。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時期	摘要
13—4	寺方遺跡	縄文中期（末葉）	舌状台地上
13—5	日向道内遺跡	縄文中期（末葉）	舌状台地上（複式炉）
13—6	宇輪台遺跡	縄文前期（前葉）	独立丘陵上
13—8	南沢遺跡	縄文前期	台地上
13—9	小倉向遺跡	縄文中期	舌状台地上
13—10	大窪遺跡	縄文後～晩期	川谷平地の微高地
13—11	熊田遺跡	縄文後期	川谷平地の微高地
13—13	日向山遺跡	縄文（不明）	舌状台地上
13—15	赤貝森遺跡	縄文（不明）	舌状台地上
13—17	本西遺跡	縄文（不明）	川谷平地の微高地
13—19	諏訪原遺跡	縄文後期	川谷平地の微高地
13—20	向裡遺跡	縄文晩期	川谷平地の微高地
13—22	下原遺跡	縄文晩期	川谷平地の微高地

時期的にみると、前期2、中期3、後期3、晩期3となり、早期をのぞき各時期大差ない遺跡数を示している。ただし、立地条件において変化がみられ、中期までは台地上に位置し、後期以降は沖積平地内の微高地に位置する傾向を示している。

なお、宇輪台遺跡（13—6）は、昭和26年6月福島県学生考古学会が、発掘調査を行った遺跡であり、福島県下では数少ない縄文前期の大木2b式の良好な資料が発見されている。また日向道内遺跡（13—5）では、縄文中期の大木10式土器を埋設した複式炉が発見されている。（目黒吉明）

第2章 調査経過

第1節 調査計画

遺跡は、東西80m、南北の最大幅が約60mほどあるが、東北縦貫自動車道がこの南斜面の東南部にかかることとなり、東西に長い遺跡を縦に長くさいて、南斜面の低い部分を調査することとなった。発掘予定面積は東西約50m、最大幅15mほどの小面積のため、7日間の調査日程が組まれた。

調査体制は、発掘担当者は文化課職員1名、調査員は福島市教育委員会職員（1名）と福島大学考古学研究会員（3名）の計4名をもって構成した。なお、福島市教育委員会、松川町公民館（宮田主

事）の協力をえ、さらに調査にあたって、地元の丹治宥順や福島大学考古学研究会員その他の協力をえた。

第2節　調　査　経　過

調査は、南斜面の裾を流れる上井堰によって区画されている半月形の調査予定地に3×3mのグリッドを設置し、発掘を実施した。グリッドは、北から南にかけてA～Dの4グリッド、東から西にかけては1～15グリッドとした（図版2）。

発掘は、A－1グリッドを起点として、千鳥形に掘り進めた。地層は、耕作土（20cm前後）を含め55～70cmの茶褐色土層があり、以下、黒色土層に変化するが、両層の中間に黄色ローム層が存在する地点がある。このローム層は、県道北側の服部家裏山の切崩し面に露頭しているロームと同質とみられ、ある時期に山崩れ等によって流出し、現位置に堆積したものと推定される。黒色土は、厚く堆積しており、60cm以上に及んでいる。傾斜上の位置によって相違するが、地表下50～130cmで湧水面となっている。なお、黄色ロームの分布は、A－1・2・4・6・7グリッド、B－1グリッドに顕著にみられ、C－1・3に少量の分布を示した。

遺物は、耕作土および茶褐色土層では縄文後期土器を主体とし、少量の土師器・須恵器片が発見された。黒色土層からは、縄文後期の遺物を主体とし、少量の縄文晩期の遺物を伴出する傾向を示した。なお発掘地域の西端および南端近くの各グリッドでは、黒色土中に礫が多く混入しており、河川の氾濫をうけたことを示していた。

遺構は、A－1グリッドでは黄色ロームに掘り込まれた直径60cm前後、深さ20cmほどの特殊な炉址が発見され、またA－7グリッドの西北隅では、深さ55cmに焼土で形成されたカマド状の遺構が発見された。これに対して、縄文時代の遺構は、この黄色ロームの下の黒色土層中から発見された。A－3～4グリッドから石囲炉、A－5～6グリッドからは石囲炉と、これを中心として2個の埋納土器が発見された。このほか、A－12グリッドとB－12グリッドにおいて、黒色土層に深く埋納された粗製深鉢4個が発見された。

B－2～3グリッドでは深さ35cmに、長さ2.45m、幅65cmの石組がみられた（以下、「石造遺構」とよぶ）。茶褐色土層中に存在しており、A－1グリッドの流出ローム層に掘り込まれた特殊炉址と同時代のものと考えられたが、性格等は明らかでない。

上井堰の南側について、遺跡の範囲を確認のため、6列グリッド延長線上の水田に2×4mのトレンチを入れたが、水田土壌20cmの下は、わずかに黒色土がみられたが30cm以下は礫層となっていた。

礫層50cmを掘下げたが、更に礫層は深くまで存在し、遺物包含層等を確認することができなかった。

調査日程7日間に、38グリッドとトレンチ1本、面積にして約350 ㎡を調査したが、12グリッドが未掘となった。調査後、未掘グリッドD—9の壁面から粗製深鉢2点が発見され、文化課に提出された。埋納土器であった可能性が強い。（目黒吉明）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

遺構は、縄文時代関係としては、住居址2軒と埋納土器6例（調査後発見を加えれば8例）とがあり、土師・須恵器に伴ったと推測されるものに、特殊炉址とカマド状遺構と石造遺構とがある。以下大略を記す。

1号住居址（図版4・9）

A列3～4グリッドにかけて発見された石囲炉を中心とする遺構である。石囲炉は、流出ローム層の下に、わずかな黒色土をはさみ、地表下75cmから発見された。こぶし大から20cmほどの石14個を馬蹄形に配したもので、開口部は北東を向いている。大きさは、長軸65cm、幅62cmほどあり、内部の土は3～5cmの厚さが焼けて赤色をおびていた。

住居址のプランおよび柱穴は不明であったが、炉の周辺の土が堅くしまっており、また同一面からくるみを割ったような形をした異形土製品（図版38）や、磨製石斧・石棒片（図版37）、土器（図版24—5・25—9）などが発見され、住居址のほぼ中央に設置された炉址と推定された。住居址の規模は、炉からA—4・5グリッドの土器片集積部までの距離が2.60mほどあり、またA—3グリッド東端にある平石を住居址内に存在したとみるならば、直径5.5m前後のプランであったと推定される。住居址の時期は、図版24—5の土器から縄文後期末葉と考えられる。

2号住居址（図版7・10）

A—6グリッドの北東すみから発見された石囲炉を中心とする遺構である。1号住居址と類似の石囲炉であり、こぶし大から25cm前後の石を馬蹄形に組んだ炉である。東西55cm、南北の幅58cmほどあり、開口部はほぼ東を向いている。地表からの深さは80cmほどで、黒色土層に存在している。内部の土は、わずかであるが、焼けて赤味をおびていた。

住居址のプランおよび柱穴は不明であったが、炉の周辺の土が堅くしまっており、炉の周辺から土

器片（図版24—4）と打製剝離面をもった扁平な石器（図版37—36）が発見された。また石囲炉をはさんで2個の埋納土器が発見された。この2個の埋納土器は石囲炉をはさんで対象的な位置を占めており、また炉石からの距離もともに30cmほどであり、石囲炉を伴う住居址内に意識的に埋納されたという感じをもたせる。しかし、後述のように土器の上下の位置から住居址に伴うものではないと推定しておきたい。

2号住居址のプランは不明であるが、A—4～5グリッド間にある土器片集積端から石囲炉中心までの距離は2.65mほどあり、直径5.30m前後のプランであったかとも推定される。この住居の時期は、炉址の北側に接して発見された図版24—4の土器から縄文後期末葉と推定したい。

第2節　埋納土器

埋納土器は、単独で発見されたものはなく、いずれも複数で発見されているので、群として記述する。2号住居址出土のものをA群、A—12～B—12グリッド出土の4例をB群、調査後発見のものをC群とする。

埋納土器A群（図版8・15）

A—5～6グリッドの2号住居址内発見の2例で、1号埋納土器は石囲炉から西に30cmの位置に、2号埋納土器は石囲炉から東に30cmに位置しており、石囲炉を中心に対象的位置を占めている。しかし、1号埋納土器は、炉石と水平面以上の部分すなわち口縁部を欠失しており、住居址構築の際、埋納土器を破壊したごとき状況を示している。したがって埋納時期が住居址構築前と推定される可能性を示している。これに対し、2号埋納土器は、石囲炉および床面に貼り付いている土器片（埋納土器の東に隣接）から、わずかに突き出ている（図版8）にもかかわらず、口縁部がほぼ完全（図版22—3）であり、住居の使用を停止してから埋納したと推定される。このように1号と2号の埋納時期はかなりの時間差が推定される。

両者とも胴上半部に櫛目文を施した深鉢であるが、1号は波状の櫛目を縦に、2号は横に直線的に施している。埋納土器に付随する設備はとくに見当らず、わずかに2号土器の口縁にかけて扁平な石が存在するのみである。炉石および2号埋納土器の東に隣接している床面の土器が原位置を保っていることから、土器を埋納できるだけの掘り込みを行い埋納したものと推定される。

埋納土器B群（図版15・16・17）

B群は、A—12からB—12グリッドにかけて発見された4個の埋納土器である。4個の位置関係は、B—12グリッドに1～3号埋納土器がほぼ東西に近接して並び、その間隔は1～2号間30cm、2

～3号間20cmとなっている。4号は、2号土器の北に85cmの間隔をおいて位置している。各土器の上下関係は、各土器とも土器の上縁は地表下70～78cmにあり、黒色土中に直立して発見された。3号の底辺が浅く、口縁部の大半を欠失しており、やや浅い位置に埋納されたため、土器上半が破壊されたとみられる。A—12・13グリッドは、遺跡の西端に近く、黒色土中および黒色土上面には礫が多く存在していた。1号および2号土器上には20cm～40cmほどの礫が存在していたが、意識的に置かれたものか、土層中の礫として存在したものか判断は困難であった。

各土器間の時間的関係については、A群のような埋納時期差を示す条件はなく、また埋納のための土壙も確認できないため前後関係は不明である。

注目すべき点は、2号埋納土器は底部穿孔がみられ、また3号・4号も底部を欠失していることである。これらの3点には、底部を欠くという共通意識の存在が理解される。

埋納土器C群

C群は、D—9グリッドの西北壁から調査終了後、偶然に発見されたため、その出土状況は不明であるが、土器の保存がよく、また粗製深鉢である点から埋納土器であったと推測したい。

第3節　特殊炉址その他

特殊炉址（図版13、15—3）

A—1グリッドの西北すみから発見された遺構である。地表下55cmの深さにおいて流出ローム層に掘り込まれたもので、長径67cm、短径65cm、底径45cm、深さ20cmほどの円形プランの炉であり、周辺は全面赤化しており、底部には2～3cmほど木炭・焼土が堆積していた。流出ローム層はB—2グリッドまでのびており、住居址の貼床的規模をもっているが、ローム上面は凹凸があり、床面とは考えられない。時期的には、縄文後晩期包含層の上にのった流出ローム面であり、古墳時代以降と推定されるが、明確な伴出物はなく不明である。その性格については、内部で火を用いたことは明らかであるが、古代・中世の住居址内炉とは形態を異にしており、むしろ国見町山居製鉄遺跡にみられる製鉄炉に類似する。しかし、鉄滓・羽口等が発見されず性格は不明である。

カマド状遺構（図版14）

A—7グリッドの北西すみに位置する遺構で、地表下55cmから発見された。焼土で構成されたもので、U字状の底部が欠けたような形態である。長さ45cm、幅30cmほどのもので平石を1個ともなっている。カマド状遺構としたが明確なきめてはない。

石造遺構（図版11、15—4）

B－2～3グリッドにかけて発見されたもので、石の上部は地表下35cmほどであり、他の遺構にくらべ、比較的浅い位置にある。こぶし大から最大40cmほどの石で構成されたもので、長さは2.45m、最大幅65cmほどある。ほぼ東西をさしている。縄文土器の小片1点と焼土を伴出したが、その時代と性格は不明である。（目黒吉明）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

大窪遺跡出土土器は、完形品7点、破片約2,000点を数える。時期的には、縄文時代前期、古墳時代、歴史時代のものも出土しているが、縄文時代後期後半から晩期初頭にかけてのものが圧倒的多数を占める。当遺跡の地層層序を的確に把握することは困難で、また出土土器も圧倒的に小破片が多いため、層位あるいは器形は土器分類の基準とはなしえない。よって出土土器の分類はその文様を中心として行うこととする。

1　縄文後　晩期の土器

第1類土器（図版27－1）

大きな波状の口縁をもち、頸部で一度つぼまり胴部が膨らむ深鉢で、口縁および口頸部に磨消縄文のみられる土器である。縄文は目のこまかい撚りのきつい単節のRLである。わずかに口縁部2点の出土であるが、いずれも器質は良好で、内外面とも黒色を呈している。

第2類土器（図版27－2）

わずか1点の出土である。器形・文様とも第1類土器に類似するが、口縁は平縁で小突起をもつ。

第3類土器（図版24－1・4・5、27－3～21）

瘤状の小突起が器面に貼付された土器の一群で、瘤の形態、装飾文様などの組み合わせは変化に富むが、文様のモチーフなどからいくつかに分けられる。器形は壺形あるいは注口の存在も考えられるが、深鉢形のものが多く、それは口縁部が開き、頸部で一度つぼまってから、胴部でややふくらみ底部にむかうもの〔タイプ1〕（図版24－1・4）と、口縁直立か、あるいはやや内湾するが、ほぼ直線的に底部にむかうもの〔タイプ2〕のふたつのタイプに分けられる。タイプ1の文様は口縁部から

胴部にまでおよぶ傾向にあり、タイプ2の文様は口縁部周辺のみに施される傾向がある。この類の土器は、瘤の形態、文様のモチーフなどから下記の4種に細分できる。

〔a種〕（図版24—1、27—3～6・8）　単独小瘤で文様は沈線のみのものである。沈線は規則正しく平行に比較的深く刻まれたもの（図版24—1、27—3～6）と、不規則に浅く刻まれたもの（図版27—8）とがある。前者は〔タイプ1〕の器形・文様モチーフをもち、後者は〔タイプ2〕に属すると思われるが、図版27—8のように壺形と考えられるものもある。瘤は、前者が規則的にほぼ等間隔に貼付されているのに反し、後者は不規則である。

〔b種〕（図版24—4、27—7・9・10・12）　単独小瘤で文様は磨消縄文をもつもので、瘤は概ね縄文帯上に貼付される。文様は、平行沈線で区画されたもの（図版27—7・12）と入組文・弧線連絡文をなすもの（図版24—4、27—9・10）とがある。器形は、前者が〔タイプ2〕、後者が〔タイプ1〕に属するようである。ただし図版27—7は壺形と思われる。磨消縄文は、全体に縄文を施した後に沈線で区画し磨り消したものが多い。

〔c種〕（図版27—11）　小瘤と刺突列点文が組み合わさったものである。わずかに口縁部1点のみの出土であるが、器形は口縁直立の深鉢であろう。なお、図版27—16のように刺突列点文と磨消縄文を併せもつものもある。

〔d種〕（図版24—5、27—13～15・17）　文様モチーフに刻目帯文をもつものである。この種の土器に貼付された瘤は二つで一組をなすものが多い。文様は胴部にまでおよぶものと、口縁部のみに施されたものがあるが、器形は前者が〔タイプ1〕、後者は〔タイプ2〕に属するだろう。

以上、貼瘤文土器を4種に大別したが、このほか、瘤の形態には、瘤の中央が凹んで輪状をなすもの（図版27—18）、縦長で横に刻み目の入ったもの（図版27—19）、それが対になっているもの（図版27—20）、耳状のもの（図版27—21）など各種あるが、これらはいずれも小破片で1点のみのものがほとんどで器形の推定は困難である。また、図版24—5のように胴部のつぼまった部分にのみ瘤が貼付されたものもあるが、確認できるのはこの1点のみである。

なお、この類の土器は、器厚が4～6㎜ほどで、胎土・焼成ともかなり良好なものが多い。

第4類土器（図版28—22～26）

2本の平行沈線間にこれと直角をなす刻み目を入れた帯状文をもって加飾した土器の一群である。刻み目は篦状工具により狭い間隔で施され、平行沈線はいずれも比較的深く描かれている。また、ほとんどが口唇に突起を有している。この類の土器は胴部資料を欠くため器形の判定は困難であるが、第3類とした図版24—5の深鉢と同様、口縁部が外反し胴部で一度つぼまる形の深鉢が多いと思われる。器厚は5㎜前後のものが多く、胎土・焼成とも良好で器質もかたくしまっている。

第5類土器（図版28—27～32）

この類の土器は、第3類刻目帯施文土器と近似した文様形態をもつが、刻目帯文が篦状工具によって刻まれているのとは異なり、棒状工具で横あるいは下方から器面に刺突して刻目を施した刺突列点文をもつ土器である。この類は下記の2種に分けられる。

〔a種〕（図版28—27～29）　比較的大きい刺突文で構成されているもので、刺突文は平行沈線で区画されており、それは口縁部に集中し胴部は無文のものが多い。この種の器形は、口縁部がやや外反し、胴部で若干ふくらみ気味となる深鉢が多い。器厚は6～8㎜とやや厚手で、胎土・焼成ともにやや不良である。

〔b種〕（図版28—30～32）　小さい刺突文で構成されているもので、刺突の仕方が丁寧で規則的であり、刺突文は沈線によって区画され入組んでいる。器形は、比較的小型の、口縁部がやや外反するもそのまま直線的に底部にむかう深鉢あるいは浅鉢で、胎土・焼成ともに良好なものが多く、器厚は4～6㎜と薄手である。

なお、この類の土器はa・b両種とも口唇にも刺突刻目が施されたものがほとんどである。また図版28—30のように口唇に突起をもつものもある。

第6類土器（図版25—9、28—33～39）

口縁部に1条～数条の沈線をめぐらし、口縁部に区画をつくっている土器の一群である。これは2種に分けられる。

〔a種〕（図版25—9、28—33～35）　口縁部に1条の沈線をめぐらしているもので、その上部が研摩され下部は縄文が施されているもの（図版25—9）と、逆に沈線の上部すなわち口縁に縄文が施され下部は無文のもの（図版28—33～35）とがある。器形は壺形か口縁内湾気味の深鉢である。

〔b種〕（図版28—36～39）　数条の沈線がめぐらされ、この沈線間が研摩された磨消縄文がみられるものである。器形は、口縁部がやや内湾するもの、あるいは外反するものもあるが、直立するものが多く深鉢形を基本としている。

この類の土器の縄文は、a・b両種とも単節斜行のLRが多く、節も細かい。また磨消手法は、縄文を施した後に沈線で区画し磨り消したものが多い。胎土・焼成は普通で、器厚は6㎜前後である。ただ、b種では口縁部の器厚が胴部の厚さに比べ極端に厚くふくらむものが多い。

第7類土器（図版28—40～42）

三叉文および魚眼状の入組文をもつ土器であるが、わずかに口縁部2点、胴部2点のみの出土であるため詳細は不明である。胎土・焼成は良好である。なお図版28—42は魚眼状入組文の変化したものであろう。

第8類土器（図版28—43～48）

口唇から口縁部にかけて刺突列点文を有し、口縁部と胴部との間には1条～数条の沈線がめぐらさ

れ、胴部には磨消手法による雲形文をもつ土器の一群である。器形は、口縁がやや内湾する鉢形が多く、皿形に近いものもある。あるいは注口の胴部片も4点出土している。縄文は撚りのきつい目の細かい単節のＲＬである。器厚は5㎜前後のものが多く、器質はかなり良好である。

第9類土器（図版28—49～51）

第8類土器と口縁部文様はほぼ同じであるが、胴部文様が斜行縄文の土器の一群である。器形は、口縁が内湾する比較的小型の鉢形である。器厚は5㎜前後で、器質は良好なものと、やや不良なものとがある。縄文は単節斜行縄文であるが、ＬＲ・ＲＬともにある。

第10類土器（図版24—3・7、25—8・11、29—52～58）

器面全面に縄文が施された粗製土器の一群で、斜行縄文と羽状縄文がある。

〔a種〕（図版24—7、25—8・11、29—52～54）　斜行縄文の一群で、縄文は単節でＲＬ・ＬＲともにあるが、ＲＬが多い。器形は平縁の口縁直立かやや内湾する深鉢形である。口唇はいずれも篦などで整形されている。器厚は5～7㎜ほどで、器質は良好なものと不良なものがある。良好なものは一般に薄手であり、縄文原体も細めで器形も小型のようで、逆に不良なものは厚手で器形も大型である。

〔b種〕（図版24—3、29—55～58）　羽状縄文の一群である。斜行縄文にくらべ原体は細い。器形は、比較的小型で口縁が内湾する鉢形が多い。器厚は4～6㎜で胎土・焼成はやや不良である。なお、結節羽状縄文もある。

第11類土器（図版26—14・15、29—59～61）

棒軸に撚紐を巻きつけて、それを回転し施文した撚糸土器の一群である。器形は、口縁直立かやや内湾する大型の深鉢形で、胎土・焼成ともに不良である。器厚は7㎜前後である。ほとんどが単節の撚紐1段を棒軸に巻いた原体を用いているが、図版29—59のように撚紐を交差して巻きつけた原体を用いた網目状撚糸文もある。

第12類土器（図版25—12、26—13、29—62～67）

刷毛状にたばねた工具によって施文された刷毛目土器の一群である。1～2・3本をひとつの単位として不規則に施文されたもの（図版26—13）と4～8・9本をひとつの単位として比較的規則的に施文されているもの（図版25—12、29—62～67）とがある。この類の土器は、平縁で口縁から底部へほぼ直行する深鉢形で、器厚は5～7㎜ほどである。また胎土・焼成は、良好なものもあるが不良なものが圧倒的に多い。

第13類土器（図版24—2、25—10、26—16、29—68～71）

無文土器の一群である。しかし、無文土器には精製研摩されたもの（図版29—68・69）と粗製の無文（図版29—70・71）とがある。器形は両者とも鉢形のものが多いが、前者には壺形や図版25—10の

ような小型のものもある。胎土・焼成は前者が良好であるのに対し、後者は不良で、器厚も前者が4～5㎜のものが多いのに比べ、後者は7㎜前後の厚手のものが多い。

底　　部

底部は168 点出土している。その形態別出土数は図版39のとおりである。a・d・eタイプには底部付近が研摩されたものが多い。底部形態と底径および底部厚との間には一定の相関関係はない。

朱彩土器

朱彩土器は2点の出土である。1点は注口の胴部上半、もう1点は雲形文が施された土器の胴部小破片である。

2　縄文前期・その他の土器

大窪遺跡出土土器は、これまで述べてきた縄文時代後・晩期のものがほとんどであるが、その他の時期のものも小片がわずかずつ出土している。

第1類土器（図版29—72～75）

縄文時代前期のものと思われる土器の一群である。9点ほどの出土であるが、いずれも胴部資料のみで詳細は不明である。

第2類土器

古墳時代後期から平安時代初頭にかけてのものと思われる土師器の一群である。小破片のみの出土で詳細は不明であるが、古墳時代後期住社式に併行すると考えられる甕片11点、杯片12点、平安時代初頭のものと考えられる甕片3点、内面黒色処理の杯片2点、不明4点の出土である。

第3類土器

須恵器・陶磁器の類が15点出土しているが、いずれも小破片にすぎ、詳細は不明である。

第2節　石　　器

石器および特定の形態をもたないが石器として製作された意図の明白なもの、石器の破損品、未成品など計53点出土している。

1　石　　斧（図版32、36—1～3、37—35）

石斧は打製のもの2点、磨製のもの2点出土している。1は両面に加工が施され、側縁は細かい鋸歯状を呈しているが、2は裏面に古い剝離面を残し、裏面先端には自然面を残している。3は基部が欠失しているが、定角式の磨製石斧で片方の側は定角形をなすよう打ちかかれている。図版37—35は

棒状の磨製石斧であり、裏面に基部から長さ4.5cm、幅2.4cm、深さ1mmの剝離がある。

2　石　　鏃（図版30、36—4～23）

石鏃は20点の出土で、形態から4類に分けられる。

＜第1類＞　（図版36—4～10）

基本形は三角形でそれに茎を有するものである。これはさらに3種に細分できる。

〔a種〕（図版36—4～6）　肩部先端が尖っており茎部にかけて内湾する曲線を描く。肩部と茎部との境界は明確でない。側縁は細かく加工され、小鋸歯状を呈している。

〔b種〕（図版36—7～9）　基本的にはa種と同じであるが、a種が細長く鋭利であるのに比して、横幅がありやや鋭さに欠ける。

〔c種〕（図版36—10）　肩部が水平に近く、肩部と茎部の境界が明確である。

＜第2類＞（図版36—11～13）

三角形を基本とするが、三角形の底辺が凹んでおり茎をもたない。11・12は底辺の抉りが浅く両脚はやや丸味をおびている。側縁は小鋸歯状を呈している。13は抉りが深く両脚は側縁から直線上にのび尖っている。

＜第3類＞（図版36—14～19）

全体に菱形に近い石鏃である。14・15は小形で最大厚を基部にもつ。16～19は左右非対称で、14・15に比べやや粗製である。

＜第4類＞（図版36—20～21）

全体が棒状を呈する石鏃である。

以上、出土石鏃を4類に分けたが、図版35—22・23は欠失部があって分類は不可能である。おそらく、22は第2類、23は第3類と第4類の中間に位置するものであろう。

3　石　　錐（図版36—24）

石錐は1点のみの出土である。針部は丹念に整形されているが基部は簡単な加工が施されているのみである。

4　石　　匙（図版36—25～27）

石匙とみなされるものは3点出土している。図版35—26は石匙かどうか断定しかねるが、25とともに横形石匙とみなした。25・26ともに全面加工ではなく、把手のある側縁の刃部は両面加工であるが、他方の側縁刃部は片面加工である。27は横形・縦形いずれとも断定しかねる形態で、把手から直線的にのびる刃部は両面加工、もう一方の刃部は片面加工である。

5　石　　槍（図版36—28）

石槍としてよいかどうか疑問であるが、1点出土している。全面的に加工整形されており、かなり

鋭利である。

6　石　　棒（図版37—33・34）

2点とも基部が欠失しているが、石棒と思われる。33は中央部から基部にかけ黒色を呈しており、火をうけたものと推定される。基部に口径4㎜、深さ5㎜の孔がある。

7　磨　　石（図版37—29・30）

磨石は2点出土している。

8　そ　の　他（図版37—31・32・36）

適切な名称を付すことが困難であるが、明らかに石器としての機能をもつものが3点出土している。

〔Ⅰ〕　図版37—31は、全面が加工整形されており、薄形でかなり鋭利である。先端を若干欠くが刺突の機能をもつものと思われる。しかし石槍などのように刺突を唯一の機能とするものではなく、刺し剝ぐ、剝ぎ切るといったその他の機能をもあわせ持っていると考えられる。

〔Ⅱ〕　図版37—32は半円形をなす石製品で細かい加工が施されている。その機能は不明である。

〔Ⅲ〕　図版37—36は若干の自然面を残した両面加工の大型石製品である。細かい整形はされていない粗いつくりであるが、側縁は鋭い。石斧に似た機能を有すると思われる。

以上、出土石器について述べたが、これらのほかに、特定の形態をもたない不定形の石器未成品7点、石鏃の破損品・未成品4点、石錐の破損品1点、石匙の破損品・未成品5点、計17点出土している。また、石核・石片は約300点が出土している。　　（佐藤満夫）

第3節　土　　製　　品

1　土　　偶（図版35、38—1）

縦4.2㎝、横6.6㎝、厚さ2.0㎝の土偶頭部破片である。黒褐色を呈し、焼成は非常に良く、胎土は細い雲母を含む。目・眉・鼻・口を隆線によって表現している。両耳に径2.5㎜ほどの穴があいており耳飾りをつけた状態を表現してるものとおもわれる。髪は後上部で一つに束ねアップにした状態が表現されている。

2　耳　　栓（図版35、38—2）

B—7グリッドより出土した直径2.8㎝、高さ1.9㎝の厚手円板状の耳栓で、片面に沈線で文様をほどこしている。中央には径2㎜ほどの孔を穿っている。すこし黄色味をおびたうすい黒褐色をしており焼成は非常に良好である。

3　異形土製品（図版35、38—3）

1号住居址の石囲炉に近接して出土した赤褐色の焼成の不良な、一見するとクルミをまん中より半分に割ったような形をした土製品である。中央にしきりがあり、そのしきりの中ほどには、縦3.5㎜、横1.2㎜ほどの穴があり、両側に通じている。また、上部から裏面にかけて、直径3㎜ほどの穴が斜めにあけられており、ひもを通してけん垂したものと思われる。（赤井畑まき子）

第5章　考　　察

第1節　遺　　構

1　集落形態

(1)　立地　当遺跡は、ほぼ東西にのびる河谷平地の辺縁にあり、地下の湧水面も高く、水原川の氾濫を幾度となくうけており、氾濫原の微高地に立地している。これは、縄文中期以前の集落が、ほとんど台地上もしくは山腹の南斜面等に立地しているのに対し、大きな変化を示している。このように河谷平地や盆地内の低湿地へ集落を営む傾向は、本県内では後期初頭から顕著にみられ、後～晩期集落の一つの特色となっている。水害をうけやすい低地へ立地することは、生活の基盤を低湿地・河川等にもとめたものと推定され、中期の生産形態との変化が考えられる。いずれにせよ当遺跡は、本県内における後～晩期集落の立地形態にそったものであることが指摘される。

(2)　遺構配置　縄文時代の遺構は、住居址2軒、埋納土器8例が発見された。各遺構の配置をみると、住居址はいずれもA列グリッドに存在しており、半月形の南斜面の中位に位置している。後世の特殊炉址やカマド状遺構も同じくA列グリッドの北端近くにあり、ほぼ直線上に並んでおり、住居・工房（?）等が南斜面の中位から上位にかけて構築されているものと推定される。

これに対して埋納土器群は、斜面上位が未発掘で不明であるが、中位から下位にかけて存在しており、住居址と埋納土器群の配置に特別な配慮が感じられる。

一般に台地上の遺跡においては、台地中央部には構築物をつくらず、空間をおき、台地平坦部の周辺に弧状に住居を配置している。当遺跡では、南斜面の高位に住居を配し、低位に空間をおき、埋納土器遺構を配した集落形態を示している。その原因は、遺跡の狭隘さと半月形の地形と、さらに水原川の氾濫原にあるという条件からと推察される。とくに後者が最大の原因になったと考えられ、氾濫原における一つの集落形態としてみることができよう。

2　住居址

発見された2軒の住居址は、いずれも石囲炉をもったものであり、黒色土中に床面があるため、柱穴や周溝は発見されなかったが、炉を中心に設置した径5 m前後の竪穴住居であったと推定される。その時期は縄文後期後葉に位置付けされよう。石囲炉は、東および東南に開口した馬蹄形石囲炉であり、大きさは60cm強のものである。縄文後期後葉と推定される炉址は、郡山市熱海遺跡において方形石囲炉と円形石囲炉とが発見され[1]、国見町竹ノ内遺跡においては径1 mほどの馬蹄形石囲炉が発見されており[2]、石囲を一周させたものと、開口部をもった馬蹄形のものが知られている。両者とも後～晩期にかけて共存するようである。中期後葉の大型複式炉から単純な石囲炉への変化は、生産形態の変化と食生活の改革が原因と推定される。

なお、1号住居址において埋納土器2点が発見されているが、前述のように住居に伴うものでないと推定される。

3　埋納土器

埋納土器は、A群2、B群4、C群2の計8点が発見されている。A群は櫛目文をもつ深鉢であり、焼成も良好であるのに対し、B・C群は縄文・斜格子状撚糸文をもつ粗製の深鉢であり、2次的な火気によるものか、器壁の荒れが目立ったものが多く、やや前者と後者とは相異を感じさせる。A群は、住居址との関連で後期後葉と推定されるが、B・C群は、時期を明確にすることができなかった。当遺跡からは縄文晩期の土器も発見されており、B・C群は、晩期に位置付けされる可能性が高い。

埋納土器は、いずれも土器を埋納できる範囲の大きさの土壙に納められたようである。次に埋納の時期については、一時期に同時に行われたものではなく、それぞれ時間差があったものと推定される。それにもかかわらず、これらの土器は群としてとらえられ、そのあり方が注目される。このような傾向は、当遺跡のみではなく、国見町竹ノ内・山田遺跡[3]等でもみられ、後期後葉もしくは晩期前葉の埋納土器の一つの特色と指摘される。

埋納土器の性格については、貝塚における幼児骨納入例があり、甕棺として理解されている。当遺跡においては、土器内部から骨は検出されなかったが、底部穿孔土器と推測されるものもでており、やはり甕棺とみるのが妥当であろう。

ところで、複数で群として存在し、さらに各群がある程度の間隔をもって存在することは注目にあたいする。それは、家族あるいは1グループ単位の墓域の存在を考慮されるからである。当遺跡出土の埋納土器は、いずれも大型であり、洗骨による成人骨の納入についても一考の余地がある。

縄文時代の葬制は、薄葬から厚葬への発展過程が考慮され[4]、その過渡的形態として成人骨の甕棺葬と、家族墓葬の存在とを考慮すべきものがある。骨片の検出もなく決定性は乏しいが、問題提起とし

てふれておく。　（目黒吉明）

参考文献

(1) 斎藤　誠　「熱海遺跡」『福島県史　第1巻』1972
(2) 「竹ノ内遺跡」『国見町史　第2巻』1973
(3) 「山田遺跡」『国見町史　第2巻』1973
(4) 目黒吉明　「昭和48年度　日本考古学協会研究発表」

第2節　縄文土器

出土土器については、第4章第1節において詳述したので、ここでは各類の編年的位置について簡単に述べる。

精製土器

＜第1類土器＞

器形・文様から、この類の土器は、縄文後期中葉に位置する関東地方の加曽利B式に比定され、青森県十腰内猿沢遺跡出土の十腰内Ⅳ式土器に近似する。

＜第2類土器＞

第1類土器とは口縁部形態が異なるのみで、文様モチーフなどは同一であり、第1類土器と同様、関東地方の加曽利B式に並行するものであろう。

＜第3類土器＞

器面に瘤状小突起を有する貼瘤文土器は、縄文後期末葉の各遺跡から普遍的に出土するが、確立した名称もなく、またその編年も十分に確立されていない。ここでは安孫子論文(安孫子昭二　1969「東北地方における縄文後期後半の土器様式」『石器時代　第9号』）の4段階説にしたがって述べる。

a種は口縁部のみによる分類のため、その胴部文様は不明であるが、安孫子論文のBⅢ型式第Ⅰ・Ⅱ段階にあたると思われる。b種は第Ⅱ段階、c種およびd種は第Ⅲ・Ⅳ段階に相当するであろう。

この類の土器は、文様モチーフ、器形などの組み合わさり方が複雑なため、その大概を把握しにくいが、いずれにせよ縄文晩期初頭大洞B式期の前段階、すなわち縄文後期末葉に位置し、関東地方の曽谷式から安行式に並行する。

＜第4類土器＞

この類の土器は、一応ひとつの類としてまとめたが、第3類d種土器と同一文様をもち、それとのちがいは瘤の有無のみである。したがってその編年上の位置も第3類d種同様、安孫子論文の第Ⅲもしくは第Ⅵ段階、関東地方の安行Ⅱ式・Ⅲa式に並行するであろう。

＜第5類土器＞

第3類c種土器と基本的には同種である。瘤の有無のみが異なる点であるが、刺突の際生ずる粘土の盛りあがりを瘤とみることもできる。a種は安孫子論文の第Ⅲ段階、b種は、第Ⅵ段階に位置し、それぞれ関東地方の安行Ⅱ式、Ⅲa式に対比される。

＜第6類土器＞

a・b両種とも口縁部の資料のため、胴部においてどのような文様が展開しているか不明である。したがって編年上の位置付けは明確にはなしえない。しかし、縄文後期中葉から晩期初頭にかけてのものであることに疑いはない。

＜第7類土器＞

三叉文および入組文は大洞B式土器の文様の特徴である。したがってこの類の土器は縄文晩期大洞B式に比定される。

＜第8類・第9類土器＞

第8類・9類土器は、ともに口縁部に沈線間を刻み目で埋めた文様をもち、大洞C_1式の特徴を備えている。ただ第9類土器は第8類土器と異なり、胴部文様は大洞C_1式土器胴部文様を特徴づけている雲形文ではなく、図版28—49などはC_2式にまで下げられるが、大洞C_1式に比定しても大過ないと思われる。

粗製土器

粗製土器4類（第10～13類）の編年上の位置づけは困難であるが、精製土器の時期と同じ縄文時代後期末葉から晩期初頭にかけての時期と考えてよかろう。（佐藤満夫）

第10編　一斗内古墳群

遺跡番号	30—57
所在地	須賀川市越久字一斗内
時代・種類	古墳時代（後期）古墳
調査期間	昭和44年11月8日～20日
担当者	梅宮　茂
調査員	田中正能　永山倉造　古川明　斎藤誠　鈴木啓　渡辺功　加藤義久　永山祐三　有我一二
協力機関	須賀川市教育委員会　同公民館　越久区（区長　西牧彦一郎）　立正大学考古学研究会（川原田典　桐田不二雄　吉田幸一　工藤竹久　工藤肇　小室勉　桑野信子　向田裕始　中島勉　大越道正　川島敏子）　岩瀬農業高校社会クラブ　須賀川女子高校歴史クラブ

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 213
　第1節　位置と地形…… 213
　第2節　周辺の遺跡…… 213
第2章　調査経過…… 213
第3章　遺　　構…… 214
第4章　遺　　物…… 217
第5章　考　　察…… 218
　第1節　一斗内古墳群の特色…… 219
　第2節　一斗内古墳群の石室形式…… 220
　第3節　一斗内古墳群の時期…… 221

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

須賀川市街の北西、4号国道と仁井田に至る県道（旧会津街道）の中間には、いくつかの洪積台地が起伏している。越久（おつきゆう）と籾山部落の中間にある阿武隈川の支流、滑川に注ぐ実取川の小氾濫原を見下す台地に小古墳群がいくつか分布している。一斗内古墳群はその一つである。

第2節　周辺の遺跡

一斗内古墳付近は、古代石背国の中核地点よりは北西の郊外に当る。しかし大きい意味では古代石背文化圏に属しているが辺地の観がある。付近には原始・古代・中世の遺跡が多い。

調査を実施した5基の円墳の外に道路敷外に未調査円墳が数基あり、横穴墳も存在している。更に西方越久部落近くまでのびている。また北方には四十壇古墳群があって近ごろ開田のため破壊され、また東方には籾山大壇古墳があり、これらは同一圏内の古墳とみられる。これらの古墳群を造営したと推定される土師集落跡も近傍に多く、南に延命池遺跡、二枚橋遺跡、籾山遺跡および今回発掘した里ノ内遺跡がある。里ノ内遺跡は道路予定線内には顕著な遺構は発見されていない。やや離れて7基の須恵器窯跡がある関下窯跡、仁井田阿弥陀遺跡その他があり、東南には遠く史跡上人壇廃寺跡、史跡米山寺経塚がある。同一地内にある一斗内横穴群は、当一斗内古墳調査に関連がある横穴であるが、林道工事の際破壊され、わずかに2基が開口している。なお調査中に児童が採集した中に土師器があり、近くに住居址が存在していることが知られる。なお3号墳調査中に縄文前期土器が出土しているので、一斗内古墳群は複合遺跡であることを付記する。　（梅宮　茂）

第2章　調査経過

11月8日（土）西袋支所を本部と定め、ここにおいて調査員・作業員集合して調査法を協議し、午後1時鎮魂祭を挙行、2時より立木伐採、下草刈払いを行い、道路予定線にかかる円墳は1号～5号

であることを確認し、写真撮影、分布図の作製を行う。翌９日(日) 平板・レベル測量、ボーリングを行って石室の存在を確認し、トレンチを設定、ベルトコンベアを運び１号墳より表土をはぎ、11日(火) から５班に分かれて精査に入る。12日(水) ３号墳より刀子１、鉄片出土。13日(木) ２号墳より鉄環を検出し、写真撮影を行う。14日(金) ３号・４号墳の周湟を確認し、５号墳より刀子状鉄片出土。調査員不足のため市職員４名来援、15日(土) 各石室内に遺物の存在が明らかとなり、公民館職員、翌16日(日) にかけて岩瀬農高生、須賀川女子高校生が多数参加し作業進捗する。17日(月) 雨のため、西袋支所にて出土品の整理に当る。18日(火) より実測図作製、補足調査に入るが、側壁・敷石が細かく実測に難渋し日時の不足を歎く。20日(木) をもって予定日を経過したが、１号・３号の実測未了のため、永山調査員、立正大生と共に終了後も作業を継続する（図版１)。（梅宮　茂）

第３章　遺　　構

１　号　墳（図版４・５・６・14)

本古墳群中の最北端、丘陵の北限にある円墳で、三方が傾斜しており、封土の高さは測定しにくいが、２号墳に接する地点からの高さは約80cmで、極めて低い。封土は西および北東部に流れ、西寄りにかつて盗掘が行われた形跡がある。径約10m弱とみられる。墳頂下40cmで石室上端に達する。盗掘による積石が東西８m、南北３mに及んで散乱する。これを整理すると主軸方向N—54°—Wを示す竪穴式石室が検出された。横穴式石室の影響をうけた変形石室とみられる。

石室は全長４～4.1m、最大幅95cm、表土より床面敷石までの深さ1.2～1.3mを算する。側壁は柱状または自然剝離の平石を数段積み重ね、小口を揃えてある。西壁は盗掘により抜きとられているが基部に厚い柱状の割石塊があり、奥壁の破壊された痕跡とみられる。

東部には割石が無秩序に重複しているが、基部に閉塞施設がみられるので、この部分が横穴式石室における羨道部のごときものと推定されるが、羨門・羨道の施設や敷石はないので「墓道」と称することとする。通常の横穴式石室は奥壁に巨大な１枚石を立て、羨道部があり、大きい扁平な石を蓋石とする構造であるが、本古墳には除去した蓋石に該当する平石は確認されない。そうすると蓋石がなく、羨道部がない、極めて特異な石室といわれよう。

石室内覆土には、西側壁（奥壁）よりに木炭片をふくむ黒色砂混土層、白色砂層が部分的に混入しているが、層位は認められない。覆土40cmに鉄片があり、盗掘は床面近くまで及んでいる。

出土品は、南側壁東方の閉塞石の乱石下にやや浮いた層に金環１個、敷石上に１個分離して検出さ

れ、他に北側壁よりに刀子1口、鉄鏃1があった。西方のトレンチには周溝は確認されない。

2　号　墳（図版7・8・14）

1号墳の南に接して2号墳・4号墳が南北の一線上に分布している。特に1号と3号墳とは封土の裾が相接して凹状を呈し、周溝があるとすれば相通じているものとみられる。

径約12m、封土は1号墳よりさらに低く、雑木を切り払って辛うじて封土を認める程度である。封土から10cmにして側壁の上端が発見されたのは、盗掘にあったのは勿論であるが、当初から封土が低く、さらに土質が軽質な腐植土・黒色土層を使用したため流出したものと解される。

破壊された被覆石は、7.4×2.5mにわたり散在し、北部では周溝に達しており、最も盗掘による破壊がはなはだしいものである。周溝とみられるものは、わずかに20cmほどの黒色土層が落ち込んでいるのみで、これでは周溝とは認めがたい。石室主軸方向はN—60°—Eで、1号墳と方位を異にしている。この方向は他の3号～5号とも同じである。石室全長3.5m、床面の最大幅80cmを算する。側壁はわずかにロームを掘って角状の平石を据え上端にゆくに従ってうすい板状の割石を使用し、左右からせり出しており、上端の幅は狭い、側壁は東側は平石側面小口積、西側は小口積で上端にやや大きい割石を使用して積石の崩れを防いでいるが、この重力が中央部へ側石がせり出した原因となっている。

蓋石の遺存はない。石室は北側の奥壁に当るものは抜きとられており、南方に間仕切りの板状石があり、主体部は長さ2m弱、最大幅65cmの竪穴式石室と見あやまる構造である。しかし間仕切石から南方にかけて割石が積み重なっており、床面には敷石はないので、1号墳の特殊横穴式石室がさらに退化簡略化された墓道の閉塞石とみられる。

出土品は西側壁寄りの敷石上に、切先を南に向けた刀子1口、間仕切石近くに鉄環が出土している。

3　号　墳（図版2・9・10・15）

2号墳の西に位置し、封土は2号墳よりやや高く約70cmを計る。径約10mの円墳で封土は南に流れている。封土は極めて浅く、10cmで盗掘された側壁の上端が現われた。

狭小な石室で主軸方向はN—60°—Eで、5.7×1.8mにわたり被覆石が方形に散在する。石室は長さ約3.8m、幅70cm、奥壁には同寸法の小さな板状の割石が立ち、南には間仕切石があって、その間2.9mが石室主体部をなして床面に敷石があり、間仕切石の外(南)は敷石がなく90cmばかりの墓道となっている。

側壁は東西側共に4個の平板な厚石をローム層を掘り込んで据え、その上に平板な割石を積み上げ、間隙に粘土をつめ、床面には平板な丸石状のものを敷く。残存部の側壁は表土から約90cmの深さである。一見狭小な竪穴式石室を思わせる。墓道が中心よりそれるに従って側壁は低くなる。盗掘は奥壁の東側から行われ、詰めこんだ側壁の間隙に使用した粘土が白砂に混ってブロック状に混入し、

覆土中には木炭片が混じっている。

出土品は、奥壁に平行に両側壁に接して直刀1振、西壁下に刀子1口、30cm離れてもう1口、計2口があり、他に鉄片がある。いずれも床面敷石上に置かれている。間仕切石に近い床面に釘状の鉄片があり、直刀の目釘と思われる。周溝はやや顕著であり、西方周溝外に縄文式土器片(前期)がローム層に少々くい込んで一括発見された。

3号墳は石室の攪乱が比較的少なく、副葬品も原状のまま出土し、本古墳群の遺構の標式的なものとみられる。

4　号　墳（図版3・11・12・15）

1号墳・2号墳と一線上にある。幅2.1mの周溝をめぐらした円墳で周溝を除くと径6mあり、封土の高さは約70cm、墳頂が平坦で、やはり低い。乱石は6×2.7mにわたり散布し、周溝に近い地点まで及んでいる。石室の主軸方向はN－60°－E、地山をわずかに掘りくぼめて主体部を据えている。石室の全長5.0m、幅85cm、南にやや狭い。側壁の下部は厚い平石を4～5個据えて、その上に4～5層に割石を重ねる。奥石はぬかれてない。南に間仕切石を立てず割石が積み重なり、床面は敷石の上に粘土を貼った貼り床で、主体部は約2.5m、幅85cmとみられる。残存側壁の深さは85cmで、敷石は奥壁近くが攪乱されているが、南方にやや上り気味で平らな小石塊の平坦な面をそろえてより整えられている。主体部の南は、比較的大きな割石が乱積されており、側壁は周溝に近く低くなる。乱積石を除くとその下にも敷石があり、主体部よりはいくらかレベルが高く、横穴式石室でいえば羨道部に当り、乱積石は閉塞施設であろう。

出土品は主体部の奥壁抜きとり箇所に近い敷石上に、長さ36.5cmの直刀1振があり、保存はやや良い。他に鉄鏃3点が出土している。

周溝は地表から26cmの深さに黒土層の落ち込みが、幅2.1m、深さ1.3mローム層に切り込んである。

本古墳群としては確実に周溝とみられる。本古墳の断面をとってみると、左右に深い周溝があり、石室のレベルはロームを少々掘りくぼめた上に据えられ、羨道部はやや高く、南の周溝に向かって下降する。主体部の構造は、1号墳を除くと幅広く本古墳群の標式的な構造で、主体部・墓道を具備している。3号墳に先行するものであろう。やはり蓋石の存在は確認されない。

5　号　墳（図版13・16）

3号墳の西方にあり、未調査の6号と共に本古墳群の西端に位置する。封土は群中最も低く、周辺との比高は45cmに達しない。南の周溝部の近くに被覆石の一部が露出していた。

最も小さな円墳で径5m。表土15cm、次に黄褐色土層27cmで地山に到る。周溝部は北側で3.5m、南側で2.7mの幅に浅い黒土層の落ち込みがあるが、これでは周溝とは認め難い。封土築成に当り、

付近の土をかき集めて盛り上げたものであろう。

わずかに表土をはらうと積石部が露出し、7.5×2.6mに石塊が散乱し、周溝部に及んでいる。蓋石はなく、石室の形態はほぼ観察できた。

石室の主軸方向はN—80°—E、側壁は下部に厚石6個を据え、その上に板状の割石を積み重ねている。奥壁の石は石室幅よりも狭い小形石を1枚立て、南方には2枚の板状の割石を互い違いに組み合せて間仕切石とする。石室全長約4m、主体部は長さ2.7m、最大幅75cm、中央部がせり出して上端が狭まっている。敷石はない。わずかに奥壁と間仕切石に近くあるのは、中央部床面が攪乱されたのであろう。表土より石室の床までの深さは84～90cmである。蓋石は確認されない。

出土品は主体部中央に8×2cmの先端が尖った刀子状鉄片が出たのみである。　（梅宮　茂）

第4章　遺　　物

一斗内古墳群5基から出土した副葬品は極めて少なく、時代を示す土器は1片もない。出土品は、装身具として金環と、他は直刀・刀子・鉄鏃等の鉄製品のみである。なお人骨は骨片すら検出されない。

1　装　身　具（金環・鉄製環）（図版17、21—3・4・6・7）

1号墳から出土した金環2個は、青銅身の上に被金を行ったもので、径3.2cmでほぼ同大である。出土状況は離れており、1個は敷石上層より出ているが、1対であろう。製作は普通で1個はさびが表面に出ている。

2号墳主体部から径3.4cmの鉄製環が1個出ている。発見後折損したが、間隙があるのでやはり装身具の耳飾とみてよかろう。

2　直　　刀　2振（図版18、21—18・19）

3号墳奥壁近くから出土した直刀は、長さ54cmで鉄製鍔が付属している。平打で目釘孔1個があり柄の先端が少々欠けている。鉄鍔は、長径6.3cm、短径4.4cmの倒卵形で、刀身に付着して鉄製鉾（はばき）がある。さびは深くない。

4号墳出土の直刀は、長さ36.5cm。発見時に先端7.5cmのころで折損して出土している。平打で目釘孔1個、鍔はない。刀身には木質が付着している。鞘の残存であろう。

3　刀　　子　4口（図版19、21—2・5・8・9）

1号・2号墳から各1と、3号墳から2口出土している。1号墳の刀子は残存10.4cmで、刀子とい

うよりは直刀の破片でないかと思われる。2号墳出土品は現存7.3cmで柄部を欠く。3号墳出土の刀子は、2口とも11.7cmで同形である。柄部はない。

4　鉄　　鏃　4本（図版19、21—1・12・13・14）

1号墳出土の鉄鏃は5.1cmの茎の短かい柳葉型であり、4号墳からは3本出土している。一つは長さ4cmの矢の根のみで、厚さ0.4cmのうすい平打ちで、逆刺があり篦は付着していない。中央のさびの付着からみて矢柄にはさんで使用したものである。他は14.3cm切出し形片刃根である。もう一つは刃を失っている。現存8cmをのこすのみである。

5　その他の出土品（図版20）

3号周湟外から縄文前期土器の破片が出土している。小型の深鉢形土器で、上半部に縄文原体を押圧して加飾を行い、下半部には羽状縄文を施文している。

第1表　一斗内古墳群遺構・遺物一覧表

名称	墳形		規模		内部構造		出土品	備考
	墳形	周湟	径	封土高	形式	主体部（長・幅・深）		
1号墳	円墳	不明	約10m	0.8m	A型	4×0.95×1.2m	金環2、刀子1、鉄鏃1	盗掘
2号墳	円墳	不明	約12	0.6	B型	2×0.8×0.5	刀子1、鉄環1	同
3号墳	円墳	有	約10	0.7	B型	2.9×0.7×0.9	直刀1、刀子2、鉄片	同
4号墳	円墳	有	7	0.7	A型	2.5×0.85×0.8	直刀1、鉄鏃3	同
5号墳	円墳	不明	約5	0.45	B型	2.7×0.75×0.9	鉄片	同

〔注〕 (1) 周湟不明とあるのは黒色土層はあるが、周湟と断じがたいもの。
(2) 径は観察による広がりである。4号墳のみは周湟があり、その内径である。
(3) 内部の石室構造のA型B型は「考察」の項参照のこと。
(4) 主体部の規模は埋葬施設箇所で、石室全長と表現したのは主体部と墓道をふくめた計数である。

（梅宮　茂）

第5章　考　　察

一斗内古墳群は、調査予定箇所に6基（調査は5基）、少し離れた西方に数基があり、2群から形成されているようである。予備調査の段階では、これが古墳時代の墳墓であろうかと疑うほど封土の低い小円墳であった。発掘調査の結果から抽出した特色は次のとおりである。

第１節　一斗内古墳群の特色

１　規　　模

いずれも小規模な古墳である。まずあげられることは、封土が極めて薄く、そのために墳墓の大きさを促えるに困難で、径10ｍ前後、５号墳のごときは径５ｍの規模である。周湟は意識してつくったというよりは、封土の盛土をするに際し、周辺の土をかき集めたため凹を生じたという感じであり、周湟と認められるものは３号墳と４号墳のみである。

２　石室構造

５基の石室構造をみると、他の古墳には見られない特異性が２、３ある。

〔Ⅰ〕古墳の形式分類上該当する石室構造でない。本地方に分布する高塚古墳の石室には、組合石棺・竪穴式石室・横穴式石室等の諸形態があるが、１号墳は竪穴式石室より横穴式石室に近いものであり、４号墳もこの系列につらなり、３号墳は竪穴式石室に近い形態で２号・５号墳も同様である。しかし、２号墳は板石の間仕切石の南にも側壁があり、一見すると正直古墳群27号墳のごとく一石棺二室と誤解するような構造であるが、仕切石の南は、敷石もなく側壁も低くなり、先端には何らの構造もないので、主体部の前庭か横穴式石室でいう羨道のような意味をもつもので、本報告書においては墓道と称した。ここには副葬品はない。１号墳も横穴式石室に近い構造とはいえ、奥壁に大きな１枚石があるわけでなく、また羨門・羨道という横穴式の一般的な形態ではないので墓道と表現する。

〔Ⅱ〕発掘調査した５基は、いずれも盗掘にあってはいるが、蓋石の遺構は皆無である。付近は石材採掘場として知られ、板状の安山岩が多い地帯である。竪穴・横穴式には蓋石の存在は不可欠であるべきなのに、１枚たりとも蓋石の残存は見られない。

蓋石がなく、石室の被覆石が封土内に広く散乱しているところから、また側壁が上方にせり出しているもの（例えば、２号・５号のごとく）があり、岩手県五条丸古墳群[1]のごとき積石墳と規を一にするものかもしれない、しかし槨内に充満した土層は層位がなく、当初に土を埋め、その上に何らかの蓋石状のもの（例えば木材）を被蓋したと考えられる。

３　意図的盗掘

いずれにも意図的な盗掘の形跡がある。「意図的な盗掘」という聞きなれない表現を敢てしたのは、伏線がある。盗掘とは古墳造営者とは全く無関係のものが、後世副葬品の収集等を目あてに発掘することである。一斗内古墳５基はすべて、後世に何らかの目的で発掘された疑いがある。しかも５基とも奥壁に近い同一場所からあばき、刀剣等の副葬品には手をふれず、あまり槨内を攪乱していないこ

とは、槨内充満の土層に顕著な乱れが認められないことで知られる。本地方の古墳盗掘は、明治以降であるが、土地の古老は盗掘の事実を知らず、この地が古墳であることさえ知らず、何らの伝承もない。槨内に層位の変化が顕著でないことは、たとえ盗掘が行われたとしても近世以降ではない。

盗掘でないとすれば一体何の目的で発掘が行われたのであろうか。これに対する回答の持ち合せはない。強引に説をたてるとすれば、古墳造営から、あまり時間的に経過しない時期に改葬のごときものが行われたのではなかろうか。

4　副　葬　品

副葬品が少ない。副葬品が少ないことはこの地方の横穴墳に共通する傾向であり、時代の下降を意味するものかもしれない。しかし横穴には須恵器・土師器等の土器が供献される例が多いが、本古墳からは土器は一片も検出されていない。また後期古墳に多い馬具類が皆無であることも一斗内古墳の一特色である。

5　埋　葬　法

本古墳群はいずれも無蓋古墳であり、横穴式石室の影響をうけているが、羨門施設がないので、埋葬は石室中に遺骸を安置した後に土を充満し、その上に何らかの蓋状施設を構じ、その上に被覆積石、封土を盛った形跡がある。しかし通例の積石墳のごとく、副葬品の数は他に比して少ない。

封土の中に川砂を撒いた形跡がある。1号・2号および3号墳に顕著であるが、白砂および黒い雲母質をふくむ川砂が石室の床面上に撒かれている。雲母を含む川砂はこの地方にはない。恐らく遠く阿武隈川から運搬したものとみられる。この風習は太平洋岸地方に往々みられることで、真野古墳群21号墳、同小池古墳には海砂をまいたように、薄い層位がある[2]。

盗掘（後世の再発掘の意）の形跡はあるが追葬された痕跡は認められない。

第2節　一斗内古墳群の石室形式

本古墳群の石室構造について、遺構の章および前節において詳述したが、結論的にみると、一斗内古墳群中の5基の石室には二つの系列がある。

〔Ⅰ〕　1号墳を標式とするグループで、横穴式石室に近似しているが、奥壁には1枚石がなく、羨門・羨道の構造はない。側壁が墓道（いわゆる横穴式石室の羨道部に当る）まで同一幅を維持するが、側壁は高さが減じ途中で消滅する。4号墳は1号墳の形式をうけているが側壁が低い。これを一斗内A式石室と名づける。

〔Ⅱ〕　3号墳を標式とするものは、竪穴式石室に似た主体部があり、板石の間仕切石によって墓道

と区画されている。これを一斗内B式と命名する。

A・B両式に共通するものは蓋石がないことと、主体部の前方に墓道と名づけた前庭部があり、側壁が墓道まで一線をなし、墓道に閉塞石とみられる割石が乱雑に堆積していることである。

次に問題となるのは、A・B両式の先後関係である。岩瀬地方には阿武隈川西岸の蝦夷穴古墳や大仏15号墳のごとき横穴式石室をもつ系統と、泉田古墳・オサン壇古墳のごとき竪穴式石室をもつ古墳の2系統があり(4)、塚畑古墳のごとく、埴輪をもつ前方後円墳は、6世紀中・後葉に位置する横穴式石室である。一般的には竪穴式石室が横穴式石室に先行するものである。

一斗内古墳B式は、竪穴式を思わせるが、側壁の構造は、横穴式石室が小規模化、退化したものとみられる。墓道は羨道部の簡略化されたものとみられるので、B式が先行するとは考えられない。しかも石室の主軸方向は1号墳のみが東西軸で古風を示し、他はすべて南北軸で1号墳が先行するとみられる。A式の4号墳は、墓道に間仕切りの板状割石がなく、1号のごとく割石を重ねて区画し、敷石も粘土張りで主体部を構成している。側壁が低く主体部が浅くなっているのは、1号墳の後をうけ簡易化されたことになる。

3号墳・5号墳は、2号墳と同形式であるが、周溝は認め難く簡素化された構造である。そうすると、一斗内古墳の系列は次のような図式が考えられる。

一斗内古墳群系列図

〔A式〕　　〔B式〕

1号墳 → 4号墳
1号墳 → 3号墳 → 2号墳
3号墳 → 5号墳

すなわち、一斗内古墳は1号墳が当初構築され、何らかの理由により主軸方向を南北指と変更し、4号墳となり石室も簡略化が行われ、3号をへて2号・5号に及んだのであろう。しかし、一斗内古群墳5基の時間的差異はほんのわずかで、大局的にみて同一時代に営なまれたので、一斗内式という一つに包含されるものである。

第3節　一斗内古墳群の時期

前節において「一斗内式古墳」という新形式を提示した。

一斗内式とは、横穴式石室の影響を間接的にうけながら、竪穴式石室の遺風が底流にあって、側壁は一線状を呈し、主体部と墓道から構成され、蓋石の施設がなく、何らかの蓋状の施設上に割石が被覆された形式で、この意味では「横穴式積石石室」と通ずるものがある。初期には横式室石室に近似

するが巨大な奥壁はなく、羨道部の構造はない。それが竪穴式石室のごとく主体部が狭細となり、間仕切石によって、主体部と墓道を区画し、簡略化・粗雑化してゆく。梅宮は「一斗内古墳群概報」(『福島県文化財調査報告書第22集』 1970)に「無蓋横穴式様石室」「擬竪穴様無蓋細型石室」という仮称を用いたが、これは一斗内式石室のA式・B式の別称である(3)。

さて、一斗内古墳群の時代を示す積極的な資料は何もない。副葬品に馬具や須恵器等を伴わないことは、別の問題が考えられよう、やはり石室の構造から時期を考察する以外には方法がない。この地方に横穴式石室が採用されたのは明らかでないが、6世紀中頃には既に存在していよう。一がいに竪穴式石室が先行するといっても、これは流移享受した文化の系統によるものがある。一斗内古墳群の所在する地域は、石背の国の古墳文化の中枢部からはずれており、中心地では既に横穴式石室という新しい墓制が採用されていても、石材の多い地域でありながら、巨石を使用する横式式石室は完全に消化されていない地域性があったのであろう。それは文化圏の問題の外に、うけいれる階層の問題があろう。馬具を副葬しないのも同じ解釈がなりたつ。

一斗内式古墳は、横穴式石室文化を間接的にうけた辺地において形成された変形石室をもつ古墳で積極的な証左はないが、7世紀末～8世紀初頭頃のものであろう。一斗内式石室はこの意味において、さらに同類の辺地古墳文化の資料を収集検討を加える必要があろう。

ここで想起されるのは、郡山市蒲倉古墳や、安達部大玉村の堂ケ久保古墳、伊達郡梁川町新山1号墳、さらに、伊東信雄の岩手県和賀郡江釣子村の「五条丸古墳群」をひき合いに出さなければなるまい。

(梅宮　茂)

参考文献

(1) 伊東信雄　『五条丸古墳群』(岩手県教育委員会)
(2) 梅宮　茂　『真野古墳群第20号前方後円墳調査概報』(福島県教育委員会)
(3) 梅宮　茂　『東北縦貫自動車道埋蔵文財発掘調査概報　22集の6』で、前述の称を使用したが、今後は「一斗内式A型・同B型」と称する。
(4) 永山倉造　目黒吉明　梅宮茂『福島県史1、6巻』(福島県)

第11編　観音山横穴群

遺跡番号	30—397
所在地	西白河郡泉崎村大字踏瀬字観音山
時代・種類	古墳時代・横穴群
調査期間	昭和44年8月5日～8月11日
担当者	小滝利意
調査員	江藤吉雄　石井 亘　遠藤輝之助　菊地 隆
協力機関	泉崎村教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 225
　第1節　位置と地形…… 225
　第2節　周辺の遺跡…… 225
第2章　調査経過…… 226
第3章　遺　　構…… 226
第4章　遺　　物…… 232
第5章　考　　察…… 232

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

観音山横穴は、西白河郡泉崎村大字踏瀬字観音山地内に在る横穴群である。中通り地方を縦貫する国道4号線に沿って、東にある踏瀬部落とは反対方向の、国道の西方100m のところに発達する観音山と呼ばれている高さ40m の丘陵の中腹より上の傾斜地に分布している。本丘陵は凝灰岩で構成されており、この上に黄褐色のローム層と褐色の土壌が堆積している。本横穴群はこの軟質凝灰岩の上部のところに掘り込まれているものである。

この横穴群については、既に大正3年1月に小林俊位によって偶然に発見され、多くは発掘されたもので、横穴も崩れてしまったものも認められる。現在のところ当時の出土遺物としては、わずかに小形の金環が1個部落に保存されているだけである。横穴所在地内のほぼ中央部には、踏瀬部落一同による発掘記念碑が横穴の崩壊した跡に建てられており、本調査の時には12基の横穴が開口しているのが確認された。なお、本横穴の存在する丘陵の下腹部には観音山磨崖供養碑群がある（図版1）。

第2節　周辺の遺跡

本横穴の分布する丘陵の北側の斜面において、東北縦貫自動車道の工事中にブルドーザーにより削平中、偶然にも横穴4基が発見された。

このため昭和46年5月4日から8日にかけて福島県教育委員会で調査を実施した。その結果、横穴が7基確認された。ともに東北方に開口するもので、前庭部・羨門・羨道・玄室の各部より構成されており、南側の横穴群と同形態のものであった。なお、2号横穴羨道の部分より蕨手刀が出土したことから古墳時代終末期の8～9世紀のものとされている。

このことから本丘陵のうち道路予定地内だけでも、南面の17基と北面の7基を合せて24基が確認され、予定地外を合せれば相当数にのぼるものと推定される。また、本地域の南東4 km のところには、国の史跡に指定されている東北で最初に発見された装飾横穴として有名な泉崎横穴がある。

なお、踏瀬地内においては弥生式土器を出土した大山遺跡や、長峰・二本栗等の諸遺跡の存在が確認されている。

（小滝利意）

第2章　調　査　経　過

昭和44年8月5日より発掘調査に入る。まず、発掘調査関係の事務打合せの後に、調査班を4組に編成し、既に開口している15～18号の横穴から内部に流入した土砂の排土作業に入った。徐々に作業を進め、未開口の横穴の所在調査を実施し、17基の所在が認められたので発掘調査を進めた。この結果、西端において未開口の横穴の所在が認められ、この横穴に中心をおいて調査した。これを5号横穴とする。5号横穴は、前庭部の先端から玄室奥壁まで全長11.70m を有するものである。横穴は前庭部・羨門・羨道・玄室の各部より構成されており、特に前庭部側壁には副室が設けられていた。他の横穴においても崩れているものが多かったが、いずれも前庭部・羨門・羨道・玄室から成っているものであった。玄室天井は5号横穴において四注造りであった以外は、大部分がアーチ形を呈しているが、ドーム形のものもわずかに認められた。また、玄室内の排水施設が5号・4号・13号・16号・17号の各横穴において検出された。

出土遺物としては、未開口横穴であった5号横穴の羨門の前において発見された須恵器、鉄製品の小破片と、12号横穴の前庭部において発見された須恵器の小破片だけであった。

実測図作製作業においては、白河女子高校生から多大の協力が得られた。　　（小滝利意）

第3章　遺　　構

1～3号地点

今回の発掘調査の開始にあたり横穴探索のためにボーリング調査をした時、横穴3基の所在が推定された地点である。しかし、発掘の結果、上段の横穴を掘る時に内部より出された岩屑が部厚く堆積したところで、横穴ではないことが判明した。

4号横穴（図版2・19）

本横穴群の下段で、縦貫自動車道予定地内のほぼ中央部に位置しており、踏瀬磨崖供養碑群の直上に開口しているものである。

〔前庭部〕　長さ1.9m で、入口の幅は90cmで徐々に開きながら羨門に移行するもので、羨門入口においては1.20m の広さになる。床は中央部がわずかに高くなるものである。

〔羨門〕　前庭部床面より7cmの高さの段をなし、幅は90cmと狭くなり、閉塞施設の設けられたところであるが、残されていなかった。

〔羨道〕　長さ60cmの短いもので、幅は85cm、高さは崩れていて不明であるが、アーチ形をしたトンネルである。床面の中央より右寄りのところに、幅15cmの溝が玄室より羨道を通り、前庭部のところまで設置され、排水施設であることが確認された。

〔玄室〕　わずかに横長の隅丸方形を呈し、奥行1.40m、幅1.60mの大きさを有するものである。床は平坦で、ほぼ中央部に幅3cmの溝が40cm程の長さにわたって認められた。天井はアーチ形を呈している。高さは中央部において1.05mである。横穴の全長は、4.40mの大きさである。

5号横穴（図版3・4・5・18）

本横穴群の中段で右端に位置している。今回の発掘によって所在が確認された唯一の未開口の横穴である。本地域は傾斜が45°をなしているところから、山腹の岩盤中にトンネルを造るまでには自然と長い前庭部を掘ることになる。調査の結果、本横穴群中最大のものであり、前庭部・羨門・羨道・玄室・副室より構成されている横穴である。

〔前庭部〕　6.65mの長さで、先端において40cm、羨道入口において1.35mと広くなり、岩盤を溝状に掘り込んだもので、床は先端に向かってわずかに下がる傾斜を呈する。

なお、前庭部の右側壁面に副室を伴っていた。入口は80cmの幅で切り込み、奥行80cm、玄室の高さ45cmの大きさで、歪んだ楕円形をなしている。羨道は35cmの長さで、高さ35cm、アーチ形を呈している。

〔羨門〕　羨道入口に設けられた部分である。切り込みを有し、前庭部より一段高くなる。幅1.10m、中央部幅1.25mとわずかに広くなり、上端はアーチ形を呈するもので、高さは1.15mである。閉塞施設としては自然の河原石を用いていた。

〔羨道〕　長さ2.90mのもので、ほぼ中央部において段をなして狭くなるものである。奥の狭くなる羨道の両側面の床には幅8cmの排水溝が設けられ、中央の段をなしているところで、中央部に合わさって羨門まで排水溝が認められる。

〔玄室〕　ほぼ方形をなして、奥行2m、幅2.40mの大きさを呈するものである。玄室奥壁に沿って、幅60cmの棺床が一段高く設けられ、この前方に下がって、同じく幅50cmの棺床が両側の三方に設けられている。また、周辺には溝が回され羨道にまで通じている。天井は四隅からのびる稜線が明瞭に認められるもので、ほぼ中央より前のところで合わされており、四注造りの天井をなしている。

なお、玄室・羨道の壁面には、いたるところに幅7cmの「のみ」の跡が残されている。また、4本1組の爪状の引掻いた跡が認められる。玄室奥壁棺床より中央部にかけて1体分と想定される人骨が

残されていた。前庭部先端より奥壁まで全長11.70m の大きさを有するものである。

出土遺物としては、羨門より玄門にかけて鉄錆が多く散乱していたが明確ではなかった。また、羨門付近において小さな鉄製品が3点検出されたが、刀の付属品の断片と認められるだけであった。羨門前面において須恵器1個体が出土しただけであった。

6 号 横 穴（図版6・19）

中段の左より2番目の横穴である。

〔前庭部〕　長さ2m、幅90cm、床面は平坦である。

〔羨道〕　長さ70cm、幅95cmで、わずかに奥に開く。入口のところには床面ならびに両側壁のところに幅30cmの溝があり、閉塞施設と認められる。

〔玄室〕　方形を呈し、奥行1.60m、幅1.60mの大きさを有している。天井は奥半分が残されているだけであるが、その断面はアーチ形である。高さは中央部で1.10m を有している。床面は平坦で、前庭部に向かってわずかに低くなる傾斜をなしている。棺床等の施設は認められなかった。全長は4.70mである。

8 号 横 穴（図版7・19）

中段の中央部の急斜面に位置している。天井の部分はほとんど崩れており、床面も玄室のところだけで、羨道・前庭部等を欠くものであった。現在2mの長さを有している。床面は先端に向かってわずかに傾くもので、棺床等の施設は認められなかった。

9 号 横 穴（図版8・20）

中段の中央で8号横穴の右隣り下に位置している。全長4.40mの長さを有するものである。崩れが著しく玄室の天井を残すだけで、羨道部天井は落ちてしまっている。

〔前庭部〕　先端は1.10mの幅であるが、羨門に向かって徐々に広がり、1.50mとなる。羨門部は狭くなり1.10mを有する。前庭部全面は平坦であるが、羨門手前において幅20cmの溝が平行に施されている。

〔羨道〕　入口は幅1.10mであるが、玄室に向かってわずかに開くものである。長さ80cmの短いものである。

〔玄室〕　方形を呈し、奥行1.80m、幅2.05mの大きさを有するものである。高さ1.15mで、天井はアーチ形をなす。玄室内の床面は、中央部がわずかに低くなっている。棺床・排水溝等の施設は認められなかった。

10 号 横 穴（図版9・20）

中段の右側より2番目の横穴である。すでに開口していたもので天井部は全部崩壊しており、側壁と床が残されていた。全長3.70mの長さを有している。

〔前庭部〕　長さ1.50m、幅1.05mの広さを有している。右側壁は直線状に伸びているが、左側壁は中央部が内側に張り出すもので、床面は平坦であるが、先端に向かって低くなる傾斜ををなしている。

〔羨道〕　長さ70cm、幅73cmの大きさを有し、入口の羨門前の床面には幅20cmの溝を設けている。両側壁床面には幅2cmの排水溝が認められる。床面は、入口より奥に向かって急に高くなる傾斜をなしている。

〔玄室〕　方形を呈し、奥行1.40m、幅1.50mの大きさを有している。周辺部には幅2cmの排水溝が巡らされているだけで、棺床は無かった。

12号横穴

上段の中央にある横穴である。玄室の部分は陥没しており、羨道部には大木の根があったために予定期間内に発掘することができず、また前庭部の部分は山道が通っており、このために前庭部と羨道の存在することを確認しただけで終了した。

13号横穴（図版10・21）

中段左側より2番目の横穴である。天井部は全部崩壊しており、側壁と床のみを残しているだけである。前庭部からの全長5.2mを有するものである。

〔前庭部〕　先端部の幅90cmで、徐々に広がり2mの地点で1.35mとなり、狭くなって羨門に移行する。羨門右手には切り込みがわずかに残されているとともに、幅15cmの溝が床面に設けられている。

〔羨道〕　長さ90cm、入口幅90cmで玄室に向かってわずかに開くものである。両側壁面の下には幅2cmの溝があり、玄室中央より設けられた幅5cmの排水溝とともに羨門のところまで、付けられている。

〔玄室〕　方形を呈し、奥行2.20m、幅2.65mの大きさを有している。中央より羨道中央に向かって、幅5cmの排水溝が設けられるとともに、周囲には幅2cmの同じく排水溝が廻らされている。棺床等の施設は認められなかった。床面は平坦で先端に向かって徐々に低くなるものであるが、羨門のところにおいては段をなしている。

14号横穴（図版11・21）

中段の中央部に位置し、左から3番目のものである。先端より奥壁まで4mの長さを有しているが、羨道の天井は崩壊してしまっており、玄室天井だけが残されていた。

〔前庭部〕　幅1.25mで、長さ1.93mの広さをなし、羨門前において幅35cmの溝状に低くなる床をなしている。この部分に30cm大の河原石が5個、閉塞石の一部として残されていた。

〔羨道〕　60cmの長さで、幅1.10mを有している。右手壁面下に直径20cm大の河原石が3個残され

ている。

〔玄室〕　円形プランを呈し、奥行1.45m、幅1.70mの大きさである。天井の高さは中央部において1.15mで、ドーム形をなしている。棺床・排水溝等の施設は設けられていなかった。床面は平坦で、先端に向かってわずかに低くなるものである。

15号横穴（図版12・22）

中段の中央部左から4番目のものである。先端より奥壁まで全長5.20mの長さを有するものであるが、天井は玄室の奥の一部分を残すだけで、玄室前部と羨道部分は崩壊してしまっていた。

〔前庭部〕　幅1.25mで平行に掘られたもので、長さ2.40mを有していた。なお、先端部右手が50cm位広くなっている。羨門に移行する角の部分がV字形に切り込まれて溝状になっている。

〔羨道〕　長さ1m、入口幅95cm、玄室入口において80cmと手前に開く形状をなしている。

〔玄室〕　左右の胴張りが強く認められるために、ほぼ円形に近いプランを呈するもので、奥行1.80m、幅1.90mの大きさを有している。天井は現存するところで1.10mの高さをなし、ドーム形である。棺床・排水溝の施設は認められなかった。

床面は平坦で、先端部に向かって緩やかに下がるものであるが、玄門と羨門のところにおいて段を設けているために、3段の床面をなしている。

16号横穴（図版13・22）

中段右から3番目に開口しているものである。先端より奥壁までの長さは4.60mを有している。天井は玄室の中央部より奥の部分が残されているだけで、玄室の前部ならびに羨道の部分は崩壊して内部に落ち込み、側壁と床が残されているだけであった。

〔前庭部〕　先端幅95cmで奥に開く形状で羨門において1.25mを有し、長さ2.20mである。

〔羨道〕　入口幅1.10m、奥に向かって開き、長さ65cmを有している。入口前にはV字状の溝が平行に2段に設けられている。

〔玄室〕　奥壁が丸味をなした長方形を呈するもので、奥行1.80m、幅2.25mの大きさを有する。天井は1.50mの高さで、ドーム形である。棺床・排水溝等の施設はなかった。床面は平坦であるが、玄門・羨門の床に段が設けられているために3段の床面をなしている。

17号横穴（図版14・23）

中段右から2番目の開口している横穴である。先端より玄室奥壁まで5.40mを有している。天井は玄室の奥の一部だけを残すだけで、玄室の大部分ならびに羨道の天井は崩壊して落ち込んでいた。

〔前庭部〕　先端幅90cmで、徐々に開きながら羨道入口に達するもので、羨門手前においては1.45mと広がり、長さ3.40mを有している。羨門に移行する手前の両側壁のところにはV字またはU字状の溝が設けられている。

〔羨道〕　幅1.10mで、長さは50cmと短いものである。

〔玄室〕　長方形に近いプランを呈するもので、奥行1.65m、幅2mの大きさを有する。床面左側に奥壁より玄門にかけて幅5cmの溝が設けられている。この他には棺床等の施設は認められなかった。

床面はわずかに先端に向かって下がるもので、玄門・羨門に段が設けられているために3段の床面をなしている。

18号横穴（図版15・23）

中段の右端に開口しているものである。先端より奥壁まで5mの長さを有する。天井は玄室の奥の部分を残すだけで、玄室の大部分と羨道の天井は崩壊著しく、側壁ならびに床が残されているだけであった。

〔前庭部〕　長さ2.90mで先端の幅は93cm、中央で75cmと狭くなって、羨道入口前で「ハ」の字形に大きく開く形態をなし、1.20mと広がるものである。

〔羨道〕　長さ60cm、幅90cmと非常に短かいものである。入口前に溝を有して、前庭部床面より、羨門床面にかけて段が設けられている。

〔玄室〕　方形のプランを呈し、奥行1.80m、幅1.90mの大きさを有するものである。玄室中央の天井の高さは1.05mで、アーチ形である。

19号横穴（図版16・24）

中段の右から3番目で、6号横穴の右手下に開口していたものである。先端より奥壁まで3mの長さを有するものである。

〔前庭部〕　右側は半分に切断されているが、幅75cmで長さ1.2mを有し、羨道入口両側にはV字状に広くなるところがある。

〔羨道〕　幅65cm、長さ75cmである。わずかに床面が残されているだけで、天井部は全部崩壊していた。

〔玄室〕　羨道より徐々に開きながら奥壁に移行するもので、ほぼ台形を呈している。羨道と共に天井は欠損している。床面はV字状に落ち込むものである。

20号横穴（図版17・24）

中段の右から5番目のものである。前庭部先端より奥壁まで2.80mの長さを有するもので、天井部は大部分が崩壊して奥壁の一部分を残すだけであった。

〔前庭部〕　非常に短かいもので幅90cm、長さ40cmで、羨道との境界はV字状に掘り込まれた溝により区別できるような状態である。

〔羨道〕　幅95cm、長さは左側が80cm、右側が40cmと左右が相違するものである。

〔玄室〕　方形を呈するもので、奥行1.55m、幅1.70mの大きさを有し、天井の高さは1.05mでアーチ形を示している。棺床はないが、奥壁下にV字状の幅8cmの溝がわずかに設けられている。

11号横穴

縦貫道の予定地の中央部に位置しており、中心杭が打たれているために発掘できなかったものである。ボーリング探査によって横穴であることを確認するだけに終った。

7号横穴

大正3年に本横穴群が発見された当時、中心であった横穴と見られる。現状は大きく落ち込んでおり、その中心に発掘記念碑が建てられている。崩壊著しいために発掘しなかった。　（小滝利意）

第4章　遺　　物

今回の調査によって出土した遺物は、5号横穴羨門前より出土した刀装金具と須恵器の甕と、12号横穴羨門前より検出された須恵器の破片だけであった。

5号出土遺物、柄頭の金具である。長さ4.9cm、幅4.3cm、厚さ2.9cmで楕円形である。上端ならびに下端において湾曲が認められていることからして方頭大刀の柄頭と見られるものである（図版27・28—1)。また、図版27—2、28—2は、長さ5.3cm、幅4.7cm、厚さ2.1cmの倒卵形のもので鞘口金具と認められるものである。なお、この金具の中には胚巾が入っているのが見られる。図版27—3、28—4は、把縁具であろう。大形であるが鍔と見るには無理がある。図版27—4、28—3は、破損したもので全形は不明の棒状金具である。図版25・26は、須恵器の甕である。出土状態は押しつぶされた状況であった。底部を欠くが、口径22.2cm、現高46cmの大きさのものである。胴部は球形を呈し、口縁部は肩より「く」の字状に外反する。口唇部は複合口縁状に厚くなっており、端は下にまがっている。口唇部下に6条の櫛目による波状文が施され、胴部全面に内外ともに叩き文が見られる。(小滝利意)

第5章　考　　察

観音山横穴群の構造は、遺体を安置するための玄室を主体とし、この玄室に入るための羨道と入口に施されている閉塞施設ならびに前庭部よりなっている。なお、5号横穴で見られたように副室を伴

っているものも存在している。また、内部の施設としては、玄室内の遺体安置の場所としての棺床を有するもの（5号・16号）、排水のための施設が玄室周辺または中央部・羨道両側や中央に施されたものも認められる。

羨道入口に設けられた閉塞施設としては積石のものや、木製のかんぬきをする小穴の検出されたものもある。

今回の調査によって完全な構造のままで発掘されたのは5号横穴だけで、他の16基の横穴については、既に大正3年の発見された時に発掘されており、開口しているもの、土砂の崩壊のため天井部が落ち込んで埋められてしまった状態で、各横穴は床と側壁と天井の一部が残されているものが多かった。しかし、その構造はいずれにおいても、玄室・羨道・閉塞施設と前庭部等よりなり、前庭部を除いた羨門より奥の部分は天井を有していたものである。

今回の調査区域が縦貫自動車道の予定地内に限られていたために、予定地外の西方斜面にあったといわれる横穴については調査ができなかった。そのため観音山に構築された横穴全体についての分布や性格については知ることができなかった。今回発掘された横穴群は、踏瀬磨崖供養碑群の真上にある4号横穴を下段として、12号が最上段に位置し、この二つの横穴の間に他の横穴が3段になって分布する状態が認められた。

本横穴群のうち5号横穴は、大きさ・構造・内部施設・出土遺物において優れており、代表的なものであった。他の横穴はいずれも玄室を中心として短い羨道と前庭部を有する簡素な横穴であった。

〔前庭部〕　地表より岩盤に造られた羨道入口に達するために掘られたU字形で天井を有しない通路である。本横穴群にあっては全部のものに前庭部が設けられている。このことは本地域の地形より造り出されたものである。そのほとんどの横穴が、先端が狭く、徐々に開く形態で、特に閉塞施設の部分においては、両側壁にV字形に掘り込まれて溝状のものも存在していた。この前庭部の長さは全長の38～64%位を占めており、大部分の横穴は40%前後をなし、特に5号・6号横穴においては前庭部側壁に小形の副室を有するものも認められ特徴的である。また、5号横穴の羨門の河原石を積み重ねて閉塞施設とした前面の広場においては、大形の壺形の須恵器が1個体発見された。また、この須恵器の出土したレベルと同じところから玄室内部より掃き出して捨てられたと見られる鉄製品の小破片や、炭化物・木炭の散布が認められた。その他には12号横穴において須恵器の小破片が2点発見されただけであった。これによって観音山横穴群の遺物を判断することはできないが、いずれにしても代表的な5号横穴に見られるように、副葬品は少ない傾向にあることが推測される。

〔閉塞施設〕　5号横穴においては羨道部入口に河原石を使用して閉塞している状態が認められ、また17・18号横穴においても、同じく河原石を閉塞施設としていたことが知られた。16号横穴にお

いては、羨門入口両側の壁面に小さなかんぬき穴が検出されたことから、石積みではなく、木製の板を用いた閉塞施設があったと考えられ、このことから本横穴群の閉塞にあたっては積石閉塞と木板閉塞の2通りの方法を用いたことが判明した。

〔羨道〕　前庭部と玄室を連絡するトンネルで、5号横穴のように、途中から2段になっており、2.90mの長さを有し、アーチ形の天井ならびに側壁も丁寧で、入口には切り込みをつけ、床には排水溝が設けられた精巧な構造と、わずかに48cm～1m程度と短く簡単な構造との2種類が認められる。

5号横穴の羨道は、今回調査した横穴のなかでは最も長く、中間のところにおいて段をなして、手前の左右には床面上に大きな石が置かれていた。この石は羨門の石が転がったものとは見られず、この中間の段をなすことに伴って人為的に置かれた状態であった。

また、排水溝もこの段より奥では両側に設けられているのが、段より手前では中央に設けられており、羨門にまで通じている。この石と排水溝の状態より、羨道中間部にも木製の閉塞施設があったものと見られる。羨門前に遺物を掃き出した痕跡が認められることにより、本横穴の埋葬は数回行われたものと思われる。玄室内の棺床の状態からも3～4回にわたる埋葬が考えられる。

羨門の閉塞の石積の状態は最後に設けられた状態であり、この中間に木製閉塞を設けていたものと考えられるものであった。

〔玄室〕　形態は左右に広がる長方形（4号・5号・9号・13号・16号・17号）を主体にして、方形（6号・10号・18号）と前後に長い長方形（8号・19号・20号）に加えて円形（14号・15号）の4種類の平面プランが認められる。また、天井については5号横穴が1基だけ方形であったのと、わずかにドーム形（14号・15号）がみられるが、アーチ形（4号・6号・9号・16号・17号・18号・20号）が群中の主体をなしている。これらのことから、平面プランにおいては長方形、立面プラン（断面形）においてはアーチ形のものが多く構築されたと考えられる。

内部に設けられた施設としては、遺体安置の場所として明確に棺床の認められたのは5号横穴である。すなわち、正面に向かって奥壁のところに、わずかに高く床が設けられている。また、この手前の左右においても、玄室の床面よりわずかに高く棺床が認められる。しかし、左右の棺床は奥壁の棺床より一段低く設けられている。この他には16号横穴において、わずかに高く奥壁に棺床が設けられているのが認められただけであって、ほとんど棺床の無いものであった。このことは棺床の退化形態というより棺床を設けなくなった形態と見ることができるものである。

なお、排水施設としての溝は、5号・13号横穴において周囲に施されていただけであって、4号・16号・17号横穴では玄室より羨道にわたって、わずかに設けられている状態であって、棺床とともに排水溝においても退化形態のものであることが認められる。

〔棺床〕　5号・16号横穴において認められただけであって、他の各横穴では床面が平坦で全然認められなかった。棺床はわずかに2～4㎝位の高さを有し、幅は40～90㎝で、他に特別の施設は認められず、棺床の退化形態と見られるものであろう。

以上のように観音山横穴群については今回発掘調査の実施された15基のうち未開口の横穴は、5号横穴1基だけであって、他の14基については大正3年に発見された時に内部は掘られたものと見られ、天井部は大部分が落ち、わずかに玄室奥壁の部分の天井が残されている程度であった。このような状態であったので内部に流れ込んだ土砂の排土作業とともに横穴の実測作業に主体がおかれた。

開口していた横穴の破損は著しく、これに加えて出土遺物が判明しない状態であるために、本横穴群について、種々考察するには資料不足の状態である。

しかも、5号横穴は唯一の未開口横穴であるが、遺物の出土はきん少で、閉塞石前から出土した須恵器の甕と刀剣の金具が一部出土しただけである。この5号横穴は本横穴群中でも構造は最も整っているもので、玄室の棺床も奥壁正面と両側に認められる。しかし、その構造は極めて簡素化されたものと見られる。羨門前より出土した須恵器は、底部を欠損しているが、ほぼ球形を呈して丸底で、口縁部の外反は大きいが短かく、口唇部が端において下におりまがるものであり、恐らく7世紀末に比定される。なお、須恵器の上層より出土した刀剣外装具の脛巾が円筒形に造られていることも考えると奈良時代以前に位置づけられるものであろう。

以上のことからも本横穴群中5号横穴は、7世紀末以前に位置付けされるものと考えられる。

（小滝利意）

第12編　観音山北横穴群

遺跡番号	30—397
所在地	西白河郡泉崎村踏瀬字観音山
時代・種類	古墳時代・横穴群
調査期間	昭和46年5月4日～5月8日
担当者	成田克俊
調査員	木本元治　古川 猛　石井 亘　根本信如
協力機関	泉崎村教育委員会　泉崎村役場

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 239
　第1節　位置と地形…… 239
　第2節　周辺の遺跡…… 239
第2章　調査経過…… 240
第3章　遺　　構…… 241
第4章　遺　　物…… 244
　第1節　鉄製品…… 244
　第2節　土　　器…… 245
第5章　考　　察…… 245

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

観音山北横穴群は、東北本線泉崎駅の北北西3.3㎞、矢吹駅の南西約4㎞の西白河郡泉崎村踏瀬部落の北方約300mにある丘陵の末端に位置している。

この丘陵は、西方の山地より東に向かって張り出した標高285～330mの東西に細長い形をしており、その南側は踏瀬川沿いの沖積面、北側は隈戸川沿いの段丘面によって切られている。この丘陵の東端部の舌状になった部分の南～北東斜面にかけて観音山横穴群は、営まれている。南斜面の横穴のある部分の下、丘陵の基部近くには観音山磨崖供養碑群がある。

丘陵の基盤は灰色がかった石英安山岩質熔結凝灰岩（白河石）により構成されている。この凝灰岩をさらに細く観察すると、丘陵の基部近くの磨崖供養碑群のある部分は熔結の程度も高く、横穴のある部分よりも色もやや紫がかっている。一方横穴群のある部分は熔結の程度も弱く、石英粒が目立って観察される。

これらの結果からして、観音山においては磨崖供養碑群は一般にいう白河石でもその中位にあたるもの（DⅡ）に刻まれており、横穴群はその上位にあたるもの（DⅠ）に掘り込まれていると考えられる。なお須賀川近辺で石材として切り出されているのは、この（DⅡ）である。（阿武隈川第四紀研究グループ1968）

第2節　周辺の遺跡

観音山横穴群の付近には、第1表にあげるような遺跡が分布している。時代別・種類別で見れば、縄文…4、弥生…7、土師・須恵…2（以上散布地）、古墳…4、横穴…1となっている。この付近では弥生時代の遺跡が特に多く見られ、それも踏瀬川の流域に集中して分布している。

横穴は当横穴群と行人山横穴群の他には、東南方約4㎞にある国指定史跡泉崎装飾横穴を含む泉崎横穴群が知られているのみである。なお、その南方2㎞には白河郡衙跡がある。　（木本元治）

第1表 周辺遺跡一覧表

旧番号	新番号	名称	所在地	種別	地目	時代
1244	30—398	長峰遺跡	泉崎村踏瀬字長峰	散布地	畑・水田	弥生・奈良
1245	30—400	二本栗遺跡	〃 〃 字甚六沢	〃	水田	縄文
1243	30—405	踏瀬大山遺跡	〃 〃 字大山	包含地	畑	弥生
1247	30—406	踏瀬大山東古墳	〃 〃 〃	古墳		古墳
3377	30—402	宮作田遺跡	〃 太田川字宮作田・栗木田	散布地	水田	奈良
3379	30—404	愛宕神社遺跡	〃 踏瀬字池ノ入山	〃	畑	弥生
3380	30—403	池ノ入山遺跡	〃 〃 〃	〃	〃	〃
3381	30—394	柴山遺跡	〃 〃 字柴山	〃	〃	〃
3382	30—395	石田原遺跡	〃 〃 字石田原	〃	〃	〃
3384	30—393	滝原前山A遺跡	〃 〃 字滝原前山	〃	〃	縄文・弥生
3385	30—390	滝前山古墳	〃 〃 字滝原山	円墳	山林	古墳
3386	30—391	下滝山遺跡	〃 〃 字下滝山	散布地	畑	縄文・弥生
3387	30—392	観音山古墳群	〃 〃 字観音山	円墳群	山林	古墳
3388	30—407	踏瀬長峰古墳	〃 〃 字長峰	円墳	〃	〃
	30—396	行人山横穴群	〃 〃 字下滝山	横穴	〃	〃
		観音山磨崖供養碑群	〃 〃 字観音山	磨崖碑	崖	鎌倉

第2章 調査経過

本横穴群は、昭和44年8月に調査された観音山横穴群の裏側の斜面（北東斜面）より昭和46年4月28日、ブルドーザーで削土作業中に発見された。この時発見されたのは1～4号横穴である。観音山地区の工事を中止し、この地点を観音山北横穴群と命名し、5月4日より発掘調査に入った。

工事中に発見された4基の横穴のうち1号横穴が比較的良好な状態を保っていた以外は、天井部の一部、又はほとんどが破壊されていた。調査は1～4号横穴の排土・精査と並行して、付近のボーリング調査を行う。その結果2号の北に5号、1号の南に6・7号横穴をそれぞれ発見した。

1・2号横穴は、3・4号横穴に比べ比較的遺構の状態は良好であったが、遺物は全く検出されなかった。3・4号横穴は、すでにブルドーザーにより玄室・玄門部の天井の一部が破壊され、新たな土砂の流入が見られた。しかし、これを排除したところ、それ以上の攪乱は受けてない様子であった。しかし1～4号横穴とも閉塞石は本来の位置からは検出されず、羨道部埋没以前にすでに開口していたものと考えられる。

1～4号横穴の精査を行い、その実測に入った。それと並行して5～7号横穴の掘り込み・精査を

行う。5・6号横穴では良好な状態で閉塞石が検出されたが、6号では閉塞の上の部分に約20cm程のすき間が見られ、一度開口したものかも知れない。最後に5～7号横穴の実測と並行し、全体図作成、地形実測を行い、発掘調査を終了した。その後の岩質鑑定は福島大学名誉教授三本杉巳代治、出土人骨については東北大学歯学部葉山杉夫助教授に依頼をした。（木本元治）

第3章　遺　　構

発見された横穴は7基で、1・2・5号横穴がほぼ同一レベルで並び、やや低く6・7号横穴が1号横穴の南に並んでいる。これらより一段高いレベルで、2号横穴の西に3・4号横穴が並んでいる。

1号横穴（図版8）

1号横穴は、下段の中央に位置し、ほぼ真東に向かって開口している。全体の長さは7.5m前後と推定されるが、羨道の末端部が削られており、正確な長さは不明である。

羨道の長さは4.5m以上と考えられるが、正確には不明である。幅は床面で90cm～1.00m、切通し上端で最大2mとなっている。深さは天井の末端で1.28mある。天井は玄門から1m前後あったらしいが、削られて80cmを残すのみである。この天井の末端部と考えられる付近の壁・床の両面を観察したが、羨門の痕跡や羨道と前庭部との境界を示す施設も見られなかったので、天井のない切通しの部分も羨道としておく。

玄門は高さ80cmのアーチ形を呈し、入口には幅約15cmの額縁が作られている。玄門部の奥行きは60cmである。玄門と羨道の境界には、閉塞施設と考えられる幅26～16cmの溝が走っており、その右壁の部分には閉塞石の一部と考えられる凝灰岩塊が検出されている。

玄室の平面プランは、幅・長さ1.7mのやや不整形の隅丸形を呈している。天井は低いドーム形で、中央部で最高1.08mあり、横断面の頂部がやや尖る形をしている。床面には水分による自然堆積と考えられる茶色の粘性の強い泥状の土が見られたが、遺物は検出されなかった。遺物としては羨道の末端より刀子が1点検出されている。

2号横穴（図版3・8）

1号横穴の北側にあり、1号横穴同様ほぼ真東に向かって開口しており、全長4.46mである。羨道は床面幅60～80cmで、長さ2.92mあり、その南壁の中央部には奥行き80cm、最大幅60cm、高さ40cmの副室が開口している。羨道の切り通し上部の最大幅は1.95mである。

玄門は高さ90.0cmのアーチ形を呈し、入口には約10cm幅の額縁が作られている。幅は70cmあり、奥

行きは90cmある。玄門と羨道の境には、羨道の床より浅く掘り込まれた幅9～12cmの溝が見られ、その溝の両壁際より人頭大の凝灰岩塊が検出されており、玄門閉塞施設の溝と考えられる。

玄室の平面プランは、長さ1.05m、幅1.4mのゆがんだ円形を呈し、天井はくずれたドーム形をしている。この天井の最高部は玄門部との境界近くにあり、高さ81cmを計る。

2号横穴から遺物は検出されなかった。玄門・玄室の壁面・天井面の観察からすると、2号横穴の仕上げには、刃幅10cm前後の工具を用いたと考えられる。

3号横穴（図版4・5・7・9）

上段の東側にあり、この横穴群の発見時に、玄門部の天井大部分と、玄室の南壁と天井の一部がブルドーザーにより破壊された。玄室から玄門にかけては、その後の流入と考えられる土砂が25～40cmの厚さで堆積し、羨道では同様の薄い土層の下に、粘土および有機物を含んだ黒褐色土を混じえた風化した凝灰岩の堆積が見られた。

羨道は先端と上部の大部分が削られており、長さや天井の有無は不明だった。羨道床面は幅1.06mで、玄門から95cmほど残存し、この部分の風化した凝灰岩層中より、刀子が1点検出されている。

玄門部は天井がほとんど破壊されており、断面形は不明であるが、残った壁より考えて高さ80cm以上はあったようである。幅は入口で1.06m、玄室側で1.08mあり、長さは76cmを計る。玄門部の中央よりやや入口寄りの床面上より蕨手刀が横穴の長軸と直交し、刃部を入口に向けた状態で検出された。入口には幅12～19cmほどの額縁が形成されていたと考えられ、それと接する床面には幅14cm、深さ19cmの溝が走り、両端は壁面に達している。この溝から前方へ約50cmの間に羨道の横へのふくらみが見られ、この部分も含め玄門の閉塞施設と考えられる。

玄室の平面プランは、長さ1.38m、幅1.76mの隅丸方形に近い形で、天井は最高部が中央にくる、高さ1.04mのドーム形を呈している。天井及び壁面には、縦・斜方向の幅6cmほどの工具による仕上げ痕が観察される。

床面上には厚さ5～7cmの粘性に豊んだ茶色土層が堆積しており、玄室西南隅とその壁沿いの床面及び同層中より頭骨片、下顎骨片、大臼歯2、小臼歯1、上腕骨が検出された。これらは東北大学歯学部葉山杉夫助教授の鑑定によれば壮年男子の一体分と推定されるとのことである。

4号横穴（図版9）

上段の3号の西側にあり、天井部のほとんど、及び羨道の半分以上は破壊されていた。

羨道は床面で幅80cmを計り、玄門との境界部には3号横穴と同様な長さ52cm、幅1.26mの逆台形を呈する羨道のふくらみがあり、床面にも浅い溝が伴っており、閉塞施設と考えられる。

玄門の入口には、かなり崩れてはいるが、幅10～15cmほどの額縁がついていたらしい痕跡が見られる。玄門部の幅は94cm、長さ60cmを計る。

玄室の平面プランはやや胴張りのある、長さ1.56m、幅2.04mの方形を呈する。天井は崩壊して不明であるが、奥壁の立ち上り方からして、変形ドーム形かアーチ形だったものと推定される。

玄室の床面には粘性の強い茶褐色土が薄く堆積しており、入口近くより須恵器壺(?)の底部片、中央部より頭骨片・肩甲骨・脊椎骨・上腕骨片・大腿骨片が検出されている。この頭骨は顔面を奥壁に向けた状態であった。葉山助教授の鑑定によれば3号横穴同様に壮年男子のものであり、一体分とのことである。

5号横穴（図版3・8）

5号横穴は、2号横穴の羨道のすぐ北側に開口していた小さなものであるが、2号横穴の羨道の北壁を切った形で独自の羨道と考えられる部分を有しており、小形の横穴として扱うことにする。

羨道は、最大幅80cm、長さ1.20mあり、その南壁は2号横穴の羨道の北壁の一部を切っている。この羨道のプランは2号横穴の羨道によりかなり規制を受けているらしい。

羨道と玄門の境界には閉塞施設と考えられる細い溝が走っている。玄門の周りにはかなりゆがんだ台形を呈する額縁が形成されている。玄門の高さ72cm、幅65cmを計るが、玄門部と玄室の境界は明瞭でない。プラン中位に見られるかすかなくびれらしいものが玄門部と玄室の境界とすれば、玄門部の長さは50cm前後ということになる。玄門はその前面が凝灰岩を小口積みにした状態で閉塞されていた。

玄門から奥は、細長い形をしており、床面で全体の長さが1.1m、幅50cmを計る。床面は、奥に向かって低くなるように強く傾斜している。内部の仕上げは雑で、工具の痕跡からして玄門から奥に向かって突くように工具を用いたらしい。

6号横穴（図版6・9）

下段の南端にあり、ほぼ真東に向かって開口し、7号横穴と並んで下段を形成しているが、レベル的には中段と7号横穴の中間に位置している。

長さは全体で5.50mあり、そのうち羨道部は3.40mであり、その約3分の1には天井があり、その他は切り通しとなっている。天井のある部分の断面は、1辺約90cmのほぼ正方形を呈す。羨道と玄門の境界の床には、幅20cm、深さ10cmの溝があり、この溝が玄門入口の額縁の一部をなしている。この溝の上に玄門閉塞のための50～15cm大の凝灰岩が積んであり、積み方としては、大形の四角のものを下にし、不整形のものや、小形のものを上の方に積み上げている。閉塞の上部には15～20cmのすき間があり、この部分にあったらしい石が内側に崩れ落ちた状態で検出された。

玄門は入口に、幅10～15cmの額縁が作られている。形は幅75cm、高さ72cm、長さ35cmの縦長の「かまぼこ」形を呈している。

玄室の平面プランは縦に長いややゆがんだ長方形で、南壁と玄門部との境界にはほとんど角が見ら

れず、片袖式に近い形となっている。床面で長さ1.60m、幅1.16mを計り、天井までは75cmで、天井は変形アーチ形を呈している。

床面上には軟質でスポンジ状の2～5cmの赤茶褐色土の堆積が見られ、その層中より若干の骨片が検出されたが、性別、年齢は不明である。

7号横穴（図版9）

7号横穴は、下段の6号横穴の北側にあり、東北東に向かって開口している。7号横穴は同じ下段でも6号横穴よりさらに低い位置にあり、観音山北横穴群中一番低い位置にある。

全長は4.00mあり、そのうち羨道の長さが2.15mを占める。羨道の奥半分には天井があるが、天井のある部分と無い部分の壁・床面には何も特別な施設は検出されなかった。床面の幅は、末端が62cm、奥が1.25mとかなり開きがある。

玄門の入口には幅7～16cmの額縁が作られているが、その直下の床には溝らしきものは見られなかった。玄門は幅1.04m、高さ80cm、長さ50cmある。

玄室の規模は、幅1.73m、長さ1.27mの楕円形平面プランを呈し、天井は高さ75cmの変形ドーム形である。

（木本元治）

第4章　遺　　物

第1節　鉄　製　品

1　刀　　子（図版11、12—2・3）

〔Ⅰ〕　図版12—3は、1号横穴羨道末端部より検出されたもので、現在の長さ6.5cmあり、刃部の大部分と柄の約半分を欠いている。刃部のつけ根で、幅1.4cm、厚さ4.5mmあり、柄は幅1.63cm、厚さ1.35cmの楕円形をしている。柄には区（まち）の部分より約2cmはほぼ完全に木質が残り、区（まち）に接する部分の縁には幅4.5mmのしめ金具の一部が残っている。縁より1.3cmの柄の中央には目貫がある。

刃部は約2cm残るのみで、角棟の平作りで合せ鍛えらしく、折れ口の断面に空隙を残している。

〔Ⅱ〕　図版12—2は、3号横穴羨道の床面上34cmの風化凝灰岩の堆積中より検出された。長さ13.2cm、幅は区（まち）近くの部分で1.35cm、厚さ3mmある。刃部の長さは7.5cm、茎の長さが5.7cmあり、刃部の最大幅は区近くの部分にあり先に行くにしたがい細くなっている。刃身は角棟の平作りで、合せ鍛えらしく、折れ口の断面中央に空隙を残している。

茎にはかなり柄の木質が銹着しており、厚さ、幅等は不明であるが、刃と茎の間には区があるらしく、区では幅は1㎝弱となるものであろう。

蕨　手　刀（図版10、12—1）

3号横穴より出土したものである。鞘等は残っていなかったが、刀身はほぼ完形であり、わずかに鋒（きっさき）の一部を欠いている。

全長は38.2㎝あり、刃長は26.4㎝、区付近で幅が4.0㎝、厚さは棟で0.7㎝ある。刀身は平棟、平作りで鋒に近づくにつれてやや狭くなる。断面は二等辺三角形を呈し、鋒は「ふくら造り」である。

区（まち）は、刀身より直角に切り込んであり、区より鍔までの間に0.7～0.1㎝の間隔がある。この部分に青銅製の鎺（はばき）のついている例も見られるが、本例では鍔が動いたのか鎺が入っていたのかは不明である。

鍔は倒卵形で長さ5.3㎝、幅3.0㎝、厚さ0.4㎝である。柄の長さは11㎝前後で、最狭部は柄中央にあり、鍔と把頭の緒通しの穴は錆のため不明である。

第2節　土　　器

4号横穴より壺の底部らしい須恵器の破片2個体分と、1号横穴羨道部堆積土中より須恵器小片が若干検出されているが、みな小片のため復元はできず、時期なども不明である。　　（木本元治）

第5章　考　　察

観音山北横穴群を形態的に分類した場合、次のように3類に分類して考えることができる。

〔Ⅰ類〕方形または隅丸方形の平面プランで、ドーム形の天井を有する。…1、4号横穴

〔Ⅱ類〕円形又は楕円形の平面プランで、ドーム形の天井を有する。…2、3、7号横穴

〔Ⅲ類〕縦長の方形の平面プランで、アーチ形の天井を有する。…6号横穴

これらは、7号が玄門直下の床に溝が無い点を除き、すべて長い羨道、玄門入口には額縁、その直下には閉塞施設と考えられる溝を有し無台床というものである。

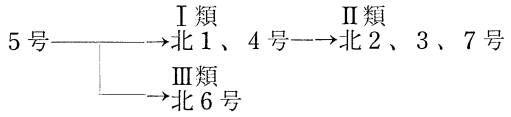
これらを他地域と比較した場合、Ⅰ類はいわき市大畑1号横穴、宮城県涌谷町追戸横穴群A区7・4号、B区7号、中野横穴群C地区5号などが見られる。

Ⅱ類に類似したものについては、宮城県山元町井戸沢横穴A地区5号（志間・他）が見られるが、

これは天井が変形アーチ形となり、やや異っている。

Ⅲ類に類似したものは宮城県涌谷町追戸横穴群A区8・6号（氏家1973）、同三本木町山畑横穴群8号がある。

これらのうちⅡ類は、東北地方では珍しく、他にあまり類例の見られないものである。Ⅰ・Ⅲ類は各横穴群でも形態的に崩れたものとして横穴造成の終末期的位置が与えられている。当観音山および観音山北横穴群においても、Ⅱ類がⅠ類の崩れたものと考えた場合、次のような形態の変化を認めてもよいのではないかと考えられる。



実年代について考えた場合、Ⅱ類に類似した井戸沢横穴A地区5号からは、栗囲式及び国分寺下層式の土師器が出土している。また3号横穴からの蕨手刀の出土等を併せ考えるとⅡ類は8世紀に中心を置くものであり、当観音山北横穴群も奈良時代前半にはすでに成立していたと考えられる。

（木本元治）

引用・参考文献

阿武隈川第四紀研究グループ（吉田　義・伊藤七郎・鈴木敬治）
「東北地方南部の阿武隈川流域の第4紀編年と2・3の問題」『地団研専報第15号』1969
志間泰治・氏家和典・他　『山元町史』宮城県山元町
氏家和典・佐々木茂槇　『追戸・中野横穴群』宮城県涌谷町教育委員会　1973

第13編　梅田横穴群

遺跡番号	30—91
所在地	須賀川市大字西川字梅田
時代・種類	古墳時代　横穴群
調査期間	昭和44年8月15日～8月29日
担当者	永山倉造
調査員	岩田敏之　渡辺 功　小針陸雄　武田奥一
協力機関	須賀川市教育委員会　須賀川市史談会　須賀川市女子高校史学クラブ　岩瀬農業高校史学クラブ

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 249
　第1節　位置と地形…… 249
　第2節　周辺の遺跡…… 249

第2章　調査経過…… 250

第3章　遺　　構…… 251

第4章　遺　　物…… 256
　第1節　金銅・銅製品…… 256
　第2節　鉄製品…… 257
　第3節　土器・その他…… 258

第5章　考　　察…… 259

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

西川は須賀川市街の西方の農業地帯である。遺跡のある梅田は、西川地内にあり、阿武隈川の支流である釈迦堂川の沿岸に近く、新屋敷部落の裏山が北に舌状に延びた凝灰岩の岩山である。須賀川地方は石背郡の中心地で古代遺跡の多い地域である。(図版1、2)

また、この地域は古い形式の沢口田が多い。梅田横穴に連絡するこれらの水口には、大山・里内・笹平池・十貫田・辰の口・日向内・堀底・将監田・中屋敷などの地名がみえる。

第2節　周辺の遺跡

岩瀬郡内の横穴は、次の一覧表のようなものが知られており、郡内に広く分布している。

第1表　岩瀬郡内横穴一覧表

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
30—191・192	町の内横穴群	須賀川市田中字町の内	30—80	岩下横穴群	須賀川市稲字岩下
30—124	新田前横穴群	〃　堤字新田前	30—309	館石横穴群	〃　泉田字館石
欠	台横穴群	〃　台	30—44・45	治部池横穴群	〃　滑川字治部池
22—375	神成横穴群	〃　仁井田字神成	30—421	百八横穴群	玉川村竜崎字百八
22—373	四十壇横穴群	〃　〃　字四十壇	30—288	洞山横穴群	長沼町南横田字洞山
30—178	大仏横穴群A	〃　和田字大仏	30—293	才合地山横穴群	〃　枠衝字才合地
30—166	大仏横穴群B	〃　〃	30—291	城之内前横穴群	〃　〃
30—145	和田横穴群	〃　和田字服部山前	30—289	岩崎山横穴群	〃　木之崎字岩崎山
30—125	古館横穴群	〃　古館	欠	仁井田横穴群	鏡石町鏡田字仁井田
30—202	乙字滝横穴群	〃　前田川字二枚橋	30—340	七曲横穴群	〃　笠石字七曲
欠	一斗内横穴群	〃　越久字一斗内	30—323	熊野山横穴群	〃　鏡田字熊野山

(永山倉造)

第2章　調　査　経　過

梅田横穴は古くから知られており、既に開口しているもの3基、ボーリングによって確認されたもの2基、合計5基が確認されていた。まず、開口されたものから作業を開始した。

〔2号横穴〕　8月18日より作業を開始した。変形アーチ形で、ほとんど流入土もなく一番早く整理しおえた。出土遺物はなにもなかった。8月21日に実測図も終了した。

〔3号横穴〕　2号横穴と同じく、8月18日より作業を開始した。変形アーチ形で、落盤がはげしく大きな落石もあり、それを除去するのに多くの労力を必要としたが、天井部の一部を確認し、さらに床面まで掘り下げたのち、8月29日に整理・実測を完了した。出土遺物もなく、大部分が欠落していた。

〔5号横穴〕　8月18日より作業を開始したが、すべて落盤によって崩れ、しかも細かい砕石となっていることが確認された。翌19日、作業続行が不可能と判断されたので、やむを得ず中止した。

〔6号横穴〕　8月18日より作業をはじめ、変形アーチ形であることが確認され、作業中に、「寛永通宝」・鳥骨などが出土した。その後、順調に作業がすすみ、8月20日に整理・実測を完了した。遺物は、上記以外には発見されなかった。

〔4号横穴〕　8月18日に作業をはじめた。玄室天井が低いため多少てまどったが、8月21日に整理・実測を完了した。遺物の出土はなかった。

以上が、本横穴において、最下位に位置するものであった。その上段に、1号横穴が存在する。

〔1号横穴〕　8月18日より調査に入り、前庭・羨道と順に作業をすすめた。同日、長胴甕と思われる土師器の破片2点出土する。19日に、杯と思われる内面黒色処理された口縁部破片出土、玄室内より、土師器の甕口縁部と、内面黒色処理された杯の破片など計3点出土する。断面の実測を行う。20日、玄室内に流入した腐植土中から土師器の杯（回転糸切り底）の破片が出土した。これらの破片はいずれも小さなもので、復元できるようなものはなかった。玄室中央部から奥は、赤褐色土層におおわれていた。その後整理を行い、床面に二つのピットや4個の小穴、2本の溝などを確認し、8月29日に実測を完了した。

〔7号横穴〕　8月22日より作業に入る。丘陵の西側に存在するもので、例外的なものでないかと考えられた。輪郭を確認したが、凝灰岩が風化して砂質土壌化していること、急斜面となっているため、作業は思うようにはかどらない。24日、閉塞石を発見する。木炭片が散在することを確認した。また、復元可能な土師器杯（内面黒色処理）が出土した。25日、火葬骨を埋葬したのではないかと思われるような白色の有機物が微粒となって多数出土した。1号墳と同じようなピットが2個

検出された。26日、写真撮影をし、29日整理・実測を完了した。

〔8号横穴〕　同じく8月22日より作業開始する。早くも床面にまで掘りすすみ、棺床があることを確認した。24日、棺床内から木炭とともに火葬骨らしいものが出土、さらに、開元通宝と元祐通宝を発見した。玄門の一部も確認された。25日、棺床は北側壁に造られていることがたしかめられた。追葬のさいに棺床より整理されて取り出されたと思われる。人骨が床面上に発見された。26日、写真撮影を行う。29日、整理を行い棺床の全体を確認し、実測を行って終了した。

〔9号横穴〕　8月22日より作業に入る。本丘陵の鞍部に位置し、まずトレンチを入れて確認作業を行う。須恵器の大甕の破片出土する。さらに岩盤が掘り込まれているのか、自然の窪みなのか、輪郭も確認されないまま終る。24日、ほぼ輪郭を明らかになしえたので、ベルトコンベアを使用し、作業をすすめる。その結果、前庭のピット・火葬骨・石塊群・副室1号および2号を確認し、羨道の閉塞石の状況などもたしかめることができた。また、閉塞石の一部を取りのぞき開口することもできた。玄室内の、流入土は少ないが、土が湿っているために、しばらく乾燥するのをまって、精査を行うこととした。玄室内に入ったが、水こしをした粘土状となり、一つ一つ切りとって精査を行うような状態であった。遺物は北隅にのみ散在して出土した。主なものは、金銅製品・鉄製品・大臼歯などであった。25日、玄室内の実測を行う。羨道・前庭を一応整理し、写真撮映を行う。須恵器の丸底大甕のとりあげも終了する。26日、前庭の精査を行う。27日、実測図作成の準備をする。29日、実測図を作成し終了した。

〔10号横穴〕　8月25日より作業をはじめる。26日、須恵器破片1点、火葬骨片・土葬骨片など発見された。28日、精査を行う。29日、実測図を作成し終了した。7号・8号横穴とともに丘陵西側の急斜面上に位置するものである。

〔11号横穴〕　26日になって、あらたに発見されたもので、丘陵北側に位置するものである。27日、玄室の約3分の1を残すのみで崩壊していることが確認された。28日、精査する。遺物はなにも出土しなかった。29日、実測図を作成して終了した。　（永山倉造）

第3章　遺　　構

本調査により発見された横穴は11基であり、1号・9号横穴をのぞいては、開口あるいは一部又は大部分破壊されたものである。未開口とみられた1号も精査によれば開口して後世再利用された形跡がみられた。9号についても同じで、盗掘口があり内部も荒らされている。1号横穴より順を追って

説明することとしたい。

1号横穴（図版10）

前庭は、北東にのび2～3mで崖になり欠落している。基部で1.3m、崖上で2mと扇状形にひらいている。羨道は入口で60cm、玄室入口で1mである。天井の高さ1mであるが、入口付近の天井部は風化により崩壊したことが考えられる。玄門部は高さ1.1m、幅95cmである。玄室は両袖式で奥行2.8m、玄門部で2.1m、奥壁部で2.7mの方形のプランをもっている。排水溝はみあたらないが、奥壁より80cmの床面に50cmの間隔でA・Bのピットが検出された。Aピットは径30cm、深さ40cm、Bピットは径25cm、深さ26cmである。

天井部は変形ドーム型と考えられ、天井の高さは現形では2.15mあるが、後世に手を加えて高くした形跡がある。構築当時の天井の高さを推定すると約1.8m位と考えられる。

羨道部をふさいでいた灰白色土は、風化凝灰岩粉末層で玄室を半分位埋めていた。この下層に人工的に積んだと思われる赤褐色土層があり、玄門40cmのところより玄室一面に約40cmの厚さに認められた。この下層に薄い黒褐色土層が認められている。この層に土師器の破片が数点発見された。

土器の器形は破片のみではっきりしないが、杯の底部が1点出土している。胎土・焼成とも悪く、赤褐色を呈している。

2号横穴（図版11）

前庭は、後世に農業用水路が築かれた際に破壊されたと考えられる。羨道・玄門ともに崩壊している。玄室についても崖面の崩壊が前部にまで及んでいて、その全様を知ることはできない。床面は変形の矩形を示している。幅は奥壁で1.6m、最も広いのは奥壁より1mのところで2.2mである。奥行は1.8m で、床面が中央部よりやや低くなって奥壁に続いている。棺座とか排水溝など特別の施設は認められない。床面中央に後世の築造と考えられる30cm四方、深さ15cmの方形の落ち込みがある。右側床面に入口から奥に向かって広がる欠落がある。入口で20cm、最大幅55cm、深さ5cmである。断面形は変形アーチを呈している。天井は残存先端部で1.05m、中央部1.18m、奥壁1.18mの高さである。天井右側に先端部より60cmのところから奥に向かって幅50cm、厚さ10cmほどの欠落がみられる。

奥壁中央部に、横53cm、縦60cmの上部が浅く、底部が26cmに達する人工的な掘り込みが存在するが後世の加工とみられる。本横穴は開口しており、遺物はまったく無かった。

3号横穴（図版11）

破壊がはなはだしく、全容を確認することはできない。前庭・羨道は崖の崩壊によって欠落している。玄門は、天井部及び壁は崩壊し欠落しているが、床面に閉塞に用いられたと考えられる石があったので、この位置が玄門と推定される。玄室は奥行が1.6mあり、この幅は先端部で1.7m、奥壁より1mの地点で2m、奥壁部で1.7mである。天井部は、落盤しているため不明である。落盤のため、

天井・壁ともに欠落し、奥壁部でわずかに1mを残すのみで、60cmの高さから湾曲が認められる。この壁面には刃幅6cmの、のみ痕が認められる。

4号横穴（図版11）

前庭は、崖崩れにより欠落したものと考えられる。羨道にも崖崩れによる欠落があるが、玄門に接続する部分に20cmほど残存がみられる。右側壁寄りに「かんぬき穴」と考えられるピットがみられるが、明らかでない。玄門は前部の幅60cm、後部80cmで、長さ55cmである。天井は落盤により失われている。玄室の幅は、玄門部で1.40m、中央1.75m、奥壁部で1.66mあり、奥行が1.84mである。排水溝その他の遺構はみられない。

天井部は、変形アーチ型を示していたと考えられるが、玄室の3分の1を残すのみで、あとの部分は落盤により欠落している。残存部の天井の高さは、奥壁部で92cm、残存部先端で1.14mである。奥壁に刃幅6cmののみ痕を認めることができる。

開口しているため、遺物は認められない。

5号横穴

5号横穴については、全面に落盤がみられ、破壊がはなはだしく、絶壁であるため調査不可能であった。

6号横穴（図版11）

前庭は崩壊して明らかでない。羨道も同じく崩壊しているが、玄門から続く一部の残存がみられ、床面で3cmの段落が認められた。玄門は、入口で73cmの幅をもち、玄室部で90cmの幅がある。長さは1.06mである。玄室は、玄門より20cm入った床面で1.48m、中央部1.63m、奥壁1.45mの幅を持ち、奥行は2mである。床の保存状況は非常に悪く、玄室右側に、幅20～28cm、長さ95cmの床面を残すのみで、全面的に剝落している。排水溝・その他の遺構は認められない。

玄門部の壁は、右側の保存が良く、左側はほとんど欠落している。天井部は明らかでないが、復元高約1mと考えられる。玄室は、変形アーチを呈している。天井残存部先端で1mの高さがあり、中央部98cm、奥壁部で65cmである。奥壁には刃幅6cmののみ痕が多数認められる。

玄室内より寛永通宝が1枚発見されたが、これは後世に持ち込まれたものと考えられる。

7号横穴（図版3、12）

前庭・羨道は、すでに地すべりによって失われていた。玄門は、床面の幅1.15m、奥行22cmであり、高さ20cm、最大幅34cm、最長2.04mの閉塞石が一部残存していた。高さおよび上部状況は、すでに欠落しているためにわからない。玄室は、玄門側の幅1.70m、最大幅2.0m、奥行の最大長1.75m、奥壁の高さ1.65mまで測定し得る。平面プランからみると、一応両袖式玄室と考えられるが、不整形なものであるといえよう。排水溝・棺床などの施設はみられない。その他、床面に直径28cm、深さ25cm

と、直径16cm、深さ28cmのピットが二つ検出された。

奥壁の測定値も断定的なものではない。天井部の落盤をも含めてすべて、地すべりによる欠落の結果生じたもので、壁面にも特記すべきものもなく、凝灰岩の風化がいかに激しいかを知り得るような状態のみであった。

遺物はすべて玄室内より出土したものである。木炭片および灰が、玄門および二つのピット付近より多数出土、特に玄門内の左側に多く分布しているのがみられた。出土した土師器は、口縁部径15.7cm、高さ5.3cm、底径6cmであり、胎土は精製されたものを使用、焼成は良好、色は淡褐色を呈している。内面黒色処理されているが、摩滅が著しい。外面は、轆轤成形で、口縁部近くに横条線がみられる。轆轤成形の際の凹凸が全体にみられ、底部近くに特に著しい帯状の凹線が認められる。底部は、糸切り技法により、手持ちによる布調整が施されている。

8号横穴（図版4、12）

前庭と羨道は、地すべりによって欠落している。玄門は、幅60cmで、わずか20cmを残して欠落している。玄室は、羨道を入った左に棺床を有するもので、本横穴群中唯一の例である。幅は入口で2m、中央部2.3m、奥壁2.3mである。棺床縁は幅20cm、長さ2mの帯状の仕切があり、床面より10cmの高さに棺床の床面がある。棺床内部の幅65cm、長さは壁に面して1.9m、仕切部で2mである。奥行は右で1.9m、棺床部で2.1mである。

天井は落盤により欠落し不明である。壁もわずかに高さ1mを残すのみであり、断面形は不明である。

遺物は、玄室内からの出土のみである。玄室中央部に頭骨があったが、風化がはなはだしい。棺床に接して四肢骨が発見されたが、これも風化が進んでいた。棺床内部は、凝灰岩の風化土に覆われていたが、その下層は保存が良く、木炭・灰とともに火葬骨と思われる人骨が発見され、副葬品として直刀の破片と考えられる鉄片が10点、そのうち最大のものは長さ15cmである。これとともに銅銭が2枚発見されている。開元通宝（開通元宝）と元祐通宝である。

9号横穴（図版5～8・13）

前庭は、先端部の幅2.56m、羨道に接する部分の幅2.38m、長さ3.78mである。先端部には、ⓐ先端部外側に、長さ90cm、幅59cm、深さ37cmと、長さ1.2m、幅44cm、深さ37cmの長方形ピットが検出された。このピットは左右対称のような状態で検出されたが、ピット内からは、なんの遺物も検出されず、その性格についても、他の類例・報告例がないので明らかではない。ⓑ先端部内側近く、北側壁より53cmの地点と同じく1.33mのところに、約16cmの範囲にわたって、高さ約30cmほどの黒土にまじって、火葬骨片がまとまって検出された。おそらく2体分であろうと思われる。

中央部には、凝灰岩と河原石が、多数積重ねられてあったが、これらの石は、羨道および玄室の閉

塞に用いたものが移動されたものでないかと思われる。床面には、幅86cm、深さ15cmほどの溝が、羨道から前庭外部まで長くゆるやかな曲線をえがいて続いているのが認められた。羨道との境に接して、径17×11cm、深さ14cmと、径10×7cm深さ11cmのピットが検出された。これらのピットは、「かんぬき穴」ではないかと推定される。北側壁のピット上から、須恵器の丸底大甕が出土している。

北側壁には、幅77cm、高さ54cm、奥行65cmの副室1号と、幅80cm、高さ30cm、奥行40cmの副室2号が検出された。副室1号には、明らかに閉塞石と排水溝の存在が確認された。排水溝は、幅7cm、深さ5cm、長さ40cmである。（図版7参照）

前庭における長方形のピット、火葬骨片、長く続く溝などは、いずれも本横穴の構築当時のものでなく、後世のものであろうと考えられる。

羨道は、先端部の幅1.42m、玄門と接する部分の幅1.27m、奥行1.2mである。床面には、浅い溝状の凹みが検出された。玄門は、羨道・玄室と接する部分の幅はともに75cm、高さは1.42mである。閉塞に用いられたのは、凝灰岩石と河原石であるが、移動されていないと思われる閉塞石の積み方をみると上部および羨道に近い方に河原石を用い、下部および玄室に近い方には、凝灰岩石を用いていることがわかる。

玄室は、玄門部の幅2.68m、奥壁部の幅3.17m、奥行2.3m、奥壁の最高の高さ1.36m、中央部の最高の高さ1.82mである。玄室は、一応両袖式玄室とみられるが、玄室北側が広く、南側は狭いという変形となっている。

排水溝・棺床などの施設はみられない。

前庭に、副室が二つ検出されたことは前述した通りである。羨道の天井は、崩壊によって欠落したものと思われる。玄門の幅はほとんど平行である。玄室は、変型ドーム形である。ここで、注目したいのは、玄門と接続する部分の造り方である。この部分は、玄門より続く両側にみられるもので、明瞭に「角柱」あるいは「横穴式石室の玄門」をまねたものではないかと思われ、ていねいにきちんとした整形を行っており、つきだしがきわめてはっきりしている。類例としては、神奈川県大磯町の猫淵横穴に共通する点が多くあるといえる。壁面は、刃幅15cmと6cmの2種の工具を用いて、整形していることがわかる。

床面は、水こしをした粘土がはりつけられたようになっており、流入土は少なく、遺物は玄室内の奥壁と北壁すみから下記のものが発見された。

〔Ⅰ〕　冠様金銅製品残片　小部分であると思われるが、鉄鏃2本の中間に、鞘尻金具とともに出土した。

〔Ⅱ〕　釧　一番北壁近くより出土した。大臼歯が付着して出土したため、鈴釧かと思われたが、そうでなく単なる金銅製釧であることが、のちにあきらかにされた。

〔Ⅲ〕　鞘尻金具　青銅製品で、冠様金銅製品残片の近くより出土した。

〔Ⅳ〕　鉄鏃　散乱した状態で、11本出土している。

〔Ⅴ〕　刀子　２本離れて出土している。両方とも、柄のさしこみ部分に木質部の残存が認められる。大きさはきわめて一般的なものと考えられる。

〔Ⅵ〕　大臼歯　成年男子のものであることが明らかにされている。

10号横穴（図版12）

前庭・羨道・玄門は、地すべりのため欠落して不明である。玄室も奥行右で2.5m、左が1.2mを残して欠落している。幅は中央部で2.5m、奥壁で２mである。排水溝その他は無い。天井は落盤して、高さ1.2mの壁を残すのみである。

11号横穴（図版12）

前庭・羨道・玄門・玄室ともに崖崩れによって、欠落した横穴で、わずかに左側南東面の壁が残存しているにすぎない。床面も残存部先端で１m、奥壁部で1.55mである。断面形その他不明であるが、横穴の中軸線の向きは北東に位置するものと考えられる。　（永山倉造）

第４章　遺　　物

第１節　金銅・銅製品

１　冠様金銅製品（図版19、20、25—14、９号横穴）

装身具として埋納されたものと考えられ、幅３cm、長さは不明であるが、鉢巻のように使用したものではなかったか。材質は銅板を薄く伸ばし、これに砂地文様の装飾を打ち出して施し、金箔をはったものである。これに三角形の連続文を周辺に打ち抜き、中央線に菱形文を数点配したものであったと考えられる。玄室内はかつて水が20cm以上も浸水した形跡があり、このため床に張った粘土がとけて、このなかに遺物が浸り、腐食が早かったためか保存状態は非常に悪く、本体の青銅板は金属分が無く、これに張られた金箔がかろうじて確認できるのみである。

２　刀　装　具（図版21、25—15～18、９号横穴）

出土したものは縁、責金具２、鞘尻の４点のみで刀身・つば等は発見されなかった。

縁は金銅製で、銅板を加工したもので、長さ３cm、幅３cm、厚さ1.5cmである。責金具２点は鉄製で柄に近いほうが3.5×1.8cm、鞘尻に近いものが３×２cmの環状を呈している。鞘尻も鉄製で長さ

4.3cm、幅2.6cm、厚さ1.7cmである。これらはいずれも漆加工の痕跡が認められる。

3　銅　　銭（図版18、8号横穴）

8号横穴棺床のなかから、火葬骨と一緒に出土したもので開元通宝（開通元宝）、元祐通宝の各1枚である。ほかに9号横穴の南斜面からも元祐通宝が1枚発見されている。いずれも青銅製である。

4　銅　　釧

腐食がひどく、針金のようにやせて半分は失われている。一部に緑青化した残存部があるが、これは太さ0.3cmである。釧の復元径は7cmあったと考えられる。

第2節　鉄　　製　　品

1　直　　刀

この直刀は、埋葬の際、故意に切断されたものと考えられる。長さ14.7cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmである。これは棺床のなかより火葬骨・唐銭・宋銭とともに発見されたものである。全体の長さ、その他刀装具などは不明である。

2　刀　　子（図版22、25—12・13、9号横穴）

〔Ⅰ〕　図版25—12のものは、9号横穴出土のもので、長さ12.5cm、最大幅1.2cm、厚さ5mmあり、柄部に木部の残存付着が認められるが、銹化著しく折れる寸前である。

〔Ⅱ〕　図版25—13は、9号横穴出土のもので、長さ11.4cm、最大幅1.2cm、厚さ4mmである。これも柄部に木部残存が認められた。

3　鉄　　鏃（図版23、25—1～11、9号横穴）

9号横穴出土の鉄鏃は全部銹化がひどく腐食著しいが、ほとんどが細根式に分類されるものと考えられる。形態の保存は割合良く、大別して二つに分類できる。

＜のみ状を呈する有茎鉄鏃＞

〔Ⅰ〕　刃先が腐食のため欠けており、全体に銹化がひどい。茎部は3.5mmの丸形で長さ4.5cm、刃部は基部が5×4mmの角形で14cmある。

〔Ⅱ〕　茎部は4mmの丸形であり、刃部は、基部が5mmの角形で刃先は幅6mm、厚2mm、長さ14.5cmである。

〔Ⅲ〕　茎部4mmの丸形で長さ3.5cm、刃部は、基部が4×5mmの角形を呈し、刃先は平たいのみ形で幅7mm、長さ12.3cmである。

この類は3例あり保存はあまり良くない。

＜片刃状の有茎鉄鏃＞

〔Ⅳ〕　茎部は3㎜の角形である。茎部は折れているため長さは明らかでないが、残存部は1.7㎝である。刃部は基部で4×5㎜の角形、刃先が幅7㎜、厚さ3㎜、長さ12㎝である。

〔Ⅴ〕　茎部は3㎜の丸形で長さ4.8㎝、刃部の基部で4×6㎜あり、刃先は7㎜、厚さ3㎜、長さ12.3㎝である。

〔Ⅵ〕　茎部2.5㎜、長さ5.7㎝あり、刃部は基部で4×6㎜の角形である。刃先は7㎜、厚さ3㎜長さ12.3㎝である。この鏃は刃の中頃に漆状の固形物が付着している。

〔Ⅶ〕　茎部4㎜の角形で、長さ5.7㎝、刃部は基部で3.5×6㎜の角形を呈し、刃先で8㎜、厚さ3.5㎜あり、長さは12.8㎝である。

〔Ⅷ〕　茎部は3㎝の方形で長さ4.2㎝ある。茎部の基部は3.5×7㎜と平たく、刃先は幅7㎜、厚さ3㎜、長さは12.9㎝である。

〔Ⅸ〕　茎部は2.5㎜の角形で長さ3.5㎝である。刃部は基部で2.5×5㎜と平たい刃先で幅7㎜あり、厚さは2㎜、長さ12㎝である。

〔Ⅹ〕　茎部は3×5㎜の角形で、折れているため長さは不明であるが現存の長さ1.7㎝、刃部は基部で3×5㎜、刃先幅6.5㎜、厚さ2㎜、長さ13.6㎝である。

〔Ⅺ〕　茎部3×5㎜の角形で、長さは3.4㎝である。刃部は基部で3.5×4.5㎜の角形、刃先は6㎜の幅があり、長さ13.9㎝ある。

第3節　土器・その他

本遺跡は古墳時代後期ではあるが、横穴の使用期間が長かったため、後世の追葬などにより、構築時の遺物は不明である。

1　土師器（図版16、24）

復元可能なものは杯が1点のみである。この杯は、外部外側に糸切技法を用いた痕が残っている。内面は黒色処理が施されている。口径15.7㎝、高さ5.3㎝である。9世紀末のものと考えられる。

2　須恵器（図版15、24）

9号横穴の羨道に接続する前庭部北側床面より発見された甕がある。この須恵器は大部分が破片であった。丸底の底部は粘土の台に置かれてあった。これは完全に復元できたが、器高73.5㎝、体部の最大径65㎝、肩部の比較的に張った体部に、外反する口縁がある。体部の表面には条痕の圧痕がみられ、内面には同心円の叩き目文がある。口頸部の表面には櫛目波状文がつけられ、内部は篦により調

整が施されている。これらは奈良時代初期に位置づけられるべきものであろう。　（永山倉造）

3　遺　　体（図版17）

銅釧に付着して歯のみ発見された。歯の琺瑯質に緑青がしみこんだためか、これだけが残ったものである。この歯は成人男子の下顎の右側第一大臼歯で、1×1.3cmの大きさである。咬頭が7個ある。現代人は5個が普通であるから古代人のものである。　（遠藤義兵衛）

第5章　考　　察

梅田横穴については11基の横穴中、開口していないものは9号横穴1基で、それも玄門部の閉塞設備の石が3分の1ほど抜き取った盗掘穴があり、内部は相当荒らされていた。他のものは1号横穴をのぞいて大部分は大破しており、本横穴群の諸問題を明らかにすることは困難である。

羨道を有するものは1号横穴と9号横穴のみで、長さはわずか1m前後である。本横穴群が築造されている凝灰岩は非常に脆い性質のもので、調査が行われた昭和44年8月から1年後に、遺跡を調査に行ったとき、9号横穴の前庭部が凝灰岩の風化土によって埋まり、玄門の3分の1ほどが塞がれていた。これから考えると、創建時から風化による変化を相当激しくうけていると考えられる。これらから考えて、他の横穴についても構築時には羨道があったらしい形跡を認めることができる。

閉塞問題についても羨道と同様、玄門部の破壊がはげしく、完全な形で玄門が認められるのは1号・9号のみである。このうち玄門に閉塞設備があったのは9号横穴のみであり、梅田横穴全体の問題について明らかにされない。9号横穴の閉塞は玄門部にあり、凝灰岩の割石と川石を使用しているが、基部および内部には割石を使用し、外面になる部分には川石を使用している。

次に「かんぬき穴」の問題であるが、玄門前外側に発見されたピットは、かんぬき穴と考えられ、横穴葬制に関係のある施設であると認めることができよう。

もう一つ1号・7号に発見された玄室内のピットであるが、これはいずれも二つならんで掘られている。1号については後世に手が加えられて、保存状態は悪くその目的は明らかでないが、7号横穴の2号ピットからは、糸切底の黒色処理の杯とともに多量の灰・木炭が発見された。これが後述の火葬骨埋葬の問題と何らかの関係があると考えられるのではないか。

火葬骨の埋葬については、その埋納法に一定のルールは無く、各例まちまちである。したがって本件については事例の報告にとどめ、今後の研究に一資料を提供するものとしたい。8号横穴は棺床を有するものとして、本横穴中唯一のものであるが、この棺床のなかから、直刀の断片、開元通宝、元

祐通宝とともに火葬骨が発見されている。もう一例は9号横穴前庭部にある二つのトレンチ付近から発見されたもので、2体分と考えられる。これは袋状のものに格納されて地下埋葬されたものと考えられる。

最後に本横穴群の構成されたのは、二つのグループからなると考えられる。一つは東壁より北壁へ進んだA地区のもの、一方は西壁より北壁へ掘られたB地区のものとに大別できよう。これらの被葬者はA地区にあっては、釈迦堂川北岸一帯に広がる土師遺跡との関係が考えられ、B地区は里内・越久地区の土師遺跡が考えられるのではなかろうか。

A地区は2段に築かれ、上段は1号・9号の2基で、規模が大きく、変形ドームの広い玄室を有し、羨道・玄門をもつ大形のものであり、これをⅠ類とする。下段は、ほぼ同一レベルに2号・3号4号・5号・6号・11号の横穴があり、規模は小さく、大部分は破壊されている。残存部から考えて変形ドームのものが多いようである。これらをⅡ類とする。この構築時については、Ⅱ類にあっては遺構・遺物とも資料が少なくはっきりしないが、Ⅱ類はⅠ類に先行しないと考えたい。

B地区は7号・8号・10号であるが、7号に続く南方にも横穴が存在したものと考えられるが、地すべりのため破壊されたことが考えられる。この3基については、8号横穴は北壁に棺床を有するもので、本横穴中唯一の例である。この形態は玉川村竜崎の百八横穴群に玄室右側に棺床を有するものがあり、これの退化様式と考えられよう。

横穴構築に伴う用具については、数種類あったことが考えられる。同一年次に調査された須賀川市内の大字越久字一斗内にある古墳群の石室用の石材の加工に用いられた用具と本横穴の構築に使用した金属製の用具とは、ほぼ同様式のものと考えられる。山上群集墳と横穴との構築時期についての資料として参考になるものと考えられる。

（永山倉造）

参 考 文 献

伊東信雄　氏家和典　『善応寺横穴古墳調査報告書』
『上畑岡大立横穴群発掘調査報告』　大立横穴群発掘調査団
『須賀川市史論集資料第3集（須賀川の遺跡）』　首藤保之助
『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査　梅田横穴群概報』　福島県教育委員会
『才合地山横穴古墳調査報告書』　長沼町教育委員会
『白河観音山横穴古墳群発掘調査概報』　白河市教育委員会
『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査　観音山横穴概報』　福島県教育委員会
『神奈川県大磯町文化財調査報告書』　大磯町教育委員会

第14編　七斗蒔遺跡

遺跡番号	37—37
所在地	白河市萱根字七斗蒔
時代・種類	古墳・奈良・平安時代、集落址
調査期間	昭和44年9月24日～10月8日
担当者	鈴木　啓
調査員	藤田定興　村上友彦　江藤吉雄　日高 務　金子誠三
協力機関	白河市教育委員会　白河市役所小田川支所　白河女子高校歴史クラブ

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 263
　第1節　位置と地形…… 263
　第2節　周辺の遺跡…… 263
第2章　調査経過…… 264
第3章　遺　　構…… 266
　第1節　住居址…… 266
第4章　遺　　物…… 270
　第1節　土　　器…… 270
　第2節　金属器…… 276
　第3節　石製品…… 276
　第4節　土製品…… 277
第5章　考　　察…… 277

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

白河地方に広範に広がる「白河丘陵」は、白河溶結凝灰岩からなり、その上はローム層で覆われており、阿武隈川とその支流によって、東西方向に断続する小丘陵塊に分断され、開析されている。

七斗蒔遺跡は、白河市街の北端、旧奥州街道・会津街道・国道4号線の三叉する地点より、阿武隈川の支流高橋川の流域水田を、北西に700m隔てた丘陵の南斜面に位置している。東流する高橋川に平行してのびるこの丘陵の南縁は、数百メートルにわたって断続して、土師器片の散布が認められるが、当該地点は遺跡のほぼ中央部とみられる。高橋川は近年改修され、流域水田は耕地整理を完了した。

遺跡を含む細長い丘陵は、「日向山」と呼ばれ、東端に根田、西奥に大谷地の集落がある。日向山の背後には、同様の帯状に東西にのびる水田地帯があり、「後谷地」と呼ばれ、また前方の水田地帯は「大清水」である。

このように、湧水と流水の豊富な湿地に接したかなりの斜面に営まれた遺跡である（図版1・3）。

第2節　周辺の遺跡

七斗蒔遺跡の前をほぼ西から東へ流れる高橋川に沿った地域には、古墳時代から奈良～平安時代にかけての遺跡が多い。

当遺跡が流域の上限で、下流の萱根・桜岡・久保・久田野・本沼方面に遺跡が密集し、古代白河郡の中で一つの単位をなす地域であることを物語るようである。

なかでも天王山遺跡は、天王山式土器の標式で、弥生後期のユニークなものである。久田野の中島遺跡は古式土師器を出土する遺跡で、壺・甕・高杯・器台・台付土器・甑があり、複合口縁・櫛目文を有し、高杯・器台に3窓をもっている。久保の観音山横穴からは、圭頭太刀・円頭太刀・馬具その他が出土し、高橋川と阿武隈川が合流する本沼のすぐ下流右岸が借宿廃寺跡、左岸が関和久遺跡で、白河郡家跡に比定されている。

高橋川流域約5kmには、縄文遺跡は少なく、古墳と土師器を出土する遺跡が多い。それには、桑ケ

作遺跡・三本木遺跡・烏小前遺跡・棒の入遺跡・蟹沢遺跡・北の内遺跡・袖ケ久保遺跡・鬼ケ窪遺跡・久保遺跡・本沼遺跡などがあり、他地域に比し、土師・須恵の散布する遺跡の密度が高いことが指摘できよう。

（鈴木　啓）

第2章　調　査　経　過

コンターに平行して、遺跡の中軸線を定め、これに直交して3mおきに2×35mのトレンチ4本を設定し、東から西へA・B・C・Dトレンチとし、更に上段急斜面を第1地区、中段斜面を第2地区、下段平坦面を第3地区、それに西側部分の家屋跡を除いた斜面を第4地区と地区割りし、計4区とした。

各トレンチの素掘りを終了した段階で、全面発掘の必要から、3地区を縦に三つに割り、上段を東から1A・1B・1C、中段も同様2A・2B・2C、下段も3A・3B・3Cと呼称することにした。以下順に述べる（図版2）。

第1地区（1A、1B、1C）

畑地の上限で、遺跡の最上段にあたり、傾斜が急であるため、北端では表土下25cmでローム面に達する。

1A・1Cでロームの落ち込みを発見し、東西にのびることがわかる。1Aで杯2個が伏位で発見された。トレンチ間の掘り上げを進めるが、3年前まで桑畑だったことと、砂質土壌で軟らかく、根菜類の畑に利用されていたため、深部まで攪乱をうけている。

1Cで焼石1個が出土したので、1Aの杯の出土した面と、この2か所を生活面とみて拡張する。1Cのロームの切り込みは、北東隅で北に折れ、北西隅では南に折れて消滅することが判明した。1Bの北壁は凸状に張り出し、両側に連続することがわかった。ロームの壁は高くほぼ垂直の立ち上がりを見せる。

1Aの東では、上下に更に東にのびるロームの切り込みがあって、生活面を思わせるが、民家建築時に削平しているので、追求できない。1A北壁にカマドとその前面に炉と土器がセットで多数発見された。後、カマドの東に接して煙道のないカマドがもう一つあることがわかった。土器と一緒に土製勾玉・鉄鏃が出土している。1Bでは、北壁に煙道と焚口が発見され、焚口のある壁のすぐ左に煙道の痕跡が残されている。焚口周辺は灰の堆積で、灰層中より金環・刀子・鉄斧が出土した。土器群はない。1Cでは、北壁にロームを掘り込んだカマドと、その東南に焼土がある。土器はカマド右側

に椀と甑が発見された。1C東南隅にわずかの落ち込みがあり、平底杯4点と須恵器片が出土したが、この部分にのみ残存したもので、下段の2B地点では消滅している。

1A・1B・1Cの生活面は、遺物収納後、下層の生活面の有無を確かめるため、掘り下げを行った。その結果、1Aはわずかに下ってローム面に達し、三つのピットと柱穴、東壁の残存を確かめた。1Bではレベルが一段下がり、1Aを切っている。更に中央でがぎ形にもう一段落ち込み、壁際から壺・甕・杯が発見された。この落ち込みは、1Cに連絡していることが知られた。1B南端に大きなピットがあり、2個の壺が入っていた。1C床面は不明瞭なため掘り下げたが、焼土・茶褐色土・土器片混入の堅い面となり、これが床貼と判断された。北西隅に大ピットが発見された。

第2地区（2A、2B、2C）

2Aは、地表から60*cm*下がった黒褐色土層に生活面が認められ、壁を追って発掘を進めたが、第1地区のようにロームを切る施工をしていないため、壁の確認はできなかった。

10数点の古手の杯を発見しているが、まとまった形で出土せず、全面に散在している。黒褐色の砂質土層中にあり、住居址であるか否かは不明である。

2Bは上段と下段に分かれる。まず上段についてのべる。

2Bの素掘りを進める一方、下層の状態をつかむため、南北に2本の小トレンチを掘った結果、上下2段に分かれ、上段では北側（上方）でロームを切って下げ、南側では黒土を積んで整地していることが判明した。北縁より8.30*m*南に行って約70*cm*下がる段に至る。

北西隅に生活面の西壁の残存が認められ、壁際に土器群が出土し、甑と杯の間から臼玉が発見された。住居址の周壁を追ったが、北壁と西壁の一部以外は黒土中にあり、耕作による攪乱もあって何ら変化は認められず、規模は不明である。西壁に接してカマドがある。馬蹄形に粘土で築成したもので、二つが接した形をとる。右側は使用されたものであるが、左のものは熱を加えた痕跡はない。

カマドの西側に袋状ピットが発見されたが、内部の土層は、堆積を示す線は判別できない。このピットの上層の黒土中より、須恵器の甕1点が出土した。柱穴は2個以外は識別できなかった。

2B下段は、黒土層中に営まれた住居址で、表土から約1.20*m*あり、傾斜地の裾にあたるところから、上部土砂の流入による堆積を物語っている。

上・下段の境をなす段の西端に、大きな平石を4個斜めにつないだ石組みが発見された。石組の下からは土器がセットで出土し、周りに石を組んでいるところから、4個斜めに並べた石は煙道であることが知られた。黒土層中であるため、黒土に溝を掘り、石を覆って煙道としたものである。

このカマドを中心に東壁を追ったが、黒土に変化は認められず、規模は不明である。柱穴が3個検出された。3B地点は土置場にしたため南壁を追うことは断念した。

2C地点は、地表より1.20*m*の黒土層中に焼石が発見され、生活面とみて精査を進めた。2～3*cm*

の砂質土の下に、多くの焼土と木炭を含む層が現れた。西側で木炭の遺存が良好で、平行に10本程度並び、一部その下に太い材料が交差しているのが看取された。北西隅で編物と竹の形骸をとどめていた。

北側に屈折するロームの切り込みがあり、その下に一段が認められるほかは、壁の確認はできなかった。遺物収納後、床面の清掃をし、柱穴5個とピット2個を確認した。

上方西端のローム壁の屈曲は、住居址の一部らしく、灰と須恵器片の出土をみたが、地表から浅く、斜面のため大部分は消滅している。

第3地区（3A、3B、3C）

トレンチ掘りの段階で、3B・3Cを部分的に掘り込み、土層観察を試みた。

地表から2.50mで湧水する。この間、明確な包含層はなく、黒褐色砂質土が1.25m堆積し、更にその下に漆黒の土層が1.25m続き、この中に若干の土器片を含んでいた。表土下2.50mで黄色岩滓層となり、これが地盤となる。このレベルで水田面に達し、漆黒土は、当時の高橋川谷地の縁であったことがわかる。以上の点から遺構の追求をやめ、3A・3B・3Cは土置場に転用した。

第4地区

北側は崖、南は道路にはさまれた地点で、地主が焼石の存在を確認しているところである。表土下30cmでロームとなり、溝が断続して東西にのびているのを発見した。拡張しながら溝を追うと、5～6本と増加し、溝底からナイロンが出土し、耕作痕であると判断した。さきに知られていた焼石は、地表下30cmに認められたが、すでに動いており、炉またはカマドの形をなさない。土器片若干と数点の土師器を発見したが、遺構らしいものは、住居址の北壁とみるべきか、低いロームの切り込みが数段残存するのみで、まとまった姿にならない。表土が浅いうえ、ごぼう畑であるためロームに無数の筋を刻み、原形をとどめていない地点と判断し、土置場とするため放棄した。（鈴木　啓）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

1号住居址（図版4・12・16）

1A地点に、プランの約4分の1程度が残存する遺構である。北壁に二つのカマドが並び、左はわずかに煙道をもっている。両側に袖石3個を張りつけている。袖石も内部もよく焼けている。右側は

馬蹄形にロームを切ったもので、床と周辺に焼土が認められる。両者の南側1mに炉がある。その構造は、平石を置き、その両側に2個の平石を立て、更に支脚として短冊形の石2個を立てている。甕2点がセットされている。

この周辺は灰が堆積している。この炉に粘土を馬蹄形に配すればカマドとなるが、粘土の痕跡は全く認められない。ロームの上に暗褐色土の貼床が認められる。この住居の床面の4分の3は黒土を積んで整地したものであろうが、消滅している。甕・壺・杯・土製勾玉・鉄鏃が出土している。周辺に方形柱穴群があり、さらに北東隅と南側に住居址の一角とみられるものが残存しているが、東側の宅地で切り取られている。1号住居址は、1A地点最終の遺構である。カマド右側に3個のピットを伴っている。北壁の高さは30cmあるが、上段のローム面までの表土は浅く、ここに耕作痕とみられるはげしい凹凸があり、方形柱穴群の遺構の性格は不明である。東壁は2.20m南に下がって消え、西壁は2号住居址によって切られている。

2号住居址（図版5・13・16）

1B地点から一部1C地点にかかっている。北壁はロームを深く切り(70～80cm)、西壁は2mを残すのみで消滅している。東壁は南に行くにつれて低くなり、4mで消える。北壁中央右寄りにカマドがある。袖は明瞭でないが左に袖石らしいもの、右に甕を伏位に置いている。周辺は灰が厚く堆積している。煙道は径20cmあり、断面は方形に近い形で、ほぼ1m入ってL字形に1m立ち上がる。地下をくり抜く工法をとっている。この南側1.5mに焼土がある。カマド灰層中より金環1、刀子1が出土した。カマドの左90cmに煙道の立ち上がりの部分が残存しており、レベルは約20cm高い。1B地点では2号住居が最終生活面であるが、削除されて残存している煙道から判断すると、現北壁より1m手前に若干高い床をもった古い住居が存在したことが知られる。

1B南端に、約2.0×1.6m、深さ2.1mの大ピットがある（図版9・16)。西半分は浅く、東半分は深いが、この北東隅に、底より55cm埋まったレベルに壺2個が出土した。ピット内土層に堆積の経過が看取できる。

3号住居址（図版5・6・13・16）

北側3分の1程度が残存し、他は傾斜面の耕作で消されたものである。

北壁はほぼ完全に残り、中央西寄りにロームを削り出した椅子状のカマドをもっている。手前に接して80×45cmの長方形平石を置き、左袖に平石1個を補強している。カマドから約2m離れて焼土がある。西北コーナーに1.9×1.6m、深さ70cmのピットがある。この住居址の東側4分の1は、1B地点にまたがり、2号住居址によって壁高の2分の1を削除されている。住居外の北と西に柱穴群があり、カマドの右に残る2個の穴は、四角の穴を縦に半分に壁によって切られている。上層に古い住居址のあったことを知ることができる。3号住居址床面は土器片とローム混りの黄褐色土の貼り床が施

されている。床のローム面で浅い切り込みを北・西・東壁で認められるが、性格はわからない。カマドの右側から甑・椀・杯が出土し、１Ｂ地点に入りこむ住居北東隅床面から壺・杯と朱の小塊が出土している。

１Ｃ地点東西隅に、10数センチの浅い落ち込みがあり、３号住居址を下に切った新しい住居址の一部が残存している。この住居址は、１Ｂ地点、２Ｂ地点では消滅している。土器は墨書のあるものを含む平底内面黒色処理杯である。この一群の土器は、調査地区内では最も新しい時期のものである。３号住居址は、北東隅に小ピット２個を伴っている。北西隅の大ピット内の堆積は、ローム混り黄褐色土の単層であるところから、故意の埋立てと判断される。

４号住居址（図版７・14）

２Ａ地点にあり、黒土中に営まれており、周壁は把握できなかった。

地表から80*cm*でローム混りの茶褐色土層があり、土器片を包含しているが、これは上方からの流入であり、遺構はない。地表下1.20*m*で黒土層中に床面が認められ、朱彩の杯群が発見されている。北東隅に焼土が認められ、この生活面は東に延びることが明らかであるが、宅地によってすでに削除されている。

柱穴は全く検出できず、プランの規模は不明である。この生活面は、調査地区内では最も古い時期のものである。

５号住居址（図版８・14・16）

２Ｂ地点上段に発見された住居址である。

北壁は、ロームを70*cm*切り落したもので、２Ａまでのびており、西壁はコーナーの部分で1.5*m*残存し、傾斜して消えるのがわずかに確認できる。西壁の消える位置に土器群が出土している。これはカマドの右にあたり、甑２点を並べ杯４点を重ね、整頓された炊事用具のありかたを説明している。杯は大型のものを最上位におき、中に中型のもの２枚、最下位に小型のものを置いている。家族構成を示唆する資料として興味深い。注意すべきは甑と杯の間から臼玉が発見されたことであろう。西壁延長線に沿って北壁から2.5*m*離れてカマドがある。他のものがすべて北壁に設けられたのに対し、例外として西壁に設置する。

馬蹄を二つつないだ形に粘土で築成し、中央に袖甕を置き、右袖に平らな石を立てている。支脚２個を埋設している。内部はよく焼け、灰が厚く堆積している。左の部分は焼けは認められず、灰もなく使用の痕跡は認め得ない。この粘土壁上に割れた壺の下半を乗せている。カマドの左に壺・杯が発見された。

土器群のある壁の上西方1.20*m*に大ピット１個があり、下膨らみの袋状を呈している。内部土層は一層で、土砂の自然流入のあとは看取されない。このピットの上層畔中に、須恵器鼈１点があった。

ピットは5号住居址に伴うものではないとみられる。柱穴は住居外に一つ、内部に一つ検出されたのみで、西壁の切れる位置から南は黒土層中であるため、識別できなかった。なお、カマドの前1mのところに焼土があり、杯が1点灰層の中に半分入り込んでいた。また、カマドの南に発見された壺と杯は、別の時期のものが攪乱によって床面レベルから出土した可能性がある。

6号住居址（図版16）

2B地点下段に発見された生活面である。上・下段の遺構間の距離は約6.5m ある。上段の南端に40×25cmの平石を1個平らに置き、これに連鎖して同程度の石を約45°の傾斜面上に3個並べている。次は平地となり、ここに45×35cmの石囲みがあり、さらにその南に長い板石を架設している。石囲み内部は焼土で、この東外側は約10cmの灰の堆積がある。この石囲みの内に甕と甑が入れてあり、外に甕一つが置かれていた。

このカマドの構造を述べれば、焚口に天井石を架設し、火床の両側に石を立てて長方形に囲い、その先は黒土を掘って45°の角度で煙道がのび、この部分に3枚の石で蓋を覆い、煙出しの部分に雨よけと思われる蓋石を一枚平らに置いている。煙道蓋石の側に土留めと台を兼ねた側石を入れている。袖壁等の粘土は用いず、8世紀頃からみられる石組みの煙道とは異質のものである。

柱穴を3つ検出している。東の限界は黒土中にあって判明せず、西は7号住居址により消滅している。

7号住居址（図版11・15）

1C地点から約15°の傾斜で下がるローム面は、2C地点上半で1段下り、その下方で7号住居址の北壁となっている。この地点上半の西隅に、生活面の一部残存が見られ、焼土・灰・土師器・須恵器片が出土している。このレベルで1m下がって耕作土中に入り、消滅している。新しい遺構であることはもちろんである。

地表から1.20mで多くの木炭が出土し、5.5×6.5mの範囲内に一面に残存していた。ほぼ放射状をなし、丸材と角材の見分けが可能なものもある。太いもので径15cm、細いもので7cm、大部分は10cmの材料である。

注意しなければならないのは、西側部分の木炭のあり方で、角材と認め得る長さ1～2m前後の10本の材がほぼ平行に並び、これらと直交する径13cmの丸材が、下に組み合って出土していることである。北西隅から、竹材と編物の炭化したものが検出されている。

北壁に近い中央に、焼けた板石が3枚あり、周囲には焼土と灰が堆積し、炉かカマド跡とみられるが、石は動いており構造は不明である。土器は土師器杯・甑・椀が出土している。ほかにピット2、柱穴5が発見されたが、黒土層に営まれた住居址で、北壁以外の壁の有無は不明である。

第 4 地 区

炉跡とみられる焼土と焼石1が発見されているが、住居址は確認できない。出土品は、甕1、杯2のほか破片がある。（鈴木　啓）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

七斗蒔遺跡の出土品は、破片総数1,300点以上に及ぶ。遺構はきわめて複雑に切り合っており、遺物の帰属にも問題が多い。このため、本章では出土地点別に分け、各地点ごとに層位および遺構の関係が確実な遺物に重点をおいて解説を加える。

1A地点

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版17・27—1～4）　カマドより3個体が出土した。高さはいずれも30cm前後で、外面には刷毛目調整痕、内面及び口縁部には、なで調整痕を有する。木葉底のもの（3）もあるが、他は底面を篦整形して仕上げてある。口縁部と胴部の境には、調整の相違による段がみられる。床面よりこの甕を小形にしたようなもの（4）が出土している。

〔壺〕（図版17・27・28—5・6）　球形の胴部に直立する口縁を有するもの（5）、やや大形で外反する口縁を有するもの（6）が、共に床面より出土している。

〔椀〕（図版17・28—7～9）　平底の深い胴部に内湾する口縁を有するもの（7）、丸底で口縁内湾するもの（8）がみられ、前者は胴部と頸部の境に段がみられる。やや小形の、深めの杯ともいうべきもの（9）は、内面に粗い篦磨きを施している。床面上にあったのは（7）のみで、他は浮いて出土している。

〔杯〕（図版17・18・28—10～16）　丸底で、口縁部内湾するもの（10）、胴部下半に段を有し、丸底で内面黒色処理を施したもの（13～15）、丸底で内面黒色処理を施すが、胴部の段がないもの（16）、同種器形で内面に篦磨き調整も黒色処理も見られないもの（11）などがある。内外面黒色のものが1点見られるが（12）、外面に篦磨き調整が行われていない。12・16以外は床面より出土している。

〔その他〕（図版18・28—17）　口縁外反し、胴部を篦削り調整した甕（17）が、表土より出土している。

破片は、杯58点（うち内面黒色処理36点）、甕79点、椀・鉢各1点の計139点であった。

＜須　恵　器＞

杯蓋の破片が１点（図版28—18）、櫛波文のある甕の口縁が１点（図版37—128）、破片は甕の胴部らしい叩き目のある破片８点、轆轤痕のあるもの２点。杯破片１点がある。

＜その他の土器＞

縄文式土器破片が１点ある。金雲母をふくむ胎土で内面に段があり、外面に沈線と縄文原体圧痕文がある。中期縄文式土器である（図版25・37—132）。

１Ｂ地点

＜土　師　器＞

〔壺〕（図版18・29—20～23）　中央の大形ピットより２点が出土している。１点は高さ25.8cmで、球形の胴部に小さな平底と直立する短い口縁を付したもの(20)、他の１点は口縁部を欠失するが、やはり小平底で、底部周辺が摩滅し、座りが悪い（21)。３号住居址に伴うものは２点で、最大径が下方にある卵形の胴部に外反する短かい口縁部がつく（22・23)。

〔甕〕（図版18・29—24）　小形のもの１点の破片である（24)。上層出土で、遺構との関連は不明、外面に粗い刷毛目調整がある。

〔鉢〕（図版18・29—25）　小形の鉢で、甑の上部かもしれない。頸部に段がある。

〔杯〕（図版19・29—26・27）　胴部下半に段があり、内面黒色処理を施したもので、口縁は外反するもの（26）と、外反弱く肥厚したもの（27）がある。

〔高杯〕（図版29—28）　脚部付け根の小片であるが、杯部は内面黒色処理を施し、脚部は中空で三方に透し孔の痕跡が残っている。

〔その他〕　土師器の破片は、杯17点（内面黒色処理13点、内外面黒色処理１点)、高杯１点、鉢１点、甕21点の計40点である。

＜須　恵　器＞

〔甕〕（図版29—29)口縁部破片である。口唇部下方に浅い段があり、外反する。北側カマドより出土した。

〔壺〕（図版25・37—123）　１Ａ～１Ｂ間の畦より出土した短頸壺で轆轤整形をうけ、胎土も密であるが、焼成は明褐色で、土師質に近いものである。

１Ｃ地点

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版19・30—36・37）　大形で外面に刷毛目調整痕を有する破片（36）は茶色土層より出土、カマドより出土した小形のもの（37）は、丸底で球形の胴に外反するやや大きい口縁を有し、内面は黒色処理、高さ10.2cmで坩とでも称するべき形態である。

〔甑〕（図版19・30—35） 高さ25.5㎝、倒卵形の胴部に外反する口縁を有する。外面は平滑に篦磨き調整を施している。

〔杯〕（図版19・20・30—38～46） 大別して、轆轤痕を有するものと、有さないものに分けられる。カマド及び床面より出土したもの（38～41）は、丸底で、胴部中央付近に大きなくびれを施す。轆轤痕は認められない。内面に疎な篦磨き調整が見られる。カマドに伴うものと考えられる。また、1C地点東南すみの浅いピットより、轆轤痕を有する平底の杯が一括して出土している(42～46)。底部に回転篦削り調整、内面は篦磨き調整し、黒色処理を施す。判読不能の墨書銘を有するもの(43・44)、底面に、焼成後に尖ったもので「若」の文字を箚書したもの（42）がある。

〔その他〕 轆轤整形痕を有する壺の口縁部らしいものがある（図版20・30—47)。破片は、杯73点（内面黒色処理56点、内外面黒色処理3点)。壺3点、甕75点（木葉底破片8点)、甑（底部）1点の計152点であった。

＜須 恵 器＞

〔甕〕 破片5点がある、内外面に叩き目痕を有する。轆轤痕のある破片も1点ある。

＜そ の 他＞

1B～1C間の畦より、縄文式土器破片1点が出土している。内面に段があり、外面には細長い隆帯と、竹管文が施されている。胎土に金雲母片を含む中期縄文式土器である（図版25・37—131)。

2A地点

＜土 師 器＞

〔壺〕（図版20・31—50・51） 2点とも下半を欠失するが、球形の胴部に短く直立気味の口縁部を付したものである。

〔甑〕（図版20・31—52・53） 高さ15.6㎝と小形で、底部の孔も小さいもの(52)、及び底部のみ剝脱した破片(53)がある。胴部は球形で丸底を呈する。

〔鉢〕（図版31—54） 杯を大形化したごとき形態で、口縁は外反し丸底、内面黒色処理を行っている。

〔器台（？）〕（図版31—55） 表土より出土したもので、小破片であるが、内外面篦磨き処理を行い、杯部が小形であることから器台の杯部であると考えたものである。

〔杯〕（図版20・21・31—56～66） 丸底で、口縁部が内反するもの（56)、丸底扁平な胴部に、外反する短かい口縁を付し、内外面にまばらな篦磨き調整を施したもの（57～62)、同様の器形で厚手の平底を有するもの(63)、口縁部が直立し丸底で、内外面にまばらな篦磨き調整を施したもの(64)が一群として捉えられ、いずれも内面に放射状のまばらな篦磨きを有する。赤褐色の色調を有し、丹彩であった可能性もある。他の群は、口縁外反し、丸底で胴部中央付近に段を有する、内面黒色

処理を施したもの(65)、胴部の段の消失した内面黒色処理の丸底のもの(66)などがある。これらは明らかに型式差を有し、(57～63)→(64)→(56)→(65)→(66)といった変遷を示していると考えられるが、攪乱や切り合いのため、遺構及び層位による区分は不可能であった。底部に篦記号を有するものがある（56・58・64)。

〔その他〕 小形の壺1点がある。厚手で短い口縁がつけられ、胴部外面に篦記号がある（図版21・31—67)。破片は、杯が55点（内面黒色処理23点をふくむ)、甕27点、甑(底部)5点、椀・鉢・広口坩（？）各1点の計90点である。篦記号を有する甕破片（図版37—130）がある。

＜須　恵　器＞

甕の破片7点、瓶ではないかと思われる轆轤痕のある破片1点の計8点である。

＜そ　の　他＞

縄文式土器の破片1点がある。薄く縦縄文を施し、胎土は金雲母を含み厚手である(図版25—133)。

2B地点上段（5号住居址）

2B地点は、上段（北側）の西向きのカマドを中心とする5号住居址と、下段の北向きの石囲いのカマドに伴う6号住居址の2遺構に分けられる。5号住居址の遺物についてまず述べる。

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版22・32・33—68～75） 高さ33*cm*の大形の甕である。最大径が中央付近にあり、周辺が摩滅した小さな平底と外反する口縁部を有する(68)。外面に刷毛目調整痕が見られる。カマド付近より出土した。他の甕は、胴部下半に最大径を有するもので、頸部に段を有し、口縁は外反する(69～74)。頸部の段が薄く、単なる調整痕の違いにすぎないものや、最大径が中央付近にあるものなどの変化があり、大きさにも高さ30*cm*内外のもの、20*cm*内外のものと大小2種が見られるようである。底部は篦で丁寧に整形され、二次的な加熱によって表面が焼けているものが多い。

壺に近いもの(75)もあるが、破片のため、詳細は分らない。

〔甑〕（図版22・23・33・34—76～79） 甕形土器の底部に大きな孔を有するもの（76・78）と、バケツ状の、口縁部外反する胴部で、底部を全く有さないもの（77・79）の2種に分けられる。底部と口縁が大きくずれているもの(78)もある。

〔台付甕（？）〕（図版23・34—80） 上層出土であり、小片のため詳細は不明である。内面は粗く整形されており、脚部破片と考えられる。内外面に丹彩の痕跡が残っている。

〔杯〕（図版23・34—81～89） 手捏ねによって製作された小形の杯(81)が、床面より出土している。他には、丸底で口縁が大きく外反するもの(82)、胴部上半に段があり、口縁がいったん直立気味に上がってからわずかに外反し、内外面にまばらな篦磨き調整を有するもの(83)などがある。最も多いのは、胴部下半に浅い段を有し、口縁部は外反し、内面は黒色処理を施したものである(84・86)。

(88)はカマドの右より重なって出土しており、カマドに伴うものと考えられる。これらにも、段の高低、口縁部外反の程度などの個体差が認められる。なお、轆轤痕を有さず、しかも、須恵器蓋付杯の身部と同様の形態を有し、土師質焼成をうけた杯が1点出土している(89)。須恵器を模作したものと考えられる。篦記号は2点（81・84）見られる。いずれもX及び「个」などの抽象的なものである。

〔その他〕 破片の大半は上段・下段の区分を行っていないため、下段の項で一括して説明する。

＜須　恵　器＞（図版23・34—91・92）

床面より浮き上ったものであるが、甑(91)は、暗灰色の堅緻な焼成で、口縁部を欠失しているが、胴部は完存する。胴部中央に沈線が回り、その上に穿孔し、胴部上半から頸部にかけて4段にわたる櫛波文・櫛描列点文が施されている。杯(92)は破片より復元したもので、蓋をうける段を外部につくり出した古い形態を有するものである。

＜瓦　器（？）＞（図版23・34—90）

床面検証のためのトレンチ内より出土した小形の杯が1点のみである。外面は、なで整形をし、下方は篦削り整形、内面は篦磨き調整を施している。灰白色、硬質で、断面は白色である。燻べ焼きによって焼成された瓦器の一種と考えられる。

2 B地点下段（6号住居址）

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版24・35—94～97） 大形で高さ31㎝前後のもの2点(94・95)が石組の下より出土した。ともに最大径が中央付近にある長目の胴部に、丸底気味で安定のわるい小さな平底を付し、口縁部は外反する。口径は胴部最大径より小さめで、甕というより壺に近い形をしている。

他に、小形で口径の大きいもの（96・97）があり、やはりカマド石組付近から出土した。4点とも二次的な火熱をうけ、表面が変色し、煤の付着や剝脱が著しい。

〔壺〕（図版24・35—98） 破片である。胴部は球形に近いらしく、刷毛目調整痕を有する。口縁は朝顔形に開き、復元すればかなり大形になるらしい。

〔甑〕（図版24・35—99） 大形で、高さ25.4㎝、胴部最大径は上半にあり、底部には大きめの孔がある。胴部外面は複雑な刷毛目調整痕があり、一見文様のごとく見える部分もある。内面はまばらな篦磨き調整を乱雑に施してある。石組下より出土したものである。

〔小形壺〕（図版24・36—100・104） 100は製作の際の粘土の接ぎ目を残した粗雑な作りで、底部はきわめて厚い。口縁が外反する。

〔杯〕（図版36—101～103） カマドの石組中より、口縁が外反する丸底の体部に、まばらに篦磨き調整をした赤褐色の杯が2点（102・103）出土している。ほかに内外面黒色処理を施し、口縁が

内湾する小形の杯も出土しているが、遺構に伴うものかは不明である。

〔その他〕　2B地点の上下を通じて、破片は、杯57点（内面黒色処理35点）、高杯3点、鉢61点、甑（底部）3点、壺5点、甕85点（木葉底破片9点）の214点である。

＜須　恵　器＞

甕の破片12点、轆轤痕を有する破片1点の計13点が出土した。

2C地点（7号住居址）

南側の焼失した7号住居址を中心として出土した。その北側にもカマドらしいものがあるが、遺物の帰属は不明なものが多い。

＜土　師　器＞

〔壺〕（図版24・36—105～106）　破片のみであるが、復元口径16*cm*内外の2個体分がある。口縁は短かく、胴部は球形に近いものらしいが詳細は不明ある。

〔甑〕（図版24・36—107）　高さ14.6*cm*と小形で、丸味を帯びた胴部に外反する口縁を付し、底部は丸底風で小孔を有する。火災のためか火熱を受けて表面が変質している。

〔鉢〕（図版24・36—108～110）　口縁が外反し、外面に刷毛目調整痕を有するもの（108）、底部を欠失するが、口縁の直立する小形のもの(109)、平底で口縁外反するもの(110)と、変化が多いが、109・110は焼けており、住居址との関連も考えられる。

〔椀〕（図版24・25・36—111・112）　小形丸底の椀で、口縁が内湾し、内面は篦による掻目、又はまばらな篦磨き調整を施したものがある。

〔杯〕（図版25・36—113～117）　7号住居址床面よりは、口縁内湾し、内面にまばらな篦磨き調整を施したもの（113・114）が出土した。また胴部下方に段があり、口縁外湾、内面黒色処理を施した杯の小破片（115・116）も出土している。胴部下方に弱い段があり、篦磨き調整のみで黒色処理を施さない杯は、北側のカマドから出土した（117)。

〔その他〕　破片は、杯69点（内面黒色処理43点）、鉢12点、甑（底部）1点、甕136点の計218点である。甕の底部には、高台を有するもの、木葉底のものなどがある。

＜須　恵　器＞

〔甕〕（図版25・36—118）　口唇部にかえりを有する口縁部(118)、櫛波文を有する口縁部がある。

〔蓋〕（図版25・36—119・120）　小形の蓋で直径11*cm*、小さな鈕と、内面には身を受けるためのかえりが付けられている。灰白色で焼成はあまりよくない。

〔杯〕（図版36—121）　口縁部のみである。暗灰色で焼成はよく丸味をおびた口縁が外反している。

〔その他〕　甕の胴部破片25点があり、他に杯2点、瓶(？)10点の計37点がある。

第3地点

大半が破片である。須恵器甕破片（図版37—122）は、３Ｃ地点より出土した。櫛波文を有する口縁部の破片１点（図版37～129）もある。

第４地点

本地点の遺物も大半が小破片である。

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版25・37—124）　高30.7cm、最大径が下方にある胴部に、外反する口縁部を付している。底部は木葉底で、12個に及ぶ籾の圧痕が見られる。

〔杯〕（図版25・37—125）　丸底の杯に外反する口縁部を有するもので、内面に篦磨き調整を施し、黒色処理は行っていない。

第２節　金　属　器

七斗蒔遺跡出土の金属製品には、金環・鉄製刀子・鉄斧・鉄鏃がある。

〔金環〕（図版26・38—30）　直径1.8cmの円形を呈する青銅製渡金の耳飾である。１Ｂ地点住居址の煙道付近より出土している。

〔鉄製刀子〕（図版26・38—31）　１Ｂ地点出土で、錆化が著しく原形は不明であるが、現長12cmほどの刀子と考えられる。目釘穴らしいものがわずかに見られる。

〔鉄製平根鏃〕（図版38—32）　１Ｂ地点先端のみで、茎の部分の長さは不明である。現長3.1cm。

〔鉄製斧〕（図版26・38—49）　長さ6.4cm、刃先の幅4.0cmの袋穂の斧である。本例も錆化著しく詳細は不明である。１Ｃ地点出土。

第３節　石　製　品

砥石と石製玉がある。

〔砥石〕（図版26・38—33）　１Ｂ地点第２層出土品で、破片である。上下を欠失しているが、４面に使用痕が残されている。

〔臼玉〕（図版26・38—93）　２Ｂ地点土層より出土したもの。直径1.7cm、厚さ0.7cmの円形の滑石に穿孔したもので、石製模造品的なものか、装身具であるか判然としない。

第4節　土　製　品

〔土製曲玉〕（図版26・38—19）　1A地点出土。長さ4.7cmの手捏ねで、「コ」の字形を呈する。上部には貫孔もあけられている。

〔土製紡錘車〕（図版25・38—48）　1C地点出土、きわめて焼成堅緻で、断面は台形、直径4.6cm、高2.5cm、胎土に雲母を含み、表面は平滑で光沢もある。　（野崎　準）

第5章　考　　察

1 住居址

遺構は住居址が7軒発掘され、他に1号の東と南に各1軒、2号北壁に煙道の一部を残す1軒、3号カマド周辺に柱穴を残す1軒、同じく東南隅に平底墨書銘杯を残す1軒、7号の上層に1軒、計6軒の痕跡を確認している。

当遺跡のある日向山は、遺跡の上限から上方で傾斜角度30°、1A・1B・1C地点で15°、2A・2B・2Cで10°となっている。

軟質の砂質土のうえ長年桑畑に利用した後抜根し、その後は根菜類を中心とする野菜畑とされたため、生活面までの深さ0.7～1.2mと深いにもかかわらず、北壁周辺を除いて攪乱をうけ、大部分は削除されている。

遺構の時間的経過は次の通りである。1B地点の大型ピットは、出土した壺からみてこの遺跡で最も古く、これを伴ったと見られる住居址は全く姿を留めない。生活面で最初に営まれたのは、2Aの4号住居址で炉の段階であり、床はロームまで掘り込んでいない。

次は2B下段の6号住居址で、7号によって切られる。石囲カマドをもち、床面は黒土層中に作られる。ここから上段に上り、北壁はロームを切って5号住居が作られる。袖甕・袖石を用いた粘土貼り馬蹄形のカマドをもつ。これとほぼ同時に7号が営まれる。北壁のみロームを浅く切り落とし、黒土中に営まれたものである。1Cの3号と1Aの1号はほぼ同時に存在したもので、ロームを掘ってカマドの袖を作る方法も、大小の差はあるが、同一手法である。この両者を切って1Bの2号住居址が作られた。1歩上に登り、ロームを深く切り、L字形にトンネルを掘って煙道としている。この遺跡最終の生活面で明らかなものは、1Cを切って作られた、東南隅に一角を残す遺構である。

古いものは黒土層中にあり、新しいものはより深く、より上方に位置することを指向している。カマドは、炉→石囲カマド→馬蹄形カマド→短煙道付カマド→長煙道付カマドの変遷をたどる。カマドから1.5m前後離れて、必ず焼土・灰が存在することも注意したい。

また、10°～15°の南面傾斜地に営んだ住居は、北壁を1m切った場合、東と西の壁は、5m南に延びた場合、地上に出てしまうが、果たしてここに1mの南壁を築き得たか、柱穴の配置もまとまらないところから、四周壁をもつ竪穴住居の構造をとれるか疑問がある。

2 遺　　物

1Bの大型ピット内出土の壺（図版18・29—20・21)は、東北南部土師器編年の南小泉式のもので、住居址は1B地点上層にあったものであろう。2A地点に引田式の杯（図版20・21・31—56～64）が9点出土している。口縁が内湾するもの1点を含み、内外面に篦磨きのうえ丹彩を施している。55・56は攪乱による混入であろう。6号住居址カマド出土の甕（図版24・35—94・95）は、最大径が胴部中央にあって壺に近く、当遺跡出土甕の祖形といえる。甑は大形で、肩部に最大径をおいている。

上段の5号住居址出土の土器群をみると、甕は最大径が下半にあるもの（図版22・32—69）と中央にあるもの（図版22・32—68）があるが、これは壺の仲間かも知れない。甑は甕形とバケツ状のものに分かれ、甕と甑において、6号から5号への変化が看取される。杯は84・85・86・88（図版23、34参照）の4個体が重ねてカマドの右に置かれていた。6号住居址と5号住居址に6世紀後半から7世紀にかけての新旧の区分がうかがわれる。

7号住居址出土の土器は、鉢（図版24・36—108～110)・椀（図版24・36—111・112）を含み他と異なる様相をもつ。杯（図版25・36—113～117）は口縁内湾するものと外反するものが同居するが、116・117によって代表される栗囲式に比定することができる。

1B出土土器は、住居址としては1Cとともに3号住居に伴うものである。これらのものと1Aを杯において比較すると、図版17・28—10～16、19・29—26・27、19・20・30—38～46のうち、16は攪乱による混入であろうが、その他にも異質のものがみられる。しかし出土所見から、11と14は伏位で接して出土し、口縁内湾する10は甕と一緒に出土しており、同時に存在したことは明らかである。1号と3号は時間の差は大きくなく、栗囲式に含まれる。42～46は表杉ノ入式で、43の墨書銘の字体は不明である。1A出土の10、2B出土の89など須恵器の影響をうけた杯が、伴出している点も注目される。須恵器片は、すべての地点から出土している。しかし、土師器と明らかなセットで出土したものはない。2B上段ピットの覆土上（黒土）から出土した碗は、古い要素をもっている。2Cのかえりの付く蓋は7号住居に伴うもので、8世紀初頭に位置づけられよう。

その他の出土品として、1号住居址から出土した土製勾玉、2号から出土した金環・鉄鏃・刀子・鉄斧、3号から出土した紡錘車と朱の塊、5号から発見された臼玉がある。金環・臼玉等の装身具の

出土は、居住者階層を考える場合注意すべきであろう。

3　総　　括

以上述べたように、当遺跡は高橋川の谷地が迫るかなりの傾斜地に6世紀から9世紀にかけて、営まれた集落であるが、カマドの構造、家屋のプラン、出土品などに特殊性が認められるものである。土器の変遷を知るうえで、また7号住居の木炭から桁・梁などを想定でき、貴重な資料ということができる。なお、遺跡は断続して東西に存在するので、道路敷となったのは10分の1程度とみられる。

最後に、『和名抄』記載の白河郡17郷のうち、何郷にあたるかの問題であるが、白河郷を白河市街の中とみ、小田郷を小田川とみた場合、両者に3㎞でその中間にあたる萱根～久田野～本沼間の、高橋川流域4㎞に所在する10数か所の土師遺跡は、大村郷に比定するのが妥当のようである。8世紀初頭の瓦を出土する借宿廃寺跡・関和久遺跡は、高橋川が阿武隈川に合流した下方1㎞で、七斗蒔遺跡から5㎞の地点にあたり、借宿・関和久の文化を支えた経済的基盤をなす周辺17郷の中でも、主要な集落の一つに数えられる性格をもつ遺跡のようである。

なお「大村」と呼称されているのは現在の久保部落である。　　（鈴木　啓）

第15編　天神堂・筋向・高野遺跡

遺跡番号	13—171
所在地	安達郡大玉村大字玉の井天神堂・筋向・高野
時代・種類	古墳時代後期～奈良時代　集落址
調査期間	昭和46年11月25日～12月6日
担当者	小滝利意
調査員	菅野信朝　菊池寅次郎　大河内一二　三村信道
協力機関	大玉村教育委員会

目　　次

Ⅰ　天神堂遺跡

第1章　遺跡と環境…… 283
　第1節　位置と地形…… 283
　第2節　周辺の遺跡…… 283
第2章　調査経過…… 283
第3章　遺　　構…… 284
第4章　遺　　物…… 285
第5章　考　　察…… 285

Ⅱ　筋向・高野遺跡

第1章　遺跡と環境…… 286
　第1節　位置と地形…… 286
　第2節　周辺の遺跡…… 286
第2章　調査経過…… 286
第3章　遺　　構…… 287
　第1節　住居址…… 287
　第2節　土　　壙…… 288
　第3節　焼土塊…… 288
　第4節　溝状遺構…… 289
第4章　遺　　物…… 289
　1　筋向遺跡…… 290
　2　高野遺跡…… 290
第5章　考　　察…… 291

Ⅰ　天神堂遺跡

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

天神堂遺跡は、東北本線の本宮駅の西北方、約2,500mの所に位置している。国道4号線より岳温泉街道を入ったところにある住吉部落の南方800mの地点で、矢中部落より仲原部落に通じる農道の中間のところである。この附近一帯は大部分が水田であるが、わずかに道路の北に畑が一枚残されており、遺物が少量ではあるが散布しており、遺跡の一部と認められるところである。

本地域は、西方に安達太良山系が発達しており、山裾部には東方に向かって扇状地が形成されており、末端部からは非常に緩やかな傾斜をもって、東方に流れる阿武隈川まで水田化されている。

第2節　周辺の遺跡

安達太良山系の扇状地帯ならびに緩やかな傾斜地帯には、非常に多くの遺跡の分布が認められている。特に扇状地上には縄文時代の遺跡が存在しているが、本遺跡を含む傾斜地帯には弥生式土器と土師器を出土する遺跡が多く発見されている。また本遺跡の東北方700mの地点には前方後円墳である二子塚古墳が残されている。

第2章　調査経過

本地域付近一帯は土地改良工事が実施されており、その工事の際に遺物の出土が認められ、また水田の中に残されている畑からも遺物の散布が認められている。今回、この畑のところを東北縦貫自動車道が通ることになり発掘調査を実施した。

調査は、昭和46年11月25日、12月5日、6日の3日間にわたり、延べ作業員30人を動員して行っ

た。まず、対象地域としては、わずかに水田中に残されていた50×20mの広さの畑の部分とし、ここに幅2m、長さ49mのトレンチを4本平行に設定して発掘に入った（図版1）。

1号～3号までの各トレンチにおいては深さ15～20cmにして黄褐色粘土のローム層に達したが、遺物の出土は僅少であった。1号トレンチにおいて焼土跡が1か所と、1号と2号トレンチを拡張して接続したところから焼土の存在が認められ、土師器と須恵器が周辺部から出土した他は、遺構は検出されなかった。また、2号トレンチの北部においても焼土と灰・炭化物が検出されたが、遺構は認められなかった。4号トレンチにおいては南部において深さ70cmのところから坩形の土師器が横倒しになって出土した以外、特に遺構・遺物の発見はできなかった。

遺跡の実測と写真撮影の上、遺物を収納し調査を終了した。

第3章　遺　　構

今回の調査では、明確な遺構としてのプランは発見されなかった。検出されたのは焼土塊ならびに焼土であり、分布していたところは、1号トレンチに1か所、2号トレンチに1か所、両トレンチの接続部分に1か所の3か所が認められ、周辺部には多量の木炭灰や炭化物の存在が見られた。

1号トレンチにおいて認められた焼土塊は、直径20cm、厚さ15cm大のもので、ローム層直上に在ったが、移動した形跡のあるものであった。2号トレンチ中央部よりわずかに北寄りのところからは、直径60cmの円形の部分に焼土が5cmの厚さに堆積しており、周辺のローム層にも火をうけた跡が残り、附近一帯には非常に多量の木炭灰と炭化物の分布しているのが認められた。しかし、遺物の出土は認められず、遺構の存在も検出されなかった。この焼土の部分はローム層をわずかに10cm位だけ擂鉢状に凹ませたところで火をたいたものである。

1号と2号の両トレンチを接続した部分においては、幅3.5mにわたって深さ3cm位ローム層中に落ち込む部分があり、この西側のローム層上面に直径1mの円形の広さにわたって焼土の部分が存在していた。ここにおいても多量の木炭灰・炭化物の分布が認められ、杯形の土師器と須恵器の出土が確認された。しかし、落ち込みの形は不整形なものであり、遺構として掘られた形跡はなかった（図版2・3・4）。

なお、焼土の南側においては、ローム層中に長さ1m、幅20cm、深さ15cmの舟底形のくぼみが検出されたが不明である。

第4章　遺　　物

本遺跡から出土した遺物としては、1号と2号トレンチの接続部分から発見された土師器と須恵器の杯と、4号トレンチ南部の坩形の土師器である。

＜土　師　器＞

〔坩〕　口縁は頸部より直行するもので、胴部は強く張り出し、丸底に移行する球形を呈するものである。黄褐色を呈し、器面全体が篦により整形されている。焼成良好なものである（図版27・29—1）。

〔杯〕　口縁部より胴部にかけて漏斗状を呈して丸底に移行する形状をなすものである。外面は黄褐色または赤褐色を呈し、胴部には輪積みの痕跡が、わずかに線として残されている。内面は黒色処理されている（図版29—2）。

＜須　恵　器＞

〔杯〕　口縁部が、わずかに外反するもので、胴部は漏斗状に開き、丸底に移行する。内面は灰色で一部が黒色である。外面はほとんど黒色であるが、一部灰白色のところも認められる（図版29—5）。

第5章　考　　察

今回の発掘調査は、天神堂遺跡の中央部と見られるところに縦貫自動車道が建設されるために調査したもので、路線予定地内に限定されたことと、本地域が水田化されているために、わずかに残されていた畑の部分だけに終り、本遺跡の一部分を見ることができただけであった。まず、設定された4本のトレンチ内に検出されたものとしては、1号と2号の接続部と2号トレンチ内に発見された2か所の焚火の跡であって、他の遺構は発見されなかった。簡単にローム層面を掘りくぼめたところで焚火したもので、付近から土師器や須恵器の杯が出土しているだけで、焚火の性格を明確にはできない。しかし、集落の一部分であったものと考えられる。

また、出土した土師器は、いずれも、丸底の杯と坩であり、杯は内面黒色処理が施されていることより、土師器編年の第5型式に対比されるもので、7世紀頃のものと考えられる。

（小滝利意）

Ⅱ 筋向・高野遺跡

第1章 遺跡と環境

第1節 位置と地形

筋向・高野遺跡は、大玉村のほぼ中央部東寄りに位置しており、国道4号線の西方1,000mの地点である。国道より岳街道に入り、二子塚部落を過ぎてから西方の住吉部落との中間部の県道の両側一帯の地域が遺跡である。北方一帯の畑の所が高野遺跡、南方の水田地帯が筋向遺跡で、県道が中央部を東西に通っているところである（図版6・7）。

本地域は西方に発達する安達太良山麓の扇状地が平地に移行したところで、東方に向かってわずかに傾斜する地域であり、筋向地内は水田化されているが、高野地内は、桑畑と野菜畑となっている。標高245～250mの間に遺跡が所在し、非常に広い範囲にわたって遺物の散布が認められている大遺跡である。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡周辺には非常に多くの遺跡の分布が認められている。東北方500mの破橋部落の近くからは弥生時代中期の土器の出土があり、また東南方には前方後円墳の二子塚古墳があり、北方には久遠壇古墳を中心として、埴輪を出土する遺跡や、土師器・須恵器を多量に出土する遺跡が分布している。

第2章 調査経過

今回の調査は、筋向・高野地区の遺跡の中心と見られている所に東北縦貫自動車道が建設されるために実施したもので、対象地域は幅50mで、長さ400mの広さであったが、予備調査に基づき中心と見られる部分に限定した。調査は昭和46年11月26日より12月6日まで実施し、筋向地区では2×2mのグリッドを13か所掘り、拡張部分を含めて182㎡、高野地区では2m幅のトレンチを12本発掘し、

800㎡の広さに及んだ（図版８～14）。

この結果、筋向地区においてはU字形を呈する大形の溝と小形の溝の走っているものが発掘され、また楕円形のピットが発見され、前者の溝の内部からは多くの土師器・須恵器の破片が出土した。高野地区においては、竪穴住居址が２軒、土壙２基、焼土塊を伴った焚火跡が２か所発見され、これらの遺構の内部から土師器の甕・椀等の遺物が検出された。

第３章　遺　　構

第１節　住　　居　　址

本調査によって発見された竪穴住居址は、高野地区から出土した２軒だけであった。高野地区の２号トレンチ中央部より東寄りのところから発見された住居址は、表土下50㎝の深さのローム層中に掘られたものであり、11号トレンチ南部出土の住居址は、表土下40㎝の深さのローム層中に造られたものであった。

１号住居址（図版25）

２号トレンチより発見されたもので、長方形のプランを呈し、3.90×2.85ｍの大きさを有していた。東・南・北の３方の壁は明確に残り、ローム層中に７㎝の深さをもって掘られたものであったが、西側の壁は不明確であった。周溝はなく、柱穴は確認できなかった。床面の北側中央より東部にわたっては焼土の塊があり、また中央部においても同じく１×0.45ｍの焼土塊が存在し、多量の灰・炭化物の分布が認められたが、その他の施設等は存在しなかった。なお、本住居址内部においては土師器の小破片がわずかに発見されただけであった。

２号住居址（図版15～19、25）

11号トレンチの南部を拡張した結果発見されたものである。方形のプランを有し、3.55×3.60ｍの大きさである。ローム層中に10㎝掘り込む壁を有しているが、周溝は認められなかった。北側にはカマドを有しており、この周辺には焼土の山とともに、多量の木炭灰・炭化物が分布していた。また、住居址内の東南角には、80×70㎝の円形で、深さ60㎝のピットの存在が確認され、底部からは、ピット東側出土の椀の一部の破片が発見された。なお本住居址出土の遺物としては、カマド中央部から甕形の土師器と右手寄りから同じく甕が横倒しの状態で発見された。

また、中央北寄りのところからは、甕の胴部より底部にかけての破損したものが出土している。こ

の他にはピット東側床面上において椀が３個、１列に並んでいただけであった。

第２節　土　　壙

高野地区の１号トレンチ東部、１号竪穴住居址南側に１基、表上下30cmの深さのローム層中に掘り込まれたものと、２号トレンチ東部で表土下25cmのローム層中に掘り込まれた土壙が１基とが発見された。

１号土壙（図版20、21、26）

１号トレンチの東部で、１号住居址の南側から発見されたものである。長楕円形のプランを有し、長さ1.50m、幅60cm、深さ30cmの大きさでローム層中に掘り込まれた土壙である。形状は舟底形を呈している。長軸はほぼ南北を指していた。この土壙上部には砂が薄く敷きつめられ、内部には黒土が充満していた。

なお、この黒土の下部には非常に多量の灰や木炭が包含されており、南と北側の部分においては多くの焼土が混入しているのが確認された。また、土壙の南西端上辺と西側中央において、１個体ずつの盌形の土師器と、底の部分から土師器の破片が出土した。

２号土壙（図版22、23、26）

２号トレンチの東部から発見されたものである。長楕円形のプランを有し、長さ２m、幅65cm、深さ25cmの舟底形を呈している。土壙上端においては１号土壙と同じく砂が薄く敷きつめられており、内部には黒土が主体をなし、灰・木炭が多量に包含されていた。また底の部分には多くの焼土が混入しているのが認められた。

出土遺物としては、東北端のところから完形の盌形の土師器１個体と、土壙内部から小破片の土師器が包含されているのが発見されただけである。

第３節　焼　　土　　塊

高野地区の３号・４号トレンチ内西部から焼土塊が発見された。ともに直径１m、厚さ25cmで円形に塊状を呈しているもので、ローム層中に深さ20cm位くぼんだところで焚火したために残されたもので、周辺には多量の灰や炭化物の分布が認められたが、他には遺構が発見されなかったので、住居付近で焚火した跡と考えられるものである。周辺部からの遺物の出土も僅少であった（図版24）。

第4節　溝状遺構

筋向地区から大小各種の溝状遺構が発見された。いずれも表土下17～30cmの深さに存在するローム層面に掘られた溝である。（図版13）

9・11・12グリッドの溝

U字形の大形の溝である。上幅2m、深さ80cmのもので、溝中の底の部分には砂が5cmの厚さに堆積し、5cm大の礫が混入していた。遺物は全部底の部分に包含されており、溝中を上流から流れた形跡を呈していた。この溝は西より東方に向かって流れるように掘られたもので、西方の12グリッドにおいては溝が二またに分かれており、溝幅は70cm、深さ20cmと小形化している。また、溝中には青色粘土が堆積しているとともに周辺部も青色粘土が基盤をなしており、近くに池か沼の存在が考えられるような土層であった。この部分においては遺物の包含は僅少であった。

小　溝　A

1・2グリッドの中間において、西方より東方に走る溝が発見された。幅20～30cm、深さ15cmの小形の溝である。溝は大きく蛇行して流れるように掘られており、溝中からは多くの土師器・須恵器片の出土が認められた。

小　溝　B

2グリッドの西方から6・7グリッドへと走っているもので、2グリッドから6グリッドまでは直線的に掘られたものが、6グリッドにおいて鍵形に曲り幅広くなっている。幅は45～95cmで、U字形の溝で、底には砂が多く堆積しており、多量の土師器の破片の包含が認められた。

なお、2グリッドの西方拡張部では溝幅が大きく広がり、内部には青色粘土が多く存在し、沼の状態を考えることができるような状態であった。

以上の外に、8グリッドにおいては楕円形のプランを有する3×2.4mの大きさで、深さ17cmの土壙が発見された。しかし、内部からは少量の土師器の小破片が検出されただけで性格は不明であった。

第4章　遺　　物

筋向・高野の両地区から出土した遺物は、土師器の杯を主体として、少量の盌ならびに甕と、須恵器の杯・蓋に加えて大形の甕の破片が発見された。

1 筋向遺跡

土師器

〔壺〕 図版29—23のものである。口縁部の破片だけで、全形は不明である。頸部より大きく外反している。厚手に造られ、内外共に赤褐色を呈している。

〔甕〕 図版29—10に図示したものである。口縁部は「く」の字形をなして外反する。胴部の張り出しは少ない。内外ともに黒色を呈している。

〔杯〕 図版29—6～9、11～17、19～22、24～27に示したものである。14・24・25のごとく丸底のものと平底の2通りが認められる。しかし、いずれも内面は、黒色に処理されているのが特徴である。

丸底のものにも14・24に見られるように頸部に稜の認められないのと、25のごとく稜のあるものとがある。14は、口唇部においてわずかに外反し、漏斗形をなして丸底に移行するもので、外面は黄白色を呈するとともに篦による整形痕の認められるものである。24も同じ形状のものである。外面は灰白色を呈している。25は外面の口縁部と胴部との接続部に稜の認められるもので、外面は褐色、篦による整形痕がある。

平底のものは小さな底から漏斗形を呈して大きく外開きするもので、口唇部のわずかに外反するもの（6・7）と、11～13のごとく直行するもので、底部より直線的に口唇部に移行するもの等の各種が認められる。また、9の底部には糸切痕が認められるが、その他は篦切りのものである。いずれも褐色・黄白色・灰白色を呈している。

須恵器

図版29—18、30—1～3に示したものである。前者は杯の破片である。漏斗形に大きく開く形状のものである。後者は蓋の破片である。いずれも小破片のため全形は不明である。

2 高野遺跡

土師器

図版30—7～12に示したものは、いずれも2号住居址の床面上より出土したものである。

〔壺〕 図版30—12に示したものである。胴中央部から底部までの破片であるが、胴の張り出しなどから壺形のものと考えた。非常に厚手なもので、内外ともに黒褐色を呈している。

〔甕〕 図版30—10のものである。口縁部は「く」の字形をなして外反するもので、胴部の張り出しは弱く、長胴で小さな底部に移行している。内外ともに黄褐色を呈している。

〔浅鉢〕 図版30—7・9・11である。7・9は口縁部が「く」の字形をなして外反し、頸部にわずかながら張り出しが認められるもので、小さな底に移るものである。7は全面に刷毛目の跡が残っている。底部には木葉文が施され、内外ともに茶褐色または黒褐色を呈しているものである。9は内外ともに黒褐色をなしている。11は、前者の口縁部とは異なり底部より漏斗状に口縁部に向かって大きく開くものであり、内外ともに黄褐色を呈している。

〔杯〕 図版30—4～6・8に示したものである。口縁部と胴部との接続部である頸部の内側に稜線を有し、外面には段をなしているのが特徴的である。いずれも内面は黒色処理されている。4は口縁部に刷毛目の痕があり、胴より下には整形が乱雑になっている。外面が黒色または黒褐色を呈している。5は口縁部にわずかに刷毛目が施されており、外面は篦整形である。茶褐色、一部黒色である。6は前者の4・5ほど外反する口縁部ではないが、頸部には同じく段を有するものである。口縁部外面には刷毛目が認められ、胴部は篦による整形痕が著しい。また内面においても篦削りによる整形痕の認められるものである。8は4～6のものに比べて、わずかに浅い形状であるが、口縁部は、「く」の字形をなして外反するもので、頸部外面に段を有するとともに、内面においても稜線を呈しているものである。黄褐色をなしている。

第5章　考　　察

今回の筋向・高野遺跡の発掘により検出された遺構としては、筋向地区においては、清水より流れ出る水の排水溝としての小形の溝と、同じくU字状に掘られた大形の溝状遺構である。ともにこれらの大小の溝の施されている上部には沼地の存在していたことが付近の農業構造改善事業の工事の時に溝の断面に現われていたことからも推察できる。

しかも、これらの大小の溝の中には多量の土師器や須恵器の破片が包含されていたことである。特に小形の溝中には土師器の杯の完形のものが多く認められ、大形の溝中のものは、いずれも底の部分に認められ、ともに小破片にこわされたもので、捨てられたものが流れた状態であった。

このことから小形の溝の上流において、当時の人々が清水より涌きでる水を利用して生活していたことがうかがわれる。

なお、県道を隔てた高野地区からは竪穴住居址ならびに土壙が発見されたことから考えると、筋向地区は当時の集落の地域にある清水を利用して生活していた人々の捨てた器物や排水のための設備の状況を推察することができる資料である。

高野地区からは、ローム層中の掘り込みが非常に浅いために破壊された住居址1軒と、ほぼ完形の竪穴住居址が1軒が検出された。前者のことからは徐々に平地住居址に移行する状態が見られる。また、後者からは、竪穴住居址のカマドの附近に器物の遺物が多く、貯蔵穴の検出も見逃すことができない。この時代の住居址の状態を明らかにする資料であろう。

なお、土壙が住居址の近くから発見されている。ともに、この土壙の中には1～2点の土師器の杯を包含していることに加えて、内部から多量の炭化物ならびに木炭灰が出土し、焼土が検出されていることである。1号・2号いずれも長い舟底形である。今のところ、この土壙の性格については不明である。今後の資料の増加により考察を加えるべきであろう。

出土した遺物としては、高野地区のものは、丸底で内面黒色処理されていることから、第3型式に比定される。筋向地区の杯は、平底にして、黒色処理されているので第6型式に比定される。

僅少の資料であるが、6世紀の住居の形態と土壙の存在と、8～9世紀頃の溝状遺構の状態を知ることができる。

（小滝利意）

第16編　下　原　遺　跡

遺跡番号	30—382
所在地	西白河郡大信村下新城字下原
時代・種類	奈良時代・平安時代、集落址
調査期間	昭和45年4月16日～4月25日　（A地点）
	昭和47年5月23日～6月5日　（B地点）
担当者	鈴木　啓
調査員	藤田定興　村川友彦　古川猛　（A地点）
	横山英介　長尾修　熊田文雄　（B地点）
協力機関	大信村教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 295
　第1節　位置と地形…… 295
　第2節　周辺の遺跡…… 295

第2章　調査経過…… 296
　第1節　A　地　点…… 296
　第2節　B　地　点…… 297

第3章　遺　　構…… 298
　第1節　住居址…… 298
　第2節　ピット及び平地掘立柱群…… 300

第4章　遺　　物…… 301
　第1節　A地点出土遺物…… 301
　第2節　B地点出土遺物…… 302

第5章　考　　察…… 306
　第1節　A　地　点…… 306
　第2節　B　地　点…… 307

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

西白河地方は、奥羽脊梁山脈中の那須山の東北麓に含まれる。このあたりでの最高峯大白森山（1,656m）から東方へ張り出す丘陵は、隈戸川及びその支流によって開析され、西から東に平行してのびる数条の丘陵となっている。隈戸川南岸は、幅約1kmで、東西に長く沖積平地を形成し、水田となっている。国道4号線に沿って、丘陵突端をつなぐように小丘陵がのびている。この小丘陵の南端は泉崎村の観音山で、北端は隈戸川によって断たれ、延長 1,000mに達している。この小丘陵東側は隈戸川支流により浸食され、崖を形成している。西側は斜面で畑に利用され、水田に連なっている。上面は南北に緩い起伏はあるもののほぼ平坦面で、かつて山林だったものを戦中・戦後に開墾した。遺跡はほぼ中央部に位置し、北をA地点、南をB地点と呼ぶ。

第2節　周辺の遺跡

下原遺跡を中心に、ほぼ半径2km以内に所在する同時代の遺跡は第1表のとおりである。

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡番号	名称	所在地	種類	立地	遺物
1	30—383	下原横穴群	大信村下新城字下原	横穴	崖・山林	
2	30—397	観音山横穴群	泉崎村踏瀬字観音山	横穴	山林	須恵器
3	30—398	長峰遺跡	〃　字長峯	須恵	畑・水田	須恵器
4	30—406	踏瀬大山東古墳	〃　字大山	土師	畑	土師器
5	30—405	踏瀬大山遺跡	〃　〃	土師	畑	土師器
6	30—441	沼和久横穴群	矢吹町明神字沼和久	横穴	丘陵	
7	30—388	大林遺跡	〃　矢吹字大林	土師	畑	土師器
8	30—367	町屋　〃	大信村町屋字町畑	土師	畑	土師器
9	30—368	上新城　〃	〃　上新城字櫃の原	土師	畑	土師器

No.	遺跡番号	名　　称	所　在　地	種　類	立　地	遺　物
10	30—370	金谷土遺跡	大信村中新城字金谷土	土　師	畑	土師器
11	30—381	三峰森　〃	矢吹町三峰森	土　師	畑	土師器
12	30—378	堰ノ上　〃	〃　矢吹字堰ノ上	土　師	畑	土師器
13	30—401	井戸尻　〃	泉崎村踏瀬字井戸尻	土師・須恵	畑	土師器 須恵器
14	30—377	狐　石　〃	矢吹町矢吹字狐石	土　師	畑	土師器
15	30—376	平　山　〃	〃　大和久字平山	土　師	畑	土師器

No.1は当遺跡に接して東側崖にあるが、現在は崖崩れで埋没している。No.2は東北縦貫道で発掘調査され、南面して15基、北面して7基の計22基の横穴が発見された。No.11～15はいずれも発掘調査され、竪穴住居址が発見され、集落址であることがわかる。

県南地方には、特に土師器を出土する遺跡が多く、丘陵縁、台地上の南面する地点には、必ずといってよいほど散布をみることができる。付近に横穴が3か所あるのも注意を要する。　（鈴木　啓）

第2章　調　査　経　過

第1節　A　地　点

約1,000mの小丘陵中、階段状に削除した水田部分、北斜面、凹地等を除く、散布の認められる部分にトレンチを設定した（図版1）。散布の明瞭なSTA196杭を中心に調査を展開した。

A～Gトレンチのうち C・Dから径30cm、深さ70cmのピット2個が発見された。この部分の全面発掘を進める過程でピットの数は増加する。Bトレンチでは1.5×3.5mの長楕円形の落ち込みが発見された。A～Bトレンチにかけて土色の変化が認められ、焼土もあるところから、表土を除去し一辺約4mの方形プランを確認した（1号住居址）。北壁中央に白色粘土によって築成したカマドがあり、右袖の近くの床から約25cm浮いて刀子が出土した。刀子は計3本出ているが、同じく浮いたものと床面出土のものがある。柱穴4個は、大きな掘りかたがある。柱の部分は30×30cm、深さ70cmである。

次いでIトレンチ中央北寄りに、表土から深さ70cmで木炭を含む黒土の落ち込みを発見した（2号住居址）。黒土は、ロームを掘り込んだ部分にのみみられ、覆土であることが明瞭である。5.5×5.5

mで、北壁中央より若干西寄りにカマドがある。カマドの左袖は割り石、右は甕を伏せて補強している。その右に甕1、平石3個があり、更に浅い小ピット中に杯3個体が入っている。西南隅に甕・甑より成る土器群がある。プラン中央を除く周辺に木炭が放射状に出土し、火災による放棄であることを示している。遺物収納後床面清掃により柱穴4個を確認した。床は10～15cmの貼り床を施している。

Bトレンチを中心に表土下のローム面に発見された柱穴群を追うと、東西直線上に5個が並び、これ以上は延びないのでこれを桁と予想し、東側梁を追った結果、予想した位置にほぼ直線上に6個を検出した。桁を折り返した地点にも5個が存在することを確かめた。西側梁は3個のみで、他は位置がずれたり浅かったりして柱穴にはならない。線上にそろった15個の柱穴群は、径30～35cm、深さ35～70cmのものである。

長楕円形のピットは、砂質黒土とローム混入褐色土の互層で、北西隅から階段状に掘り込まれている。出土遺物はない。

第2節　B　地　点

B地点は、A地点から約200m南に隔った地点で、路線上ではなく、インターチェンジの部分にあたる。

遺跡の西半は予備調査のトレンチを活用してトレンチ調査とし、東半はグリッド調査とする。トレンチは南北に4本、グリッドは30×30m、計100個とした（図版13、15）。A～Dトレンチの中央南寄りの表土下ローム面に、焼土3か所を発見した。これらはカマドであることを確認し、1～3号住居址とする。1号は焼土木炭が多い。A－1・B－1グリッドに黒色土の落ち込みが見られる。それぞれ住居址であることを確認し4号・5号住居址とする。I－6にも黒色土の落ち込みが認められ6号住居址とする。Cトレンチ北側に、2基の切り合うピットを発見し、7号ピットと命名する（図版14）。

2号住居址は床面に焼土・木炭があり、家屋構造材の木材とみられるが、土器は全くない。周溝をもっている。カマドは半地下式で天井部は白色粘土によって築成されている。袖は内側までのびていない。1号住居址も同様に半地下式のカマドをもち、天井部と袖は白色粘土で築成している。カマド周辺から甕の破片が出土している。周溝があり、柱穴4個が検出された。6号住居址床面より刀子出土。5号住居址は一辺7mを越える大型であるが、壁高は低い。床面より鉄鏃2点出土。

7号ピットは大小の内膨らみの浅い椀状のものが切り合ったもので、小さい方がレベルが上で古く、大きい方が下で新しい。遺物は後者のみから出土している。須恵壺・土師杯・鉄鏃等がある。4号住居址は覆土を4層に分け、土器片はすべて位置・レベルを記録のうえ収納した。砥石・鉄鏃が出

土している。遺物収納後、床面・壁面の清掃を行った結果、四周壁面に、側柱を多数発見した。対向壁同志が対象的に位置している。Aトレンチ北部より縄文土器片が3点出土した。早期末のものである。

（鈴木　啓）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

A地点1号住居址（図版5・6）

南北壁4.20m、東西壁3.90m、16.38㎡の長方形で、北壁にカマドがある。柱穴は4個で深さは43～70cmである。北西隅に径70cm、深さ20cmのピットがある。南壁下中央には径40cm、深さ17cmの柱穴状ピットがある。壁高は40～50cmで、周壁下に幅10cm、深さ3～12cmの周溝がある。カマドは袖幅1.20m、煙道を含めた全長は1.95mである。半地下式で、ローム面より上は白色粘土を使用している。両袖も同様である。東壁中央より40cm内側、床より25cm浮いた位置と、北東隅床上、カマド右側から刀子3点が出土した。他に内外面黒色処理の杯破片1点、須恵甕の口縁部破片1点が発見されたのみである。

A地点2号住居址（図版3・4・6）

6.0×5.2m隅丸方形、31㎡の住居址で、西壁の南西角から北に2m、幅40cmの張り出し部をもつ。ゆるい斜面を掘り込んでいるため、北壁高30cm、南壁高15cmと差がある。覆土は、表土下から順に黒褐色土・黒色土で木炭出土面に達し、焼土・木炭が広がる。床にはロームを10～15cm貼っている。床面中心部約20㎡は焼土が多く、木炭はない。木炭は放射状を呈し壁際30cm周辺を除いて散在する。太さ10cmの角材が識別できる。柱穴4個が確認された。

カマドは北壁中央より西に70cm寄った所で、壁より40cm外側に出した形で構築している。短い煙道をもち、袖石・袖甕をもっている。カマドとピット間の土器はカマドを中心に出土し、杯5、甕4、甑2個体がある。杯はカマドの右側ピット内に2個、東にわずか離れて1個、袖甕に接して立ててある甕の蓋に使用されているもの1個と、南西柱穴の側に斜めにつきさすように出土した1個で、これは炊事場外である。甑は西北角に口縁部を中央に向けて倒伏している。覆土中に須恵高台付杯が1個発見された。柱穴と思われるものは5個検出された。生活状態のまま焼失したあと攪乱を受けていない遺構といえよう。

B地点1号住居址（図版16・23）

5.60×5.20m、39.12m²の住居址で、北西壁に1.70mの煙道をもつカマドがある。壁内に、住居中央に向かって開く0.5mの袖がつく。長方形プランの長辺中央に、半地下式に掘り、袖と天井は白色粘土の補てんによる築成である。煙道はトンネル状で良好に遺存している。

周壁下に幅20cm前後の周溝があり、小穴が連続している。対角線上に4個の柱穴がある。遺物は、カマド周辺に5個体分の甕、その他の破片があった。

B地点2号住居址（図版17・23）

4.90×5.00m、24.5m²の住居址で、北西壁に2.7mの煙道をもつ。壁内側に付くべき袖は作らず、そのかわり火床は住居床面と平らに壁の外に出し、煙道もそれだけ先に出し、段をもって登っていく。1号のカマドに比し、火床を壁の線の内側において袖で囲うか、火床を壁の線の先に出して袖を省略するかの差がある。

やや長方形プランの短辺に半地下式にカマドを掘り、天井部は白色粘土を用いて覆っている。幅15cm前後の周溝があるが、カマドの右側の部分にはない。柱穴は東南壁側に2個検出されたが、あとは判別できなかった。床面の木炭は、床直上に10cmの厚さをもち、その上に焼土がのっている。遺物はない。

B地点3号住居址（図版18・24）

4.40×3.00mで、13.20m²の小さな住居址である。やや胴張りのある隅丸長方形で、長辺である北西壁中央に2.10mの煙道がつく。袖の張り出しはわずかで、火床は壁の線上においている。1号住居址と2号住居址の中間の形をとる。

煙道は、前二者同様半地下式で、白色粘土を用いて天井部を築成している。幅20cmの周溝があるがカマドの右袖下で欠けるのは2号と同様である。柱穴も遺物も存在していない。

B地点4号住居址（図版19・24）

5.80×6.40m、32.12m²の長方形プランで、短辺にあたる北西壁中央にカマドがある。壁内側に、粘土による袖があるが、煙道は耕作によって破壊され、痕跡のみである。扁平な石を用いた組石に粘土を貼った煙道で、痕跡から1.8mと推定される。ロームの掘り込みが浅いため、半地下式に作れずロームの面上に傾斜をつけて先端まで上る構造の煙道を、石組を芯にして粘土で築成したものであり1～3号住居址のものと異なる姿をもっている。

柱穴は、径70cm前後の掘りかたと、径25cm前後の柱穴と二重になっている。深さは80cmである。周壁に半分くい込んだ形で、計17個の柱穴状ピット（径25cm前後、深さ40～70cm）が検出された。対向壁面にも柱穴が対象的に存在し、明瞭に側柱の存在を示している。

B地点5号住居址（図版20・25）

7.10×7.10m、50.41m²の方形プランで、北西壁中央にカマドをもつ。壁内側に、住居中央に向か

って開く袖がある。煙道は破壊されているが、痕跡からみて、扁平な石を平行にロームに突き刺し連ねて芯とし、粘土を貼ったもので4号住居址と同一の手法になる。

幅20cmの周溝をもつが、カマド右側で消えている点は、2・3号住居址と同様である。

柱穴は、掘りかた60×80cm、柱径20cm、深さ72～80cmである。いずれも柱穴の外側に、ローム土の盛り土が、高さ15cm、広がり80×90cmで存在し、柱穴の掘り上げ土であることを物語っている。この盛り土のレベルは、貼り床面に等しい。カマドの右にピットがあり、内面黒色処理高杯1点が発見された。

B地点6号住居址（図版21・25）

3.30×3.50m、11.55m²の方形プランで、北西壁の右端にカマドをもつ。半地下式で上部は粘土を貼っている。両袖をもち、1.50mの煙道がつく。周溝・柱穴はなく、東南中央壁下に小ピットがある。3号住居址の右3分の1をカットした姿を示し不整形である。木炭・土師器・須恵器片が若干出土した。

第2節　ピット及び平地掘立柱群

B地点7号ピット（図版22・26）

径2.40mで、周壁をえぐって内膨らみにした浅い円形ピットを、2.70×2.50mの同様のピットが切って、8字形を呈している。土壙が2基近くにある。大きく深い方が新しく、こちらに土師・須恵・紡錘車・鉄鏃が床から浮いて出土した。壁をえぐった施工にこの遺構の性格があるとすれば、この周壁は藁などを詰め、床には敷き、防湿と防寒を目的とした食糧貯蔵庫とみることはできないだろうか。外側柱穴2個で北西に下がる片流れの屋根を架し、東南に開口部を設けた冬期用の施設とみることはどうであろうか。

A地点平地掘立柱群（図版2・7）

柱間は、桁行2.4：2：2.4m、梁間2.1：1.7：1.2：1.8：2.1mである。南と北の桁は正確に対応するが、東と西は対応しない。つまり、西側では3個しか柱穴がなく、そのかわり内側に2個平行して存在する。桁は表裏とも完全な左右対象であり、梁も東面は中央1.2mを中心に両側は対象である。全体は、8.8×8.8mだから、尺を用いているかも知れない。

柱穴は、径30cm、深さ40cmと画一的である。柱列は、東の梁の並びに若干出入りがあるほかは、直線上にある。

この柱穴群の南西隅に所在するピットは、この建物と平行し、1号住居址にも伴うべき位置である。長径3.45m、幅1.10m、深さ1.10mである。東と西の壁は垂直に近く、南と北はゆるい。北西から内

部に出入り用とみられる階段状切り込みがある。出土遺物はなく、時期の断定はできない。

（鈴木　啓）

第4章　遺　　物

第1節　A地点出土遺物

1号住居址（図版8・10・12—1～5）

土師器破片114点、須恵器破片11点が出土しているが、いずれも小片で、全形を知り得るものはない。

〔土師器杯〕　1は内外面黒色処理を施した小形の丸底杯で、浅く、一見皿のごとき形態をしている。

〔須恵器甕〕　2は口縁部小片で、復元口径25.0cmほど、口唇部にひねり返しがあり、その下に隆帯を有する。

〔鉄製刀子〕　3～5は錆化著しく、詳細は不明だが、幅がやや狭小のため、鉄鏃（尖根鏃）であった可能性もある。

〔その他〕　破片の内、土師器杯30点中24点までは内面黒色処理、1点は内外面黒色処理を施している。いずれも厚手、丸底で轆轤痕はない。甕は外面に刷毛目調整痕を有するものである。

須恵器は叩き目を有する甕の破片である。

2号住居址（図版8・9・10・11—6～21）

＜土　師　器＞

〔甕〕（6～11）　カマドの周辺から集中して出土しており、完形品に近いものが多い。高さ29cm内外で、外面は刷毛目調整、内面は掻き目またはなで調整で仕上げ、最大径が下方にある胴部に、外反する口縁部を付したものである。底部は木葉底のものがある。口縁部と胴部の境は、調整方法の違いからくる段を有するものが多い。砂混りの粘土で、焼成堅緻。焼痕を有する。8はカマドの袖にはめこまれていた。

〔甑〕（12・13）　全高20cm前後で、胴部最大径が上半にあり、口縁の外反するもの（12）、全高25cmで、胴部最大径は下半にあり、口縁部と胴部の境に段を有するもの（13）がある。13は内面に粘土紐の接ぎ目が残されている。ともに明褐色で、甕のような焼痕はないが、焼成はやや悪い。底

部の孔は大きい。

〔杯〕（14～19）　厚手で丸底を呈し、口縁が外反するものが多い。内面は篦磨き処理により平滑に仕上げられ、内面黒色処理を施したもの（14～16・19）、内外面黒色処理を施したもの（17・18）がある。胴部上半に段の見られるもの（19）、口縁が直立気味のもの（14）、も出土している。底面に篦記号「×」のあるもの2点（14・19）がある。

〔その他〕　破片であるが、外面に刷毛目調整痕を有する鉢が、北側壁直下より出土している（20）。小破片は21点で大半は甕の破片である。

＜須　恵　器＞（21）

〔杯〕21は口径13.8cm内外の浅い杯に高さ0.7cmの外反する高台を付けたもので、高台の高さが不足し丸底の杯底部がはみ出している。

他に甕の破片がある。

住居址外の出土品

縄文土器破片若干があり（図版9・12—23～26）、中期前半のもの（23・25）、及び後期のもの（24・26）に分けられる。他に須恵器甕の破片が1点ある。（22）

第2節　B地点出土遺物

1号住居址（図版27・31—1～6）

＜土　師　器＞

〔甕〕（1～4）　すべて破片で、全形のわかるものは1点のみである。口縁が外反し、胴部は下方に行くにつれて狭まる形のもの（1・3）は、外面を刷毛目調整して仕上げている。口縁が水平に近く外反し、先端が上方に屈曲するもの（2）は、胴部上半に轆轤なで調整を施す。浅く口縁の大きな鉢に近いもの（4）は、外面は篦削り調整で仕上げている。底部は篦で調整されている。他に1個体分以上の小破片がある。

〔杯〕（5・6）　大形のもの（5）は、口縁が内湾し、内面黒色処理を施す。小形のもの（6）は全面轆轤痕を有し、底部は回転篦削り調整、内面黒色処理を施す。内面黒色処理のない杯の破片も若干出土している。

2号住居址

遺物は、小破片のみで、実測可能なものは出土していない。

3号住居址

破片のみ出土。土師器には、木葉底、外面刷毛目調整痕のある甕の破片、内面黒色処理を施した杯の破片で、内外面黒色処理を施した杯などがあり、須恵器は杯と思われる小片が1点出土している。

4号住居址（図版27・30・31・34—7～10・13・14）

＜土　師　器＞

〔杯〕（7・8）　内外面黒色処理のもの（7）、及び内面黒色処理を施し、底面に焼成後、針のごときもので「兀」形の記号を刻したもの（8）がある。他にも小破片が若干出土している。

〔その他〕（9）内外面黒色処理を施した破片4点が出土した。瓶の口縁らしいもの（9）、そのほか鉢又は甕形のものがある。甕の破片も若干出土している。

＜須　恵　器＞（10）

蓋は、予備トレンチ拡張部出土破片と接合し、重ね焼きの痕跡より7号ピット出土の短頸壺（図版29・33—26）と組み合うものと考えられる。深い杯部にやや扁平な宝珠形のつまみを有し、杯部には焼成前に穿孔された小孔がある。

破片には、甕・台付杯・瓶・蓋などの小片10点以上がある。

＜そ　の　他＞（13・14）

砥石（13）は砂岩製で、上下を欠き三方に使用痕がみられる。石製品（14）は凝灰岩製で片面を欠くが、上方は面取りを施し、中央に穿孔してある。用途は不明である。

5号住居址（図版27・32—11・12）

土師器のみ出土。高杯（11）は高さ9.8*cm*。口径19.6*cm*と大きめの杯部は胴部下半に段があり、内面黒色処理を施す。脚部は短かく、裾は外反する。杯（12）も口径18.8*cm*と大形で、胴部下半に稜がみられる。内面は刷毛目調整を行ったのみで篦磨きは見られないが、内面黒色処理が完全に定着している。底面に篦記号「×」がみられる。破片では他に球形に近い胴の甕形土器らしいものの一個体分があるが、小破片のみで復元できない。甑底部の破片も1点出土した。

6号住居址

土師器・須恵器とも小破片のみである。土師器には内面黒色処理の杯・甕、須恵器には甕の肩部のかなり大きな破片があるが、口縁部・胴部ともに欠損しており、図示できない。

7号ピット

＜土　師　器＞

〔甕〕（図版28・32—15）　形の判別できるものは1点のみで、復元口径21*cm*内外、外面は篦削りにより縦に仕上げた後、口縁部より内面をなで調整してある。口縁は外反し、口唇部で再び外側に屈曲して終る。他に刷毛目調整を有する破片若干がある。

〔杯〕（図版28・29・32・33—16～25・44）　完形品はほとんどなく、接合後、図上復元したもの

である。丸底または丸底風の平底で、口縁は上方で立ち気味になる形態が多い（16～23）。外面は篦による削り調整を行い、口縁付近のみなで調整で仕上げてある。篦削り痕がはっきり残っているもの（16）もあるが、大半は軽いなで調整をその上に施している。内面は篦磨きし、内面黒色処理で仕上げてある。外面に轆轤痕、底面に回転篦削り痕を有するものもある（24）。

本遺構出土杯の特色は、焼成後に針状の先端の尖ったもので、底面または側面に記号を刻したものが多数存在する点である。記号中には「丈」と読めるもの（16）もあるが、大半は「兀」形の記号である。「刀」又は「力（ちから）」と読むべきかも知れないが、文字の体をなしていない（17～19・21・23・24）。内面にやはり焼成後に逆P字のごとき刻文を入れたもの（20）もある。また底面に内側から穿孔をし、盲孔のままで中断したらしいもの（21）も見られる。

杯(24)は前述のように轆轤痕を有し、底部に回転篦削り手法を残すが、形態、内面処理の手法、底面の焼成後刻文など、轆轤を使わない群との共通点も多く、あるいは共存したとも考えられる。

内外面黒色処理を行ったもの(25)があり、やや大形であるが、底部を欠損し、全形は不明である。黒色処理を全面に及ぼしたものは、他に杯・甕（鉢？）など9点の破片が出土している。

＜須　恵　器＞（図版29・33—26～28）

〔短頸壺〕（26）　破片であるが、底径より復元すれば胴部最大径17㎝前後で、肩のはった胴部に直立する短かい頸部を有し、底面には高台を有する。内外面とも轆轤痕が著しく残り、肩部より下には自然釉がわずかに見られる。口縁部に蓋の釉着していた痕跡があり、蓋とともに重ね焼きを行ったと考えられる。4号住居址出土の蓋(10)が、この痕跡と合致し、二者が一体として使用されたものと考えられる。いわゆる「薬壺形」の器形となり、正倉院蔵の薬壺から、唐三彩にまで遡る形態の流れをくむものである。

〔蓋〕（27）　明褐色のやや焼成が悪い蓋で、胎土に砂を含む。直径15.6㎝の皿形の杯部を作り、転倒して底面を回転篦削り調整した後、つまみを取り付ける。轆轤からの切り離しは不明である。7号ピットのほか、第1トレンチ拡張部よりも破片が出土している。

〔杯〕（28）　破片より図上復元したもので、復元直径14.6㎝で、底部に二次的な轆轤調整痕があることから、高台を取り付けた形態であったと推定される。

＜鉄　製　品＞（図版34—29～31）

刀子3点がある。本例も一応刀子として扱っているが、錆化がひどく、断面の形などから見て、鉄釘または鉄鏃である可能性があることを付記しておく。鏃とすれば、A地点1号住居址出土の尖根鏃に対し、平根鏃であろうかと思われる。

＜石　製　品＞

〔紡錘車〕（図版34—32）　滑石製で、上面の直径2.9㎝、下面の直径4.0㎝、高さ1.8㎝である。

中心に直径0.8cmの軸穴がある。上面の一部に傷があるほか完形である。

予備調査トレンチ拡張部出土品

＜土　師　器＞（図版33—33・34）

内面黒色処理の丸底杯(33)、及び平底杯(34)がある。34の底部には焼成後の刻字「兀」がみられる。他に内面黒色処理の杯、蓋の小片もある。

＜須　恵　器＞（図版33—35）

蓋の破片。胎土・焼成・製作手法ともに7号ピット出土の蓋(27)に似ているが、やや深目の身部をもち、つまみを欠損している。

＜砥　　石＞（図版30・34—36・37）

携行砥石の形をとる36は、砂岩製で長さ9.2cm、上端に孔をあけ、四面に使用痕がみられる。破砕して出土したものを接合した。もう1点の37は末端を欠くが四面に使用痕を有し、頭部に溝を有する。砂岩製である。

グリッド出土品

〔土師器甕〕（図版29・33—38）　口縁部短小で胴部中央付近に最大径のくる小形の甕、焼けている。

〔土師器杯〕（図版33—39）　内面黒色処理を施したもので、小片のため直径は推定復元したものである。丸底になるものと思われるが、詳細は不明。

〔須恵器甕〕（図版35—40）

口縁部破片、櫛波文を装飾したものである。

Aトレンチ出土品（図版30・35—41～43）

縄文式土器3点があり、すべて胎土に繊維を含む。口縁部(41)は、直口で、口唇部はやや薄くなっている。器内面に貝殻条痕文が横位に施文され、外面は多軸絡条体を回転した撚糸文が全面にみられる。また口唇部にも同様の撚糸文が捺されている。

胴部破片(42)は、やや厚手で内外面に斜位の貝殻条痕文が見られる。

底部破片(43)は、上げ底風平底で、底面は外方に広がる。胴部及び底面には全面に多軸絡条体の回転撚糸文がつけられ、底面は原体の一端を中心に置いて回転したかのごとく、中心付近は原体の幅が狭く外方に行くに従って広くなっている。

3点ともに胎土は石英や雲母片を含み、中には径0.5cm前後の小石を含むものもある。特に底部片(43)には焼痕が見られ、煮沸用に使われたことを示している。これらの破片は同一トレンチ内よりの出土ではあるが、出土位置も離れており、時期的に同一のものと考えてよいか疑問が残る。時期的にはすべて早期後半ないし前期初頭と思われる。　（野崎　準）

第5章　考　　察

第1節　A　地　点

このA地点周辺では、路線の西側に土師器と特に須恵器の破片が密度濃く散布しており、遺跡の中心は路線外にあると推定される。平地柱穴群は東にも延びるから、今回の調査で明らかになった遺構は、集落の中の一部であることはいうまでもない。

1号住居址は、隅丸気味の長方形プランで、壁高は70cm、若干胴張りをみせる。柱穴は対角線上になく4個とも中心寄りである。カマドは長さ1.90mで、左袖30cm、右袖20cm、火床は壁の線上にある。煙道の長さは1.10mある。内外面黒色処理の土師器片1点から判断して、内外に段のない丸底の形から、8世紀前半の栗囲式に属する。

2号住居址は、隅丸方形で面積は31㎡と大形であるが、壁高は30～60cmと比較的低い。貼り床があり柱穴は対角線から若干ふれる。

カマドは袖石・袖甕をもち左袖45cm、右袖35cm内側へ延びる。火床は壁内におさめ、35cmの煙道がついていたとみられる。この住居は、火災によって放棄され、生活状態を留めているとみて、現況から若干の検討をしたい。

西壁の南端に出入口を設け、左に折れた所に台状の高まりがあり、甕とやや離れて杯が出土した。甕の近くに砥石もあり、仕事の空間を思わせる。カマドの左は壺1、甕3、甑2で、食生活の空間を示し、カマドの右は杯で蓋をした甕とピットの中およびその付近に4個の杯があり、炊事の空間を意味している。カマドの左右壁に平らな花崗岩5枚を置くのは、壁面の化粧であろう。カマドの袖を室内に長く取り込んだ場合、先端部の補強に石や甕を用いている。プランを十字に4分した場合、炊事・食事作業・就寝の空間区分をこの焼土跡が示唆しているようである。

炭化材は、柱と思われるものはないが、隅垂木が四隅に残っている。1辺が15cmの角材である。母屋材は10cm前後の丸材で、材料は垂材に重点があることを示していようか。

掘立建築の遺構は、規模・柱穴の配置からみて高床住居・高床倉庫は不可能であるから平地住居であろう。柱間が等間隔ではないが、左右対象であるのは、入口・窓等の開口部の配置上の考慮であろうか。

2号住居址出土の土器は、甕の最大径は下半にあるが、下膨らみは顕著でなく、甑は鉢形に近いものと甕形がある。杯は一般に小型で厚く、口径の割に深いものである。栗囲式の時期である。1・2号住居址の時間差はなく、同時とみるべきだが、1号住居址は若干新しい要素をもっている。

第2節　B　地　点

1号・2号・3号・6号住居址は、いずれもロームを深く掘り下げ、カマドを半地下式に掘り、袖と壁、天井に白色粘土をもって煙道を築成している点共通で、同時期とみられる。これらのうち、時代判別の可能な遺物を出土したのは、1号住居址のみである。甕に轆轤を用い、杯も轆轤を用い回転篦削りを行っている。したがって8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

4号・5号住居址は、規模は大きいが、ロームの掘り込みが浅く、したがってカマドの構造に違いがある。つまり煙道をローム上面に築成するため、平らな石をもって両側に並べ、おそらく天井にも架設したうえで粘土を貼っている。遺物は5号住居址から高杯と杯が出土している。カマド右に浅いピットがあり、この中に正位で高杯が置いてあった（図版27・32—11）。杯部下半に段があり、他の杯（図版27・32—12）も体下半に稜があり、国分寺下層式の時期で、8世紀後半のものであろう。

4号住居址の側壁柱穴群は、それぞれ対向壁の柱穴群に照応するもので、外壁をもつ構造であることを示す例として注意したい。

7号ピットは、大小の円形ピットが切り合って8字状を呈するもので、小さく浅い方が古く、遺物は伴っていない。深く大きい方が新しく、遺物が2層に出土している。下層でも床から浮いた状態で出土している。杯は破片を含めて10点あり、そのうち、2点は丸底、8点は平底である。この2形式に分かれるピット内遺物と各住居址とのかかわり合いを検討してみると次のようになる。

1号住居址出土の杯（図版31—6）と7号ピット出土の杯（図版32—24）は回転篦削りである。4号住居址出土の杯（図版31—7）と7号ピット出土の杯（図版32—25）はともに内外面黒色処理で器形も等しい。また、4号住居址出土の蓋（図版27・31—10）は7号ピット出土の須恵の短頸壺（図版29・33—26）に付属するもので、重ね焼の痕跡から、両者の関係がわかる。ただ、5号住居址出土の高杯・杯（図版27・32—11・12）に共通する土器が7号ピットにはない。おそらく時間的には7号ピットの古い方（小さく、浅い方）と重なるものであろうか。いずれにしても、7号ピットは4号・5号住居址のグループとも、1～3号住居址のグループともかかわり合っていることが知られる。

7号ピットの性格は、前にもふれたように、防寒・防湿の食糧貯蔵庫で、そこには、容器に入れたままのものも収納されたのではないだろうか。

以上述べてきたように、下原B地点における遺構のあり方は、A地点の時期のあとに、まず5号住居址が営まれ、これと隔たることなく4号住居址が作られ、続いて1・2・3・6号住居址が作られたものと解すことができる。（鈴木　啓）

第17編　三峰森・堰ノ上遺跡

遺跡番号	三峰森　30—381、堰ノ上　30—378
所在地	西白河郡矢吹町大字大和久字三峰森 〃　〃　大字矢吹字堰ノ上
時代・種類	奈良時代、集落址
調査期間	昭和45年5月7日～18日
担当者	成田克俊
調査員	藤田定興　村川友彦　古川 猛
協力機関	矢吹町教育委員会　白河女子高等学校史学クラブ 岩瀬農業高等学校社会科クラブ

目　　次

Ⅰ　三峰森遺跡

第1章　遺跡と環境…… 311
　第1節　位置と地形…… 311
　第2節　周辺の遺跡…… 311

第2章　調査経過…… 312

第3章　遺　　構…… 313
　第1節　住居址…… 313
　第2節　周　　溝…… 313

第4章　遺　　物…… 314
　第1節　土　　器…… 314

第5章　考　　察…… 315

Ⅱ　堰ノ上遺跡

第1章　遺跡と環境…… 316
　第1節　位置と地形…… 316

第2章　調査経過…… 316

第3章　遺　　構…… 317

第4章　遺　　物…… 318

第5章　考　　察…… 318

Ⅰ　三峰森遺跡

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

三峰森遺跡は、東北本線矢吹駅の南西約1.5㎞、矢吹町より大信村大字下新城に通ずる道路の南側にある。権太倉山麓に源を発し東流し、矢吹町大字大和久地区で流れの向きを変え北流する隈戸川が形成した河岸段丘上にある。三峰森遺跡の立地する段丘は、海抜240ｍで段丘下の水田面との比高は約10ｍ、段丘の北は一段高い丘陵となり、中世に館がつくられ、現在館山とよばれている（図版１）。

第2節　周辺の遺跡

矢吹町内の遺跡は、町の東部を南北に流れる阿武隈川と西部を流れる隈戸川沿いに集中している。昭和41年刊行された『全国遺跡地図』によると矢吹町の遺跡は13か所にすぎない。

三峰森遺跡は、北方にある堰ノ上・井戸尻・狐石・平山遺跡とともに、昭和41年11月道路敷内の遺跡分布調査により発見されたものである。

第1表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
30—380	花咲山遺跡	大字矢吹字花咲山	畑	縄文
30—388	大林遺跡	〃　字大林	畑	弥生・土師
30—418	柏山遺跡	大字中畑字柏山	沼沢地	縄文・石器
30— 29	寺山古墳	〃　字寺山	山林	土師器
30—419	館ノ越横穴群	〃　字館ノ越	台地	直刀・人骨
38— 28	清水塚古墳群	大字松倉字清水塚	山林	
30—440	西原遺跡	大字明神字西原	水田	縄文・石器

30—441	沼和久横穴群	〃　字沼和久	丘陵	
30—439	甲三ツ段古墳	〃　字甲三ツ段	畑	
30—435	戸の内古墳	大字神田字神田東	台地	横穴式石室
30—433	弘法山古墳群	大字三城目字弘法山	山林	円筒埴輪
30—438	塚の越古墳	〃　字塚の越	畑	
30—434	久当山横穴群	〃　字久当山	山林	
	谷中古墳	大字神田字神田		埴輪・鉄片・金環
	寺山遺跡	大字松健字寺山	畑	墨書銘土師器・土師器・住居址
30—381	三峰森遺跡	大字大和久字三峰森	畑	縄文・土師・住居址
30—378	堰ノ上遺跡	大字矢吹字堰ノ上	畑	土師・須恵・住居址
30—379	井戸尻遺跡	〃井戸尻	畑	住居址
30—377	狐石遺跡	〃狐石	畑	住居址
30—376	平山遺跡	〃大和字平山	畑	土師器

第2章　調査経過

調査は、自動車道の中心杭に沿い、ほぼ南北に1.5×35mのトレンチを4本設定し、各々A・B・C・Dトレンチと命名。Aトレンチより表土除去作業を実施する。

Aトレンチでは地表から40cmで、第2層の茶褐色土の遺物包含層になる。土師器・縄文土器片十数片検出される。表土下56～62cmでローム層に達するが、遺構の発見はできなかった。

当遺跡南部の田・畑27.8haが、東北縦貫自動車道関連公共事業の一環として、昭和44年から数台のブルドーザーにより耕地整理をしたが、遺跡の西端に幅75cm、深さ60cmの周溝が、南北にのびていたとの地主の話があり、Aトレンチの西へ1.5×45mを設定、A′トレンチとした。

Bトレンチは、表土下32～38cmで茶褐色土の遺物包含層になり、50～56cmでローム層に達する。東端に2個の柱穴状の落ち込みがあったので、一部拡張したが抜根跡でなんら遺構は検出できず、ただ十数片の土師器・縄文土器片を出土したのにとどまった。

Cトレンチでは、表土下45～48cmでローム層となり、第2層がなく耕土中に土師器片数点検出されたが、遺構は発見されなかった。いずれも攪乱のあとがみられる。

Dトレンチでは、表土35cmに密殺したと思われる馬の頭骨が出土し、発掘人夫の作業進度を一時中断させる。表土下40cmでローム面になり、一辺3.2m の方形の黒土層の落ち込みを発見拡張する。一方周溝を確認するため、Cトレンチの延長とA′トレンチより北へ、1.5×3 mのピットA1′・A2′・A3′・A4′を2 m間隔に設定する。周溝はA4′までは、幅75cm、深さ60cm、底部幅42cmで南北にのびており、Cトレンチ西端では、昭和初期につくられた水路工事のため破壊され確認はできなかった。

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

本遺跡は後世の攪乱が全域にみられるが、Dトレンチより1軒の住居址が検出された（図版2～7）。

1辺が3.2×3.2mの隅丸方形のプランを示し、面積は10.24㎡である。住居址はローム層を掘り込んで作られ、深さ平均30～35cmである。断面で層を見てゆくと表土層・茶褐色土層・焼土混入土層と続き、住居が放棄された後、埋まっていった様子を知ることができる。第3層は住居址内部にしか検出されないものである。床面はローム土でほぼたいらである。北東隅にピットが確認された。柱穴・周溝は認められない。東壁中央部より南寄りに保存の良好なカマドが検出された。煙道が確認され、焚口の状態も良く保存されており、火床には土師器壺が河原石を支脚にして設置されていた。遺物は前述のピットより甑1個体、底部を欠損した甕1個体、丸底の杯2個体がピットにずり落ちた状態で出土し、浅鉢の底部と思われる破片が1個体分、北壁中央部際から確認され、カマドの内部から出土した壺や前庭部から出土した甕は、その出土状態から当時の生活の姿を十分知ることができる。

第2節　周　　溝

遺跡の西方と南方の農業構造改善事業により削平された地域に長大な溝がみられた。南北45m東西82mで隅丸となっている。幅75cm、深さ60cm、底部幅42cm、敷地外は削平されているため周溝の痕跡を示す底部に黒土の落ち込みが残っているのみである。溝は地山のローム面を掘り込んでおり、出土品が検出されなかったので、住居址と同時代のものか明らかでない。

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

本遺跡の遺物には、住居址内より出土した土師器甑・丸底杯・壺などがある。そのほか表面採集および各トレンチより出土の縄文土器・土師器片は保管した倉庫が、火災で焼失したので明らかでない。住居址内より出土した遺物についてのべることにする。

1辺が3.2mの隅丸方形のプランをもつ1号住居址出土の遺物は、東壁中心部南寄りに構築されたカマドを中心として出土した。出土状態は当時の炊事空間を推定するうえに非常に良い状態で残っている。カマドを中心として遺物は焚口内部の左側袖壁に立て掛けた状態の壺と焚口部に口縁部を竪穴中心部に向け、つぶれた状態の甕が出土し、カマド左側に構築された貯蔵ピットからは、口縁部を壁に向けてずり落ちた状態で、甑と底部が欠損している甕が並んで出土した。同ピットからは杯2個体が伴出している。破片ではあるが北壁中央部壁際から甕の底部が出土した。

以上、1号住居址内出土の遺物は壺1個体、甕2個体、甑1個体、杯2個体、甕底部1個である。

〔甑〕（図版17、18—1）　貯蔵ピットより出土した甑は、口径24.0cm、器高26.0cmを計り、底部には径8cmの穴がある。下半部は急な角度で立ち上り、上半部はほぼ直立気味になり、口縁部はゆるやかに開く形態である。底部は穴の周囲を篦状工具で面とり整形を行っている。底部より5cm程上がったところに、体部と底部とを接合した痕跡が観察できる。体部外面には輪積成形を示す痕跡が顕著で縦方向の刷毛目状の整形痕が全面にみられる。さらに底部近くではその後篦削りを行っている。頸部から口縁部にかけては横なでが施されている。内面は体部全面にわたって縦方向のなでつけが施され、頸部より口縁部においては横なでが施されている。胎土は長石と若干の雲母を含み、焼成も良好で色調は赤褐色を呈している。

〔甕〕（図版17、18—2）　カマド焚口部より出土した甕は、底部を人為的に欠いたものと思われ、器高は明らかではないが、口径が16.5cmと比較的小型である。体部の最大径が下半部にある下ぶくらみの形態を示し、上半部は直立に近い形で立上がっている。口縁部は浅い「く」の字状に軽く開いている。体部内外面には巻き上げ手法の痕跡を残し、外面には全面にわたって縦方向の粗い刷毛目痕がみられ、体部下半には篦削りが施されている。口縁部には横なでが施されてある。体部内面には横方向の篦削りが行われた後、縦方向の磨きが施されている。体部下半には斜め方向になでの痕跡がみられる。頸部には軽い段を有し、頸部から口縁部においては横なでが施されている。胎土

は若干の長石を含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。

〔壺〕（図版17、18—3）　焚口部より出土した、球形の体部に軽い外反を示す口縁部を有する壺である。底径6.5cm、体部最大径19.5cm、口径14.5cm、器高は20cmである。内外面上半部において巻き上げ手法の痕跡が顕著である。底部は篦削りの調整がなされ、体部外面下半は縦横両方向の篦磨きが施されている。上半部は縦方向の粗い刷毛目痕が全面にみられる。口縁部には横なでが施されている。内面下半部は篦磨きが施され、上半部には縦方向の篦削りの痕跡が若干みられるが、器面が粗く上半部から頸部・口縁部は不明である。胎土・焼成とも良好であるが、内外面とも器面が粗くなっている。色調は黄褐色である。

〔甕〕（図版17、18—4）　北壁中央部の壁際より出土した甕の下半部の残片である。底径8cmであるが、器高・口径は不明である。底部には若干であるが篦削りの痕跡があり、体部内外面には巻き上げ手法の痕跡がみられる。外面には縦方向全面に篦削りが施されている。内面には右下から左上に上げた篦削りの痕跡がみられるが、器面が粗く明瞭ではない。胎土は長石・石英を多く含み、あまり良好とはいえないが焼成は良好で固くしまっている。

〔杯〕（図版17、18—5）　貯蔵ピットより出土した丸底の杯で、口径16.0cm、器高6.0cmを計る。底部から丸味をもって立ち上がり、上半部と下半部との境は低い稜線を示し、上半部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。底部は篦削りの後、刷毛状工具により2方向より調整されている。上半部から口縁部においては横なでが施されており、巻き上げ手法の痕跡が顕著である。内面は黒色処理が施されてある。底部においては刷毛目痕が多方向に不規則にみられ、その上に篦磨きが施されている。上半部から口縁部においては横なでが施されてある。胎土は長石を含み、焼成も良好で色調は赤褐色である。

〔杯〕（図版17、18—6）　貯蔵ピットより出土した平底風の丸底杯で、口径15cm、器高4.5cmを計る。平底状の底部からゆるやかに立ち上がる体部は中位で低い段を成し、口縁部との境において低い稜を成す。口唇はわずかに外反している。内面は黒色処理が施され、体部下半に段を成している。口縁部は屈曲なくゆるやかに立ち上がっている。内外面とも摩滅が激しく、調整技法などは不明である。

第5章　考　　察

三峰森遺跡からは縄文時代前期の土器片と、第5型式（栗囲式）[注]の土師器が住居址内より出土している。縄文土器片は少量で、遺構は確認されなかった。

住居址は、一辺3.2m四方の隅丸住居址で甑・甕・杯・壺と貯蔵穴など生活用具があり、甑は胎土・焼成・造形技術ともよい。柱穴は検出されなかったが、これは柱穴に代って、床面に根板をならべ、その上に柱を立て、根太・根がらをはり、屋根をふいたと思われる。カマドが東壁の中央から南側によっているのは、3.2m四方というせまい住居を有効に使うためのものであろう。広さ10.24㎡というせまい住居は貧富の差の問題より、家族構成がこうさせたのでなかろうか。

検出された住居址は1軒であるが、住居址の西方および南方にある周溝は、伴出物がなくこの時代のものかどうか今後の研究にまつが、三峰森遺跡のある丘陵の西南端をブルドーザーで開墾中、カマドと長胴形甕が出土しているので、これらの住居址もふくめた大集落がこの地方に奈良時代中ごろから後期にかけてつくられていたのであろう。（藤田定興　村川友彦）

注　氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史　第14輯』　1957

Ⅱ　堰ノ上遺跡

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

矢吹町大字大和久字三峰森の北部に東西にのびている丘陵がある。この丘陵には中世に館がつくられたという館山があり、この舘山の東斜面の中腹に堰ノ上遺跡がある。

この遺跡は、三峰森遺跡の北方約350mで雑木林と麦・野菜畑となっている。この東端には三峰森部落より狐石部落に通ずる道路があり、井戸尻遺跡が眺望できるところにある（図版8・9）。

（注　周辺の遺跡については、三峰森遺跡の項を参照のこと）

第2章　調査経過

現地形は、東南に突出した丘陵地帯で、東に傾斜する日当りの良い場所を住居に利用している。予備調査において、比較的広範囲に遺物出土の予想を立てたため、幅1m、長さ50mの細長いトレンチ

を４本南北に設定し、最上段トレンチから調査に入った。

トレンチ中央部で深さ50cmで黄褐色ローム層が出土、南へ追ったところ、黒土の落ち込みと多量の炭および焼土を発見したため、トレンチと直角に、長さ３m、幅５mの拡張トレンチを設定し作業を進めた。

その結果、一辺4.5mの住居址１軒とカマドを反対側にもつ重複した住居址１軒を検出した。

それより前、深さ約50cmまでの上層耕土中に、土師器細片が少量包含し、その下層、粘土混入茶褐土層中に、自然釉のある須恵器壺の残片が１点出土した。この出土レベルは、住居址の床面より上層部に位置し、両住居址とは直接関連付けられない。

上段１号、下段２号住居址の壁面・周溝および床面の精査に続きカマドを精査し完掘した。作物植付後であったので地主とのトラブルもあったが、Aトレンチに平行に、B・C・Dトレンチを設定、素掘りする。表土下、地山まで42～47cm耕作土がつづき、数片の土師器片が出土したが、遺構の発見はできなかった。

第３章　遺　　構

当調査で、時期的差をもつ二つの住居址が重複して確認された。上段プランを１号、下段プランを２号住居址とする。

１号住居址（図版10・12・13・15・16）

２号住居址よりも床面（ローム直上面）が高く、１号住居址の床面ロームを切り込んで、２号住居址の側壁面を形成しているため、時期的には２号住居より１号住居が古い時期に造成され使用されたものと考えられる。

１号住居址において残存した遺構は、全体のおよそ４分の１程度で、カマドとその北側の部分のみである。側壁の高さは約15cm、東へ自然傾斜するロームを切り込んで、床を整地し形成したと思われる。カマドは、北壁面中央部からやや西へ寄った場所に位置し、幅１m、全長1.90mで、両袖は白色粘土で補強し、燃焼部左右に小石２個を施設として使用している。

カマド前方部に土師器甕が１個体、口縁部を焚口にむけた状態で出土している。また、床上から炭化木材が出土しており、大信村下原A遺跡２号住居址の場合と類似している。

２号住居址（図版11・12・14～16）

１号住居址の床面を切り込んで一段深く床面を形成しており、隅丸方形プランを有する住居で、周溝は、深さ５cm程度で、１号住居址よりも明確である。床面敷地は、１号住居址と同様自然傾斜のロ

ームを切断し壁を形成している。1号住居址と同様、東側壁面は、残存しない。カマドは、1号住居址とは逆方向の南壁面に位置し、表土下約20cmで検出され、幅1.20m、全長1.50m、両袖は白色粘土を使用し、燃焼部の焼土ははなはだしい。

燃焼部から施設に利用したと思われる土師器片が数点発見された。

第4章　遺　　物

主な遺物は土師器甕1個体、須恵器壺1個体、炭化木材数本、その他土師器細片少量であるが、遺物保管場所が火災にあい焼失しているので詳細をのべることができない。

〔須恵器壺〕（図版17、18—7）　短頸壺と考えられるものの破片で、頸部から体上半部のみで口縁部・底部は欠損している。体部の復元最大径は約24.5cmである。外面には横方向と一部縦方向に櫛目痕がみられ、上半部には自然釉がついている。内面には全面に横方向と一部縦方向に櫛目痕がみられ、体部上半と下半との接合部の状態が観察される。胎土・焼成とも良好であるが、外面下半部は摩滅して詳細は不明である。

〔土師器甕〕　1号住居址カマド前方左側袖に口縁部を向けて出土し、体部下半がふくらんでおり底部外面が赤褐色に焼け変色している。

〔炭化木材〕　1号住居址の北西隅付近から中央にかけて炭化木材が出土した。長さ約70cm、幅10cmで材質は堅木であり棟木の用材であったと推定される。

第5章　考　　察

館山の東斜面にある本遺跡より、重複した住居址2軒が検出されている。この遺構は奈良末期から、平安前期にかけて作られたと思われる。

1号住居址

住居の北西隅が検出されているが、一辺約4mの隅丸方形プランをもつ住居址と思われる。幅5～8cm、深さ7～10cmの周溝があり、カマド前面の焚口に第6型式（対馬式）[注]の長甕が倒れて発見され、近くに棟木と思われる炭化材が散乱していた。地山が傾斜しているため、貼床をしているが、カマドの東側の壁と周溝は、貼床部の土砂が流れ明確でない。カマドの東側にある0.8×1.8m、深さ55cmの

ピットは、貯蔵穴と思われ、1号住居に付随すると思われる。柱穴は確認できなかったが、三峰森遺跡と同じ構造であったのではなかろうか。炭化材からの家屋の復元は、残存材が少ないので困難である。

2号住居址

1号住居址が火災焼失後、1号住居の南側に重複させて、構築したもので、一辺4.1m の隅丸方形のプランをもち、側壁の高さ18～20cm、遺構の東側半分は、地山が傾斜しているため貼床してあるが、自然に床面が流出し、東壁は明確でない。ただ、幅15～20cmの周溝から規模を推定した。

カマドは表土下20cm、真南を向き、全長1.5m、幅1.2m、両袖に白色粘土を用いてあり、長年月の使用によるため燃焼部は、非常に堅牢である。カマドの上には第6型式(対馬式)[注]の長甕が倒立していた。1号住居址と2号住居址の時代的差異は明確ではないが、カマド西北端に出土した緑色の自然釉のある須恵器壺片などがらみて、あまり時代差はなく、ともに8～9世紀ごろ構築されたものであろう。

(藤田定興　村川友彦)

注　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史　第14輯』 1957

第18編　出磬山遺跡

遺跡番号	22—155
所在地	郡山市片平町出珪山
時代・種類	奈良時代、窯址・住居址
調査期間	昭和45年11月26日～12月8日
担当者	鈴木　啓
調査員	古川　猛　木本元治
調査機関	郡山市教育委員会　片平町公民館

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 323
　第1節　位置と地形…… 323
　第2節　周辺の遺跡…… 323

第2章　調査経過…… 323

第3章　遺　　構…… 325
　第1節　窯　　址…… 325
　第2節　住居址…… 325

第4章　遺　　物…… 327

第5章　考　　察…… 329
　第1節　遺　　構…… 329
　第2節　遺　　物…… 330

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

遺跡は、郡山市街の西北西6㎞にある。出磐山麓の末端部に位置し、安積洪積台地上に突き出た海抜293.1mの台地上にある。南方は若干の小沢を含むほぼ平坦な台地が大槻方面に広がっている。

遺跡が所在する台地上は、比較的ゆるい南面の傾斜地で、一部に南に開く小谷を有している。遺構はこの谷じりを中心に発見された。遺跡の基盤は、白色粘土と黄色粘土があり、地点によって異なっている。かつて、「磐」が出土したため、「出磐山（でいやま）」とよばれたが、現在は「出珪山」の文字があてられている。（図版1・2）

第2節　周辺の遺跡

出磐山を中心とした大槻地区の同時代遺跡は、南方1.5㎞の葉山一帯に多く、集落址・窯址群・古墳群が、笹原川流域まで確認されているが、北側は非常に少ない。周辺3㎞以内に、窯址7か所、土師器・須恵器を出土する遺跡7か所、古墳及び古墳群7か所を数えることができる。このうち調査されたものは、昭和35年の麦塚古墳、昭和39年の大槻の阿良久遺跡・花輪遺跡・原田遺跡、昭和44年の福良沢遺跡、などがある。

（鈴木　啓）

第2章　調査経過

畑地を開墾の際、ブルドーザーによって傾斜のゆるい部分は削平したため、遺跡は東西の線で上下段に整地された。その断面に焼土がみられ、須恵器片の散布がみられるところから、須恵窯址と推定された。

地形からみてグリッド調査では効率の点で問題があるため、下段は平行トレンチ、上段は地形に合せた任意方向のトレンチとした（図版3）。

下段のA～Eトレンチで遺構を探査した結果、表土下20～30㎝で基盤に達し、A・C・Dトレンチ

西端に近いところで、白色粘土に掘り込まれた茶褐色の落ち込みを発見した。コンターに直交して南北方向にのびるため、全面の拡張を行って観察すると、切り合うものを含めて3本の浅い溝状遺構を検出した。上端は半円形を呈し、底は舟底状でほぼ平行に南に下って消えている。西から1・2・3号と呼ぶ。2・3号が切り合いの関係にある。傾斜は14°～15°である。

東側山林中にもM～Qまで5本のトレンチを設定した。Nトレンチにおいて、黒褐色舟底形で帯状に各筋に向かってのびる遺構を発見し、登り窯との想定のもとに4号と命名する。長さ6m、幅60cm、傾斜18°前後である。

上段ではGトレンチにおいて、表土下第2層である暗褐色土の下に、レンズ状黒色土の落ち込みを発見し、この黒色土中より土師器の糸切杯と外面に稜線をもち、口縁が外反する杯の破片が発見された。

この部分の拡張、掘り下げを行った結果、U字形焼土を発見し、登り窯の先端部かと思われた。更に調査を進めると、U字形焼土はカマドであり、これが東壁で北壁が粘土層を切り込んでよく保存されていることが判明した。南半は暗褐色土層中にあり、北壁上面のレベルでは、西と南の壁は不明である。西壁は南にのびるにつれて下降し、カーブして南壁となりすぐ消えることが確認された。この点を根拠に南壁を想定して掘った結果、南壁中央に更にカマドが発見された。両袖は壁内にあり、火床は壁線上にある。出土遺物は、床面出土の須恵器蓋1点と土師器片1点のみである。

Kトレンチ上端では、表土・黒色土・茶褐色土・白色粘土の順で堆積し、トレンチ上端－30cmの茶褐色土層中より、高台付杯須恵器片・土師器片数点が出土したので拡張した結果、白色粘土を掘って造り出したカマドとみられる遺構を発見した。1辺が4.5mの竪穴であることを確認し、2号住居址とした。柱穴はない。

1号住居址の上段は、粘土層の上に直接黒色土が乗っている感じで、土器片を含むので拡張した。数個体の杯を発見し、住居址を想定して上部へ掘り進み北壁に達した。ここに焼土を発見し、更に西壁を追った。南壁は南に下り黒色土中にあり、レベルからみても斜面のため地上に出る位置にあたる。東壁もカーブして南に下り、黒色土に入って南壁の位置と想定される地点は、1号住居上の中央部である。北壁ほぼ中央部にカマドがあり馬蹄形を呈し、長大な煙道を伴っている。煙突部内が45×45cmの空間を有し、土師器甕と、壺の大きな破片が入っていたこと、また完存する大形の煙道が鮮かな酸化焼成層をもっていたことから、当初土師器を焼成する窯かと判断されたものである。この住居址を3号とし、すぐ東わきに残存する煙道は、4号と呼称することにした。

予備調査においてカッティング面にあった焼土は、当初窯址と予想されたが、これも3号住居址同様のカマドであるあることが判明した。（鈴木　啓）

第3章　遺　　構

第1節　窯　　址

3基の窯は等高線に直交する形で掘り込んでおり、西から1号、切り合うものを2号・3号とした。(図版8・12)。

1号窯址

中央幅1.38m、同底幅1.30m、深さは東壁で26cm、西壁で17cm、長さは6.95mあり、下方4分の1でやや西に曲る感じをもつ。壁の立ち上りはほぼ垂直に近い。

2号窯址

2号窯址は、東側を3号窯址により切られ、下端も削除され不明確である。推定される規模は、長さ6.90m、幅は1.24m、深さは17cmで、傾斜は15°ある。

3号窯址

3号窯址は、西壁で2号窯址と切り合うもので、幅は床の痕跡から1.0m前後であろう。全長は5.30m前後と推定できる。深さは25m、傾斜は2号同様である。2号を3号が切った可能性が強い。3号は焚口ですぼまり、次いで前庭へ扇状に開き、上部で25cm掘り込み、半径3～4mで傾斜によって自然に消える掘り込みをもっている。1・2号間下方に、径1m、深さ20cmの浅いピットがあり、中から砂(すさ)入り焼土が若干検出された。

東側林中の4号窯址は、全長6.0m、幅0.6mを計ることができるが、舟底状底部の深さは10cm前後で、出土遺物もない。

第2節　住　居　址

1号住居址(図版4・9・10)

長辺3.6m、短辺2.6m、9.1m²で隅丸長方形プランである。壁高は45cmで垂直に近い立ち上りをみせる。床面北半に15cm幅で周溝を掘っている。柱穴はない。東壁のカマド(Aカマド)は外に張り出して地山の粘土を掘り込んで作られたもので、80×80cmの方形である。南壁カマド(Bカマド)は65×125cmで馬蹄形に両袖を屋内に延ばし、三角形の先端部を壁外に出すが、煙道とはなっていない。

白色粘土をもって築成している。火床の先に粘土を焼いて仕切りとしている。支脚の役目をもつものであろう。床面からの出土遺物は須恵器蓋と土師器片の２点、他に扁平な河石１個である。柱穴はない。

２号住居址（図版５・10）

4.5×4.5m、20.25㎡で、北壁中央部より西寄りにカマドがある。幅1.0m、奥行き0.8mで、白色粘土層を掘り残して造り出したものである。住居址壁高は、北60cm、西・東15cm、南10cmで、東壁中央部に長さ1.0m、幅30cm、深さ15cmの半円形張り出しをもつ。

柱穴はない。出土遺物は南西隅床面より、高台付の須恵器杯片と、内外面黒色処理を施した平底の土師器杯片が数点みられる。

３号住居址（図版４・６・９・11）

北壁 6.5mで、東と西の壁は南に下って消えるため不明であるが、推定面積は42㎡を越える大形となりそうである。北壁では粘土層を85cm切り下げており、壁中央西よりにカマドを設けている。

北に登る地山の粘土を利用してトンネル状に煙道を設けたもので、使用状態をよく現した姿で保存されていた。両袖間は0.8mで、火床を壁内にとり込んでいる。壁の線から傾斜して上り煙道となる。煙道内は高温により金属質の感じに焼けしまり、多量の煤が内面に付着している。煙突部は内側を大きく膨らませて内湾して立ち上がる。火床は馬蹄形で長さ95cm、煙道の長さ1.75m、煙道内部は高さ30cm、幅30cm、煙突は径30×40cmの卵形をなしている。

酸化焼成層は５～10cmの幅で赤く硬く焼けしまっており、火勢の強さを示している。

なお、概報においてこのカマドが、窯ともみられる可能性について検討し、判断を保留しておいたが、３号住居址に伴うカマドであるとみられる。

出土遺物は杯10点があり、いずれも西壁下からまとまって出土した。いずれも丸底の終末期にあたる、もので、国分寺下層式に含まれるものである。

４号住居址（図版６・９・11）

３号住居址の煙道に平行して、東に50cm離れて痕跡をとどめる煙道のみの遺構である。この残存する煙道から推定して４号住居址は、３号よりやや浅く、約1.0m南に下がって存在したようであるが、３号住居址に切られ全く消失している。

５号住居址（図版７・12）

上下段境の断面にカマドのみを残している。このカマドは、火床を壁の線の外に押し出したもので室内に袖を設けていないと推定できる。地山である粘土層に掘り込んだもので、火床幅72cm、奥行き80cm、深さ25～32cmで、天井は落ちている。酸化焼成層は７～９cmで、レンガ状をなしている。煙道断面径は21×23cm前後で、長さは1.20mを計る。長い煙道である点、３・４号と共通であるが、袖の

有無、火床の位置に差異がある。火床から土師器椀が出土した。

Hトレンチ

全体を1m幅で、長さ15～35mのトレンチ17本で調査したが、このうち遺物を出土したHトレンチに触れる。Hトレンチ西半では深さ50cmから内面黒色処理の土師器片が出土した。更に土器片を包含する北側へ1.5×6mで拡張すると、深さ1.50mで黒色土層が15cm堆積し、その下に30cmの暗褐色土層があり、以下基盤の粘土層となる。この黒色土層に轆轤痕のある杯小片を含み、暗褐色土層に木葉底甕底部片を含むことがわかった。地山も堆積土も自然の傾斜を示し、遺構は存在しないことを確認した。自然の谷の底に当たるところから、遺物が流入したものであろう。なおこの地点から、台付コップ状土師器、杯3個体分の破片、壺底部が出土した。（鈴木　啓）

第4章　遺　　物

各遺構に伴う遺物を一括として扱い、各遺構ごとに記述することにする。

1号住居址

伴出することが確認できた遺物は須恵器蓋と土師器の小片2片のみであった。

＜須恵器＞（図版13・14—13）

蓋1点のみで、直径14.9cm、肩部までの高さ2.55cmあり擬宝珠状のつまみがその上に付いており、つまみの高さは1.2cmある。肩部から体部中央部にかけて回転篦削りによる再調整が施されている。胎土は良好で全体に青灰色を呈し焼成も良好である。

このほか住居址上層の黒色土のレンズ状堆積層より回転糸切り土師器の底部小破片と、有段丸底の黒色土器の小破片が検出されているが、住居址に伴うものではない。

2号住居址

遺物としては須恵器の高台付杯の底部1点と土師器の小片若干を検出したのみだった。

＜須恵器＞（図版14—14）

杯部の切り離し技法は不明である。脚部はやや斜め外側に開き、底径は8.3cmを計る。脚の底部には細い沈線が1条めぐっている。

3号住居址

伴出した遺物は、土師器が中心で他に若干の須恵器が検出された。これらの遺物中・復元・実測が可能なものは土師器杯10点、甕1点、須恵器甕頸部1点であった。

＜土師器＞

〔杯〕 すべて内面黒色処理が施されており、成形に轆轤を用いた痕跡は観察されない。これらは形態により5類に分類できる。

1類（図版14—1・2）…丸底で体部と底部の間に段を有し、体部から口縁部にかけて内湾するもので、内面に軽い段の痕跡を有するものと無いものがある。

2類（図版14—3）…外面は1類同様に有段丸底であるが、口縁部が外反するものである。体部は横なでによる調整が施されている。

3類（図版14—4～7）…比較的深い器形を示し、丸底で体部が直線的に開くもので、底部と体部との区別が明瞭ではないが、かすかに稜線が観察しうる。この稜線が篦削りを施した底部と横なでを施した体部との境となっていることは2類と同様である。

4類（図版13・14—8・9）…全体を復元できる遺物は無く、完全な形は不明であるが、丸底で体部と底部との区別が無いものをまとめた。

5類（図版14—10）…体部と底部の境の稜線が底に近い位置にあり、平底風の丸底を呈する。体部は直線的にやや外反し、内側がやや肥厚し内面も体部と底部との境が明瞭である。

これらはすべて内面黒色処理で篦磨きがなされているが、保存状態が悪く篦磨きの状態は不明である。

〔甕〕（図版13、14—11） 口縁部の直径は23cm前後と推定され、頸部より直線的に外反している。体部はかすかに胴張りをしながらゆるく外側に開いているらしいが、下半部は欠損して不明である。調整は内外面とも刷毛目によっており、外面は縦、内面は横方向となっている。口縁部は内外面とも横なでの調整が加えられている。

＜須恵器＞（図版13、14—12）

復元できたのは甕の頸部から口縁部にかけての1点のみだった。口径は18cm前後と推定される。

5号住居址（図版14—15）

カマドを検出したのみであったが、その床面より深い椀状の土師器が検出されている。口径14.5cm高さ9.2cmあり、平底で、器肉は厚く重い。胎土は細い砂粒を含みざらざらしており、全体に再酸化を受けオレンジ色を呈し、もろくなっている。

包含層出土遺物

Hトレンチから包含層が検出されたが、主要包含層は暗褐色土層だったので、その遺物について述べる。

＜土師器＞（図版14—16）

〔杯〕 2点検出されており．1点は直径は16cm前後で3号住居址での4類に相当する。もう1点は（図版14—17） 5類に近く平底風丸底を有しているが、体部より底部への移行が丸味を帯びてゆる

やかになっている。

〔コップ形土器〕（図版13、14—18）　図のような器形を呈し、直径10.3cm、高さ12.2cm、深さ7.8cmを計る。底部は極めて厚く、杯の部分も厚く重い土器となっている。杯部の外面には巻き上げらしい痕跡が見られ、その上を軽い横なでの調整を加えている。胎土には砂粒を含みざらざらしている。色調はうすい黄褐色を呈し、焼成は良好である。

〔甕〕（図版14—19）　底部のみで底部の直径は10.7cmで木葉底を有している。胎土には砂粒を含みざらざらしており、白褐色を呈し焼成は良くない。　（木本元治）

第5章　考　　察

第1節　遺　　構

1～3号登り窯は、未使用のまま放棄されたもので、ブルトーザーで削られ、底面のみの残存である。地下式、半地下式の別は不明であるが、いずれにしても床から天井まで粘土層中に設けることはできないレベルである。

付近から灰・炭・焼土と窯壁材が出土しているので上層に焼成された窯があったことは、須恵器片と、押し出されたおびただしい焼土がEトレンチにみられることによって判断できる。築窯されても使用しなかった例として興味がある。

住居址1号～5号について述べると、5号は、時代判別の手がかりはないが、この中で最も古いのは4号である。これを切って一段上方に移動して3号が作られた。出土した土師器は国分寺下層式である。次いで内面黒色処理平底杯片を出土した2号がより上方に営まれている。次いで3号住居を深く切って1号がつくられたものであろう。栗囲式の破片もみられるので、上層にあって消滅したより古い住居が存在したことも知られる。

カマドには、長煙道付のものに、火床を壁の線の内側において袖を付するものと、火床を壁の線の外に出して無袖のものがあり、他に煙道を伴わないものがある。

出磐山遺跡は、須恵器窯址であることは、路線の東側において、大きな甕の破片が多数散布し、ブルドーザーで押し出した土に焼土があることからも明らかである。路線内にもその痕跡はあり、築成はされても使用せず放棄した例も知られた。その上段にある住居址は、須恵窯と直接の関係は不明であるが、窯業に従事した工人グループの集落である可能性もある。

住居址はカマドに特色があり、長大な煙道を伴う。炊飯用の単一機能だけにしては過ぎたるものに思える。1号住居址は2個のカマドをもっているが東壁のものは特殊である。

この集落が須恵器生産に従事する技術集団のものであれば、特殊なカマドは工房の観点から説明もできるが、窯址そのものが明らかでないので、ここで論ずることはできない。　（鈴木　啓）

第2節　遺　　物

土師器杯の形態から見て3号住居址出土遺物と包含層の出土遺物は、ほぼ同時期のものと考えてよさそうである。

これらの杯について共通していえることは、(1)成形に轆轤が用いられていない、(2)丸底を基本としているが、一部平底風丸底を含む。(3)栗囲式[1]に見られるような段を有するものが少ない等である。

これらの類似した遺物としては県内では、いわき市小茶園遺跡[2]、大信村下原B遺跡[3]、の例が報告されている。これらは若干の有段丸底の杯を含みながら、無段丸底、平底風丸底を中心とするグループであり、氏家和典のいう国分寺下層式[4]に相当するものと考えられる。ただ2類については関東地方との関連も考慮されるべきであろう。

当遺跡の場合轆轤を用いない無段丸底杯を中心としながらも、後の轆轤土師器の平底杯との関連を考えさせるような（須恵器との関連も考える必要がある）平底風の杯もあること等からして、杯を中心に見た場合、製作に轆轤を用いていない土師器としては最終末期に属するものと考えられる。

国分寺下層式は8世紀後半を中心とした年代を与えられている[5]が、当遺跡の中心となる土器はそれに近い年代が考えられるものであろう。しかし一部でいわれているような、8世紀に年代の与えられている製作に轆轤を用いられていない土師器と轆轤を用いた土師器の共存[6]は見られなかった。

（木本元治）

参　考　文　献

(1)　氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」　『歴史　第14輯』　1957
(2)　馬目順一　「いわき市小茶園遺跡出土の土器」　『古代　52号』　1969
(3)　鈴木啓 他　「下原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』　1975
(4)　氏家和典　「陸奥国寺跡出土の丸底杯をめぐって―奈良平安期土師器の諸問題」　山教史学会　1967
(5)　同　上
(6)　工藤雅樹・桑原滋郎　「東北地方における古代土器生産の展開」　『考古学雑誌　57―3』　1972

第19編　勝利ケ岡遺跡

遺跡番号	22—301
所在地	郡山市三穂田町川田字勝利ヶ岡
時代・種類	奈良・平安時代、集落址
調査期間	昭和46年10月19日～10月23日
担当者	成田克俊
調査員	木本元治　古川 猛　鈴木守康　田中正能
協力機関	郡山市教育委員会　三穂田史探会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 333
　第1節　位置と地形…… 333
　第2節　周辺の遺跡…… 333

第2章　調査経過…… 334

第3章　遺　　構…… 335
　第1節　住居址…… 335

第4章　遺　　物…… 337

第5章　考　　察…… 342
　第1節　遺　　物…… 342
　第2節　住居址…… 344

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

勝利ヶ岡遺跡は、郡山市三穂田町川田の部落の南方800m、東北本線安積永盛駅の西方4kmに位置している。遺跡付近には、ゆるい起伏の台地が広がり、遺跡はこのうちのやや高みとなった平坦面にのっている。その東側はやや低い湿地性の小谷地となって、そのため遺跡付近は地下水位面がかなり高い。遺跡の南側は、郡山と須賀川の境界付近の丘陵につき当るまで台地が続いており、北は遺跡より300mの所で笹原川により切られ崖面を形成している。西も同じく約150mのところで笹原川の支流により切られているが、その西方にも同じような面が続いている。これらの面はほぼ標高250m～300mを保っている。

これらの面は、郡山盆地中央部より北部にかけて広がっている郡山面とよく対応し、また郡山面が盆地の南縁部ではやや高度を増し、開析が進み丘陵化している（吉田、伊藤、鈴木1969）という指摘とも遺跡付近の地形は一致している。したがって遺跡付近の地形は、郡山盆地に広く分布する中部洪積層である郡山層を笹原川及びその支流が開析した結果、このようなゆるい起伏のある台地面ができ上がったものと考えられる。

郡山盆地における弥生時代から平安時代にかけての遺跡は、河川沿いの沖積地とともに、このような台地性の地形、または台地の奥の部分まで分布が多く見られるという立地傾向を示し、当遺跡の立地も一致している。これらの傾向は、郡山盆地においては中部洪積層の発達が著しく、広く台地性の郡山面が覆っているという地形的要因が強く働いているためと考えられる。

第2節　周辺の遺跡

勝利ヶ岡遺跡の周辺には約30か所の遺跡の分布が知られており、その内容は縄文時代11か所、弥生時代2か所、古墳8か所、土師器・須恵器の散布地または集落址5か所、経塚1か所となっている。

この近辺では現在のところ弥生時代や、土師器・須恵器を出土する遺跡より縄文時代の遺跡が多く、しかも笹原川流域（特に南岸）に集中して分布する傾向が見られる。なお、勝利ヶ岡遺跡周辺で、土師器・須恵器を出土する遺跡は第1表のとおりである。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号		名称	所在地	種別	立地	備考
旧番号	新番号					
1710	22—311	延命寺遺跡	郡山市安積町成田字延命寺	散布地	畑	
3952	22—306	丸山遺跡	〃 〃 荒井字丸山	〃	山林	
3955	22—304	転沢遺跡	〃 〃 牛庭字転沢	〃	畑・山林	
3957	22—359	中牛庭遺跡	〃 〃 〃 字中牛庭	〃	水田	
3953	22—296	四方坦遺跡	〃 〃 〃 字上牛庭	〃	畑	

第2章 調査経過

勝利ヶ岡遺跡は工事中発見遺跡で、10月8日、郡山市教育委員会より出磐山遺跡調査中の県調査班に発見の連絡が入り、9日に木本が現地におもむき予備調査を行った。遺跡の表土とともに遺構の上面は大部分ブルドーザー等により削り取られていたが、土師器・須恵器を伴う住居址が4軒以上あることを確認した。

日本道路公団に対し該当地域の工事中止を申し入れ、10月19日より調査に入った。遺跡のある台地上には表土としての黒色土の分布が見られ、遺構の集中する付近は特に厚かったらしく、初め各住居址はカマド付近の焼土が黒色土中に点在するような形で見られ、これらを1～6号住居址として調査を開始した。（図版1）

1号住居址

カマド跡と考えられる焼土、その煙道らしい部分が検出されていたので、そこを中心として精査した結果、この焼土は竪穴住居址のカマドであり、この竪穴は一辺4.5mの方形プランで、現存の深さ5～10cm、貼り床を有するものであることが確認された。さらにその南側に1号住居址と一部重複した3号住居址の床面が検出された。

2号住居址

1号住居址の東側より発見された住居址で、カマドの東の部分を拡張、精査した結果、現存の深さ2～5cmで、南北6mの住居址の床面を検出した。写真・実測の後、床をたち切ってみたところ、黒色土を掘り込んで厚さ5～10cmの貼り床を有する住居址であることを確認した。

住居の東側の部分は、土置き場となり、それ以前にもブルドーザーで攪乱されており、調査は不可

能であった。

4号住居址

ＳＴＡ391杭の約7m南より、予備調査時に焼土と土師器・須恵器の破片などが検出されていた。その部分を拡張、精査したところ、焼土が散布した床面の痕跡と若干の土師器の小片が検出されたが、住居址のプランを明確にすることはできなかった。

5号住居址

ＳＴＡ—391杭の東南約5m付近より、ブルドーザーで攪乱された黒色土中に、焼土と土師器・須恵器の破片が発見されていた。この部分にトレンチを設定、精査したところ、4.8×4.4mの方形プランの竪穴住居址を検出した。焼土は住居の北壁に作られたカマドであることが判明した。5号住居址も1号住居址同様、住居址の壁際に幅広い溝をめぐらし、その上に貼り床をした住居址であることが確認された。

6号住居址

ＳＴＡ—392杭の東15mより最初に発見された住居址で、遺構は工事用の溝、ブルドーザーに削られ、カマドと床の一部を検出したのみであった。

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

本調査により発見された住居址の数は6軒で、遺跡の東側に5軒まとまり、その100mほど西に1軒離れて検出されている。

1号住居址（図版2）

平面プランは一辺4.5mの方形で、四隅はやや丸味をおびている。壁は上部がすでに削平され、ほとんど残っておらず、西壁で3cm、南壁の西部で4cmほどの立ち上りが見られるが、他はほとんど立ち上りが見られない。しかも住居址外の面はすでに上部を削平され、住居址の作られた当時の地表面ではない。したがってこの住居址の壁はすでに削平されて無いが、黒色土中に掘り込まれた竪穴住居址と考えられる。同様の例は県内では新田畑遺跡に見られる（鈴木1972）。

住居址の中央部は、地山の粘土をたたきしめた床であるが、壁にそった部分は幅85cm～1.1m深さ15～20cmの溝をめぐらし、そこに黒色土を埋め込み、上部に厚さ約5cmの粘土による貼り床をすると

いう形態をとっている。柱穴はこの溝の内側の角の部分にあり、径は15～20cm、深さ55～64cmで、間隔約2.4mのほぼ正方形を呈する位置に配置されている。

カマドは北壁中央部に作られており、袖は粘土を用いて作られ、最大幅1.2m、内幅90cm、中心部の長さ1.05mを計る。火床は浅く掘りくぼめられている。煙道は幅25cm、深さ10cm、長さ1.3mで、煙出しの部分は煙道の床より約10cm掘りくぼめられたピットとなっている。

2号住居址（図版2）

2号住居址は本遺跡の東端より検出されている。完全なプランは不明であるが、カマドを北壁中央部に有する、東西5.9mの方形プランの竪穴住居址と考えられる。

壁はすでに住居址の上部がほとんど工事により削平されたためか、北壁で2～6cmの壁らしい掘り込みを検出したのみで、他は検出されなかった。

床は検出された部分全面に、厚さ5～10cmの床土と黒色土を交互に薄くたたきしめた虎じまの貼り床がなされており、カマド付近には焼け面、及び焼土の散布が見られた。柱穴はカマド前方に2本検出され、東側のものが径32cm、深さ24cm、西側のものが径30cm、深さ29cmであった。

カマドも上部は大部分削平されており、袖も下半部を検出したのみであった。その最大幅1.55m、長さ1.1m、内側は最大で幅80cmを計る。袖の厚さは20～50cmあり、その内側の燃焼部にあたる部分には扁平な石が用いられている。煙道は、その基底部下のかすかな焼けた部分と煙出しの基底部の焼け面と焼土を検出したのみであった。これより推定すれば長さ1m前後、幅20～30cmの煙道であったと考えられる。

遺物はカマド内及びカマド付近、特にカマド前面の焼土中より検出された。この2号住居址も貼り床を有し、黒土中に掘り込んだ竪穴住居址と考えられる。

3号住居址（図版3）

1号住居址の南側に1号住居址と一部重複した3号住居址の床面を検出した。またその面より若干の土師器・須恵器片が検出されたが、住居址の規模、1号住居址との前後関係等を明らかにすることはできなかった。残った北・西壁より方形プランと考えられる。

4号住居址

1号住居址の西より住居址の床と考えられるたたきしめられた面、その面に見られる焼け面及び焼土を検出した。この面より若干の土師器・須恵器片を検出し、またこの東の部分よりカマドの一部と考えられる焼土塊が検出された。

5号住居址（図版3）

南北4.8m、東西4.5mの方形プランの竪穴住居址で、北壁中央部に長い煙道を有するカマドがある。壁は大部分が工事により削られ、壁の基部のみが残ったものらしく、6～10cm前後のゆるい立ち

上がりが検出された。

床は1号住居址と同じ構造を有する貼り床で、壁に沿って幅80cm、深さ15～20cmの浅いV字形の溝を掘り、その部分は貼り床とし、中央部の掘り込まれない部分はたたきしめた床となっている。柱穴は検出されなかった。床面上より竪穴住居の構造材と考えられる炭化した木材が検出されたが、これから柱の位置を推定できる状態ではなかった。

カマドは北壁中央部にあり、外幅1.15m、内幅80cm、袖の長さ1mとなっているが、上の部分はほとんどが削られており、上部の構造は不明である。煙道も上が削られ、基部のみ検出され、そこから推定すると幅20～30cm、長さ約1.2m程度のものと考えられる。（木本元治）

第4章　遺　　物

勝利ヶ岡遺跡の出土遺物としては、土師器・須恵器の他に、砥石1点が検出されている。遺物について、各住居址別に述べる。

1号住居址

＜土師器＞（図版4－1～4・6）

本住居址より出土の土師器は、杯・甕などおよそ50個体を上回る。しかし、破損しているものが多く、形状の知れるものは少量にすぎない。

実測可能な甕は、1点のみである。この甕(図版4－6)は、体部下半だけが残存していたもので、内外面ともに黄褐色を呈するが、焼成は良く固く締まっている。胎土は、比較的大粒の石英・雲母を含み粗い。外面底部より体部にかけて篦状工具による削り痕（以下篦削り）があり、さらにその後、底部付近を右から左の方向に篦削りが施されている。底部全体にも削り痕がみられる。内面は、幅約1.3cmの篦整形の後、刷毛目状の整形痕がみられる。この外、1号住居址より出土の甕には、底部に木葉痕をもつもの、内面が黒色処理されているものとが、それぞれ3個体ずつ共伴している。

杯は4個体である。図版4－1・2は、ともに丸底で体部中位に段を有している。1の杯は2よりも段が明確であり、口径18.3cm、高さ3.6cmと大形のものである。口縁部に軽い屈曲がみられる。体部段より底部にかけて、篦による整形が施されている。内面は黒色処理され、体部から底部にかけて篦磨きが行われている。2の杯は小形であるが、内湾気味に立ち上がり、器は深い。胎土は雲母・石英粒子を含み、特に体部下半は粗い。内面は、口縁より体部上半部に横方向の篦磨きを行い。体部下半より底部は、一方向へ篦磨きの後に方形状の磨きが施されている。

図版4－3・4の杯は、1号住居址より出土したものであるが、住居上面のかく乱により出土地点は不明である。これらは轆轤により調整されたもので、内面に篦磨きが施されている。4は、底部に放射状磨きの後に一方向への磨き、さらに体部は、横磨きが丁寧に行われている。底部の切り離しは、轆轤回転による篦切りである。3は、底部との稜線近くが轆轤回転により篦削りされ、底部全体にも行われている。したがって、切り離しは不明である。

＜須恵器＞（図版4－5）

1号住居より出土の須恵器は、小破片8点のみである。図版4－5は、丸底の様相を示し、体部下半で「く」の字状に屈曲する。轆轤調整され、焼成も良く、内外面とも灰紫色を呈し、部分的に焼成時に生じたと思われる釉がみられる。

2号住居址

＜土師器＞（図版4－7～9・11～13）

土師器では杯・甕・蓋が検出されている。杯は口縁部資料で6個体、底部資料で8個体が識別できた。これらはすべて轆轤調整、内面黒色処理、篦磨きがなされたものであるが、底部の再調整の技法から回転篦削りによるもの（図版4－9）と手特ち篦削りによるもの（図版4－7・8）の2群に分けることができる。

回転篦削り再調整のものは、比較的大形で推定直径16.0cm、高さ6.05cmである。器形は深く、比較的大形の底を有し、底部からの立ち上がりは急である。内面は黒色処理篦磨きがなされ、光沢を有している。底部の磨きは放射状である。切り離し技法は、体部下半より底部全体が再調整されているため不明である。

手持ち篦削り再調整を有するグループは、上記のものに対して比較的小形のものが多く、実測可能な2個も口径12.6cm、高さ3.4cm、口径12.7cm、高さ3.7cmである。底部からの立ち上がりは比較的緩やかで、体部は丸味を有している。底部には篦切りの痕と考えられるかすかな痕跡がみられる。内面黒色処理、篦磨きがなされ光沢がある。底部の磨きの方向は、実測できたものは2個とも放射状であるが、破片の内には格子状のものもあり、放射状3個、格子状4個となっている。

甕は、口縁部資料で11個体を識別できた。すべて轆轤調整によるものである。大形と小形の2種類あり、大形には、完全な形を復元できたものはない。図版4－12・13は小形のもので、大きさを測定できたものは、口径15.2cm、高さ16.6cmであり、他もこれに近い大きさである。口唇は角張り、頸部は「く」の字形にくびれ外反する。体部下半より底部にかけては、手持ち篦削りによる再調整が施され、底部は丸底状を呈する。内面には底部から頸部にかけて、巻き上げと考えられる痕跡がみられる。焼成・胎土とも良好で、やや赤味がかった茶色を呈する。

大形のものは、口唇が小形と類似し、体部下半に手持ち篦削りが施されているが、口縁は、さらに

強く外反するらしいものが多い。２個体が、内面黒色処理され篦磨きがなされている。甕の割合は、小形４、大形７となり、内面黒色処理されているものは、大形のみである。

蓋は１例のみで（図版４—11）内外面とも黒色処理と篦磨きが施されている。外面は、低いドーム状をなし、口縁付近は平らになる。口縁端は、断面が丸味を帯びた三角形を呈する。つまみは欠損して無い。内面は平行の篦磨きが施されており、やや中央よりの部分に焼成後つけたと考えられる。細い線描きの「メ」印がみられる。胎土・焼成とも良好である。

＜須恵器＞（図版４—10）

須恵器は土師器に対して極めて少なく、７片を検出したのみである。杯は４個体分が識別できたが図上復元できたものは１個体のみである。これらは再調整及び切り離し技法により区別される。図版４—10は、回転糸切りにより切り離し、体部下半に手持ち篦削りを施したものであり、もう一方は底部との稜線付近から底部全面に、手持ち篦削りを施したものである。後者と考えられる破片には、篦切りの痕跡が観察されるものが２例あり、このグループの切り離しは、篦切りによったものと考えられる。

その他、高台付杯の破片と考えられるもの１片と、甕の破片と考えられるもの２片を検出している。甕の破片の方には、外面にたたき目がみられる。

３号住居址

＜土師器＞（図版４—14～18・20）

本住居址より出土の土師器で復元できたものは、杯５個体、鉢１個体である。

鉢形の形態を呈する図版４—20の土器は、口径17.6㎝、器高は体部下半が欠損しており不明である。器の最大径は、18.2㎝で体部上半の口縁に近い位置にある。体部は手持ちによる篦削りが行われ、口縁部には、横なでが施されている。口縁部内面は、部分的に篦削りをし、その後外面同様横なでされている。体部には、細い刷毛目がみられる。胎土は石英・細砂を含み粗い。

３号住居址より出土の杯は、轆轤調整され、底部は、切り離しの後に再調整されているものがほとんどであるが、図版４—16の１点のみ回転による篦切り痕を残している。この土器は、本住居址出土遺物中で最も保存が良いもので、胎土も緻密で細砂粒を含む。口径13.6㎝、器高3.9㎝と比較的小型である。内湾気味に立ち上る体部全体に、轆轤調整後になでつけが行われ、内面は黒色処理が施されている。底部より放射状方向の篦磨きが体部まで延び、口縁部では、横方向への磨きが施されている。

図版４—14・17の杯は、体部下半より底部にかけて胎土悪く器面にかなり凹凸がみられる。実測できた14は、口径14.2㎝、器高4.8㎝で器形は深く、他もこれに近い形態と思われ、いずれも丸味をもってカーブする体部下半から底部に移行する外面は、その境としての稜線が不鮮明な様相を呈する。

14は、体部上半に刷毛目状の痕跡が観察される。内面黒色処理され、底部から口縁にかけて横方向の篦磨きが施されている。17は底部に放射状篦磨きが施されている。

図版4—18は、上記のものと異なり、底部との稜線付近に手持ち篦削り再調整が行われ、底部全体にも及んでいる。内面は、黒色処理され、底部に方形状磨きが行われている。

図版4—15は、口径12.0㎝、推定器高3.6㎝と小型で、丸底風の底部を有するものと思われる。体部中位に段の痕跡をかるく残し、器厚も0.4～0.7㎝と極端に厚みを増している。胎土は細砂粒を含み緻密である。

その他に数点ではあるが、甕の破片が出土している。これらは、1・2号住居址出土のものと同様に内面黒褐色処理が施され、丁寧に篦磨きされたものである。体部との境より口縁にかけて、刷毛による整形痕を残す。色調は茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

＜須恵器＞（図版4—19）

須恵器は、杯3片、甕2片のみである。図版4—19は、器の2分の1を残存する杯である。轆轤調整され、底部との稜線近くに手持ちによる篦削り再調整が施されている。底部切り離しは、回転糸切りである。色調は灰色を呈し胎土は砂粒を含み緻密である。

4号住居址

＜土師器＞（図版6—1～3）

4号住居址出土の土師器は、台付杯1点を除き、ほとんどが細い破片で検出された。図版6—1の底部を比較的明瞭に残存する杯の外は、復元不可能である。

実測できた杯は、口縁付近を欠損しているため全体の大きさは不明である。底部は0.9㎝と厚い平底をもち、体部は丸味をおびて立ち上がる。底部との稜線付近に手持ちの篦削り再調整が施され、底部全体にも軽く行われている。切り離しは、回転篦切りの痕が観察される。その中央部に焼成後に付けられたとみられる「十」字状の刻線がある。内面は黒色処理され、横方向の篦磨きが施されている。

図版6—2は器高3.8㎝、口径16.0㎝の逆八の字状に開きながら立ち上がる台付杯である。高台は、轆轤調整により上底状に製作されたものである。内・外面とも再調整痕は全くみられず、内面黄褐色、外面赤褐色を呈し、大粒の長石・砂を含み、胎土はかなり粗くもろい。吸水性大である。

その他、甕の破片も数点検出されている。いずれも内面黒色処理が施されているものであるが、細片にて詳細は不明である。また墨書銘土器が1点出土している（図版6—3）。土師器杯の底部破片であるが、体部下半に手持ちによる篦削りが施されており、回転糸切りの切り離し痕がみられる底部中央部に、墨書されたものである。さらに、墨書された後に鋭利な器具で刻まれたと思われる図形状の刻線が観察される。

＜須恵器＞（図版6—4～7、7—2）

須恵器は、量的には少ないが、比較的大きな破片で出土した。甕は、口縁部の破片２点を含み、計５点である。口縁部は、0.8cmの幅でほぼ垂直に立ち上がり、口唇部に、かるい凹をもつ。胎土は緻密であり焼成は良好である。胴部の破片は、外面灰黒色を呈し、平行なたたき目条痕をもつ。

壺は、頸部破片と頸付け根部から肩部までの破片。計３点である。これらの土器片には、釉がみられる。前者は青緑色を呈し、内面にも灰青色の釉がみられ、薄い器厚のもので、後者は深緑色で厚く、内面にガラス状の細いひびが入っている。

図版６－４・６・７の杯は、ともに口縁部を欠損しているものである。轆轤調整されているが、底部との稜線付近に施される再調整より、手持ち篦削りを行うもの（図版６－４・７）と回転篦削りを行うもの（図版６－６）の２種類を指摘できる。図版６－６の再調整は、底部周縁部までみられる。中心部の観察より、回転糸切り技法により切り離しが行われたものである。図版６－４も同様であるが、図版６－７は、底部全体に篦により整形されており、切り離しは不明である。

図版６－５は、須恵器蓋である。口縁断面三角形を呈し、低く立ち上がる。身受をもたず肩の張った形態を示す。径3.5cmのリング状のつまみをもち、肩の部分にゆるい回転による糸切りの痕を残す。胴部上半部に回転篦による整形痕がみられ、下半部と天井部は、轆轤調整の段を有する。灰色で焼成は良好である。

５号住居址

＜土師器＞（図版５－１・２・４～９）

図版５－５～９の甕は、カマド内よりの出土である。これらは、器面の再調整技法より、刷毛状の工具を使用しているもの（５・６）、篦状工具によりいわゆる篦削りされているもの（７・８・９）とに２分される。前者のものは、ともに底部を欠損しており器高は不明であるが、口径は21.7cm、19.0cmを有する。「く」の字状に開く口縁は、体部との境にかるい段をもち、胴部は外張りせず円筒状を呈するものである。最大径は、口径に同じである。図版５－６は、口縁部が角張らず丸味をもっており、その部分になで付けの整形が施されている。内面は、篦により横状の整形がなされ、下半部に粘土帯の接合痕がみられる。

後者のものは、上記と同様器体半分を欠損しており、全体の大きさを知ることは不可能である。図版５－７の甕は、上半部を残すもので「く」の字状に開く口縁部は、内面に体部との境に稜線を有する。外面には、横なでが施されている。表面には、体部より口縁部の方向に篦削りが施され、削りの際の切り込み痕とみられる幅0.3cm程の細長い凹が列状に認められる。内面は、うろこ状のまだら模様が全面にみられる。図版５－８・９は、器体上半部を欠くもので丸底風の不安定な底部を有する。図版５－９は、内面に粘土帯の痕跡が観察され、底部付近にかけて篦による整形と、細かい刷毛痕が認められる。しかし、外面は、有機質の炭化物の付着により一部分に篦削りの痕跡を認める外は、細

部にわたる観察は不可能である。図版５－８は、体部より底部にかけて、幅約1.5cmの篦削りを行い、その後、底部付近を横に篦削りしている。色調は黄褐色を呈し、胎土緻密にて、焼成も良好なものである。

図版５－４は、口径19.0cmに対して高さ13.0cmと、浅い鉢形を呈する土器である。底部平底にて木葉痕を有する。体部は薄く立ち上がり、口縁は外に開く。体部下半に垂直上方向への篦削りが行われ、上半部にもかるくみられるが、口縁部では調整後なでが施されている。内面口縁にもなでが施され、口頸以下には篦による整形がみられ、底部近くには、２か所に細い布目痕が付着している。

＜須恵器＞（図版５－10）

図版５－10は、本住居址出土の須恵器中で、唯一の実測可能なものである。口径16.7cm、高さは底部を欠損しているため不明であるが、底部に平たい台を有する摺鉢状を呈するものと思われる。器面に数条の凹線がめぐり、その後、全体になで付けが行われている。胎土緻密で、色調は茶褐色を呈する。

＜その他＞

石製品として砥石１点が検出されている（図版５－３）。長さ7.9cm、幅2.4cm、厚さは中央部で2.1cmを計る。４面とも使用された痕跡を残している。

６号住居址

＜土師器＞（図版６－８～10）

本住居址より出土の土器は、ほとんどが細片であり、形状の知れるものはごく少量である。実測できた図版６－８～10は、土師器の杯であるが、製作上より同一の手法で作られたものである。これらはすべて、轆轤により調整され、底部との稜線付近に手持ち篦削りを行い、さらに、底部には篦削りを施している。内面は黒色処理がなされ、底部に放射状篦磨きを施している。８は高さ3.7cm、口径14.6cmを計り、他もこれに近い数値を示すものと思われる。（高倉敏明）

第５章　考　　察

第１節　遺　　物

土　師　器

当遺跡出土遺物の大部分が土器類で、しかもそのほとんどが土師器であるので、土師器を中心として考察を進める。

当遺跡出土の土師器は、杯の製作技法と形態から2群に分けて考えることができる。

〔Ⅰ群〕　成形に轆轤を用いない丸底のもので、1号住居址に伴っている。

〔Ⅱ群〕　成形に轆轤を用いた平底のもので、2・3・4・6号住居址に伴っている。両方とも内面は磨きと黒色処理が施されている。

Ⅰ群の杯は第4章で述べたとおり、内面黒色処理、有段丸底といわれているものであり、内面にも明瞭な段が見られ、氏家和典の「第5型式(栗囲式)」に相当するものと考えられる。1号住居址の土器からは甕の形態は明確には知り得なかったが、この型式には一般的にいわゆる「長胴甕」が伴っており、1号住居址の甕もこの形態に属するものであろう。しかし1号住居址のごとく内面黒色処理の甕が伴った報告例にはまだ接していない。

また、これに伴った須恵器（図版4－5）に類似したものは、郡山市麓山窯址B窯出土の杯に見られる（梅宮1960)。栗囲式の土師器にこのような形態に類似した須恵器が伴う例としては宮城県刈田郡蔵王町塩沢北遺跡第1号住居址がある（藤沼1971、岡田・桑原1974)。

これらの実年代としては多賀城跡において多賀城の創建ころ、すなわち8世紀前半と位置づけがなされている（岡田他1970）。県内においても西白河郡矢吹町かに沢窯跡における所見よりして、この年代観は支持できそうである（永山1974）。なお5号住居址も甕の形態からしてⅠ群土器と同時期かそれに近い時期と考えられる。

Ⅱ群は轆轤成形の平底杯を有するものを一括した。しかし細かく見ると、ほとんどが体下部から底部にかけて再調整があるものであり、2号住居址では再調製に手持ち篦削りを中心として、回転篦削りを伴ってる。また3号住居址においては回転篦切りによる再調製の無いものを伴うなど相異点も見られる。ともあれ、2・3・4・6号住居址とも、杯のほとんどが再調製のあるもので、しかも各住居址とも共通して、手持ち篦削りの技法をもつ杯を伴うことなどから、これらは比較的接近した時期の所産と考えてよさそうである。

一方、再調製のある轆轤成形の杯を有する土師器のなかにも、仏具壇遺跡（馬目1971)、金重谷地遺跡1・2・8号住居址（第25編参照）のごとく、再調製に回転篦削りを主に用いたグループの存在も考えられる。この両者の関係は不明であるが、金重谷地遺跡では1号住居址と3号ピットの土器から見て両者を分離できる傾向を示している。しかし、回転篦削りによる再調製を有するグループと考えられる金重谷地2号住居址と本遺跡2号住居址が、同一の形態・技法を有する杯を出土している点は注意する必要がある。

また2号住居址から伴出した須恵器杯は、岡田茂弘・桑原滋郎の分類によれば、2b類と8類（図版4－10）に当るものである（岡田　桑原1974)。この2b類は福島市小倉寺高畑窯址より発見され、8世紀初頭の位置付けがなされており（工藤1969)、土師器に比べ古い時代のものであるが、8類は8

世紀末～9世紀前半の年代が与えられており、多賀城においては8類に伴う 6b類と回転篦削り再調製のある土師器杯が伴っているとのことであり（岡田　桑原 1974)、これらからすると 当遺跡の第Ⅱ群土器は、9世紀前半までさかのぼりうる可能性も考えられる。

第2節　住　居　址

当遺跡において、住居址の形態がある程度明確となったのは、1・2・5号住居址であり、3号住居址は床についてのみ判明した。

形態的には1・5号住居址は、壁の内側に幅約1mの溝を掘り、その溝に黒色土を埋め込みその上に粘土を用い貼り床をし、中央の方形に残った部分は地山（白色粘土）をたたきしめ床にするという特殊な形態を呈する。2号住居址は平らに掘りくぼめた中に黒色土を埋め込み、その上に貼り床をするという一般的な形態をとり、3号もほぼ同じ形態を示している。

これらの住居址は、調査以前に工事により削られ周壁の確認もできないものがほとんどであり、5号住居址のみ削平された面より黒色土を約10cm前後掘り込んだ壁が検出された。壁の高さはさらに高かったと考えられる。おそらく周壁が確認されなかった住居址も、本来は竪穴住居址であったと考えるのが妥当であろう。

これらのうち1・5号住居址に類似した例を県内にもとめると、同一時期（栗囲式）のものは発見されていない。時期不明のものでは、郡山市大槻町中柵遺跡で3例（田中・金崎・渡辺1972)、西白河郡西郷村米村遺跡で1例検出されている（小滝他1974)。

中柵遺跡の例は3軒とも詳しい時期は不明であり、溝の上に貼り床もされていない。これらは形態的には埼玉県等で発見されている同様の竪穴住居址に近いものと考えられる（栗原・野部・今泉1973等)。米村遺跡の例は溝の幅が所により1～0.3mとかなり不均一で、時期的にも新しいものである。

このように類例を見た場合、1・5号住居址の構造・形態は時間的にも地域的にも、今のところかなり孤立したものらしい。したがって2・3号住居址においても貼り床が見られるのと考えあわせ、当遺跡付近における地下水位の高さと関連した特殊な例とすることもできる。しかし現在このような例は本遺跡の2例のみなので、さらに類例を待って考える必要があろう。　（木本元治）

参　考　文　献

吉田　義・伊藤七郎・鈴木敬治　「東北地方南部の阿武隈川流域の第四紀編年と２・３の問題」『地団研専報　第15号』1969
鈴木　啓　『東北新幹線遺跡分布調査報告書』（福島県文化財調査報告書　第33集）1972
氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史　第14輯』1957
梅宮　茂　「郡山市麓山窯跡調査報告」『福島県文化財調査報告書　第８集』1960
藤沼邦彦　「塩沢北遺跡」『宮城県文化財調査報告書　第24集』1971
岡田茂弘・桑原滋郎　「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅰ』　1974
永山倉造　「かに沢窯跡」『福島県考古学年報　３』1973（その他、永山の教示による。）
岡田茂弘ほか　『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1970』
馬目順一　『岩代陣場遺跡の研究』　福島県本宮町教育委員会　1971
工藤雅樹　「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」『福島市の文化財』1969
金崎佳生・田中正能・渡辺征一　『郡山市大槻町中柵遺跡発掘調査概報』福島県郡山市教育委員会　1972
小滝利意・藤田正家・藤田定興　『よねむら』（福島県西白河郡西郷村遺跡調査概報）1974
栗原文蔵・野部徳秋・今泉泰之　「岩の上・雉子山」『埼玉県遺跡発掘調査報告　第１集』1973

第20編　中柵（なかやらい）遺跡

遺跡番号	22—245
所在地	郡山市大槻町字中柵
時代・種類	奈良～平安時代、集落址（工房）
調査期間	昭和45年8月1日～15日
担当者	梅宮　茂
調査員	田中正能　古川　猛　鈴木安信
協力機関	郡山市教育委員会　郡山市史編集室　郡山地方史研究会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 349
　第1節　位置と地形…… 349
　第2節　周辺の遺跡…… 349

第2章　調査経過…… 352

第3章　遺　　構…… 354
　第1節　住居址・その他…… 354

第4章　遺　　物…… 356
　第1節　土　　器…… 356
　第2節　石　　器…… 362

第5章　考　　察…… 362

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

中柵（なかやらい）遺跡は郡山市大槻町にある。郡山駅より安積高校前をぬける郡山～三代～若松線の道路を約7㎞で大槻町に入る。大槻町にある長泉寺の墓地の裏に当たる地域が当遺跡である。郡山～若松線の道路が南方500ｍの所を水田の間を東西に走っている。

当遺跡は郡山盆地の西端の位置にあり、奥羽中央分水山脈東麓部より大槻扇状地と呼ばれる洪積原が約15㎞東西にわたり阿武隈川まで発達しており、この洪積原を大小の河川が浸食して、浅く深く谷を作った。しかしやがてこれらの各河川は、その勢を失い、郡山盆地に湿地・池沼・丘陵をつくりあげた。中柵遺跡は南北を浅い谷で区切られた東西に細長く形成された微高丘陵上にある。標高270ｍ、東西2,000ｍ、南北400ｍの平坦な台地で、東より字城之内・字中柵・字上柵・字八頭・字西勝木・字長泥の6字名にわかれている。この字名の中柵が今回の調査地域となった。南は浅い浸食谷をはさんで一面に水田が広がり、北は浅い浸食谷をへだてて、標高315ｍの葉山独立山塊に接している。

南北に浅い谷に囲まれたこの平坦な洪積台地は全域が遺跡であって、現在は果樹園・畑であり、いずれも少しく東に向かって下降する丘陵である。西北に約45ｍの高い山を背負い、一望平地の彼方には那須山系と奥羽中央分水山脈を眺め、東に阿武隈山系の山々を見わたすことのできる位置にある。前記字名の地域には縄文後期～晩期・弥生・土師・須恵などの土器や石器が全面に散布している。

地質は上部に20～30㎝の腐植土層が被覆し、その下部10㎝前後の厚さで黄褐色粘土層、その下部は40㎝程度の厚さで黄色粘土層、さらに下部は黄色砂礫層となっている（図版1）。

第2節　周辺の遺跡

当遺跡を含め大槻町の原始・古代の遺跡は隣接して密集している。大槻町全域が遺跡の上にあるといっても過言でないのである。

旧石器時代から縄文・弥生・古墳・土師・須恵・古窯跡と継続した各時代の遺跡・遺物が非常に多彩に、そして豊富に残されている土地である。近年開発が進められ、圃場整備・宅地造成・工場団地造成などにより遺跡の破壊は連日続いている。

中柵遺跡をとりまく3㎞以内に限定すると、第1表のごとき遺跡41か所を数えられる。

第1表　周辺遺跡一覧表（3*km*以内）

	遺跡名	番号	所在地	種類	地目	当遺跡からの直線距離	備考
1	八頭	22—162	郡山市大槻町八頭	土師	田、畑	500*m*	
2	隠居面	22—159	〃　〃矢地内字隠居面	縄文、弥生、土師	〃	800	昭和48年調査
3	矢地内	22—203	〃　〃　矢地内	土師、須恵	〃	600	
4	鎌倉北		〃　〃　鎌倉北	縄文	〃	700	
5	葉山古墳群		〃　〃　葉山	円墳	山林	200	
6	城の内	22—169	〃　〃　城の内	土師、館	宅地	400	
7	北部古墳群		〃　〃　新地下	円墳	田、畑	1,000	
8	福良沢	22—158	〃　〃　福良沢	弥生、土師	畑	1,200	昭和44年調査
9	蝦夷壇古墳	22—163	〃　〃　蝦夷壇	円墳	〃	1,200	〃
10	島在家古墳	22—166	〃　〃　島在家	〃	山林	2,800	
11	新町堀	22—173	〃　〃　新町堀	土師	田	600	
12	堂山西	22—175	〃　〃　太田字堂山西	〃	畑	1,200	昭和45年調査
13	南地蔵谷地		〃　〃　太田	〃	畑		昭和46年調査
14	堂山古墳群	22—176	〃　〃　堂山	円墳	山林	1,300	
15	堂山東古墳	22—178	〃　〃　堂山東	〃	畑	1,400	
16	堂山北遺跡		〃　〃　堂山北	土師	田	1,100	
17	太田	22—182	〃　〃　太田	弥生、土師	畑、田	2,000	昭和46年調査
18	壇ノ腰	22—180	〃　〃　壇ノ腰	縄文、土師	畑、田	1,400	昭和45年調査
19	壇ノ腰古墳	22—179	〃　〃　〃	円墳	山林	1,400	
20	胡桃沢	22—156	〃　〃　胡桃沢	弥生、土師	畑	1,500	
21	松井東	22—174	〃　〃　太田字松井東	弥生、土師	〃	1,000	昭和45年調査
22	針生(A)	22—222	〃　〃　針生	土師	〃	2,000	
23	針生(B)	22—225	〃　〃　〃	〃	〃	2,400	
24	針生古墳群		〃　〃　静	円墳	山林、畑	2,200	1基市史跡指定 埴輪出土
25	麦塚古墳	22—213	〃　〃　室ノ木	前方後円墳	畑	2,400	昭和35年調査
26	室ノ木古墳	22—210	〃　〃　〃	円墳	〃	2,200	
27	阿良久	22—209	〃　〃　阿良久	古窯跡	山林	2,200	
28	花輪	22—208	〃　〃　花輪	〃	〃	2,400	昭和39年調査
29	原田	22—216	〃　〃　原田	〃	〃	2,400	
30	水門		〃　〃　水門	〃	〃	2,800	
31	窯場		〃　片平町高森	縄文	田、畑	1,800	

	遺跡名	番号	所在地	種類	地目	当遺跡からの直線距離	備考
32	出磐山	22—155	郡山市片平町出珪山	土師、須恵	山林、畑	1,800m	昭和45年調査
33	川向		〃　〃　川向	〃　〃	〃　〃	2,700	
34	原		〃　〃　原	縄文	畑、田	2,800	
35	石蔵		〃　逢瀬町石蔵	〃	〃	2,300	
36	成田		〃　安積町成田	土師、須恵	田	3,000	
37	日向		〃　〃　川田字日向	〃	畑	3,000	
38	丸山古墳	22—307	〃　〃　成田字丸山	円墳	山林	3,000	
39	丸山	22—306	〃　〃　荒井字丸山	土師	畑	3,000	
40	大槻館		〃　大槻町城の内	中世館	宅地	400	
41	〃　山館		〃　〃　麓山	〃	山林	200	

縄文遺跡は、6か所発見されている。時期は縄文中期の大木7aから大木10式期に及んでおり、後期の土器も発見されている。この外3kmを越す3,300mの位置に、関東地方の茅山式に比定される尖底土器を出土した縄文早期の古亀田遺跡が東方に接している。

弥生遺跡は、大槻町全域に分布している。当遺跡からも出土しており、縄文遺跡にいずれも複合している。福良沢・柏山・南地蔵谷地・古亀田遺跡は学術的発掘調査が行われた。いずれも小竪穴墓の遺跡であって南御山Ⅱ式期が多く、南御山Ⅰ式期は少ない。小竪穴墓の数多い分布を考えると、弥生時代の集落址は当然探究されなければならないが、その後の古墳時代、さらに歴史時代に破壊の憂目にあったことも推察できる。

古墳時代関係では、中柵遺跡が所在する大槻町内には明治初期に約180基の古墳が数えられたと記録されている。当遺跡の北へ、わずか200mをへだてる独立丘陵の葉山には、現在7基の箱石積石室を持つ古墳が確認されている。東に接続している大槻町中心街の上町・下町・殿町にもかつて古墳群があり、福良沢・太田・山下・室ノ木・針生・静・原田の各部落にも古墳が群集していた。南方にそびえる堂山には現在30余基の古墳がある。いずれも6世紀より7世紀のもので、埴輪を伴う前方後円墳・円墳があり、ほとんどが周湟を備えている。副葬品は、玉類はもちろん石製模造品・金銅製馬具・耳環・馬鈴・銅鏃・直刀・蕨手刀など各種のものを伴出している。いずれも明治初期の盗掘と、安積開墾さらに第2次大戦中の飛行場建設、引続いた開拓によって、ほとんどが消滅してしまった。

これら古墳群形成の母体となったと推定される集落も数多くみられ、土師器・須恵器の分布は、大槻町全域にわたっている。その時期は、関東地方の和泉式の終末から鬼高式までの型式が含まれている。墨書銘のある土師器も出土している。

須恵器は、大槻町にある古窯址群との関連で見ると、大槻町地内には針生・原田・花輪・山下・金掘・新川などの須恵窯址があり、杯・椀・瓶・壺など多様な器形を焼成している。これらの窯址の一部は、奈良時代末から平安初期にわたり郡山市内に建造された寺院・郡衙に使用した瓦を焼成している。郡山には現在6種類の鐙瓦（素弁6葉・8葉・複弁、さらにそれらの変化文様瓦）が、いずれもこれらの大槻町地内の窯址から出土しており、相当長い期間にわたった稼動を示している。

当遺跡は中柵（なかやらい）の名称が示すように、古代の城柵であったと想定され、中柵に続く西の地坪名は上柵、東は城（き）の内が字名となって残されている。北にそびえる葉山は館跡であり、中世に及んでさらに山城として拡張整備され、今も土塁がめぐり、階段状になっている。中柵遺跡に接する南東は安積伊東氏の戦国時代館跡として、天正の落城と大槻伊東氏の没落を伝えている。

第2章　調　査　経　過

昭和45年8月1日より発掘調査を行う。自動車道中心杭を基準に南北に4*m*幅のトレンチを設定、東より西にA～Oまで、南北の線は1～22まで番号を付した。発掘現場は馬鈴薯・陸稲・小豆などが耕作されている畑地のみで作業は容易であった。全域に散布する縄文土器・弥生土器・土師器片の表面採取を行い、相当量を採集した。作業はA・B・C・D・E・Fのトレンチを南北に発掘した。Bトレンチ―10地点より住居址の側壁を発見、Cトレンチ―8地点で柱穴らしき黒色の落ち込み、および円形竪穴2基が検出された。さらにDトレンチ―13～15地点に柱穴群と竪穴2基を検出する。当遺跡は南側において表土下20*cm*の深さで黄褐色粘土層、北側は表土下50～60*cm*の深さで黄褐色粘土層となり、南より北に向かって約10°の緩傾斜地であり、遺構はいずれも黄褐色粘土層を掘り下げて設けられており、土色が判然としていたために、調査は容易であった。Bトレンチ検出の住居址西壁を追究してAトレンチを拡張し、竪穴住居址一軒のプランを確認する。隅丸方形で6×7*m*、柱穴4本、カマドは北壁中央部に設けられ南に開口して、北壁外に煙道を設け、焚口部左右には土師器甕が倒立して使用されており、杯・甕片・滑石製円板などが床面上から出土した。床面端部四周には、幅10*cm*の周溝がめぐらされていた。C・D―6～11まで拡張し、対向せる6本の柱穴列を検出、中央部に径40*cm*程の浅い焼土のみがあり、遺物はなく高床式建造物の存在が考えられた。これに接して北側に径2*m*、深さ40*cm*の竪穴2基があり、内部に充満する黒灰層のなかから内外面黒色処理の土師器椀、「主」の篦書きの須恵器杯が出土し、さらに円面硯の破片も出土した。円面硯は今まで郡山市内で出土のものの内、直径が最大のもので、脚台は欠けているが、多賀城出土の円面硯に等しい形態と大き

第2表　遺構一覧表

遺構	面積	プラン	カマド・炉の位置	柱穴	出土遺物	備考
1号竪穴住居址	600×700	隅丸方形	カマド（北）	4	土師器甕片、砥石、鉄鏃	住居の東3分の1程土盛。貼床，中央部堅く焼土層有り
1号高床住居址	270×307	高床式 1間×1間	なし	4	なし	西半分より屋外に2×3m厚さ10cmの焼土層有り
2号高床住居址	400×450	高床式 2間×2間	なし	6	なし	平天尺で13.3尺×14.8尺，東西軸に柱が有ると思われるが未調査
1号遺構	365×365	胴張隅丸方形	なし	屋外7	土師器杯・甕片、須恵器甕片	東壁際より西に0.6×1.3mの貯蔵ピット有り
2号遺構	270×365	不整楕円形	炉（北東）	なし	土師器片、須恵器片、石器4	縄文時代の遺物が混入
3号遺構	250×300	不整円形	なし	屋外6	円面硯	床面より25cm上に厚25cmの焼土混層有り
4号遺構	350×365	不整楕円形	なし	なし	砥石2、須恵器杯篦書	竪穴内は焼土混で埋る「主」と判読
5号遺構	145×185	胴張隅丸方形	炉（北）	なし	なし	0.72㎡の面積を持つ炉で全体の4割弱をしめる
6号遺構	185×225	隅丸方形	炉（北）	なし	なし	1.50×1.80mの面積を持つ炉で，全体の4割弱をしめる
7号遺構	190×340	不整楕円形	なし	なし	土師器杯2、蓋片、須恵器蓋1	北壁際より0.7×1mに焼土混層の広がり有り
8号遺構	140×160	胴張隅丸方形	炉（南）	なし	土師器杯・甕底部	0.7 ×1.25mの面積を持つ炉で全体の4割をしめる
9号遺構	215×320	胴張隅丸方形	炉（北西）	なし	土師器甕底部、須恵器蓋片	0.8×1.8mの面積を持つ炉で全体の2割強をしめる
10号遺構	360×470	不整隅丸方形	炉2基（南と北）	なし	土師器杯・甕2	竪穴内に8か所の大小ピットあり，全面に黄色粘土がブロック状にあり
11号遺構	200×345	不整楕円形	なし	なし	なし	北西隅に0.3×1.5mの細長いピットあり
12号遺構	260×335	不整隅丸方形	なし	なし	なし	当遺構の東側を南北に走る溝あり，この溝は15号遺構に接続する
13号遺構	400×530	不整隅丸方形	炉2基（西と東）	なし	須恵器杯片2、羽口6、鉱滓、布目瓦1	当遺構を幅40cm，深さ55cmの溝が北東に縦断
14号遺構	490×不明	隅丸方形	炉2基（北東）	なし	土師器甕2個体分	全掘できずプランは判明しない
15号遺構	260×290	張出付隅丸方形	なし	なし	土師器杯3、須恵器杯1、甕片	西壁隅1.2×1.8m，東壁隅に1×1.4mのピット有り

さのものである。D・Eトレンチ―7～16の地点では、竪穴6基、入り乱れた柱穴群が検出された。これら竪穴中より有茎石鏃・つまみ付須恵器蓋・砥石・鉄片・土師器杯・甕片が出土した。さらにK・L・M・N・Oの拡張に入るとKトレンチ―9～10の地点では対向する4個の柱穴群を検出した。J・K―11～12では焼土塊にまじってカマド跡と想定される遺構が、復元可能な土師器の杯・甕片とともに検出された。K・L・M・Oトレンチ―17～21を拡張、不整楕円形竪穴で、深さ45cm、幅30cmの溝が東西に貫通しているものと、溝が一方にのみつけられている竪穴が検出された。竪穴内には円形の掘り込みが数個あり、布目平瓦片・須恵器・土製羽口片・鉄滓塊が出土し、鍛冶工房址と考えられる。住居址・竪穴・柱穴の検出と、実測図の作製、記録写真撮影を併せて行い、8月15日発掘作業を完了した（図版2，3）。

第3章　遺　　構

第1節　住居址・その他

当中柵遺跡の発掘調査により、発見された遺構は、いずれも土師器を伴うものであった。竪穴住居址が1軒、高床式建物と認められる遺構2軒、その他竪穴遺構が検出された。

1号住居址（図版18）

平面プランは、隅丸方形で、床は叩き締められ、一部は盛土が貼られている。床面積6×7m、床と壁間に北西壁にそって浅い溝がほぼ建物の半周をめぐっている。カマドは北壁中央部に設けられ、煙道は壁外に1mほど突き出た姿に築かれている。床面ほぼ中央部には径40cmの焼土痕が残されており、カマド付近及び床面より土師器の杯片・甕片・鉄片・砥石を出土した。柱穴は4本でいずれも対角線上にある。

1号高床住居址（図版4・18）

高床式構造をもった建物跡と考えられる。規模は3.7×2.7mである。柱間の西側半分の地上には、焼土塊が見いだされたが、建物の性格は明らかでない。

2号高床住居址

柱間2間平方の高床式建物址で規模は4.50×4mである。柱間はほぼ対角線上にあるが、東隅1本が少し外れているが、1棟の建造物と推定される。

1号遺構（図版19）

隅丸方形をなし、規模が3.65×3.65mの竪穴であり、竪穴の外側に7個の柱穴群が検出され、竪穴に接して130×60cmのピットが付属している。カマド・炉等の痕跡はなかった。

2号遺構（図版19）

平面は不整円形の竪穴で、舟底状の床となっている。規模は3.65×2.70mである。中心部に焼土塊や土師器・須恵器片と共に、縄文土器片が混在していた。柱穴は不明確でかつ遺構とマッチしなかった。

3号遺構（図版5・19）

不正確な円形に掘りこまれた竪穴遺構で、規模は3×2.5m である。その外側に6本の柱穴があった。土師器・須恵器片にまじって、大型の円面硯が脚部を失ったまま出土している。床に焼土あり。

4号遺構（図版5・19）

ほぼ円形に掘りこまれた竪穴遺構で、規模は3.65×3.50mである。床面の一部に焼土がおかれてある。柱穴は確認されるまでに至らなかった。炉・カマドなどの存在は認められなかった。床面上には砥石などが土器片と共に混在していた。

7号遺構（図版7・20）

隅丸方形の竪穴遺構で、規模は3.40×1.90mである。柱穴は竪穴の内外ともに確認されなかった。カマドもなく床面上に焼土の痕跡を大きく残していた。

10号遺構（図版21）

不整隅丸方形のプランを持つ竪穴遺構で、規模は4.70×3.60mである。柱穴の存在を明らかにすることはできなかった。カマドはなく、炉が南北に2か所確認された。この遺構内には、大小ピットが8個もある。焼土塊のなかに羽口・鉄滓・平瓦片などが発見され、住居より工房的性格をもったものと考えられる。

13号遺構（図版10・21）

不整隅丸方形のプランを持つ竪穴遺構で、規模は5.30×4.00mである。柱穴は明らかではない。カマドはなく、炉が東西に2か所確認された。遺構を北東から南西に40cm、深さ55cmの溝が縦断している。須恵器杯片2、羽口6、布目瓦1が出土している。

15号遺構（図版22）

隅丸方形の竪穴で、規模は2.60×2.90mである。東壁・西壁の隅にはピットが掘られている。炉・カマドの形跡は確認されなかったが、焼土が床面にあった。

総　　括

以上、主要遺構について記したが、大部分の竪穴遺構は、柱穴・カマド・炉を備えていない点、一般の住居址とみることは疑問点が残る。なお、1号高床建造物址、2号高床建造物址と類似すると思

われる柱穴群が多数確認されており、正確な検出はできなかったが、前記2軒以外にも高床建造物の存在が推定される。

これらに加えて、貯蔵穴、及び工房址と考えられるピットがあり、土器片・石器片・鉄器片を包蔵しており、当遺跡全体よりみて、工房址としてのピットと見るべきと考える。

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

1　土　師　器

＜高　　杯＞

完形品ではなく、脚部のみであるが、高さは低く杯接合部より外方にひろがり、刷毛目が全体に施されている。杯部の形状は明らかでない。

＜　甕　＞

完形品はなく破片のみであるが、長胴形のものがほとんどである。口縁部は大きく外反しており、横なでされ、胴部は輪積みで内外共に横なでで整形仕上げられており、表面全体に刷毛目痕がある。高さ・胴部径などは不明である。底部は木葉痕が施されたものが多い。

＜　甑　＞

表面は丁寧な篦磨きをし、焼成も良いものが多いが、完形品は出土しなかった。口縁部は、わずかに外反している。輪積成法によっている。

＜　椀　＞（図版23—5）

完形品で出土したもので、直径17.4*cm*、高さ9.3*cm*、内外ともに黒色処理されている。口縁部はわずかに内湾している。底部からゆるやかに外反して、それから直立に立ち上がるため、胴部下方にふくらみをもっている。横なで、篦磨きが行われ、丁寧な仕上げである。

＜　杯　＞（図版23—2～4・7）

丸底・平底の2種類が出土している。丸底は篦削り、平底は糸切りの痕跡を示している。胴部はいずれも横なで、篦磨きがかけられている。器形は底部から大きく外反するものと、底部より、少しく外反して直立し、そのまま口縁となるものが混在している。胴部に稜線をもつものは少ない。内面は口縁まで横の篦磨き、底部は放射状篦磨きが行われ、黒色処理が行われている。焼成もよい。

2　須　恵　器

第3表　遺物一覧表

（H＝土師器、S＝須恵器、K_A＝内面黒色処理土師器、K_B＝内外面黒色処理土師器）

遺構名	遺物番号	種別	胎土・焼成	法量	形態の特徴	底部	技法
1号竪穴住居址	1	K_A	微量の長石を含み、焼成は良好。	径－13cm 高－不明	杯（破片） 浅く丸い底部はゆるく立上りながら外にひらく。（口縁部との境の段は浅く体部との間に明瞭な境がないものも多く見られる）	丸底 荒い箆削り。	（外側）底部は箆削りを施し、口縁部は横なでを行う。 （内側）箆磨きは底部と体部に分けて施される。（底部の磨きは一方向と放射状の2種の型がある。）
	2	K_B	灰黒色を呈し，焼成は良好。	径－不明 高－不明	杯（破片） 体部と底部の間に境はなく、低くひらく。口径に対し器高は小さいようである。	丸底 箆削りのあとに箆磨きを施す。	（外側）体部・底部ともに箆削りのあと、横・縦にこまかく箆磨きを施す。 （内側）体部・底部ともに丁寧な箆磨きを施す。
	3	H	長石を含む器膚はもろい。	径－不明 高－不明	甕（破片） 体部下半は底部から丸みをもって立上り、体部上半は直線的に立上り、口縁端がわずかながら外反するようである。	平底 小葉文	（外側）体部は荒い箆削りのあと、なでを行う。刷毛目を縦方向に施し再調整を行うものもある。どちらも口縁部は横なでを行い軽く外へ開く。 （内側）体下部は縦方向になでを施し上半部は刷毛で横なでを行う。
2号遺構	1	K_B	灰黒色を呈し焼成は良好。	径－不明 高－不明	杯（破片） 底部から直線的に立上る体部をもつ。立上りは底径に比して非常に少なく皿状を呈するようである。	平底 一定方向の箆磨きを行う。	1号竪穴住居の2に同じ。
	2	K_A	微量の長石を含み焼成良好。	径－不明 高－不明	杯（破片） 低く丸い底部と直線的に立上る体部をもつ。内側に屈折はない。（小葉文の底部をもつ甕が伴う）	丸底 箆削り	（外側）体部は横なでを施し、底部は右方向への箆削りを行う。 （内側）体部は口縁と平行する箆磨き，底部は放射上の箆磨きを施す。
1号遺構	1	K_A	長石を多く含む器肉は不規則な厚さである。	径－14.5cm 高－ 5.1cm	杯 箆削りが荒いために体部は平底風の底部から丸みをもって立上り、口縁部は心もち外反する。箆削りが不十分なため不安定な器形である。	丸底 不定方向に荒く箆削り。	（外側）体部は不定方向に荒い箆削りを施しているが、不十分のため、らせん状に巻上の痕をのこす。口縁部は3cm幅に轆轤を使用しない横なでを行う。 （内側）不定方向に雑然と箆磨きを行う。
	2	K_B	微量の長石を含む。灰黒色を呈す。	径－不明 高－不明	杯（破片） 軽くひらく体部と平底風な底部の間に浅い凹線を施す、口径に比して器高は小さいようである。	丸底 箆磨き	（外側）体部は箆削りを施し、口縁部は横なでを行い軽く箆磨きを行う。 （内側）底部はらせん状に箆磨き体部は横方向に箆磨きを行う。

遺構名	遺物番号	種別	胎土・焼成	法量	形態の特徴	底部	技法
1号遺構	3	HA	長石を多く含み焼成は良好。	径－不明 高－不明	甕（破片） 1号竪穴住居址3に同じ。	1号竪穴住居址3に同じ	1号竪穴住居址3に同じ
3号遺構	1	S	微量の石英を含む、海の部分に灰かぶりが著しい。	径－20cm 高－不明	円面硯 体部は水平を保つ円形の陸とU状に造られた海とに分けられる。陸の外辺に凹線が回る。海の立上りは直線的に開き、外側に段をつける。台脚は欠損してるが12個の短冊型の窓をもっていたと思われる。	再調整の為不明である。	（外側）体部は横なでを施し、底部下半部は再調整のなでを行う。 （内側）轆轤使用の調整痕が全般に認められる。 陸の裏面凹部は轆轤上でえぐり取った可能性がある。
4号遺構	1	S	灰白色を呈す、焼成良好。	径－不明 高－不明	杯（破片） 破片のため全体はうかがえないが、体部は直線的に開くものと思われる。	平底 糸切痕の上に「主」の箆書有り。	（外側）体部上半は轆轤調整を施し下半部は轆轤上での箆削りと思われる。 （内側）中心部より底部一面にらせん状の凹線がみられ中心部はわずかに凸状を示す。
	2	KB	灰黒色を呈し焼成は良好。	径－不明 高－不明	甕（破片） 破片のため全体はうかがえないが、直線的に低く開いた体部に立上った口唇部をもったものと思われる。	不明	内外ともに横方向に丁寧な箆磨きを施す。天井部は不定方向。（1号竪穴住居址の3に見られる甕と2号遺構の2に見られる杯を伴う。）
5号遺構	1	KB	灰黒色を呈し焼成は良好。	径－不明 高－不明	杯（破片） 丸底で直線的に立上る。口径に比して器高は小さいようである。	不明	内外両面ともに横方向に丁寧な箆磨きを施す底部は不定方向。
	2	H	長石を含み焼成は良好	径－不明 高－不明	1号竪穴住居址の3に同じ。甕	平底 小葉文	（外側）体部は荒い縦方向の箆削りを施し口縁部は横なでを行い軽く開く。
6号遺構	1	H	焼成良好。	径－不明 高－不明	1号竪穴住居址の3に同じ。甕	平底 小葉文	体部は箆削りのあと、櫛状工具でオサエを施す口縁部は横なでを行う。
7号遺構	1	KA	微量の石英が含まれる焼成は悪い	径－11.5cm 高－ 4.0cm	杯 底部からかすかな丸みをもって直線的に立上る体部をもつ。	平底 箆削り中心部がわずかながら凹状を示す。	（外側）体部上半は轆轤調整、下半部端は轆轤上の箆削りと思われる。口縁端は5㎜程、箆磨きを施する。 （内側）体部は口縁の平行に箆磨きを施し、底部は一方向からの箆磨きを行う。

遺構名	遺物番号	種別	胎土・焼成	法量	形態の特徴	底部	技法
7号遺構	2	H	長石・焼土を含む、焼成は不良	径－14.0cm 高－ 5.0cm	杯 径の大きい底部から直線的に開く体部をもつ。	平底 篦削り	（外側）体部上半は轆轤調整し、下半部端は轆轤上での篦削りと思われる。口縁端5㎜程、横方に篦磨きを行う。 （内側）底部の摩滅が著しく不明である。体部は横方向の篦磨きを行う。
	3	S	焼成は良好	径－16.4cm 高－ 4.0cm	蓋 低い体部はゆるく外反し口唇部を「く」の字に立上げている。扁平なつまみを持つ。	つまみを付けたのち、軽く天井部は轆轤上で再調整を施す。	（外側）体部は轆轤調整を施す。天井部と体部下半は、轆轤使用の篦削りを行う。 （内側）轆轤調整痕を全体に残す。
	4	KA	細い焼土を含む、炭素は器肉に1㎜程、浸透	径－不明 高－不明	蓋（破片） 全体はうかがえないが、軽く外反気味に開く体部をもっていたとおもわれる。擬宝珠のつまみはアンバランスに高い。	天井部は篦起しのちにつまみを取り付け轆轤上で押さえたものと思われる。	（外側）体部下半は轆轤上の篦削りと思われる。天井部は再調整を行う。 （内側）らせん状の凹線が中心部に残る。天井部は縦、横方向に細く篦磨きを施す。
8号遺構	1	KB	灰黒色を呈す焼成は不良。	径－11.0cm 高－ 3.0cm	杯 体部は丸みをもって立上り、やや内反する口縁をもつ。体部と底部との境はない。	丸底 篦磨きを不定方向に細く行う。	（外側）篦削りのあとに，体部は横方向，底部には縦、横方向に篦磨きを行う。 （内側）なでのあとに体部は横方向、底部は放射状に篦磨きを施す。
9号遺構	1	S	焼成は良好	径－不明 高－不明	蓋（破片） 低く直線的に開いた体部に立上った口唇部をもったものと思われる。	不明	内外ともに轆轤調整を行い、口唇部外面に凹状の線がめぐる。
10号遺構	1	KA	焼成良好	径－不明 高－不明	杯（破片） 低い底部から直線的に開く、境はなくなる。	丸底 篦削り	（外側）体部下半，底部は篦削りを施し、口縁部は軽く横なでを行う。 （内側）口縁部は横方向に底部は放射状に篦磨きを施す。
	2	KA	極めて粒子のこまい胎土である。炭素の付着が不完全。焼成不良。	径－13.5cm 高－ 3.5cm	杯 低い体部は丸みをもって直線的に開く。 （KB の丸底杯片が伴出）	平底 轆轤使用の篦削り？	（外側）体部上半は轆轤使用の調整？下半部・底部は轆轤使用？の篦削り。 （内側）体部・底部ともに不完全な篦磨きを施す。

遺構名	遺物番号	種別	胎土・焼成	法量	形態の特徴	底部	技法
10号遺構	3	KA	石英長石焼土を含む焼成良好。	径－21.0cm 高－16.5cm	蓋 底部から直線的に立上った体部は上部でくびれ「く」の字形に開く口縁をもつ。口唇部外部外面に凹線が走る。	平底 不定方向からの篦削りを施し、中心部凹状を示す。	（外側）体部は3段に分けて縦方向の篦削りを施し、口縁部は轆轤使用の再調整を行う。 （内側）底部は放射状に粗く篦磨きを行い体部上半までのばす。上半はその上に口縁部と平行に丁寧に篦磨きを施す。篦磨きの精粗に炭素の付着は左右されるようである。
11号遺構	1	KA	焼成良好	径－不明 高－不明	杯（破片） 低い体部は直線的に開くようである。	丸底 篦削り	（外側）底部は不定方向の篦削り （内側）一定方向の篦磨きを行う。 （木葉文の底部が伴出）
13号遺構	1	S	焼成良好	径－不明 高－不明	高台付杯（破片2個） 底部のみで全体はうかがえない。外にふんばる高台を付す。	高台付 糸切り	体部下半は轆轤使用の篦削りを施す。内側は轆轤使用痕を残す。
	2	KA	焼成不良	径－不明 高－不明	高台付杯（破片） 底部のみで全体はうかがえない。外にふんばる高台を付す。	高台付 糸切り	外側は上欄1と同じであるが内面は不定方向に篦磨きを行い、炭素を付着させる。
15号遺構	1	KB	微量の長石を含み焼成は良好。灰黒色を呈す。	径－17.0cm 高－ 9.0cm	椀 不安定な平底から、体部は丸みをもって立上りやや内反を示す。体部と口縁部の間にわずかながら境が認められる。	平底 不定方向の荒い篦削り。	（外側）体部は荒い篦削りの上を篦磨きを施す。口縁部は2cmの幅で横なでを行う。 （内側）体部は横方向の篦磨きを施し、底部は不定方向の篦磨きを行う。
	2	KA	器肉の大半に炭素の浸透を示す。	径－15.0cm 高－ 4.0cm	杯 体部はわずかながら丸みをもって開く。内側底部からの立上りは丸底杯が示すカーブと似る。	平底 四方向から交互に篦削りを行う。	（外側）体部は轆轤調整し、浅くらせん状の凹線が走る。 （内側）底部は放射状、体部は横方向の篦磨きを施す。
	3	KA	長石を含む焼土が所々に見える。焼成は非常にわるい。	径－13.0cm 高－ 4.5cm	杯 体部は丸みをもって立上る。中央部に指幅の凹線が2本走る。判読できない墨書が記される。	平底 篦削り	（外側）体部は轆轤調整を施し、体下部、底部は轆轤使用の篦削りと思われる。 （内側）底部はきわめて細く放射状に篦磨きを施し体部は横方向の篦磨きを行う。

遺構名	遺物番号	種別	胎土・焼成	法量	形態の特徴	底部	技法
15号遺構	4	KA	焼成は非常に良好	径－13.0cm 高－ 4.5cm	杯 底部から丸みをもって開く体部をもつ。	平底 篦起し	（外側）体部は轆轤調整を施し、底部は篦起しを行う。体下部は篦削りのち、轆轤上で再調整のなでを行った痕跡がある。 （内側）体部は口縁と平行に篦磨きを行い，底部は放射状に施す。
	5	KB	灰黒色を呈す。焼成は非常に良好。	径－不明 高－不明	蓋（破片） 低く直線的に開く体部に「く」の字形に立上った口唇部をもつものとおもわれる。（丸底らしいKBの破片が3片伴出）	不明	（外側）轆轤調整時に生じたとおもわれる。指幅の凹線が体部の上半部に見られる。横方向に丁寧な篦磨きを施している。 （内側）横方向の篦磨きを行う。
	6	KA	灰黒色を呈す。焼成は良好	径－不明 高－不明	杯（破片） 底部から直線的に開く体部をもっていたと思われる。	平底 篦削り	（外側）体下部・底部は轆轤使用の篦削りと思われる。 （内側）丁寧な篦磨きを放射状に施す。
14号遺構	1	KA	微量の石英長石を含む焼成良好	径－13.0cm 高－ 4.5cm	杯 体部は底部からわずかな丸みをもって立上り　縁端が軽く外反する。 体部に「行万」の墨書あり（他に1点、墨書銘片あり）	平底 篦削り	（外側）体部上半は轆轤調整を施し、体下部・底部は轆轤上での篦削りを行う。 （内側）底部は放射状の篦磨きを施し、体部は横方向の篦磨きを行う。その境に3本程の円を磨きで描く。
	2	S	焼成良好	径－不明 高－不明	杯（破片） 破片のために全体はうかがえないが底部から直線的に立上るものとおもわれる。	平底 篦削り	（外側）体部上半は轆轤使用痕を示し、下半部・底部は轆轤上での篦削りを行う。 （内側）中心部よりらせん状に指幅の凹線が底部にみられる。
	3	KA	焼成良好	径－不明 高－不明	13号遺構の2に同じ	高台付 糸切り	13号遺構の2に同じ。
	4	H	焼成良好	径－18.0cm 高－32.0cm	蓋 底部からゆるやかに体部上半まで立上る。「く」の字形に開く口縁部をもつ。口唇部外面に凹線が走る。	平底 篦削り	（外側）体部上半は轆轤使用の横なで痕がある。下半部は縦方向に篦削りのち、軽く縦方向になでを施す。 （内側）下半部は縦、上半部は横方向のなでを行う体部をもつ。

（『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報2』による）

＜甕・杯・蓋＞（図版23－6）

甕は肩が張り大きく外反するものが数点、完形品はない。杯は糸切り底であり、底部からまっすぐ外反した形態を推測させる破片がほとんどである。つまみの付いた蓋片が出たが、宝珠形のつまみで焼成もよい。

3　円　面　硯（図版12，24—1～3）

直径21.2㎝、脚部は欠損している。他に2個の形状を異にする破片が出土、当遺跡に合せて3個体の円面硯の存在が確認できた。

4　箆書・墨書銘土器（図版13，24—4）

須恵器杯の底部に「主」と箆書きされたものが出土している。「圭」のようにも読めるが「主」と読んだ。墨書銘は「行万」と読めるようであるが、人名とも思われるが明らかでなく、他に2個の土師器杯に墨書があるが、判読不能である。

第2節　石　　器

1　砥　　石（図版23—1）

砂岩質のものと、硬質のもの2種がある。長方形状に加工して使用したものと、自然石そのままで用いられたものが出土している。荒砥用の粒のあらい、やわらかな質のものも検出された。他に使用目的の明らかでない、研摩用（土器整形用か）の石片が出土している。

2　石　　鏃

2号遺構内より完形の有茎1点と無茎2点、破損1点が出土した。ピットに充満している黒色土層中にあり、混入したものと見られる。

第5章　考　　察

当遺跡は、南北を浅い浸食谷にかこまれた洪積微高丘陵である。遺跡南面は浅い浸食谷をへだてて、同高度の洪積平原（現在水田化されている）が展開しており、北はやはり浸食低湿地を（幅約80ｍ）へだてて独立丘陵「葉山」（標高 315ｍ）があり、当遺跡の防風・防塞の役目をはたしている。山麓部には6世紀後半と見られる円墳が群集し、麓山丘陵の東に鞍部状につらなる春日山は、巨大な前方後円状をもった山容で、周辺に円墳群がある。麓山山頂部には祭祀遺跡も知られているなど、古代遺

跡にかこまれた東南にひらけた微高地に遺跡は立地し、北西部は山林となって、生活環境にめぐまれた条件をそなえた位置にある。

今回の発掘調査によって、検出されたものは歴史時代の竪穴住居址、高床式建造物と思われる掘立柱の構造、工房址と推定される竪穴遺構などで、縄文時代・弥生時代の遺構は発見されなかった。

中柵遺跡の性格は、ひとつの集落址としてとらえることができるが、発掘調査は必要にせまられた行政調査であって、遺跡の一部分だけだったために遺跡の性格などを結論づけられないことを前提条件として執筆をおこなった。

竪穴遺構は、隅丸方形・円形のプランを持っており、規模別の遺構数は次のとおりである。

1 m ×1.9m……1軒	4 m ×4.9m……2軒
2 m ×2.9m……2軒	5 m ×5.9m……1軒
3 m ×3.9m……8軒	6 m × 7 m ……1軒

3 ×3.9mプランの8軒が圧倒的に多い。時期的には8世紀ころの土師集落址であり、最大の6×7mの1号竪穴住居址のみがカマドをもち、他のほとんどが炉址のみである。さらにこれらの竪穴遺構は柱穴をもつものと、柱穴・カマドとも無い竪穴に分類できる。

さらに柱穴も整然としない竪穴住居址にくらべて、高床式建物と見られる遺構の多いことである。ことに12・13号遺構などの竪穴は、工房址との関連を思わせる土製鞴口（羽口）・鉄滓塊が出土し、製鉄の痕跡を残している。これらを出土した遺物から考察すると、次にあげるような特質が見い出される。

出土遺物は、土師器・須恵器を主としている。土師器の杯には轆轤を使用しない篦削りの丸底と、轆轤回転糸切り平底の2種があり、いずれも丁寧に仕上げられたものが多く、磨きがかけられている。杯は内面もしくは内外面に黒色処理をほどこされたものが、大部分をしめ、焼成も良い。須恵器は灰白色を呈し、胎土も精選されており、焼成も良好なものが多い。大型甕片では内面に青海波文のあるものは少ない。土師器では壺・甑・杯・高杯・椀の各種であるが、15号遺構からは、内外ともに黒色処理された椀が完形で出土している。須恵器では皿・壺・甕・蓋付杯などの破片が出土し、さらに縄目文様をもつ平瓦片が、工房址と思われる竪穴より出土している。おそらく高熱の箇所に使用されたと見てよい。

円面硯が3個体検出されている。2個体は脚台のみであるが、3号遺構から出土した円面硯は径20cm、脚台に短冊型の12の窓をもち、陸の部分は長期間の使用を物語るように、平滑すぎるほどに、なめらかである。他の2個体脚台片は、径も透かし窓もそれぞれに異なり別個のものである。

墨書銘土器は、3体個出土している。10号遺構から出土したものは、外側面に古雅な筆法で画かれているが判読できない。

篦書きは、須恵器2個体が出土した。そのひとつに杯の底部に「主」と書かれ、他のものは蓋の内側に書かれてあるが、破片のため解読できない。

鉄器類については、鉄刀・刀子・鏃の破片が数片出土しているが、律令制下集落として当然予想される鉄斧・鋤先・鎌など農具類の出土がなかった。

石器は、表土中および竪穴内より数点の有茎石鏃が出土した。このほか磨き減らされた大・小の砥石が竪穴内から出土している。ただし下げ砥石は出土していない。

以上のごとく当遺跡の遺構・遺物の大略を記述したが、当地方では明治初期より当遺跡一帯を安積軍団（三代格、弘仁六年三月二十三日条）の所在地に推定する説があるが、速断は避けなければならない。しかし竪穴住居と高床式建物の割合比、墨書銘土器・篦書須恵器などより、郷里制による農民村落とは考えられない性格がうかがえる。発掘区域内の小範囲の地点から円面硯3個体の検出、端正で達筆な墨書・篦書などは、文字の素養の確かな人々の存在がうかがえ、公的な組織の存在が考えられる。

これらは郡山の地名が示すように、古代の「阿尺」（安積）として東北で最も早い時代に国造がおかれ、律令制下にいたり郡衙・郡家の所在地として郡山の地名が発生したことは、ひとしく学界先学の確認するところである。これらを立証するものとして麦塚古墳・麓山瓦窯跡・清水台廃寺跡なども重要な要素とみられ、古代政治・経済・文化の各般において福島県南の中心的位置を明らかにしている。おそらく4世紀後半には、大和政権支配下に組みこまれたものであろう。5世紀古墳群が、市内田村町徳定古墳群として確認されておることからも推測できる。

『続日本紀』（神護景雲三年三月十三日条、阿部安積臣賜姓）、『続日本紀』（宝亀三年七月十七日、阿部安積臣賜姓）を初めとして安積郡の人々が、「六国史」上に姿を見せていることからも判るように、大和朝廷の東北征定の重要基地として、人的・物的に貢献したのが、安積すなわち郡山の古代の人々であり、東北征定を支える力ともなっていたのが現実である。

このことは篦書銘「主」の文字を考える場合も同じであろう。承和十年十一月十六日条に「安積郡百姓・外少初位下狛造子押麻呂一烟云々」の賜姓が『続日本後紀』に見られる。「主」は、少初位下相当官である主殿・主工・主馬の官名を書いたものでなかろうか。安積軍団・安積郡衙の配給品であったものか、今後の問題であるが、それぞれ律令制下にあった当時の安積郡の郷戸なり、組織に組みこまれた人々が日常生活し使用したものであって、奈良から平安時代初期における郡山の姿を示す貴重な資料としての実状を伝えている。8世紀より9世紀に及ぶ、郡山及び東北の歴史解明に重要な意義をもつ遺跡ということができる。

追記するが、地名である中柵は、「柵」を「サク」とは呼ばずに、古くから「ヤライ」と呼んでいる。

（田中正能）

第21編　林　合　遺　跡

遺跡番号	30―（新）
所在地	岩瀬郡鏡石町大字仁井田字林合
時代・種類	奈良・平安時代　集落及び鍛冶工房址
調査期間	昭和45年８月５日～８月13日
担当者	渡辺一雄
調査員	菅原文也　鈴木重美　木暮幸雄　小針 繁
協力機関	鏡石町教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 367
　第1節　位置と地形…… 367
　第2節　周辺の遺跡…… 367

第2章　調査経過…… 367

第3章　遺　　構…… 368
　第1節　住居址…… 368

第4章　遺　　物…… 371
　第1節　土　　器…… 371
　第2節　鉄滓・羽口・石器…… 372

第5章　ま と め…… 373

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

本遺跡は、鏡石駅前の中心街から西北1.3㎞に位置する仁井田部落の南側にある。付近を流れる釈迦堂川からは、東側700ｍの所にあり、北と東と南を小高い丘で囲まれたふところのような所に位置している。西側はひらけており、ゆるやかな傾斜をなしつつ低くなっていく。

他の多くの古墳時代の集落址のような微高地でない点に、その特殊な性格を示すようである。戦後行われた農業構造改善事業の結果、遺跡のすぐ南側に小さな農業用水の堤ができており、水をたたえている。この堤の東側、谷奥になる位置には、古くからの堤があるが現在は干上っていて、湿地となっている。しかし、堤の生成時期や用途などは明らかでない。またこの堤に対する俗称などはないようであるが、遺跡の性格を考える上に欠くことのできない資料となろう。（図版２）

第2節　周辺の遺跡

鏡石町内には、旧石器時代の遺跡として有名な成田遺跡をはじめとして、各時代の各種の遺跡がある。しかし今なお周知の遺跡は必ずしも多い方とはいえず、未知の遺跡が埋もれたままになっていると考えられる。

概報においては、林合遺跡と地続きの岡の内遺跡とをあわせて「岡の内・林合遺跡」と一括呼称したが、岡の内遺跡にはみるべき遺構や遺物がなかったので、本報告ではこれをカットした。

周辺には土師器や須恵器を伴う時期の集落址が多い。仏具壇遺跡・二タ通り遺跡・桜岡遺跡・蘭塔山遺跡などがそれである。立地条件は必ずしも一定してはいないようで、小高い丘の上やその周囲の低地にあるものもある。しかし低地とはいっても微高地となっている所である。　（渡辺一雄）

第2章　調査経過

昭和43年の予備調査によって、一辺５ｍ程の方形プランを有する住居址が存在することが確認され

ていた。これを手掛かりに本調査を開始した。東西方向に、幅2m、長さ30mのトレンチを3m間隔に設定。さらに北側に2×16mと、2×26mのトレンチを各1本設定。まず予備調査時の住居址の検出を最初に行う。煙道があらわれたので、表土層を全面はいでしまう。1トレンチ西端は、黒土層深く鉄滓やふいごの羽口が出土する。製鉄遺構と関係するものでないかと推察された。表土層は概して浅く、40cm前後の所が多い。2トレンチからも4基の遺構が検出され、かなり密度が高いことがわかる。4トレンチ、5トレンチからは、何の遺構も検出されず、地形上もだんだんと低くなっていくので、これより北に遺構があるとは思われず、以後もっぱら1トレンチから3トレンチの間を、重点的に調査することとする。

2トレンチ西端は表土層が薄く、1本の溝が東西に走るが、西端は路線外に延びているので、全容をつかめない。またこの溝は、住居址の壁面を切っているので、時間的差があることがわかる。

鉄滓やふいごの羽口などが出土する遺構は2か所あり、プランは重複しており調査に苦労する。ただ遺構内から検出される土師器が、いくつかの時期に分かれるので、これを手掛かりに重複している遺構も分離できるようである。（図版1）　（渡辺一雄）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

1号住居址（図版3・4・6）

本遺跡の中で、もっとも典型的な住居址である。発掘した遺構の中では西北端に位置しており、比較的よく残存している。プランは一辺5.2mの正方形である。また煙道の長さは1.7mである。このようなプランは、当然何らかの設計の上に構築されたものと考えられる。5.2mは26cm尺でちょうど20尺となるが、この尺の存在を知らない。4柱穴は、4等分割の中心に位置する。したがってプランの対角線上にいずれもある。また煙道は、時代が新しくなるにつれて一般的に長くなるのであるが、本例では、その長さは住居址中心より柱穴までの長さに等しい。

住居址は、ローム層の地山を約35cm掘り込み、柱穴は床面よりさらに35～48cm深くなっている。床面は平坦で、南壁中央より西壁にかけて浅い溝をめぐらしている。床面には炭化材や焼土が一面に認められ、この住居址は焼失したものと思われる。東壁中央の壁面上部は、ややくずれている上に固くなっており、あるいはここを出入口として使用したものかも知れない。カマドは粘土でつくられ、両

袖を有する。中に2個の石片を用い支柱としている。カマド周辺の床面から、土師器が検出されたが、他の遺物はなかった。煙道先端部は、土師器を利用して煙抜きとしている。

2号住居址（図版5・6）

1号住居址より小型であるが、そのプラン構成は酷似している。長い煙道は北向きであり、粘土でつくられた両袖つきのカマドをもっている。柱穴は4個あるが、径が小さく浅いので普通の柱穴とも言えない点がある。また南壁中央近くにも、小ピットがあるが、柱穴とは思われぬものであった。

プランは3.4×3.2mで、煙道は中央より東寄りに設けられている。表土層は約40cmで、黒色土である。その下はローム層の地山で、これを25cm掘り込んで住居址としている。

住居址内の覆土中より須恵器片を1片発見したが、同時期のものか否かは不明である。

3号住居址（図版7・8）

西側の3分の2程はすでに破壊されて現存せず、東側の山に近い方のみ3分の1程度が検出された。中央よりやや南寄りに、カマドと長い煙道を有している。この東にのびる煙道は、長さ70cm、幅20cmである。カマドに隣接して、東南の角に、長径1.2m、幅70cm、深さ35cmの楕円形を呈したピットが検出された。底は平らであるが焼けている。ピット底部が焼けていることや、1号住居址や2号住居址には、このようなピットがない点を考えると、あるいは、これも野鍛冶遺構の一部かも知れないが、それと認められる遺物は検出され得なかった。

4号住居址（図版9）

現状では遺構のほとんど全部が失われており、わずかにかぎ状にまがる住居址の壁面の一部を残すのみである。この壁面を切って、東西に走る幅10cm前後で、深さ20cm程の溝がある。溝の東端は1号住居址の南側で終っている。西側は自動車道の路線外まで続くので、どのようにのびるのか不明である。この溝は、住居址の壁面を切って設けられていることを考えれば、時期的に新しいものといえよう。またこの溝がどのような性格を有するものであるかも不明である。

5号住居址（図版10・16）

この地区にある三つの遺構の中で、一番初めにつくられた住居址である。南に長い煙道をもち、カマド部分は失われており詳細不明である。ここからの土師器は糸切痕底部以前のものであった。壁面の下には浅いがいわゆる排水溝がめぐらされている。カマドの手前にあたる部分に深いピットと浅いピットがそれぞれ円形にあるが、この住居址のものとするには不自然である。また北側のコーナーにもピットが存在する。煙道先端部付近には、焼土の固まりがあったが、煙道との関係はよくわからない。

6号住居址（図版10・16）

5号住居址の北側に設けられているが、5号住居址の方がレベルが低いので、これに貼り床状に盛

土して5号住居址をこわして設けられていることから、6号住居址の方が新しいことがわかる。北壁中央にカマドを設け、長い煙道をもつ。煙道先端は土師器と須恵器を利用して、煙出しとしている。したがって、これらの土器より古い時期にさかのぼるものではない。カマドの左側から検出された土師器杯も底部糸切痕を伴うものであった。また、カマドに向かって左側には円形のピットもあった。

7号住居址（図版11・12・16）

6号住居址の東側に並んで接している。切り合い関係からは、先後関係がはっきりしないが、検出された土師器には6号住居址よりも新しいものがみられる。

北壁中央にカマドを設け長い煙道をもっている。カマドの中央には石を置いて支脚として利用したものと思われる。カマドの右側にはピットがあり、左側には、土師器や羽口それに自然石が割合密集して検出された。

この7号住居址の中央部に径2*m*程の大きなピットがあり、内部の堆積物は土のほか炭や鉄滓が多量に含まれており、一部にはきれいな川砂の堆積もみられた。ピット内には径50*cm*程の石があり、3か所の部分に摩滅痕がみられる。またこの大ピットの南側にも広く分布して、鉄滓が多量に検出された。これら一連の羽口や鉄滓、それに川砂などの遺物群からみると、製鉄址ないし鍛冶工房址とみられるが、製鉄の炉と思われるものはないので、鍛冶工房址である可能性が強い。7号住居址のものか否かはっきりしないが、東壁にもカマドが設けられている。さらに、このカマドの下部には南北に走る溝がみられたが、その性格を明らかにすることはできなかった。

いずれにせよ7号住居址の床面を大きく掘り下げたピットは、住居址利用以降のものであろうし、これは鍛冶工房址と深い関係にあるものであろう。羽口の出土状況からみると、工房址の時期は、この新しい住居址とそう離れたものではないと考えてよい。

8号住居址（図版6・13・17）

この地点も三つの遺構が重複している。出土土器からみると、5号～7号住居址とほぼ同時期のもので、互いに相関連して営まれたものであろうか。

8号住居址は、3号住居址と同様に、東側にカマドを有し、9号・10号住居址によって切られている。

9号住居址（図版6・13・14・15・17）

8号住居址をこわして、やや大きい住居址としている。8号住居址のカマドの南側にカマドを設け、カマド内に太い羽口を1本立てている。あるいは支脚としたものかも知れないが、そうすると製鉄関係の遺物の再利用ということになり、年代関係でやや矛盾も感じられる。東南のコーナーには深さ25*cm*ほどのピットがある。また全体に南側は浅くなっているが、この浅い地盤は9号住居址の床面と考えられる。そして北側の一段深い所は、10号住居址の床面である。

10号住居址（図版6・13・17）

三つの遺構の中で、一番新しいと考えられる。残っていた壁面は北と西側で、南と東側は判然としなかった。カマドは北側に設けられており、カマドの左側には2個のピットが検出された。1.3×0.8mで深さ25cmを有する隅丸長方形のものは、あるいは9号住居址の北西コーナーとして認められるものかも知れない。このピットの中からは、炭と焼土が多量に検出された。床面中央よりやや東に径50cm深さ33cmの丸いピットが1個あるが、柱穴にしては大きすぎるし、またどの遺構に伴うものか不明である。

（渡辺一雄）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

1号住居址

土師器の杯2点、甕2点が復元可能である。杯は小型で平底のもの（図版18—3、19—1）と、丸底風平底のやや大型のもの（図版18—4、19—3）があり、前者は全面を篦磨きした上で黒色処理をしている。共に口縁が内湾気味で胎土も厚く、轆轤痕はみられない。

甕は2点（図版18—6・8、19—9・10）とも口縁部より胴部までの破片で底部を欠いている。上半分は、ほぼ垂直に立ちあがる直胴の胴部に、短く外反する口縁部をつけてある。図版19—10は、内面に有機物の炭化したものが付着している。本住居址よりは、他にも小破片若干が出土しているが、いずれもこれと同様の特徴を有するものであった。

5号住居址

カマドにすぐ接して検出された杯（図版19—7）は、やや小型で丸底である。口縁は立ち気味である。内面黒色処理を施している。東壁近くから、須恵器片と共に検出された大型の杯（図版18—10、19—5）は、丸底風で口縁は内湾している。内部に篦磨きがあり、黒色処理をしてある。

6号住居址

土師器杯（図版18—1・5、19—2・4）は、平底で、内外面に轆轤痕があり、底面は回転篦削り調整をしている。4には篦切りらしいものが見えるが明確ではない。内面黒色処理を施してある。

須恵器甕（図版20—16）は、カマドの煙道先端部より出土した。灰紫色で煤が付着している。平底で外面に叩き目が残り、内面に轆轤調整痕がみられる。同種の破片が他にもあるが、別個体のものか

否かは明らかでない。

7号住居址

土師器杯1点（図版19—6）が復元された。轆轤痕を有し、回転糸切痕がある。内面黒色処理を施している。

土師器甕3点（図版18—7・9・11、19—11～13）は、それぞれ個体差がある。いずれもカマド左側の土器・羽口・鉄滓などの密集地から検出されたものである。19—11は、胴部にふくらみの少ない円筒形胴に、短かく厚い外反する口縁を有するものである。19—13は、やや胴部にふくらみをみせ、「く」の字形に屈曲する短かい口縁を有するものである。19—12は胴部上半がやや開き気味で、そのまま外反する口縁につながるものである。

他に7号住居址全体から、土師器片・須恵器片が、かなり検出された。土師器には輪積痕を明瞭に残す厚手の甕破片、内面黒色処理のみられない轆轤痕のある高台付杯の破片もある。小破片のため復元できないが、本遺跡の中で一番新しい時期のもので、あるいは鍛冶遺構の時期と同一時期のものかも知れない。

8～10号住居址

切り合い関係が、はっきり区別できないので一括する。土師器杯（図版18—2、19—8）は、平底で厚手であり、口縁は立ち上がり気味に外反している。底部は篦削り処理をし、内面黒色処理されている。口縁には丁寧な、なで調整が見られるが、轆轤は使用されていない。床面より出土した。他に土師器の小片として、甕・杯などが若干あり、杯には明瞭に轆轤痕を有するものもある。また、回転糸切り痕を有する土師器杯底部もある。須恵器瓶の小破片もふくまれている。

第2節　鉄滓・羽口・石器

1　鉄　　滓

7号住居址内の大ピット及びその周辺からは、数十*kg*以上の多量の鉄滓が検出された。これら鉄滓も、今後さらに成分分析すれば、分類が可能となり、鍛冶遺構の内容がより明らかとなってくるものと考えられる。

2　羽　　口

図版20—4・5の羽口は、ほぼ同じ大きさで、長さ12.5*cm*、径7*cm*前後である。先端部は溶融物が付着している。粘土製。図版20—3は、9号住居址のカマドの中央に直立して検出された。長さ17.4*cm*で、前者より大型である。砂まじりの粘土で作られ、他と同様に先端部に溶融物が付着している。

3　石　　器

10号住居址に伴うものではないが、カマド付近の床面より石鏃1点が出土している（図版20—2)。頁岩製で長さ2.5cm、片面に細加工を施すが、裏面はバルブを残し、先端のみに加工を施してある。縄文時代のものであろうが、他には全く同時代のものは検出されていない。

7号住居址内に位置する大ピットの底におかれた大きな石は、3か所に大きな研摩痕を残している。一種の砥石として利用されたものであろうし、鍛冶遺構に伴うものであろう。（渡辺一雄）

第5章　ま　と　め

短期間の調査であったためと種々の攪乱により、遺構・遺物に混乱を来たすおそれがあるので、切り合い関係の遺構は、遺物との対比を無理に行わなかった。それでも確実な土器出土状態と切り合い関係から、5号住居址、6号住居址、7号住居址の順に新しくなるものと考えた。7号住居址の中にみられる鍛冶関係の遺構も、このピットと石と羽口と鉄滓と砂の出土のみでは、それ自体が鍛冶関係の遺構とみることにちゅうちょする。7号住居址自体がこの鍛冶遺構とみることはかなり困難であり、他の類例と比較してみなければ何ともいえない。

8号住居址、9号住居址、10号住居址についても、一応、番号の順に新しく築かれたものと考えたが、まだ多少疑問がないわけでもない。とくに、9号住居址のカマド内中央に大型の羽口を支脚がわりに立ててあるようにみえるのは、その羽口の使用年代がさかのぼることとなり、これら一連の製鉄遺構に関するものとの時代の対比を苦しくする。

土師器の編年からみると、8世紀から10世紀におよび、四つの時期にわけられるようである。1号住居址、2号住居址にみられる轆轤痕のみられないものが一番古く、次に3号住居址出土の糸切り痕のあらわれる直前の、篦削り調整のみられるものが続く。さらに回転糸切り痕のみられるものがあり、最後に高台付の杯が続くようである。5～7号住居址と8～10号住居址は、ほぼ同時期のものがみられ本遺跡で一番古い土師器を伴うものから9～10世紀の糸切り痕を伴うものまである。三つの時期がそれぞれ古い住居址から順に新しい住居址へと伴っているものと見たい。

製鉄遺構の中心は、今回調査地点と少し離れた所にあると思われるが、東側の小谷奥には古い沼もあることであり、水の利用と深い関係のあるこの地が選ばれたのであろう。（渡辺一雄）

第22編　二タ通り遺跡

遺跡番号	30—503
所在地	岩瀬郡鏡石町大字鏡田字二タ通り
時代・種類	奈良・平安時代　集落・工房址
調査期間	昭和45年８月22日～８月29日
担当者	永山倉造
調査員	岩田敏之　鈴木安信　高宮八郎　佐藤栄一　武田奥一
協力機関	鏡石町教育委員会　同公民館　阿武隈考古学研究会 鏡石町文化財調査委員会　須賀川高校社研部　岩瀬農高 校史学クラブ　須賀川女子高校社会クラブ

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 377
　第1節　位置と地形…… 377
　第2節　周辺の遺跡…… 377

第2章　調査経過…… 378

第3章　遺　　構…… 379
　第1節　住居址…… 379
　第2節　工房址…… 380
　第3節　円形ピット…… 382

第4章　遺　　物…… 382
　第1節　土　　器…… 382
　第2節　金属器…… 385

第5章　考　　察…… 385
　第1節　鍛冶集団について…… 385
　第2節　遺構について…… 386
　第3節　土器について…… 386
　第4節　砂鉄状黒砂…… 387

第1章　環境と遺跡

第1節　位置と地形

二タ通り遺跡は、東北本線の鏡石駅の西北方1,200mにあり、釈迦堂川に近い仁井田部落に通ずる旧道沿いにある。東及び北部は水田となり、南方は小高い丘陵となっている。西方は仁井田部落に接する畑作地帯の平坦地である。遺跡はこの平地の東部に広がり、標高276mである。

第2節　周辺の遺跡

阿武隈川支流の釈迦堂川沿岸には遺跡が多い。二タ通り遺跡の近くの主要遺跡について述べることとする。

〔仁井田前山遺跡〕　この遺跡は開田工事により未調査のまま破壊されたものである。所在調査の際発見された遺物は、土師器・須恵器を主としていたが、また土塁を巡らした豪族屋敷とも考えられるもので、東西50m、南北75mの長方形をなし、南面に水堀りを、東・西・北の三方に空濠を巡らしたものであった。この遺跡から出土した土器は、二タ通り遺跡と同時期の9世紀前半のものと考えられるもので、距離も約900mの近くにある。

〔前山古墳群〕　開田の際、緊急調査を行った古墳には、12×15mの楕円形のものと、径15mの円形のものがあった。1号墳は主体部が盗掘されており遺物はなかった。ここで注目したいのは墳丘の主体部のマウンドを、砂鉄様の黒色砂層によって築いていたことである。この黒色砂は二タ通り遺跡2号工房址より出土した黒色砂と同一のものと考えられることである。出土遺物は開田により破壊された直後の調査によれば周濠の中から土師器・須恵器が出土している。

〔七曲り横穴〕　前山の南面崖に構築された横穴で、現況は用水池の水面下にある。減水すると横穴2基が開口しているのが見られる。遺物その他は不明であり、他の未開口の横穴も七曲池の水中にあるため不明である。

〔仁井田横穴群〕　二タ通り遺跡の西方500mの西涯にあるが、現在2基が開口している。釈迦堂川の氾濫原に接している。さらに山上墳と考えられる円墳が2基あり、そのうち1基は盗掘されている。大きさは明らかではないが、横穴式石室をもつものである。遺物その他不明である。

〔仁井田古墳群〕　仁井田部落の鎮守八幡神社の裏山の杉林中に散在している。1基は神社隣接地にあり、開畑のため破壊された。現存するのは6基で、径15m程度のものである。

〔岡の内・林合遺跡〕　二タ通り遺跡の南400mにあり、東北縦貫自動車道に伴う調査が行われ、住居址2軒、二タ通りと同一性格の工房址4軒が発見された（第21編参照）。

〔仏具壇遺跡〕　二タ通り遺跡の北東400mにあり、東北縦貫自動車道建設にあたり調査が行われた遺跡である（第23編参照）。住居址等が発掘されており、二タ通り遺跡との関連も考えられる遺跡である。

（永山倉造）

第2章　調　査　経　過

8月22日（土）遺跡全体の下草刈りを行い、午後A・Bのトレンチを設定した。いずれも長さ30mで、道路に直交する南北の方向に縄張りを行う。23日、両トレンチより土器が出土し、一部に遺構と考えられる落ち込みが発見された。Aトレンチの北部に石組があり、その下に径35cmの小ピットが発見され、中に長甕が1点発見された。これに続いて東に広がる3号工房址の存在が明らかにされた。

〔3号工房址〕　23日より27日まで岩田調査員を主任として、須賀川高校社研部員5名と人夫3名が専従し、5日間で調査を行った。まず土器を多数包含している部分を中心に掘り下げを行ったところ、東側壁が発見され、これに続いて、焼土が多量検出されたため、慎重に調査をすすめた。これに並行して西部の荒掘りはベルコンを使用して、能率的に作業を進めた。25日は東部の焼土を追って精査を進めたが、カマドの形態はなさず、廃棄した焼土であろうと考えられた。次いで南壁に発見された焼土の精査を進めることとする。本工房のプランの検出をいそぐ、中心近くから焼土が多量に検出されたが、遺構は不明であった。この周辺より土器の出土多し、プランは南北3.7m、東西4.5mであることが明らかとなった。

南壁に発見された焼土は、精査の進行とともにカマドとして使用した可能性が強いことが明らかとなった。この近辺より土器の出土が多い。床面の精査を進めたが、貼り床であることが明らかとなった。

〔1号工房址〕　22日、Bトレンチ内に土器の出土が多く注目された。23日よりベルコンを使用し永山が主として調査を進める。24日荒掘りを終り、午後、遺構のプランを確認する。南北4m、東西3.7m。25日より精査を行う。西壁の近くより鉄鏃が出土する。西南壁に木炭の集積があり、工房で使用した木炭の集積場と考えられる。中央に粘土で構築し焼け固まった遺構が検出された。これは東壁に発見された石組の煙道との関連が考えられるものである。26日煙道の精査を進める。骨材として安山

岩の割石を使用し、これを粘土で覆ったものと考えられる。粘土による構築物は踏鞴の火床と考えられる。27日柱穴の検出精査を行ったが、プラン内には、はっきりした柱穴は発見されなかった。

〔2号工房址〕　鈴木調査員を主として調査を進めた。Aトレンチに発見された遺構で、焼土が多く検出された。23・24日、ベルコンを使用して荒掘りを行う。25日、プランの検出によってほぼ楕円形であることが明らかになった。南北3.3m、東西4mである。26日より精査を行う。床面全体に安山岩の割石が散在し、焼土の出土も多かった。土器は少数であった。柱穴と考えられるピットが不整形にプランの境に4個とプランに接して3個検出され、プラン内にも1個あった。

〔1号ピット〕　1号工房の精査に伴って発見された遺構である。25日よりベルコンを使用して荒掘りを行う。26日、円形プランの遺構であることが明らかとなった。南北3.2m、東西3.5mである。ピット内には砂鉄と考えられる黒色砂が検出された。ピットは表土より1mのところに幅60cmの輪形の段を有し、さらに中央に、径1.5m、深さ30cmの落ち込みがあり、漏斗状に構築されていた。27日、精査のうえ実測を行った。

〔1号住居址〕　23日に、Bトレンチで遺構の一部が検出された。24日より武田調査員を中心として調査を進める。ベルコン使用、荒掘りを行う。25日、プランを確認する。南北4.8m、東西5.1m。精査を進めるにしたがって、南側壁より土器片が多く発見された。これに続いて焼土が検出されたが、これはカマドの一部と考え、精査を進めカマド跡であることを確認する。東部壁ぎわに安山岩の切石を芯として構築されたカマドが発見された。長さ1.8mの煙道をもち、屋外に煙をぬいたと考えられる。27・28日、床面精査を行った。住居床面の北部に柱穴2個を検出する。直径約50cmである。床面中央に南北にのびる50×180cm、深さ40cmの貯蔵用と考えられるピットが発見された。

28日は遺跡全体の平板による測量を行い、調査に使用した資材等を撤去し、二タ通り遺跡の調査の全日程を終了した。　（永山倉造）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

1号住居址（図版1・2・7）

本調査により発見された住居址は1軒のみである。

平面プランは、隅丸方形の竪穴住居址で、南北4.8m、東西5.1mの大きさを持っている。周壁は、

急角度にローム層を掘り込んで構築され、深さ25～30cmである。周溝等の設備等のはっきりした遺構は確認されなかった。柱穴は北側に２個発見され、西寄りのものは径１×1.3m、深さ0.5m、東寄りのものは径１×1.4m、深さ35cmのもので、南側には見当らなかった。カマドは、南壁と東壁とに発見されている。まず南壁のものは幅65cm、長さ85cmで、芯材に安山岩を使用し、粘土を積んで構築したものと考えられる。焚口付近から長甕の破片が発見された。これらから考えて、このカマドは住居址を放棄するまで使用していたのではなかろうか。

東壁発見のカマドは、幅50cm、長さ２mで、安山岩の芯材を使用し、その上に粘土を積んで構築したもので、焚口は竪穴内にあり約1mの大きさである。煙道は屋外に1mほどのびている。この付近の土器等の出土状況から、このカマドも住居址が放棄されるまで使用されたものと考えられる。

床面中央部南寄りに、南北に長い楕円形のピットが発見されている。幅(東西) 50cm、長さ(南北) 1.80m、深さ40cmで遺物は土器片が少量発見されたのみである。屋内貯蔵穴と考えられるものではなかろうか。

住居址内の遺物出土状況は、南東隅より長甕の底部を中心として、壺・杯等の破片が一か所に集中して発見されている。これらの土器は東カマドの焚口の右手に当る場所にあるところから、この関係に使用されたものであろう。完形品は１点も発見されなかった。

南カマドの焚口右手からも、長甕・壺・杯の破片が発見されている。これらの出土状況から考えると、床面上に使用出来る土器等を残さないところから、すべてを撤去した空屋であったことが考えられる。だが中央セクション付近から完形の内面黒色処理の土師器が１点発見されている。

第２節　工　房　址

本調査により発見された工房址は３軒を数えているが、いずれも共通する問題を持ち、またそれぞれの特色が見られる。いずれも製鉄あるいは鍛冶工房址と考えられるものである。

１号工房址（図版３・８）

平面プランは、不整隅丸方形である。長さは東辺長3.75m、南辺長3.65m、北辺長3.50m、中心部の東西幅3.5m、南北幅４mである。この竪穴は、黄褐色土に西側で15cm、東側で20cm程掘り込まれている。周溝は西側及び南側に検出されたのみで外には認められない。

本例は特異なもので南西隅に掘られた径75cm、深さ40cmのピットに連続している点注意すべきものと考える。ここで考えられることは、鏃・刀などの焼入れに使用した水舟の埋設遺構ではなかろうか。

床面には、上屋を支えるために構築したと考えられる柱穴は１個も発見されなかった。東壁ぎわ

に、2m幅で径15cm程の小柱穴が2個発見された。

床面中央に、50cm四方の鍛冶用に使用したと考えられる火床址が2か所検出されている。この近くに木炭の堆積が2か所発見されている。炉は東壁のやや南寄りにあり、芯材に安山岩の割石を使用している。平面は「コ」の字形で一部外側に張り出している。煙道と考えられる施設は発見されなかった。これらの遺構を構築した床面には、固い白色粘土が全面に貼られている。

本工房址は遺物が少なく、東南部の炉の右手に40cm程のピットがあったが、ここから少量の土師器の破片が発見された。ここから出土した内面黒色処理土器の破片中に墨書銘のあることが整理のときに明らかにされた。文字は「九」と読むことができる。西壁中央部に堆積した木炭群のなかから長さ11cmの平根式鉄鏃1点が出土した。

2号工房址（図版4・8）

平面プランは、不整楕円形の竪穴で、東西4m、南北3.2mで、南西部でくびれている。周壁は黄褐色土の地山に15cm程掘り込んでいる。柱穴は、楕円形のプランの外側に無造作に配置されており、上屋の構造は明らかにすることはできなかった。

床面南側から粘土の塊りが大量に発見された。この粘土を取り除いて精査を行ったが、床面には焼け固まった箇所は検出されず、地上に構築された構造物を破壊したような状態であった。この際出土した粘土は生粘土(一部焼いた状態)で多量に出した。同時に発見された石材は安山岩の切り石で、5～10cmの厚さを持つ板石片で、川石も1点出土している。これらの石材は、前述構築物の芯材として使用されたものと考えられる。以上の状況から製鉄に関係のある作業場と思われるものである。

遺物の出土状況は、プランの北側壁寄りから内面黒色処理土師器の完形の杯が1点出土している。他の遺物は土師器の破片のみであった。

3号工房址（図版5・9）

平面プランは隅丸方形で、東壁の長さ3.7m、西壁の長さ3.5m、南壁の長さ4.4m、北壁の長さ4.2m、中央部東西4.4m、南北3.7mである。

周壁は、黄褐色土の地山を北壁で20cm、南壁で15cm、東壁で18cm、西壁で15cm掘り込んでいる。プラン内には周溝などの施設は検出されていない。

柱穴は、竪穴内からは北寄り2個発見された。北西寄りの柱穴は径20cm、深さ30cm、北東寄りのものは径25cm、深さ46cmである。このほか竪穴を囲むように8個のピットが検出されている。

北東の柱穴の近辺に、方形の焼土が検出されている。これは鍛冶の地床炉と考えられるものである。これに接して南側に東西2m、南北1.4mのピットがあり、これについても鍛冶との関係が考えられる。南東隅に幅1m、奥行80cmの焼土があり、また南壁外に長さ1.7m、幅70cmの焼土が検出されたが、煙道などの構築はなく、カマドなどの住居的性格の施設は認められない。

床は、黒色及び褐色土の混合土を竪穴内に敷きつめ、その上に白色粘土をたたき固めた貼り床である。

遺物の出土状況は、床面全体から土器片が多数出土した。南側焼土付近より長甕（復元可能）、床中央焼土（地床炉）付近より杯・甕・壺など完形品が出土した。ピット内からも土器片が多く発見されている。

第3節　円形ピット

本遺構は、黄褐色土の地山に掘り込まれた東西径3.5m、南北3.2mのプランをもち、内部断面は2段となっている。第1段目は深さ1mで、幅70cmの帯状の輪になっている。2段目は底に緩やかに傾斜した擂鉢型のピットである。ピット内の黒色砂層は4層からなり、地表から約1.3mに及んでいる。第1層は耕作土層15cm、第2層は黒褐色土層である。第3層からは、黒色砂層であるが、この層は第2層の黒褐色土層の混入がはなはだしい。第4層は粘土混入の黒色砂層である。第5層が黒色砂層で、馬蹄形磁石で検査をすると砂鉄が多く含有しているようである。第6層は粘土混入黒色砂層である。

ピット内からは、まとまった遺物は発見されなかった。これらの黒色砂の中に土師・須恵器の破片が少量発見されたのみである。（図版6・9）　（永山倉造）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

本遺跡は土器の製法から考えると9世紀前半に位置づけられるものと考えられる。

1　土師器

＜甕＞

〔I〕（図版16—1）　B—2—1（1号工房址）出土の甕で、口径16cm、現高12cm（推定15cm）、口縁部は外反し、頸部から肩部にかけて内湾し、胴部は軽く湾曲している。底部は欠けており明らかでない。技法は巻上げ手法によっている。口縁部より肩部には刷毛目による調整が行われ、胴部下方には削り上げによる調整が認められる。胎土は小石を少し含み、色調は外部褐色、内部は淡紅色

を呈している。焼成は良い。

〔Ⅱ〕（図版16—2）　B—1—1（3号工房址）出土の甕で、口径20cm、高さ11cm（推定18cm）、口辺部が外反した広口形である。頸部は浅く内湾し、肩部から胴部にかけて湾曲しており、底部は欠けている。胎土は精製した粘土を使用し、表面の色調は淡褐色を呈し、内面は黒色処理が施されている。技法は轆轤により、口辺及び口縁部は布びきを行い、胴部は篦削りを施している。

〔Ⅲ〕（図版16—3）　B—1—2出土の甕で、口径20cm、高さ10cmで、口辺部が外反している広口甕である。口縁部は急角度で頸部に接続し、胴部はかすかに内湾し、7cm下がった点から底部に向かって湾曲しているが、底部を欠いている。胎土は良質の粘土を使用し、巻き上げ技法に、轆轤仕上げによっている。表面の色調は褐色で、口辺部は布びきを施している。

〔Ⅳ〕（図版16—4）　B—1—3出土の甕で、口径14cm、高さ13cm、口縁部は折返しの技法による有段口縁で、篦削りにより調整を行い、布びきを行っている。頸部から胴部にかけてかすかに湾曲して底部に至っている。輪積みによるもので、胎土には小石などもまじりあまり良くない。焼成は普通である。色調は褐色である。内面に底部から口辺にかけて、整形の際のなでつけの痕が認められる。

〔Ⅴ〕（図版16—5）　A—1′—4地点出土の甕で、口径21.5cm、現高23cm、口辺は外反し、口縁から頸部にかけてのくびれがない。胴部は垂直に下がり、底部近くなって湾曲しているが、底部は欠けている。胎土は良質の粘土を使用し、巻き上げてある。口縁部には布びきによる調整がみられ、胴部は縦位の刷毛目が施されている。色調は褐色を呈し焼成は良い。

底部から胴部にかけて2次的な火気を直接うけた痕跡が見られるところから、カマドの煮沸用の長甕に使用したものと考えられる。

〔Ⅵ〕（図版16—6）　B—3—1地点出土の甕で、口径21cm、高さ（現）22cm、口辺は外反し口縁から頸部にかけては、くびれがあり、肩はゆるく湾曲し、胴部は、かすかな曲線をみせている。底部は欠けている。

胎土は良質の胎土で、巻き上げにより成形を行っている。口縁に布びきがみられ、胴部には刷毛目が施されている。焼成は良く、色調は褐色である。この長甕はカマドに使用された煮沸用のものと考えられる。

〔Ⅶ〕（図版16—7）　口径18cm、現高18.5cmで、口縁部は大きく外反し、口唇部は凹型を呈する。口縁部は急角度で頸部と接し、胴部はゆるく内湾している。底部は欠けており明らかでない。胎土は、小石・石英等を含み比較的緻密で焼成も良い。色調は外面褐色、内面は胴部全面にわたり黒色になっている。胴部外面は篦削りが施され、内面は指による調整を呈する。

〔Ⅷ〕（図版17—8）　口径22cm、現高10cmで、口縁部は急激に外反し、口唇部に至って平らに削ら

れている。胴部はゆるく内湾している。底部は欠けており明らかでない。胎土は小石・雲母・石英等を含み比較的緻密であり焼成も良好である。色調は暗褐色で、内面のところどころが黒色になっている。体部は轆轤調整後なでつけを施す。

〔Ⅸ〕（図版17—9）　口径25cm、推定高28.5cmで、口縁部は直立し、口唇部は平らに削られている。胴部はゆるく内湾し、底部に近づくにつれて、ややしぼみがちである。底部は欠けており明らかでない。胎土は細砂・雲母・石英を含み比較的緻密で、焼成も良好である。色調は茶褐色である。体部は、轆轤調整の凹みが見られ、その後なでつけを施している。体部下半は手持ち篦削りを行っている。内面は、外面同様轆轤調整後なで付けを施し、体部下半は縦位の刷毛目が見られる。

＜甑＞

〔Ⅰ〕（図版17—10）　B—1—4地点出土の甑で、底部のみの残欠であり、底部の直径14.5cm、現高6.5cmである。底部は内径11.5cmで横なでの刷毛目を施し、胴部にも刷毛目が縦につけられている。胎土は良質の粘土を使用し、輪積みによるものである。色調は赤褐色で、焼成は良好である。

＜杯＞

〔Ⅰ〕（図版17—11）　1号住居址、B—3—1出土の杯で、口径13cm、高さ3.5cm、口辺部は布びきされ、胴中部より下部にかけて轆轤調整のさいの回転による篦削りが施されている。底部は回転篦起しに、轆轤回転による篦調整が施されている。内面は黒色処理によっている。全面に丁寧な篦磨きがある。

〔Ⅱ〕（図版12、17—12）　1号工房址、B—2—1地点出土の杯で、口径(推定)15cm、高さ(推定)5cm、口縁は外反し、胴部に稜は認められない。破片であるため全体の形はつかめない。口縁・胴部ともに布びきにより仕上げられている。内部は黒色処理が行われ、口辺部に篦磨きが施されている。胴部に「九」と推定される墨書銘が認められる。この字の大きさは5×3.5cmである。胎土は精製した粘土を使用し、焼成も良好である。

〔Ⅲ〕3号工房址、B—1—1地点出土の杯で、口径13.5cm（推定）、高さ5cm（推定）、破片であるため口縁部不明である。胴部は布びきが行われ、下部は回転篦削りが行われている。底部は回転篦切りによる調整が行われている。内面黒色処理のうえ篦磨きを行っている。

〔Ⅳ〕（図版17—13）　3号工房址、B—1—2地点出土の杯で、口径13.6cm、高さ4.8cmで、胴部に布びきが行われ、下部は回転篦削りが行われている。色調は黄褐色で、胎土は良好な精製粘土が使用されている。底部は轆轤を静止し糸切りを行っている。内面黒色処理が行われ、丁寧な篦磨きが施されている。

〔Ⅴ〕（図版17—14）　3号工房址、B—1—3出土の杯で、口径12cm、高さ5cm、口縁より胴部にかけて轆轤調整の際2段の段を有し、下部には回転篦削りが行われている。底部は篦起しを行い、

轆轤回転調整を行っている。内面黒色処理を行い、全面に篦磨きを行っている。色調は黄褐色を呈し、焼け土が付着している。胎土は良好であるが砂が混入している。

〔Ⅵ〕（図版17—15）　3号工房址、B—1—4地点出土の杯で、口径13cm、高さ5cm、口縁部から底部にかけて轆轤調整による段を8段有し、底部は篦起しのうえ、手持ち篦により調整している。内面黒色処理を施し、篦磨きを行っている。胎土は良好であり、焼成も良い。色調はほぼ褐色を呈している。

2　須恵器

＜高台付盤形土器＞

〔Ⅰ〕　1号ピット、B—4—1出土の土器で、底部のみで高台が付いている。高台の径9cm、台高1cm、盤部は底部のみで全形は不明である。焼成不良の須恵器と思われるもので、色調は赤褐色である。技法は盤の底部の篦起しを行い、高台を張りつけたものである。

第2節　金　属　器

1　鉄　鏃（図版10、17—16）

〔Ⅰ〕（図版10、17—16）　本遺跡は小鍛冶工房を中心とする鉄製品を加工する鍛冶集団の遺跡であると考えられるが、完形品の遺物は平根鏃1点のみである。この鉄鏃は長さ11.2cm、（矢さき2.7cm、篦代の長さ8.5cm）矢さきは「かえり」を持っている。この幅1.8cmである。　（永山倉造）

第5章　考　察

第1節　鍛冶集団について

白河軍団が支配した区域である県南地方には、最近の調査によって土師器を出土する多くの遺跡が発見された。特に墨書銘土器を多く出土した遺跡を見ると、関和久・借宿の両遺跡をはじめ、白河関跡など白河軍団との関係が以前から問題になっている遺跡があるが、新たに矢吹町泉川沿岸の遺跡群、隈戸川沿岸遺跡群、須賀川地区の六軒・広町遺跡群をはじめ、多くの遺跡がある。

これらの遺跡のうち鍛冶に関係のあるものは、白河関遺跡、矢吹町の寺山・下荒具遺跡、鏡石町の

前山・林合・二タ通り遺跡、それに須賀川市の上人壇遺跡・かんじんまど遺跡などがある。

延喜式によると中央の鍛冶司の配下にあった鍛冶師は372烟あったと記録されている。しかし陸奥国については記載がないため、その数は明らかでない。この時期になると鍛冶師と踏鞴師とは分業が進み、鍛冶師は一定の場所に定着し、踏鞴師は原料をもとめて移動していたといわれる。前述の遺跡のうち踏鞴師とみられるものは、矢吹町中畑の下荒具B遺跡に踏鞴の基部跡と考えられる遺構が発見されている。この遺構は9m四方の方形プランを持ち、中央部にガラス状に焼け固まった基部が6か所発見された。これと同系のものと考えられるものとして、須賀川市のかんじんまど遺跡を挙げることができる。前者は8世紀前葉のものであり、後者は9世紀前半と考えられる。

鍛冶師の遺跡については、前述のうち白河関・寺山・前山・林合・二タ通り・上人壇などに共通な遺構が見られる。

第2節　遺構について

鍛冶師の遺構と考えられる1号工房址及び3号工房址は矢吹町寺山遺跡、鏡石町林合遺跡3号工房址にみられるように、床面の中央部に叩き固められた方形の焼け土の遺構がみられることである。この用途については遺構そのものが整理されているため、正確な資料は得られなかったが、小鍛冶の火床と考えて良いのではなかろうか。

1号工房址及び3号工房址の火床に接続して発見されたピットは矢吹町寺山、鏡石町林合両遺跡工房址にも発見されており、この用途については明らかではないが「焼き入れ」などの鉄の鍛造の一工程の施設ではなかろうか。

2号工房址については多量の木炭と焼土が発見されているが、使途はまったく不明である。

第3節　土器について

総体的に須恵器は少なく土師器が多かった。杯についてみると内面は黒色処理が行われ、篦磨きを施したものが多い。外面は布びきにより仕上げを行い、底部は轆轤回転による篦起し調整されたものと、糸切りを行ったものを轆轤によって調整したものとが同一遺構から発見されている。底辺部は全体に回転篦削りの手法を用いて調整されている。

今回の調査によって1例だけであるが、墨書銘土器が発見された。この土器は口辺が外反した精製

の杯であるが、底部は欠損しており、他の杯と形態を異にしている。書体は「九」と読むことができる。

本遺跡から発見された土器は、長期にわたって使用されたものでは無いと考えられ、編年としては9世紀前半のものと考えられよう。遺構内に完形の遺物が少なく、かろうじて復元されたものも十数点にすぎなかったところからみて、本遺跡は9世紀中には、他の土地に移動を行っているものと考えられる。

第4節　砂鉄状黒砂

砂鉄状黒砂について、郡山市熱海町にある高玉鉱山株式会社によって、昭和45年8月31日～9月4日まで行った分析によると、上層5.14%、中層5.47%、下層5.03%のFeを含むとのことであった。この成分は砂鉄鉱としては純度の高いものではないとの検定であった。この黒砂は踏鞴による製鉄の原料であるかどうかは明らかでない。（永山倉造）

参考文献

『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報　2』　1971
『矢吹町寺山遺跡調査概要』
『多賀城跡調査研究所研究紀要　1』　1974
『平城宮発掘調査報告Ⅳ』　1965

第23編　仏具壇遺跡

遺跡番号	30—490
所在地	岩瀬郡鏡石町鏡田字仏具壇
時代・種類	奈良時代　集落址
調査期間	昭和45年9月5日～9月7日
担当者	馬目順一
調査員	松本友之　鮫島和弘　永山 亘　高木凡夫
協力期関	鏡石町教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 391
　第1節　位置と地形…… 391
　第2節　周辺の遺跡…… 391

第2章　調査経過…… 392

第3章　遺　　構…… 392
　第1節　住居址…… 392

第4章　遺　　物…… 398
　第1節　土師器…… 398
　第2節　須恵器…… 401
　第3節　石　　器…… 402
　第4節　土製品…… 402

第5章　考　　察…… 402

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

第三紀層の褶曲でできた奥羽山脈の東裾が帯状に長い尾を敷く岩瀬郡地方は、釈迦堂川を境として西側が山地、東側が須賀川盆地とに区分される。羽鳥湖（970m）、鬼面山（1,021m）そして高土山（729m）付近から流れ出る幾筋もの河川はその長い帯状の丘陵裾に沿って東流し、釈迦堂川に注がれる。須賀川盆地の本体である矢吹原台地は、石英安山岩や凝灰岩が基盤を形成し、その上層にいわゆる洪積層が覆う特徴を示すが、釈迦堂川は、この洪積台地を刻み北流し、阿武隈川と合流する。仏具壇遺跡は釈迦堂川がつくった狭い氾濫原を西側に望む矢吹原台地の端部に位置している。

遺跡はかなり広い範囲であったと推定されるが、北側は人家が建ち、東側は台地が土地造成のために約4m程削られているので、確認の方法がない。調査の成果は後述するように竪穴住居址1軒を精査するのみであったが、出土遺物にはまとまりがあり、県下の土師器を研究する上で、見落すことのできない資料となっている。

第2節　周辺の遺跡

仏具壇遺跡の谷をひとつ越えた南側には、工房を含む竪穴址が調査された二タ通り遺跡がある。時期も仏具壇遺跡が専有する範囲内に入るので、両者の有機的関連が推定される。また仏具壇遺跡から直線距離にして南へ約950m向かった地点には、岡の内・林合の遺跡がならび、2軒の竪穴住居址と、4軒の工房址が発見されている。時間的には、この遺跡の方がやや後の時代まで機能を続けていたらしいが、二タ通り遺跡同様、鉄生産関係址と理解されるのである。仏具壇遺跡の 200m西方にも鉄生産に関連する館の越遺跡が確認されているから、仁井田地区を中心とする釈迦堂川東岸の丘陵には、かなりの鉄生産に関連する職業集団の存在が推想できよう。とすれば、仏具壇遺跡も、これらの職業集団に脈絡をもつ鉄生産関係址とも理解されるが、今回の調査に関する限りでは、これを積極的に証明する資料は出土しなかった。

（馬目順一）

第2章　調　査　経　過

仏具壇遺跡には、南側に急傾斜の谷が開いており、北側は土地造成のために約4m程の掘削が行われているので、おのずと調査の範囲は限定されてしまう。更に北側には、人家が建てられており、広い範囲の調査は困難であった。そこでまず、谷に沿ってN78°Eの方向へ、幅2m、長さ20mのトレンチを設定し、2m間隔で掘り下げた。表土下約60～70cmで橙色粘土層（ローム層）に到達する。一応全区間を橙色粘土層まで掘り下げた。その結果、トレンチの東から14m西側まではホップ栽培の溝が2m間隔で掘られ、更に16～20mまでは、ホップの溝とその施肥用の溝とが、交互に2m置きに認められた。出土遺物は、土師器の小破片が少量検出されたのみである。もちろん、遺構は認められない。

遺構を発見すべく、西側に2m幅で6m程延長する。雑草やホップ・アカザ等が髪の毛のように生い茂っていて、調査を困難にしたが、表土を剝ぐと黒色土層が竪穴住居址らしい輪郭で検出された。南側のコーナーらしい。全貌を明らかにすべく、トレンチに沿って（平行）北側に2m幅で、長さ8mの拡張区を設け掘り下げるが、竪穴は、更に北へ延びている様子であった。したがって、続けて北に接して2m幅で、長さ8mのトレンチを入れ調査した結果、同様の黒色土層が現われ、竪穴の北側のコーナーらしい箇所が把握できたのである（図版1）。　（馬目順一）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

今回の調査により検出された竪穴住居址は、わずか1軒であった。以下にその詳細に観察した結果を記す（図版3～6・10）。

埋没状況の観察

発見位置は、トレンチの西端である（北緯37°15′、東経140°21′付近）。竪穴の壁上面は、現地表下約53cm程の所で現われるが、表土とその壁上面までの間には、3枚の土質を異にする堆積層が認められた。そして、さらに竪穴内部を埋めた土質も、それら三者とは違いがあったのである。堆積の順序を示せば、この竪穴住居址が放棄された直後に、竪穴内の全空間を、意識的と思えるかのように橙

色粘土が充塡している。続いて、竪穴の周辺と中央部に黒色系の土が堆積するが、周辺部の土色は、中央部に比して茶色が強い。中央部のこの黒色土層の厚みは、約30cm程であった。そしてその上面に約10～15cm程度の暗褐色土層が乗っている。この土質は、先の周辺部土質に近く、色調も近い。表土はこれらの土層の上を覆っている。その厚みは約17～20cm内外である。

これら異なる土質の堆積は、かなり重要な意味を示すらしいが、明瞭な解釈はない。何ゆえに竪穴内部に橙色粘土層が充満しているのか。竪穴中央窪地らしい位置に黒色土層が存在することは、かなり長期間水の浸潤を受けていたのではなかったか。それにしても、周辺部の暗茶色土層と、中央部のその黒色土層の境が、あまりにもはっきりと区別される点（まるで掘り込まれでもしたかのような）をどう理解したら良いのか、問題は多い。表土直下の暗褐色土層の平面範囲は実測図にも示したように、竪穴の壁線と一致していない。したがって、この黒褐色土層に惑わされると竪穴壁の追跡が困難となるのである。

構造概観

現地表面から約45～54cm程低い位置に、竪穴の壁が現われる。平面プランは、方形を呈す。側壁はやや内側に向かって傾斜している。周溝は、一周せず、東南部には見られない。床面は平坦であって、柱穴状のピットは、5個検出されたが、柱穴と決するには問題が多い。カマドは、東壁中央部に構築されている。出入口は、南壁ほぼ中央に認められるが、調査は充分でなかった。竪穴内には、炭化した木材、及び燃料、あるいは焼土が広範囲に存在していた。遺物は土師器の杯形土器・甕形土器・須恵器・土製品・石製品等があり墨書銘土器も含まれている。

平面プラン

南北にやや長い方形を呈するプランであるが、東壁のカマド北側に電柱を建てたとき一部破壊された箇所が認められる。隅は、ほんのわずか丸味をもつ。橙色粘土層を掘削する作業は丁寧で、ほぼ直線に削られている。現地表下約45～54cm程度で竪穴の壁に当るわけであるが、実測図にも示したごとく、現地表面が北から南へ傾斜しており、原地形の橙色粘土層も約5度の角度で傾斜するので、北壁と南壁とでは、その高さにも当然違いが出ている。それと同時に、床面も平坦ではあるが、北から南へわずかに下っている。竪穴上面の辺長は、北側3.80m、南側3.82m、東側4.90m、西側4.50mを計る。南北の辺はほぼ一致するが、東の辺は西に比して40cmも長い。

周　　壁

橙色粘土層の掘削は垂直に近いものと、やや内側に入るものとがある。竪穴内面に向かって傾斜する度合の強い箇所は、南壁西寄りである。壁の高さ、つまり壁面の橙色粘土層の高さは、地形に因果し、顕著な差を示す。南西の隅で55cm、西北の隅が90cm、北東の隅で80cm、東南の隅が55cmを計る。西壁中央60cm、北壁中央70cm、南壁西寄りで55cmとなるが、東壁の中央には、電柱設立の折り穿たれ

た方形の掘り込みがあって、壁面が破壊されているので計りようがない。ただ北寄りでは65cmを算する。注目される点は、南壁西寄りの箇所に白色粘土による補修が認められることである。白色粘土は、約75×50cmの範囲に存在し、厚さも約45cm程確認できる。

周　　溝

壁の直下に掘り込まれた溝は、南壁西寄りから西壁、そして北壁とめぐり、東壁の北寄りにまで認められるが、おそらく、本来は東壁のカマドにまで至っていただろう。その周辺が破壊されているので確認のしようはない。溝の深さは、床面を約5cm程掘り下げたもので、その幅は約10cmである。しかし、底面は、壁と床面からの掘り込みがお互いに接しV字形をなしている。

柱　　穴

精査したにもかかわらず、竪穴内部からはついに柱穴と断定するものは検出できなかった。

カ　マ　ド

東壁中央部に造作されている。袖部を切り石・割り石で組み、粘土で目張りしたもので、左右同一の築成と思われるが、向かって左側が破壊されているので検証のしようがない。割り石は、緑泥片岩系のものを使用し総計10片を数えた。左側の袖口に使用された石と、カマドの左側の大ピット上面に架された石とが接合し、同一個体のものであることが判った。カマド内には焼土が充満し、甕形土器片が添えられていた。この甕形土器片は、カマドを補強する目的で置かれたものらしい。煙道は、竪穴の外に延び、長さ70cmを計る。狭長の割り石が3片添えられている。なおカマドの左右の幅は入口部で90cm、袖の長さは、向かって右側が77cm、左側が45cmを計る。

カマドの右袖には、クヌギ材が炭化して存在していた。カマドに焚く燃料であったとも推定できよう。

出入口部の想定

南壁中央のやや東寄りの箇所が出入口部と考えられる。まず第一は、壁に幅約85cmの掘り込みを施し、出入りを容易にした状態が認められる点であろう。その出入口部を想定した箇所には、更に注目すべき事実が発見された。それは実測図にも点線で示しておいたが、出入口方向へ約1m、東西方向に約1mほど、深さ70cmの方形ピットが存在している。外の床面ほど堅くしまってはいないが、出入りによりかなり固められている。ただこのピットの出入口方向も低く掘り込まれているので、恐らく、階段状をなしていたのではなかったかとも考えられる。しかし、その方形ピット及び出入口への延長部には、床面と同一のレベルで甕形土器や割り石が発見されているところから、日常生活においては、床面と同一レベルまで土が埋められていたものと考えられよう。とすれば、この方形ピットを単に出入りのための施設として把握するよりも、他に別な機能を考えた方がよい。つまり胎盤処理施設？としての遺構を推想することも可能なわけである。

床面とピット

竪内床面の内法は、西壁側4.10m、北壁側3.40m、東壁側4.65m、南壁側3.40mを計る。床面は、多少の起伏はあるが全体的には平坦で堅固になっていた。床面のほぼ全面には焼土が認められ、特に中央部には多く存在していた。小円形ピットは5個検出されたが、いずれも柱穴とは認めにくい。出入口部にある2個のピットは、直径16cm程度で、深さが25cmと20cmとである。その箇所が出入口に当り、しかも胎盤処理施設として埋めもどされたと思われる土に穿たれたピットであるから、柱穴と推定するには若干の無理がある。床面中央の小さいピットは直径11cmで、深さは約4cm程であった。そのピットの北側にあるピットは、直径が26cmとやや大きいが深さは17cmである。北壁中央に沿って穿たれたピットは、直径32cmで深さが10cm程のものであり、12×6×5cmの小石が入っていた。これら5個のピットは、その配列された位置関係からは柱穴とは考え難く、これについても、また別な機能を考定しなければならない。

西壁中央には、長軸を西壁方向に置く浅い方形の落ち込みが見られる。深さは約5cm程度で、長辺75cm、短辺45cmの大きさを示す。注意される点は、この方形の内部に白色粘土が約2cmほどの厚みで存在していたことである。その粘土に乗って同一個体の杯形土器片2個と、壁に接して21×5×0.5cmの河原石が見られたのである。

これらの外に3個のやや大きいピットがある。カマドの向かって右袖の手前に、直径30cm、深さ15cmのほぼ円形のピットがあり、12×10cmで、深さ7cmの張り出しをもっている。このピット中には焼土や灰が充満しており、他の2個の大きいピットとは性格を異にしている。恐らく、カマドから掻き出された灰等を入れたものであろう。カマドの北側に穿たれたピットの法量は、東西46×南北44cmの円形を呈し、深さが20cmほどある。内部からは、甕形と杯形の土器片が多く検出された。一方カマドの南側には大型のピットがある。東西72cm×南北112cmの楕円形を呈し、擂鉢状の落ち込みである。東側には、大きな切り石が3個認められ、更にピットの中央に横架されていたらしい切り石が、二つに折れてピット内に発見されている。しかもこの長方体の切り石は、カマドの左袖の切り石と同一個体をなしている。このことから、カマド築成と同時に、このピットに横架すべき石材も用意されていたことが判るのである。内部からは甕形・杯形の土器が発見されている。

カマドに向かって左側のピットの東壁寄りにも、ピットらしい半円形の落ち込みがあるが、周溝の延長及び一部とも考えられるので、積極的に指示できない。

竪穴の構造には直接かかわりはないが、カマドに向って左側の箇所にカマドの袖の一部を破壊し、更に東壁の一部も切断した方形の深い落ち込みがある。長軸109cm×短軸62cmの平面に深さが約25cmほどある。この方形ピットからは、電柱をささえる鉄線を固定するために、鉄線を巻きつけた太い丸型の木材が横位に入れてあるのが発見された。明らかに近代になってからのものである。

遺物の出土状況

竪穴内部から発見された遺物は、それほど多いものではないが、竪穴内の空間利用に関し、興味深い問題を提供している。

竪内床面は、多量の焼土によって覆われていたことは既に述べた。これは表面的には、竪穴の廃絶が火災によっていることを物語っているが、後述するように、日常用器に欠落する遺物が考えられるので、はたして、火災が直接の廃絶へ結びつくかどうかは、問題であろう。

焼土に混じって長さ30～40㎝内外の炭化した木材が、長軸を竪穴の長軸方向にそって発見されている。材質はすべてクリ材であった。ただしカマドに向かって右側に認められた炭化木材は、クヌギであったのは注視しなければならない。クヌギは燃料材、クリは竪穴の建築材として利用されたと推定できるのである。

竪穴の北壁東側に直径1㎝内外の炭化した竹枝が、同一方向に40数本出土した。その状況から見て本来は紐縄で編まれていたものと思われる。竹の長さは明らかでない。壁等に立て掛けられていたのか、床面に敷かれていたのかは、明確にしえなかった。ただ想像できることは、それら竹と床面との間には焼土が入っておらず、直接床面に接していたので、あるいは敷き並べられていたとも思われるのである。

土器は甕形と杯形とに分類されるが、竪穴床面からの出土には、偏在性が認められる。

一つの方法として、竪穴を図版2のように9個のグリットに区画してみると、遺物の偏向が良く分かる。a・c・e・fの4か所からは、全く土器は出土しない。bは粘土敷の方形ピットから杯形の破片が出土しているが、床面からは発見されていない。とすれば、粘土敷の方形ピット内の杯形土器には特別な意味があるように思われる。

dからは、甕形土器片と杯形土器片が検出されている。出土箇所は、出入口部の中央に当り、出入口方向と直角位をなす位置にあった長さ55㎝の割り石の南側で発見されている。問題はこの割り石は、床面より焼土を狭んで約15㎝上位に浮いた状態で存在していたので、おそらく出入口の上部にでも乗せられたものが火災の時に落下したと考えられる。かく考えれば、出入口部から発見された土器片と割り石とは一義的関係はないのであるから、あるいは、gあたりからの移動とも推測される。出入口部の甕形土器と杯形土器は、2個共破片であるから（もちろん廃品）これら2個の土器が出入口部に置かれていたとしても特別な意義は認め難く、gからの移動によるものと解釈した方がよいようである。したがって、土器は、a・f（方形ピットを除く）・c・d・e・fの箇所には、本来置かれていなかったものと思われる。ここに竪穴内部における間取りの問題が浮び上がってこよう。

a～fの空間（床面）で重要な点は、fの方形ピット内の西壁に接し、長さ約20㎝の割り石が置かれていたことである。eの南西側にも16㎝の長さをもつ割り石が認められたが、焼土を狭んで約5㎝ほ

ど床面より浮いた状態で発見されているので、これはdの割り石同様、天井及び屋根に置かれていたものが落下したとするのが正しい。

dの北西側に厚い焼土層が床面に乗っていた。床面にはほとんど焼土が認められたが、その厚さは薄いものであって、せいぜい1㎝内外を計る程度であったが、このdの焼土は約10㎝位の厚みを有している。しかも、床面がわずかに凹みを呈することは、地床炉の可能性もある。もしこの考えが正しいとすれば、a・b・d・eの床面利用は、程度の差はあろうが、一応作業場として理解することができよう。

bの方形ピットに存在した粘土は、あるいは「敷かれていた」ものではなく、「置かれていた」ものかも知れない。炉と粘土置場とを備えるa・b・d・eを、共有の作業区とすることも故ないことではなかろう。更に想像をめぐらせば、何んら遺物の検出できなかったc・f辺を、寝所と考えることも許されようか。

遺物がとりわけ多く出土したのは、g・h・iの3区である。gに大きな楕円形のピットがあり、hには石組カマドが、そしてiには円形ピットが認められ、そこを中心として遺物も置かれている。

gにおける配列は、杯形土器が、出入口部のすぐ左側に伏せた状態で発見され(図版8)、墨書銘のある杯形土器は、楕円ピットの東側奥から正位の姿で検出されたのである。この墨書銘土器は、一部破損していたが、約10㎝東へ離れ、壁に固着して発見された破片と接合し完形となった(図版7)。椀形土器と思われる杯形よりもやや厚目の底部片が、クヌギ材の付近から出土している。甕形土器には不思議と完形土器はない。破片は、楕円ピット内及びその周辺から採集された。須恵器の提瓶か長頸壺形と思われる破片が、その楕円ピットの南端に接して認められたが、薄く脆弱な土師器とは違い、堅固な須恵器は、破片でも充分に機能を果すことのできる用途(例えば柄を付けて杓子)があるから、単なる破片として処理してしまうことはできない。

楕円形ピットには、横架されていたらしい凝灰質砂岩の切り石があった。上面が平坦であるから、この切り石も特別な用途(例えば台)をもっていたと思われる。また、東側には、平坦な割り石が3個認められ、ある種の物(例えば食料品等)を置いたとも考えられよう。

先にも触れたが、出入口部の楕円ピット寄りの割り石は、出入口部とカマド南側のgの明白な食物調理所とを区別する間仕切りであったらしい。

hはカマドを中心としているが、出土遺物は杯形土器片に比して甕形土器片が多い。すべて破損片でその大部分が、石組カマドを補強するために、用いられているものであって、割り石と割り石の間や粘土と割り石の間に充塡されていた。問題は、カマドに甕形土器が常設されていない点であろう。この問題は、土製甑の消長と因果するかどうかは不明だが、解釈の一つとしては、カマドの利用が多様化したために甕形土器のみを常設することが不可能となったとも推考できるのである。カマドの左

袖の一部は、電柱補強施設によって破壊されている。

iは円形ピットを中心にしているが、ピット内からは甕形土器・杯形土器が検出された。ただしピットの底面に置かれていたのは、内面黒色処理の杯形土器である。奥位にしかも正しい円形を呈することから、樽等の木製品がこのピットにはめ込まれ、酒等のような液体が入れられていたのではなかろうかと理解されないこともない。iのピットを除く他の床面には、甕形土器片が比較的多い。これは、このiがピットの用途と共に、貯蔵用の間に利用されていたのではなかったか。そういう所にある種の神霊を祀る祭壇が置かれていたとすれば、iに認められた竹（おそらく編まれていた）も、礼拝の際に下に敷かれたものと思われてくる（図版9）。

以上、遺物の出土状況、及び竪穴の構造から間取りを考えてみたが、これは一つの見方であって、すべてではない。もちろん確証ではないが、こうした作業も今後必要であろう。そういう意味で、竪穴調査には慎重を期したいものである。（馬目順一）

第4章　遺　　物

仏具壇遺跡の竪穴住居址から発見された遺物は、土器・石製品及び土製品がある。土器は甕形・杯形の2形態で他の器形は認められていない。石製品は、中央が凹む椀状の器で、広義の石皿に属しよう。以下に詳述する。

第1節　土　師　器

土器は竪穴内部出土のもの、覆土中のもの、他のトレンチ内出土のものの3か所から認められたが、トレンチ内出土のものは、すべて二次的な移動が推定される表土耕作土層からの発見である。また竪穴覆土出土のものは、すべて小破片であって完型品は見られない。竪穴内の床面及びその直上から発見された中には、杯形土器の完形及び復元可能のものがある。

甕形土器Ⅰ（図版14—1・2）　—15%

轆轤を利用しないで製作したものを、一括して甕形土器Ⅰとした。実測図にも示しておいたが、作図復元できる破片は、この2点のみであって、他は小破片である。口径は26.5cm、口縁は短幅で強く外反する。横なでにより調整されている。胴部には縦位の篦削りが施され、器壁を薄くしている。口

縁部と胴部とは、はじめ別々に製作し、後に接合し、その継目を指で横位になで消去している。口縁部資料で良く特徴を伝えるものは、この一片であるが、縦位の篦削り痕のある破片は、かなりの数にのぼる。底部は、厚手で底面の厚みは約2㎝もある。底部下端まで縦位の篦削りが施されている。木葉痕らしいものもあるが、欠損部が多く明らかでない。内面の調整に刷毛目をもちいたものも認められる。焼成は普通であるが、甕形土器Ⅰを最も良く特徴的に示しているのは、胎土中に多く混入された微石と雲母の存在である。微石が多いので縦位の篦削りの際に、それら微石の移動痕が著しい。雲母の存在は、縄文式中期の阿玉台式土器を想起させる程きらつきが激しい。

甕形土器Ⅱ（図版14—3～7）—21%

轆轤を利用し製作した甕形土器をⅡとして一括する。口径は21.7㎝～15.9㎝を計る。口縁は須恵器の形態に近く、口縁内面に屈曲の稜線が認められるもの1点の外は、稜線の形成はない。口唇はすべて角稜形を呈し、甕形土器Ⅰのように丸味をもつものはないのである。ただ外反の度合はいずれも強い。口縁の幅は、実測図に示したような短幅のものもある。外面は、轆轤による痕跡を明瞭に残すが下胴部の具合は分からない。内面は、磨きが施されているものもあるが、多くは、水挽きの痕が残る。焼成は良好で、器壁も薄く、0.6～0.4㎝内外を計る。胎土は精選された粘土を使用し、ごくわずかに長石や雲母が存在する。

図版14—7は、竪穴内の数か所から分散して発見された資料を接合したところ、1個体となったものである。破片数は8点を数えた。dの入口部1点、gの楕円ピット周辺1点、楕円ピット内2点、hのカマド内1点、iの円形ピット内3点がその内わけである。このことは、この土器は竪穴廃絶時には、既に破損し使用されておらず、各所へ棄てられていた（意識的とするには問題がある）ことを物語る。そうすると、この竪穴における廃絶直前まで使用された甕形土器は、何個体あったのであろうか。これは重要な投問であるが、解答はむずかしい。すなわち、竪穴内発見の甕形土器で完全に復元できる資料はおそらく皆無であって形のそろうものはない。

もしそうであるならば、この竪穴内に居住した人々は廃絶時には甕形土器を使用していなかったことになるが、生活必需品であるからそうも考え難い。とすれば、あるいは竪穴の廃絶を住居者自身の意志と認め、別な地区への移動による廃棄と推想すると、甕形土器の欠落は、その移動の際に持ち去られたとも思われるのである。

杯形土器Ⅰ（図版14—18～20）　—19%

轆轤を利用しての成形である点は杯形土器Ⅱも同じであるが、Ⅱは内面を黒色処理したものを一括した。

口径は13.9～15.4㎝内外である。器厚は薄く0.3㎝程度であろう。器高は4.2～4.4㎝と近似した数値を示す。胎土は良く選別されており、わずかに長石や雲母の微片を認める程度となっている。さて

成形であるが、轆轤によって器形を整え、しかるべき後に底面を上にして轆轤に乗せ、回転力を利用して篦により底面及び側面の約2分の1位までを削り取っている。内面は轆轤痕を残すものと、磨きをかけたものの2形態が存するが、後者は少ない。

出土状況で考えなければならない点は、杯形土器Ⅱとの間に、ある程度の差が認められることである。すなわち、杯形土器Ⅰが出土したのはiの円形ピット内（2個体分。ただし破片を接合しても完形にならず）、hのカマド内（破片）、gの楕円ピット内（破片）、iの円形ピット周辺（破片）、gのカマドの向かって右側（1個体分、ただし破片を接合しても欠損部多い）であるが、iの円形ピットからは、杯形土器Ⅱは3片しか発見されていないし、fの西壁粘土敷やgの東南部からは、1片も検出することはできなかった。杯形土器ⅠとⅡとは、意識的に使い分けされていた疑いがでてくるのである。

杯形土器Ⅱ（図版14—8～17）　—45%

内面が黒色処理されたものを一括する。口径は13.2～14.3cm程度で、器高は4.4～5.1cm内外、底径6.2～7cmを計る。器壁厚は約0.4cm位である。焼成は良く、胎土も精選されており、杯形土器Ⅱとほぼ等しい。成形は、杯形土器Ⅰと同様に轆轤を用いて形を整え、底面及び、側面の一部を回転篦削りしてある。ただし、内面の技法は杯形土器Ⅰと類しない。すなわち、内面は、細い先端の丸い棒状具により、側面は横位、底面は一定の方向へ磨きが施されるのである。もちろんその後に黒色化されている。この黒色処理される時に外面の口縁部にまで黒色化する場合が多い。他面の色調は、明るい薄茶色を呈する。

出土の状況を次に述べる。杯形土器ⅡもⅠと同じく完形品はない。しかし、甕形土器Ⅱの7のごとく、各所から出土したものが接合することはなく、すべて同一地点から発見されたものばかりである。とりわけ離れているといえば、gの楕円ピットの東側から検出された墨書銘土器片が、約10cmほど離れて発見された位である。比較的形の分かるiの円形ピット出土の9も欠損部があり、gの出入口付近の8も、破片を接合しても完形とはならないのである。つまり、この竪穴が廃絶した時には、杯形土器Ⅱの完形品は存在しなかったのである。

以上、土師器について観察結果を記したわけであるが、製作技法にはかなり統一性がうかがわれ、型式認定の有効資料となるべき性格を有しているのである。

第1表　仏具壇遺跡竪穴址出土の土師器片数

土師器 ＼ 出土地区		トレンチ	覆土	床面直上	a	b	方形ピット	c	d	e	f	g	楕円ピット	h	i	円形ピット	
甕形Ⅰ	口縁部		1											2		1	4
	胴部	2	30				1					13	3	2	12	3	66
	底部											1		1		3	5
甕形Ⅱ	口縁部		2	3					2				2	3	1	2	15
	胴部	15		5			2					4	7	1	8	2	44
	底部		2	3								1	1				7
杯形Ⅰ	口縁部	1		1								6		1	1	14	24
	胴部	5	3									6	3	1		7	25
	底部		2									1	2	2	3	3	13
杯形Ⅱ	口縁部	2	13	11			5		8			27	4	2		3	7
	胴部	6	9	9			3					19	2	6			54
	底部	6	3	8			2					12	1		1	1	34
計		37	65	40			13		10			90	25	21	26	39	366

（竪穴内における組成比準は、甕Ⅰ…15%　甕Ⅱ…21%　杯Ⅰ…19%　杯Ⅱ…45%となる。）

第2節　須　恵　器

須恵器の出土はわずかの2片である。いずれも竪穴内出土であるが、そのうちの壺形？片はgの東南隅から、頸部片は、同じgのカマドに向かって右側からそれぞれ発見されたものである。2片共に須恵器特有の青灰色を呈し、焼成も良く、器質は堅固である。胎土は精選されている。壺形片は12×12cmの破片で、壁厚は約0.5cmである。内外いずれも、轆轤痕を残している。表面には自然釉が付着している。長頸部の破片の方は、3×4cmの小片で、器壁は約0.4cmを計る。やはり内外共に轆轤による成形痕を認める。この二者がはたして同一個体かどうかは分からないが、1片は長頸部片、他片は

壺の肩～上胴部片である。肩部片の形態は、稜線が認められず、なだらかな曲面を見せている。いずれも型式認定は困難であって、これら須恵器からは、年代の解明はできない。竪穴廃絶時には、完形で使用に耐えるものは存在しなかったことになろう。

第3節　石　　器

竪穴の床面より約20cm浮いた地点から、一つの石皿が発見されている。表採及び耕作土の土器も、竪穴内出土のものとほぼ同巧であって、時代的に特別引き離すべき根拠もないので、この石皿もほぼその時代に属するものと見るべきであろう。形態はこぶし大の礫を利用した卵形で、完形であれば長径が12cmを計ったであろうが、現存では10.5cmである。短径は9.8cm。長軸の一方が欠落し、現品は3個に壊れている。底面も剝離し、形状は良く分らないが、半円形になることは間違いない。厚みは4.2cm。表・裏面は多孔質である。表面の中央が6×5.4cm、深さ2.4cmほど凹んでおり、その面は相当摩耗している。石質は花崗岩系で、色調は赤褐色を呈している。なお原材は礫であるが、周辺を擦って形状を整えているのが分かる（図版13—27、14—22）。

第4節　土　製　品

竪穴内のiの円形ピット中から一つの土製品が発見されている。長軸の両端が欠損しているので、正体は割りだし難い。類品の発見をまつ以外になさそうである。土器の一部とも考え難いのである。現存全長4.3cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm。焼成は良好で、胎土も良い。狭い盤状の土製品で片側の縁は丸味を呈し、他側は鋭角的に作られている。一部に指紋を残している。内外面共になでられている。色調は赤褐色である（図版14—21）。

（馬目順一）

第5章　考　　察

報告を終るにあたり、仏具壇遺跡について若干の考察をしておきたい。

1　竪穴の年代

仏具壇遺跡の竪穴の年代を推定するには、そこから出土した土器の専有する年代観にたよらざるをえない。幸いにして、竪穴内出土の土師器は、きわめて統一された製作手法を採っているので、型式の認定が可能である。

杯形土器Ⅰ及びⅡの製作は、轆轤を利用して器体を整えている。しかも、その後に再び轆轤の回転力を利用して、体側面及び底面を削り取っている。したがって、重要な底面が削り取られているので、はじめの作りが糸切り手法によるものなのか、あるいは別な手法によるものかは判然としない。すなわち、一定の粘土塊から轆轤を利用して幾枚かの杯形土器を作り、しかる後に側面及び底部を再調整したものなのか、一定の粘土塊から、単に一枚の杯形土器を作り、後に削りを行い、調整したものなのかは、今回の資料に関する限り、不明といわざるをえない。更に、もし一定の粘土塊から幾枚かの杯形土器を作ったとしても底面の切り離しの際に、糸を使用したものか、あるいは篦を用いたものかは、底面が削り落されているので全く明らかでないのである。

轆轤を利用している点では、いわき市伊勢林前遺跡の土師第5期土器や、いわき市内郷金坂遺跡の土器に酷似する。しかし、この両者はいずれも底面に指紋状の糸切り痕を残す特徴があって、仏具壇遺跡のように側面及び底面を回転篦削りした土器は存在しない。

甕形土器Ⅱは、やはり轆轤を使用しての作りであって、先のいわき市内の2遺跡には一致する形態のものが見受けられる。しかし、甕形土器Ⅰは轆轤を利用しておらず、形態的には轆轤利用以前の特有点を示している。とすれば、甕形土器に限ってみると、これら仏具壇遺跡の土器は、少なくとも糸切痕土器より若干遡及する時期のものと推想されるのである。轆轤水挽き手法により、糸でもって切り離し、量産化を計った糸切痕の杯形土器よりも、作りの丁寧な再調整を施した杯形土器Ⅰ・Ⅱの方が、やはり古拙な時代相を示すものと思われる。

以上によって、不充分ではあるが仏具壇遺跡の土師器は、糸切痕土師器の前段階に置かれるのを順当としよう。したがって、年代的には8世紀代のものと認めて良いのではないかと思う。

2　墨書銘土器

3点発見されている。

〔第1資料「臣」〕　eの覆土から（床面より5㎝）発見された破片で、その大きさは、7.5×6㎝を計る。器壁は薄く0.3㎝。轆轤による成形で、篦削りの再調整が認められる。墨書は、底部寄りの篦削りされた側面に、やや斜めに口縁を上にして毛筆による「臣」の字が描かれている。毛筆の幅は約0.3㎝以内で、第2資料の文字と類する。

〔第2資料「布四疋」？〕　第1資料と同じく、fの覆土から（床面より7㎝）破片で発見されている。大きさは、第1資料よりやや小さく5.5×4.9㎝である。壁厚は約0.2㎝。成形の特徴は第1資料に同じである。もちろん内面研磨で黒色処理されている。墨書は、篦削りされた面と轆轤痕のある面との2か所にわたっており、口縁を下に置いてつまり底面を上にして、側面に書かれている。問題は3字と見るか、2字と認めるかによって判読が異なってくる。あるいは4字以上であったかも知れない。ただ第1字の上端が欠損しているので、明らかでない。第1字は「布」と判読できそ

うであるが、最後の５画が４画の下から書かれており、「巾」の字になっていない。しかし、この点を一歩譲歩するとしても、次の「罡」をどう判読するかである。これを一字と認めれば、如何なる字体を表現したものか判断し難い。しかし、これを二つの字と仮定すれば「四」+「疋」となるが、これも異体字であって、解釈はできない。ところが「四」の５画の所に、更に１字横に引かれている疑いがある。この１画は、やや薄くなっていて、確定的ではない。もし「四」の５画の上に更に１画書かれていたとすれば、「岡」の略体で「罡」(コウ)となる可能性がでてくる。「罡」とは北斗星を表わすらしい。「罝」(ヒ)の略字とも受けとれる。「罝」は、かごやあみを意味するとすれば、「布罝」で布製あみとも理解できないこともない。仮りにこの字を二つの字が合さったものとすると、「四疋」で上の字と続ければ「布四疋」となり、興味深い成語となろう。いずれにしても決定的な判読は困難である。〔第３資料「恵」？〕 gの楕円ピットの東側で発見され、破片がその東側の壁に接して出土している。出土状況は、底面を下にして正位の状態で発見された。明らかにgに置かれていたものである。口径13.2㎝。高さ 4.2㎝。成形の特徴は、第１・２資料に同じ。内面は黒色処理されている。墨書は太く、たくましい感じが強い。その点、第１・２資料の細字とは異なり、筆墨家も異なっているものと思う。文字は底面中央に書かれている。調査概報の段階では「直」と読んだが、書家に見ていただいたところ「恵」とした方が良いのではないかとの教示を受けた。「恵」は、応々草書風には「重」と書くことが多いらしい。墨書の３画目からが口となるか田となるかは、筆が太いために判読できない。口であれば「古」として下の「一」を切り離し「古一」と読むことも不可能ではないが、やはり「恵」が正しいようである。「直」とするには８画目が欠けているので正しくない。以上三つの資料の意味するものは興味深いが、問題も多いであろう。

3　竪穴の問題

竪穴内部の空間利用、つまり「間取り」については「遺物の出土状況」の項で述べておいたので、ここでは再論しない。ただ問題として残るのは、竪穴の廃絶時には使用に耐える日常什器がほとんどなかった点をどう解釈するかであろう。

「逃散」「逃亡」の結果とするのも一つの把握法であると思う。

不発に終ったものもあるが、奈良時代にたて続けに制令下された「百万町歩開墾計画」、「三世一身の法」、「永年私有法」によって東北地方丘陵部の開拓が進行されたことは、奈良時代に属すると推される竪穴遺址が、近年多く判明してきている事実からもうなずけないこともない。開墾に必要な鉄製耕具の需要が急に増し、その因果として、「鉄生産遺跡」が増加したと理解するのも一つの見解であろう。と同時に、この頃激しくなる対蝦戦への軍事的鉄製品の補給（個人の自給が多い…）も考え合わせねばなるまい。こういう指摘を通して、釈迦堂川流域の鉄生産遺跡や、丘陵竪穴の存在を解明してゆかねばならないのではないかと思う。

（馬目順一）

第24編　狐　石　遺　跡

遺跡番号	30—377
所在地	西白河郡矢吹町矢吹字狐石
時代・種類	奈良時代末期～平安時代初期、集落址
調査期間	昭和45年6月5日～12日
担当者	成田克俊
調査員	古川 猛　藤田定興　村川友彦
協力機関	矢吹町教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 407
　第1節　位置と地形…… 407
　第2節　周辺の遺跡…… 407
第2章　調査経過…… 408
第3章　遺　　構…… 409
第4章　遺　　物…… 410
　第1節　土　　器…… 410
　第2節　金属器・その他…… 412
5章　考　　察…… 412

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

孤石遺跡は、矢吹町の北西約1.5㎞、矢吹町西部を南北に流れている隈戸川の左岸に東面した傾斜地上にある。東および北は水田となっており、南は矢吹第二苗圃となっている。

この遺跡は、A・B・Cの三つ地区よりなっている。A地区は路線よりわずかにはずれているので、今回の調査対象外となっている。B地区は、10×15mの規模の予備調査で住居跡の存在が確認されている。

C地区は、ブルドーザー、ロータリーが入り、苗圃となっている。遺跡の大部分はすでに破壊されているので、調査の中心を狐石B地区にすることにした。（図版1）

第2節　周辺の遺跡

今回調査した狐石遺跡は、南にある三峰森遺跡・堰ノ上遺跡・井戸尻遺跡とともに、東北縦貫自動車道敷内遺跡調査で発見されたものである。

第1表　周辺遺跡一覧表

遺跡地名表番号	遺跡名	所在地	種類	立地	遺物
30—405	踏瀬大山遺跡	西白河郡泉崎村踏瀬字大山	弥生・土師・須恵	畑	弥生・須恵・土師
30—388	長峰遺跡	西白河郡泉崎村踏瀬字長峰	須恵	畑・田	須恵器
30—400	二本栗遺跡	西白河郡泉崎村踏瀬字甚六沢	縄文	水田	磨製石斧
30—397	観音山横穴群	西白河郡泉崎村踏瀬字観音山	横穴	山林	切子玉
38—8	高田上遺跡	西白河郡泉崎村太田川字下礼堂	円墳群・土師	畑	
30—412	蝦夷塚古墳群	西白河郡泉崎村原山字蝦夷塚	円墳群	山林田	土師・須恵
30—380	花咲山遺跡	西白河郡矢吹町矢吹字花咲山	縄文	畑	縄文土器
30—418	柏山遺跡	西白河郡矢吹町中畑字柏山	縄文	沼沢池	石斧
30—441	沼和久横穴群	西白河郡矢吹町明神字沼和久	横穴	丘陵	
30—367	町屋遺跡	西白河郡大信村町屋字町畑	縄文	畑	土偶
30—368	上新城遺跡	西白河郡大信村上新城字櫃の原	縄文・土師	畑	縄文・土師器
30—372	壇の原遺跡	西白河郡大信村中新城字壇の原	縄文	畑	縄文土器・石斧
30—375	樑平遺跡	西白河郡大信村中新城字樑平	縄文	畑	〃
30—370	金谷辻遺跡	西白河郡大信村中新城字金谷平	土師	畑	土師器・石斧

遺跡地名表番号	遺跡名	所在地	種類	立地	遺物
30—371	金子山遺跡	西白河郡大信村下新城字金子山	縄文	畑	縄文土器・石皿
30—374	細町遺跡	西白河郡大信村中新城字二又桜	縄文・土師・須恵	水田	縄文土器・須恵器
30—384	赤沢遺跡A	西白河郡矢吹町大和久字赤沢	縄文	台地・水田	縄文土器・石器
30—385	赤沢遺跡B	西白河郡矢吹町大和久字赤沢	縄文	水田	縄文土器・石器
30—382	下原遺跡	西白河郡大信村下新城字下原	土師・須恵	畑	土師・須恵器
30—383	下原横穴群	西白河郡大信村下新城字下原	横穴	山林	
30—402	宮作田遺跡	西白河郡泉崎村大田川字宮作田栗木田	土師		
30—402	豊年山館跡	西白河郡泉崎村大田川字足細	館跡		
30—395	石田原遺跡	西白河郡泉崎村踏瀬字石田原	弥生		
新	御殿山館跡	西白河郡泉崎村踏瀬字下滝山	館跡		
30—396	行人山横穴群	西白河郡泉崎村踏瀬字下滝山	横穴群		

第2章　調査経過

孤石遺跡は、南面する緩傾斜地にあり、住居として適しており、この傾斜地の中心を道路敷がやや東を向いて南北に走っている。トレンチは、路線に並行に入れることにした。トレンチは、1.5m幅のもの6本A～Fトレンチを設定した。AトレンチとFトレンチは、東西の路線の幅杭から50cmほど離して並行に設定し、この両トレンチの荒掘りから始めた。Fトレンチからは土師片が多数出土して遺構の発見に期待がもたれた。Aトレンチ南端では、ローム層と腐植土との層変化が明瞭にみられ、これは遺構の一部と推定されたが、全体的な状態を確めるべく、この部分の拡張を後にし、B・C・D・Eトレンチの荒掘りを行う。

B及びCトレンチ北側において、深さ60cmの地点より墨書銘土器が出土し、Bトレンチ出土の内面黒色処理の土師器杯の胴部に「家」の文字がよめる。Dトレンチ北側では、柱穴と思われるピットが3個検出された。このため主力をB～Dトレンチにおき、この部分の拡張を行った。土層は以外に深く、地山までの深さは、Aトレンチ南での30cmが最も浅く、Aトレンチ北及びB～Fトレンチは、60～90cmもある。初め一輪車によって土の運搬をやっていたが、膨大な土の量のため、ベルトコンベアーを使用する。

この間、Aトレンチで確認されていた土層の変化を追ったところ、住居址であることが判明した。住居址は路線外にも伸びており、ちょうど住居の半分が確認された。Cトレンチ及びDトレンチからは拡張のさい、土師・須恵片が深さ60cm付近から多数出土した。

Cトレンチとその拡張部からは、重複した二つの竪穴住居址が確認され、Dトレンチからも規模の小さい竪穴住居址が発見された。これらは、Aトレンチのものを1号とし、重複した住居を2・3号、

Dトレンチに発見された住居址を4号と名づけた。

狐石C地区に、1×10mのトレンチ2本設定したが、苗圃造成前にブルドーザー、ロータリーが入り開畑したので、土師の細片が出たのみで、遺構はつかめなかった。（図版2）

第3章　遺　　構

1号住居址（図版5・7）

1号住居址は、路線東の幅杭に並行に設定されたAトレンチ南端に発見された。住居址は、2・3号住居址が、いずれも90cmという深い地点で発見されているにもかかわらず、30cmと最も浅く、白色粘土混りの地山につくられている。

最初に発見された土層変化は、住居北壁の一部で、その後トレンチの西拡張と南拡張、及び道路幅杭ぎりぎりまで拡張して全貌を出した。住居の南壁は、南側の地山が下がって深かったために、住居造成の時、北壁形成で余った土を南側の低地に盛り、一部の床、及び南壁をつくっている。住居の正確な形状は、住居の約半分が路線外のため不明であるが、南北の長さは7.3mとやや大型で、柱穴は、南北に走る西壁と並行に2個発見され、南側は径42×42cm、深さ60cm、北側は径36×36cm、深さ50cmであった。また西壁の中には、91×21cmの造り出しがあり、この造り出しには2個のピットが伴っている。ピットは、南が径17×17cm、深さ10cmで、北側は、径16×16cm、深さ9cmとほぼ同形を示している。造り出し外部北側にも径26×40cm、深さ28cmのピットが発見されたが、1個のみで南側にはないので、この造り出しに関係のあるものかどうか判定できない。

住居の南側では、焼土と炭化材が検出され、折重なった状態のものもみられた。炭化材は、平角材丸形材が確認されたが、今のところ構造を推定するまでの資料とは思われない。木炭層の中には、すだれ状に並べられた葦と思われる炭化物がみられ注目された。炭化材と焼土は、この区画以外にはなく、全面的な広がりではない。

遺物は、この焼土の中及びその周囲より出土している。炭化材の中からは、須恵器杯片と釘3本、木炭層の束、赤焼けした床面に貼りつくようにして耳皿の細片が発見された。西壁の造り出しより南に約1mの地点、周溝内に砥石1個が発見された。

2号住居址（図版3・8）

2号住居址は、3号住居址の西北隅と重複しているが、壁面は確認できる。東西3.7m、南北5.6mの長方形で、深さ88～90cm、東壁南端にカマドが設けられている。カマドは焚口より煙出しまで約2m、内径80cmで、煙道部に甕形土器半欠を敷いている。カマドの右肩部からは、内面黒色処理の杯の

底部と破片が出土している。カマドの両脇は不整円形の落ち込みがみられ、南側は40cmの深さをもっている。北側は、内部に2個のピットをもち、その手前に須恵器高台付杯の底部が出土した。

3号住居址（図版3・8）

3号住居は2号住居址を切り込んで造成しており、時期的には、2号よりも新しいと推定される。東西4.8m、南北4.4m、壁面の高さ約30cm、北西壁面にカマドが設けられている。カマドは焚口部で内径80cm、焚口から煙道まで2.20m、焚口部両袖を小石で補強している。右袖に密着し、直径0.5×1.0m、深さ18cmの小ピットが検出された。

カマド付近で、径15～30cm、深さ20～30cmの前後の柱穴が数個検出されている。

4号住居址（図版4）

Dトレンチ中央部に、ロームを切り込んだ径1.5×1.2m、深さ約50cmのピットが検出され、周囲のローム面から数個の柱穴が検出された。トレンチを更に東方に拡張した結果、ピットから約2.5mの距離に、住居址一軒が発見された。

一辺が3m、北壁にカマドを持った隅丸方形で、周溝は幅13～15cm、深さ3～5cmと比較的小規模である。壁面の高さは約25cm、カマド前方左側に幅40～70cm、深さ50cmのピット状の落ち込みがあるが、周溝との連結はなく、孤立している。ピット内には遺物はなく、粘土と黒色土少量が入っているのみであった。

また、カマド前方右側には、東壁面に密着して径1.0m×50cmの白粘土の塊りが壁面上から住居内に流れ落ちた状態で出土した。柱穴は、東壁に密着して20×20cm、深さ30cm、南側壁に同様に25×20cm、深さ25cmの2個が住居内に確認されたが、同住居に付随するかどうか疑問である。なお住居址周辺にもピットがあり、一つは、住居北東隅から7cmはなれ、直径24cm、深さ39cmのものがあり、これと対称形に南西隅から外部へ20cmはなれ、径33×32cm、深さ25cmの柱穴2個が検出された。このほかにも直径30×30cm、深さ30cm程度の柱穴状小ピットが数個発見された。

カマドは小規模で、幅約40cm、全長90cmで、両袖は白色粘土で補強している。

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

＜土　師　器＞

〔I〕　図版10—1は、土師器甕の口縁部と体部の破片である。底部欠損のため、器高その他の詳細

は不明であるが、復元口径は21.5cmである。下半部より直立気味に立ち上がる体部は、頸部においてわずかに内湾し、「く」の字形に強く外反して肉厚の口唇部となる。

外面は全面に篦削りを行っている。篦幅は2.5～3cm位である。頸部から口縁部には横なでが施されている。内面下半部は不明であるが、上半部は横なでの後、下から上への指なでが施されている。頸部から口縁部には横なでが施されている。

胎土は石英・長石粒などを多量に含み良くないが、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈し、体部上半、口縁部外面には炭化物が付着し黒味を帯びている。

〔Ⅱ〕 10—2は、土師器の杯で、底径5.4 cm、器高6.4 cmを計り、復元口径は15cmである。平底の底部から一段おいてゆるやかな内湾をみせて体部が立ち上がり、そのまま口縁部へと移行していく。

底部は左回りで右から左へ手持ちによる篦削りを行っている。そのため切り離し技法は不明である。体部から口縁部は轆轤調整を行っている。内面は黒色処理が施されており、底部から下半部は器壁が荒れ調整技法は不明であるが、上半部から口縁部には轆轤調整が行われている。

〔Ⅲ〕 10—3は、土師器の杯で半欠であるが、器高は5.5cmを計り、復元口径16.0cm、復元底径7.0cmである。平底の底部からゆるやかに立ち上がる体部は、やや内湾気味にそのまま口縁部に移行する。底部は轆轤回転による篦削りの再調整がなされているので切り離し技法は不明である。また体部下半にも轆轤回転による篦削りが施されている。内面は黒色処理が施され、底部には篦による一定方向のみがきが成され、体部から口縁部の全面にわたって横方向の篦みがきが施されている。

底面には墨書銘があるが半欠銘で判読できない。体部下半に逆さに描かれている「家」は明らかに「イエ」と読むことができる。底面のものもこれと同銘と思われる。

胎土・焼成とも良好で色調は褐色味を帯びた黄灰色である。

＜須　恵　器＞

〔Ⅰ〕 10—4は、須恵器の杯で半欠であるが、口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.4cmを計る。平底の底部からわずかに内湾気味に立ち上がる体部は屈曲なく口縁部に移行する。

底部には轆轤回転による篦切りの跡がみられ、その後の調整はない。体部内外面には轆轤痕が顕著で、内面底部にはみがきが施されている。また、内外面の随所に墨のようなものが付着している。

〔Ⅱ〕 9—4は、須恵器の台付底部破片で底径 9.0cmを計るが、上半部欠損のため、詳細は不明である。器形は長頸壺と思われ、胎土焼成とも良好である。

第２節　金属器・その他

土器以外の遺物としては、釘と砥石がある。図版９－８は、１号住居址の木炭層から発見されたもので、断面は方形、頭が鉤状にまげてある。全長4.7cmと4.3cmのもの３本である。砥石は、長さ10cm、幅6.5cm、厚さ４cmの半欠品である。その他に耳皿が出土している。

第５章　考　　察

孤石遺跡Ｂ地区から４軒の住居址が検出された。遺跡の東端に１号住居址、中央部に２・３号住居址が重複して検出され、西端に４号住居址が発見されている。１号住居址は、道路敷東端に設定したＡトレンチ南端の表土下30cmに検出され、一部は農耕で破壊されている。住居址の規模は住居址の北側半分が道路敷外にのびているため、未調査で明らかでないが、南北7.3m、東西は道路敷端まで1.4mと大型である。周溝は壁沿いに幅８～10cm、深さ５～７cmのものが認められた。地山が傾斜しているので、貼床がしてあり、柱穴は南北に走る西壁にそって２個検出されている。南側は径42cm、深さ60cm、北側は径36cm、深さ50cmでともに貼床を示す積上の変化がみられる。また西壁の中央部に造り出しがあり、２個の柱穴状の小ピットがある。ピットは南側が径17cm、深さ10cm、北側は径16cm、深さ９cmで、この造り出しの外部北側にも径26×40cm、深さ28cmのピットが発見されている。住居の周囲をめぐっている周溝は、この造り出しの小ピットで消えている。これらの遺構は１号住居址の出入口の構造ではないだろうか。住居の南端に焼土とともに炭化材、炭化した葦状のものが出土している。平角材・丸形材は棟木や床板などに、葦は壁に用いたものが、火災により焼失し倒潰したものと思われる。出土品は少なく須恵器杯・耳皿破片、釘・砥石がある。耳皿は灰釉を塗布したあとが明らかにみられ、うすい緑色をしている。胎土は緻密で口縁部薄く仕上げ、側辺の中央部を内側に折り返して耳をつけている。底部は上げ底になり糸切り痕がある。出土品などから考察して９世紀に建築された住居とみられる。

２号住居址は、南北 5.6m、東西 3.7mの長さの隅丸方形プランで、東壁の中央から南よりに奥行90cm、幅1.1cmのカマドと長さ１mの煙道を設けている。カマドは真東を向いており、カマドの両側には径40～60cm、深さ40cmの落ち込みがある。煙道の北壁には、第６型式の土師器甕の半欠があり、カマドの燃焼部の南外壁には、内面黒色処理の土師器杯の底部片が検出されている。カマドの前面には、30×80cm、深さ30cmのピットがあるが、カマド両側のピットとともに、灰・木炭が黒色土ととも

に出土しており灰捨てに用いられたのであろう。住居址の壁には、深さ5～8㎝、幅3～5㎝の周溝があり、周溝はカマド両側のピットで消えている。

3号住居址は、2号住居址の北西隅を16㎝掘り下げ一部重複して作られ、2号住居放棄後作ったものと思われる。4.8×4.4mのほぼ方形の隅丸プランで、壁の高さ30㎝、幅4～7㎝、深さ5㎝の周溝が壁際をめぐっている。

カマドは、北西壁のほぼ中央部に作られ、主軸は北北西を示し、奥行95㎝、幅1.2m、煙道1.1mで、燃焼部の中央部と焚口の両側に立石がある。焚口の前面と北東隅には、50㎝～1mの落ち込みがあり、灰・木炭・黒色土が混在している。煙道の前端、両側に径15～30㎝、深さ20～30㎝の柱穴が5個検出されているが、これらはカマドを保護するための構築物のものであるかもしれない。2・3号の住居址とも柱穴がなく、周溝に径7～10㎝、深さ7～10㎝の柱穴状の小穴がある。床面はともに傾斜地上に構築したため貼床で、3号の東壁にそった溝上より、径15㎝の凹石片が出土している。

4号住居址は一辺3mの隅丸方形で、周溝は幅13～15㎝、深さ3～5㎝、壁面の高さ25㎝で、北壁の中央部から東よりに北を向いたカマドが検出された。カマドの北東隅に40～70㎝、深さ50㎝の落ち込みがあり、白色粘土と少量の黒色土があり、東壁の中央部から北よりの壁に50㎝×1mの白色粘土の塊りがあった。またカマド南西部には65㎝×1m、深さ60㎝のピットがあり、わずかではあるが湧水がみられる。

柱穴は床面より検出されなかったが、東壁をこわして径24㎝、深さ39㎝の柱穴と住居址外に径30～33㎝、深さ25～30㎝の柱穴が、数個不規則に検出されている。住居址の北2.5mには、幅1.2×1.5m深さ50㎝で床面はきれいに削平されたピットが発見された。4号住居址からの遺物はなく時代推定はできないが、周辺より出土した第6型式の土師器片より考え、1～3号住居址と同時代ごろのもので、白色粘土の存在から工房的な性格もうかがえる。

なお、墨書のある土師器片4点が出土している。3点の文字は判読できないが、1点は杯の底と胴部に「家」と書いた墨書がある。

この狐石遺跡は、これらの遺構・遺物より考えて、平安初期の集落の一部であり、一般民衆のものというより、郡もしくは郷など地方の支配階層と関連を有した遺構と推定される。

（藤田定興　村川友彦）

参考文献

『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報　2』　福島県教育委員会　1971

第25編　金重谷地遺跡

遺跡番号	13—190
所在地	安達郡本宮町青田字金重谷地
時代・種類	平安時代・集落址
調査期間	昭和46年9月4日～9月10日
担当者	成田克俊
調査員	木本元治　古川 猛　遠藤文吾　曾我伝吉 山崎清敏
協力機関	本宮町教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 417
　第1節　位置と地形…… 417
　第2節　周辺の遺跡…… 417

第2章　調査経過…… 417

第3章　遺　　構…… 419
　第1節　住居址…… 419
　第2節　ピット…… 422

第4章　遺　　物…… 423
　第1節　住居址出土遺物…… 423
　第2節　ピット出土遺物…… 427

第5章　考　　察…… 428
　第1節　遺　　物…… 428
　第2節　各住居址と土師器…… 429

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

本遺跡は、安達郡本宮町青田字金重谷地地内にあり、東北本線本宮駅の南西約4㎞に位置している。

安達太良山塊の裾に位置している大名倉山（標高576.3m）は、南東方面に裾をひろげ、仁井田方面に台地を形成している。この台地の中央部を瀬戸川が浸食し、現在の舌状台地が形成されている。さらに瀬戸川沿いの沖積地より、舌状台地に向かって数条の小谷が刻まれている。本遺跡もこのような小谷地沿いに立地しており、遺構のある斜面の西端は崖となり、瀬戸川沿いより入り込んできている谷地に落ち込んでいる。この崖面には所々に湧水点があり、現在も清水として利用されている（図版1）。

第2節　周辺の遺跡

台地の瀬戸川を望む斜面（南斜面）には、本遺跡のほか孫市・東万風・片面山・西万風・日向内・瀬戸川館などの土師器・須恵器を出土する遺跡が分布している。瀬戸川南岸にも長者ヶ峰・戸張遺跡（古瓦も出土）などが分布している。

これに対し台地北側の安達太良川沿いでは、土師器・須恵器を出土する遺跡は1か所、中央部には弥生式土器（桜井式）を出土した天ヶ遺跡があるのみである。むしろ安達太良川北方の大玉村方面に広がっている扇状地の末端部に数か所の分布が見られる。安達太良川と阿武隈川の合流点の自然堤防上には1か所発見されているのみである。本宮近辺で土師器・須恵器を出土する遺跡の分布が濃密なのは、大玉扇状地の中央部であり、この地区は弥生時代の遺跡や古墳の分布も顕著である。

全体として見た場合、本遺跡近辺で土師器・須恵器を出土する遺跡の分布が著しいのは大玉扇状地の中央部と瀬戸川の流域であり、安達太良川沿いはあまり顕著ではない。　（木本元治）

第2章　調査経過

9月4日調査開始。路線中心杭ＳＴＡ107＋60～108＋20を中軸とし、路線用地全面に3×3mのグ

リッドを設定、グリッド番号は南北軸を南より1～26、東西軸を東よりA～Mとする。C－2、B－3グリッドより市松に発掘を開始する（図版1）。

L－7南隅より寛永通宝1枚検出、遺構は見られない。L－7・8、M－7・8より方形竪穴住居址を検出、煙道を検出するためカマドに接するK－7・8を発掘したが検出できなかった。1号住居址とする。

F・G－19より竪穴住居址を検出、2号住居址とする。竪穴住居の南半分はすでに破壊されており、F・G－18からは検出されなかった。また竪穴北方のF－19で地山に密着した土師器甕の破片が検出されたが、煙道に用いたものかどうかは不明である。

G－25、H－24～26より不整楕円形の土器・焼土を含む落ち込みを検出、全体プランを確認する前に4・5号竪穴住居に近接して土器片・焼土を出土する1・2号ピットを検出。前述の落ち込みは、プラン確認後3号ピットと命名した。

D－23より4号竪穴住居址を検出、その西南隅は2号ピットにより切られている。E－22より2号ピットを検出、これら1・2号のプランはそれぞれ円形を呈す。

C－24より一辺約1.8mの焼土を伴う方形の落ち込みを検出、5号遺構とした。その後竪穴住居址と判明したため5号住居址と変更。

J－20・21より6号住居址を検出。カマド及び煙道は確認されたが他はきわめて保存が悪かった。

D・E－10・11より7号住居址を検出、斜面に作られた竪穴住居址であったため、住居址の東半分と煙道・カマドを検出したのみであった。

G・H－19・20より2号住居址の西側を切って8号住居址を検出。この地点の斜面を下方に向かって表土を剝離したところ8号住居址は北半分が残るのみで、さらに8号住居址を切って9号住居址が作られていることが判明。9号住居址も耕作による攪乱を受け北半分を検出したのみだった。

その他、D－4、K・L－7より若干の南御山Ⅱ式と考えられる弥生式土器片が表土中より検出された。

以上の地点を金重谷地A地点と称する。

A地点北側の谷をはさんだ対岸70mの北斜面より若干の土師器片が採集された地点があり、ここを金重谷地B地点とした。畑・果樹園として残っている部分に、2×20mのトレンチを3m間隔に設定し発掘する。各トレンチとも表土下約50cmで地山が現われ、若干の湧水があった。土師器の小片2点を検出したのみで、遺構遺物とも見るべきものはなかった。（木本元治）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

本調査により検出された住居址は8例を数えることができた。すべて竪穴住居址で、時期的には平安時代に属するものである。

1号住居址（図版2、7）

L・M—7・8より検出され、プランは一辺2.58mのほぼ方形プランを呈す。壁の立ち上がりは西壁を除いては比較的ゆるやかである。北壁は大部分後世に攪乱を受けており不明なところが多い。したがって床の北側の部分は攪乱されている部分もあるが、中央部南側は床がほぼ完全に残っていた。柱穴らしいピットは検出されなかった。

カマドは東壁の中央よりやや北寄りの部分に作られている。幅は60cmあり、東壁を外側に18cm掘り込んで作られ、板状の花崗岩を中心とし、粘土で約35cmの張り出しを作り、袖としている。煙道は検出されなかった。カマド焚口付近から住居の北東隅にかけて、床面に灰・焼土が分布しており、床面の焼けた部分も見られる。

遺物は主としてカマド及びその周辺から検出されている。カマド内からは2個体分の甕の破片、高台付杯、回転篦削り調整のある内面黒色処理の杯が検出されている。焼土・灰の散布する部分でも床に張りついて土師器片が検出されている。

2号住居址（図版5、9）

F～I—18～20から2号・8号・9号の住居址が切り合って検出された。この切り合いにより2号→8号→9号の年代順が考えられる。これらの竪穴住居址はすべて地山の黄色ロームに掘り込んで作られている。

2号住居址はF・G—19、G—20から検出され、西半分は8号住居址により切られ、南半分は耕作により攪乱され全体のプランは確認できなかったが、一辺3～4mの方形プランを呈するものと考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、カマド付近の一番深い部分で24.5cmを計る。ロームを掘り込んだ面を床としており、検出された床は堅くしまっていた。

カマド右側の壁より3個のピットが検出された。規模はカマド側より径40cm・深さ16cm、径30cm・深さ18cm、径50cm・深さ20cmである。一番大きなピット中からは若干の土師器片が検出され、貯蔵ピットと考えられるが、他の二つは柱穴になるかどうかは不明である。カマドは北壁の中央部に作られており、幅1m、奥行き60cmに壁を掘り込んでいる。左袖には幅14cm、長さ19cmの張り出しの痕跡ら

しい焼土が検出されている。

遺物はピット・カマド内より若干の土師器が検出された。なお住居址外の、カマドの煙出しの方向から地山に密着した土師器甕の破片が検出されているが、焼土は伴わず甕を用いた煙道かどうかは不明である。

4号住居址（図版3、7）

D—23より検出された竪穴住居址で、東西3*m*、南北3.15*m*のやや角の丸まった方形プランを呈す。南北軸は東に10°ずれる。壁はやや傾斜しており東壁で24*cm*、北壁で5*cm*、南壁で7*cm*を計る。西壁は半分近くが2号ピットで切られ、残りもほとんど検出できなかった。おそらく耕作のため削平されたためであろう。

床面から柱穴は検出されなかった。南壁近くの床からは浅いピットが検出されたが、性格は不明である。カマド左側の95×54*cm*、深さ10.5*cm*のピット内からは土師器杯の破片、石などが検出されている。貯蔵ピットの可能性が考えられる。

カマドは東壁の中央よりやや北寄りに作られており、先端の丸まった三角形を呈している。焚口幅45*cm*、全長60*cm*あり、壁面からは32*cm*掘り込まれている。袖は粘土を用いて築かれており、右袖は石を用いて補強してある。焚口の前の部分には焼土を含んだ浅いくぼみが見られ、このくぼみからカマド内にかけて轆轤調整土師器の杯・鉢が検出されている。

5号住居址（図版4、8）

C—24より検出された長軸1.9*m*、短軸1.86*m*の小型竪穴住居址で、不整方形プランを呈す。壁はやや傾斜しており、北東壁中央のカマド付近で深さ14*cm*を計る。床面は地山を掘りくぼめた面で、堅くしまっている。床面から柱穴は検出されなかった。

北東壁中央部に幅30*cm*、奥行き8*cm*の焼け面、焼土を伴った壁の掘り込みがあり、そこより住居址中央部にかけて80×65*cm*の範囲に焼土の分布が見られる。カマドとしての明確な施設は検出できなかったが、これら一連のものはカマドの跡であろう。焼土の中からは若干の土師器が検出されている。

6号住居址（図版5）

I—19・20より検出された竪穴住居址で、傾斜地に作られていたため東側半分を検出したのみだった。プランは南北5.4*m*の方形を呈するものと考えられ、東壁には地下式の煙道を有するカマドが作られている。壁はほとんど垂直に掘り込まれており、東壁カマド付近で深さ32*cm*を計る。

床は東半分を検出したのみであったが、検出された部分は堅くしまっていた。その中央部から径70×85*cm*、深さ29*cm*のピットが検出されたが、柱穴らしきものは検出できなかった。

カマドは東壁中央部に作られている。カマドの袖の部分はなく、燃焼部と考えられる部分は、床面に90×40*cm*の範囲でおびただしい焼土が残っていた。煙道は地下式で東壁に対し直角ではなく、北に

約30°かたむけて作られている。長さは1.05m、幅25cm、壁付近で深さ30cmを計るが、天井部は落盤しており天井の厚さは不明である。

カマドと煙道の境界付近の床面から、形態がカマドの一部と考えられるような土師質の土器が検出されている（図版11—5、14—6）。カマド右側の床面からはややまとまって土師器の杯・甕の破片が検出されている。

7号住居址（図版6、8）

D・E—10・11より検出された竪穴住居址で、斜面に作られていたため、西半分はすでに破壊されており、東側半分のみ検出された。検出した部分も南壁がピットにより切られ、正確なプランは不明であるが、南北2.50～3m程度の方形になるものと考えられる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁のカマド付近で24cmを計る。床面が検出された部分は堅くしまっており、保存状態も良好であったが、柱穴らしきものは検出されなかった。

カマドは東壁の中央よりやや北寄りに幅65cm、奥行き30cmにわたり壁を掘り込んで作られている。この部分の前面の床には焼土と焼け面、灰の分布が見られ、また床に半分埋められた形で板状の石が検出されている。この部分までカマドの施設があったのは確実である。煙道は幅20cm、深さ22cm、長さ95cmあり、煙道のセクション上部に落盤しかかった天井の一部らしい層が見られ、地下式煙道だったものと考えられる。

カマドの焚口と考えられる付近より、焼土と灰の混じった径35cm、深さ8cmのピットが検出され、内部より轆轤調整、回転糸切りの内面黒色処理土師器の杯が検出された。また住居址の北東隅に、床面から掘り込まれた径40cmと径40×50cmの浅いピットが検出され、その上部より土師器片が出土している。

遺物の多くはカマド及び煙道内から出土しており、土師器杯4個体、甕2個体分の破片が検出された。

8号住居址（図版5、9）

G・H—19・20より検出された竪穴住居址で、東壁は2号住居址の床を切って作られており、西南角の部分は9号住居址により切られている。プランはややゆがんでいるが，東西3.75m、南北3.65mの方形になるものと考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、北壁中央部で37cm、南壁で13cmである。この住居址は斜面に掘り込まれ、その後削平を受けたらしく、斜面下方にあたる西壁及び南壁の西半分は検出できなかった。

床面は堅くしまっており、保存は良好であった。東壁沿いの北寄りに床面から掘り込んだ径30cm、深さ13cmの灰混入のピットが検出され、内部より土師器片が検出されている。柱穴かどうかは不明である。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに、壁を幅40cm、奥行き40cm掘り込んで作られている。その先に幅10cm、長さ14cmの短い煙道が作られている。このカマドは幅に対し深さが深く(35cm)、断面はU字形を呈し、火床は堅く焼け床面と同一レベルである。

9号住居址（図版5、9）

H・I—18・19より検出された竪穴住居址で、北壁と東壁の一部、及び床面の約半分が検出された。北壁と東壁は8号住居址の床面を切って掘り込まれている。北壁は一辺が 2.5m あり、方形プランを呈するものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁・北壁とも8号住居址の床面を20～22cm掘り下げている。南壁と西壁は攪乱されており検出できなかった。

床面の東半分が幅1.3mにわたり検出された。その西はじに、床から掘り込まれた径65cm、深さ36cmのピットが検出され、内部より須恵器片が検出された。床面の2か所から焼土と焼け面が検出された。その片方の周りからは15～25cmの河原石が検出され、一部は焼けていた。壁面には焼け面、掘り込み等のカマドの痕跡と考えられるものはなく炉址と考えられる。

遺物はピット内の須恵器片のほか、床面より轆轤調整、回転糸切りの「赤焼き」の杯と、回転糸切りの内面黒色処理土師器杯の破片が検出されている。

第2節　ピ　ッ　ト

1号ピット（図版10）

4号住居址の西側、E—23より検出された不整隅丸方形のピットで、一辺1.35m、深さは中央部で10cmを計る。底面は全般に凹凸が見られ、ピット内部の底面上に焼土と木炭の層が見られた。床面近くより小児頭大の河原石が検出されたが、外に見るべき遺物はなかった。

2号ピット（図版7）

E—22～33より検出され、4号住居址の西南隅を切って掘り込まれている。プランは直径1.75mの円形を呈する。中央部の深さ14cmの浅いピットである。

底の中央部はやや深くなっており、中央よりやや東寄りに 88×106cmの範囲で、厚さ約10cmのレンズ状焼土層（木炭を含む）の堆積が見られる。この焼土中、及び底部より土師器の杯・高台付杯の破片が検出された。

3号ピット（図版10）

H—25より検出されたピットで、ここでは三つのピットが切り合った状態で検出されている。すなわち、2.40×3mくらいの浅く大きなピットを、西側にあるピットAとBが切っている。AとBの前

後関係は不明である。Aは1.58×1.12m、深さ17cm、Bは90×55cm、深さ12cmのそれぞれ不整形ピットである。

ピットA内、及び3号ピットの底の所々から焼土と焼け面が検出されている。遺構に伴って遺物が検出されたのはピットAのみであり、土師器杯・甕、須恵器の小片であった。　（木本元治）

第4章　遺　　物

第1節　住居址出土遺物

本調査によって発見された遺物について、各出土遺構ごとに記述する。

1号住居址出土遺物（図版11—1～3、13—1～11）

本住居址出土遺物は、土師器の杯・高台付杯・甕である。これらの遺物は、本住居址内一括出土になるものである。

〔杯〕　図版11—1～3、13—1～7に示した土器である。いずれも口縁部が外反している。また、体下部に回転篦調整がみられるのがほとんどである。13—2をのぞくすべての土器が内面黒色処理を施しているものである。底部は篦切りによる切り離しであることが観察されるものもある（13—1～2）。色調は褐色を呈する。胎土・焼成ともにいずれも普通である。

〔高台付杯〕　図版13—8に示した土器である。口縁部は強く外反する。高台は「ハ」の字状に開き、高さは1.4cmを計る。外面には轆轤痕が顕著に見られる。また内面篦磨きがなされ、内面黒色処理を施している。底部は篦切りにより切り離している。色調は褐色を呈する。胎土は精選されたもので焼成も良好である。

〔甕〕　甕形土器は、図版13—10・11のように口縁部が著しく外反するものと、13—9のように緩やかな「く」の字状を呈し外反するものとがある。13—10・11は、轆轤により調整されたものであり、13—9は櫛状工具による調整後、縦方向の篦削り調整を加えている。また、内面も櫛状工具により横方向の調整が見られる。色調はそれぞれ茶褐色を呈する。13—10は外面に有機物の付着が著しい。

2号住居址出土遺物（図版13—12～14）

本住居址出土遺物は、土師器甕1、杯2の計3点で，他は小破片である。杯はカマドから一括出土したものである。

〔杯〕　図版13—12は口縁部を欠損しているが、杯形土器と考えられるものである。2点はともに体下部に回転篦調整を加えている。また底部は篦切りにより切り離しを行っている。13—13は内面を六角状に磨きを行っている。胎土・焼成はともに良好である。色調は茶褐色を呈する。13—12は胎土の粒子が粗で、あまり良いものではない。焼成は普通である。色調は茶褐色を呈する。

13—14の甕形土器は、口径22.0cmを計り、口縁は強く外反する。口縁は轆轤による整形後、横なでにより調整を加えたことが明瞭に観察される。頸部は篦により調整され、胴部は櫛状工具により縦方向に調整を加えている。内面においても横方向の櫛状工具による調整が見られる。内面口縁部に有機物の付着が見られる。胎土は粒子が粗であり、良好なものとはしがたい。焼成も良好とはいえない。色調は褐色を呈する。

4号住居址出土遺物（図版11—6、13—15～16）

本住居址出土遺物は、形状のうかがえる13—15の杯形、13—16、11—6の鉢形の土師器の2点と小破片である。

〔杯〕　13—15は、口縁部が緩やかに外反している。口縁部は横なでにより調整を加えている。底部は篦切りと思われるが、欠損が著しいため明確にとらえることができない。内面の一部に篦磨きがなされており、内面黒色処理を施している。胎土は粒子が粗であり、あまり良いものとはしがたい。焼成も良好とはしがたい。色調は赤褐色を呈する。

〔鉢〕　13—16、11—6は、カマドより出土したものである。口縁はやや緩やかに外反する。外面には明確な轆轤痕が見られ、体下部には篦削りが見られる。底部は、糸切りによる切り離しである。器面は粗悪である。色調は赤褐色を呈する。

6号住居址出土遺物（図版11—5、14—1～6）

本住居址出土遺物は、土師器甕・杯、その他不明土器である。

〔杯〕　図版14—1～3に示した土器である。14—1は口縁部が緩やかに外反する。轆轤痕が明確に把握されるもので、体下部は回転篦による調整がなされている。底部は篦切りによる切り離しを行っている。胎土・焼成ともに良好なものである。14—2は14—1にくらべて緩やかに外反する口縁を呈する。体部外面で轆轤痕が明確に観察される。下部は篦削りにより調整している。底部は欠損が著しいため、切り離しは不明である。胎土・焼成ともに良好である。色調は茶褐色を呈する。14—3は底部のみであるが、杯形土器とみて誤りではないと考えられる。切り離し技法は、回転糸切りによって切り離されたものである。胎土・焼成ともに良好なものである。色調は茶褐色を呈するものである。14—4・5の甕形土器はカマド内より出土したものである。14—4は、胴部がほぼ垂直な立ち上がりを示し、口縁部において強く外反する。外面は口縁に横なでの調整がみられ、胴部は櫛状工具と篦削りにより調整を加えている。内面は、櫛状工具により横方向の調整がなされて

いる。胎土・焼成ともに良好。色調は、茶褐色を呈する。14—5は口縁が強く外反している。外面には轆轤痕がみられ、内面は櫛状工具による横方向の調整が加えられている。胎土は粒子の微細な精選されたものであり、焼成も良好である。色調は茶褐色を呈する。

〔特殊器形〕　11—5、14—6は特殊な器形を示すもので、本住居址のカマド内より出土したものである。底径は23.0㎝を計るが、上部の欠損が著しいため器形は明確でないが、カマドとも考えられる。内外面ともに縦・横方向の篦削りにより調整を加えている。胎土は石英の小粒を含んでいて全体的に粗悪なものである。焼成も良好なものとはいいがたいものである。色調は赤褐色を呈する。

7号住居址出土遺物（図版11—4、12—1、14—7～16）

本住居址出土遺物は、土師器甕・杯である。これらの遺物のほとんどは、カマドから出土したものである。

〔杯〕　図版14—7～13に示した土器である。これらのものはカマドから出土したものである。14—7は口縁部が直線的に外反する。外面は轆轤痕が顕著にみられ、内面は篦磨きがなされており、黒色処理を施している。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土・焼成ともに不良である。色調は赤褐色を呈する。14—8は口縁が直線的に外反している。外面は轆轤痕が顕著に観察される。内面は一部篦磨きがみられる。底部切り離しは回転糸切りである。胎土・焼成ともに良好である。色調は褐色を呈する。14—9は口縁が強く外反している。外面は全体的に横なでの調整が見られ、下部においては一部横方向の篦削り調整が観取される。内面は横方向の篦磨きが施されている。また、内面黒色処理も施している。底部は回転糸切りによって切り離している。胎土・焼成とも比較的良好である。色調は褐色を呈する。14—10は口縁が直線的外反を示すものである。外面は全体的に横なでの調整がみられる。内面には黒色処理を施してある。底部は回転糸切り後、篦により調整を加えている。胎土・焼成ともに不良である。色調は茶褐色を呈する。14—11は口縁が緩やかに外反する。外面は轆轤痕が比較的顕著に観取される。下部は回転篦による調整がみられる。底部切り離しは回転糸切りであるが、その後、篦により調整を加えている。胎土は比較的精選されたものである。焼成はむらがあり良好とはしがたい。色調は赤褐色を呈する。内面は再酸化により黒色処理が消失しているものと考えられる。14—12は体部は緩やかに外反する。外面は轆轤痕が明確に把握できるものである。下部は篦による調整がなされている。底部は回転糸切りの後、篦により調整を加えている。胎土は粒子が密で精選されたものである。焼成も良好である。色調は赤褐色を呈する。14—13は底部を欠くが杯形土器と考えられる。口縁部はやや緩やかに外反する。口縁部外面において横なでの調整がみられる。内面はやや光沢をおびた黒色処理を施している。胎土・焼成ともに普通。色調は褐色を呈する。

〔甕〕　図版14—14～16に示した土器である。14—14は、口径23.60㎝を計るものである。胴下部に

若干の張りを呈するが、ほぼ直線的な立ち上がりを示し、口縁が強く外反し、口唇が直立ぎみな立ち上がりをみせる。外面は口縁部に横なでの調整がみられ、胴部では轆轤痕が明確に観察される。内面は口縁部から胴部の一部にかけて、横なでの調整がみられる。胎土は粒子があらく良いものとはしがたい。焼成も良好ではない。色調は外面赤褐色、内面茶褐色を呈する。14—15は、口径13.2cmを計るもので、本住居址出土の甕形土器では小形のものである。口縁部にわずかな凹線を有して「く」の字状を呈するものである。外面には櫛状工具による縦方向の調整と、篦削りによる調整が見られる。胎土は粒子があらく、あまり良いものとはしがたい。焼成も良好とはいえない。色調は赤褐色を呈する。14—16は、口径22.5cmを計るものである。口縁部は著しく外反するもので、口唇に一条の凹を有するものである。外面口縁部は横なでの調整がみられ、胴部の一部には縦横両方向の篦削りの調整がみられる。内面は口縁部に外面と同様横なでの調整がみられる。胴部内面は櫛状工具による横方向の調整がみられる。胎土は比較的良好であるが、焼成に若干のむらがある。色調は褐色を呈する。また、口縁部に一部有機物の付着がみられる。

8号住居址出土遺物（図版12—2・3、15—1～3）

本住居址出土遺物は、土師器杯形土器のみである。これらの遺物は、カマドおよびカマド付近からの出土になるものである。

〔杯〕　図版15—1は、口径が13.2cmとやや小形のものである。口縁部は直線的に外反する。外面口縁部に横なでの調整がみられる。下部には回転篦削りによる調整がみられる。内面は、放射状に篦磨きがなされ、黒色処理も施されている。底部の切り離しは篦によるものと観取される。色調は暗茶褐色を呈する。15—2は急角度に外反する。外面は轆轤痕が顕著であり、下部は回転篦により調整がなされている。内面も轆轤痕が著しい。内面は一部再酸化しているので、黒色処理を施したものか否かは不明瞭である。底部は回転篦により切り離している。胎土・焼成ともに普通である。15—3は、15—2と同様な形状を示すものである。外面には轆轤痕が顕著にみられ、下部も回転篦により調整を加えている。底部切り離しは回転糸切りのように観取されるが、土器の状態から明確な把握は困難である。胎土は粒子が粗で器面があれていて良好なものとはしがたい。焼成も不良である。色調は茶褐色を呈する。

9号住居址出土遺物（図版12—4・5、15—4～6）

本住居址出土遺物は、土師器杯形土器、「赤焼き」杯形土器3点、須恵器小片若干のみである。

＜土師器・赤焼き土器＞

〔杯〕　図版15—4は、口縁が緩やかに外反する。外面には轆轤痕が顕著に見られる。底部は回転糸切りによるものである。色調は褐色を呈し、焼きは硬い。15—5は、口縁が外反するものである。内面は黒色処理を施している。底部は回転糸切りにより斜めに切り離しされている。色調は茶褐色

を呈している。15—6は、口径に対して底径がやや大きな形を呈す。口縁は外反する。外面では轆轤痕が観取される。底部の切り離しは回転糸切りである。色調は赤褐色を呈し、焼きは硬い。
15—4・6は「赤焼き土器」であり、内面には磨きや、黒色処理は見られず、明るい色調で焼きは硬い。

第2節　ピット出土遺物

2号ピット出土遺物（図版15—7・8）
本ピット内出土遺物は、形状を辛うじてとどめる2点の土師器のみで、他は小破片である。
〔杯〕　図版15—7に示した杯形土器である。外面には轆轤痕が顕著にみられる。下部は回転篦削りによって調整が加えられている。底部の切り離しは回転糸切りによるものである。色調は褐色を呈する。
〔高台付杯〕　図版15—8は、底径7.0cmを計る高台付杯である。外面は横なで調整がなされている。内面は轆轤痕が観察できる。また高台部と杯部の接合の状態が明確に観取される。色調は茶褐色を呈する。
3号ピット出土遺物（図版12—6～8、15—9～18）
本遺構出土遺物は、土師器甕・杯・高台付杯である。
〔杯〕　図版12—6～8、15—9～15に示した杯形土器である。15—9～13は、体下部に篦削り調整がみられるものである。これらの中で内面黒色処理を施しているものは、12—7、15—12のみで他は再酸化により消失したものと考えられる。色調は茶褐色を呈する。15—14・15は体下部に回転篦削りによる調整が見られる。底部切り離しは篦切りによるものである。色調は褐色を呈する。
〔高台付杯〕　図版15—16は、「ハ」の字状に開く高さ2.80cmの高台を有するものである。高台部外面は轆轤痕が顕著である。内面には黒色処理を施している。色調は褐色を呈する。
〔甕〕　図版15—17は、口径13.0cmを計る甕形土器である。内湾ぎみに立ち上がる口縁を有し、口唇部が垂直に立ち上がる。外面には縦方向の篦削り調整がみられる。色調は外面暗茶色、内面褐色を呈する。15—18は、口径 23.40cmを計る甕形土器である。口縁部は強く外反する。外面は口縁部横なで、胴部に横方向篦削りの調整が見られる。内面は横なでによる調整がみられる。色調は茶褐色を呈する。　（寺島文隆）

第5章　考　　察

第1節　遺　　物

弥生式土器

胴が張って口縁部が「く」字形に外反し、頸部がくびれる甕の形態、間隔の広い細沈線で渦文・山形文を描く壺または鉢形土器の文様からして、弥生時代中期の南御山Ⅱ式と考えられる。

土　師　器

＜杯形土器の分類＞

各遺構とも轆轤調整の杯を出土している。これらの杯は技法により「再調整のあるグループ」と「再調整の無いグループ」に大別することができる。

第1表　杯形土師器分類表

		再調製	切り離し	内部調整	形態
1類	1種	回転篦削り	不明	内面黒色処理	小形
	2種				大形
2類		手持ち篦削り（腰・底）			小形
3類		手持ち篦削り（腰）	回転糸切り		
4a類		再調整なし		内面黒色処理を施さないもの	
4a′類					
4b類			静止糸切り	内面黒色処理	
4c類			篦切り		

再調整のあるグループでは、回転篦削りによるもの1類、手持ち篦削りが腰部より底部全面に及ぶもの2類、腰部のみのもの3類に分けられる。

再調整の無いものを4類とし、切離し技法により回転糸切りを4a類、静止糸切りを4b類、篦切りを4c類に分けることができる。また1・2類もa～cに分けうるものであるが、再調整のため不明がほとんどである。

前述のものは、すべて内面黒色処理を施してあるが、4a類と同様の技法で内面黒色処理・内面磨きを施さないものがある。これを4a′類とする。「赤焼き」とか「須恵系土器」（桑原1970）といわれているものに相当するが、分類の都合上土師器と一緒に記述する。

1類は形態からさらに二つに細分できる。1種は底部が比較的小形で立ち上がりの緩やかなもの、2種は大形で、底部も大きく立ち上がりが急なものである。これをまとめると第1表のようになる。理論上はさらに細かな分類ができるが、この表には一般的に見られるもののみをあげた。

＜甕形土器の分類＞

甕の分類は、形態技法が完全にわかる（完形）ものが少ないので、大まかなものにとどめておく。

1類は轆轤調整によらないもので、刷毛目のあるもの1a類、ないものを1b類とする。2類は轆轤調整によるもので、胴部下半に篦削りによる再調製のあるもの2a類、ないもの2b類とし、不明なものを単に2類とのみ記する。2類は器形により、口唇が角ばり、平口唇のもの1種、口唇の上下が肥厚するもの2種、口唇の上部が立ち上がるものを3種に分けることができる。また小形の甕を3類とする。一般にこれは轆轤は用いられないようである。

第2節　各住居址と土師器

前節において土師器の形態分類を検討したが、これらを出土遺構別にまとめると第2表のごとくになる。甕は資料が少ないので杯を中心として考えて行くことにする。

第2表　住居址別土師器杯・甕出土個体数

種別		1号住居址	2号住居址	4号住居址	6号住居址	7号住居址	8号住居址	9号住居址	2号ピット	3号ピット
杯	1類1種	7	2	1			2			2
	1類2種						1			
	2類				2					5
	3類	(1)			(1)	1			1	
	4a類	(1)				5		＋		
	4a′類							3		
	高台杯	1							1	2
甕	1a類	1	1		2	1				
	1b類	1								1
	2類1種									
	2種	1								
	3種					1				
	3類					1				1

本遺跡に見られた竪穴住居址の切り合いは、2号→8号→9号となり、杯では1類1種→1類1種＋2種→4a′類＋4a類となる。

ここでいう4a′類は、いわゆる須恵系土器（桑原1970）といわれているもので、多賀城においては11世紀以後の年代が与えられている（桑原・工藤1972）。したがって2号・8号住居址はそれ以前に年代が求められる。同じく1類の杯を出土している1号住居址も、これら2号・8号竪穴住居址とほぼ同じ年代のものと考えられる。ところで、杯の成形に轆轤を用いていない国分寺下層式には8世紀後半の年代が与えられている（氏家1967）。これらの年代が正しいものとした場合、これら1・2・8号住居址及びその遺物は9～10世紀のものと考えられる。

7号住居址の遺物を見た場合、杯は4a類を中心とし、それに3類が伴っている。この共伴関係は、宮城県の青木遺跡においても確認されている。しかし一方、1号住居址においては3または4a類が1点、1類に伴っている。同様に1類と、3または4a類の共伴が宮城県南部地方においても指摘されている。しかし量的には一方が少量ずつ伴うというような形であり、1・2類の土師器杯に回転糸切りの須恵器杯が伴出する例も多く知られており、この共伴は充分考えられる。

しかし1類は2類と伴うか、1類のみがまとまり、これとは別に3類・4a類が共伴するのが一般的傾向であり、1類・2類を中心としたグループと3類・4a類を中心としたグループに分けられるものと考えられる。また多賀城においては4a類と4a′類が共伴するといわれており（桑原・工藤1972）、9号住居址の出土状態とも一致している。したがって4a類・3類のグループは1類を中心としたグループよりは新しい要素を持つものと考えられる。

ただ7号住居址では4a′類は見られないので、9号よりは古いらしい。前述の実年代とあわせ考えた場合、9～10世紀の間に1類または1類＋2類→3類＋4a類という変遷が考えられる。

第3表　土師器杯と竪穴住居址変遷表

年　代	土師器（杯）	竪穴住居跡
9世紀	1類，1類＋2類	1号，4号，6号，2号↓8号
10世紀	4a類，3類＋4a類	7号
11世紀	4a′類＋4a類	9号

一部では1類を奈良時代の末期に位置づける考えもあるが（馬目1971）、むしろ平安時代前半に位置づけられるものであり、本遺跡も平安時代を中心とする遺跡であるといえる。　（木本元治）

参考文献

氏家　和典　「陸奥国分寺出土の丸底杯をめぐって―奈良平安期土師器の諸問題」『山形県の考古と歴史』山教史学会　1967

桑原　滋郎　『多賀城跡調査研究所年報　1970』　宮城県多賀城跡調査研究所

桑原　滋郎・工藤　正樹　「東北における古代土器生産の展開」『考古学雑誌　57―3』　1972

馬目　順一　『岩代陣場遺跡の研究』　本宮町教育委員会　1971

第26編　高　林　遺　跡

遺跡番号	22—85
所在地	郡山市喜久田町字高林
時代・種類	平安時代（集落）・中世（館）・縄文
調査期間	昭和45年12月12日～19日
担当者	成田克俊
調査員	木本元治　鈴木守康　田中正能　古川　猛
協力機関	郡山市教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 433
　第1節　位置と地形…… 433
　第2節　周辺の遺跡…… 433

第2章　調査経過…… 434

第3章　遺　　構…… 435
　第1節　住　居　址…… 435
　第2節　溝・掘立柱建物…… 436

第4章　遺　　物…… 436
　第1節　包含層出土遺物…… 436
　第2節　住居址出土遺物…… 438

第5章　考　　察…… 439
　第1節　縄文時代の遺物…… 439
　第2節　住　居　址…… 439
　第3節　館　　跡…… 440

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

高林遺跡は、磐越西線喜久田駅の東北約1,500mにあり、喜久田町堀ノ内より日和田へ通ずる県道の南側にあたる。早稲原部落からは、西へ300mに位置している。

遺跡は、阿武隈川の支流藤田川により形成された沖積地に張り出した舌状の台地上にあり、沖積面との比高は約11mである。遺跡の北側の谷は水田となり、東側はその谷の出口付近を土堤によりせき止めて作った用水池となっている。

この台地の南縁をめぐって堀ノ内から早稲原・宮下に通ずる旧道が通っており、道路沿いの台地の崖に湧水があり、現在も清水として利用されている。（図版1・2）

第2節　周辺の遺跡

喜久田付近は、郡山盆地床でも比較的遺跡の分布が希薄な所で、原始～古代の遺跡は第1表のごとく8か所のみである。

中世の遺跡では、藤田川流域及び喜久田付近に約10か所の館跡が見られる。その中には室町～戦国時代に郡山盆地北側の重要な位置を占めた安子嶋（安子ヶ島）・前田沢・部谷田（日和田）の館などがある。

（木本元治）

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
22—83	釜場遺跡	郡山市喜久田町堀ノ内字釜場	窯跡	平安	
22—30	上の原遺跡	〃　〃　前田沢字上の原	散布地	縄文	
22—88	宮下A遺跡	〃　日和田町宮下字宮下	〃	〃	
22—87	宮下B遺跡	〃　〃　〃	〃	奈良・平安	
22—31	西館遺跡	〃　喜久田町前田沢字西館	〃	縄文	
22—32	赤坂遺跡	〃　〃　〃　字赤坂	〃	〃	堀ノ内II式
22—84	大谷地脇遺跡	〃　〃　早稲原字大谷地脇	〃	〃	

22—86	場城内遺跡	郡山市喜久田町早稲原字場城内	散布地	縄文	大洞BC式
新	日和田館跡	〃 日和田町字館	館跡	中世	伊東左衛門（天正10〜15年頃）
〃	尾無館跡	〃 〃 宮下字一本松	〃	〃	
〃	前田沢城跡	〃 喜久田町前田沢字見館	〃	〃	前田沢兵部（天正13年頃）

第2章 調査経過

A 地点

12月11日調査を開始する。高林遺跡A地点では，路線敷中心のSTA—46+80を基点とし、東西を西よりA〜J、南北を北より1・2・3……とし、3×3mのグリッドを設定し、千鳥に発掘を行った。

＜A—1区＞

1区、F〜I—1〜4，I・J—01グリッドより遺物包含層を検出する。層はI〜IV層まで分けられるが、Gの西半分及びFからはIII・IV層は検出されなかった。

遺物はI層にはきわめて少なく、II層では土師器・須恵器の破片に若干の縄文土器片が伴っている。III・IV層では縄文土器片を中心に出土したが、この層でも若干の土師器・須恵器が伴っており、したがって、この包含層は土師器・須恵器の時期（後述のごとく平安時代初め）もしくはそれ以後の再堆積と考えられる。

H・I—01グリッドでは、IV層の下に土師器片を出土する栗色土層が検出され、これをV層とする。この層は上層のII〜IV層（黒〜黒褐色、砂質土）と異なりやや軟質であるが、1次堆積と考えられた。V層は部分的にのみ分布が見られるので、追求したところ竪穴住居址内堆積であることが判明し、IV層の下に平安時代初め頃と考えられる土師器を伴う住居址を確認した。

包含層を検出した部分の南側を並行して調査したところ、G—6〜I—4にかけて溝状の落ち込みを検出した。セクションを検討したところ、I層より掘り込んであり、堆積層・遺物より新しい時期のものであることが判明した（図版6）。

＜A—4・5区＞

G—1グリッドより千鳥に発掘を行う。D〜I—1〜4グリッドでは、15〜30cmの表土の下が直接地山となり、遺構・遺物包含層等は検出されなかった。

F—6グリッドより幅2mの落ち込みらしい面を検出、その延長を追い、F—6〜I—5グリッドにかかる溝状の落ち込みであることを確認、これを掘り込んだところ、上幅2.1m、底幅約70cm、

深さ80cmの溝であることが判明した。並行してF－6グリッドの西半部に検出された柱穴状ピット群の続きを検出するため、E－6・7、D－7グリッドを発掘したところ16個のピットを検出した。そのうちの4個が2.5×2.5mの正方形をなすことが判明した。

E－7からも溝らしい落ち込みが検出されたので、F－8・9、D－8・9を発掘、拡張したところF－6～I－5の溝と同様のものであることを確認し、さらにこれらの溝が東西にも延びるものであることを確認した。

遺物はE・F－6、D・E－7グリッドより土師器・須恵器の破片が検出されている。

B　地　点

表面採集で小量の土師器・須恵器片を採集した。STA－47＋80付近の比較的平坦な桑畑を中心にグリッドを設定して発掘する。H－3グリッドより流れた状態の小量の焼土と、土師器の甕の小片を若干検出したのみで見るべき遺構は検出されなかった。（木本元治）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

当遺跡においては住居址1軒、館跡の一部と考えられる溝と柱穴群が検出された。

住居址は、A－1区のH・I－01・02グリッドより検出された竪穴住居址であり、轆轤調整による土師器を伴っている。この住居址内堆積である栗色土層（第Ⅴ層）の上にⅣ層が堆積している。

検出されたのは住居址の3分の1であったが、東西約2.6mの方形プランを呈するものと考えられる。壁は住居址の上半分以上と、南側3分の2が削られ、あまり良好に残ってはいなかったが、北壁で10～15cmの立ち上りが検出された（図版5・6）。

床面は地山（砂質ローム）直上に薄く堆積した硬質の粘土層をもって床と認める。床面は堅くしまっているが保存状態は悪く、かなり凹凸が見られた。床面からは柱穴・貯蔵穴と考えられるピットは検出されなかった。

カマドは、北壁中央よりやや西側に、住居址の軸線より東へ13°傾いて作られている。大きさは幅55cm、床部幅43cm、袖の長さは26cmあり、煙道は幅20cm、深さ7.5cmである。

遺物は床面中央部及び煙道上より集中して検出されている。

第２節　溝・掘立柱建物（図版３・４・７）

Ａ－４区のＤ～Ｉ－５～９グリッドにかけて検出された遺構で、２本の溝と掘立柱群よりなっている。

東の溝は、Ｆ－６グリッド東半部からＩ－５グリッドにかけて走る断面がＶ字形の溝で、上部幅約2.1ｍ、北上面よりの深さが90cmある。東溝のはじより2.52ｍの平坦面を置き、西溝がＥ－７グリッドからＤ－９グリッドまで続いている。この溝の底部の所々には小礫群が見られる。

この溝間の平坦面に対応して、その北側に2.5×2.5ｍの掘立柱の建物跡が検出された。この建物の中軸線と溝間の中心線が一致しており、この線はほぼ真北を向いている。

これら一連の溝・建物遺構の組み合せは、遺跡の立地、遺構の位置等からして中世の館の一部、おそらく門にあたる部分と考えられる。とすれば溝は堀であり、建物は前の柱穴が太く、後の２本が細いところから高麗門のような門が建っていたものと推定される。なお、堀沿いの塀又は土塁の痕跡はかなり攪乱を受けているらしく検出できなかった。

西溝を門の中軸線より溝の方向(西)に45ｍ延長した地点で、台地の縁より台地中央に向かって入り込む狭く浅い谷につきあたる。この地点より台地中央部に向かって（北）90°折り返し、45ｍ行った地点で南北方向に走る低い土塁状の高まりの末端につきあたる。この土塁の方向とこの線は完全に一致している。前述の浅い谷はこの線に沿って走っていることから堀の痕跡と考えられる。遺跡西側の土塁は45ｍ北に行った地点で台地の北縁に沿って東に曲る。

館の南の外郭線は検出された堀の線で、西の外郭線は前述の土塁を含む線と考えられる。東溝を西溝と同様にして東に45ｍ延長した地点では、台地縁をカットして作ったと考えられる土塁のコーナーにぶつかる。このコーナー北側の土塁下の道路沿に清水が湧いている。

このような状況からしてＡ－４区の遺構は、台地の末端を利用した１辺90ｍ（50間）の方形館の南側中央につくられた門址と考えられる。（木本元治）

第４章　遺　　物

第１節　包含層出土遺物

Ａ－１区

調査経過でも述べたごとくⅣ層までは再堆積であったが、一応、層位ごとに土器の種類・文様別に

記述しておく。

＜Ⅰ　　層＞

土師器・縄文式土器の細片が若干検出され、土師器には内面黒色処理の杯の破片が見られた。縄文式土器は細片なので文様・時期は不明である。

＜Ⅱ　　層＞（図版10—1～4）

〔土師器〕（10—1）　轆轤を用いて成形された甕で、口唇部に一条の浅い沈線が回り、口唇部の両縁が外に張り出し、特に上の面が著しく立ち上がったような状態を呈している。頸部の屈曲は急で内面には軽い稜線を形成している。胴部には内外面とも顕著に轆轤痕が見られる。全体に色調は赤味がかった茶色を呈し、焼成はよく、質は硬質である。

〔須恵器〕（10—3）　小片である。外面に叩き目、内面には叩きによる青海波（同心円？）文が見られ、色は暗灰色を呈し表面には自然釉が見られる。

〔縄文土器〕（2・4）　1c類…縄文の地文（R—L）に縦に3本の沈線と磨消を加えた文様のものと、5類…貼り付けによる隆帯の渦文を有するものが検出された。

＜Ⅲ　　層＞（図版10—5～17）

〔縄文土器〕　1a類…縄文の地文（R—L）に沈線で区画された縦の磨消帯を有するもの、1b類…地文が撚糸文のもの、1c類・2類…沈線で区画された幅広い懸垂文を有するもの、3類…撚糸文の地文に縦の沈線と波状の沈線を加えたもの、4類…貼り付けによる隆帯とその内側に沈線を加えた楕円文を有するもの、それに5類が検出された。5類は磨きによる隆帯の整形、地文のちがいにより細分できるものかも知れない。

その他に地文のみのもので、8類…撚糸文のみのもの、9類…刷毛目文を有するものも検出されている。石器としては流紋岩製のピエスエスキーユ（楔形石器）が1点出土している。

＜Ⅳ　　層＞

縄文土器5類が中心となり、5類の文様の一部が沈線化したものも見られた。6類…隆帯と沈線による楕円形の区画内に刺突文を有するもの、7類…縄文の地文の上に縦の貼り付け隆帯を加えたものが見られる（図版11—1～5）。

その他に安山岩と白雲母花崗岩製の凹石が1個ずつ検出されている（図版9）。

A—4区出土

＜須恵器＞（図版12—11～13）

復元実測可能なものが3個体検出され、そのうち2個体は蓋で、1個体は杯であった。

〔蓋〕　蓋のうち1つはボタン状のつまみを有し、1個は欠損してつまみの形は不明である。両方とも肩の部分より上には回転篦削りが加えてあり、色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。

〔杯〕　杯は底部、及び底部と胴部の境界に回転篦削りの再調整が施されている。器形は胴部がやや外反気味に、口縁部に向いて開く小形のものである。

＜陶　器＞（図版12—14）

底部付近の破片で、壺の底部と考えられる。色調はオレンジがかったクリーム色で、外面はその上にうす緑がかった灰白色の半透明の釉がかかっている。

＜その他＞

A—4区において溝中より若干の須恵器片が検出されたが、中世陶器らしいものは検出されなかった。

第2節　住居址出土遺物

住居址からは復元できた分だけで土師器の杯2個体、甕3個体を検出した。この他に土師器の杯3個体分以上、甕2個体分はあると考えられるが復元は不可能であった。

＜土師器＞

〔杯〕（図版8—3・4、12—6・7）　2個体とも轆轤調整によるもので、器形は比較的深く、全体に丸味を帯びている。胴下部から底部にかけては回転篦削り再調整が施され、内面はいわゆる篦磨きと黒色処理がなされている。口縁はやや外反している。

これらの杯は、「第22編　金重谷地遺跡」での分類では杯の1類1種に相当するものである。

〔甕〕　復元できたものは3個体で、そのうち轆轤調整によるもの1個体、轆轤を用いていないもの2個体であった。

轆轤調整のもの（図版12—9）は口唇に沈線がめぐり、口唇部両側が細く張り出したように肥厚している。頸部は強く屈曲して外反し、頸部直下から胴部にかけては轆轤痕が著しく発達し、その上に外面には粘土の焼着が見られる。胴部下半には手持ち篦削りによる再調整が施されている。これは金重谷地遺跡での、甕2a類2種にあたるものである。

轆轤を用いないものには刷毛目のあるもの（図版12—8）と無いもの（図版12—10）がある。金重谷地遺跡での甕1a類と1b類である。前者は口縁部が約45°で外反し、外側に肥厚しており両面に軽い横なでが施されている。胴部には細い刷毛目による調整が見られ、内面にも一部篦削りを加えたような痕跡が観察される。　（木本元治）

第5章　考　　察

第1節　縄文時代の遺物

縄文式土器の1a・1b類は大木9式及び加曽利EⅢ・EⅣ式の部分に類似している。どちらというと両方とも懸垂文を有する土器群であるが、加曽利EⅢ式の方が懸垂文の幅が広く、撚糸文も多く見られる点からして、この1a、1b類は加曽利EⅢ式に比定できよう。このようにして見ると2類も当然加曽利EⅢ式に対比されよう。

1c類に類以したものは大木9式、加曽利EⅡ・EⅢ式に見られる。3類の文様は、加曽利EⅡ式の胴部文様に多く見られるものであり、しかも地文が撚糸文という例も加曽利EⅡ式に多く見られるので、この3類は加曽利EⅡ式に対比されるものであろう。

4類に見られる楕円文は、大木9式でも古い時期に特徴的に見られるものとされているものであり、大木9a式に対比してさしつかえないと考えられる。

5類・6類は、断片的資料から型式を決定するのは難かしいが、一応大木8b式から大木9式の古い時期に相当するものであろう。7類についても同じである。

これらのことからA－1区の遺物包含層は、縄文時代中期中葉から後半にかけての包含層もしくは遺構が破壊され、平安時代もしくはそれ以後に再堆積したものと考えられる。その時期はあるいは館の構築の時であるかも知れない。

第2節　住　　居　　址

住居址より検出された土師器は、金重谷地遺跡での分類によれば、杯が1類1種であり、甕は1a類＋1b類＋2a類2種であった。資料数が少ないので、これがセットを現わしているとはいえないが、杯と甕の形態の組み合せは、金重谷地遺跡1号住居址出土土師器とほぼ一致している。したがって年代的にはそれとほぼ同じ時期、すなわち平安時代前半、9世紀のものと考えられる。

またこの住居址は、1辺2.7mの小形のものであるが、煙道が住居址の軸に対し斜めに作られているという特徴あるものである。これと同じような例は、宮城県柴田郡村田町西原遺跡1号住居址がある（岩淵1972）。本遺跡では煙道が斜めに作られることにより、煙道の方向が真北に向かなくなって

いるのに対し、西原遺跡の例ではそのことにより煙道を真北に向けている。また西原遺跡では住居址の軸と平行方向の煙道を有する住居址でも、煙道はすべてほぼ真北を向いている。すなわち西原遺跡の場合、煙道を斜めに作ることにより、方向を統一したものと考えられる。

本遺跡の場合住居は1軒のみなので結論は出せないが、このような煙道のあり方は風向き等の各地域の条件を考慮したものであろうことは想像できる。

第3節　館　　跡

高林の館の現在の地名は、郡山市喜久田町高林であるが、古老の話によると早稲原部落は、古くは遺跡の南側を通っている旧道沿いにあり、明治時代に現在の所に移転したとのことである。そしてその名残りが現在遺跡の西側にある旧墓地といわれている。この墓地の墓石の年号は、延享・宝暦から明治初期まで及んでいる。また遺跡北東下の池は「タカヤシキ池」と呼ばれており、現在も遺跡付近の通称は「タカヤシキ」である。この「タカヤシキ池」は、「天保七年安積郡村々池堰調」(『相生集』巻之第三)に見られる「高屋敷池」に当ると考えられ、この池は当時早稲原分として記録されている。したがって当遺跡付近は、天保頃には早稲原の一部であったと考えてよい。

中世における早稲原は、「安積南郷北郷田地注文」(相殿八幡神社文書『福島県史』7・90—十一)に「早田原」として見られる。これは戦国時代末、天正年間もしくはそれ以後と考えられる。その他には、『政宗記』天正13年11月条に「されば前田沢兵部変の者にて、本は二本松一味なれども、義継生害の后は政宗へ申寄り忠節なりしが、今又義重方へ一和したまひ、多勢を以て出陣なれば、伊達を背て佐竹、会津へ身を持替、政宗へは敵をなすなり、同十六日には敵陣前田沢の南の原に陣をかまへ、明る十七日には働くべしと、」(『郡山市史』、前田沢は早稲原の北、約2kmの部落)と見えるのが、早稲原付近に関する唯一の記録である。また『仙道記』(『郡山市史』8—427)『積達古舘弁』等にも早稲原の(高林・高屋敷も含む)館名・領主名も見られない。

また天文の乱に関した「田村義顕・同隆顕連署証文」(伊達文書『福島県史』7・99—七六)、「蘆名盛氏証文」(白河証古文書『郡山市史』8—253)、「伊達正統世次考」(天文十五年六月七日条)にも前田沢・下飯津島・福原などについては見えるが、喜久田地内では、宮下・早稲原・堀ノ内については見られない。

以上の事柄から考えて、高林の館は天正年間にはすでに廃絶していたものと考えられ、廃絶の時期を天文年間以前にさかのぼらせて考える必要もあろう。

また高林の館を『相生集』に見られる「堀之内館」(『相生集』巻之第七稿)に当てる説もあるが

（田中　1971、1973）『相生集』は天保12年の成立であり、この頃はすでに当遺跡付近は早稲原に属しており、遺跡すぐ下の池を早稲原、高屋敷池と記録した『相生集』が、館のみ「堀之内館」と記したとは考えられない。また「堀之内館」が、この説のごとく堀の内部落の東、早稲原との境であることを積極的に証明する資料もない。したがって高林の館が『相生集』成立当時、早稲原に属していたとすれば「堀之内館」は別に求めるべきであろう。

高林の館について立地的に見た場合、周辺に水田耕作に適した沖積地が展開した舌状の台地の末端に位置している。また近辺には天文年間頃までにはすでに村落が確実に成立しており、おそらく、それ以前にも成立していたものと考えられる。

形態的には、第3章で述べたように土塁と堀を有する1辺90m（50間）の方形館で、堀は薬研堀であり、館としては古式の形態を有している。これらのことからして高林の館は、中世でも比較的古い時期の館であり、しかも農村的な領主権を象徴しているものと考えられる。　（木本元治）

参　考　文　献

岩淵康治　「西原遺跡」『東北縦貫自動車関係遺跡発掘調査概報—白石市・柴田郡村田町地区』（宮城県文化財調査報告書第25集）　1972

田中正能　「高林遺跡A・B（高林の中世館出土について）」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査概報　2』（福島県文化財調査報告書第31集）　1971

田中正能　「高林遺跡」『郡山市史（原始・古代・中世資料）』郡山市教育委員会　1974

第27編　厚樫山遺跡

遺跡番号	2－9
所在地	伊達郡国見町大木戸字阿津賀志山
時代・種類	平安時代末期・城柵
調査期間	昭和46年4月19日～4月23日
担当者	田中正能
調査員	鈴木安信　渡部正俊　古川 猛
協力機関	国見町教育委員会　国見町町史編纂室　国見町企画課 大木戸財産区

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 445
　第1節　位置と地形…… 445
　第2節　周辺の遺跡…… 445

第2章　調査経過…… 447

第3章　遺　　構…… 448
　第1節　Aトレンチ…… 448
　第2節　Bトレンチ…… 449

第4章　考　　察…… 449

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

当遺跡は、国見町役場より北に約2㎞、福島市内より16㎞の距離をへだてた厚樫山（阿津賀志山・国見山とも呼ぶ）の中腹にある。厚樫山は奥羽中央分水山脈の東側につらなる標高289mの山塊で、東北にある標高223mの光明寺山塊と接している。厚樫山・光明寺山の東南傾斜面より福島盆地が開けている。このふたつの山塊の北側は、福島県と宮城県との県境でもある。厚樫山と光明寺山の接するわずかな谷部低地を、4号国道(陸羽街道)が北上し、貝田へと雨塚山塊の東面の断層谷を縫って、宮城県側の越河盆地に通っている。4号国道に併行して厚樫山中腹を東北本線が北に走っている。

当遺跡を境として、北側は山頂から東北本線の鉄路まで赤松・楢・櫟をまじえた灌木林や落葉樹林を形成している。南側は開拓され、階段状に桃・リンゴ・桜桃の果樹園が30～40°の傾斜面に造成栽培されて展開し、遺跡よりの眺望は福島盆地が一目のもとに眼下に見ることができる。(図版1・2)

第2節　周辺の遺跡

国見町は全町の42%を山岳がしめている。残りは洪積丘陵と、阿武隈川沿岸に発達した沖積原で形成されている。国見町の遺跡分布は、縄文時代の傾向として、国見町の西側から北側をめぐる奥羽中央分水山脈の東南面の山麓部傾斜地、および山裾の丘陵上に位置している。遺跡は平地部に少なく、縄文時代の中期・後期・晩期にわたっており、遺跡の重複、複合をくり返しながら、次第に平地部に移っている。厚樫山と光明寺山が福島盆地に接する東南面の山麓部をめぐって多く分布している。

弥生時代の遺跡分布は、現在明らかでない。しかし後述するが、厚樫山遺跡の東南前面の微高地・丘陵・平坦地には、広く古墳群が群集している。福島盆地の北端にありながら、古墳数量は最高位にある。この事実は、弥生時代の定着した耕地と人間とが基礎となって成立していることは間違いない。新しい文化が伝わり、突然に出現したものではない。新しい文化を吸収して育てられた土台の上に立ったものである。弥生時代の遺跡の少ないことは、次の時代における古墳の築造、条里施行、用水池沼の築造などの人工のほかに、河川の氾濫、河川敷の変化により埋没したものであろう。

古墳時代になると、大木戸・石母田・山崎・塚野目・西大枝・森山に古墳群が存在している。いず

れも中期・後期古墳であって、国見町自体が厚樫山・光明寺山により宮城県と境を接しており、阿武隈川交通もまたすでに開かれていたもので、水陸交通の自然要地ともなっていた。すでに大和朝廷の東北征定、関東豪族の東北移駐、開拓の歩みは阿武隈川沿いに北上してきたものであろう。

歴史時代にうつると、条里制の遺構も残り、さらに仏教文化を示す大木戸窯跡群・徳江廃寺跡もある。すでに厚樫山は仙道（福島県中通りの名）の重要地として「延喜式」の「諸国駅伝馬」が制定されるや「伊達」と共に「篤借」として駅馬5頭の駅家として定められている。

当遺跡の厚樫山はまた東越山・国見山と呼ばれ、伊達の大木戸とも称されて、一時期には蝦夷との境ともなっている。

このように厚樫山周辺には、数多い各種の遺跡が時期ごとに、単独又は複合して濃密に分布している。表で示すとつぎのようである（『国見町の文化財　第1集』記載による）。　（田中正能）

第1表　国見町遺跡一覧表

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地
2—21	横穴？	涌水横穴群	大木戸字涌水
	古墳群	大木戸古墳群	大木戸字遠光原
	窯跡群	大木戸窯跡群	大木戸字中野窪
2—14	横穴？	硯石横穴群	石母田字硯石
2—6	円墳	日矢来古墳	石母田字日矢来
2—7	寺院跡	正玄堂廃寺跡	石母田字台
	円墳	源宗山古墳	山崎字北古館
2—10	土師	上川前遺跡	山崎字上川前
2—50	寺院跡	徳江廃寺跡	徳江字沼田
2—49	祭祀	反畑遺跡	徳江字反畑
2—15	円墳	上野台古墳	森山字上野台
2—48	古墳群	塚野目古墳群	塚野目字正法寺
	円墳群	森山古墳群	森山字上野薬師
2—26	円墳	王壇塚古墳	西大枝字王壇
2—20	瓦窯址	山居瓦窯跡	高城字山居
2—12	円墳	堰下古墳	泉田字堰下

（縄文遺跡は省略）

第2章　調　査　経　過

昭和46年4月19日より23日まで5日間にわたり、地元大木戸地区部落の人々の協力をえて、発掘作業を行った。

平安時代の後期における城柵遺跡の保存されてきたものは、全国的に数少なく、さらにその遺跡の調査が実施されたものはない。発掘調査の目的は、伝承のままであった11世紀後半に築造された、防塞・城柵を併せた構造そのものの実態を限られた面積の調査であるが、防塞としての二重空壕、三重に築土された土塁の構造を主として、調査を行った。

調査地点は、厚樫山の標高130～145mの間である。この地点では、東南に平均勾配38°の急斜面となっている。標高差15m、距離50mをへだて果樹園に造成された南面樹木の支障のない地点に、上下2本のトレンチを設定して、A・Bと呼称した。両トレンチは上下に平行して、二重空壕を一直線に横断する姿となった。

発掘調査の結果、厚樫山二重空壕は、3条の土塁と、2条の空壕より成立していた。説明上、名称を次のごとく一定して説明する。

西側より第1土塁→外壕→第2土塁→内壕→第3土塁とする（図版3・6）。

Aトレンチ

Aトレンチは、幅2m、長さ31mに設定した。第1土塁は、すでに果樹園として上部のみ削平されていたが、下部築造状態確認の目的で、果樹園内の発掘を行う。外壕から第2土塁・内壕の部分は、比較的に原状を保っている。長い歳月の自然的な破壊のみに維持された状態であると考えられた。まずトレンチ間内の表土上に密生する篠竹類、灌木類の排除を行い、ついでトレンチ内を掘り下げる。内壕・外壕ともにうずもれている土は浅く、ほとんどが第1・第2・第3土塁より流出した自然的な状態であった。第3土塁の根固め石と思われる直径30×20cm程度の凝灰岩塊が、第3土塁裾部及び、内壕底部に転落した状態で出土した。第2土塁・第1土塁ともに断面は築土された状態を示し、土層は幾重にも重なり判然としている。壕底と土塁底部は、ともに厚樫山を構成する緑色凝灰岩であり、外壕・内壕のみこれら凝灰岩を角度をもたせて掘り込んでいることが明らかとなった。柵木列確認のため果樹園内に6m延長したが、発見に至らなかった。

発掘トレンチを清掃し、実測図作製、トレンチ全体写真撮影、断面土層写真撮影を作業の進行にともなって行った。

Bトレンチ

Bトレンチは、幅1m、長さ19mに設定し、桃の植栽間の発掘調査をすすめた。

この地点は、果樹園造成のために破壊度が激しく、第1土塁は完全に消滅、第2土塁も削られてわずかに幅80cmを残すのみであった。そのため、削平された第1土塁、埋没して平地化した外濠調査に重点を置いた。南北に土塁を一直線に切断して発掘をすすめたが、さらに第2土塁を切断、第3土塁まで6mを延長して掘り下げた。濠底、土塁基部を検出。断面・濠内部を調査の進行する過程において、実測図作製と、写真撮影を行った。（田中正能）

第3章　遺　　構

第1節　Aトレンチ

1　土　　塁（図版3・4・5・8）

第1・第2土塁は、厚樫山を形成する緑色凝灰岩上に堆積した黄灰色粘土層・茶褐色粘土砂層・黒色土層の上部を削平して、傾斜面を平坦に造り、その上に外濠掘り下げによって掘り上げた土を選定して構築している。主として茶褐色粘土砂層の土でもって幅5m、高さ約1.80～2mの土塁をなしている。想定土塁高は、3m程度と考えられる。第3土塁は、急傾斜面に築造されたものであり、根固めとして山中に散乱する自然石を使用して、その上に土を盛り上げたと見られる。自然に崩壊流出したものと見てよい。第3土塁の位置に石塊の残留状態を確認することができたし、その直下の内濠に同形の石塊の転落石と見られるものも残っていた。比較的原形を保っていた第2土塁は、高さ1.30m、4層に土層がわけられ、第1土塁は70cmを3層にわけられた。いずれも同質の土層である。

2　濠（図版3・4・5・8）

内濠・外濠は、地山である緑色凝灰岩を掘り下げている。外濠は、底部幅50～60cmから左右に46°～44°の勾配で外反し、東壁は一度土塁内側で屈折して、土塁上面に達している。内濠は中央幅70cm、左右より50°～38°の急勾配で掘られて、西壁は外濠西壁と等しく、東側はそのままに曲線をもって延長されている。

当遺跡の調査中に遺物の出土は1点も見られず、これらは合戦の場に遠かったことを示すものである。外濠西壁と内濠東壁の掘り込み部の幅は、測定の結果、幅15m（5丈）であることは注目しなければならない。

第2節　Bトレンチ

1　土　　塁（図版3・7・8）

第1・第2・第3土塁の構造は、Aトレンチと同様であるが、第1土塁の根固めに自然石を使用している。土質も層位もほとんど構造に変化は認められない。

2　壕（図版3・7・8）

外壕・内壕の構築も同じ形態であるが、山上部にあって、南側に傾斜が20～30°の勾配となっている他はAトレンチと同じ幅でつくられており、間隔、上端部ともに同じ構造であった。（田中正能）

第4章　考　　察

伊達郡と宮城県刈田郡の境、厚樫山遺跡のある厚樫山は、東に光明寺山が接し、光明寺山塊の麓部を南より北に阿武隈川の急流が流下している。このため北に向かう古代の往還は厚樫山・雨塚山の東西の断層縦谷の間を険岨をおかして通り、厚樫山麓で左右にいずれも分かれている。当時すでに利用されたと考えられる阿武隈川舟航の痕跡など、あるべきであるが余り明らかでない。

5世紀以降に勢力的に進出した大和朝廷による東北征定の一環として福島盆地は、早い時期に大和朝廷に服属している。盆地の北縁を限る厚樫山・光明寺山は境関として重要視されていた。ふたつの山塊の南は福島県伊達郡国見町、北は白石市に属するが、ともに古代遺跡の分布が多い地域である。福島県側である国見町には、5世紀より9世紀に及ぶ数多い古墳群が分布し、また古代仏教文化の遺跡が見られることは、大和朝廷による東北征定の基地的性格を福島盆地がもっていたことを示し、これらについては、前に述べた通りである。いまに語り伝えられる「下紐の関」「国見峠」「伊達の大木戸」の名称は、いずれも古代の関門的な関連を厚樫山が示している。

厚樫山を、より一層有名にしたものは、文治5年（1189）の源頼朝による奥州藤原征伐であった。詳細な奥州征伐の記事を編さんした『吾妻鑑』にある厚樫山（阿津賀志山）合戦である。『吾妻鑑』によれば頼朝のひきいる鎌倉勢を防ぐため、藤原氏は福島盆地の南に石那坂、北に厚樫山と陣地を構え、とくに厚樫山に最高の防御陣地を急拠築造して、最大の兵力を布陣したのが当遺跡である。厚樫山合戦は『吾妻鑑』によれば文治5年8月7日条に次のようにある。意訳すると、

> 源頼朝が陸奥国伊達郡阿津賀志山（厚樫山）近く国見駅に至り宿陣した。半更（午後7時）すぎに激しい雷鳴が響き、そのため上下ともに恐怖した。泰衡はすでに頼朝が7月19日に鎌倉を出発したことを聞き、阿

津賀志山に城壁を築かせ、要害をかためるため、国見宿と阿津賀志山の中間に、急いで口五丈の堀を構築して、阿武隈川の水を堰入れ防柵となし、異母兄である西木戸太郎国衡を総大将として金剛別当秀綱、その子下須房太郎秀方以下2万騎の軍勢が、山内30里の間に充満した―下略―

とあり、8月8日より10日にわたり鎌倉勢・奥州藤原勢の合戦が行われた。戦いの経験のない奥州勢と、経験ゆたかな鎌倉勢では死闘を続けても空しかった。迂廻して厚樫山の山頂から逆落しに背後を衝かれた厚樫山の藤原勢は一挙に敗れさった。両軍最大の兵力で戦われた厚樫山の敗戦は、決定的なものとなり、藤原勢は、もはやこれを止める方策もなかった。

主力のすべてを福島盆地に投入した藤原泰衡は、途中の防御を捨てて平泉に退き、さらに奥地に走る以外になかった。厚樫山の合戦はそのまま、奥羽に三代にわたって栄華をほこった平泉藤原氏の滅亡に直結した事件である。かつ奥州自体、古代から中世への変革のポイントともなったのである。ここで源頼朝による全国の支配権力が確立された歴史的事実を立証する遺跡として、大きな意義があった。こういう意味においても厚樫山遺跡の学術的発掘調査は注目された。

文治五年の合戦後780余年の間に、厚樫山中腹から平地部にあった二重の空壕は、慶長年間につけ替えられた陸羽街道工事、近世における村落開発、明治初期の道路工事、同20年の東北本線建設などにより、その多くを破壊されてしまった。現代に及んでも4号国道工事、さらに東北縦貫自動車道路工事計画となり、より破壊の運命に立ち至ったため、予定道路敷内幅員50m間の二重空壕の発掘調査を行った。

本遺跡は全国的に見ても、古代末期の城柵として記録に築造年代が明らかであり、そのままに原形を保っている等、他に類例のない貴重な遺跡であり、学術的に画期的な調査であったといわねばならない。

厚樫山二重空壕工事は、前述の通り文治5年奥州征伐に下った鎌倉勢を迎え討つために、奥州南部の農民数万人を動員、使役して昼夜兼行の大工事と伝えられている。『吾妻鑑』によると同年6月、義経の首級が鎌倉に到着した。ただちに奥州藤原征伐の風聞が流れ、やがて頼朝みずから7月19日に鎌倉を出発、8月8日には国見駅に到着している。その間約1か月の短期間に、厚樫山の南斜面に山頂部堂平の下方から二重の空壕が、同じ間隔と幅をもって山麓に下り、さらに平地部を延々4km余、阿武隈川の西岸まで達する大工事が行われた。『吾妻鑑』の阿武隈川の「水を堰き入れ…云々」は、平地部の空壕の場合可能であるが、合戦の主力は厚樫山・光明寺山の前面平地部に置かれたのである。二重の空壕と高地に陣した藤原勢と、下から攻め上る鎌倉勢の死闘は、付近の郷村をふるわしたことも事実であろう。

発掘調査箇所は、二重空壕の山頂部基点より105m下方である。

第1・第2土塁原形は頂部の盛土が流出しており、第3土塁も永い歳月が、外壕・内壕を埋めてい

た。これら土塁は、いずれも表土を平らに削平した上に、山中に散在する自然石を集めてならべ、その上に壕を掘った土を盛土として積み上げている。この傾向は、第1土塁が果樹園造成によりくずされ、外壕もうずめられ、第2土塁南側上面に大小の自然石が散在していることなどによって確認された。空壕上端部角度は、35°～40°の傾斜である。外側及び内側に石垣積みの痕跡は見られず、あくまで石と土を使用しており、いかにも急造であった姿をとどめている。

外壕・内壕は表土を掘り下げ、さらに厚樫山を形成する第3紀層の軟質緑色凝灰岩（藤田石・国見石）を掘り下げ、逆三角形の形で左右50°の勾配角度を底部にもたせ、そのまま土塁上端まで3mの深さをもっていたと考えられる。Bトレンチの場合は、あくまで発掘地点のみ検出した角度であるが、約60°の角度をもっており、緑色凝灰岩を掘り下げた壕底中心部の幅は70cmで、さらに急角度と約3mの深さにより、当然その当時の武者が鎧を装着して転落した場合には、這い上ることも、駈け上ることも不可能であったことが明らかである。内壕と外壕の底部を精査し、さらに第1土塁盛土部分、流出土を発掘調査したが、遺物が1点も出土していない。このことは厚樫山合戦は、山麓平地部で戦われたことを証明している。厚樫山合戦における鎌倉勢の死者を二重の空壕に埋めたと伝えられるが、調査区域からは一片の遺物や鉄器も見い出せないことも併せて、山腹・山頂部の合戦は少なかったものと考えてよいであろう。

厚樫山の二重の空壕はいかにも急造ではあるが、奥州藤原氏の三代にわたって築かれた奥州藤原文化の一端を物語っており、整然と計画して実施された大土木工事であったことが判明した。

とくに『吾妻鑑』の「口五丈の堀を構い」の記録は、現代尺で、外壕・内壕共に上端部で15mの幅であることである。『吾妻鑑』の記事に関しては、種々の問題批判もあるが、厚樫山合戦の記事については正確な記事であることが証明された。

なお、後世の物語り本である『源平盛衰記』『義経記』『伊達の大木戸合戦記』などの軍記物語りにも見られる柵木・逆茂木などの所在は、発掘調査区域では検出することができなかった。

全遺跡中の一部分の発掘であるが、平安末期における城柵の発掘調査を行い、空壕・土塁の構造と『吾妻鑑』の史書としての信憑性について、一応のデーターを提供できたことは大きな意義をもつ調査であった。

（田中正能）

第28編　古矢館（こやだて）遺跡

遺跡番号　2—32

所在地　伊達郡桑折町大字南半田字台55番地

時代・種類　室町時代・山館跡（旧石器包含地）

調査期間　（第1次）昭和46年6月15～19日
（第2次）昭和46年10月25～30日

担当者　永山倉造

調査員　（第1次）岩田敏之　永山祐三　深谷忠喜　吉田幸一
（第2次）岩田敏之　永山祐三　木本元治

協力機関　桑折町　同教育委員会　同青年会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 455
　第1節　位置と地形…… 455
　第2節　周辺の遺跡…… 455

第2章　調査経過…… 456
　第1節　第1次調査…… 456

第3章　遺　　構…… 457

第4章　遺　　物…… 459

第5章　考　　察…… 469

第6章　旧石器状遺物…… 460
　第1節　調査経過…… 460
　第2節　旧石器時代遺物…… 462
　第3節　旧石器の考察…… 463

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

桑折町は、福島盆地（信達盆地）から奥羽中央山脈にかけて所在している。この福島盆地は、東に阿武隈山脈、西には奥州中央山脈があり、その中央を阿武隈川が流れ、これに注ぐ支流によってつくられた盆地である。

奥羽山脈の一山塊として半田山がある。その南麓一帯には平沢山・高館山・輪王寺山などがあり、その一画に調査の対象とした古矢館がある。自然の要害地となっており、海抜148.5mあり、麓よりの比高は37.4mで崖をなしている。山麓は水田地帯で内城と呼ばれている（図版1－2）。

第2節　周辺の遺跡

中世の関連遺跡は、伊達家関係のものが多い。

高　　館

西館または赤館とも呼ばれており、桑折町大字万正寺の丘陵上にある。伊達家の祖、中村常陸介朝宗入道念西が、文治5年平泉の藤原泰衡征伐の功によってこの地方を領有したとき、築城したと言われている。この南に常陸館があり、朝宗の居館跡とも伝えられている。

この高館は、領内経営の都合上、代々の領主が常駐したのではなかったようであるが、15代伊達晴宗が米沢に移るまで、約360年間伊達家の本拠として重要な役割りをはたしたのである。

伊達朝宗の墓

桑折町字下万正寺の万正寺にあり、文政4年伊達家によって造立された五輪塔であるが、この後ろに凝灰岩の風化のはげしい墓碑ようのものがある。これが朝宗（1199年没）の古墓といわれている。

桑　折　寺

桑折町新町32番地にあり、永仁5年（1297）時宗遊行派の第二祖真教上人によりひらかれた。桑折氏によって開基されたといわれる。

西館山観音寺

高館山の南麓字坂町にあり、宝治年間、高館第4代城主伊達正依によって開基され、父義広を弔ったものという。天台宗に属す。　　（永山倉造）

第2章　調　査　経　過

第1節　第1次調査

古矢館は、東北縦貫自動車道の工事路線内にあり、予備調査により遺跡の大部分が、工事によって破壊されると報告された。そのため本調査は山館全体の実測を中心として一部堀跡、山頂平坦部などを発掘することとして、昭和46年6月15日から調査を実施した。

まず調査団は桑折町役場に8時30分に集合し、調査会議を行った。会議終了後、調査に必要な機具機材・テントなどをトラックにて現場に運び調査を開始した。

遺跡は、南北130m、東西70mの舌状台地で、南面は37.4mの急崖である。東・北面は南面ほどではないが、急傾斜の斜面である。西は内城1番地の愛宕山の丘から峯沿いに山道によって接続している。今回の調査は古矢館のみであるが、この丘陵一帯に伊達家関係の山館がいくつかあったことが考えられる。

発掘調査は、山腹8合目程に築かれている周壕に3本のトレンチを設定することから始めた。トレンチはB－1、B－2、B－3とよび、2×10mの広さに掘り広げた。調査によって、この空壕の幅は、平均12mで約6間の幅であったことが明らかとなった。壕の外側の土塁は、築土の上を粘土によって張り固めた形跡が認められたが、葺石のように人工的に石を置いた跡は認められなかった。壕の底は流入した土砂の堆積が認められたが、水をためた形跡は認められなかった。これらの壕は一定の幅をもたなかったように考えられるが、山館の城壁下から外側土塁までは平均7mと一定している。

B－1トレンチの調査を進めているうち、館寄りの壕の肩の部分から、旧石器と思われるフレークが数点発見された。これは館跡の調査と平行して調査を進めたが、これについては、第2次調査とあわせて別記した。

遺跡の南東部に、40×20mの平坦部があり、北西は小高い丘となっているため、ここに建築遺構がある可能性が強いとみて、A－1～4の各トレンチを設定して調査を進めたが、中世の建築遺構を確認することはできなかった。遺物はほとんど発見されず、わずかに瀬戸の破片数点のみである。縄文時代の石鏃2点が発見されている。元地主の話によると館跡を開墾してリンゴを植えたとき、相当量の土を切り盛りをしており、このとき中世の遺構は破壊されたものと考えられる。

中央部最高所にCトレンチを設定したが、これも開墾のあとがはげしく、遺構らしきものは発見されなかった。開墾の際残ったとみられる、石を並べた堀形が東北斜面に発見された。遺構は4m位で

あとは破壊されているが、山館の区画を示すものであったと考えられる。

山館の測量

平板及びレベルの測量は、桑折町産業課佐藤利夫技師の協力をえて、6月17日より実施した。まず北東部に残存する周壕の測量を行い現況の畑の段々について作業を進める。この平板測量と並行してレベル測量を行う。

関連遺跡の調査

6月16日雨天のため、伊達家の本拠が340年にわたって置かれた高館山の調査を行った。高館山は麓の観音寺うらから大手の山道があり、けわしい山道である。六合目ほどのところに平坦地があり、開墾のとき鉄滓が出土したとつたえられている。山頂の本丸は、標高 193m にあり、産ヶ沢川にのぞむ断崖上にあり、本丸は平坦で所々に礎石が残っている。

中館は、現況が畑と原野で、西側に石積の塁がある。ここから10mの空壕をへだてたところに西館がある。この館は170m四方の石塁に囲まれ、戦国大名の居城の面影を残している。この麓に西館山観音寺がある。城山の中腹を切り開いて築かれた寺で、中世の築城縄張りのなかでの寺の位置の重要さが見られる。6月17日朝よりB－1トレンチの調査中発見された旧石器については試掘を行い、第2次調査のための資料を収集するにとどめた。6月19日館跡の調査は終了した。（第2次調査は、第6章を参照）

（永山倉造）

第3章　遺　　構

伊達氏の家臣団と古矢館

伊達氏宗家のことは資料が多く衆知のことと思われるので、ここでは省略することとする。桑折氏は、伊達氏3代の義広の庶長子、伊達中村太郎（左衛門蔵人親長と同一人物としている）が、祖とされている。永仁5年（1297）9月関東下知状に出てくる桑折心円と考えられる。伊達氏庶流中最も古い家系とされている。

南半田の内城・古矢館地区は、西山城北辺の守りとして、飯田（はんだ）北沢に浜田左馬助・同大和、内城の飯田（はんだ）氏（紀伊守宗親は桑折景長の次男）など、西山城周辺に配置された主要な武将のうちの一つの砦であろう。

今回の調査対象は、古矢館であるので、この関係を中心にして記すこととする。阿武隈川沿いの谷地・久保八幡・田町などの水田地帯を前面にして、堀形の水田がある。これは館の堀と考えられる。この一画は内城（ないじょう）と呼ばれており、南半田紀伊宗親の居館があったと考えられる。この堀形のなかに桐

ヶ窪と呼ばれる字名があるが、これは『伊達正統世次考　巻之九下』の11月13日采地の知行判書を南半田紀伊に賜うの条に、桐箇窪中務丞の名が出ていることから、支配下にある武将の居館跡ではなかろうか。前記の采地知行判書のなかにある支配下武士団の名を列記する。

一、牛越右馬助	一、桐箇窪中務丞	一、内馬場左馬助	一、番匠（たくみ）雅楽助
一、大梅寺	一、小者次郎兵衛	一、佐々木円後	一、我妻備中
一、安積式部少輔	一、安倍因幡	一、都沢内蔵人	

これらの武士団の居館・屋敷などは、古矢館を含むこの丘陵一帯の城の山麓にあったものと考えられる。

各　遺　構

この城は丘陵の北西側を空堀によって区切られている。まず内ノ馬場から東に向かって掘られた幅40mの空堀は800mの長さを持ち、現在でもはっきりと遺構が認められ、これを地元では通称「定規が入り」と呼んでいる（図版6）。この堀が尾根まで続き、この尾根が輪王寺山からの通路として城内に続いている。この尾根から東に形成された谷を天然の堀として上高田の丘陵と隔絶している。

ここで古矢館の縄張りについて、のべてみたい（図版3）。

〔居館・堀〕　居館は南東に水堀を持ち、この堀の幅は平均20mで、現況は水田である。大類伸は『日本城郭史』に次のようにのべている。「平常の居館にあっては丘陵ある地方では丘陵を利用することを忘れなかった。この場合多くの独立の丘があれば之を用ふるが、然らざる場合は一方乃至三方が断崖なる場所を用い、かつ又、沼や池川等をよくこれとともに利用した。」また堀については、次のようにのべている。「堀は空堀と水濠とがあった。幅二、三間乃至七、八間が普通であったと思われる。これは城外対岸の敵を弓で射るのに最もよい射距離によったからである。後世堀幅の広くなった一因は鉄砲が渡来流布したことである。」

これから考えると古矢館の堀は、20mを越えている。この縄張りは堀幅が広がってゆく過渡期の築城と考えられる。この水源は上高田から中北を通り田町に流れる沢水を利用したものと考えられる。

〔空堀〕　空堀については、大類は「丘続きの方面は多く空堀として深く掘下げ、3間乃至5間の深さがあったようである」とのべている。古矢館の空堀は平林の丘陵の尾根を断つための目的と、居館のある内城からの通路とを兼ねたものと考えられる。この空堀は今回の道路工事前まで上高田地区との連絡用道路として使用されていた（図版5）。

〔周濠〕　古矢館の山城を一周する濠があったと考えられる。現況は北部・東部のみに残存が確認されているが、南面は昭和30年代の開畑によって破壊されたといわれる。また西部は通路として使用されているが往時の面影はない（図版8）。

〔土塁〕　土塁の高さは、1間（1.8m）ないし2間が一般的であり、その上に柵や塀を設けたものと思われる。古矢館の居館である内城には、現在は土塁は残存していない。これは恐らく開畑・開田の際破壊してしまったものと考えられる。

〔城壁〕　『日本城郭史』は、城壁について次のようにのべている。「臨時の山城にあっては、峯続きの所を掘切り特に通路を嶮にし、断崖を急に削る等の設備をなした。塁は殆んど用いない。それは断崖を用いて防禦線としているからである」。この縄張りの技法は古矢館の南面から平林愛宕山などにみられ、平均55mの急崖となっている。これから考えると、この城の防備は阿武隈川の平野地帯にむけて備えられたことが考えられよう。

古矢館にみられる遺構は前述の通り北・東側の周壕が主なるものであり、北東部に築かれている三段の構築は昭和30年代の開畑によるもので、山館の縄張りとは何らの関係もない。調査によって明らかになった資料によれば、頂上部から10mのところに、石で築かれた溝が約3mにわたって発見されている。これから考えられることは頂上部に山城としての施設があり、これを区画した残存遺構と思われる。この規模は不明であるが、山城の頂上部は割合なだらかな丘で、中心部には物見矢倉、それに伴う建物など戦闘に必要な規模のものがあったと考えられる。　（永山倉造）

第4章　遺　　物

本遺跡から発見された中世の遺物は皆無である。これは、調査の対象となった遺跡が山館であり、日常生活の場としては使用されなかった場所であることと、開墾による遺構の破壊があったためと考えられる。

第5章　考　　察

中世の戦法は、初期にあっては、野戦・攻城戦ともに、小規模な団隊の散漫な集合よりなる軍隊で、抜けがけの功名をあらそう一騎打的な戦であった。時代が降ると抜けがけの功名は厳禁された。この戦法の変化は、兵制・武器の変遷に密接な関連をもつものと考えられる。

古矢館もその縄張り等から考えると、山岳・河川等の天険を利用した小規模な砦の類で、伊達家の

支城、あるいは出城であることが考えられ、高館山の本城を核として、古矢館その他の出城・砦が互に連繋して一つの防禦地域を形成したことが考えられる。

戦国時代になり伊達氏の勢力が強力になるにしたがって、諸豪族との対立が永続し、持久化の傾向を帯びてくると、城郭の利用は変化してきたことが考えられ、伊達氏の中心も桑折地区から他の城へと移動して行ったことが考えられよう。

古矢館の築城年代は明らかでないが、山岳・河川等の天険利用の砦である。城郭を復元すると、東西2,500m、南北1,000mの大きさを持つものと考えられる。館の南面は、産ケ沢・内城・桐ヶ窪と自然の要害に多少の人工を加え、急崖を形成している。高さは古矢館で38m、内城では50mに及んでいる。北の界は「内の馬場」の浄水場から東に入る沢に人工的な空堀を築いている。これを地元では定規が入りと呼んでいる。輪王寺山に登る尾根から東は、深い谷となっており自然の堀を形成しており、阿武隈川を臨む段丘面には幅20mの水堀が掘られていたようである。

このように古矢館は戦国時代の城郭としての様相が強く、地方豪族の本拠地として軍事的に片寄っているようである。この時期は日常生活には不便が多くとも天険の地を選んだ例が多いが、内城にあったと考えられる南半田氏の居館、ならびに平林・古矢館にあった山城・牛越・桐箇窪・内馬場・番匠・佐々木・我妻・安積・安倍・都沢などの家臣団の居宅とが、割合近くにあったのは咄嗟の間に城郭に立籠って敵に対戦できるためと考えられる。この時代の天険をたのむ築城の一例と考えられる。

（永山倉造）

参考文献

『日本城郭史』　（大類　伸）
『福島県史』　第1巻　1969
『桑折町誌』　1969　（桑折町）
『伊達史料集』　1967　（小林清治）

第6章　旧石器状遺物

第1節　調査経過

古矢館遺跡における旧石器の発見は、昭和46年6月古矢館跡調査の際、北側の空壕のトレンチを精査中に検出したのを端初とする。すなわち6月19日桑折町社教主事の菱沼調査員によって硅岩質の石器剝片が発見され、この石器類が黄茶褐色土層から出土したと考えられたところから、岩田調査員を

主として調査を進めることとした。B－2トレンチを拡張し、約6×4.5mにわたって試掘を行った。横剝き剝片をはじめとし、多数の剝片が発見された。セクションに食いこんで炉跡と考えられる石組が発見されたが、調査は次回にゆずることとし、埋めもどしを行い第1次調査を終了した。

第2次調査は、第1次調査によって発見された旧石器時代遺跡を中心として調査を行った。調査は前回頁岩製の石器剝片が発見された中世館跡の空堀に沿った平地の東北縦貫自動車道のセンター杭を中心としてA・B×1号～17号のグリッド(2×2m)を設定する。秋の変化しやすい天候のため全期間を通じて作業は難行する。26日悪天候の中の作業であるが、B－9、B－16、B－17グリッドから遺物が発見された。これらの遺物は旧石器～中世までである。翌27日は朝のうち晴れており昼ごろから天気が崩れだした。11時頃東北大学芹沢教授が古矢館遺跡調査指導のため、学生5名と参加された。

この指導によると第2層の黄色土は吾妻山系の火山灰によるものであり、第3層は新第三紀層下部の崩壊土と考えられる。また石器の原料となった礫もこのなかに含有されているものと考えられる。道路公団が自動車道工事のため行ったボーリングによる地質調査によると、古矢館地区は25m下でも岩盤には当らず、砂礫含有の淡褐色土であるとのことである。

Aグリッドは中世の館の構築と、開畑の際の堆積土と考えられる。出土する遺物も土師器などが混入している。

館の構築との関係を持つが本遺跡は、中世に館の構築のさい丘陵の山頂部を削平し、台地北面を整地、整形して急斜面を造り、中段に空堀を掘り込み、その排土をもって外郭の土塁を築いたものである。これに加えて近年の果樹園造成によって北斜面を3段の畑としたため、遺跡の破壊は徹底的に行われたようである。Aグリッドから発見された遺物は、この際運び込まれたものであろう。

Bトレンチの各グリッドの地層は安定して後世の攪乱をうけていないようである。B－11、B－12グリッドの第3層に（礫含有）密着してハンドアックスを発見した。他のグリッドからも第3層中より剝片が多数発見された。

第1次調査の際多くの石器剝片が発見された遺構は、Cトレンチとして前回の予備調査のデーターを基本として精査を行った。第2層から頁岩質の剝片が発見される。この遺跡は東西6.5m、南北4.5mの方形プランをもっており、北側は中世に館の空堀を構築した際切り落されている。中央西寄りに石組みの炉と考えられる遺構が発見され、その両側に柱穴と思われるピットが検出された。これは2個のみで外は中世の堀を構築のとき切り落されたものと考えられる。この遺構は旧石器と関係があるか明らかでない。

Gトレンチ第2層より石組遺構と柱穴状ピット3個が発見された。この石組附近から剝片が発見された。

Fトレンチ第2層よりスクレイパーが発見される。D・E・F・G・Hとトレンチを設定して調査

を進めたが、遺跡の3分の2は中世の館を構築した時点と、昭和30年代の果樹園造成の開畑によって破壊されたため、遺跡の全貌は明らかでない。

第2節　遺　　物

第2次調査の主な遺物を説明すると

＜Ⅱa層＞

〔ブレイド状剝片〕（図版9－1）　三角形の大きな打面を有し、a面左側は上方、右側は斜上方から2度の剝離が入っており、b面は上方の打面より加えられた打撃により一枚の剝離面が形成され、下端は折り取られ、側面に細い刃こぼれ状の傷が見られる。横剝ぎ剝片（図版9－3）a面は、上方と斜め下方より調整が加えられ、左上方に打面が見られる。b面は一枚の剝離面より形成され、大きなバルブアスカーが見られる。

〔エンドスクレイパー〕（図版9－2）　下半部を欠損するが、三角形の断面を呈するブレイド状剝片の末端を折りスクレイパーを作ったもので、a面左上縁から右側縁にかけてスクレイパーの刃つけの加工が行われている。石質はすべて頁岩である。

＜Ⅱb層＞

〔小形尖頭器〕（図版9－4）　a面は、横方向よりの剝離面に周辺より加工が加えられ、尖頭部を作っている。同様のものは山形県高畠町火箱岩洞穴より検出されている（柏倉・加藤1967）。b面は左側の一部に剝離が加えられている。

〔四辺形石器〕（図版9－5）　薄い剝片の両側に加工を加えて刃部を形成している。剝離には押圧剝離痕も見られる。同様の石器を岩手県和賀町夏油遺跡出土のものでは植刃として報告している例もある（鈴木・鎌田1972）。しかし現時点では使用法は不明である。

〔小形石斧形石器〕（図版9－6）　a面は、周辺に剝離が加えられ、中央部には大きな一次剝離面を残している。a面下方には、b面からの2度の打撃により片刃状に刃部が形成されており、b面は全面に剝離が加えられ、低い亀甲状に調整されている。類似したものは、北海道モサンル遺跡（芹沢1965）、宮崎県出流羽洞穴第Ⅲ層（鈴木1967）などで検出されている。

＜Ⅲb層＞

〔Ⅰ〕　（図版9－7）　大形でぶ厚く重量があり、a・b両面とも大きな剝離により中央に稜が形成され、周辺にも細い剝離が見られる。基部には円礫の面と考えられる自然面を残している。側縁には交互剝離状の剝離によりゆるい波形の稜が形成されているが、剝離が不連続であり交互剝離

の意図があるものかどうかは不明である。また縁片の角度も大きく鈍角度となる部分もある。

〔II〕（図版９－８）　鉄石英を用いた小形のもので、上縁部に細い剝離で急角度の縁辺部が形成されており、形態的には靴形チョッパーに類似している。

〔III〕（図版９－９）　瑪瑙の板状礫の小形チョッパー類似品であり、８とともにミニチュアトゥールとも考えられる。

第３節　考　　察

各層の主な石器についてのべたが、IIb層の石器は前述のごとく旧石器時代の終末期もしくは縄文時代初頭に見られるもので、IIa層は形態的にはそれより古い様相を示しており、IIa・IIb層は、再堆積による逆転の可能性がある。

この層が再堆積であるとすれば、時期は旧石器末期を逆上らない時期で、IIa層には縄文時代の遺物などが見られないことから、その時期か洪積世末期か沖積世初頭であろう。

IIIb層のものは石器的形態はしているが、一般に縁辺剝離の角度が大であり、７a面右側のように稜上からの剝離角 150° をこす大きな剝離も見られ、非人工的要素も考えられるので、平林遺跡下層出土資料との関連において一応人工品かどうかの判断は保留しておく。　　（木本　元治）

参　考　文　献

柏倉亮吉・加藤　稔　「火箱岩洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
鈴木孝志・鎌田俊昭　「北上川流域の石器―その１―」『遮光器５号』　1972
鈴木重治　「出流羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
芹沢長介　「モサンル出土の石器」　1966
芹沢長介　「日本の石器時代」『科学39―１』　1969

第29編　上岡・堰下遺跡

遺跡番号	7—27・28
所在地	福島市飯坂町東湯野字下岡・岡前
時代・種類	旧石器時代・平安時代（包含地）・中世（館）
調査期間	昭和47年5月10日～5月22日
担当者	渡辺一雄
調査員	相馬胤道　横山英介　長尾 修　柴田俊彰
協力機関	福島市教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 467

第2章　調査経過…… 467

第3章　遺　　構…… 468
　第1節　上岡館…… 468
　第2節　A地点…… 469

第4章　遺　　物…… 469
　第1節　土　　器…… 469
　第2節　石　　器…… 471
　第3節　木　　器…… 472
　第4節　泥土の花粉分析…… 473

第5章　考　　察…… 477

第1章　遺跡と環境

本遺跡は、福島市飯坂町から伊達町へ抜ける県道の上名倉・飯塚・伊達線上にあり、数年前まで福島電鉄の軌道であった。この道路の北側、西根堰の流れる台地端の上と下に遺跡は位置している。

遺跡からの眺望はよく、飯坂町の背後に広がる標高約700m（比高約600m）程の低い山々の麓端にあたる。この山麓の台地とその直下の道路の比高差は10mもない。

本遺跡に近接して、八景腰巻遺跡が南方にあり、そのむこう約1,200mの所に摺上川が流れる。

上岡館のあるこの台地は、飯坂～東湯野地区にみられる上位より3番目の桜場段丘と呼ばれている段丘で、この段丘下には湧水地があり、周辺にも上部から流れてきたと思われる二次堆積の遺物包含地がある。遺物包含層には縄文土器から土師器までが混在し、水位が高く居住地とはなり得ない所である。調査時の現況は、段丘台地上が果樹園で、台地下は果樹園および畑となっていた。（図版1）

（渡辺一雄）

第2章　調査経過

調査箇所は、台地の上と下、数地点にわかれる。台地下の湧水湿地付近をA地点とする。ここにAトレンチ（桃林）2×14m、Bトレンチ（水田）2×12m、Cトレンチ(畑)2×18mとを設定する。A・Bトレンチからは、縄文式土器片・土師器片・須恵器片が混在状態で出土。摩滅したもの多く、二次的堆積と考えられる。CトレンチもA・Bトレンチ同様各種土器片が混在し、しかも湧水がはげしく1・3グリッドは、1日のみの調査で放棄、5・7・9グリッドを中心に調査した。

B地点は、「上岡館」といわれる所で、調査により掘立柱をもつ建物群の一部と土塁を検出した。また遺物としては土師器・須恵器や灰釉陶器があった。さらに第Ⅱ層直上より、祖型ハンドアックス1点が検出されたが、もちろん二次堆積の結果による。

路線内に一部入って古井戸もあり、曲物等もあった。深部からは、ピート層や自然木もあり、C^{14}測定資料と花粉分析資料を採取した。

同じ館の一部で、B地点の南側をC地点として、2×6mのトレンチを設けたが、石組み状の遺構が1か所認められたのみである。

D地点は、館のある台地の北側の小さな谷間で、地元の人の話しで、田舟のようなものが昔あったといわれ、地形的には疑問点も多かったが、一応トレンチ2×20mを設定して調査する。その結果、

土師器・須恵器片の表面散布がみられることがわかり、田舟とみたのは畑と水田との境界にうった畔板と判明。開田の時期から明治前半のものと推定された。調査したグリッドの層序は、表土層・褐色粘土層・黒色粘土層・砂まじり粘土層・青色砂層となる。各層から原石・土師器・須恵器の少片と流木片が、無秩序に検出されたが、遺構は発見されなかった。（渡辺一雄）

第3章　遺　　構

第1節　上　岡　館

現地では上岡館と呼ばれているが、誰の居館跡であったか、時代はいつかなども文献・口伝など全くないので不明。現状では空濠と土塁のあることが表面観察の結果わかる。

この地点は調査時にB地点と称していた所であるが、ほとんどが古代ないしは中世の遺構・遺物であった。かつて坪池忠夫宅敷地内で良好な尖頭石器が発見されており、今回のB地点はその隣接地であるので、旧石器の層の調査を行ったが、遺構・遺物にはめぐまれなかった。ただF－2グリッドの第Ⅱ層直上より自然面をのこす祖型ハンドアックスを発見したが、層位からみて二次堆積していると思われた。（図版4）

A－2・3グリッドでは、不規則に並ぶ柱穴群が検出されている。全部で6個あり、第Ⅴ層の褐色粘土層を掘り込んで柱穴としている。その1穴には、柱根がやせてはいたが現存していた。また土師器片の混入していた柱穴もあった。この柱穴は第Ⅳ層の黒土のバンド層から掘り込んでいる可能性が強いのであるが、確認はできなかった。何らかの掘立柱の建造物があったと思われる（図版3）。

A－1グリッド西壁では第Ⅲ層とした黒色の半円状を呈する土塁が築堤されていることがわかったが、東壁ではそれも不明確である。第Ⅳ層の黒色バンド層はおそらく上岡館の整地層であり、その折りに第Ⅲ層の土塁を築いたものであろう。B－1グリッド付近では、第Ⅴ層の褐色土層を浅く大きくピット状に掘り込んであり、そこに土師器や灰釉陶器が多数投げこまれたような状態で発見された。なおここはその上部の黒土層からも多数の土師器杯が発見されている（図版2）。

D－2グリッドには、路線端に半分かかって、上が広く下にいく程狭くなっている井戸跡があり、その底から挽物・曲物の木器類が検出された（図版5・6）。このグリッドはさらに下に掘り下げて、グリーン・タフから植物の実を採集、さらにその下のピート層をも調査し、C^{14}測定資料や花粉分析資料を採集した。

第2節　A　地　点

上岡館のある台地の南端下に位置し、A地点と調査時に称したが、西根堰の下にある所から堰下遺跡とも呼ばれていた所である。

調査は、県道伊達・飯坂線側からAトレンチ（果樹園）・Bトレンチ（水田）・Cトレンチ（野菜畑）と3本のトレンチを設定して行った。

Aトレンチは、果樹園のほぼ中央部に、東西10m、幅2mのトレンチを設け、2×2mのグリッドに区画し、西から東へ1～5の番号をつけた。1グリッドで、縄文式土器が表土層の下からわずかに検出されたのみで、80cm位掘り込んでいくと湧水が激しく、かつ遺構・遺物もないので、ここで調査終了とした。

Bトレンチは、長さ10m、幅2mで、2×2mのグリッドを一つおきに調査したが、何らの遺構も検出されなかった。

Cトレンチは東西方向に、長さ20m、幅2mに設け、2×2mのグリッドを10設定した。西端の1グリッド・3グリッドは湧水が激しく調査は難行したが、約30cm位の深さから須恵器・土師器等の小片や、時期不明の剝片・縄文式土器の小片（中～後期）等が検出された。約80cm位まで掘り下げたが、湧水が激しくここで調査を終了した。5グリッドは、約1m位の深さで流木と考えられる木材を検出したのみで、他に遺物はなかった。7グリッドは、深さ40cm位の所から須恵器片・土師器片を数点出土した。さらに1.1mの深さまで遺物包含層で、須恵器・土師器・縄文土器等の破片が若干出土し、土錘1点、フレイク数点、堅果類のクルミなども検出された。しかし、これらの遺物は混在しており、流木等もあるので、この遺物包含層はかつての河川氾濫による二次堆積と考えられる。

以上により、遺物は検出されたが、遺構は全く検出されなかったといえる。（渡辺一雄）

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

上岡・堰下遺跡より出土した土器は、縄文式後期土器から近世陶器にいたるまで多様である。量的には土師器が最も多く、出土地点ではB地点の北部に集中している。以下遺構別に出土土器の特徴をのべる。

1　上岡館関係の遺物

B地点の上層から、様式的に中世と考えられる土器が少量出土している。緑褐色の釉を施した大甕の口縁部破片（図版11—1）、須恵器風の壺の口縁（図版8、11—2）などがある。他に赤褐色を呈し、小石や砂を胎土中に含む陶器片や青磁の小破片がある。しかし、遺跡の表土中に近世陶器が含まれており、攪乱を受けている部分では、確実に中世に属する遺物を判別することは難かしい。

2　B　地　点

北部B—1グリッドを中心に、大量の土師器・須恵器が出土している。土師器は、器形的には杯が最も多く、大半は内面黒色処理を施し、胴部には轆轤痕、底部には回転糸切り痕を有する。形態・大きさも一定しており、口径14.5cm内外、高さ4.5～5.0cm内外である。轆轤の回転方向は確認されるものでは、すべて右廻りである（図版8、11—6～19)。破片中には、高台の付けられたもの、内外面に黒色処理を施したものなどがある。

甕形土器は数は少ないが、小形の鉢に近い形態で、内面黒色処理を施したもの（図版8、11—3)、轆轤調整痕を有し、短い口縁で内面黒色処理を施したもの（図版8、11—4)、小形で内外面に轆轤調整を有するもの（図版8、11—5）などがある。大形で口縁の外反するいわゆる長胴甕は、焼けて図化不能の破片が数点出土している。また、内面黒色処理を施さず、堅緻に焼成された明褐色の土器が、同層位より出土している。器形には、杯・大形杯・台付鉢などがあるが、数量的には、内面黒色処理を受けたものの3分の1以下である。大形杯（図版8、11—20）は、鉢と称するべきかも知れないが、口径20.8cmと大形で、内外面共轆轤調整のみで仕上げてある。台付鉢(?)（図版9・12—28）は、粘土紐巻き上げの痕を顕著に残す大形の鉢部に、一対の透し孔を有する裾開きの高台を付けたものである。胎土中に大量の砂や小石を含み、焼成は堅緻で明褐色を呈する。これらの土器は、従来土師器の一型式と考えられ、近年「須恵系土器」として、土師器とは別のものとする説が唱えられている土器である。他の土師質製品では、土錘が1点ある。手捏ねの紡錘形を呈し、中央に直径 0.6cmほどの孔を有する（図版9、12—21)。

須恵器は数量的にはきわめて少ない。いずれも小破片で、器種には杯・長頸瓶・甕・大甕などがある。杯（図版8、9、11—24～27）はB—1グリッドより一括して出土したもので、口径15.4cm、高さ 5.2cm内外、内外面共轆轤調整を施し、底部には回転糸切痕がある。甕は口縁部破片2点（図8、12—22・23）の外は、胴部の破片のみであるが、平底になるらしい。口縁部に篦記号のあるもの（12—22）がある。

灰釉を施した陶器片が数点出土している。いずれも小片で、長頸瓶2個体分以上と皿1個体分である。このほかに検出時には数片に割れていたが完形品となった皿が1個ある（図版9・11—37）。この灰釉陶器はB—1グリッドの第2層より出土したもので、高台を有する皿形陶器である。口径14.8

cm、高さ 3.1cm。明灰色の轆轤痕を有する体部には、口縁より上半にかけて内外面に灰釉を施してある。釉は刷毛状の器具を用いてかけられたもので、刷毛目が明らかに残っている。

3　A 地 点

水磨を受け、保存の悪い縄文式土器・土師器・須恵器それに灰釉陶器片がある。

縄文式土器は大半が再酸化し、風化して文様の知り得るものは3点のみである（図版9、12、13—34～36）。34は磨消縄文の発達した後期の加曽利B式併行期土器の口縁部、35は羽状縄文を有する同期の粗製土器の口縁部で、36も同様に考えられる。共にAトレンチ出土である。

Aトレンチの上層から墨書銘土師器破片が出土している。外面篦削り整形、内面黒色処理をした破片で、判読不能の文字二つを並べて書いてある（図版9、12—30）。同層位から砥石（図版9、12—32）、やや上のレベルより土錘（図版9、12—31）が出土している。土錘はB地点B－1ピット出土品より大型である。Bトレンチ出土の土師器杯1点が復元することができた（図版9、11—29）。外面に轆轤痕があり、底部に回転糸切り痕があるが、再酸化と水磨のため、内面の処理が不明である。

灰釉陶器片はAトレンチより出土した小片で、浅い杯または皿形の器形と思われ、内外面共上半部に浅緑色の灰釉が施され、下半は明灰色の素地のままである。　（野崎　準）

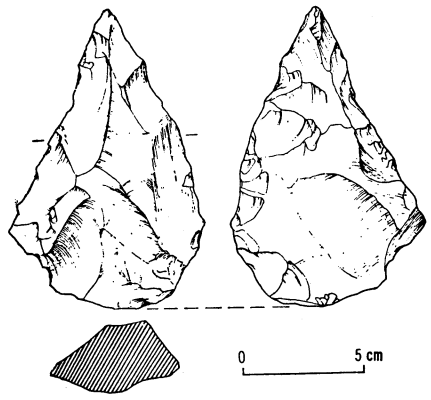
第2節　石　　器

石質は両石器とも流紋岩製であり、図版13—49は紫色を呈し、0.5～1mmくらいの石英の結晶が多く見られる。円礫を素材とした石器で、大きさは縦11.5cm、横5.45cm、厚さ4.0cmである。基部には自然面を残しており、剝離は両側辺より剝離面の大きな交互剝離を用いて順に中央へ剝離を進めて行ったと考えられる。尖端は細く尖っており、断面は三角形もしくはゆがんだ四角形を呈しており、ピック、つるはし形石器、またはプロトハンドアックス（祖製握槌）状の石器と考えられる。

図版13—48は、褐色～暗茶褐色を呈する質の良い流紋岩製で、片平な河原礫を素材としており、大きさは横11.3cm、縦10.0cm、厚さ2.6cmである。表面基部と裏面全体に大きく自然面を残している。剝離面は表面に集中しているが、その多くの打撃は礫縁辺の自然の平坦もしくは剝離により形成した面を打撃面としており、礫を素材とした石核と考えられる。剝離順序は図の通りである。

なお発掘区に近接した地点の地下約2mの礫層中より両面加工の斜軸尖頭器もしくはピック状の石器（第1図）が検出されている。プロトハンドアックス状石器はこれに伴うものかとも考えられるが、今回発掘の石器は表土と第2層の境界付近より出土したものなので、両者の関連は不明である。

（木本元治）



第1図　斜軸尖頭器（『桑折町誌』より）

第3節　木　　器

B地点の井戸底から検出されたもので、時代は不明である。曲物と挽物の2種があり、他に編物もあるが便宜上ここに入れた。

1　曲　　物

〔1　ひしゃく残欠〕（図版10、14—38）　復元径9.0㎝、高2.2㎝、厚さ2㎜ほどの薄板を2重に巻き、巻き終りの部分を幅 1.0㎝の桜皮で綴じている。ひしゃくの側板かと思われ、内側には全体に2～3㎜間隔で刻線がある。割れて歪みがあるため、底板のつけ方は不明である。

〔2　ワッパ〕（図版10、14—39）　いわゆるワッパにしては、形量とも小形であるので、民俗資料を丹念に探る要があろうかと思う。底板より復元すると径7.5～8.0㎝、高さ4.6～5.0㎝、厚さ3㎜前後の曲木の板を1回半巻き、3か所を桜皮で綴じている。内側下端は斜めにそぎ落し、底板をはめこんである。

〔3　曲物の底板〕（図版10、14—40）　径7.2㎝、厚さ6～8㎜。柾目板を面取りして円形にし、周縁を斜めに削って2の曲物にはめこむようになっている。

〔4　曲物の底板残欠〕（図版10、14—41）径25㎝以上の曲物の底板と思われ、3分の1程度が残る。長径23㎝、厚さ6～8㎜の柾目板を円形に削り、周縁をわずかに斜めに削りこんでいる。周縁側面には1か所のみ木釘を打った痕が残り、また表面には片面のみに黒色の漆状付着物がある。釘穴のみで綴じ穴はないようである。

〔5　曲物残欠〕（図版10、15—42）　残欠で、現幅は7㎝、現長は20㎝、側面は2面が残り、短辺では垂直に、長辺では斜めに隅を切り落してある。端に茶褐色の樹脂状の付着物がある。短辺の端から5㎝前後の所に穴が二つあけられている。曲物の側板らしいが、不明である。3～4㎜とやや厚い。

〔6　曲物残欠〕（図版10、15—43）　現存長23.5㎝、厚さ2～3㎜。柾目板を曲げたものらしく、わずかに曲面を残す。3か所に穴があいているが、綴じ穴にしては大きすぎる。製品の形態は不明である。

2　漆　　器

〔7　挽物製漆塗椀〕（図版10、15—44）　口径14.4㎝、高さ3.5㎝の高台付きの椀を、轆轤挽きでつくってある。全面に黒漆をかけてあり、外面に山、内面に山水の絵が朱漆で描かれているが剝落のため詳細不明。

3　編　　物（図版10、15—45）

薄い板状のものを、経・緯を一つずつ上下に編んだもので、織物でいう平織である。編みはゆるんでいるが、ちょうど板の折り返し部分があるので、編物の一端を示す部分であることがわかる。また経緯の比は同一でなく、板の太い方が目は荒い。　（渡辺一雄）

第4節　泥土の花粉分析

1　目　　的

本研究の目的は、最終氷期に居住した後期旧石器時代の人類の居住環境復原の一つとして、花粉分析の使用により、当時の気候と植生について、考察を加えるところにある。以下、分析方法と分析結果についてのべる。

2　方　　法

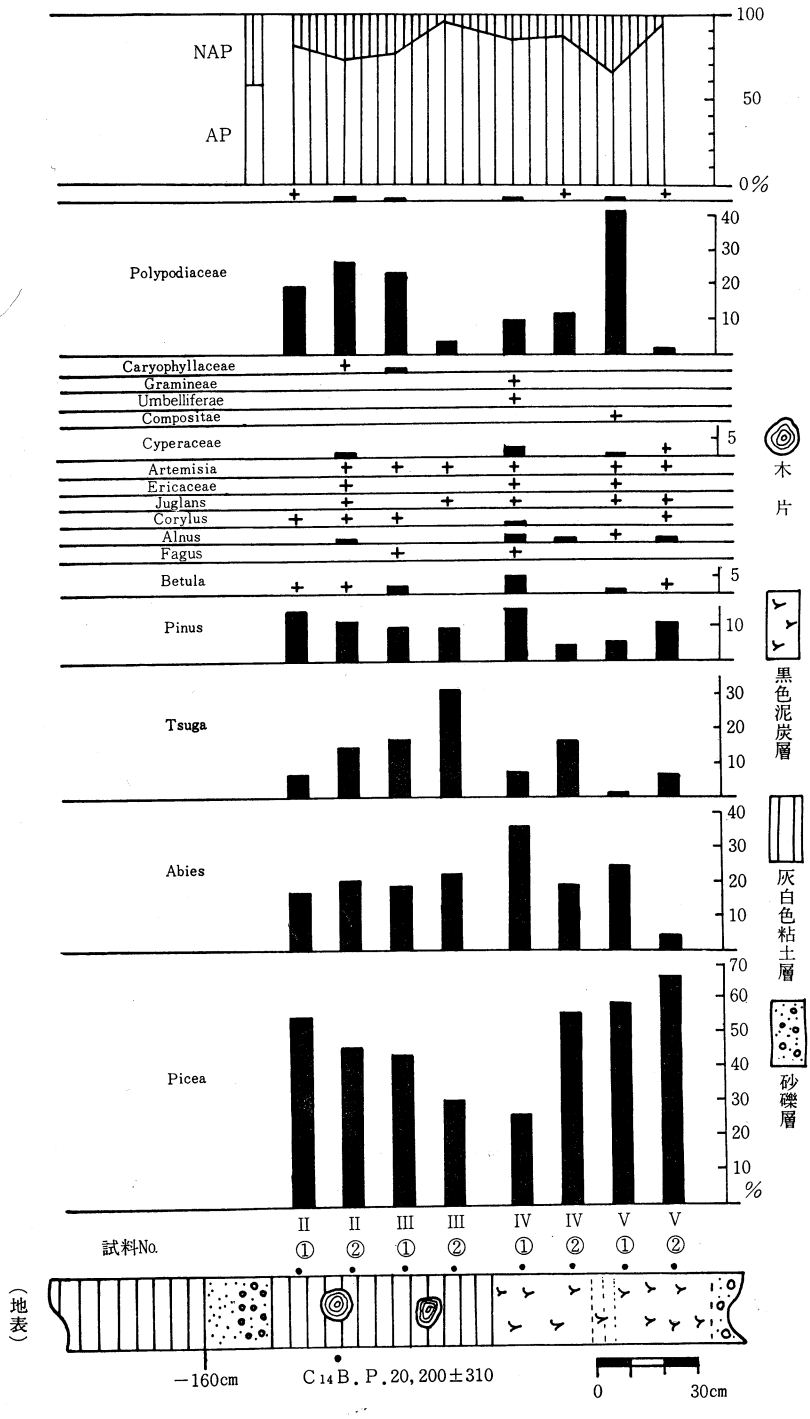
花粉分析の方法は、10～20gの試料を粉砕—KOH処理—水洗—酢酸処理—アセトリシス処理—酢酸処理—水洗—$ZnCl_2$処理—水洗—マウントの順に行った。検鏡に際しては、樹木花粉を200個以上同定することに努めた。花粉の同定は相馬寛吉助教授のご指導を受けた。

3　結　　果

第1表には、全出現花粉・胞子の同定個数を示した。また第2図には主要な花粉・胞子の出現傾向を示した。花粉ダイアグラムにおける草本花粉・胞子の出現率は、樹木花粉に対する割合で示してある。なお、出現した花粉・胞子の一部を図版16・17に示した。

第1表 花粉出現表

試料 / 種名	No. II		No. III		No. IV		No. V	
	①	②	①	②	①	②	①	②
Picea	130個	87個	127個	62個	80個	120個	142個	158個
Abies	41	38	54	48	107	41	60	12
Tsuga	18	28	49	65	22	35	5	17
Pinus	38	23	32	24	45	10	14	37
Betula	1	1	7		16		3	1
Fagvs			1		2			
Quercus					3			
Alnus		2			8	3	2	4
Carpinus					1		1	
Corylus	1	1	2		3			1
Salix					4		2	
Juglans				2	1		1	
Ulmus or Zelkova		1						
Ac'er		1						
Ericaceae		1			1		1	
Fraxinus							2	
Ilex							1	
計 (AP)	229	183	272	201	293	209	234	230
Caryophyllaceae		1	5					
Umbelliferae					2			
Artemisia		1	1	1	1		1	
Gramineae					1			
Cyperaceac		3			11		4	1
Compositae							1	
Chenopodiaceae								1
Polypodiaceae	50	51	68	8	31	26	103	5
Lycopodiaceae	1	4	6		4	1	4	1
計 (NAP)	51	60	80	9	50	27	113	8
合計(AP+NAP)	280	243	352	210	343	236	347	238
AP / NAP	81.8 / 18.2	75.3 / 24.7	77.3 / 22.7	95.7 / 4.3	85.4 / 14.6	88.6 / 11.4	67.4 / 32.6	96.6 / 3.4



第2図　花粉ダイアグラム

全出現花粉中、最も高い出現率を示すのはトウヒ属（*Picea*）である。つづいてモミ属（*Abies*）・ツガ属（*Tsuga*）・マツ属（*Pinus*）が高い出現率を示す。落葉広葉樹のブナ属（*Fagus*）・カバノキ属（*Betula*）・クルミ属（*Juglans*）などの出現率はわずかである。また、草本花粉においてもヨモギ属（*Artemisia*）・カヤツリグサ科（*Cyperaceae*）・イネ科（*Gramineae*）などの出現がみられるが、いずれも低率である。ただわずかに、胞子のウラボシ科（*Polypodiaceae*）が比較的高い出現率を示す。

4　花粉分析の考察

以上の分析結果から、この泥土が堆積した当時の植生は、トウヒ属（*Picea*）・モミ属（*Abies*）・ツガ属（*Tsuga*）・マツ属（*Pinus*）などからなる亜寒帯針葉樹林が広く生育し、ところにはウラボシ科（*Polypodiaceae*）・ヨモギ属（*Artemisia*）などの生育する荒地が存在する景観であったといえる。試料№Ⅱが得られた灰白色粘土層中に含まれる木片のC^{14}年代測定値は、B．P．20, 200±310yr（*Gak*）であることから、この花粉ダイアグラムに示された植生は、最終氷期のマキシマムに相当する時代のものであるといえる。現在の植生分布からみると、トウヒ属（*Picea*）を伴う亜寒帯針葉樹林は、早池峰山の海抜約1, 300*m*以高に見られる。福島盆地の海抜高度は100*m*前後であるから、当時の森林限界は1, 000*m*以上下降していたとみられる。気温低減率を5.5～6.0 °C／100*m*とすれば、単純計算で当時の年平均気温は6～7 °C現在より低下していたとみることができる。

なお、最も優位に出現したトウヒ属（*Picea*）が、試料№．Ⅲ—②、№．Ⅳ—①においてやや減少し、この層準においてモミ属（*Abies*）・ツガ属（*Tsuga*）・カバノキ属（*Betula*）・ハンノキ属（*Alnus*）などが増加する。この点については、最終氷期中における短期間の気候変化を反映しているのか、それともローカルな地形変化などの影響によるものかについては、現時点においては明白に結論を下しがたい。

（安田喜憲）

参　考　文　献

関東ローム研究会・信州ローム研究会（1962）「花泉層の堆積環境とその地質時代について（Ⅱ）」『地球科学 63』P．P．10～18

新潟花粉グループ（1971）「妙高火山山麓の麻苧田泥炭層の花粉分析」『地球科学 25』　P．P．191～200

新潟花粉グループ（1973）「野尻湖のナウマン象化石産出地層の花粉化石と古気候」『第四紀 18』P．P．23～30

安田喜憲（1973）「阿武隈川下域流における縄文時代の自然環境の変遷と人類」『東北地理 25』P．P．51～63

第5章　考　　察

本遺跡の遺物は、数時期にわかれる。旧石器時代の石器として認定し得るプロトハンドアックスは出土層位が原位置でない点に不安が残る。平安時代の土師器も住居址からの出土という状態ではない。これは、遺跡としてその後の時代に続く、灰釉陶器をともなう中世の館の構築によってすでに破壊されたものと思われる。柱根を残す柱穴もこの期のものであろうし、古井戸も時代は確定できなかったが、中世館にともなうのではなかろうか。今回の調査は限られた路線内の部分に終ったため、「上岡館」といわれる館の実体については明らかにし得たとはいえない。しかし地元で上岡館といわれていても、実際に館の存否を確かめることがなかったのに、空壕や土塁をともない、掘立柱をともなう建造物のあったことが判明したことは、道路敷以外に残っている上岡館の今後の調査の大きな目安となるに相違ない。

（渡辺一雄）

第30編　八景腰巻遺跡

―第5次―

遺跡番号	7―35
所在地	福島市飯坂町東湯野字久根添
時代・種類	中世～近世、溝状遺構
調査期間	昭和48年4月16日～5月8日
担当者	目黒吉明
調査員	野崎　準　八巻一夫　寺島文隆　大越忠士 冨田晴夫
協力機関	福島市教育委員会

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 481
　第1節　位置と地形…… 481
　第2節　周辺の遺跡…… 481
第2章　調査経過…… 481
第3章　遺　　構…… 482
第4章　遺　　物…… 483
　第1節　石製品…… 483
　第2節　土器・その他…… 484
第5章　考　　察…… 485

第1章　遺跡と環境

第1節　位置と地形

第5次発掘調査地点は、第1次～第4次発掘調査地点より、水田と用水路を隔てた北東約200m の位置にある。現状は宅地及び果樹園で、水田中の微高地をなしている。発掘区の北西約50m に曹洞宗の寺院板谷山明光寺があり、寺のさらに西方には土師器・須恵器が散布している。発掘区内にも散布が認められたため、昭和48年4月16日より発掘調査を実施するに至ったものである。（図版1）

第2節　周辺の遺跡

発掘によって出土したものは、平安時代末期より中世を経て、現代に至るものが大部分であった。本遺跡周辺の中世遺跡としては、北方の上岡遺跡付近に上岡之館跡があり、西北方飯坂町には、大鳥城跡を中心とする平安時代末より室町時代後半にかけての城館跡が蝟集している。また、中世板碑・供養塔類は、遺跡西方の飯坂町平野付近を中心に、鎌倉時代前期の板碑が多く存在し、注目されている。石造宝塔は、遺跡の北西約4㎞飯坂町天王寺所蔵品と、南方約3㎞の福島市北矢之目出土品が、それぞれ出土地の近くに保存されている。

（目黒吉明　野崎　準）

第2章　調査経過

4月16日に現場に集合、直ちに道路予定地内に、道路中心線と平行にグリッドを設定し、北西側から発掘を開始した。

4月18日に至り、発掘区のほぼ中央を南北方向に走る大溝が検出され、また発掘区南側には礫層が出土した。しかし、発掘区の全面にわたり、遺物の包含層はきわめて薄く、また遺構もほとんどないことも知られるに至った。4月20日、発掘区北側に、人頭大の河原石を敷き並べた施設が検出され、

その内部より石塔の基礎石が出土した。このため4月26日に発掘区を北西に拡張し、石敷き面を全面露出させた。一方、南方にあらわれた大溝も、この日までに全長を検出することができた。4月27日より精査と実測にかかり、連休をはさんで5月7日には実測を終了、5月8日に北側石組みの下方を精査したところ、南側大溝とほぼ同大の溝が検出された。この遺構は降雨と工事の関係により、断面調査のみとし、同日中に発掘を終了した。石塔の破片は最終日に取り上げを行った。（図版4・6）

（野崎　準）

第3章　遺　　構

発掘区全域にわたり、遺物包含層はほとんど残っておらず、遺構もほとんど残っていない。表土をはぐと、南半では直ちに地山の礫層となり、北半は水田耕土面であったらしい灰褐色土層の下に、厚さ20cmほどの黒褐色土があり、その下は地山の黄色粘土層になる。遺構は、この地山面に掘りこまれており、遺構の埋土は黒褐色土である（図版2）。

遺跡の北半は明治17年の地籍によれば水田であったことが知られるが、その際の耕作土であったと考えられる灰褐色土より、黒褐色土中に掘りこまれた溝が2本ある。溝内に石が落ち込んでおり、また陶器甕・擂鉢などが併出することより、近世を遡ることはないと思われる。

発掘区のほぼ中央を、南北に走る大溝がある。この溝は北側では幅2m、深さ1mの断面逆台形に近いものであるが、南へ約20m延びた微高地端で東に屈曲し、消滅する。溝の内部は礫や土器を含む黒褐色土で、特に底面から須恵器甕破片が一括出土している（図版3・7）。

発掘区北側より、石敷きが検出された。東西方向幅2m、長さ約11mの長方形の範囲に、人頭大から拳大の河原石や凝灰岩の破片が敷きつめられている。また長軸の延長線上にもまばらに石の散布がみられる。この遺構の直上には旧水田耕土が堆積しているが、石敷きは黒褐色土内に存在することが観察された。石敷きの中央やや東よりに、石敷きに埋めこまれた形で石塔の基礎石が出土し、石のすき間からは、須恵器系の土器（青灰色）や土師器系の土器の破片が出土している。また石塔基礎石の周辺からは、石製九輪・宝塔塔身・笠・蓮華座などの破片が出土した（図版5・8）。

石敷きを取り去ると、その下に幅1.5m、深さ0.8mの大溝が、石敷きと全く重複して検出された。溝の埋土は茶褐色土であるが、南方の溝と異なり、埋土中にさらに幅0.8m、深さ0.6mの断面ほぼ方形の溝が掘りこまれている。この溝は前述のように断面のみ調査したが、粘土質黒色土層中より骨片若干が出土したのみで、確実に年代を知ることができる遺物はみられなかった。

南側大溝の消滅したあたりは、地山の礫層が深く凹んでいるが、この付近に4個の掘り込みがみら

れた。一つは径1 m、深さ50cmほどの不整方形、一つは径1.0m、深さ50cmほどの長円形である。埋土は黒褐色土で、内部から弥生式土器の小片1点が検出されている。（野崎　準）

第4章　遺　　物

遺物の量はきわめて少なく、土器片13点、陶器・磁器片32点、石器及び剝片6点、石塔破片一括（1個体分）、その他金属製品3点、骨片一括にすぎない。

第1節　石　製　品

1　石製宝塔（図版9－1、10）

宝塔の基礎は、発掘区西北隅、石敷きのほぼ中央内部に据えられた状態で出土した。基礎を除いて打ちこわされているが、塔身・蓮華座・笠・相輪の各部分の破片が見られ、宝塔であると考えられる。

基礎は35×36cmのほぼ正方形で、高さ28cm、上面は十字形にけがき線を引き、中央に直径14cm、深さ7cmの枘穴が穿たれている。石組みのほぼ中央に存在し、下にこぶし大の礫が敷きつめられていた。銘文はない。クリーム色の凝灰岩質である。

塔身は、周辺から破片となって出土した。復元径30cmほどの円筒形の塔身で、下方に芯及び複弁の反花よりなる蓮華座を彫り出し、上部には頸部を刻み出してあったものと考えられる。基礎の枘穴から、塔身には枘があったらしい。笠石と塔身との接合は不明である。石質は緑色の凝灰岩でもろい。

笠石は、破片のみで全形は分らないが、屋根の両端が厚く中央が薄い形で、棟・棰木などは彫刻されていない。相輪に枘があるから、露盤があり、枘穴があったものと考えられる。緑がかったクリーム色の凝灰岩製である。

相輪は、破片ながら保存はよく、宝珠・伏鉢・九輪の一部と、下の伏鉢・枘がある。九輪は円筒形に沈線で区切りをつけただけのもので、逆花はなかったものとすると、全高は枘の先まで40cmほどであろう。

これらの各部分によって構成された宝塔は、全高150cm内外の宝塔形になるものと考えられる。このような石製宝塔の類例は、福島市杉妻城跡出土品をはじめ、県内に6例ほど知られており、杉妻城

跡出土品には弘安6年の銘があると報告されているから、本宝塔の年代も中世初期と考えてよいものであろう。

2　その他の石製品

縄文時代に属する小形磨製石斧が1点、発掘区南端の表土から出土した（図版9－4）。また南側大溝の埋土から石核1点が出土した。他は剝片であり、これらはいずれ後述する縄文式土器と同じく発掘区西方の散布地から流れてきたものと思われる。

第2節　土器・その他

縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器の破片が少量あるほかは、大半が陶器・磁器の破片である。

1　縄文・弥生式土器

縄文式土器は石敷き遺構付近の黒褐色土中から、中期の破片が出土した。弥生式土器は発掘区南方のピット群中より出土したもので、細かい不整縄文の施された薄手の破片である。共に、遺構と関連したものではなく、発掘区西方の散布地から流れてきたものと考えられる。

2　須恵器・土師器

須恵器は大溝から出土したものがある。同一個体と考えられ、復元すれば口径23.5cm内外で、胴部外面に平行線叩き目、内面に無文叩き目を有する（図版9－2）。また、石敷き遺構の内部からも須恵器破片、轆轤痕を有する土師器破片が出土している（図版9－3）。いずれも小片で全形は不明、年代は平安時代後半か、中世初期ではないかと考えられる。

3　中世陶器

中世陶器と考えられるものには、6～7本一組の条線を疎らに施した擂鉢の破片がある。発掘区中央の表土から出土したものである。1点は硬質で断面灰色、内外面褐色の陶器で、深い条線を有する。他の1点は口縁部で、やや軟質、明褐色の鉢形土器である。口縁の一部を指で押えて小さい注ぎ口をつくっている。

4　その他

その他は近世から現代の陶磁器である。表土および発掘区北側の旧水田耕土より出土した。陶器には、黒色・褐色の釉を施した水甕・擂鉢・茶碗などがある。磁器には、染付けの壺・茶碗・飾り皿などがあり、近世中期ごろのかなり高級な磁器がみられる。宮城県地方の「切込焼」もみられる。

表土から、袋穂の鉄斧1点、銅銭の寛永通宝・青銅製煙管各1点が出土している。

石敷き下方の大溝中から、骨片が一括して出土したが、少量のため何の骨であるか不明であった。

（野崎　準）

第5章　考　　察

第5次発掘調査で検出された遺構は、大溝、石敷き遺構、石敷き遺構下の大溝、ピット群及び近世以後の溝2本である。遺物は、中世初期と考えられる石塔をはじめ、縄文時代より現代に至る各時代の遺物が少量ずつ出土している。遺構の年代が確実に決定されるほどの遺物の量ではない。しかし、一応の考察を述べてみたい。

まず大溝の時期であるが、溝底部出土の須恵器とほぼ同時代とみるならば、大溝築造の年代は古代末もしくは中世初頭と考えられよう。次に石製宝塔と大溝との関連については、二つの見解がある。一つは、溝上に宝塔が設置されていたという見方であり、他は、溝中にのみ宝塔を含む石群が存在することから、すでに倒壊していた宝塔の石群を溝に投げ込んだとする見方である。石敷きが大溝上にのみ長く存在すること、宝塔の破片が石群の内部から発見されたものもある点から後者の説が有力と思われる。

総合的に考察すると、中世初頭に南北35m、東西は35m以上（東側溝は確認できなかった）の溝を配し、内部に宝塔を伴った寺院等が建立されたと推定することもできる。後世、廃寺となり建造物は

第1表　石製宝塔一覧表

No.	名　称	現　況	出　土　地	現所在地	摘　　要
1	大仏城宝塔	塔身。基礎部のみ	福島市杉妻町（大仏城跡）	福島市平石 今野家蔵	塔身に種字（キリーク）基礎石に「弘安六年癸未四月廿日。孝子／敬白（カ）」の銘あり。
2	北矢之目宝塔	塔身部のみ	福島市北矢野目	同地墓地内	塔身に種字（キリーク）
3	鹿島神社宝塔	塔身部破片	福島市小田付近	同地鹿島神社裏	塔身に種字（キリーク）
4	天王寺宝塔	塔身部破片	不　明	福島市飯坂町天王寺蔵	塔身下部の反花座の部分。他に宝塔形五輪塔一基あり。
5	観音寺宝塔	塔身，笠，基礎（宝珠は後補）	安達郡白沢村高松（伝世品）	同地観音寺境内	鞘堂内敷石上にある。塔身に種字（判読不能）高松廃寺内。江戸時代の記録「相生集」には徳一大師の墓とある。
6	南蓑内宝塔群	塔身部	安達郡白沢村南蓑内	同地山林内	板碑と共に出土
7	双葉郡山宝塔	塔身部破片	双葉郡双葉町郡山堂の上	同地渡部氏蔵	五番廃寺南方石敷き内より出土したという。
8	八景宝塔	相輪，笠，塔身破片，基礎	福島市飯坂町東湯野腰巻	福島県教育委員会	基礎石のみ略完形，他は破片。

痕跡をなくしたが、宝塔のみは埋没して凹地と化していた溝中に投棄されたものと考えたい。

なお、県内の石製宝塔は別表のようなものが知られているが、県北地方に多く分布し、しかも、ほとんどの宝塔が出土品であることが注目される。

今後、宝塔の分布と宗派との関連、あるいは宝塔の倒壊に人為的（宗派的抗争、あるいは政治的権力）なものがあったか、検討すべき問題であると思われる。

ところで、当地における古代から中世にかけての支配者としては、佐藤庄司とその末裔といわれる信夫佐藤氏の存在が考えられる。当遺跡も佐藤氏と関連づけて考えるのが妥当とも考えられる。

なお、近世に発掘区を持添地としていた板谷山明光寺は、明治11年の寺院明細帳によれば、享保6年（1721年）開山とされているが、当調査によって明らかにされた遺構と遺物をその前身と推定することも不自然ではないと考える。これらについては今後の検討をまちたい。　（野崎　準）

第31編　八景腰巻遺跡

―第3次、北地区―

遺跡番号	7―35
所在地	福島市飯坂町大字東湯野字腰巻
時代・種類	平安時代（？）、庭園他
調査期間	昭和47年11月20日～12月19日
担当者	加藤　孝（東北学院大学教授）
調査員	高橋勇治　阿部正光　佐藤正人　橋本博幸（東北学院大学学生）
協力機関	福島市教育委員会
調査参加者	菊地照夫　野崎　準　小水達夫（東北学院大学卒業生） 高倉敏明　三品　隆　清水　毅　門間俊彦　武山純一 佐藤　忠　渡部幸雄　阿部俊則　荒田昌典　佐藤房枝 田中礼子　笹森洋子　斎藤真澄　高橋和子　滝口よう子 門間已恵子　渋谷　享　西原克久　菅原　孝　吉木　敏 門馬敦子　我妻智恵子　原　志津　早坂範子（東北学院大学学生）　秦　昭繁（山形県米沢市）

目　　次

第1章　遺跡と環境…… 489

第2章　調査経過…… 489

第3章　北地区の基本層序…… 489

第4章　遺　　構…… 489

第5章　遺　　物…… 491

　第1節　土師器…… 492

　第2節　須恵器…… 493

第6章　考　　察…… 494

第1章　遺跡と環境

第4編第1章と同じ（略）。

第2章　調査経過

第4編第2章と同じ（略）。

第3章　北地区の基本層序

北地区の基本層序は、表土を第1層、攪乱層を第2層、包含層を第3層、基盤を第4層とする4層からなる。

細分すると包含層である3層は、灰黒色土(粘性のややあるシルト)、黒色土(粘性の強いシルト)、灰白色（粘性のないサンド）の3層に細分できる。この包含層である3層からの遺物の出土量は多く、特に、黒色土・灰白色の砂の層からは出土量が多い。中央に設けられた南北にのびる溝は、この3層が堆積している。灰白色の砂は、溝底で顕著にみられ厚さ2～3cmほど堆積していたが、それ以外のところからも部分的に発見された。4層は、褐色土で基盤を形成している。包含層の広がりは、I—57グリッド全体からJ—57グリッドの一部、M—58グリッドからM—64グリッドより西側において全面に、さらに、溝及びK—58グリッド付近においても見出される。すなわち包含層の範囲は2m幅の溝及びK—58グリッドを中心として、主に西側に堆積し、一部K—57グリッドのように薄くなるところもある。

第4章　遺　　構

1　溝状遺構

〔I〕（図版2、付図4）　当遺構は、長さ約28mで、調査地点ほぼ中央において、南北にU字の曲線を描いている。溝幅は、狭いところで1.90m、広いところで2.50mで、深さは、約20cmから30cm

で形状は帯状をなしている。溝底には、砂が堆積し、その上から土師器・須恵器が出土する。中央部で溝が深く落ち込んで平面を呈している他は、全域がU字を呈し、その保存状態は良好である。南から溝が曲るごとにA・B・C・Dと呼ぶと、C付近を基準として南側と北側は、1条の溝でありながら性格上相異している。南側は、U字型を呈しているが2段築成をなし得ず、溝底、岸及び溝東側付近において配石がみられる。ここでみられる石は、黒色土中より出土したのではなく、部分的に粗密差はあるが、握りこぶし大の玉石を敷き詰め粘土で突き固められている。調査地南側にいくほど、石の施設をはっきりみることができる。しかし、北においては、溝底に石を見出することができても、配石されたものではなく、流れこんだものとしてとらえることができる。さらに北側の溝付近においても同様に配石の痕跡はない。BとCの中間においては、配石がみられ、その間より、須恵器甕の破片が石と同レベルで出土した。溝底から出土した土師器は、ほとんど摩滅した破片であったが、須恵器の場合は摩滅もそれほどひどくはない。

〔II〕（付図4）　この溝は、1層から切り込まれていることが南側壁断面において確認することができた。検出全距離数約11*m*、直線で北東から南西に向かって伸び、底面はU字型を呈している。しかしながら、この溝において施設の形跡はみられない。上面幅27*cm*、底面幅20*cm*、深さは7～15*cm*である。

2　礎　　石

礎石と考えられる石の数は、4基であり、磁北の方角より45°東に偏っており、4基中3基は溝の黒色土より出土した。この4基の石は、ほぼ同レベルにあり、1直線上に存在する。南から1～4までの番号を石にうつと石の大きさは、1が23×18*cm*、2が30×20*cm*、3が49×28*cm*、4が41×28*cm*で1と2の間隔は2.40～2.60*m*、1と3の間隔は3.90×4.00*m*、1と4の間隔は5.20×5.30*m*である。石と石との間隔をみると、1と2の間に、もう1つの石が存在したであろうことが推定される。石の間隔は、平均1.30*m*である。1は黒色土から検出されたもので、2枚の同質の石が重なっており礎板と考えられる。上部の石は厚さ2.5*cm*で、中央部に強い力が加えられたらしく、中央部から三つに割れて出土した。下部の石は厚さ3*cm*で割れてはいない。2・3・4は自然石で加工された痕跡はなく、そのうち2・3は黒色土より検出されたものである。

3　整　地　面　（付図4）

整地面として確認されたのは3か所である。北側から説明すると、①南北一直線に伸びたもの（幅60*cm*、長さ4*m*）、②この南延長上の円形のもの（最大径1.30*m*、最小径1.14*m*）、③更にこの南延長上で東西に伸びているもの（幅55～92*cm*、長さ6*m*）である。そして①・②と③は互いに直交している。

整地面は、部分的に特に強くたたかれている所があり、その間隔をみると、①に存在する2か所と

②は、それぞれ3.80m、②と③は1.60mである。

整地面は、かなり強くたたかれたため小石が細かくくだけており、置土がなされている。これら直交する2辺の整地面は、磁北から8°西に偏っており、また溝と隣接するところから、溝に付属する建築物跡であろうと推定される。

4　土　　壙

本調査で発見された土壙は3基で、これらはそれぞれ隣接している。土壙1から2までの距離は、北東方向に40cm、土壙1から3までは南西方向に1mである。

＜土　壙　1＞

遺構は、円形を呈し、上面直径42cm、底面直径35cmで底面は平坦をなし、深さは9cmである。堆積土は1層で、木炭を多量に混入しているが、焼土の痕跡は、堆積土内においてみることはできなかった。堆積土からは土師器甕破片が多量に出土した。

＜土　壙　2＞

遺構は、卵形を呈し、上面の最大径は35cm、最小径32cmで、底面の最大径は13cm、最小径8cmである。底面は平坦で、緩いカーブをなして底面に至っている。深さ7cm、堆積土は1層で、内面黒色処理が施された土師器杯破片2点が出土している。

＜土　壙　3＞

上面径70～74cmの円形を呈している。底面は丸底である。土壙の堆積土は1層であり、砂質の暗褐色土で混入物は認められない。この堆積土から土師器杯破片1点が出土している。

第5章　遺　　物

北地区から出土した遺物は、土師器の杯、内面黒色処理の杯、高台付杯の破片、燈明皿、甕、及び須恵器の杯・甕・壺などで、復元可能な土師器5点を含めて総数173点を数える。その他に灰黒色土上面より桃の種子1点、黒色土中より加工木片1点が出土している。遺物が出土した層は、第3層と第4層である。後世のものであると考えられる燈明皿を除けば、土師器・須恵器には大きな時間的差はないものと考えられる。

第1節　土　師　器

土師器の器形は甕・高台付杯・杯・燈明皿の四つに分類でき、そのうち杯は、内面黒色処理のものと内面黒色処理が施されていないものに分けることができる。土師器片の出土量は、須恵器のほぼ10倍に達するが、破片のほとんどが小破片で摩滅しており、土器の整形痕をみることはなかなか困難であった。土器の分布は溝底、土壙中及びO—58グリッド、H—57グリッドなどの南側に集中して出土した。

第　1　類（甕）

出土数76点、復元可能な土器の出土はなく、口縁部2点、底部3点を除いては、すべて胴部破片で、色調・焼成及び胎土からみて数個体の甕がうかがえる。小石まじりの胎土で内面は荒いが、外面は篦状工具で整形されている。色調は一般に灰褐色及び濁黄褐色を呈するが、焼成はよくない。

第　2　類（高台付杯）

出土数は2点で、復元不可能であるが、2点とも底部・高台を残している。轆轤を使用し、杯部形成後高台をとりつけた痕跡がある。2点とも内面黒色処理を施し、放射状みがきが施されていた。高台の高さは1.2*cm*、高台直径8*cm*、高台厚さ約0.7*cm*であり、口縁部は外反している。底部は中央部が高くなり、底部厚さは1*cm*ある。

第　3　類（内面黒色処理杯）

出土小破片53点、復元可能な個体数3点、轆轤を使用し、回転糸切りによって底部の切り離しがなされている内面黒色処理の杯である。内面黒色は、光沢がなく、横みがきが施されており、内面底部に至っては、放射状みがきが施されているものもみられる。胎土・焼成ともに良好できめが細かく、色調は一般に灰褐色を呈している。外面は、轆轤痕を顕著にみることができる。出土品のうち口縁部がみられるのは10点有り、そのうち5点は外反し、5点は直立している。復元可能なものは、遺物番号1がI—57グリッド出土、遺物番号4がN—64グリッド出土、遺物番号5がL—63グリッド出土である（図版4—1・3・4）。

第　4　類（杯）

出土数24点、復元可能な個体数1点、轆轤を使用し、回転糸切りによって切り離しがなされているが、内面黒色処理は施されていない。外面には、轆轤痕が認められるが、その他、再酸化した痕跡がみられるものもある。内部は、摩滅しているため調整状態は明らかでないが、口縁部になで調整が施されているものもある。胎土中には砂まじりのものもあるが良好できめが細かい。口縁部破片は5点あり、そのうち、4点は外反しており、残りの1点は直立している。また直径は10.2～13.6*cm*である。復元可能な1点はJ—64グリッドから出土したものである（図版3、4—2）。

第　5　類（燈明皿）

出土数は1点のみである。G—58グリッドの第2層より出土したもので、糸切底の焼成の堅緻な優品である。中央には灯心を支える突起が直立し、突起形成の際指でつまんだ痕跡がある（図版4—5）。

第2節　須　恵　器

壺・甕・杯の破片14点が出土した。復元可能な土器はみられない。土器胎土のきめは細かく、焼成状態も良好である。須恵器の中では杯が多く7点、甕4点、壺3点が出土している。そのうち、杯2点、甕1点、壺2点は灰釉を施したものであり、その他に、焼成の際に火廻り不良のために、色調が異なっているのもある。

第　1　類（壺）

出土数3点、轆轤水挽きで成形がなされ、胎土・焼成は良好である。破片は、不整球形の胴部であり、3点とも口縁部・底部を欠いている。胴部の厚さは0.8～1.0*cm*で2種に分けられる。灰釉を外面に施し、内面を刷毛目によって調整をしたもの2点と、外面を上から下へ縦に篦状工具で調整し、内面は、刷毛目によって調整をしたもの1点である。

第　2　類（甕）

出土数4点、出土した甕破片はすべて胴部のみである。O—58グリッドから出土した甕破片は1点で焼成が悪く、他の出土地不明の3点は胎土・焼成共に良好である。前者は、輪積みで成形され、外面に条線状の叩き目が深く残り、内面には、工具で押しあてた痕跡はみられるが、文様は有していない。後者は、3点共厚さがほぼ 1.5*cm*で、輪積み成形の比較的大きな甕であると考えられる。輪積み幅は6.0 *cm*である。外面は、叩き目が条線状にみられるが摩滅して、凹凸はほとんどみられない。この3点のうち1点は、外面に灰釉が施されている。内面は、押し型を刷毛目で調整し、幅1.2*cm*の刷毛目が12条みられる。

第　3　類（杯）

出土数7点、復元可能な土器は出土していない。胎土・焼成共に良好で、色調は灰白色を呈する。轆轤水挽きで成形されているが胴部に轆轤痕をとどめていない。口縁部は、直立したものとやや外反したものがある。直立したものは直径16.4*cm*、外反したものは直径14*cm*である。口縁部から底部にかけては緩いカーブをなしている。

第6章　考　　察

本遺跡は、土師器・須恵器を伴う遺跡である。本遺跡から出土した遺物と近似のものを出土している付近の遺跡は、福島市腰浜町にある腰浜廃寺跡、福島市飯坂町にある西原廃寺跡、伊達郡国見町にある徳江廃寺跡があげられる。

共通するところは、黒色処理の施された糸切り底の杯が出土している点である。ところで、腰浜廃寺・西原廃寺からは、9世紀の瓦と共伴して、須恵器・土師器において底部が篦削りで成形されているものが出土している。しかしながら本遺跡出土の遺物にはそれが含まれておらず、黒色処理が施されず、底部に回転糸切り痕のみられる土師器が全体の30%を占めていることから、9世紀をはるかに下るものであると考えられる。

腰巻地区を中心とする平安時代の遺跡は、仏教文化に密接な関係があると考えられる。本遺跡から出土した4基の礎石及び幅20cmの直線の溝は、少なくても黒色土堆積後のものである。ただし、伴出する遺物がないため年代は不明である。I—58グリッドの3基の土壙は、遺物と層位から中央の溝と同時代のものであり、整地面も層位から観察して同時代のものである。したがって、土師器と須恵器を伴う遺構は、中央の溝と整地面、さらに3基の土壙であることがわかる。中央の南北にのびた溝は、玉石を敷きつめ粘土で突き固められている。また溝は深くなく、二段築成形成である点などから浄土式庭園の一部であると考えられる。

『作庭記』の中の「遣水事」から本遺跡は、浄土式庭園の遣り水跡の一部であると考えられる。この遺構は、遺物からみて平安時代末までは下らないものと考えられる。　　（佐藤正人）

昭和50年3月20日　発　行

福島県文化財調査報告書第47集

東北自動車道遺跡調査報告（本文編）

発　行　　福島県教育委員会
福島市杉妻町2番16号

編　集　　福島県教育庁文化課

印　刷　　株式会社　阿部紙工
福島市南町345番地